逆偽鏡の世界

阿音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逆偽鏡の世界

【Ｎコード】
Ｎ４１４８Ｌ

【作者名】
阿音

【あらすじ】
楽園の平和の為、全てを捧げた男。
男は命を削りながらも楽園を護り、三十歳という若さで死を前にしていた。
そんな彼は親友に娘を預け、悪友に後を任せて永遠の眠りに落ちる。
悪友の最後の言葉を聞かずに……

初話【終わりの始まり】（前書き）

この話には半オリジナルキャラが登場します
原作キャラはまだ登場しません
ＴＳも有ります
上記の事を納得の上でお読みください

初話【終わりの始まり】

視点　???

「……紫々（ししし）、俺はもうすぐ死ぬらしいな
これからの事はお前に任せる」

俺は先ほどの宣言通り、死ぬ
まったく、俺はまだ三十歳だってのにな。

「ふぅ……あのね、何年も前から言っていたでしょ？
そんなに自分の体や霊力を酷使していたら寿命が縮まるって
君は働きすぎなんだよ、自分の幸せの為に行動したことはあんまり
無いんじゃないかい？」

……紫々の奴も痛い所を突いてくれるな
確かに俺は十代前半から妖怪退治を仕事にしていた
それはこの幻想郷を守りたいという想いと、平和を乱す者は許す気
は無いという想い
そしてこの俺、博麗　戒魔（かいま）の博麗の御子（みこ）としての使命だ。

その俺が自分の幸せで動いた事は……数える必要の無いほどに少ない
だがそれが俺にとっての生き方、その生き方は例え誰であろうが否
定されたくない。

「黙れ紫々、これが俺の生き方だ
それにもう過ぎた事、ぐだぐだ言うな」

「まったく……君は頭が固いな、そんな生き方をしていて疲れないのかい？
それに、君の娘は誰が面倒を見ればいいんだ？
母方はもう死んでいるし、僕は嫌だよ」

俺にはまだ一歳の娘がいる
その時の詳細はあまり言いたくないが、昨年娘が生まれた（結婚はしていない）
娘の生みの親（俺の相手とも言う）は娘が生まれた時に死んでしまった、元々体が弱かったのだから仕方が無いが……
死ぬと解っていても子供を産ませないといけないだなんて、いくら博麗の血を絶やさない為とはいえ、本当は嫌だった
別に愛していなかったが血の為だけに子供を産ませ、血の為だけに死なせる
正直、そんな人生を負わせてしまった彼女には謝っても謝りきれない
一時はこれを仕組んだ紫々を怨みもしたが、それもこの幻想郷を守るためであり、血統を絶やさない為
八つ当たりはしたが怨みきれなかった結果、会う度に戦う関係になった
もっとも、今はもう体が動かないからそんな事はできないがな。

ちなみに、彼女が選ばれた理由だが
霊力だけが桁違いに高く、体は弱かったが孤児だったので後始末が楽だったからしい
血を絶やさないのは解るし霊力が低くては博麗として生きていくのは難しい
だが、だからといってすぐに死んでしまう相手を選ばないでほしかった
もっとも、俺がその事実を知ったのは彼女が死ぬ直前に教えてくれたからだ

彼女自身も生きる事を半ば諦めていたからこの話を受けたそうだ。

それでも、自分の娘を抱きながら幸せそうに死んだ彼女
自分に価値が有ったのが嬉しかったらしいが……俺には永遠に理解できない事だろう
……まぁ俺とてもうすぐ死ぬんだが。

言い忘れていたが娘の名前は霊夢、俺みたいに生死を賭けるような人生を送らず生きてほしいが……
この子も博麗だし、誰に預けても波乱万丈な生活になる気がする
俺の知り合いが悪いのか、それともそんな知り合いとしか仲が良くない俺が悪いのか
どっちにしてもあまり嬉しくないな。

「……藍に任せ「却下」……何故だ」

藍は性格や家事の能力の高さから安心できるのだが……

「藍は僕の世話係だよ
それに藍の仕事は多いんだ、これ以上増やさないでくれ」

く、そうなると他には……

「じゃあ刹那「レミレアの世話」
……妖牙「生真面目だし幽真もいるでしょ」
なら堺音「寺子屋の仕事」
だったら鈴催「なゑや永仙と住まわせていいの？」
く、なら真苗「違う神社に頼むのは駄目でしょ」
それなら霖雨「気紛れじゃないか」
喪紅なら「輝貴との喧嘩に巻き込まれるんじゃない？」

は、白蓮（はくれん）は「正義とか愛という言葉に染まるかもしれないよ？」
ぐぅぅ、阿求なら「もうすぐ寿命だけど？」
……ならさとる「地下に住まわすのはどうかと思うよ」
じゃあ誰ならいいんっゴホッゴホッ！」

怒鳴ってしまい咳き込む俺を心配そうに見つめる紫々、原因はお前だぞ？
でも俺の友好範囲は駄目駄目だ！
他にまともなのは……駄目だ、誰もいない
少し……いや、かなり気が進まないけど放魔（ほうま）に任せるしかないのか？

「放魔ならいいんじゃない？
君の数少ない頼みなら断ったりしないよ
絶対に凄く怒るだろうけどね」

「……そりゃ体の事を黙ってたんだから怒るだろうけど
他に頼む相手がいないんじゃ仕方が無いか」

放魔がどんな反応をするのか手に取るように解る
きっと黙っていた事を怒鳴って、その声で霊夢を泣かせて、霊夢をあやして、そして泣きながらも受け入れる
もう十五年ぐらいか？　それぐらいの付き合いになれば簡単に予想できる。

俺と人生の半分近くを一緒に過ごしてきたあいつなら霊夢を預けられる
絶対に霊夢は苦労するだろうけど怪我をさせたりはしないだろう
そういう意味ではかなり信用できるからな。

「はぁ……紫々、放魔に霊夢の事を任せると伝えてもらってもいい

かな？
……頼むよ」

「うん、いいよ
君が僕にする初めてのお願いだからね、放魔と霊夢は僕に任せてくれ
その願いに必ず応えるよ」

「大げさな……ありがとうな紫々
心残りはあるけど、これで多少は安心して逝けるよ」

俺が倒れて三日、自分の体が壊れていくのがよく解る
だから俺はもう覚っている、次に眠ったらきっと永眠するだろう…
…と。

今、一番の俺の心配は霊夢だった
この三日間は藍が面倒を見てくれたけど、今後も見てくれるとはあ
まり思ってなかった
一応確認はしたが、やっぱり無理だった
俺としては安心できる奴がよかったけど、信用できる奴に任せるの
も悪くない。

「そう、おやすみ戒魔
また会えるといいね」

「あぁ……そうだな
また……会えると……いい……な」

そこまで声を発し、俺の意識は静かに落ちていった
紫々の最後の言葉を聞き逃して……

「会えるよ戒魔、必ずね……
さて、戒魔が完全に死ぬ前に儀式を始めないとな」

視点　藍

「あーいー！　儀式を始めるから霊夢ちゃんは橙に任せて急いでー！」

僕が霊夢ちゃんの面倒を見ていると紫々様の声が聞こえた
おそらく戒魔が眠ったのだろう
少々不安だが、橙に霊夢ちゃんを預け、戒魔の眠っている部屋に向かわねばならない。

「はい紫々様！
じゃあ橙、霊夢ちゃんを頼んだよ、僕の言った通りにしていたらきっと大丈夫だからね
無理だと思っても僕は何もできないけど、頑張るんだよ？」

「はい藍様！
いってらっしゃいませ、頑張ってください！」

橙からの応援を聞いてやる気を出し、僕は紫々様と戒魔君の居る部屋に急ぎ向かう
この儀式が失敗したら博麗大結界に綻びが生じ、壊れる可能性がある
失敗は決して許されない。

本来なら後一人居れば成功率も多少上がっただろうが居ないものは

仕方が無い
勿論誰でもいいという訳ではない、かなりの魔力や霊力、もしくは妖力が必要
儀式の事、戒魔の事を知って冷静でいられる者、そしてこの儀式が終わってもそれを隠し通せる者
他にも条件は多く、これらに該当し、更に捕まえる事ができる者が居なかったのである
魔法使い達は全員条件を満たしていたけど、七曜の魔法使いと僧侶は周りの存在が邪魔で難しく
七色の魔法使いはあまり隠し事が得意では無い
僕と紫々様で成功率は約六割、決して高くないだろうが必ず成功させる！

「紫々様、藍です
入りますよ」

「さっさと入って
急いでいる事ぐらい解っているでしょ？」

「はい、失礼します」

部屋の中に入るととてつもない妖気が溢れかえっていた
部屋に入った途端に妖気を感じたとなれば、おそらく結界で妖気を遮断していたのだろう
その妖気の強さからか、心理的重圧に押しつぶされそうになる
しかしそんな泣き言を言っている余裕は無い
僕は気力を振り絞り、紫々様と並ぶ。

「では紫々様、儀式を始めま「ちょーと待ったぁ！」な！？
誰ですか！？　こんな重要な時に！」

この儀式を邪魔されては危険なんて程度では済まされない
僕は勢いよく後ろに振り向くまま戦闘態勢になり構えるが、紫々様は落ち着いたままだった。

「落ち着きなよ藍、萃麻(すいま)だろ？
こんな時に声を掛けるという事は手伝うという意思を持っていると解釈するよ」

萃麻さん？
鬼であり、知り合いである萃麻さんを相手に構える必要は無いので僕は構えを解き、自然体になる。

「勿論手伝うよ
僕だって戒魔を死なせたくないしね」

萃麻さんか……条件は当て嵌まるけど大丈夫かな？
普段から酔って……あれ？　あんまり酔ってなさそう？

「この時の為に全部は抜けなかったけど、酒はできるだけ抜いただから紫々、協力させてくれ！」

正直な話、萃麻さんが協力してくれればかなり成功率は高くなる
僕の予想では少なくとも八割にはなると思う
紫々様もそれは解っているだろうし協力を求めるだろう。

「駄目だ
萃麻、君はここから出て行ってくれ」

「「な！」」

そんな！　紫々様と僕だけでは成功率は六割が精々
八割にはなるだろう協力を蹴るだなんて！
一体何をお考えなのですか！？

「確かに君の妖力なら成功率は二割、もしかすれば三割は上昇するだろうね
でも萃麻、君は駄目なんだ……君では無理なんだよ」

「そんな……僕の、僕の何が悪いって言うんだよ紫々！！！」

萃麻さんの血を吐くような叫びと共に巨大な妖気がこの部屋に充満する
そして萃麻さんの表情、怒りと悲しみに満ちているけど……気のせいか理解の色も見える気がする
一体何故？

「萃麻、君も解っているんだろ？
自分ではこの繊細な、そして儀式をする作業はこなせないという事ぐらいは」

「く……解ってるさ、解ってるよそんな事！
でも、でも……戒魔を死なせたくないんだ！
少しでもいい、何かさせてくれ！」

そうか……解っていても、納得していても、感情が許さないのか
紫々様を除けば萃麻さんと最も仲が良かったのは戒魔君だったはずだ。

萃麻さんは置いていかれるのを極端に恐れている

そんな萃麻さんが大人しくいられるはずがないな。

しかし、そんな萃麻さんの叫びも、想いも、悲しみも
紫々様の前では……無力であり、邪魔でしかなかった。

「黙ってくれ萃麻！
戒魔を死なせたくないのは僕だって同じなんだ！
こんな話しをしている間にも僅かずつではあるが成功率は下がっている、死なせたくないならさっさと出て行け！！！」

「！？！？
あ……あぁ……うあーーー！」

「な！？　萃麻さん！？」

萃麻さんは大声を上げながら部屋から逃げ出した
まさか萃麻さんが泣くなんて……確かに無駄と理解しながら来た萃麻さんも悪いだろう
でもあそこまで厳しく言わなくても……

「藍！　萃麻が気になるのは解る
でも今はこっちを、戒魔に集中してくれ！
言いたい事は後で纏めて聞く、だから急いでくれ！」

「は、はい紫々様！」

紫々様だって言いたくなかったんだろう
声の端々に後悔の色が窺える
萃麻さんを相手に急いで帰らせるには確かに効果的だっただろう
そういう意味では紫々様の言い分は正しいと言える。

っと、今は余計な事を考えている余裕なんて無かった！
幻想郷の為にも、紫々様の為にも、萃麻さんの為にも必ず儀式を成功させないとな！

だから死ぬなよ……戒魔。

紫々と藍は儀式を始める為、東洋の妖怪とは思えないであろう、複雑な西洋の魔方陣を描いていく
戒魔の呼吸は少しずつ小さくなり、もういつ死んでもおかしくないであろうことは傍目からも見て取れる
紫々も藍もそれを理解わかっているらしく、焦りの表情を浮かべながらも丁寧に魔方陣を描いていく。

約二十分ほど過ぎた頃だろうか
魔方陣を描き終えたのだろう、両者の動きが一時停止する
すると藍は立ち上がり、何かを唱え、妖気を強く発した
魔方陣を活性化させているようにも見える光景を横目に、紫々は魔方陣に東洋の呪術文字を書き足していく
本来西洋の魔方陣に東洋の呪術文字を加えればとうなるのだろうか？
西洋と東洋では術式、形態、方向性、性質など、ありとあらゆる違いが有りお互いに干渉できないのである
これらの関係は正に水と油、陰と陽、正と邪、光と闇などという正

反対の性質を持っている
本来干渉できない関係なのだが、このように書き加えられた場合お互いの力を相殺し合う可能性も捨てきれない
それ以前にお互いに反発したり、干渉させることができなかったり、暴走する可能性も高いだろう。

魔方陣を描き終えて約十分ほど過ぎ、上手く干渉できたのか暴走などの危険な事態が起こる気配はない
呪術文字を書き終えたのだろう紫々は座禅を組み、目を閉じて両手を合わせてなにやら東洋の呪文を唱えているようだ
藍は紫々と違い立ったまま、禍々しい気配を発する本を片手に持ち、同じく目を閉じて西洋の呪文を唱えているようである
東西の力が交じり合い、魔方陣が強い光を輝かせ、呪術文字が鈍い光で輝かしい光を覆いこむ
そんな光景を、目を閉じていた二人見ることも無く、二人は強く妖気を吹き出した。

二人の妖気に当てられた魔方陣は消し飛び、その中心に居た戒魔の姿が消えていた
魔方陣がどのような影響を周囲に与えたのかは謎だが部屋の結界が壊れており、この部屋の畳を除いて天井を含めて消し飛んでいた
部屋が外と隣だったのだろう、部屋と外を遮る障子も消し飛んでおり、廊下を少しだけ削って穴が開いていた
しかしそれ以上の影響は無さそうで、極僅かに外へ力が漏れたぐらいだろう、注いだ力の大きさを考えれば結界の強度が伺える。

目を開いた藍は戒魔の不在に、儀式が失敗した事を予想した藍は顔を青ざめさせる
一方、紫々は満足そうに肯き笑顔を浮かべている、紫々の様子では成功したのであろう。

「紫々様……戒魔は一体何処に？」

「秘密、でも安心しなよ藍、儀式は成功したんだ」

どうやら藍は儀式の成功後にどうなるか知らなかったようだが
紫々の言葉に不安を感じながらも、儀式が成功したことに喜ぶ藍
しかし短い時間でありながらも妖気の大半を失った二人の額には脂
汗が流れており、疲労の具合がよく解る。

そこへ、部屋に張った結界が気付いたのであろう、大慌ての様子で
萃麻が姿を現した
戒魔の姿が見えないことに萃麻は……喜んでいた
戒魔の不在は成功という事を知っていたのだろう
その事を紫々から聞いていたのか、儀式の内容を知っていたからな
のかは不明だ。

「成功したんだね紫々！」

「うん、成功したよ
だからその流れている涙をどうにかしたら？」

紫々の指摘に萃麻は恥ずかしそうにしながら慌てて涙を拭う
その様子を見て紫々も藍も笑いを零し、そして大きな声て笑ってしまう
萃麻はその笑いを見て少し怒りの顔を見せるがすぐに消え、一緒に笑いだす。

ここに儀式は完成した
彼の者は消え去り、近し者は喜びの声を上げる
この儀式が、戒魔にとって吉とでるか、凶とでるかは……まだ誰にも判らない。

続く

裏初話【重なり合う偶然は奇跡となる?】

視点　??

それは多くの偶然が重なった事故だった
偶然……野菜を多く頂いた
偶然……保存する場所が無かった
偶然……暇だった
偶然……一番最初に博麗神社へお裾分けに向かった
偶然……ふと見た部屋に結界が張ってあった
偶然……この時は好奇心が勝っていた
偶然……部屋に入ろうとした瞬間に光りが僕を覆った
そう、ただ偶然が重なっただけだ。

僕は不幸なのだろうか?
……思い出せば思い出すほど自分の不幸が浮き彫りになる
思い出すの止めよう、泣きたくなってきた。

しかし……ここはどこだ?　室内のようだけど……どこかの部屋にでも飛ばされたのかな?
あの光は転送か何かの光だったのだろうか?

……あれ?
この部屋どこかで……いや、少しだけ違う
昔の僕の部屋に似ているけど人形とかが多いかな?
……『昔』の僕の部屋?

それになんでテレビは幻想郷に無かったはず
まさかここは……

「外の……世界？」

そんなまさか……ん？
気のせいか、今声が高かったような気がしたが……そんな訳ないよな。

「そんなはずは……そんなはず……そんな……」

声は高かった、しかも子供か女の子みたいにかなり高かった
そして部屋を見渡し見つけた手鏡を覗いてみる
そこに映っていたのは幼い、多分五歳ぐらいの過去の自分
だが髪はかなり長く、顔も少し丸みを帯びており、以前よりも整っていた。

手鏡を置き、自分の体をあちこち触った結果、有ったり無かったりで自分の現状を理解した
この瞬間、僕は自らの不幸を本気で呪った。

「お……お……おん……女の子になってるーーー！？！？！？」

僕の叫び声、もう悲鳴に近かった声が聞こえたのか部屋のドアの方から足音が二つ聞こえる
慌てているのか、その足音の主は大きな音を立てながら蹴破るほどの勢いでドアが開けられた。

「どうしたんだ！」

「何か有ったの!?」

僕の大声に反応して入ってきたのは二十代後半から三十代前半の男女の姿だった

僕はその男女の姿を見て再び驚いた

だってそこに居たのは死んだはずの、昔見たままの姿の……両親の姿だったからだ。

「お、お父さん!?　お母さんも!?

何で!?　一体何が起こってるんだ!?!?」

もう動揺しすぎて何がなんだか訳が解らなくなっていた

今の僕に理解できたのは……僕は女の子になっていた事だけだった。

少年期編　一話【知らない場所は知っている場所だった?】（前書き）

この話には半オリジナルキャラが登場します
原作キャラの性格に違いがあります（二次だから当然ですが）
ＴＳもあります
上記の事を納得の上でお読みください

少年期編　一話【知らない場所は知っている場所だった？】

視点　戒魔

「ん……ん？

……あれ？」

俺は……死んだんじゃ……って生きてる！？

いや、落ち着け俺……確かに不思議だが冷静になるんだ。

俺は寝転んでいた体を起こして座る

突然違う場所に連れ去られるのはもう慣れた、今は状況を整理しよう。

俺は誰だ？　博麗戒魔だ

ここは何処だ？　不明、しかし涼しさを感じる事から冥界か妖怪の山、霧の湖の何れかだと思う

何故此処に？　不明、紫々が何かをしたと思う……というか、それしか思いつかない

俺は生きているのか？　生きている、幻や思い込みではなく本当に生きている

体に問題は無いか？　立ち上がってみるが特に体調には問題無い……ん？

気のせいか……やけに視点が低いような……いや、間違いなく低いな。

俺は自分の体に大きな疑問を感じ、自らの体を見下ろし、触れてみたそして俺は自分に起こった異変を自覚した……俺の体が十歳ぐらい

まで縮んでいたという事をだ。

「……はぁ」

もう驚きよりも呆れしか出てこない
数々の異変に巻き込まれ、様々な存在と出会ったのが原因だろう
何故か服は丁度いい大きさだし、辺りを見回せば俺の横には以前、
真苗が教えてくれたばっくという入れ物が落ちていた
とりあえずばっぐを開けて中身を確認してみる
中には換金すれば普通に過ごして一年は生きられるだろう金塊
今の俺が着れる服が入っており、着物、袴、洋服の三種類一着づつ
あった（今着ているのは私服だ）
他にも刹那が使っているようなナイフが五本、俺が使えそうな呪術
や陰陽術と何故か魔道書、各三冊の計九冊
保存食も五日は持つぐらい入っているし、水も数日は持つであろう
ほど入っている。

……紫々は俺に旅でもさせたいのだろうか？

これ以上は何も無さそうだと思い、ばっぐを漁るのを止めようと思
った時、一番底に紙を見つけた
封筒に入っているこれはどうやら紫々からの手紙らしいが……嫌な
予感がするから読みたくない
しかし情報が無い今、これを読まない訳にもいかず、おとなしく封
を開けて読み始める。

「なになに？
『拝啓　博麗戒魔様へ
……堅苦しいのは嫌だから軽くいくね
君は歴代の博麗の中で最も幻想郷の為に働いてくれた、だが君の体

に大きな負担をかけてしまったようだ……
あんなに悪くなるとは思わなかった、無理やりにでも止めなくてすまないと思う
これは僕からの謝罪のつもりだ、君をどこか謎の世界に送る、少なくとも僕は知らない世界だ』
……ちょっと待て、謎の世界だと？」

じゃあここは幻想郷じゃないのか？
あぁ、謎の世界ならばっぐに入っていた物にも納得できる
どこででも使えそうな物しか入っていなかったな
そう思って納得し、気になる部分はまだ沢山あるので続きを読む。

「『バッグの中身はもう見ただろうけど、それらならどんな世界に行っても役に立つと思う
僕は君にもっと自由に、楽しく生きてほしい
だから君を若返らせ、人生をやり直してほしいと思ったんだ
突然説明も無しにこんな事をした事を許せとは言わない、けど解ってはほしい』
……紫々」

そんなに紫々が俺の事を大切に思ってくれた事に驚き、少し感動してしまった
確かに、博麗としてでしか生きてこなかった俺は娯楽なんて殆ど知らず、放魔を呆れさせたほどだ
今更どう生きればいいのかは解らないが紫々の好意を無駄にしたくない
お言葉に甘えさせてもらい、自分の好きなように勝手に生きさせてもらおう。

手紙を読み終わり、ここから移動しようと思って荷物を片付けた

最後に手紙を戻そうと思い封筒へ戻そうと手紙を見ると何か違和感を感じた
その違和感の正体を調べるために裏返したり、少し調べてみる
日に透かしてみれば文字が浮かんできた、どうやら日の光で映る文字らしい
手紙を日に当てながら、俺は手紙の続きを読み始める。

「『追伸
君の能力は封印し、霊力もかなり落ちているはずだよ
それに子供になっているから体に覚えさせた技とかは使え無いよ
ここまでする理由かい？　そんな事ができる子供がいたら怪しまれるでしょ？
だから長い年月を掛けて封印を解くか、自力で努力して力を付けるか、一緒に入ってる本を読んで勉強してね
ま、そういう訳だから頑張ってね☆　紫々より』
紫々……やっぱりお前なんか嫌いだ」

能力の封印に霊力の低下、技術や筋力は年相応に……か
能力が使えないのは痛いな、移動に時間が掛かる
霊力は……全盛期の約二割程度、かなり落ちたな
この程度では弾幕なんて数百発しか撃てそうにない
修行法は覚えてるから技術はまた身につければいい
筋力を付けるのは子供の体じゃ難しいな、まずは体力を付けるべきだな。

今の所、最大の問題は『空を飛ぶ程度の能力』が使えない事だな
飛べないのはかなり不便だな、封印は時間が解決してくれるらしいが早く飛べるようになりたい
だが今はどうにもできないから仕方が無い、おとなしく徒歩で行こう。

今の場所が判らないので、ここ涼しい原因を探すため歩き出そうとするが……荷物が重い
少し無理をして荷物を持ち上げ、とりあえず涼しい方向に向かえばいいと思うのでそちらに向かって進む
途中でなにやら視線を感じたが今は無視だ、どうせ妖精や動物でも覗いているだけだろう
力が圧倒的に足りない今の俺では例え下級妖精でも十匹ぐらいを相手にするのが精一杯か？
下級妖怪一匹相手にできれば御の字、といった辺りか……全く、情けないものだ。

重い荷物を抱えながら歩く事約十数分
元の体の大きさならば数分で抜けられたであろう林（というほど広くはないが）を抜け、涼しい原因であろう場所に着いた。

「ここは……霧の湖か？」

そう、とても濃い霧が立ち込めており、霧の中心付近に……よく見えないが紅い建物が見える
この濃い霧に紅い建物、こんな悪趣味な建物は紅魔館しかない。

紫々の奴……驚かせないでほしい、ここは幻想郷じゃないかとりあえず紅魔館へ……今の飛べない俺はどうやって行けばいいんだ？

ここから紅魔館の島まで泳ぐのは少し辛い、確か飛んで約十分の距離だったかな？　泳いだら三十分は掛かるんじゃないか？
だけどここから他の場所に移動するには更に時間が掛かるだろうし、荷物も濡れてしまう……そうだ！

筏を作って行けばいいんだ、そうすれば荷物も濡らさずに済む。

よし、紅魔館に着いたら事情を説明して、誰かに博麗神社まで送ってもらおう
多少時間は掛かるだろうけど、泳ぐよりはいいだろうし、決まりだそうと決まれば善は急げとばかりに俺は木を……どうやって切ればいいんだ？

具体的な作り方、作業方はさて置き、約二時間掛けて俺は筏を完成させた
霊力を多少消費し、ナイフは二本折れてしまったのが少し痛かった
一本は残して置くとして、他は全て折れる事を覚悟していたんだが……このナイフは一体なにでできているんだ？

こんなに時間が掛かるなら人里まで歩いたほうが早かったかもしれない。

夜になれば妖怪達の動きが活発になってこの体では危険になる
この日の角度から考えると、今は午後五時ぐらいか……もうすぐ日が落ちてしまう
最初から人里に向かった方が安全だったかもしれないな。

そんな小さな後悔をしながらも筏を湖に浮かべる
時間は遅くなってしまったが、そのおかげで霧が薄くなって紅魔館がよく見えるようになっていた
とても赤く、紅い紅魔館を目印にし、少々不安定な筏ながらも俺は筏を漕ぎ始めた。

最大の問題であった悪戯好きな妖精に出会う事も無く、空は暗くなってしまったが紅魔館の建っている島へと辿り着いた。

上陸したのはいいが、この島は小島といってもそれなりの広さを持っている
しかも場所が悪かったらしく、どうやらここは門とは逆の場所らしい
門外からの進入も考えたがこの体では難しい上、門番隊の妖精は何故か知力が高く、連携も使ってくる
そんなのを相手にするよりも正門から素直に入ったほうが楽だろう。

おとなしく正門に向かう俺だが、筏を作り、湖を越え、更に上陸してから重い荷物を持っての移動
やはり子供の体では体力が足りず、正門が見えそうで見えない場所まで来れたが力尽きてしまった
慣れない体、疲れからの呼吸の乱れ、更に足も痛くて座り込む
少し休憩しようと荷物を横に置き、体を休ませようと呼吸を整える。

しかし、子供の体だから夜に弱いのか、それとも疲れからなのか、急激な睡魔に襲われてしまう
俺は睡魔に抗いながらも体は言う事を聞かず、俺の意識は段々と薄れていった。

視点　門番

門番隊の妖精に不審人物を見つけたと言われ、私は少し門から離れた場所に連れていかれた
そこには大きな荷物を自分の横に置き、塀を背にして眠っている人間の少年がいた。

少年は少し長い髪を細長い布（リボン）で後ろの上部で一つに縛り（ポニーテール）、暗い赤を基準とした服を着ていました
身長は少し高く、年は十歳から十一歳前後と思います
顔は整っており、美少年と言われてもおかしくは無いが子供特有である中性的な顔ではなく、目元が高くて凛々しいという感じです。

この少年が不審人物と思うのですが……どうやってここまで？　そして何故この紅魔館に来たんでしょうか？

お嬢様を退治しに来た退治屋？　夜のこんな時間に子供一人で来るとは考え難い
むしろ吸血鬼が相手なのだ、昼に来たのならば多少の信憑性があると思う。

では観光者？　こんな大荷物を持って観光はちょっと無理がありそう……
私にはちょっと想像できません。

さて、この子は……どうしましょう？
……とりあえず門前に連れて行く事にしましょう
このまま見張っていては門ががら空きになってしまいますしね。

まずは荷物を……って、意外と重い？　この子はこんなに重い荷物を背負ってここまで来たの？
まぁ私には軽いんですが、人間の……しかも子供には重いでしょうね。

荷物は三人居る門番隊の子に預け、私は子供が目を覚ましても行動しにくい、鞄を持つように持つことにしました
妖精である門番隊の子には荷物は少し重たかったらしく、二人で荷

物を持ち、もう一人は私の持っている子供を気にしています。

私が子供を持った理由は、もしこの子供が侵入者や退治屋ならば、
門番隊の子達では人質に取られる可能性があるから
私ならばそのような事をされても、すぐさま押さえつける事ができる自信がある。

子供を門の前まで連れてきたのはいいものの、このままではどうしようもないので起こす事にしました
起こし方は普通に声を掛けながら揺すって起こすことにしました、
余計な警戒を与える必要はありませんから。

念のため、門番隊の子はまだ一緒にいます
もしこの子が本当に退治屋だとしても負けるとは思いませんが、万が一を考えておいて損はありません。

「起きてください少年、少し話しがあります」

「ん……もう朝か？
あふぁあぁぁ……眠い」

どうやら少年は寝惚けているらしく、私に起こされている事を理解していないらしい
しかし徐々に意識が覚醒しているのだろう、少年の瞳は私を捉えて放さない
そして完全に目が覚めたのだろう、大きく瞳を開いて驚愕しているだけどその瞳に映る感情は驚愕だけではなく困惑、疑問が浮かんでいた。

「……あんた誰だ？」

「最初の一言がそれですか？
私の名前は紅美鈴、この紅魔館の門番を勤めています
それで、君の名前は何と言うのですか？　不審人物さん」

私が自己紹介をすると少年は驚き、何かを考え始めました
……私そんなに悩む事言ったでしょうか？

「……名前を教える前に幾つか質問してもいいか？」

名前の前に質問？　名前を教えてから質問してもいいでしょうに……
名前を教えない理由は警戒して？　それとも誰かから狙われている
とか？

名前に拘りがあるわけではないので別に怒りなどの感情は浮かびま
せんが、あまり気分は良いとは言えません
少々不快な気になりながらも、少年の訊きたい事を話してもらう。

「質問に質問で返すのは失礼だと思いますよ、少年
まぁいいでしょう、なんですか？」

「紅美龍（ほんめいろん）という名前に聞き覚えは？」

美龍？　しかも私と同じ名字で？
名前も似ているけど私に兄弟は居ないし……やはり初耳ですね。

「いえ、聞いた事はありませんが？」

私の答えに少年は再び悩み始める
この答えでは満足できなかったのでしょうか？

「……今代の博麗の御子の名前と年齢は知ってる？」

先ほどの質問と全く関連の無い質問に私だけではなく、門番隊の妖精達も少し混乱しています

意図の読めない質問ながらも、私は素直に教えます。

「私の記憶に間違いが無ければ博麗の巫女はまだ五歳ぐらいかな？名前は……博麗霊夢だったと思います」

また悩み始めた……なんなんですか、この少年は？

意味の判らない質問に、答えを聞いて何度も悩む少年の態度に私も段々と怒りが湧いてきました。

「次で最後、今は……第何季だ？」

「今は第百八季（※）です！

さっきから一体なんなんですかこの質問は！？

いい加減にしないと怒りますよ！」

少し脅したんですが効果は無いようで、少年は少し唖然としていました

あれ？　私、唖然とするようなこと言いましたか？

あ、崩れ落ちて四つん這いになった……ってなんでそんなに落ち込んでいるんですか！？

「あの……美鈴様、この子何か言ってますよ？」

門番隊の子にそう言われ、私が少年に向けて少し耳を傾けてみると……

「ししのやつぜったいにゆるさんなにをかんがえているんだあのやろういやどうせなにもかんがえてないにきまってるだがいまはあえないしもしこっちであえてもめいろんみたいになっていればどうしようもないしそもそもこっちのししはおれのことをしらないだろうからどうせつめいすればいいのかおもいつかないしだけどこのままにするのはいやだがこっちでおれになにをしろっていうんだよよしいいだろうおまえのいうとおりどうせだからおもいっきりじゆうにすごしてやるそしてここにおくったことをこうかいしろししもしこっちのおまえにあったらもんどうむようでぶんなぐってやるぞぜったいにな！」

訳「紫々の奴絶対に許さん、何を考えているんだあの野郎……いやどうせ何も考えてないに決まってる
だが今は会えないし、もしこっちで会えても美龍みたいになっていればどうしようもないし……
そもそもこっちの紫々は俺の事を知らないだろうからどう説明すればいいのか思いつかないし……
だけどこのままにするのは嫌だが、こっちで俺に何をしろって言うんだよ
よしいいだろう、お前の言う通りどうせだから思いっきり自由に過ごしてやる、そしてここに送ったことを後悔しろ紫々
もしこっちのお前に会ったら問答無用でぶん殴ってやるぞ、絶対にな！」

怖っ！　この子かなり怖いし禍々しいモノを放っているんですけど！
この中に出てきた紫々って人はこんな子供に一体何をしたんですか！？
落ち込んでいると思ったら凄く怒ってますよ！
一緒に聞いていた門番隊の子達は彼の言葉と禍々しいモノで怯え震

えて抱き合っています
正直私も怖いですし、今の少年とは話したいとは思いません
この少年はどうすればいいのでしょうか？

「っと、紫々に向かって文句を言っても始まらないか
これからどうするか、今はそれが問題だな」

文句を言い終えたのか、不満そうだけど少年から禍々しい気配が胡散した
どうやら今後の行動を考えているみたいですが……その前に紅魔館に来た理由とかを訊かねばなりません。

「もういいでしょうか？
いい加減私の質問に答えてほしいのですが」

「ん？　あ、ごめん……えーと、俺の名前だっけ？
俺の名前は……その……戒魔だ」

少年の名前は戒魔らしいのですが、教えるのを渋ったり、間が開いたり
そんな感じで名乗られた名前には説得力がありませんでした
偽名か、何か問題のある名前なのか、しかし名前とて十分な情報、軽く受け取ってはいけません。

「名字は名乗らずに名前だけですか……まぁいいでしょう
この紅魔館に何用でしょうか？」

妖怪退治、不法進入、観光旅行はとりあえず除外し、私は他の可能性を考えながら彼に問いました
彼は少し悩み、どうするか迷ったような声をしながら、私の予想を

大きく違える事を言いました

「あー……少しの間ここに泊めてくれないか？」

……はい？

続く

※現代でいう１９９３年のこと
簡単に言うと紅魔郷の１０年前
よって紅魔郷開始時の霊夢の年齢は１５歳になります
旧作初期で霊夢の年齢が１３歳ぐらいになってしまいますが……

東方Ｗｉｋｉに書かれている「旧作～紅魔郷間の時系列問題」の点について
この作品では解決案４を採用しようと思っています
この作品では吸血鬼異変は既に終了しているとお考えください

解決案４
スペルカードルールの流行は紅霧異変での使用がきっかけであることから、
旧作で用いられていた決闘ルールは結局あまり浸透しなかった
※この場合、吸血鬼異変とスペルカードルール制定は紅魔郷より前ならいつでもいい

少女期編　裏一話【方向がプラスだけではなく、マイナスでも奇跡は奇跡】

視点　偶然の彼？

混乱しながらも両親（仮）には寝ぼけた等と言って部屋から出て行ってもらった

二人とも納得してくれなかったが、僕が必死に言い訳をしているか

ら仕方なくといった感じだった
出て行った理由は何でもいい、今は現状を知る事の方が大事だ。

先ずは自分の事
僕の名前は東風谷　真苗、性別は男で女の子ではない……今は女の子になってるけど
年齢は三十歳だった……今は見た目五歳か六歳ぐらいだけど
十数年前に守矢神社の現人神として、八坂神奈(かな)様、守矢諏訪(すわ)様と幻想郷に移住した
異変を解決しようとしたり、解決しようとして失敗したり、早とちりや勘違いだったりもしたっけ……碌な思い出が無いな。

そういえば……今はいつだろう？

そう思った僕は部屋を見わたすと、カレンダーがあった
女の子が好むような可愛い絵が描かれていたが、そんな事はどうでもいい。

僕はすぐに年を見た
……１９９３年？　向こうで言うと第百八季？
いや、確か向こうでは第百三十三季だったはずだし、外で言うと２０１８年だったはず。

「か……過去に来て女性化したのか……僕は……」

思わず膝をついてしまい、頭を項垂れさせるほど落ち込んでしまった
僕は神奈様や諏訪様以外の神に嫌われているのだろうか？
あぁ、こんな事になるなら厄神様に厄を祓ってもらえば……奇跡だけに頼った結果がこれか。

でも何故だろうか？
気のせいだと思いたいんだけど……厄ではなく不幸なだけって言われそうな気がする。

さて、問題はこれからの生活かな？
戻る事は難しいと思うんだけど……戻れるなら戻りたいな
戻るというのは勿論幻想郷であり、未来にである。

だけど……死んだ両親が生きているこの世界
女の子になっているのは嫌だけど、両親に甘えられる二度と無い奇跡
未来に戻っても永遠に訪れる事は……無い。

まぁ三十歳になってまで親に甘えるのはどうかと思うけど、亡くなったのはたしか……十三歳ぐらいの時
それから神奈様や諏訪様が僕の面倒を見てくれたんだっけ……懐かしいな
この二柱を世話したのは僕だけどね。

でもよく考えたら僕、帰る方法無いや
はぁ……今は素直に残るしかなさそう。

でも女の子って……どんな生活してるの？

少年期編　二話【彼と彼女は似ているようで似ていなかった】

視点　戒魔

「却下です」

はぁ、やっぱり無理か
美龍の位置に当てはまるだろう彼女が、こんな簡単に不振人物を紅魔館の中に入れる、ましてや泊めるだなんて許可するはずが無いな。

しかし美龍の性別が変わっているとは……しかも俺にとっては過去の幻想郷
もし全員の性別が入れ替わっているのなら紫々の言う通り、確かにここは未知の世界だ
御子の発音が違っていたからこっちの博麗は巫女なのだろう、名前も霊夢だから女だろうし
まさか娘の名前がこっちの俺の立場になっているとはな……会いたい気もするが会いたくない気もする
美龍と彼女は性格が似ているが、俺と霊夢の性格はどうなるんだ？

今は博麗霊夢が居るから俺は博麗の名は名乗れない……か
博麗の御子として生きてきた俺が博麗を名乗れないというのは悲しいな
だが、これで俺は博麗の名に縛られず、紫々の言う通り自由に生きる事ができる。

新しい名字を考えるのは後にし、今はこれからの事を考える

今の俺には一切後ろ盾が無い、これからはどう生きればいいのか見当もつかない
こんな俺が行ける場所は少なく、人里とて裕福ではないので置いてくれるとは限らない
金塊はそう簡単に誰かに預けられる訳もなく、子供の姿の俺が持っていては盗まれる可能性が高いので自分で管理しなければならないならどうすればいいか？　どこならば安全か？

俺は短い時間ながらも考えた
安全は大事だが、それよりも俺が信用できる場所である事も大事だ。

候補は幾つか思いつくが、信用できるかどうかを考えるとかなり絞られてくるだろう
俺が博麗神社を除く場所で最も信用できそうな場所は、レミレアの立ち位置の奴が居ると思われる紅魔館。

レミレア・スカーレット　通称　紅き悪魔（スカーレットデビル）
向こうの世界で上位の実力者である吸血鬼
性格は我が儘で戦闘狂、一度戦いを始めれば周りが見えなくなり、時偶暴走するかなり困った奴だ
だが彼はとても気高く、誰かの上に立つという独特の雰囲気を放っている
くだらない事や細かい事に拘らず、自分こそが強者だと堂々と言い放つ自信までも持つ者
そして己が認めた者にはとても紳士的であり、決して己の交わした約束を違う事は無い。

そんな彼に認めさせる事ができれば、紅魔館は最も信用できる場所になれるだろう
例えレミレアは敵対したとしても、暴走していない時にしっかりと

契約しておけば必ず契約を守る
それに、今の俺は弱者だ、レミレアなら堂々と正面から戦いを望むだろう、絶対の自信と強者の威風を放ちながら。

善し悪しはともかく、大物をここまで信用できるのはレミレアぐらいだ
紫々はどこに居るのか今も不明、こっちでも神出鬼没なんだろう
幽真を認めさせるのはレミレアよりは楽だが……内心で何を考えているのか判らないから怖い
輝貴は楽しければ良いという考えだから取り入るのは楽だが、突然騒動を起こしたり、喪紅と喧嘩をするので危険
幽亜（ゆうあ）の場合、かなり気に入られなければならない……むしろ、興味を引かなかったら殺されかねない
神奈はそもそもまだ幻想郷に来ていないだろう
白楼はまだ封印されているし、今の俺には封印を解く程の力も無い
残りは地下に天界、魔界だが……どこにも行きたいとは思わない。

これからどうするかはともかく、できればしばらくここで情報収集や、現在の現状の整理をしたい
そうするには彼女――たしか美鈴だっけ？――の許可を得ないとならない
そこまで考え、俺は先の発言である、宿泊許可を求めたのだが、彼女に断られてしまった。

どうするべきか……俺は既に目の前の美鈴の存在を忘れ、更に頭を悩ませていた。

だが、何回も質問をされ、突然泊めてくれと頼んだ不振人物がの姿に、美鈴もいい加減に待つのが嫌になってきたらしい
悩む俺の耳に、少しの怒りと大きな呆れの感情を滲ませた美鈴の声

が通る。

「戒魔君……でしたね、悩むのは構いません
しかし、私が断ってから何も言わずに黙っているのは止めてください
会話中に相手の事を無視するのは失礼ですよ」

美鈴の声が聞こえた俺は悩むのを中断し、美鈴の方を向く
彼女の顔は怒りと呆れが混ざったような顔をしており、まだ考え事
は終わらないのかと、俺に訊いていた。

一緒に居る門番隊の妖精達は呆れ顔、怒り顔、困り顔をしていた
呆れ顔と怒り顔の妖精は考え事をしている俺に対して、困り顔の妖
精は美鈴に対してだ。

別に無視する気は無かったが相手はそう思っていないらしい……当
然だが
彼女と交渉する為、先ずは彼女に謝るべきだな。

美龍の位置に居る彼女と敵対したいとは思わない
美龍が敵になった時の面倒さは自分でもよく理解している。

紅美龍　通称　美しき龍の申し子
紅魔館の最初で最大の壁であり、最も面倒な最強の門番
ある意味、紅魔館で最も敵にしたくない相手
美龍は敵を排除する為には手段も問わない
高い身体能力、高度な技、門番とは思えない柔軟な思考
門番隊との連携、指示を出すにも迷わないという、隊長にしても優秀
紅魔館内にも侵入者を知らせ忘れるだなんて失敗もせず、万が一の
考えもできる
例え美龍に勝ち、紅魔館に進入したとしても、館の中には優秀な妖

精隊と、最悪の執事である刹那が襲いかかってくる
美龍自身は、基本的には殺人はしないが、殺気を向けながら鋭い攻撃してくるので敵からすればかなり恐ろしい存在。

そんな彼を敵にせず、安全に紅魔館に入るには正面から正々堂々と交渉するのが正しい
美龍は頭も良く、機転も利く
紅霧異変で問答無用に進入しようとした砲魔が痛い目にあったと嘆いていた。

俺か？　俺は正面から交渉し、戦って勝った
その時の戦いでは予め、レミレアが手加減をするようにと通達していたらしく、楽に勝てた
だが、もし本気で戦っていたら……そう思うと当時、スペルカードルールに慣れていなかった俺は勝てなかったかもしれない。

美龍はそれほどの強敵だった
その彼と同位置に居ると思われる美鈴と敵対するのは絶対に避けたい。

美鈴が美龍と似たような存在だと、俺は予想している
例え違いがあったとしても、精々五十歩百歩の違いだろう。

そう考えれば、美鈴は交渉相手として強敵
多少秘密を暴露するのは必須だろうな。

「少し混乱してて……
無視していたつもりは無かったんだ、ごめん」

俺がすぐに謝ったのが意外だったのだろう、全員が少し驚いた顔を

していた……失礼な奴らだ
最初から質問ばかりして、ずっと考え事をしていた奴なのだから仕方がないかもしれないが。

気を取り直したのか、驚いていた顔から真剣な顔に切り替えて美鈴が話しかけてきた
さて、交渉の時間だな。

「いえ、解っていただければいいんです
それより、私の質問に答えていただけますか？」

「ああ、さっきは混乱してたからな
答えられる事には答えよう」

答えられる事にはという部分が不満だったのだろう、門番隊の妖精達が少し不機嫌になっていた
美鈴はこの程度で怒るような狭い器量ではなかったようだ
先ほどの怒った声は、俺を気付かせる為だったのだろう。

それに彼女は子供には優しいらしく、姉が弟を見守るような顔をしている
しかし甘いな美鈴、気付いているか？
その優しそうな顔とは裏腹に、眼が冷静に、そして冷徹に俺の事を観察しているぞ？

例え子供相手でも決して油断しない
どんな相手であろうとも、絶対に進入させないという強い意志が伝わる
普通の子供には絶対に気付かれないように、とても小さく、静かな想い。

もし俺が本当に十歳頃に会っていれば気付けなかっただろう
本人も無意識でしているとしか思えないほど自然な眼だった。

「じゃあ改めて自己紹介をしましょう
私の名前は紅美鈴、この紅魔館で門番をしているわ
ここに居る妖精達は門番の手伝いをしている門番隊の子達よ」

しまったな……本名は全部言えないが、こんなに真面目に自己紹介をされたからには名前だけというのは失礼だ
それに……やはりあの眼、嘘は絶対に見逃さない、隠し事も見抜いてみせるという意志を感じる。

本当の名字を言う訳にもいかず、隠し事もできるとは思えない
多少怪しまれるのを覚悟し、名字は偽名にするべきだな。

そう判断した俺は自分の名字を急いで考える。

新しい世界・・・まるで知らない未知の世界・・・夢のような世界・・・まるで幻のような世界・・・

ここまで考え、俺は自分に合うであろう漢字を見つけた
少し借りてしまうが構わないだろう、行く気も無ければあまり会いたくもない
そう思った俺の口からはその名が自然と出ていた。

「俺の名前は戒魔……夢幻戒魔（むげんかいま）
ここの主と話しがしたくて紅魔館まで来た」

俺が思いついた名字は自分の存在が夢や幻のような、曖昧な場所に

立っているという皮肉を込めた名字であり
俺の友人である、風見幽亜の家、夢幻館の名を使ったものだった。

視点　美鈴

少年……夢幻戒魔君の言葉に私も門番隊の子達も驚き、顔が強張ったのが判った
まさかお嬢様との会談を望んでいるとは……お嬢様が吸血鬼だという事を知っているのかしら?
もし知っていて会談を望むのなら無謀としか思えない
以前、お嬢様が言っていたけど、子供の血は純粋で美味しいらしい
戒魔少年がお嬢様に何かしら無礼を働いたら殺され……はしなくても吸血ぐらいはされるだろう
脅し、殺気を込めながら、今後二度とこんな真似をしないよう。

門番隊の子に目配せをし、お嬢様に会談を申し込んでいる少年が居る事を伝えるように指示する
それに気がついた子は頷き、紅魔館の中へ駆け出した
紅魔館に向かった子は一人、残りの子はもう少し戒魔少年の話を聞いてから指示を出すつもりです。

「ここの主との会話をしたいのよね?
でも、君はこの紅魔館の主の事を知っているのかしら?」

「知っているよ
俺の記憶に間違いが無ければ、この紅魔館の主はスカーレットという吸血鬼のはずだ」

戒魔少年はさも当然のように言い放った
彼の年から考えて、吸血鬼異変の時にはまだ生まれてもいないはず
更に、紅魔館の主が吸血鬼という事は世間に知られていますが、名
前はそれほど出回っていない
なのに、何故戒魔少年はお嬢様の名を知っているのでしょうか？

ですが、問題なのは名を知っている事ではありません
この程度ではまだ会わせる事はできませんよ、もっと詳しく話して
いただきます。

「どんな話をするつもりなんですか？
差し支えなければ教えてほしいのですが」

「疑問の解消、頼み事、相談
他にも色々と話したい事があるし、どれも重要な事だ」

真剣に話す戒魔君の顔に嘘の色は見えない
この瞳は十歳程の子供のできる瞳じゃない
少なくとも成人しているか、かなりの修羅場を越えた者のみができ
る瞳だ
何かがおかしい……この少年は本当に子供なのかしら？

戒魔少年の瞳は、私の僅かな油断を取り払った
この少年の精神は子供ではない、私も真剣にしなければ失礼に当たる
子供だからといって、普通の子供を相手にしているように接してい
てはこちらが飲まれかねない
そうと決まれば、私は戒魔少年を……いえ、戒魔を子供だと思わず、
真剣に対等な立場として話しましょう。

勘違いをされやすいのですが、門番は門番だからといって門を守るだけが仕事ではありません
どんな相手にしろ一番最初に会うのは私、門番というのは看板でもあり、一番最初に目に着く存在
そんな私が戦闘だけでは役に立つわけがありません
交渉や駆け引き、話し合い、接客なども私の重要な仕事だ。

当然ながら最初からそれだけの仕事をこなせる訳ではない、紅魔館の門番を任せられた時に自ら学びました
最初は全くできず、下手な交渉で無駄な時間を過ごしたり、間違って退治屋を館へ迎え入れたりと失敗も多いです
ですがそんな失敗を糧に、時間は掛かりましたがお嬢様からお墨付きを戴きました。

そんな経緯があるので私はそう失敗は許されない
君が秘密にしている事を全て聞き出させていただきます！

視点　戒魔

……この女性は本当に美龍と同位置存在なのか？
この交渉力に話し合いの巧さは想像以上だ
俺の本名と博麗の御子という事、封印の件、子供になっていた事は隠し通せた
だが、それ以外は根掘り葉掘り聞き出された
気がつけば湖の近くで倒れていた事、現状を完全に理解できていない事、理由は少し曖昧だが封印処理をされている事
スカーレットを知っていた事はなんとか噂という話に持って行けた

（疑われていたけど）
もう二度と彼女とは話し合いをしたくないな。

「私はお嬢様に戒魔少年の事を話して来ます
逃げたりしないと思いますが、一応見張りをお願いしますね」

「「はい！」」

見張りの元気のいい返事を聞いて美鈴は笑顔を見せ、一瞬俺を厳しい顔で睨み、館に入っていった
どうやらかなり警戒されたらしい、どうお嬢様に話すかは判らないがお嬢様にも警戒されるだろうし
話し合いの難易度は上がっただろう。

妖精達も警戒して俺を見ている
最悪、殺されるかもしれない事を考慮しておくべきだな、逃げ道も考えないとならない。

しばらくの時が経ち、美鈴が戻ってきた
美鈴が俺に向かって進み、俺の目の前で止まった。

こうしてみると、美鈴の背はかなり高い
今の俺の身長では美鈴を見上げる事になっており、男として少々悲しい
まぁ、大人になるまで成長すれば彼女の身長を越えるのは解っているのであまり心配はしていない。

「戒魔少年、お嬢様が直接お会いになるそうです
私と一緒に来てもらってもよろしいですか？」

「わかった、従おう
それに、訪ねてはいるが断ったら無理矢理にでも連れて行く気だったんだろ？」

「どうしてそう思うんですか？」

「顔が怖かったからな」

「……そうですか」

俺の言葉に美鈴は悲しかったらしく、少し声が沈んでおり、若干肩が落ちていた。

顔が怖かったのは事実だが、実はそれだけが理由ではない
美鈴の眼を見て、お嬢様から必ず連れてこいと言われたのは見て取れた
あの哀れむような、諦めの眼
お嬢様に興味を持たれたのは確実だろう。

レミレアもそうだった
興味の湧いたモノは自分で見定め、楽しければ良し、つまらなくとも吸血をしたり、殺してもいいだろう
あいつにとって、人間とはその程度の存在
俺や砲魔は前者であり、楽しかったから、興味が出たから友人のような付き合いができただけ
それに加え、俺達は手加減されていたとはいえ、レミレアとの弾幕勝負に勝った事もあるという点も大きかっただろう。

男と女
違いは大きかろうと、本質的には似ているはずだと俺は思う

そう思ったのには美鈴の存在が大きいだろう。

俺の知っている美龍もこの美鈴も、この紅魔館の門番に誇りを持っている
己の主を外敵から守り、自ら全てから主を守り通すという意志が伝わってくる。

これほどの想いはそう簡単にできる訳がない
つまり、美龍と美鈴の本質が似ているという事は、主の見定め方も似ているのだろう
彼に認められたのがレミレアならば、彼女もレミレアを認めるだろう
彼女に認められたのがお嬢様ならば、彼もお嬢様を認めるだろう。

つまり、俺はレミレアとお嬢様は似たような性格だと思えばいい
そう考えれば美鈴に強制的に連れてこさせようとはしなかっただろう
自分が吸血鬼だと知り、凶悪な存在だと理解しながらも話し合いを求めてきた子供
レミレアが興味を持たないはずがない。

相手を知っている上での交渉とは卑怯だとは思うが、この程度をしなくては生き残れる自信が無い
それほどまでに、幻想郷とは残酷な世界なのである。

「では戒魔少年、お嬢様の部屋まで連れて行きますので私に着いてきてください
門番隊の貴女達は門を警備を続けて、戒魔少年をお嬢様の元まで連れて行ったら私も仕事に戻るわ」

「「分かりました」」

同時に答える門番隊の妖精
元来、自分勝手な妖精をここまで躾けられたのは美鈴の教育が良かったのか
それとも美鈴に従うような出来事でもあったのか……
俺の知る事ではないな。

踵を返し、美鈴が紅魔館の中へ入って行くのを、俺は無言で彼女に着いていく
後ろで門番隊の妖精が二手に分かれ、他の妖精達に指示している声を聞きながら、俺は紅魔館の中へ入って行った。

続く

少女期編　裏二話【女の子としての最初の買い物】

視点　早苗（真苗）

「勘弁してよ……お母さん」

「早苗ちゃん？　何か言った？」

まさか過去に戻ったその日に買い物の約束をしていたとは……しかも服
何で今日なの？　僕に女の子としての自覚をしろって現実を突きつけたいのかな？

神様仏様神奈様諏訪様厄神様死神様、僕は何か悪い事をしたんでしょうか？
僕は真面目に生きてきたはずです、勘違いとか間違いは多々犯しましたが、何故このような仕打ちを致すのでしょうか？

ううぅ……悲しくなって泣きそう。

「早苗ちゃん？　どうしたの？　お腹とか痛いの？」

どうやら本当に涙を流していたみたい

涙を流している僕を見たお母さんが心配そうに声をかけてくれたんだけど……
この買い物が涙の理由の一部だなんて言えないし、心配を掛けたくない僕にはこう言うしかなかった。

「違うよ、お母さんと買い物しているのが嬉しくて涙が出ちゃったの」

我ながら苦しい言い訳だ……いくら頭の緩いお母さんでもさすがにこんな言い訳を信じるほどお馬鹿じゃないだろうし……

「え！　そうなの!?
あーん、そんなに喜んでくれてお母さん嬉しい！」

……信じたよ、この馬鹿親
今更嘘だなんて言えないし……ざ、罪悪感が……

今僕にできる事は少ないし、静かにしていようできるだけズボンを中心にしてスカートは嫌がらないと、そうしないと強引に買われそうだし……

「早苗ちゃーん、これなんてどうかしら!?
可愛いワンピースだと思わない？　きっと似合うわよ！」

ワンピースだなんて……お願いだから勘弁してよ、お母さん！

その後、なんとかお母さんを落ち着かせ、ズボンの購入に成功した……さっきのワンピースも買っていたけど、それは見なかった事にしよう。

少年期編　三話【新たなる世界に心からの感謝を】

視点　美鈴

私は戒魔少年を連れ、紅魔館に入って行く
戒魔少年の足取りはしっかりとしており、迷いの無い歩みだった
紅魔館の内部なんて全く気にしておらず、私の後ろを普通に歩くだけ。

おかしい、ありえない
まるで……以前も紅魔館に来た事のあるような歩みに、私は大きく混乱している。

私はこの数百年、この紅魔館の門番をしているが客人は全員私が通しており、私に会っていない客人は居ない
つまり、戒魔少年は私の知らない間に紅魔館に進入したか、私が門番をする前に入った事があるという事になる。

しかしそれも変だ
私の知らない間に紅魔館に進入するには、私が休憩している時や睡眠時しかない。

だが、これはありえない
何故なら、私が居ない時は門番隊を数十人配置しており
誰かが訪ねてきたり、進入しようとしているのを見たら急ぎ私に知らせるように教え込んでいる
事実、そうやって侵入者を撃退した事や、客人を案内した事もある。

ならば、私が門番をする前に入ったか
こちらの方がありえない
私がこの紅魔館の門番の仕事を受けたのは百年単位も前の話
それよりも過去に入るには、戒魔少年の年齢は齢百を大きく超えている
戒魔少年が仙人や天人、妖怪などではない以上、人間という種族で不老にならなくてはならない
そんな事をすれば長寿というだけで大きな罪を犯していると閻魔に言われ、とても厳しい罰を与えられる事になる
更に、永く生きているという事は地獄からの刺客にも狙われる事である
とてもではないが、戒魔少年程度の筋力、気の量、霊力から考えても、地獄からの刺客を追い返せるとは思えない。

ここまで考えたが、私には戒魔少年が紅魔館に入った経緯が全く思いつかない
それなりに知識や経験は積んでいるはずだが、どうやら甘かったようだ
今度時間が出来た時にでも、パチュリー様から本を借りて知識を蓄えておかなければ……

「美鈴、ちょっと訊いていいかな？」

「あ、はい
何か気になる事でもありましたか？」

私が返事をし、振り返って戒魔少年を見てみる
戒魔少年は枝分かれしている道の突き当たりを見ながら、何かを考えているようだった。

「あの先に道はなかったっけ？
あそこはずっと壁だったか？」

「見ての通り、あの先は突き当たりです
この紅魔館が建ってから一度も改装はしていないと聞いています」

「そうか……
つまりまだ刹那は……」

戒魔少年の意味の解らない問いに、私は再び考え込まされる
今の問いから察するに、やはり戒魔少年は紅魔館に入った事がある
という事は確信できた
しかし、それはまた不可解な事であり、私の事を更に混乱させてくれた。

今の言葉から知る事ができたのは、戒魔少年は紅魔館の構造をある
程度知っているという事
誰かが紅魔館の内部を書いた間取図でも作成し、それを見せたり売ったりしたのか？
それとも妖精が情報を流した？
どちらにせよ大した問題ではないが、無視していい問題でもない。

「戒魔少年、少し訊いていいでしょうか？」

「構わないが？」

「君は何故、紅魔館の構造を知っているんですか？」

「……あ」

「……」

「……」

どうやら戒魔少年、頭は良さそうですが駆け引きは苦手なようです。

視点　戒魔

美鈴の質問に俺は沈黙で返答するしかなかった
俺の迂闊な発言に、美鈴は疑惑やら呆れやらを感じる。

元々疑われるのは覚悟していたが、どうやら自分の間抜けな不始末で更に疑われたようだ
俺がすぐに言い訳を言えばよかったのだが、その機会も無くし、もう沈黙でしか返答できない
言い訳と言っても、未だに何も思い浮かばない時点で俺も大分混乱しているらしい。

お互い沈黙したまま廊下を歩いていく
途中で妖精メイドと擦れ違う事もあったが、妖精メイドは少し俺達を見るだけで去って行く
非常に気まずい空気の中、美鈴から口を開いた。

「戒魔少年」

美鈴に声をかけられたが、俺にできるのは無言を突き通すだけ
美鈴はそんな俺の態度を全く気にする事なく言葉を続ける。

「別に紅魔館の構造を知られるのは構いません、それは自体は大した問題ではないんですですが、紅魔館に入った事のないはずの君が紅魔館の構造を知っている理由が分かりません」

分からないのは当然だ
俺は未来の異世界から来たのだから。

「色々と考えました
私の知らない間に入った事があるのか……これはありません
私が門の前に立っていない時でも門番隊を数十人配置しています
私の鍛えた門番隊の子達が、君のような子供を見逃すはずがありません」

それは知ってる
美龍から門番隊の模擬戦を何度も頼まれた事がある
門番隊の連携は他とは一味も二味も違った
美龍は当然の事、攻撃も防御も超一流、永遠亭の妖怪兎と比べても雲泥の差
比べる事自体、門番隊への侮辱だろう。

紅霧異変の時にその連携を使われていたら、おそらく俺は紅魔館に進入できなかっただろう
つくづくレミレアのお遊びという事を思い知らされた苦い記憶だ。

「私が門番をする前に入ったとも考えました
ですが君は普通の人間の少年、不老の存在でない限り、時を越える他ありません」

いや、それが一番近いんだが……未来だけど
越えたのは時間じゃなくて世界だけど。

「他に思いついたのは、この紅魔館に招待した客人が間取図を書いて君に見せたか
それとも妖精の誰かが情報を流したか……私にはこの程度思いつくのが精一杯でした」

ここまで思いついた方が凄いぞ？
俺なんか言い訳の一つも思いつかなかったんだから。

「戒魔少年、できれば素直に教えてください
もし妖精が情報を流したのだとすれば罰せねばなりません」

「教える事はできないが少なくとも、美鈴の予想は全部間違っているだから妖精を叱るのは止めてくれ」

「……まぁいいでしょう」

ふぅ、俺のせいで妖精が叱られるのは後味が悪いしな
美鈴も今訊いても無駄だと思ったのだろう、簡単に身を引いた。

俺の記憶が正しく、この紅魔館も向こうの紅魔館と同じ作りならそろそろレミレアの部屋のはずだ
まだ刹那が紅魔館に居ない今、紅魔館の広さは見た目通りの広さだしな。

そう思い、歩き続ける事数分
一際大きな扉の前で美鈴が立ち止まった
その部屋は俺の記憶にあるレミレアの部屋と同じ扉であり、同じ場

所の同じ位置だった。

「この部屋にお嬢様が居ます
くれぐれも、お嬢様に粗相の無いよう、お願いしますね
お嬢様を不機嫌にさせては殺されても文句は言えません」

「解ってるよ
吸血鬼の恐ろしさは知っているつもりだ」

「お嬢様を文献や資料、言い伝え通りの存在だと思わない方がいいですよ？」

「それも解ってる
吸血鬼を敵に回すような馬鹿な事はしない」

「そうですか」

俺の言葉を聞き、美鈴はため息を吐いた
あまり信用できないが本人がそう言うのなら別にいいか
言外にそう言われた気がする。

そう思われただろう態度をされれば腹も立つが、そう思われても仕方がないので我慢する
これでも、俺の忍耐力はかなり高い方なのだ。

そんな事を考えている間に、美鈴は扉軽く叩き、一拍空けてから部屋へ声をかける。

「レミリアお嬢様、先ほどお話した客人を連れてきました
入ってもよろしいでしょうか？」

どうやらお嬢様の名前はレミリアという名前らしい
美龍（めいろん）と美鈴（めいりん）のように名前は似ているらしい
だが戒魔（かいま）と霊夢（れいむ）は似ていない、一文字しか合っていないし、おそらく漢字も大きく違うだろう。

「ええ、構わないわ
入りなさい、美鈴」

扉越しである為、声は少し聞き取りづらいが、高く幼いような声に思える
レミレアの見た目は十代前半ぐらいの少年だったが、レミリアはどうなのだろうか？

「はい、お嬢様
失礼いたします」

美鈴が扉を開け、俺の視界に映ったのは
薄い水色の短い髪
白に近い桃色の洋服
肌色よりも白に近い肌
そして観察するような、興味深そうに俺を見つめる紅の瞳
彼女こそ、お嬢様という言葉に最も相応しい
レミリアはそう思わされるような美少女だった。

レミレアとレミリアは似ているが大きく違っていた
レミレアの髪はもう少し暗い色をしていた
レミレアの服は赤に近い桃色だった
レミレアの肌は戦いを繰り返した為、こんなに白くなかった
レミレアの瞳は常に闘氣に満ちており、観察するような眼をした所

は見た事が無い。

出会いの違いでここまで印象が変わるものなのか
俺が出会った者達の大半は戦いで知り合った者ばかり
全員闘氣や殺気に満ちていた為、改めて出会わない限り印象は変わっていない。

しかし、この世界で会う者は全員似ているが別人だ
見た目も違えば性格の違うだろう
名前が違えば存在も違うだろう。

俺はこの出会いに、この世界に、そして偶然とはいえここへ送ってくれた紫々に感謝した
俺はこの瞬間に決めた、俺は前世界の知り合いと全員に会う
全ての出会いを戦いという狭い世界では決してしない事を決めた。

「よく来たわね、人間の少年
私に話しがあるみたいだけど、何用かしら?」

これがレミリアの声か、扉越しで聞くよりも高く、幼い少女の声
もしこれが戦いの出会いだった場合、この声は煩わしく、戦いを盛り上げる為の要素だけだっただろう。

俺は改めてこの出会いに感謝し、己の全ての想いを声に込める
その声を、言葉を、感情を、全てを彼女に受け取ってもらおう。

「初めまして紅い悪魔(スカーレッヂビル)、俺の名前は夢幻戒魔
紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ、俺はこの出会いに心から感謝しよう」

この新たな世界で生きる目標を与えてくれた吸血鬼に、心からの感謝を捧げる。

続く

少女期編　裏三話【神々の娘】

視点　???

数時間前、神社の娘の魂に異変が起こった
弱々しい子供の魂と、強く輝く大人の魂
これらが混ざり合い、新たな魂として娘に入った。

本来、私が働きかけてはいかんのだが……あの娘は気に入っておる
我ら神を信仰し、暇があれば必ずお参りは欠かさない娘
贔屓をする事は許されんが、娘を放っておけば必ずやその身に不幸が訪れるだろう。

最も簡単で安定できるのは、やはり大人の魂の封印であろう
だが事はそう簡単にはいかんのだ。

この数時間で大人の魂は既に子供の魂と同化しておる
無理矢理封ずれば、精神まで封じてしまうやもしれん
その可能性を考慮すれば下手な手出しは無理だ。

仕方あるまい、気は進まぬが奴に頼むのが最も良いだろう
私はそう思い、奴の居る奥の部屋へ向かった。

私が襖を開けると、奴は寝転びながら退屈そうに襖を開けた私に話しかけてきた。

「あんたが自ら私の居る部屋に来るなんて珍しいじゃん、何か用？
喧嘩だったらしないよ、ご存じの通り、今の私には信仰も力も無いからね」

「戯けが、そのような事で貴様に会うとでも思うてか

貴様へ頼みができた、その為に我が力を少し分けてやろうと来たのだ」

私がそう言うと奴は以外そうな顔を私に見せ、やがてケタケタと笑い出した
さも可笑しそうに、楽しそうに笑う奴に、私も不機嫌になってきた。

「何がおかしいか
数少ない我が頼みも受けぬと言うつもりか、居候の癖に」

私の言葉が気に入らなかったのだろう
奴の顔が不機嫌の色に染まってきおった。

「別に受けないとは言ってないだろう
それに、居候とは言うけど、ここは元々私の神社だ
それをお前が奪っただけだろう」

「ふん、笑止！
例え元が貴様の物だろうが、今は私の物だ
ならば自然と貴様が居候になろう、違うか？」

「……ちっ！　で、用件は何よ」

ふん、最初からそう素直に言えばよかろうに
時間が無駄になるだろう。

「貴様も知ってるだろう？
ここの娘の魂の事を」

「ここの娘？　早苗の事かい？

確かに魂に何かしら影響は出ただろう
けど、あんたが態々言う事かい？」

「ああ、このまま放っておけば娘は不幸になるだろう」

私の言葉を聞いた奴は不機嫌な顔を更に不機嫌にさせた
空気も淀み、重くなり、奴が不満と怒りを周囲に漏らしている。

「落ち着かぬか、愚か者
このままと言ったであろう」

そう聞いた奴は徐々に落ち着き、冷静さを取り戻していった
そうなると次は心配と顔が言っている。

「私は何をすればいいの？」

「うむ、娘を呪え
魂に負荷を掛け、魂の力と器を広げるのだ」

やはり呪うという言葉は見逃せなかったのだろう
再び奴の顔は怒りで埋まってしまった。

「私に……可愛いあの子を呪えって？
冗談じゃない、誰がそんな事するもんか！」

「冷静になって考えい！　この愚か者が！
貴様の感情と娘、どちらが大切なのかを考えてからもの申せ！」

大声と一喝で奴の顔から再度怒りが消え去った
残った感情は後悔と悲しみ、奴は己を恥じていた。

「……そうだったね、悪かったわ
あの子が安全になるなら、私の感情を殺すぐらい安い物ね」

「安心せい、娘はまだ未熟
貴様が呪いを掛けても気付かぬだろう
魂が縛られる事によって体調を崩すだろうが、後々の事を考えると
些細な事だ」

「分かった、あの子が帰ってきて、神社に来たら呪うよ
ただし、私は姿を見せないからね、あんたが上手くするのよ」

奴の挑戦的な顔
私が返す顔は無論、奴を小馬鹿にする顔だ。

「はっ、誰に言っている？
この八坂神奈子、我を信じる者が居る限り、無様な失敗は犯さぬよ
そういう貴様こそ、呪いに失敗して娘を殺したりせぬようにせいよ
？」

「ふふん、あんたこそ誰に言ってるの？
この守矢諏訪子様がそんな愚かな失敗をするはずが無いじゃない」

私達はお互いに見つめ合い、同時に大笑いをした。

娘……否、東風谷早苗よ
我ら二人が汝を先の不幸から必ず助けよう。

少年期編　三話【新たなる世界に心からの感謝を】（後書き）

平行世界の簡易キャラ設定

博麗霊夢／博麗戒魔
二つ名　魔を戒めし者

博麗という立場上、妖怪などの魔と戦う事が多いだろうと思い、この二つ名に決めた
それに合わせてそのまま名前にしてみた
もう少しマシな名前は無かったのかと、今は少し後悔している

簡易性格
それなりに真面目
普段から感情の突起が少なく余程の事が無い限り怒る事はない
博麗という必ず騒動に巻き込まれる血筋の為、落ち着く空間と平穏を大切にしている

少年期編　四話【傷ついた誇り】（前書き）

この話は二話で門番隊が一人戻り、報告し終えた直後から始まります。
前話の最後と繋がっていないので、二話をもう一度読んでから四話を読むか、二話の美鈴の行動を思い出しながら読んでください。

少年期編　四話【傷ついた誇り】

視点　レミリア

私は門番隊の者から客人の知らせを受け、次の知らせを楽しみに待っていた
ただの人間の子供が私が吸血鬼だと知って会話を望んでいる
その話を門番隊の妖精から聞いた時、私の中で色々な想像が膨らんでいく。

大した力も無い、ただの人間の子供がこの、この紅い悪魔（スカーレッドビル）との会話を望む
これがどれほど非常識な事なのか、その子供は理解しているのだろうか？

「お嬢様、美鈴です
先ほど報告で知らせた少年の事でお話があります
お時間をよろしいでしょうか？」

そして暫くの時が経ち、今度は美鈴が報告に来た
美鈴から見た人間はどう思ったのか、変わった子供への興味が尽きない。

「構わないわ
入りなさい美鈴」

「失礼します」

入ってきた美鈴の顔は少し不満そうだった
この顔を美鈴がしたという事は、相手の心理を読み取れなかったか
情報を訊き出しきれなかったのだろう
彼女が門番に立ってから長いが、この顔を見るのはかなり珍しい
どうやら人間の子供の癖に頭が良いのか、絶対に隠し通したい秘密
があるのだろう
私の興味をまた強く引かせる子供だ。

「先ほどの子供についての事ですが
子供の名前は夢幻戒魔、自己紹介の際に名乗るのを少し戸惑った為、
おそらく偽名だと思われます
気がつけば湖付近の林で倒れていたと証言しています
紅魔館へ来た理由はお嬢様との会話以外にも、現状の把握も含まれ
ているそうです」

気がつけば倒れていた……ねぇ？
外来人か、それとも誰かの悪戯か……

「お嬢様の事は噂で知ったとの事でしたが、これも嘘でしょう
知っているのを我慢して控えめに言っているような……
もしかすれば過去にお嬢様か、他の吸血鬼に会った事があるのかも
しれません」

夢幻戒魔……聞いた事ないわね
人間の子供になんて、この数十年会うどころか見た事も無いわ
他の吸血鬼に会うとしてもフランは殆ど屋敷から出ないし、外にも
まだ吸血鬼が残ってるとは思えない
噂では魔界にも吸血鬼が居るらしいが……魔界からここまで来れる
程の力でも持ってるのかしら？

「戒魔少年の事で最も気になる事は何かしら封印処理を受けているとの事です
何を封印されているのか、どれほどの封印なのかは曖昧に流されてしまいました
しかし、それでいて一般的な人間を大きく超える霊力から察するに、かなりの実力者だったと思われます
現在は……まぁ一般を大きく超えると言いましたが、戦う技術を持ってようやく下級妖怪と互角程度でしょうか？」

へぇ……封印されている状態の人間の子供が
条件付きとはいえ封印されていても下級妖怪と互角に戦えるほどの霊力を持っている。

これほどの霊力を持つ人間はかなり珍しいわね
霊力を多く持っている人間の血は美味いし、吸血をする事も考慮しておこうかしら？

でも、これで魔界から来た可能性も低くなったわね
幻想郷に来てから封印されたのなら可能性はあるけど
自分から封印したとは思えないし、封印した存在がいるのならば置いていかないだろう。

そうなると……強い力や能力を持ってしまったから親とかから封印されて捨てられた？
こう考えると、外来人だという可能性も浮かぶが……私の事を知っている説明ができなくなる
また振り出しに戻ったわね。

「美鈴はその人間の事をどう思う？
貴女の素直な感想が知りたいわ」

美鈴は困った顔をし、言いづらそうにしている
言うかどうかを判断に迷っているのだろうか？　それとも言えないような理由でもあるのか？
そのようなそぶりも少ししてすぐに無くなり、美鈴は少し重くなった口を開いた。

「得体の知れない少年ですね」

美鈴には珍しいたったの一言、自分の素直な思いを込めた一言だった
美鈴がそう思ったのなら、その人間を尺計る事はできないという事だ。

「そう、解ったわ美鈴
その人間をここへ連れてきなさい
必ず、拒否されようとも無理矢理にでも連れてきなさい」

美鈴は少し嫌そうに顔を顰めた
彼女は少々潔癖な部分が見られる為、子供に強制させるのが嫌なのだろう。

「無理矢理にでも……ですか？
確かに怪しく、得体の知れないと言ったのは私ですが子供に対して強制して連れて行くのは……私は反対です」

「貴女の感情なんて知った事ではないわ
私はその人間に興味が湧いた、だから無理矢理にでも私を楽しませてもらうのよ
それに、その人間も私と話したがっていたのでしょう？　なら問題無いじゃない」

美鈴は言葉を返さなかった
命令は真面目に受ける、だが納得できなかった
そんな事を考えているから無言になったのだろう。

美鈴はそのまま扉に向かい、一礼をして部屋から出て行った
真面目な美鈴の事だ、嫌々ながらも必ず人間を連れてくるだろう。

それにしても……真面目に仕事をするのが美鈴ぐらいしかいないこの紅魔館
パチェは仕事なんてしないで本を読んでいるだけ、時偶整理もするけどその程度
美鈴が一番働いてくれるから紅魔館は一応保っているけど……

はぁ、どこかに有能な執事とかメイドはいないかしら?
育てるにしても、妖精なんかじゃ駄目よね……存在自体が自由だし妖怪ならとは思うけど、妖怪は自意識が強いから言う事を聞かないだけならともかく、反乱を起こされたら面倒
人間は貧弱だし能力も低いのよね……

そもそも育てるにしても、師事する者も居ない
パチェに任せたらきっと完全な従者になるでしょうけど……本当に完全でしかない従者にしかならない気がするのよね
美鈴に任せたらきっと強く、真面目な従者になるでしょうけど……重要な場面で失敗する気がする
フランには、って無理ね!
私が育てるのも楽しいでしょうけど……飽きそうで怖いわ。

でも育てないと美鈴の負担が増えるだけだし、後十数年もすれば疲労も溜まるでしょうし

もし美鈴が倒れたりすれば門番隊の子だけじゃ頼りないし、何より門番が不在なのは客人に対して印象が悪くなるわ
そんな事、私のプライドが許さない。

そうこう考えている内に時間も経っており、そろそろ美鈴が戻ってくる時間かしら？

私がそう思い、少し身嗜みと整える
身嗜みが整え終えた時、扉の外で足音が止まった。

どうやら美鈴が来たらしい
どうせ私の前で粗相をしたり、不機嫌にさせたりしないように注意しているのだろう
美鈴のその行動は、初めて私を前にする客人に必ずしている恒例行事であり、私による犠牲者を減らすための処置
優しい美鈴らしいけど、内緒話にしたいならもっと静かな声でしなさい
毎回毎回聞こえてるのよ？　貴女には言ってないけど。

美鈴は軽く扉を叩き、一拍空けてから声を掛ける。

「レミリアお嬢様、先ほどお話した客人を連れてきました
入ってもよろしいでしょうか？」

「ええ、構わないわ
入りなさい、美鈴」

「はい、お嬢様
失礼いたします」

普段と変わりない形式張った会話
毎回同じやりとりをしてるけど、美鈴は飽きないのかしら？

美鈴が連れてきた人間の子供を見てみる
美鈴が少年と言っていたから十三歳前後だと思っていたが私が想像したよりも幼かった
肉体年齢的に私と同年代か少し下ぐらいの、本当に子供だった
どこにでも居るような普通の人間の子供。

だが、この子供は絶対に普通の子供ではない
この子供は私の事を観察していた、何かと……誰か私に似ている者と見比べていた。

だが、どうやらこの人間は私に見惚れているようだ
子供の癖に色気づいて……悪い気はしないがあまり気分がいいとも言えない
こんな子供に好かれても虚しいだけよ。

人間の眼から私を見る眼が変わった
見比べるような、観察するような眼から喜びの眼になっていた
喜びの原因は分からない、だがこれは喜びというよりも感激に近い
吸血鬼が憧れだったとか？　そう思いもしたがそれなら見比べるような眼が不可解だ。

この人間の感情が読めない
私の観察眼が鈍ってしまったのだろうか？
最近あまり人間に会ってないのが原因か、子供と会う事が少ないのが原因か
どちらにせよ、少し悔しかった。

「よく来たわね、人間の少年
私に話しがあるみたいだけど、何用かしら?」

私の声を聞き、喜びと感謝の顔が人間の顔一面に現れた。

別に喜びや感謝をされるような事は一言も言ってないはずなんだけど?

というか、何でそんなに楽しそうなの!?　私って恐れられる吸血鬼よね、なのに何で威圧されて嬉しいの!?

人間の感情の意味が解らず、私は混乱してしまった
私が混乱しているのに気付かず、人間は頭(こうべ)を垂れ、一礼をした。

「初めまして紅い悪魔(スカーレッヂビル)、俺の名前は夢幻戒魔
紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ、俺はこの出会いに心から感謝しよう」

心からの感謝の言葉
私は混乱する事も忘れ、この人間の……いえ、夢幻戒魔に圧倒された。

視点　美鈴

戒魔少年の言葉に、私もお嬢様も圧倒されていた
感謝をされる理由も分からず、しかし心から感謝している事は解る。

戒魔少年自身は理解していないだろうが

今この瞬間、彼はお嬢様の上に立った。

圧倒的優位に立っている今、お嬢様に何かを頼めば無条件で受け入れられるだろう
本来ならありえない上下関係に、自分よりも圧倒的に格下の存在の下に居るお嬢様の感情は大きく乱れている。

だが戒魔少年は何も言わない
頭を上げ、表情も戻し、感情の波も無い
だが彼の考えは手に取るように解る。

こんな事で頼んでも意味が無い
頼み事をするならお互いに同じ条件で頼む
相手の隙を突くような卑怯な事は絶対にしない。

私が戒魔少年の考えを分析し終えた時、お嬢様が正気に戻った。

正気に戻ったお嬢様も、私と同じ考えにたどり着いたのだろう
とても悔しそうな、屈辱を受けたような顔をしていた。

それも当然だろう、お嬢様はほんの数秒とはいえ人間に負けたのだから
しかもまだ幼さの残る十を数えたぐらいの少年なのだから悔しさはより強いだろう
お嬢様の口から歯軋りの音さえ聞こえた。

だがお嬢様の屈辱はそれでは済まなかった
何故なら、戒魔少年はお嬢様が敗北した事に気付いていたからだ
それも、無意識に気付いたのではなく、意識的に、お嬢様を見て気付いた。

当然お嬢様もその事に気付いた
お嬢様はこの短時間に二度も敗北したのだ
既に誇りは傷つけられ、敗北の味を強く知らしめられている。

お嬢様は殺気を少し込め、戒魔少年を強く睨み付ける
だが戒魔少年は何処吹く風と、全く意に返さずにお嬢様を見ている
まるで、その程度の殺気がどうした……と。

当然お嬢様もそれに気付く
お嬢様は殺気を強く込め、再び戒魔少年を睨む
気の弱い人間がこの殺気を浴びれば心停止してしまうだろう
それほど強い殺意が込められていた。

しかし戒魔少年は相変わらずお嬢様の殺気を無視している
それよりも呆れさえ感じているようだった。

戒魔少年のその態度はお嬢様の誇りを更に傷つけた
これでお嬢様は三度敗北した。

その事を悟ったお嬢様は殺気を消し、諦めの表情をした
おそらく、この場で暴力以外の方法で勝利する事ができないと察したのだろう。

「夢幻戒魔……だったわね
用件を言ってちょうだい、私にできる事ならしてあげるわ」

お嬢様の声に力が入っていない
敗北する事は初めてではないだろうが、ここまで連続で負けた事は無いだろう

既にお嬢様の心は折れていた。

「相談と頼み事がある
他にも、訊きたい事が色々とな」

「……いいわ
美鈴に聞かせてもいい話なの？
美鈴に訊かずに態々私の所まで来たのだから聞かせられない話なんでしょうけど」

「ああ、できれば席を外してほしい」

「だ、そうよ美鈴、門番の仕事に戻りなさい
多分、後で用事を頼むと思うわ
その時は妖精メイドに使いをよこすから」

「はい、では失礼します」

私が参加できない事は予想していた為、特に何も思わずに出て行く
後で用事を頼むと言っていたので、その時にでも話を聞けばいい。

そう思い、私は一言言って部屋を去った
私の本来の仕事である、門番に戻る為。

続く

少女期編　裏四話【過去と未来の天秤】

視点　早苗（真苗）

お母さんとの悪夢と言えるような買い物も終わり、夕飯の時間になった
つい未来での癖で台所に立ってしまいそうになったが、先にお母さんが立っていた
お母さんが不思議な顔をしていたので、僕は逃げるように冷蔵庫を開けてお茶を飲んで誤魔化した。

まさかまたお母さんの手料理を食べれるとは……
過去に戻り、両親が生きている事を改めて実感した
しかも今日の献立は肉じゃがという、よくお袋の味と呼ばれる物だった。

あまりにベタな展開に、思わず頭を抱えたくなった
というか本当に抱えて少し苦悩した。

色々と考えていた僕の思考がループしかけた時
お母さんの夕食ができたという声が聞こえた。

部屋に入った時には既に準備は済んでおり
僕が食卓に座れば食べるだけになっていた。

テーブルが高い為、同じように高い椅子に苦労して座る
両親は苦労して椅子に座ろうとしている僕を頑張れと応援していたけっこう大変なんだから手伝ってくれない？
そう思ったが、手伝われると惨めな思いをするだろうと思い、逆に少しだけ感謝した。

「「いただきます」」

「……いたらきます」

発音が上手くできない
大人の記憶があるせいでかなり屈辱な気分だった。

まだ小さい僕には箸は与えられておらず、目の前にはスプーンが置かれていた

僕は動きにくい、慣れない手でスプーンを持ち、小さく切られたジャガイモを食べ、泣いた。

「どうしたの早苗ちゃん！？
熱かったの？　それとも美味しくなかった？」

お母さんが心配そうに僕に訊いてくる
お父さんも心配そうに僕を見ている
僕は首を横に振り、何でもないと伝えた。

こんな子供の舌でも感じられる、母の手料理
もう二度と味わえない母の味を感じられた奇跡。

僕はこの瞬間に決意した
絶対にこの世界を、この小さな家庭を、家族を護ろう
そう決意した。

それと同時に僕は過去を……未来を捨てた
幻想郷で出会った大切友人
ライバルであり、最も親しくなれた親友の戒魔
そして……僕の人生の半分以上一緒に過ごした神奈様と諏訪様。

僕は未来であり、過去でもあるあの幻想郷へはもう帰らない
僕は未来の思い出よりも、過去の家族を取った。

もし未来へ戻れたら、僕はきっと軽蔑されるだろう
きっと殴られるだろう
もしかすると殺されるかもしれない。

神奈様や諏訪様には恨まれるだろう

お前は私達よりも幻のような家族を取るのか？
そう言われるかもしれない
諏訪様には呪われるかもしれない。

でも、僕は死んでしまった家族を取る
例え何を言われても、何をされようとも、この選択を決して後悔しない。

両親に心配されながら夕食を食べ終え、部屋に戻った
ベッドに座り、これからの事を考え始めた。

幻想郷に行くか行かないか……これは保留だ
両親が生きていれば行かない可能性も高い
神奈様や諏訪様には悪いけど、両親が生きている限り幻想郷には行けないだろう
僕に妹や弟が居れば風祝の役目を押しつけられたんだけど、僕は一人っ子だ。

なら僕の子供に……って、それって僕が産むんだよね！？
体は女の子だけど精神が男の僕が男と結婚するの？
いやいやいやいや、それは嫌だ！　だからこの案は却下！　絶対却下だ！

でもそうなると……巫女にも血統とかがあるから無理か。

選択肢は三つかな？

一つ目、僕が子供を産む
利点　僕は一生を外の世界で過ごせ、ずっと両親と一緒に居られる
欠点　他人の男の子供を産まなければならない

二つ目、諦めて幻想郷に行く
利点　神奈様と諏訪様が安定して幻想郷に行ける
欠点　両親と行けるか分からないので不安

三つ目、両親に弟か妹を産んでもらう
利点　家族が増え、風祝を押しつける事ができる
欠点　産まれるか分からないし、その道に進んでくれるかも分からない

最も安定してるのは一つ目か……自分の心さえ殺せばいいんだけど僕にはそんな事をできる自信は無い。

これはかなり悩むな……
うん、別に今日決める必要は無いんだ
時間はあだあるんだ、じっくり考え、後悔の無いように決めよう。

そうと決めた僕は部屋の片付けを始める
だってこの部屋、女の子の部屋のせいか散らかってるんだ。

部屋の片付けを始め、数分経った時
お母さんが部屋に入って来て僕にこう言った。

「早苗ちゃん、いつもの日課を済ませてないんじゃない？」

「日課？」

「ほら、神社の神様へのお祈り
毎日欠かしてないでしょ？」

「……あ」

「ほら、速く準備して」

「う、うん」

お母さんに言われるままに外へ出る準備を済ます。

「いってらっしゃい早苗ちゃん
すぐ近くだけど気をつけてね」

「うん、いってきますお母さん」

僕はお母さんに見送られて家から出た。

さっき神奈様と諏訪様をよりも家族を取るって決めたから気まずいな……
ど……どうしよう？

少年期編　五話【未来は過去で今】

視点　レミリア

美鈴が出て行って数分、お互いに何も語らずにいた
私から話そうにも、先ほどの敗北感から素直に切り出せない
夢幻戒魔はそんな私の感情に気付いてるのか、言いづらそうにしている。

更に数分の時が経ち、ようやく感情が落ち着いてきた
夢幻戒魔は相変わらず私を見るだけで何も語らない。

「夢幻戒魔、美鈴が出て行ってから数分経っているんだ
このまま時を過ごしても無益にしかならない、早く用件を言いなさい」

「そうだな、お互いに無言を通しても時間の無駄だ
それと、俺の事は戒魔でいい」

戒魔は軽く深呼吸をし、何かを決意して私を見る
その決意は固く、強い事が見て取れる。

「まずは質問からさせてもらう
知らないと思うが、レミレア・スカーレットかフラムドール・スカーレットという名前に聞き覚えは無いか？」

「何よその名前？
私かフランの偽物？」

「違う、知らないならいいんだ
意味の分からない質問をして悪かったな」

戒魔は軽く謝罪し、話し続けようとしていたが
先ほどの名前に興味を引かれた私は話だそうとしている戒魔を遮り、
少し怒りの声が出る。

「悪いと思うのならそいつらについて教えなさい
そうすれば許してあげるわ」

あまり話したくない内容らしく、戒魔は視線を逸らした
言ってもいいのか、言わないべきかをかなり悩んでいるように見える
私は戒魔が言葉を発するのをゆっくりと待つ。

再び私達の間に沈黙が流れた
数秒か数十秒かの時が流れ、戒魔は重い口を開いた。

「話すのは構わない
だが、先に俺の話をさせてくれ
レミレア達の事を先に話しても意味が伝わらないだろうし、混乱するだけだ」

「ふうん、なら仕方ないわね
なら速く貴方の話を終わらせなさい」

急かす私に戒魔は小さく苦笑する
なんとなく、戒魔には苦笑が似合う気がした
きっとかなり苦労した人生を送っていたんだろう
そう思わさせられる程、戒魔には苦笑が似合ってた。

「まず、この話は他言無用で頼む
俺だって半信半疑な部分も大きいんだ
下手に言いふらせば無駄な混乱を生む可能性が高い
最悪、八雲に消される可能性も否定できない」

八雲に消される
そう聞いた瞬間背筋に悪寒が走り、血の気が引いた。

そして同時に疑問も沸いた
何故そのような重要な話を私にするのか？
戒魔は何を抱え、何を知っているのか？

「そんな重要な事を私に話して良いのかしら？」

「構わないさ
レミリアなら信用できるし」

戒魔の言葉に、先ほど引いた血の気が戻ってきた
それどころか逆に興奮してきた。

それほど重要な事をこの私だけが知れる
私ならばと思って話そうとしている事が嬉しい
私だけに頼っている、恐怖や取り入ろうとする訳でもない
純粋に私を信じているという、初めての事に興奮し、心から歓喜している。

ああ、純粋な信用がここまで心地よいとは思わなかった
これほどの事を知らなかった今までがとても薄く感じてしまう。

喜びや興奮から顔が赤くなっていくのを自覚する
薄暗く、紅い部屋だから気付かれないと思うが恥ずかしい
そう思ったら更に顔が火照ってきた
それによりまた恥ずかしくなる。

このままでは悪環境になる
自分に少しだけ残っていた冷静な頭はそう判断した
悪環境から抜け出す為、戒魔に話しを振る。

「レミリア・スカーレットの名に於いて、他言しない事を誓うわ
だから安心して話しなさい」

「……感謝する」

どうやら気付かれなかったみたいね
さぁ戒魔、貴方の秘密を聞かせなさい。

「質問は全て後で受ける
信じられないような内容だが、最後まで何も言わずに聞いてくれ」

戒魔の言葉に、私は素直に頷く
信じられないような内容と言われ、どんな話なのか想像するのも楽しい。

色々な想像をしながら戒魔の言葉を待つ
少し間を空け、戒魔は私の想像を遥かに越える信じられない事を言った。

「第百十八季の夏、幻想郷は謎の紅い霧で包まれるという異変に襲われた

犯人はレミレア・スカーレット、紅い悪魔（スカーレッドビル）と呼ばれる吸血鬼だった」

「……はぁ？」

突然何を……

「当時十五歳の博麗の御子、博麗戒魔が親友の霧雨砲魔と共に異変解決に向かった
その際、同年春に博麗の御子が考案された技符規則（スペルカードルール）が初めて採用された
この異変は後に紅霧異変として記録に残る」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！
第百十八季!?　十五歳で博麗!?　スペルカードルールって一体何なの!?」

戒魔の話している内容が理解できない
ここまで混乱した事なんてこの数百年、数える程しか無いのでは？
そう思ってしまう程、今の私は混乱していた。

「質問は全て後で聞くと言っただろ
今はただ聞いてくれ」

そこまで言われ、私は少し落ち着いた
まだ頭の中ではかなり混乱しているが、先ほどよりは幾分か良い
戒魔に軽く謝罪をし、話を促す。

「続けるぞ？
同年の夕立の激しい日の夕方
博麗戒魔が紅魔館内で散歩をしていると少年に出会う

少年の名はフラムドール・スカーレット、レミレア・スカーレットを兄に持つ吸血鬼の少年だ」

先ほどの事から素直に黙っているが、頭の中で疑問という名の思考の波に襲われている
少年？　フラムドール？　兄でレミレア？　吸血鬼？　紅魔館？
戒魔は第百十八季と言った、彼は未来予想でもしているのか？
そう考えるも、知らない私や妹のフランに似た名前であるが知らない上に男の存在
少なくとも、私の血筋にそのような人物は存在していないし、当然ながら紅魔館にも居ない。

「命名決闘法案（スペルカードルール）により、博麗戒魔はフラムドールに勝利
以後、フラムドールは兄から許可を得て地上の紅魔館内での行動を許可される」

スペルカードルールはよく解らないけど、戒魔は兄に閉じ込められていた弟に勝ったという事？
決まりが有る状態での戦いとはいえ、吸血鬼に勝利するなんて……
それに、この関係……まるで私とフランみたいな関係じゃない。

「翌年、第百十九季の春
春だというのに雪が降るという異変が起こる
始めは異常気象か長い冬だと思っていた博麗戒魔だがあまりにも長い冬の為、異変と判断し解決に向かう」

春に雪ですって？
幻想郷に来てそれなりだけど、そんな事は当然あるはずが……

「同刻、博麗戒魔の親友である霧雨砲魔もまた同じ考えに至り、異

変解決に向かう
同じく同刻、寒さに苛立ちを隠せないレミレアは、自分の執事である十六夜刹那に異変解決を命じる」

さっきも出てきたけど、霧雨砲魔って誰？
新しい名前の十六夜刹那も知らないわ。

「この異変の犯人は冥界の主である西行寺幽真
庭師である魂魄妖牙に幻想郷中の春を奪わせ、西行寺妖という妖怪桜を咲かせる事を目的としていた
しかし、博麗戒魔、霧雨砲魔、十六夜刹那の三名の活躍により、西行寺妖は満開と成らずに異変を終えた
この異変は後に春雪異変として記録に残る」

西行寺の名は知っている
冥界の管理人とか、亡霊姫とか呼ばれている亡霊だったはず
だけど、そんな事をした記録が残っているはずも無い
そもそも戒魔は十年以上も先の話をしている
私の知っている記録に残っているはずがあるはずが無かった。

「同年の初夏、博麗神社にて三日毎に大宴会が開かれていた
参加者は神社に住んでいる博麗戒魔
その親友、魔法の森に住んでいる霧雨砲魔
同じく魔法の森に住んでいる……旧友？　の、アルス・マーガトロイド
紅魔館の主、レミレア・スカーレット
紅魔館の執事、十六夜刹那
紅魔館の……居候でいいのかな？　パディ・ノーレッジ
白玉楼の主、西行寺幽真
白玉楼の庭師、魂魄妖牙

以上八人だ
なお、途中から突然参加したりする隙間妖怪、八雲紫々は数に入れていない」

大宴会？　それも隙間妖怪まで参加したの？
でも、これが今まで話してた異変に関係が？

「三日毎の大宴会も、長く続けば疑問になる
そこに気付いた者達は順番に調査を開始した
そしてこの謎の原因、幻想郷に現れた最強の存在、鬼の伊吹萃麻」

鬼！？　鬼がまだ幻想郷に残ってたの！？
鬼の伝説は有名で、多くの人間の記憶から消されている
だが、私のような強い者達の中ではいまだその強さは有名だ
更に言うならば、吸血鬼に純粋な力に勝てるのも鬼ぐらいしかいないぐらい強い。

「最後に伊吹萃麻を発見した博麗戒魔が伊吹萃麻に勝利
伊吹萃麻はその後、博麗戒魔に懐いた為、博麗神社に居座る
なお、この行動の意味を問いただしてみた所
幻想郷は楽しく、賑やかな場所だと他の鬼に教えて鬼に戻ってきてほしかった
春は寒く、花見で楽しく酒が飲めなかった
騒ぎたかった等の理由を言っていた
理由は色々言っていたが、結局楽しければ良いらしい」

あー……そういえば鬼は酒豪で有名だし、騒いだり遊んだりするのが大好きだったわね
鬼が去った理由ってなんだったかしら？　後でパチェに訊いておこうかしら？

そういえばパチェに似た名前が出たわね、パディだったかしら？
今までの流れからやっぱり男なのかしら？

「なお、この事件は異変にはならなかった物の、一応記録に残っている
ついでに、この事件に直接介入はしていないが紅美龍も戦いに少しだけ参加した
参加理由はフラムドールの相手を押しつけられ、自分だけでは大変だと思ったからしい
理由は解るが自分の主を無理矢理連れ戻したりしたので後で相当怒られた、そう美龍から聞いている」

また似た名前……今度は美鈴か
戒魔の話に出てくる登場人物には知っている人物に似た名前しか出てこない
唯一知っているのは戒魔のみ、だけど最初に十五歳と聞いていたのでこの戒魔の話なのかも不明。

「他にも永夜異変や六十年周期の大結界異変、妖怪の山に外の神社が幻想入りしたり
大きな地震が起こったり、地下から温泉が湧き出たと思ったら怨霊が混じってたり
更には謎の飛行物体やら空を駆ける船が現れたり……はぁ」

「だ、大丈夫？」

暗い顔になって黄昏れる戒魔はあまりにも不気味だった
心配になって声を掛けると頷いてくれたので一応大丈夫なのだろう。

……ちょっと怖いと思ったのは内緒よ？

「俺の事はともかく、訊きたい事も多いだろ？
まだ話を続けるけど少し質問の時間にしよう、何が訊きたい？
ただし、質問は一つずつにしてくれ
一気に訊かれても答えられないからな」

「じゃあまず、レミレア・スカーレットとフラムドール・スカーレットについて教えて
私の家系にそんな名前は居ないし、紅魔館に住んでいる吸血鬼は私と妹のフランドールだけよ」

「やっぱりその二人を最初に訊いたか……
いいかレミリア、落ち着いて聞いてくれ」

最も気になった事を訊いてみたが、どうやら私が驚くような事を言う気らしい。

ふ、甘いわね戒魔
今までで十分に驚いている私が、これ以上驚くような事は無いわ！

そんな事を考えながら戒魔の言葉に頷き、次の言葉を待つ
さぁ戒魔、私を驚かせられるものなら驚かせてみなさい！

「レミレアとフラムは……異世界のお前とお前の妹だ」

……聞き間違いかしら？
異世界の私とフラン？
何かの聞き間違いよね、そう思った私は恐る恐る戒魔に尋ねる。

「……もう一回言ってもらってもいいかしら？
聞き間違いだと思うんだけど、レミレアとフラムは異世界の私とフランって言わなかった？」

「言ったぞ？
レミレアとフラム、それに美龍はそれぞれレミリア、妹のフランだっけ？　その子に美鈴の事だ
異世界のだけどな
それに、ここにはパディの女になったような奴も居るんじゃないか？
ノーレッジの名前は知ってるだろ？」

き、聞き間違えじゃなかったのね
なんだか、また混乱してきたわ……

「た、確かに居るわよ
パチュリー・ノーレッジって名前でパディなんて名前じゃないわ」

「やっぱり居るのか
こっちでも引きこもりなのか？」

「確かに引きこもりだけど……ねぇ戒魔、貴方は何者なの？
異世界の事を知ってる、未来の事を知ってる、更に話しに出てきた博麗戒魔の名前
貴方の事にも思えるけど、今の話からしてその博麗戒魔は少なくとも十六歳
他の異変が起こった時期がそこまで詰まってるとは思えないから二十歳は越えていると思うわ
でも、私の目の前に居る戒魔の名字は夢幻で、どう高く見ても十二歳が限界よ」

話している内に、段々と冷静に考えられるようになった
冷静になった私は自分の頭の中で疑問が飛び回り、それを捕まえては答えを考えていく。

この仮定を考え、違うと思えば次の仮定を組んでいく
短い時間で私の頭の中で様々な組み合わせが作られては崩される
作られた仮定の中で、最も可能性が高い答えを戒魔にぶつける。

「私が考えた予想を言うわ
戒魔、貴方は未来の幻想郷から来たのね
それも、私みたいに強力な者達が全員男の平行世界から
原因は……向こうの隙間妖怪かしら？　あの反則妖怪なら見た目を操るぐらい簡単でしょうしね」

私の考えを聞いた戒魔は唖然とした顔で私を見ていた
まるで私がここまで考えた事がとても不思議だという顔
その顔を見た私は少し苛立ちを感じた。

「戒魔、私の考えで何か間違ったかしら？
それとも、私が物事を考えた事がそんなに意外なのかしら？」

「あぁ、意外だった」

「……」

そんなに断言しなくてもいいと、私は思うんだけど？
悲しくなんてないわよ！　ちょ、ちょっとだけしか……

「レミリアの予想はほぼ正解だ
違いが有るとすれば紫々……隙間妖怪の事だけど、あいつでも年齢

を操る事は難しい
そんな簡単にできる事じゃないし、例え誰かの力を借りようにも、紫々に協力しそうな奴はそんなに居るとは思えない」

「そっちの隙間妖怪も信用が無いのね
こっちの隙間妖怪もあんまり信用できないから注意した方がいいわよ」

「忠告はありがたく受け取っておくよ
でも、俺はこっちの隙間妖怪に会う必要があるんだよ
体を元に戻して欲しいし、八つ当たりみたいになってしまうが文句も言いたいしな」

どうやら向こうの隙間妖怪は無断でこちらに送った上、無断で見た目を変えたらしい
そんな奴と同じような奴がこっちにも居るのだから文句の一つでも言いたくなるのは当然だろう
でも、戒魔は元の世界に戻りたくないのかしら?
戒魔の様子を見る限り、あまり戻りたそうにしているとは思えないんだけど……

「ねぇ戒魔、貴方は元の世界に戻りたくないの?
こっちの隙間妖怪に頼めば帰れるんじゃない?」

あちらの隙間妖怪との関係や出来事を思い出していただろう、苦笑していた戒魔の顔から感情が抜け落ちた
その瞬間、少し悪寒が走ったが、数瞬後には寂しいような……悲しいような表情になっていた。

「帰りたくないと言ったら嘘になるな……

でも、今の俺は自由なんだ
博麗の名に縛られなくなり、今の俺は少し霊力が高いだけの一般人だ
俺はこの世界で、いままでとは別の視線からこの幻想郷を見たい
元の世界で出会った人達と戦い以外の出会いがしたい
そして、自分の意志で、自分の考えで好きに生きたいんだ」

そう言った戒魔の笑顔はとても綺麗で、とても純粋な感情だった
博麗として産まれたからには、常に博麗として世界を見続けたのだろう
出会った多くの人達が異変や事件で出会ったのだろう
行動に制限も少なくはなかっただろう。

まだ引きずっているのは見て取れるが、今が充実しているのであまり気にならないのだろう
戒魔はとても楽しそうで、自然と私も微笑んでいた。

「ねえ戒魔、貴方はつい最近こっちの世界に来たんじゃないの？」

「ん？　ああ
つい最近というか、ほんの数時間前だ
それがどうかしたか？」

どうやら真っ先に紅魔館に来たらしい
そう思うと、向こうの私がどれほど信用されていたのかよく解る
もしかしたら最も近かっただけかもしれない
そんな考えも浮かんだが、そうは思わなかった。

何故なら、戒魔が最初に言った
レミリアなら信用できる……と
むこうの私が戒魔と何が有ったのかは知らない

どんな関係を築いて来たのかも知らない
でも、そのおかげで戒魔は私の所に来た
それだけで十分だ。

「泊まる所なんて無いんでしょ？
今は博麗じゃないから神社にも帰れない
私の言う条件を呑むんだったら、暫くの間泊めてあげてもいいわよ
？」

「本当か？　それは助かる
それで、条件は何だ？」

戒魔は安心が三割、驚きが三割、不安が四割という感じね
安心しなさい戒魔
私の出す条件はとっても簡単なのだから。

「貴方の体験した事を教えてちょうだい
貴方の事をもっと知りたいわ
この条件を呑んでくれるなら、数年ぐらい住まわせてあげる
どうかしら？」

戒魔のこの唖然とした顔
これを見れただけでも私は満足感を得られた。

そして続く喜びと安心したという顔
これで住まわせる元が取れそうよ。

「それはとても大変な条件だ、俺にできるかな？
レミリアはどう思う？」

私の言う答えは分かりきっているし、戒魔ももう答えは決めている
癖にそんな事を訊く戒魔
そんな戯れ言を言うぐらい、向こうの私と親しかったのだろう。

少し寂しく、悔しい
でも、今戒魔はここに居る
ならこれから向こうの私に似た私ではなく、このレミリア・スカー
レットを信用させるわ。

「戒魔ならできると信じてるわ
これからよろしく、戒魔」

そう笑顔で言った私
笑顔で言った私が予想外だったという顔をし、戒魔も笑顔で答えた。

「その条件、受けさせてもらうよ
これからよろしく頼む、レミリア」

この日、私の運命は大きく変わった
これから数年は楽しい時間を過ごせるだろう
戒魔だけじゃなく、パチェとも楽しみたいわ
できればフランも……

ふふ、先の事は後で考えましょう
今は楽しむ事だけを考えて、この数年を未来への素敵な思い出にす
るのよ！

これからの未来を心で大きく叫ぶ
さて戒魔、つまらない話なんてしたら怒っちゃうわよ？

続く

少女期編　裏五話【子孫は先祖を信仰す】

視点　諏訪子

まったく、神奈子も面倒な事を頼んでくれたなあ
確かに私は呪いは得意だし、魂を縛るような呪いだって知ってる
でも、それを早苗にするなんて……
はぁ、気持ちの整理はできたと思ってたけど、そう簡単にはいきそうにないね。

早苗を呪う手順はこうだ
まず早苗がお参りに来る（はず）
その時、神奈子が姿を現して、魂の事を隠しながらも大袈裟に危険だと言う
で、神奈子がお呪(まじな)いだと言って集中する振りをする
その間に私が早苗に呪(のろ)いを掛けて、魂に負担を掛ける
神奈子が集中を解く振りをし、早苗にお呪(まじな)いを掛けたと言う
でも、未来の不安を取り除いた代償に少しの間、体が重くなるだろうとか言ってもらう
早苗は不安になっちゃうと思うけど、あの子は心から神を信じている
真面目で素直だから未来の事を本当だと思うし、少し辛いというのが嫌だと思いながら
神奈子に感謝するんだろうねぇ……実際にお呪(まじな)いで呪(のろ)うのは私なんだけどね。

なんだか寂しい
心からそう思う。

でも、神奈子が力を私に分け与えなければ
私は早苗を呪う力が足りず、失敗する可能性が高い
それほど魂に関する呪いは難しいのだ。

私が早苗の目の前で直接呪えばいいのではないのか？
そう思うだろうが、事はそんな簡単ではないのだ。

もし私が一人で現れ、呪った場合
早苗の信仰が私に寄ってしまい、神奈子の信仰が減ってしまう
たった一人の信仰心ぐらい大したこと無いと思うかもしれないが、
その通りだ。

だが、その通りだが！　早苗は当てはまらない
早苗は私の子孫とういのが大きい
もし早苗が私を信仰したら神奈子への信仰が一気に薄れてしまう
何故なら、この神社は今は神奈子も物だからだ。

元々の持ち主へ、それも先祖に対しての信仰力は非常に高く、強い
そうなれば神奈子は一気に力を失い、只でさえ少ない信仰が無くな
ってしまうので消滅しかねない。

神奈子と一緒に出てもそれは同じ事
実際に事をするのは私で、神奈子がするのは話すだけ
私が隠れているなら早苗も気付かないだろうが、一緒に居て誰がし
ているのか気付かないほど早苗は馬鹿ではないだろう。

となると、私が隠れて神奈子がしているように見せるしかないとい
う事だ
私が表に出ない理由は解っていただけたかな？

……って、誰に話してるんだろう私
はぁ、寂しさと悲しさで疲れてるのかな？
早苗ー早く来てくれよー。

少年期編　六話【異世界での初日の終わり】（前書き）

今回はおまけが本編？

少年期編　六話【異世界での初日の終わり】

視点　戒魔

レミリアの条件を受け、数時間話していたが
そろそろ俺の体が限界らしい
俺の精神は大人だが、体は子供
疲れだけでは無く、レミリアの殺気も受けた体は想像以上に疲れていた。

「レミリア、話の途中だけどそろそろ休ませてもらっていいか？
そろそろ眠くなってきたんだ」

レミリアは忘れてたという顔をし、次いで心配するような顔になった
どうやら思った以上に気に入られたらしい
あの気高い吸血鬼がただの……でもないか、人間一人を心配してるのは想像できない事だろう。

「ああ、人間にはそろそろ遅い時間ね
ちょっと待ってなさい、妖精メイドに美鈴を呼ばせるわ」

「別に美鈴に案内させなくても妖精メイドで十分じゃないか？
門番を離れさせるのはあまり良い事じゃないだろ」

「構わないわ
どっちにしろ美鈴には貴方が紅魔館に住む事を伝えなきゃいけないしね
私が直接説明した方が美鈴も受け入れやすいでしょ？」

「なるほど」

レミリアは少し出ると言い、廊下に出て妖精メイドを探しに行った
まだ刹那が居ないから自分から動かないといけないからだろう
そういえば刹那はいつから紅魔館に居たんだ？

初めて会った時から紅魔館に居たって事は今から十年以内には必ず
紅魔館に居るはずだ
だがレミレアがあれほど信頼していた奴だ、たった二、三年以内で
はあそこまでならないだろう。

となれば今から遅くとも三年以内には現れると思うが……俺がここ
に居る事で歴史の差は変わったりしないだろうか？
俺の存在は明らかに異物のはず、いずれ俺の知っている歴史は当て
にならなくなるだろう。

そうこう考えてる内にレミリアが戻ってきた
そのまま椅子に戻り、少し不思議そうな顔をしていた。

「そういえば戒魔、なんで椅子に座ってないの？
すぐ近くにあるでしょ？」

「なんでって……紅魔館の主の前で許可無く座るのは失礼だろ？
そこら辺の作法は教え込まれたからな、何か拙かったか？」

今度は俺が不思議そうな顔をした
レミリアの顔が段々と不機嫌に染まっていく
俺……何かしたか？

「あのね……私が友人を相手のその程度の事で何か言うはずが無いでしょ？
これからは許可なんて要らないわ
私を余程不機嫌にさせない限り、好きに過ごしてもらって結構よ」

「友人？　レミリアは俺の事を友人だと思ってるのか？」

その言葉がかなり気にくわなかったのだろう
レミリアの顔が恐ろしくなるほどの怒りの感情でいっぱいになった
でもその中に悲しみの感情が見え隠れしている。

何故そんなに怒っているのか、何が悲しいのか
俺には分からなかった。

「一緒に住むし、これだけ話しても貴方からすれば友人にはならないって言うの？
私の事をどう思っているのか言いなさい！」

その言葉でレミリアが勘違いしている事に気付いた
どうやら俺の言い方が悪かったらしい。

「ちょ、ちょっと待てレミリア、お前は絶対勘違いしてる！」

レミリアの怒りは少しだけ収まったが、まだ怖い
早く説明しろ、そう眼が言ってるのがよく分かるから更に怖い。

「俺が言ったのは、レミリアからしたら俺は居候相手程度の認識だと思ってたからだ
もう友人だと思ってたとは思わなくて予想外だった
俺はレミリアの事は友人だと思ってる、だからそんなに怒るな」

自分の勘違いに気付いたレミリアは少し顔を赤くさせて黙ってしまった
恥ずかしそうにしているレミリアはなんだか可愛く、何というか…
…和むな。

「そ、そういえば戒魔は湖付近の林に出たって言ってたわね
どうやってここまで来たの？　確か能力も封印されてるって言ってたから飛べないのよね？」

どうやら誤魔化す事でこの羞恥から脱出する事にしたようだ
微笑ましく思いながらも、律儀にレミリアの質問に答える。

「林の木を霊力で強化したナイフで数本切って、それを筏にして強引に来たんだ
着いた場所が紅魔館の門とは逆方向だったから大変だったよ」

先ほどの赤い顔から一転し、心底呆れたという表情で俺を見られた
確かに強引に来たのはやり過ぎたかもしれないが、そんな呆れるような顔をしなくてもいいんじゃないか？

「あのね戒魔、門の前にちゃんと道があるんだけど……もしかして知らなかったの？」

額に手を当てたレミリアにそんな事を言われたが……俺は知らなかった
博麗神社は紅魔館の門とは方向が違う
紅魔館に行く時は大抵神社から向かっていたし、飛んでいた
紅魔館には門から入っていたが、紅魔館の前に着いてから門の方に向かうので道なんて知らなかった。

「紅魔館には飛んで向かってたからな
ちゃんと道があるなんて……はぁ、疲れ損か？　でも門の方まで向かうのも疲れただろうしな
あんまり変わらなかったかもしれないな」

溜め息を吐く俺を見てレミリアがクスクスと楽しそうに笑う
笑い話になったなら別にいいかと思い、近くにあった椅子に座る。

それにしても、美鈴は遅いな
得体の知れない俺がレミリアと一緒に居るから急いで来ると思ったんだが……

そんな事を考えてる内に段々眠気に耐えられなくなってきた
だけど寝る訳にはいかない、美鈴にもちゃんと説明しないと。

拙い、座った事が仇になった
眠気に耐えられない……もう……無理……

視点　レミリア

あらあら、戒魔が寝ちゃったわ
そんなに疲れてたのかしら？　無理させずに早く寝かせるべきだったわね。

椅子に座ったままでは危ないので戒魔を抱き上げ、ソファーに寝かせる

戒魔は身動ぎしながらも、この短い時間で深い眠りに入ってしまったらしく全く起きない。

ちょっと考えれば凄く疲れているのは当たり前ね。

突然体が小さくなって、更に封印されていた
林で迷いながらも湖に出て、筏を作ってこの島に来る
紅魔館の裏から門まで歩き、美鈴と交渉
美鈴から殺気や闘氣の一つは受けたでしょうね
精神は平気でも体は殺気には慣れてないでしょうからこれも疲労になっただろう。

私に会ってからも殺気を何度も受けている
私と戒魔が会ってから十分程度しか会ってないのに自分の正体を教える
受け入れられるか分からない相手にこれほど重要な事を話す事
それはどれだけ不安な事だろうか？　私には想像できない。

受け入れた後も私が話す事を要求する
更にさっきは怒気を当てちゃったからまた疲れたでしょうね……
これは私も悪かったわ……戒魔の状態を察せ無かったのは失敗だったわね
明日戒魔が起きたら謝っておきましょ。

戒魔の寝顔を眺めながら美鈴を待つ事数分
美鈴の足音と思われる音が聞こえたので私が自ら部屋を出る
美鈴は足音は小さくして歩くから逆に私にはよく分かるのよね。

私が扉を開けると、扉を叩こうとしてる美鈴が眼を丸めて見開いていた

自分が近づいている事に気付かれた事と私が直接出てきた事に驚いたんだと思う。

「大きな声を出したら駄目よ、美鈴
戒魔が起きてしまうわ」

私が言った事の意味がよく分からなかったのだろう
美鈴は少し首を傾け、意味を考えている。

「起きてしまうって……気絶でもさせたんですか？」

「美鈴の中で私はどれだけ短気なの？
違うわよ、戒魔が肉体的にも精神的にも疲れて眠ってしまったの
本当は貴女に案内させようと思ったんだけど、起こすのは気が引けるのよね……」

美鈴が何かに驚いたようだ
しかし、私は美鈴が何に驚いているのか全く分からない。

「お嬢様が人間の子供に気遣うなんて……明日は雨でしょうか？
は！　それなら傘を用意しないと、雨の日の門番って濡れるから大変なんですよ」

「貴女が私の事をどう思ってるかよく分かったわ
ちょっと殴らせなさい美鈴、そんな事が言えなくなるように更生させてあげる」

構えて殴ろうとすると美鈴が手を振りながら冗談だと何度も言う
説得力はあまり無いがこんな事をしてても無駄なのでそれで済まし、

構えを解く
構えを解いた事で美鈴は安心してたが、後で覚えておきなさいよ？

「で、お嬢様
私を呼んだ理由を訊いてもいいでしょうか？」

「そうだったわね
戒魔を暫くの期間泊める事にしたのよ
それで、美鈴には部屋へ案内しながら紅魔館の中を軽く紹介してもらおうかなって思ったの」

「はあ、泊める事に関してはお嬢様が決めた事なので何も言いませんが……
私が案内するんですか？　まだ門番の仕事中なんであんまり門を離れるのはちょっと嫌なんですけど」

これは真面目と取るべきか、面倒だから嫌と取るべきか
どちらかと言えば後者な気もするけど、美鈴だから前者にも取れるから厄介ね。

「今は寝てるから今度でいいわ
代わりに戒魔を部屋へ連れて行ってちょうだい
部屋の位置は私の部屋の近くでお願い」

「お嬢様、まだ知り合ってそう経っていない人間を泊めるだけでも十分なのに
更にお部屋の側だなんて……」

美鈴が急に黙ったけど……どうかしたのかしら？
何か変な事を考えてないといいけど。

「お嬢様、もしかして……気に入っちゃいました？」

「は？　ええ、まぁ気に入ったけど
それがどうかしたの？」

予想に反して普通だった
でも美鈴は私の答えが不満だったらしく、つまらなそうにしていた。

「私が訊いたのはそういう意味じゃないんですけど……もういいです
それで、戒魔少年はお嬢様の部屋の近くですよね？　隣でもいいで
すか？」

「構わないわ、じゃあお願いね美鈴」

「はい、かしこまりましたお嬢様
じゃあちょっと失礼しますね戒魔少年」

よく分からないが、どうやら不満ではなく期待外れだったらしい
その態度は気に入らなかったが、騒いで戒魔を起こすのは不本意な
ので無視する。

美鈴は戒魔に一声掛け、横抱きにゆっくりと抱きかかえる
軽々と抱きかかえて開きっぱなしだった扉からそのまま部屋を出て
行く。

「それじゃあお嬢様、戒魔少年を部屋へ置いたら門番の仕事に戻り
ますね」

「ええ、お疲れ様美鈴」

「いえいえ、それでは部屋に向かいますので扉はお願いします」

そう言って美鈴は部屋を出て行った
なんだか楽しそうだったが、何故だろうか？
少し不可解に思いながらも今後の事を考え、楽しくなってきた。

速く明日にならないかしら？
戒魔の話をまた聞きたいわ。

でもその前にパチェに紹介しないと
フランには……どうしようかしら？
そういえばフラムって男だけどフランも居るんだったわね
フラムの扱いは知ってるだろうし、それを聞いてから決めましょう。

視点　美鈴

あんなに楽しそうなお嬢様、初めて見ました
本人には自覚が無いと思いますが笑顔でいっぱいでしたね
この戒魔少年……いったいお嬢様に何をしたんでしょう？

まぁ戒魔少年は暫く泊まるそうなので、その内教えてもらえるでしょう
それまで気長に待つ事にします。

お嬢様の部屋の隣なのですぐ近くです
先ほどの部屋もお嬢様の部屋ですが、あの部屋は紅茶を飲んだりす

る寛ぎの部屋だそうです
話に出ていたお嬢様の部屋とは寝室の事です。

部屋がいくつもある理由ですが……
元々は寝室で過ごしていたお嬢様なんですが
ある日、妖精メイドが紅茶を絨毯に溢してしまいました
紅茶の匂いが好きなお嬢様でも、紅茶の匂いの中で寝るのは嫌だったらしい
ご自分の部屋の位置を変え、更に自分の部屋では飲食を禁止しましたではどこで紅茶を飲むのかというと、違う部屋を飲食用に用意したんです。

正直、部屋の無駄遣いにしか思えませんが、余程嫌だったんでしょうその妖精メイドは徹底的に扱かれ、今では館内の戦闘メイドで最も強い者になりました
下級妖怪に匹敵する妖精なんて凄いと思いませんか？

お嬢様の指定した部屋の前に着き、適当な妖精メイドを捕まえて部屋を開けてもらいました
その部屋を見た瞬間、私も妖精メイドも思わず絶句してしまった。

「ちょっと訊いてもいいですか？」

「えっと……どうぞ美鈴様」

「この部屋はいつから掃除してないんでしょうか？
ここまで汚い部屋を見るのは久しぶりなんですが」

「さぁ？　少なくとも私はこの部屋を掃除した事はありません」

そう、この部屋はとても汚かった
少なくとも数年は掃除していなかったと思う
それほど酷かった。

「今すぐ掃除しなさい！
お嬢様の客人を泊めるんですよ、今すぐ妖精メイドを集めて徹底的に綺麗にしなさい！
あ、ただし静かにですよ？　この客人は寝ているんだから」

「は、はい！　急いで掃除します！」

「声をもっと落としなさい！
起こしてしまえばお嬢様の怒りを買うと思って静かにするんです！」

「はい、わかりました！」

小さな声で怒鳴り、急いで掃除させる
この部屋を綺麗にするには時間が掛かるだろうが、それは許されないいくらこの得たいの知れない戒魔少年でも、お嬢様が気に入り、泊めるとなれば最高級の客人だ
その客人に粗相をしたとなればお嬢様が怒るのは当たり前です。

まったく……この少年はどこまで私を悩ませれば気が済むんでしょうね？
そんな事を考えながら苦笑している私も、どこか楽しそうにしていたと思います。

続く

少女期編　裏六話【自覚する恐怖】

視点　早苗（真苗）

お母さんに追い出され、神社の前まで来ました
そういえばこの頃は神様の存在を完全に信じてましたね
どんな神様がこの神社に居るのか想像してたりしてました

……見た目の話ですよ？
蛇だの蛙そのままとか想像した事なんて……ごめんなさい、有ります。

それはともかく、何でこんな所まで神気が感じられるんでしょうか？
お二人とも何かする気ですか？　そんな気配が凄く感じられるんですけど？

そんな不安を抱えながら、お祈りをする
私達親子が平和に暮らせますように……と。

その瞬間、強い神気が溢れ出した
この神気は神奈様！？
こんな時期に出た事なんて無いはず！
そもそも、神奈様に出会ったのは中学に入った頃
こんな子供に出会った事なんて無い……よね？　忘れただけなんて落ちは嫌だよ？

馬鹿な事を考えている内に神奈様の姿が現れ……って、誰この人！？
似てるけど違う、神奈様は男だ！
でも顔は似てるかも……神奈様の顔が少し女性っぽくなったらそのままこんな感じになるんじゃないかな？
てか胸でか！　背も高！　モデルみたいな美人だな……神奈様も格好良かったけど。

色々気になる事があるけど、とりあえず……

「えっと……どなた様でしょうか？」

神奈様に似てる人の肩がズレ落ちた

リアクションの小ささに脱力したのかな？
内心はかなり驚いたけど、疑問の方が強かったから態度に出なかったようだ。

「ごほん、我はこの神社の神じゃ
娘よ、貴様に話しが有り、我は姿を現した」

おかしい……この神社の神は神奈様だ
でも神奈様から神社を乗っ取られるほどの力を持った神はこの辺りには居ないはず
ではこの人は一体誰なんだ？

「失礼ですが、話の前にお名前を伺ってもよろしいでしょうか？
ぼ、じゃなくて、私は東風谷早苗です」

自分の事を私って言うのにはまだ慣れないな
早く慣れないと今後苦労するな。

あれ？　別に女の子でも僕って言ってもいいよね？
偶に居るよね？　僕っ娘って呼ばれてる人
現実に居るかは知らないけど、アニメとかには偶に居るよね？

「ふむ、名乗っておらなかったな
我が名は八坂神奈子、先も言うたがこの守矢神社の神じゃ！」

……は？　八坂様？
もしかして……僕が女になったみたいにこの過去の性別が逆なの？
まさか諏訪様も女だったり？　それどころか戒魔や砲魔も女だったり？
でも親は同じ性別だったんだけど……なんだか混乱してきた。

「はあ、それで八坂様
私に何か用ですか？　無用に神様が現れるとは思えませんし」

「おぬし……神が目の前に居るのに全く驚かんの
せっかく我が威圧的に現れ、大きく名乗ったというのに」

どうやら考えすぎたせいで驚くリアクションを忘れてたらしい
でも、女というのには驚いたけど、神気が溢れてたからバレバレ
驚く方が逆に難しかった。

「神気が駄々漏れだったので居る事は分かってましたから」

「それは盲点だったの
さて、それはさておきだ
おぬしの魂に異常がおきておる、このままでは未来に不幸が訪れる
であろう」

魂に異常？　もしかしなくても原因は僕っていうか真苗！？
まさか魂が丸ごとこの体に入ったのか？
それなら記憶も薄れてなく、僕の精神が安定してるのも納得なんだ
けど……

僕の存在が不幸になるか……
元々自分は不幸な方だとは思ってたけど、自身が不幸の原因になる
なんて思わなかったな。

「はぁ、それで八坂様
僕に何をする気ですか？
まさか、影に隠れている別の神様が何かされるんですか？」

僕が後ろの神様に気付いてた事に八坂様はとても驚いてた
そして影に隠れている神様も驚いてた
そんなに意外かな？　神気が駄々漏れって僕言ったよね？

影に隠れていた神様も自分の事に気付かれてるのに隠れてる気が無いのだろう
諦めたという感じにゆっくりと姿を見せました。

特徴的な帽子をかぶった女の子
どう見ても女の子になった諏訪様だった
半ズボンがミニスカートになってる事ぐらいしか違いが無い気がする
それぐらい諏訪様に似ていた。

「えーっと、初めまして
東風谷早苗です」

もしかしたらスカートを着ているだけで諏訪様かもしれないと僅かな希望を望んで名前を訊いてみた
答えはあまりにも予想通りで悲しかったが……

「私は守矢諏訪子」

残念、僕の希望はアッサリと潰えてしまった。

「それで、私に何をするつもりですか？
呪いをかけるならどんな呪いか教えてからにしてください
不安になるんで」

「「！？！？」」

あれー？　何でそんなに驚いてるの？
暢気にしてると八坂様が怖い顔で見てきた。
「何故そう思ったか訊いてもよいか？」
「え？　だって守矢様は呪いの専門家ですよね？
コソコソして何かしようとしてたなら隠れて呪いを掛けるぐらいしか思いつかないんですけど」
「「……」」
何故黙るんですか！？
「早苗、何で私の事を知ってるか教えてもらってもいいかい？
私の事についての文献の大半は消滅しているはずだけど」
「え？　だってそれは諏訪様が教えてくださったじゃないで……す……か」
やっちゃったー……
段々と守矢様の眼が厳しくなっていく
同時に八坂様は呆れ？　何で？
「おい諏訪子、貴様隠れて娘に会っておったのか？
どうやって会った？　近所の子供とでも偽っておったか？」
「そんなわけないじゃん、早苗に会うのは今日が初めてだよ
それに、神奈子は耳が腐った？　早苗の言った言葉を思い出してみなよ

明らかに私の名前を間違えたよでしょ？　私の名前は諏訪じゃなくて諏訪子
名乗った直後だし、例え会った事が有ってもこんな子供に呪いの事を教えるはずないに決まってんじゃん」

「分かっておるわ
それで娘よ、どういう事かしっかりと教えてもらうぞ？」

これは拙い！
逃げるか！？　それとも話すか！？

「悪いけど逃がさないよ」

ぐぅ、体が重くなってきた！？
これは……呪いか！　まさか守矢様の強力な呪いを敵意を受けながら呪われるとは……思った以上に辛いぞ！

「体が重いでしょ？
これは元々早苗に掛ける予定だった魂を縛る呪いさ
ちょっと強化して肉体にも影響が出るようにしたけどね」

守矢様を甘く見過ぎたか？
隠れている時点で呪いの準備が終わっている事を察せ無かった僕の負けか
しかも魂に呪いなんて、この二柱は一体何を考えてるんだ！？

「ぐぅぅ……何が目的で呪ったんですか？
魂に異常が出た理由は察せますが、呪われるとは思えません
動けないのは僕を逃がさない為ってのは分かりますが、元々の理由が分かりません」

「諏訪子におぬしを呪わせたのは先ほども言うたであろう？
魂に異常が出ておるから魂を縛り、器を広げて魂を強化させようとしたのだ
そのまま成長すれば大きな病になっておったか、最悪の場合は死んでおったかもしれんのだぞ？」

なるほどね、子供の体に大人の魂が入ったら器が小さすぎるって事かそれなら納得したよ、一時的に辛くても後で死ぬよりはマシだからね。

「さて、素直に話してくれるな？
それとも、このまま動けないでおるか？」

「あんまり……僕を……甘く見ない方が……いいよ？
この程度の呪いなら……どうにかなるさ」

「私の呪いを馬鹿にする気？
早苗こそ私を嘗めないでほしいな
今は弱っているとはいえ、最上級の呪いの神だよ」

知ってるよ、その程度
一体僕が何年諏訪様と一緒に過ごしたと思ってる？
人生の半分以上を一緒に過ごしたんだ。

確かにこの体は貧弱だけど、呪いの解呪方は魂まで覚えてる
戒魔に勝つ為に何百回辛い呪いの中修行したか、その時の呪いに比べればこの程度！

「この程度の呪い……

えーっと……ここはこうでしょ、これはこうで……」

「「？？？」」

そこ！　黙らない！
一人でぶつぶつ言ってる僕が悲しいじゃんか！

「くそ、この体じゃ難しいな
この程度の呪いもすぐに解けないなんて……よし、解けた！」

「「何ぃ！？」」

おお、八坂様の威厳台無し
神奈様はこんな感じだったけど、この八坂様今は演じてるだけでこっちも似たような性格っぽいな。

「あー疲れた
やっぱり初めての解呪はこの体には辛かったか」

「で、先ほどから言うておるこの体とはどういう意味じゃ？
そしてその体の本来の持ち主をどうしたのか、話してもらおうかのぉ？」

「そうだね、私の呪いの解呪方を知ってたんだからね
今の呪いは私が組んだ呪いだから解呪方は私に近い者しか知らないはずだよ
それを知ってるって事は私をよく知ってる者か、自力で解呪した事のある者だけよ」

前門の虎、後門の狼……もとい前面に八坂様、後方に守矢様

しかも疲れてるこの状態でこの二柱を敵にするの？　無理だな。

「……降参します
話すので睨まないでください」

「「なら言え、いますぐに」」

「ハモらないでください！」

私は二柱に素直に全部話した
僕自身、信じられない事ばかりだったからだ。

「ふむ、未来の早苗か……男だった」

「未来の早苗かー……男だった」

「もう言わないでください！
好きで女の子になったんじゃないんです！
だからこれ以上苛めないでくださいよ！」

「うっさい！　私の最も自信がある呪いを解呪されたんだ
これぐらいの嫌がらせぐらいさせてよ！　本気でショックだったんだよ！？
この悔しさが解る？　この悔しさが解る？　この悔しさが解る！？
！？」

「分かりました、分かりましたから声を下げてください
近所迷惑ですよ？」

「まぁまぁ落ち着け諏訪子

それで早苗、お前はこれからどうするんだい？」

これから……か。

「まだ決まってません
いくつか選択肢を考えたんですけど、それだけです
どう行動するかは決まってません」

「そうか……ところで早苗よ
その体の元の持ち主の人格はどうした？」

「さぁ？　僕もまだ状況を完全に把握しているわけではないので……
人格と記憶が上書きされたか、吸収してしまったか……どうなんでしょ？」

「あ、元の人格なら眠ってるよ？
さっき呪った時に元の魂の鼓動を感じられたからね
確かに吸収、融合してるけど、元の人格は消えないみたい」

なんですと？　いや、嬉しいよ？
妖怪は退治したけどまだ殺してないし、殺した事無いしね
もし消滅してたら殺人？

そこまで考えて急に不安を感じた
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
罪悪感に殺されそうだ！　実際に殺してない、でも消滅してたら僕が殺したに等しい。

「このままだとどうなるのだ？」

「消滅かなぁ？　だから魂を縛って器を広げようとしたんでしょ？」

「まあな、早苗が自分で解呪してしまったが……」

人殺しを回避する方法を掲示された
それを僕は……

「ならまた呪ってください！　人殺しなんてしたくありません！
体調が悪くなろうが辛かろうが受け入れます、だから呪ってください！」

みっともなくとも、自分勝手でも、ただただ縋る
罪悪感から逃げる為に……

改めて自覚した
僕が早苗の体を奪ったんだと……

「呪うのはいいんだけど暫くは無理だよ？」

「何でですか！？」

「さっきの呪いで力を使いすぎた
今回だって神奈子に力を借りてやっとできたんだからね
どんなに早くても半年ぐらい？　ギリギリ人格が消滅しないぐらいかな？」

「だろうな
だがその精神は子供、たった一人で半年も耐えられるか……」

「難しいだろうね
普通の人間でも半月が限界だと思うよ
逆に子供だから消滅寸前で収まるんだろうね
孤独を完全に理解できないから」

「そ……そんな」

例え生きていても人格が消滅していたら死んだも同然
呪いを解呪したのは……僕？
最後のチャンスを僕が奪った？　僕が殺したの？

僕が考えられたのはここまでだった
目の前が段々暗くなり、八坂様と守矢様の声が聞こえた気がしたが
そんな音は耳に入らず、僕は意識を失った。

少年期編　六話【異世界での初日の終わり】（後書き）

平行世界の簡易キャラ設定

東風谷早苗／東風谷真苗（さなえ）
現代に生きし現神人

だから現人神なのでは？
そんな感じでそのままの二つ名に決まった（何か間違っている気もするが）
最初は真苗（まなえ）だったが読みにくいので真苗（さなえ）になった

簡易特徴
言われた事は大抵何をしても上手くいくが、自分から行動する事に限り必ず失敗する謎の不幸体質
厄神様に厄を～という台詞が一話に有るが、これは厄ではなく体質
例え厄払いを頼んでいても全く効果が無かったりする

少年期編　七話【切りの無い話】

視点　戒魔

「んぅ？
……んんーーー……ふぅ
……どこだここ？」

確か美鈴に案内してもらうって話をレミリアとしてて……
あーそうか、椅子に座ってたら寝てしまったのか
自覚無しで寝てしまうなんて、自分が情けなく思えるな。

しかし……ここはどこだ？
部屋が紅いから紅魔館だとは思うんだが……

部屋を見わたしても、この部屋には必要最低限の物しか置いていない
そう思って机の上を見てみると手紙が置いてあった
また手紙か……そう思いながらも、読まねば行動が起こせないので
読む。

「えーと『戒魔へ
起きたらまず美鈴に会いに行きなさい
知ってると思うけど、一応紅魔館の案内をするように伝えているわ
食事は案内中に食堂も紹介されるでしょうからその時にでも食べれ
ばいいわ
私は知っての通り吸血鬼、夜型の生活をしてるから起きるのは夜よ
好きに過ごしていいけど、パチェ（戒魔の世界のパディ・ノーレッ
ジよ）には私から直接紹介するから図書館に行っては駄目よ

フラン（戒魔の世界のフラムドール・スカーレットよ）はどう対応するのかまだ決めてないから地下に行くのは禁止
それ以外の事で適当に時間を潰しておいてちょうだい
美鈴と話したりお昼寝をしててもいいわよ
私が起きたら戒魔の部屋に向かうから、暗くなってきたら部屋に居てね
レミリア・スカーレットより』……か」

とりあえず美鈴に会いに行くべきだな
昨日は何も食べてなかったし、まずは何か食べたい
後の事は食後にでも考えよう。

空腹をどうにかする事を決め、食堂に向かおうとするがまだ案内されていない今の俺が一人で食堂に行くのは怪しまれる
仕方がないな、素直に美鈴に会いに行くか。

でも、この部屋って紅魔館のどの辺りの場所にあるんだ？

そう思い、部屋から出てみる
右を見て、左を見る
ここは……レミレアの部屋の隣！？
という事は！

レミレアの部屋だった場所を覗いてみる
白い掛札には桃色の色で『レミリア・スカーレットの部屋』と書かれていた。

「ず、随分と可愛い掛札だな
これが少女趣味ってやつか？
女の子のまともな知り合いは霖雨しか居なかったからよく分からな

いけど」

霖雨は可愛いのが大好きだったからなー……
そういえば性別が入れ替わってるって事は、あいつも入れ替わってるのか？
霖雨が男になってる？　男の子か？　男性なのか？

霖雨は四十代になっても見た目は十代前半だったからな
男になっても若いのか？　まだ会う気は無いからどうでもいいけど。

しかし、何ですぐ隣の部屋にしたんだ？
見た目は十歳でも本来は三十歳なんだぞ
それは教えたはずだよな？

信用されてるのか、不用心なのか、意識してないのか……
レミレアから考えるに意識してないだろうな
あいつは女の子の妖精メイドの目の前で普通に着替えしだすし
その時の妖精メイドは顔を真っ赤にして思いっきり眼を逸らしてたぞ？
レミレアは気付いてなかったみたいだけどな。

もしレミリアの部屋に入って、起こしたらどんな態度をとるだろうか？
特に何も変わらないのか、顔を赤くして恥ずかしがるのか……ちょっと見てみたいかも。

って、駄目に決まってるだろう
寝ている女の子の部屋に勝手に入るのは失礼とか以前に問題行動だ。

はぁ、疲れてるのかな？

それとも男ばかりの幻想郷から女性ばかり（？）の幻想郷に来たから混乱してるのかな？
自分が怖くなってきそうだ、こっちのパディに自制術の本とか有ったら借りよう
性欲と勢いで女性を襲ったりなんか絶対にしたくない、成功するかは別にしてな。

とりあえず食事をしよう
食欲を満たして性欲を発散しよう
できなかったら美鈴に手加減抜きで……したら殺されそうだから軽い運動程度に体術の訓練を頼もう
疲れていればこんな馬鹿な事を考える気力も無くすだろう。

考えを纏め終え、レミリアの部屋の前から離れて門の方へ向かう
先ほど考えた事に罪悪感を感じながら歩いてたので、若干速度は遅かった。

視点　美鈴

そろそろお昼の時間ですが、戒魔少年はまだ来ません
それなりに早い時間に寝てたので午前中には来ると思ったんですがね。

余程疲れていたのか、それとも二度寝でもしてるのか
もしかして机の上に置いておいた手紙を読んでないとか？
戒魔少年の性格から考えてそれは無いと思いますが、可能性は有りますね。

少し様子を見てきた方がいいかな？

そう思い、門番隊に少し離れると言おうとしましたが
その前に戒魔少年が紅魔館の正面扉から出てきました。

何故か暗い気を纏っているのがちょっと怖いです
なんというか……落ち込んでいる？
そんな気がします。

「おはよう美鈴
手紙に書いてあった通り、紅魔館の案内を頼んでいいかな？」

声は普通ですが、表情がそれを裏切っています
凄く暗い顔をしてますよ？

「おはようございます、でももうお昼前ですよ
案内ですね？　今から行きますか？」

「今からで頼むよ
実は昨日から何も食べてないんだ
先に食堂に寄ってもらっていいか？」

「別に構いませんが……あの荷物の中に保存食が入ってませんでしたか？」

戒魔少年が失敗したという顔になりました
忘れてたみたいです。

こんな彼が昨日、私を大きく苦悩させた人間とは思えませんね

昨日纏っていた緊張感や油断の無い目つきとは違い
今は……こう言っては可哀想ですが情けなく、年相応の少年でした。

「完全に忘れてたよ
筏を作る時も夢中で作ってたからな
漕いでる時だって暇は無かったし、それから門前まで歩いてたしな
後は知っての通りだ」

ご苦労様ですね、戒魔少年
君ぐらいの年でそこまでできる人間は珍しいですよ
頭が良いというか、回転率が高いんですかね？

「ん？
そういえば何で美鈴が俺の荷物の中身を知ってるんだ？
見せた覚えも教えた覚えも無いぞ」

あ、そこに気付いちゃいましたか
誤魔化すのも面倒ですし、素直に教えちゃいましょう。

「実は君が寝ている時に気になって見ちゃいました
あんな強力な魔道書や呪術書を持っているのには驚きましたよ
でも金塊に一番驚きました
あ、手紙の中は読んでないので安心してください
そこまで非常識な事はしません」

そう私が言っても、戒魔少年の避難の視線は収まらない
どうやらかなり怒らせてしまったようだ
だが、私は彼を更に怒らせる事を言う。

「ちなみに、その魔道書、呪術書、陰陽術書と刃物は全て預からせ

ていただきました
返してほしければお嬢様に直接許可を頂いてください」

その言葉に戒魔少年は更に怒りを……って、あれ？
全く怒ってないどころか安心してる？
あるぇー？　どうしてでしょうか？

「なんで怒ってないんですか？」

私の質問に戒魔少年は極当たり前のように答えました。

「荷物を覗いた事は確かに怒りを感じたよ
でも、よく考えたら当然だなって思っただけだ」

それで済ませていいんでしょうか？

「門番の仕事は主の危険を減らす事だろ？
主の部屋の隣で過ごす事になった奴の荷物を確認する事は当然だし
あんな強力な本や刃物を持っているなら没収して当然だ
それに、レミリアに言えば十中八九返して貰えるだろうから心配して
てないさ」

あらら、どうやら戒魔少年もお嬢様と仲良くなったと思ってるらしい
既にそこまでお互いに警戒する必要が無いと思っているようだ
一体どんな話をすればあんな短時間でそんなに仲良くなれるのか…
…ちょっと羨ましいな。

「甘いというか、鋭い所を突いてくるというか……
でも、勝手に荷物を見た事は謝りますね、すいませんでした」

「謝らなくていいよ
怪しい奴の荷物を調べるのは当然だし
美鈴は門番として当然の事をしただけだ」

「あはは、そう言って貰えると助かります
さて、お話はここまでにしまして
そろそろ紅魔館の案内兼食事でもしましょうか？」

「そうだな、本当に腹が減ってきたよ
ところで、引き継ぎとかはいいのか？」

あ、それを忘れてました
私は急いで門番隊の子達に指示を出しておきました。

「終わりました
それじゃあ、行きましょうか？」

私の言葉に戒魔少年は頷き返しました。

私が歩き出すと、戒魔少年は後ろに続いて歩き出します
そういえば、暗かった理由を訊いてませんでしたね
後で訊いておきましょう。

視点　妖精メイド

私がお友達と一緒に大食堂お昼ご飯を食べていると
門番長さんが人間を連れて来ました。

門番長さんは時々ここに来るのでそこまで珍しくもありませんが人間も一緒？
私とお友達は揃って首を傾けます。

「ここは見ての通り大食堂です
ここでは妖精メイドや門番隊の子達が食事する場所です
私やお嬢様など、それなりに上位の者はまた別の場所で食事をしています
私は時々ここを利用する時もありますが、お嬢様は全く来ません
戒魔少年は客人なので別の場所の食事になると思いますが、門から最も近い食堂がここです
今回はここで食事にしましょう」

戒魔少年と呼ばれた人間は物珍しそうに大食堂を見回しています
大きいのに驚いてるのかな？

「俺は今後もここを利用していいのか？」

「構いませんよ
でも、その時は食事係の妖精に前もって一言でいいので言ってからにしてくださいね？
食事をする場所は決まってますし、食事は人数分用意する事が前提になっていますから
気が向いたからこっちに来た、というのは禁止です」

門番長の言葉に人間は頷いてた
この人間はお客さんみたいだけど、誰のお客さんなのかな？

「ここでこの大食堂についての注意事項です

よく聞いてくださいね」

「ちょっと待て、注意しなければならない事のある食堂なんて初めて聞いたぞ
どういう事だ？」

「それを今から話すんでしょ？
それはさておき、ここで食事を作ってるのは当然ですが妖精です
それも、何かしら失敗したり新人だったりする妖精だけです」

「……失敗妖精に新人妖精だけかよ
心配になってきたんだけど」

それは私も同じです
そんな事初めて聞きましたよ。

「優秀な子はお嬢様や私など、上の者の食事を作ります
お嬢様がここで食事をしない理由が分かりましたか？」

「理由は分かったけど、安心できる要素が全く無いぞ」

全くです、私達妖精メイドにも優秀な食事係を用意してください。

「仕方ないじゃないですか
所詮は妖精、自分勝手な生き物なんです
その中でも数少ない、優秀な子を探して選び抜くのがどれだけ大変なんだと思いますか？
門番隊の子達だってかなり激選してるんですよ
あの子達を見つけて、鍛え上げるのにどれだけ苦労した事か……」

門番隊にならなくてよかった……
あの門番長が相手なんだもの、凄く厳しかったに違いないわ
そんなのは絶対に嫌よ。

「妖精メイドだって私が育てたんですよ?
門番隊よりもこっちの方が大変でしたよ
家事はできない、掃除もできない、片付けもできない
少しでも働けるようにするまで一体何年掛かったことやら……」

私は最近入ったからそんな事させられてないけどね
道理で長い事妖精メイドをしている子の家事が上手い訳だ
門番長も厳しかったのかな?

「美鈴、愚痴なら食事をしながらにしよう
このまま立ってても邪魔になるだけだし、な?」

「そうですね……はぁ」

門番長と人間は席に座り、適当に注文してまた話し始めました。

「私だってね、頑張ってるのよ?
門番の仕事をして、自分の鍛錬もしてるでしょ?
門番隊の子達の面倒を見てあげたり、鍛えたり
暇を見つけては妖精メイドも少しずつでも育てないといけないでしょ?
お嬢様の我が儘だって私が処理しないといけないし
重要な場所の掃除だって私がしてるの
妖精メイドは役に立つ子しか本当に役立たずだし
門番隊にだって駄目な子だっているのよ
それでも私が頑張らないと紅魔館が回らない

だから精一杯頑張ってるの
なんだか微妙とか役立たずみたいって印象を持たれる事だって少なくないわ
けどね、私だって疲れるのよ？　体力は無限じゃないのよ？
他にもね……」

うわぁ……門番長が語り出した
あの人も忙しいとは思ってたけど、そこまで大変だったなんてね
でも、人間の子供にする話じゃないと思うんだけど、そう思わない？

「解るぞ美鈴
俺だって振り回されてたからな」

えええぇ！　共感できるの！？
人間の、しかも子供があの苦労に共感できるものなの！？

「戒魔少年も苦労してたんですか？」

「ああ、俺には親友がいてな
砲魔っていう魔法使いがいるんだが、そいつが突然家にやってきたと思ったら
勝手に戸棚を漁って人の茶菓子を食ったり、勝手に茶を飲んでたりしてな
しかも家主の許可も取らないまま急に宴会を始めたと思ったら突然魔法を放ったりするんだ
あいつの魔法は既に砲撃だよ、魔法じゃなくて魔砲だ、文字は発音で理解してくれ」

それ人間の子供の人生じゃないわよ！
というか魔砲！？　そこまで言えるなんて、そいつは化け物なの！？

「戒魔少年も苦労してたんですね……
そんな自分勝手な奴が親友だと大変でしょうに」

そういう問題なの!?　門番長にはそういう問題なの!?
人間の子供でしょ？　人間の子供がそんな人生を送ってる事に疑問は無いの!?

「そいつだけなら賑やかで済むよ」

済ましちゃうの!?　そこまでされて済ませられるの!?
その感性は子供なんて言われても信用できないわよ！

「そいつだけって事は他にも大変な知り合いがいるんですか？」

「はぁ、沢山居るんだ
戦闘狂の我が儘な野郎、切り裂き刃物の毒舌家だろ、引きこもりの理屈屋
切り捨て御免の猪突猛進、腹黒猫被り、胡散臭い爺
行き当たりばったりの王子様に、そいつと喧嘩三昧の火炎人間
とんでもない酒豪の馬鹿に気紛れなお坊ちゃま
騒々しい三兄弟に、鬱陶しい烏
面倒な神達に馬鹿鳥に異常なほど正義に執着する坊主等、他多数」

ここまで来ると怖いとかよりも関心するわ
この子供の人生がここまで濃いとどんな人生だったのか見てみたくなるほどね。

「それは……もう大変でしょう
毎日のようにそんなに来るんですか？」

「いや、数日置きぐらいに数人来る程度だ
でも、時々全員集まられる事がある
その後片付けとかは全部俺がするんだぞ？
偶に手伝ってくれる奴は居るけど、本当に偶になんだ」

妖精の私が言えた事じゃないけど
そいつらってどれだけ自分勝手なのよ！
というか、そいつらと一緒にいれた貴方の方がよっぽど怖いわよ！

「他にもな」

「そうなんですか……でもこっちにも」

なんだかまた語り始めた
もう嫌になった私は逃げ出した
こっちにとばっちりが来ませんように。

続く

少女期編　裏七話【さなちゃんはこちやさなえっていいます！　ございです！】

視点　早苗？

……ここどこぉ？

「あ、早苗ちゃんおはよう」

おかーさん？

「早苗ちゃんったら玄関前で寝ちゃってたのよ
何かあったの？」

「わかんない
さなちゃん昨日はいっぱいねんねしてたの」

「……早苗ちゃん、昨日と何か違うわよね？」

「？？？」

さなちゃんはいつもといっしょだよ？

「まあいいわ、
ほら、お着替えしてご飯にしましょう」

「はーい！」

よくわかんないけどご飯！

視点　神奈子

ふーむ……

「どうやら真苗の奴、自分が早苗を殺してしまったと勘違いしたな
恐怖で自分の中に閉じこもりおったわ」

「そうみたいだね
どうする？　このまま放って置いたら真苗は自我崩壊で消滅するよ？
私はそんな事したくないね」

「貴様が勘違いするような事を言ったからこうなったのであろう！
何が半年だ、我の力を再び与えれば三日も掛からず再び呪えたであ

ろうが！」

まったく、何を偉そうに
元はといえば貴様が意地を張ったのが原因だろうが。

「それは……悪かったよ、反省してる
もう二度とあんな悪趣味な真似はしないよ、約束する」

こうも素直に謝られると、なんだか複雑じゃのう
どうしたもんか……

「強い神気を浴びせれば眼を覚ますんじゃない？
真苗は神気の関知ができたし、驚くと思うよ」

「それは我も考えた
しかし、それをする為の強い神気を出すのが大変じゃろう
眼は覚ますだろうが、我らへの反動が強い
下手をすれば年単位で動けなくなってしまう」

神気の無駄遣いはできない
例え真苗が眼を覚ましても、正気に戻さねばまた引き籠もってしまう
そうなれば真苗の消滅を意味する。

「とりあえず呪いを掛けとく？
呪いを掛けておけば早くても数年は稼げると思うし」

「そうだな、呪えるようになったら前置きなんぞせずに呪ってしまえ
姿を現し、神気を無駄遣いしては堪らん」

やはり問答無用で呪うのは嫌らしい

諏訪子の顔は不満で埋め尽くされておる。

しかし、神気を無駄遣いできない事は理解しているので言い返せない
そんな焦れったい思いで一杯なのだろう。

「わかった
昨夜の呪いでかなり力を使ったから今度は儀式を使って呪う
貫徹しても十日ぐらい掛かるけど、お互いに少しでも力を残す為だ
それぐらいは我慢してやる」

どうやら真苗の事をかなり責任を感じているようだ
我も少し悪ふざけをしてしまったのでその気持ちは同じだ。

「あまり力になれんかもしれんが我も手伝おう
それならば少しは時間も短縮できるであろう？」

我の行動は諏訪子にとって予想外だったようだ
しかし、嘲るような顔はせず、嬉しそうに礼を言う。

「ありがとう神奈子
私達二柱で頑張れば七日ぐらいまで縮められるかもしれない
頑張って真苗を助けよう！」

「ああ、頑張ろう！」

待っておれ真苗よ
例え別世界の早苗でも、おぬしも立派な我らの子
早苗も真苗も必ず救ってみせるぞ！

少年期編　八話【魅了の足《ステップ》と踊り《ダンス》】

視点　美鈴

私と戒魔少年の愚痴は数時間にも昇りました
戒魔少年の話に出てきた人物は知らない者ばかり。

それに、唯一知れた名前は砲魔という名前だけ
この愚痴は戒魔少年の事を知る為にした事なんですが……
躱されたか、名前を言う気が無かっただけなのか
どちらにせよ上手くいきませんでした。

確かに交渉は得意ではありませんが、多くの経験をしてるんですよ?
その大半が通じないなんて……はぁ
門番として、交渉人として自信を失いそうです。

「ところで美鈴
俺達は何しにここまで来たんだっけ?」

「さぁ?　忘れてしまいました」

何だったかしら?
愚痴もけっこう本当の内容だし
事実だったから交渉内とはいえ、本気で話してしまいました。

「あ、思い出した
紅魔館の案内を頼んでたんだ
という訳で美鈴、紅魔館の案内を頼むよ」

そういえばそんな話もありましたね
完全に忘れてました。

「そうでしたね
では案内しますので着いてきてください」

私達は立ち上がり、大食堂から去ろうとしますが……

「へえ～？　今から案内するの？
どういう事か説明してもらおうかしら、美鈴？」

この声を聞いた瞬間、私の時が止まった気がしました。

視点　レミリア

この馬鹿門番！
貴女は、今までずっと話してただけなの！？

門番隊の子に訊いたらお昼前から館内に入って行ったと聞いたけど
もう六時間は経ってるわよ！

「美鈴、確か私は言ったわよね？
夜は私が直々に戒魔をパチェに紹介するって
私は、言った、わ、よ、ね？」

怒りから自然と声が遅くなる

自分の仕事さえまともにできないのかしら？

「お……お嬢様？
これには訳が……」

「ならその訳を言いなさい
大丈夫、私は器量が良い方なの
部下の言い訳の一つや二つぐらい、怒らずに聞いてあげるわ」

怒らずにいるのは聞くまで
聞いてから怒る可能性は当然高い。

「えっと……今回の事ですが
まず私の所に戒魔少年が来ました、時間はお昼前です
戒魔少年はなにやら落ち込んでいたそうなので早々に気分転換をしてもらおうと思いまして
引き継ぎもそこそこ、案内を始めました
最初は戒魔少年が空腹だったようなので、門から最も近い大食堂に案内しました
大食堂についての事を話していたんですが、その時に少し苦労した事を話したんです
戒魔少年は話すなら食事をしながらにしようと言い、私達は適当に注文を済ませました
そして私がちょっと愚痴を漏らしたんですが、戒魔少年も負けないほどの愚痴を言いました
そのまま私達は……」

「ちょっと待ちなさい美鈴」

「はい、なんでしょうか？」

戒魔が落ち込んでたとか愚痴を言ってたとか
気になる事もいくつか有ったけど、それは今はいい。

「貴女、もしかして最初から全部話す気？」

「そうですが、それが何か？」

呆れた……戒魔も呆れてる
これは律儀だから？
それともただのお馬鹿？

「もういいわ美鈴
貴女は門番の仕事に戻りなさい
とりあえず戒魔をパチェに紹介してくるわ」

「はぁ、分かりました」

美鈴はあまり釈然としない表情をしながら門番に戻った
中途半端が嫌なのか、それとも邪魔されたのが嫌だったのかは分からない。

「戒魔、とりあえずパチェに会いに行きましょう
案内の件に関しては歩きながらでもいいかしら？」

「ああ、レミリアに任せるよ」

戒魔に任された私は戒魔に背を向け歩き出す
私に続いて来る戒魔だが、戒魔の事だから図書館までも道のりは知ってるだろう

案内の事も、突然来た戒魔が道順などを知ってたら不自然という理由から指示しただけ。

戒魔と一緒に廊下を歩いているが、一つ不満がある
何故か戒魔は私の一歩後ろを歩いているのだ
昨夜話した友人という言葉を忘れているのだろうか？
それならば少々……いや、かなり不満だ。

「ねえ戒魔
何で貴方は私の一歩後ろを歩いてるの？
昨夜、私達は友人だって話しをしたでしょ？」

戒魔は少し思考し、何かを思い出したかのような
思いついたような顔になって口を開く。

「レミリアはまた勘違いしてるな
友人という話は理解してるし、俺だってレミリアの事は友人だと思ってる
だが、こっちの紅魔館とあっちの紅魔館では内装が少し違うんだ」

「え、だって性別以外殆ど同じだと思うって言ってたじゃないどういう事なの？」

もしかして、性別の違いから趣味も違うのだろうか？
だから内装に違いが現れたとか？

「内装が違う理由は判ってる
ある奴がまだ紅魔館に来てないからだ」

「ある奴？

来てないって事はこれから近い内に来るの？」

「断言はできないが、五年以内には現れると思う
そいつは時空間に関係する能力を持っているんだ
レミリアにも有るだろ？　運命を操る程度の能力がな」

なるほど、時空間の能力で空間をねじ曲げたのね
そして紅魔館の内部を広くしたって所かしら？
それなら内装の違いに差が有るのは当然ね。

「なら案内は必要かしら？
違いが有ると道に迷うかもしれないしね」

「そうだな、案内は有った方が助かる
主要位置は変わってないと思うが、念のためにな
それに、さっき居た大食堂の存在は知らなかったからな」

「あら、向こうでは案内をされなかったの？
向こうの私は気が利かないわね」

そのおかげで、私は戒魔を案内できるんだけど
案内するのは美鈴だっていう野暮な事言わないでね。

「仕方ないさ、レミレアは戦闘狂だからな
あいつは頭は良いし、紳士的だけど
気を利かせたり、雰囲気を感じるのが下手だったからな」

「戦闘狂！？　私が！？」

それは予想外

まさか性格にまで大きな違いが有るとは思わなかったわ。

でもそれは当然だったわね
性別が違えば人生が違う
人生が違えば性格も違う
性格が違えば環境も違う
例えあげれば切りが無いわね。

それにしても戦闘狂か……はぁ
これは少し悲しかったわ。

「レミレアに比べてレミリアは安心できて助かるよ
あいつに会ったら必ず喧嘩を売られるからな
手加減してくれるから毎回引き分けに持ってけるけど
本気になられたら困る
殺されるかもしれないという理由でな」

向こうの私は一体何を考えてるのかしら?
あぁ、お馬鹿なのね。

「レミリアはフラムみたいな性格だな
本当、安心という意味ではレミリアが当主で心から助かるよ」

「ふーん……ん?
ちょっと待ちなさい!　フラムが私に似てるってどういう意味!?」

聞き捨てならない事を言われた
私がフラムと似ている性格ってどういう事!?
もしかして私達姉妹は立場とかは同じだけど性格が真逆なの!?

「どういう意味って……言った通りだ
フラムは真面目で賢いんだ
破壊の能力だって完全に制御して使いこなしている
滅多に怒らないおとなしい奴だぞ
こっちのフラムもそうじゃないのか？」

「フランが真面目！？　賢い！？
更には能力の完全制御！？
おまけに滅多に怒らないおとなしい性格ですって！？」

フランが？　ありえないわ！
断言できる、ありえないわよ！

「……もしかして性格とか違うのか？」

「違うなんてもんじゃないわよ！
フランが真面目で賢い？
少なくともあの子の部屋は掃除なんてされてないし賢い子なんて印象は無いわよ！
滅多に怒らないしおとなしい？
普段は寝てるからおとなしいかもしれないけど、一度暴れ出したら地下の半分が破壊されるわよ！
能力の完全制御？
思いっきり使いまくって暴れてるわよ！」

何なのよこの違いは！
どういう事なの！
性別と見た目はそのままで性格だけを入れ替えてほしいわ。

「それは……レミレアに近いな

兄弟と姉妹の性格が入れ替わったのか？
調べるのも興味深いけど、今は会えない奴は調べられないか」

「そういう問題じゃないわよ！」

あー……駄目よレミリア、落ち着きなさい
このままだと私の威厳が損なわれるわ。

深呼吸しましょう
吸って……吐いて……吸って……

「フラムの方が当主に相応しい
フラムに会った事のある奴は大抵そう言うんだよな
吸血鬼としてはレミレアの方が当主らしいと思うんだがなぁ」

「なんですっ！　ごほっ！
げほっげほっ、はぁはぁ……なんですって！」

咳き込んだ時に戒魔は背中をさすってくれた
それには感謝するけど、原因は貴方なのよ？

「フラムは当主としての完成度が高いんだ
対してレミレアは何度も言うが戦闘狂
どちらの方が当主に相応しいかは一目瞭然だろ？」

それは……そうかもしれないけど
そう言われると私（レミリア）が当主で良いのか、不安になってくる。

「俺としてはレミレアの方が紅魔館の当主に相応しいと思うんだ
吸血鬼としての特徴や威風はレミレアの方が上だ

一般の当主としてはフラムだが、種族としての当主ならレミレア
俺はそう思ってるんだ」

それはそれで不安だ
つまり、それはフランに当主を渡せと言われているに等しい
そう私は感じてしまうのも無理は無いだろう。

「あ、レミリアが当主に相応しくないと言ってる訳じゃないぞ？
レミリアにはレミリアで良い所が有るしな
それに、これは比べる事じゃない
相応しいかどうかは従者が決める事、自分で考える事じゃないさ
俺は多くの主人や当主を見てきたんだ、レミリアもあいつ等に引け
を取らない
自信を持て、レミリア」

その言葉で不安は去ってしまった
戒魔には私の不安を覚られていたようだが、そんな事は気にならな
い。

我ながら単純だとは思うが、多くの主人、当主と同じように自分も
認められた
そう思うと安心できる。

戒魔の知る主人、当主と同格だと認められたのだ
多くの妖魔と知り合い、戦ってきた戒魔の言葉
説得力は高く、信用できる。

自然と笑みが浮かんでくる
今まで以上に自分に自信を持てた気がした。

「ふふ、私を誰だと思ってるの？
私はレミリア・スカーレット、傲慢で我が儘な吸血鬼、紅魔館の当主よ！」

私の気迫に戒魔は驚き、少し後ずさった
これで昨日の敗北の借りは返したわよ？

「そうだったな
レミリアこそ、この紅魔館の当主に相応しい
変な事を言って悪かった、謝るよ」

「気にしないでいいわよ
貴方の忠告は心から受け止めるわ
だから誇りなさい、このレミリア・スカーレットの心を強くしたのだから」

暫しの沈黙
そして私達は同時に笑い出した。

「じゃあそろそろ図書館に向かおう
案内を頼めるかな？
紅魔館当主、レミリア・スカーレット」

戯けたように、楽しそうに言う戒魔
私はそれに便乗する
何故なら楽しそうだからだ。

「ええ、良いわよ夢幻戒魔
私の隣で歩く事を許可するわ
精々私に相応しい、優雅な歩きをしてみなさい」

これは私の冗談
戒魔にそんな事ができないと思っているから言える事
しかし、戒魔は私の予想を必ず裏切ってくれる。

「ふ、わかった
戦闘狂の悪魔、その狗から躾けられ……もとい、教わった優雅で美
しい歩きを魅せてやろう」

はぁ？　戦闘狂の悪魔の狗？
というか躾けられたって言いそうにならなかった？

そんな事を思っていたのも束の間
戒魔は見事な足取りで優雅に歩いて魅せた
完全な作法の歩みに、思わず私の動きが止まってしまう。

「どうしたレミリア
速く行こう」

先に進もうとする戒魔の後を追いかける
勿論、私の歩みにも美しさを欠かさない
戒魔にも負けないぐらいの魅せる歩みだ。

そのまま私達はまるで踊っているかのように歩く
足だけの、歩みという名の踊り（ダンス）
観客は私と戒魔、そして擦れ違う妖精メイドだけ。

妖精メイドは擦れ違うと必ず振り返る
私達の踊り（ダンス）に見惚れ、自分もできないかと少し足を踏（ステップ）む
しかし、初めての試みに妖精メイドは足を縺れさせる

危うく倒れそうになるも、なんとか踏み留まる
そして諦め、仕事に戻る。

私達の魅了（ダンス）は止まらない
図書館に着くまでに数十人は魅了されただろう
それほどまでに美しい踊り（ダンス）だった。

最も、戒魔は妖精達を魅了していた事に気付いていないさそうだ
戒魔は必死に私に合わせていた事により、周りを見る余裕が無かったのだ。

しかし、その必死な姿を表に見せない戒魔はすばらしい
戒魔にこの足と踊り（ステップダンス）を教えた者は優秀なのだろう
そうでなければ素人の戒魔がここまでできるはずが無いからだ。

そして、図書館の前
私達の踊り（ダンス）は終演を迎えた
慣れない体で頑張った戒魔は肩で息をしている
無論、私は慣れているし体力も多いのでこの程度では息を乱したりしない。

「ふぅ……ふぅ……はぁ～……
図書館の場所は同じらしいな
これなら迷わずに来れると思う」

「そうなの？
なら次からは一人で頑張ってちょうだい
もし迷ったら適当に妖精メイドでも捕まえてくれればいいわ」

そう言いながら私は図書館の扉を叩く

パチェは神経質だし細かいので無断で入ると怒る
この図書館も一応、私の物なんだけどな……

「じゃあ戒魔、今からパチェ……パチュリー・ノーレッジに会ってもらうわ」

「もう合図してるじゃないか
そういう事は合図する前に言え」

「ふふ」

戒魔と居ると楽しいわ
私に意見する相手の数が少ないからかしら?

そんな事を考えながら戒魔を引き連れ、図書館に入る
この私が人間の子供を住まわすと言ったら、パチェはいったいどんな反応するかしら?
今から楽しみね。

続く

少女期編　裏八話【娘の異常】

視点　早苗母

昨日の早苗ちゃんと今日の早苗ちゃん
明らかに態度が違う
言葉遣いが違う
明らかに全てが違っていた。

どこの世界に親に気を遣える五歳の子供がいるだろうか？
居るかもしれないが、少なくとも私は知らない。

昨日の早苗ちゃんは大人という感じだった
少なくともあれは中学生以上の態度
高ければ成人と言ってもいいだろう。

それほどまでに成熟していた
娘に何があったかは全く解らない
しかし、隠したいようなので昨日は無視していた。

一日待って、次の日……つまり今日も同じなら何があったのか訊いてみよう
そう考えての行動だった。

なかなか参拝から帰ってこない早苗ちゃんが気になり、玄関から出ると玄関の目の前で早苗ちゃんが寝ていた
これには驚いた、急ぎ部屋に入れる。

確認してみると、どうやら寝ているのではなく気絶しているようだ
誰かに襲われたのかと考えるも、服に異常は無かった
精々霊力を消費している程度だろうか？
しかしこの程度の消費で気絶するとは思えない
子供だからという理由と霊力の消費は結びつかないからだ。

しかし今は……

「ん～？　さなちゃんのお顔になにかあるの？」

「うんん、何もないわよ
早苗ちゃんは今日も可愛いわ」

こんな褒め言葉で早苗ちゃんはご機嫌になる
昨日の早苗ちゃんは恥ずかしがっていただけだった。

明らかに異常

これは調べる必要がありそうね。

少年期編　九話【小さなお茶会】（前書き）

短い……泣きたくなる

少年期編　九話【小さなお茶会】

視点　パチュリー

レミィが珍しく図書館に入ってきた
彼女が図書館に入るのは暇潰しの時ぐらい
それ以外の理由で入る事は滅多に無い。

精々、私に直接言いたい事が有る時か質問する時だけ
紅魔館内で何かが起こった、レミィが何かしでかしたという話は聞いてない
そもそも、私が紅魔館内部の情報を得る時は妖精メイドが報告してきた時だけ
それ以外の方法で私に紅魔館の事を知る術は無い。

しかし今日は様子がおかしい
レミィが誰かと一緒に入って来たようだ
簡易だけど探索魔法で常に図書館内部を見ているから分かる
一応、侵入者対策なんだけど……

「久しぶりね、パチェ
相変わらず引き籠もりの本の虫かしら？」

レミィの嫌味だが嫌味にはならない
これは私が望んで、自分から進んでしているから
それに、外で面倒をするぐらいならば嫌味程度は受け止める。

「ええ、そういう貴女は暇そうね

暇ならそこに積まれてる本を片づけてくれない？
読み終わってるから今は不要なの」

別に気にしている訳でもないが、同じく軽い嫌味で返す
レミィは軽く返されるのも楽しいと思うから問題無いわ。

でも読み終わっているのも不要なのも本当
持っていってくれたら助かるんだけど、それはありえないわね。

「なら俺が片づけようか？
暇潰しにもなるし、どこに片付ければいい？」

「魔道書は南方向に三つ先の上から四段目の左から十八番目から二十三番目まで
翻訳書は東方面に二つ先の下から二段目の一番右
それから……というか、あんた誰？」

今気付いたんだけど、誰よこの子供
なんでレミィが人間の子供と一緒に居るのかしら？
というか、何で連れてきたのよ、面倒事みたいな感じだから遠慮したいわ。

「俺の名前は夢幻戒魔
これから暫く紅魔館で世話になる
今日、レミリアから君を紹介すると言われたんだ
初めまして魔法使い、これからよろしく頼む」

子供は礼儀正しく、態度が大人だった
それならば私も大人を相手にしているようにする。

「ええ、初めましてね
私の名前はパチュリー・ノーレッジ
貴方の言葉通り、魔法使いよ」

軽く自己紹介をし、レミィに視線を送る
それだけか？　もう用は無いな？
そんな意味が込められた視線に、レミィは少しだけ嫌そうな顔をした。

どうやら追い返すという意味と感じたらしい
否定はしないが、無駄に居座られるのはご免被る。

私は一人で本を読んでいたい
でも、お茶とかを淹れる召使いとかは欲しいわよね……妖精メイドには期待してないけど
面倒だけど、私の淹れる紅茶だって自分で言うのは何だけど、十分美味しいのよ？

「あ、図書館で思い出したんだけど
レミリア、俺の本を美鈴が預かっているって話しを聞いたんだが返してくれないか？　ナイフはどっちでもいいけど」

本？　門番が没収した本というのが気になった
本ぐらい没収する必要は無いのではないのか？

ならば何故没収したのか……
高確率で魔道書や呪術などに関する本だと予想される
だが、それをこんな子供が何故持っているのかという疑問も沸いてくる。

「変ね……そんな報告は受けてないわよ？
どんな本なのか教えてくれない？」

「魔道書、陰陽術書、呪術書を各三冊の計九冊だ
どれもそれなりに力の強い本だった
まぁあまりそういう本に詳しくないからどこまで凄い本なのか分からないが……
でも俺に渡してた奴が渡した奴だからな、かなり強力な本か初級者用の本だと思う」

いったいどんな奴に貰ったのかしら？
しかも内容が曖昧すぎる、何故読まないのかしら？
私は戒魔の事がよくわからないわ。

「渡した奴って、誰なの？」

「紫々だ」

誰よ？
私の前で私の知らない人の話題をしないでほしいわ。

というか、レミィだってそんな人物を知っているとは思えない
レミィが人間に興味を向ける訳ないでしょ、そんな事も分からないのかしら？

「あぁ、紫々ね
なんか納得できそうよ」

「知ってたの？
こんな子供にそんな本を持たせた奴の事は気になるわ

教えてくれないかしら？」

気になる点を言うが、レミィは教えてくれそうにない
この態度で更にその紫々という人物が気になってきた
レミィが言い渋るような相手、どんな人物なのか想像するだけでも楽しい。

「パチュリーだったな、悪いけど紫々については教えられない
レミリアには事情を説明する為に教えたけど、それ以外の人に教える気は無いんだ」

戒魔の言葉は明らかに不自然だった
そこまで隠すような者の事を何故レミィに教えたのか
そして事情とはいったい何なのか
何故レミィを選んだのか。

最後のは紅魔館の当主だからという理由が思い浮かぶが可能性は低いだろう
紅魔館は悪魔の館、そんな場所に一人で来るのは危険が大きすぎる
幾ら大人のような態度をしていようが、子供が一人でここまで来るだけでも大変なのだ
戒魔の頭ならばその程度、理解できないはずがない。

事情については教えてもらわない限り知る事はできないだろう
別にその人物について話す必要があったのかさえ疑わしい
言わなくとも説明はできたのではないだろうか？

私は戒魔はとても頭の良い、礼儀のなっている人間の子供と認識している
そして、それはおそらく間違っていないだろう

むしろそれぐらいでなくてはレミィの客人に値しない
レミィに気に入られる必要もあるが、その事情とやらで何を話したのやら？

「とりあえず本は返させるわ
でも、その本をどうする気なの？
読んで修行でもする気？」

「それも有るが、パチュリーと読もうと思ってな」

何故私と？
私を選ぶ理由が分からない
確かにこんな図書館で本を読んでいるのなら頭が良いと思うかもしれない
確かに私は魔法使いだが、魔道書はともかく、陰陽術や呪術にはそこまで興味は無い。

「面倒だから嫌よ
一人で読んでちょうだい
魔道書は読み終わったら貸してくれると嬉しいけど」

もしかすれば既読したものかもしれないが、それでも構わないどのような内容であろうとも、その紫々という人物がわかるのだから。

「貸すのは構わないけど……
修行に使うから長い時間使う、いつになるか分からないぞ？」

「はぁ？　魔道書で修行ってどういう意味よ
魔道書は魔法のやり方を覚え、後は自分で使っていく物よ

基本的に術式等を覚えれば役に立たなくなるわ」

例外は魔法の触媒になる特殊な魔道書
数は少ないし高価で滅多に手に入らないが、効果は非常に強力
魔法の威力を上げる、成功率を上昇させる、消費魔力が減る
それぞれの効果は微々たる物だが、その微々たる量が全てを変えるのだ
小さい効果だからといって馬鹿にしてはいけない。

「それは知らなかった……俺はその本を使って修行でもしろそう言われただけだからな（手紙でだけど）」

呆れた、戒魔は何も分かっていなかったようだ
どうやら魔法に関して素人らしい。

「まぁとにかく、その本が必要なのね？
妖精メイドに取ってくるように指示してくるから少し待っててちょうだい」

そう言ってレミィは私と戒魔の前から去っていった
私達の間に、少しの沈黙と気まずい雰囲気が流れる。

「パチュリー」

「何？」

「魔法を教えてくれないか？
基礎とかだけでもいいからさ」

「嫌よ」

「そうか……」

会話終了
しかも、私が断ったから更に空気が悪くなった。

断った理由は非常に単純
面倒だったからよ。

「「……」」

気まずいわ……この空気は少し嫌ね
レミィから根暗だとか言われるけど、空気の悪い場所が好きという訳ではないのだ
はぁ……レミィ、早く帰ってきなさいよ。

お互いに無言で待つ事約五分ほど
ようやくレミィが帰ってきたわ
つまらなそうな顔をしていたけど、どうかしてのかしら？

「おかえりレミリア
遅かったけど、何かあったのか？」

「いいえ、妖精メイドが見当たらなかっただけよ
そっちこそなんだか空気が悪いじゃない
いったい何を話したらそうなるのよ……」

呆れ顔になられるが、これぱかりは仕方がない
私達はまともに会話をしていないのだから。

「パチュリーに魔法を教えてくれって頼んだんだが
断られたんだ、それからお互いに話す事が無くなってな……」

一々話す必要は無いと思うんだけど
別に困る事じゃないからいいけどね。

「別に魔法ぐらい教えてあげてもいいじゃない
どうせ本を読んでるだけなんでしょ？
パチェは頭が良いんだから、偶には別の事に頭を使いなさいよ」

前言撤回、困る事だったわ
どうしてレミィに言ったのよ。

「嫌よ、面倒だもの
それに魔法ならレミィが教えなさいよ
一応使えるでしょ？」

「そうだけど……パチェの方が私より上手じゃない
それに私の魔法は偏ってるから教えるのに向かないわ」

それも確かに一理あるわね
でも、教える程度の知識はあるでしょうに……
何故そこまで私に教えさせたがるのかしら？

「パチュリーが嫌なら別にいいよ
説得しようとしてくれてありがとうレミリア
無理に教えてくれるぐらいなら自分で何とかする
パチュリーも無理を言って悪かったな」

本人がいいのなら私には関係の無い話

謝ってもらったし、既に気にする事では無くなったわね。

「べ、別に戒魔の為だけにパチェを説得しようとした訳じゃないのよ
パチェは引き籠もってばかりだから少しは動かさせようと思ったから
らなのよ」

誰よこの子、本当にレミィなの？
何だか恥ずかしそうにしてるし、顔も少し赤い
図星を突かれて悔しがってるのかしら？
それともお礼を言われて喜んでる？

「それはそうと、レミリア
本を持ってこられるのにはどれぐらいの時間が掛かるんだ？」

「え、ああ本ね
美鈴に確認と取ってから取りに行かせるてるから……まぁ十分程度
でしょ」

紅魔館は広いからそれぐらい掛かるわね
門番は足が速いからもう少し早くなるかもしれないけど
その程度は掛かるでしょうね。

「十分か、それまで暇だな
パチュリー、図書館に紅茶を淹れる場所はあるか？
あるなら淹れようと思うんだが」

はぁ？　戒魔が紅茶を淹れるの？
レミィも少し意外そうに見てるから知らなかったのね
和服を着ている戒魔が紅茶……なんだか似合わないわね。

「一応あるけど趣味程度のしか無いわよ？
それでも良いなら構わないわ
精々美味しく淹れてちょうだい
不味ければ全部呑んでもらうわ」

「望むところだ
で、場所は？」

私はその方向に指を向ける
戒魔は無言で頷きそちらに向かって行った。

騙されるなんて事は考えていないのかしら？
素直なのか馬鹿なのか警戒心が薄いのか
それとも初めて会ってそう時も経っていない私を信用したのか
少ししか話してないけど、変わった子供というのは理解できたわね。

「レミィ、戒魔は何者なの？
あれは子供じゃない、大人と同格よ
人間として、あの存在は滅多にありえないわ」

「戒魔との契約であり、約束だから言えないわ
でも、戒魔は警戒するような人間じゃないのは確か
だから戒魔に魔法を教えてあげてくれない？」

契約？　約束？
レミィだって会ってから精々数日のはず
それなのに人間の子供に警戒を完全に解いているだけではなく信用
している。

吸血鬼としてではなく、紅魔館の当主としてでもない

レミリア・スカーレット本人として戒魔の事を信じたのね？
それなら私は親友の事を信じよう
そして親友が信じている戒魔を信じよう。

例え信じなくとも、戒魔が害になる事は少ないと思うし
私やレミィに害が無い限り、特に気にする必要は無いわね。

でも……

「元々教えてくれるなんてあまり期待していなかったわ
警戒するような人間じゃないのも予想できていた
だからそこまで気にしなくてもいいわよ
でも、魔法を教えるのは面倒だから嫌」

私達はお互いに顔を見合わせ、薄く笑った
レミィだって私が戒魔を教える気は無いと分かっていた
だからレミィも笑うのよ。

「レミリア、パチュリー
紅茶を淹れ終わったぞ、みんなで一緒に飲もう
って、何二人で笑ってるんだ？」

戒魔が小首を傾けて問う
それがまたおかしくて私達は笑う。

小さい笑みだが、久しぶりに笑った
こんな事だけど、戒魔には少しだけ感謝してあげよう
でも魔法は教えないわよ？　面倒だから。

「なんでもないわ
さ、レミィ、いつまでも笑ってないでお茶にしましょう
私達も久しぶりに会ったんですもの、無粋な時間にしないよう楽しみましょ？」

「ふふ、そうねパチェ
戒魔に会ってまだ二日だけど、全く楽しませてくれるわ」

「だから、何の話なんだよ？
言いたくないなら別に言わなくてもいいけどさ」

そうは言っているけど、少し寂しそうよ？
でも、楽しそうな顔をしている
こんな時間も偶には良いかもしれないわね。

そんな事を考えながら、戒魔も淹れた紅茶を飲む
あ、けっこう美味しいかも。

続く

少女期編　裏九話【知るが幸せか知らぬが幸せか】

視点　神奈子

諏訪子の面倒を見ながら早苗の様子を見ていると
何やら視線を感じた。

誰の視線だと思っていたが、すぐに判った
早苗の母、彼女が私を見ていた。

おそらく、昨日の早苗だったのが原因の一つだろう
今日は元に戻っていたが、昨夜は一人で玄関前で気絶していた
更に霊力が減った事にも気付いたのだろうな。

となれば、早苗が最後に寄った神社が怪しいと思うのは必然だろう
この神社には神が存在しているのは彼女とて知っている

だから我を睨んでおるのだろう。

確かに関係していない訳でもないが、我らは無罪だぞ？
誰が悪いとも言えない、強いて挙げるのなら運の悪かった真苗だろうか？
それとて本当に偶然、少なくとも我に非は無い。

だがそんな事はあやつには関係無い
娘に異常があったのだ
原因や非の場所なぞ、そんな物は後回し
今は原因を知っているだろう我を睨むしか無い。

このままでは面倒にしかならんの
本当の事を教えても良いだろうが、それでは真苗が隠した意味が無い
真苗の事だ、心配を掛けるのは不服であろう。

しかし、教えなければいつまでも我に付きまとう可能性もある
邪魔であるし、面倒だ。

最も問題になる事は諏訪子の邪魔をされる事であろう
それだけは何としてでも止めなければならん。

仕方無いの……真苗の事を教えるか
あの気迫、教えなければいつまでも諦めるとは思えん。

我に訪問するのはおそらく夜
昼間はあの者にもしなければならない事が多いのでな。

さて、あの者が来るまでにどう話すか考えねばならんな
全く……真苗の奴め、我に面倒を押しつけおって

起きたら酒でも酌して貰わねば割に合わんな。

そんな事を考えながらも、諏訪子の手伝いをする
もし、万が一真苗を消してでも早苗を助けると言われれば
何としてでも止めてやる。

真苗よ
消滅しておったら許さぬからな！

少年期編　九話【小さなお茶会】（後書き）

平行世界の簡易キャラ設定

レミリア・スカーレット／レミレア・スカーレット
紅き悪魔

名前に悩んだ内の1人だが、最後にはアッサリと決まったのでそこまで悩んでいない
捻りも何も、全く同じ二つ名である
別の二つ名が思い浮かばない自分の発想力の低さが悲しい

簡易特徴
凄まじいまでの戦闘狂で戦っていないと落ち着かない
頭は良いのだがそれを発揮する気が全く無い
発揮できる唯一の機会はどれほど手加減すれば相手が死なないか程度
従者であり、彼の執事である十六夜刹那までもがそんな駄目主人を何とかしたがっていた
しかし立場的にも実力的にも上位に君臨するレミレアに文句を言える者は少なかった
それを唯一崩したのが紅霧異変で異変解決の担当をした博麗戒魔
戒魔との出会いにレミレアは落ち着きを見せ始めた
その後、戒魔と戦うのを最も楽しみにしており、その為に紅魔館の主として仕事を真面目にこなすようになった
なお、戒魔はここまでの事実を知らない
なので戒魔は、レミレアは自分にだけ戦いを求めて付きまとう面倒で厄介だけど、楽しそうにしているので憎めない奴
そう思っている
頭が良い事を知っているのはレミレアが戒魔に色んな自慢話をした

時に、自分の知らない事まで知っている事が多かったりしたからである

少年期編　十話【理解ができた事実】

視点　レミリア

三人で開いた小さなお茶会の中
無粋にも邪魔してきた者が居る。

邪魔者には退場を願おうと睨んだのだが、妖精メイドが手に持つ物が気になった
彼女が持っているのは大きな九冊の本。

あれは私が持ってこさせた戒魔の本かのかしら？
妖精メイドは気付いていなかったけど、悪い事をした気分になる
しかしそんな事を考えている暇も無く、戒魔が妖精メイドから本を受け取っていた。

戒魔は妖精メイドに礼を言い、そのままお茶会の席に戻ってきた
妖精メイドは礼を言われると思っていなかったのだろう、少し恐縮していた。

確かに、主人の客人が妖精程度に礼を言うのは想像できないだろう
例え見た目が子供だとはいえ。

「それが例の本？　かなりの力を持ってるじゃない
とてもじゃないけど初心者用じゃないわ
最上級並の魔道書よ
それほどの魔道書、この図書館に何冊あるか……」

そんなに凄い本なの？
確かに強い魔力は感じるし、力も強いとは思うけど……
私だってこの図書館の本を全部把握している訳じゃない
だから分からないのかしら？

戒魔の顔を見てみると驚きの他に、呆れと諦めの感情が窺える
それは当然だろう
この本は紫々が戒魔に鍛えるなら使えと渡した本
それなのに鍛えるはずの本が上級者向けならば呆れるしかない。
諦めは紫々に期待した自分が馬鹿だったという感じだろうか？

ここまでされれば誰だって呆れるし諦めるだろう
私もきっとあいつは駄目だと、そう思って諦める。

「まぁ……とりあえず読んでみるよ
きっと理解できないと思うが、読まなければ始まらないな」

「そうね、それほどの魔道書、例え理解できなくとも読むだけで力になるわ
もし、万が一少しでも理解できたら魔法を教えてあげるま、どうせ無理でしょうけどね」

パチェが戒魔をからかう
戒魔もからかわれた事に気付いているので苦笑している。

あのパチェが理解できないだろうと言うのだ
戒魔が理解する事は不可能なのだろう
そう思った私は、どうせなので普段なら絶対に約束しないような事を言ってみた。

「なら私からは、この私直々に口付けを与えてあげるわ
戒魔、私からの口付けが欲しければ精々頑張るのね」

冗談だと分かっている戒魔でも驚いた顔をする
この戒魔の顔を見るのがとても楽しい。

パチェも冗談なのは理解している
面倒が嫌いな自分が戒魔の面倒を見るだなんて事を言ったのだ
戒魔が理解する事は不可能だと思っている事
そんな事を私に伝わらないはずが無い事も理解している。

だからパチェだって悪乗りして一緒にこんな事を言ってしまうのだ。

「ふふ、それじゃあ私とレミィのご褒美に差ができてしまうわ
なら私からは更に勉強用の魔道書を贈ってあげる」

戒魔だって当然ながら冗談だと理解しているが
ここまで言われれば少し悔しそうな顔になる。

自分だって無理なのは分かっているが
ここまで苛めなくてもいいのでは？

きっとそんな事を考えているはずだ
しかし私達が楽しそうにしているので水を差すのも嫌なのだろう
戒魔自身も楽しんでいるので言う気にもなっていない。

だがこのままでは終わらないので誰かが止める必要がある
この場でこの流れを止められるのは……

「はぁ、読むから少し黙ってくれ
それとパチュリー、万が一読めたら頼むからな」

戒魔は少し真面目に読もうとしてるのだろう
軽口も混じっているが頼むのは真剣だった。

パチェは楽しそうな顔をして頷く
できるものならやってみろ
お前には不可能だよ！
顔がそんな事を言っているように見える
だがそれは絶対に間違いではないだろう。

何故なら私も同じ思いだからだ
鏡を見てみればきっと私もパチェみたいに楽しそうにしているだろう。

でも、私の口付けに関しては何も言わないの？
冗談で言ったとはいえ、言った後は少し恥ずかしかったのに……

私達の楽しそうな雰囲気を察した戒魔は少し拗ねながらも本を開く
私とパチェは黙り、静かに戒魔を見ている。

戒魔は本を静かに眼を通している
そして次の項（ページ）を開き、また眼を通す。

まだ一割しか眼を通していないだろうが、戒魔は本を閉ざす
少し惚けた顔をしながら、戒魔は口を開く。

「レミリア、パチュリー」

「何？」

「無理だったでしょ？」

パチェ、その嫌味は少し酷いわよ？

「この魔道書の三項目（ページ）を開いてくれ」

三項目（ページ）？

私達は謎に思いながらも、戒魔に渡された魔道書を開く

これは……古代文字だろうか？

残念ながら私には難しすぎて読めなかった。

それなりに魔法に通じている私が読めないのだ

戒魔が読めるはずが無いだろう。

パチェは読めるらしく、眼を左右に振りながら読んでいる

眼の動きが速すぎて本当に読んでいるのか疑わしいぐらいだ。

「これは相当昔の魔道書ね

魔女狩りの時代に書かれたんでしょう、古代魔女が好んで使用していた文字を使われているわ

私でも解読しながら読むのに時間が掛かりそうよ

それに、この本には軽い封印も掛けられているわね

簡単に解析してみたけど、読むには一定以上の魔力とそれ相応の知識が求められているわ

この中でその条件に当て嵌まるのは私だけでしょうね

それで、このページがどうかしたの？

内容を読んでほしいのなら読むけど」

どうやらとんでもなく強力な魔道書らしい
私の場合、魔力は足りるが知識が足りない
戒魔の場合は魔力は……微妙、知識は全くじゃないかしら？

そのページに戒魔が興味を示したのか
それともとりあえず読んでほしいのか
どっちなのか考えていると、戒魔から想像を覆す言葉が発せられた。

「そこ……転移に関する内容だよな？」

どうやら戒魔の魔力は基準値以上だったようだ
でも、戒魔が使うのは霊力よね？（御子だし）

例え戒魔の魔力が基準値以上なのは紫々が魔力を与えたかもしれない
しかし、そうすると今度は知識が足りないだろう
会ってそれほど話していないが、戒魔の魔法に関する知識が高いようには思えない
そもそも、博麗の御子の家系から魔法が発生するという事がありえないだろう。

「……読んで」

そう言ってパチェが戒魔に本を渡す
とても険しい顔で戒魔を睨みながら怒りを堪えていた。

戒魔は戸惑いながらも本を受け取る
そして声を出しながら読み始めた。

「……転移魔法
転移魔法とはその場から動かずに目的地に行く魔法である

瞬間移動と思われがちだが、転移魔法は瞬間移動ではない
転移魔法は対象者を粒子状にし、目的地まで送り再構成する魔法である
粒子状になった対象者は死ぬ事は無いが、放っておけば消滅する
それを阻止するのが使用者である
使用者は対象者を粒子状にした時、対象者を再構成する為、多大な集中力を必要としている
集中力が乱れると、粒子状になった対象者は再構成できず、散っていき消滅してしまう
粒子は曖昧な存在であり、対象者を目的地まで送っている途中も粒子は散っている
それを阻止するのは使用者の魔力である
使用者は魔力で対象者を保護し、粒子状の対象者が散るのを防がねばならない
……パチュリー、まだ読むのか？」
読み疲れた戒魔は途中で読むのを放棄し、パチェに読むのを止める許可を求める
だがパチェは戒魔の言葉を聞いていなかった。
「どういう事？　私の知識が戒魔に……子供に負けている？
私は既に九十年は生きている魔女なのよ、それなのに私よりも圧倒的に速く解読できる子供ですって
これまでの私の知識と時間は一体何だったの？
しかも、私でも難しくて簡単に理解できない転移魔法の仕組みについて読めるですって？
それに……」
パチェが壊れたように一人で黙々と考えている
とてもではないが話しかけられる雰囲気では無い。

戒魔もそれを察して私に助けを求めるような視線を送ってきた
でも私だってどうしようもない
それを視線で戒魔に教える。

戒魔は諦めたように頭を振り溜め息を吐く
本を閉じ、大きく振りかぶって？

「この理論から察するに、転移魔法は戒魔も言う通り瞬間的な移動では無く
極小化からの単なる移動魔法になっていだぁ！」

パチェを殴った……ってえぇぇぇぇ！？
戒魔ってこんな強引な奴だったっけ！？

「ちょ……ちょっと戒魔？
どうしていきなり殴ったの？」

戒魔は全く悪いとは思っていない顔
その顔から当然のように言う。

「突然暴走し出した奴は殴って正気に戻す
向こうで暴れまくる馬鹿を止める時は常にこうしていた
こうすれば全員冷静になってくれるから助かるんだ」

暴れる奴を殴ったら怒りだすんじゃないの！？
しかも全員冷静になるって、どんな殴り方をすれば冷静になるのよ！？

案の定、パチェは突然殴られた事でかなり怒っている

いくら冷静さを失っていたからといっても、殴られて黙っている程パチェは優しくない。

「ひゃいま、ひょちゅぜんにゃぐるにゃんて……ひたたごほん、戒魔、突然殴りゅなんてどういうちゅもり？もちょい……じゃなくちぇ……うー」

殴られた衝撃で舌を噛んだようだ
凄く痛そうだし、噛みすぎて言葉が酷い。

というかかなり痛いらしく涙目にもなっている
怒っているパチェには悪いけど、睨んでいる姿は凄く可愛いわよ？

「ごほん、戒魔、確かに私は冷静を欠いていたけど
突然殴るのは関心しないわ
そういう時は一先ず声を掛け、揺すったりするのよ
そうすれば相手も気付くはず」

見た目が子供の戒魔だからパチェは子供に説教するような言い方をする
内心は結構怒ってるんだろうけど、相手が子供だから抑えている。

対応や態度をだけを見てみると戒魔は大人だからパチェは怒ったのだしかし、実際の戒魔の姿は子供
悪い事をした子供を叱るのは大人の仕事とでも思っているのだろう
説教しているパチェの顔には既に怒りは無い
簡単にとはいえ、子供に説教をした事で冷静になったのだろう。

だが戒魔はパチェよりも上手だった。

「確かに一声掛けたり、揺すったりすれば気付くかもしれない
でも体験上、パチュリーみたいな頭の良い奴は殴った方が安全なんだ」

「どういう意味かしら？」

あ、またパチェが怒り出した。

「頭の良い奴が考え事をしているのを邪魔すると
怒鳴ったり、相手を邪険にしたりするんだ
酷い時は相手を貶したりする
それを体験した事が有るし、知り合いにそれで落ち込んだ奴が居るんだ」

それとこの暴力に何の関係が？
もしかしてその加害者って……パディ？

「パチュリー、それをしないと断言できる自信があるなら次からはそうする
でも、被害者である俺からすればそれぐらいしないと怖いんだ
会ってそんなに経っていないのに殴ったのは悪かったと思う
それは素直に謝らせてもらう、ごめん」

戒魔は本当に素直に謝った
しかも頭まで下げられたのだ、パチェは戒魔を許す
許さねば、自分は子供が頭を下げてまで謝ったのに許さなかった酷い大人になってしまう。

そこまで考えていなくとも、大人げない行為はパチェとて不本意
理由はともあれ、突然殴った事は反省して謝っているのだ

ここで許さねばパチェは酷い奴と言われても仕方がない。

「はぁ、わかったわ、もういいわよ
私も大人げなかったし、確かにそうなってしまう可能性もあるわね
次からはもっと周りの事を考えてから考え事をするわ」

なんかあんまり解決してない気もするけど……
本人達がいいならいい……のかしら？

「それよりパチュリー、約束は守って貰うぞ」

「「約束？」」

あ、パチェと重なった。

「この魔道書を理解できたら魔法を教えてくれるんだろ？
確認した時に頷いたのをちゃんと見たからな」

「「……あ」」

また重なったけど、そんな事はどうでもいい
冗談で言ったけど本当に読めるとは思ってなかった
パチェは戒魔に魔法を教える気は全く無い。

しかし約束は約束
パチェは約束は契約と同じように見ている
だからパチェは約束は必ず守る
パチェが約束する時は契約と同じように大事な事か
先ほどの冗談のように無理だと思っている事だけ。

だが今回はその無理だと思っていた事が成功した
この事により、パチェは戒魔に魔法を教える必要がある。
と、パチェは思っているだろう。

「……はぁ、分かったわ
例え冗談で言った事とはいえ、約束は約束
あんまり長く教える気は無いけど、構わないわよね？」

「ああ、それで十分だ
魔法に自分から触れるのは今日が初めてなんだ
何からすればいいのか全く分からなかったからとても助かるよ」

「「初めてだったの！？」」

「あ、ああ
それがどうかしたのか？」

「どうかしたも何も、私とレミィの話を聞いてなかったの！？
古代魔女の文字を使われていて、私でも解読しながら読むのに時間が掛かりそうなのよ！
更に、この本には軽い封印も掛けられていて
読むには一定以上の魔力とそれ相応の知識が必要なの！
それなのに初めてで読めるなんて……自信を無くそうよ……はぁ」

パチェが落ち込んでしまったわ
落ち込むのは仕方がない気もするけど、ここまで落ち込むのには驚いたわ。

戒魔もパチェの話に驚きながらも意外そうに見てるし

それに珍しいものを見たという顔もしてるわ。

私はそれとは別に気になった事があった
パチェは気になるけど、先に自分の知りたい事を訊く事にする。

「戒魔、その文字も特殊らしいけど
どうして読めたの？」

「ん？　あの文字か？
砲魔が魔道書と解読書を持って来て、解読しておいてくれ！
って言って置いていったんだ
暇だったから暇潰しにでもなるだろうと思って解読したんだ
数ヶ月も解読してたからか、あの文字を解読書無しで読めるようになったんだ」

「なら魔法に触れるのは初めてじゃないわよね？
さっき初めてって言ったのは嘘だったの？」

「いや、本当だ
あの時は内容は気にしなかったし、全く興味が無かったからな
自分から触れようとしたのは今日が初めてなんだ」

「なるほど」

確かにそれなら読めてもおかしくないだろう
でも戒魔の魔力はどうなのだろうか？
更に魔法に関する知識だって足りているとは思えない。

「なら魔力や知識に関してはどう説明するの？
貴方にはどっちも足りてるとは思えないわ」

戒魔は困った顔をしている
やはり自分でもそれは気になっているようだ。

「それは俺にも分からない
でも、紫々が俺にこの本を渡した時点で謎は解ける気がする」

紫々は隙間妖怪……あの胡散臭い妖怪が男なだけで性格がほぼ同じ
なるほど、それなら納得ね！
つまらない内容だけど……

「とりあえずパチュリーを現実に戻そう
なんだか現実逃避しているみたいだ
さっきから言動がかなり怪しい」

そう言われてパチェに視線を移してみると
何やら呟きながら焦点の合っていない視線で歩いていた。

どうやら自分の最大の自信だった知識と魔力が負けたのが相当悲し
かったらしい
戒魔の言う通り、あれは完全に現実逃避だった。

パチェを正気に戻す為、戒魔は再び本を持ってパチェに近づき……
大きく手を振り上げ、先ほどよりも勢いを付けて振り下ろした。

続く

少女期編　裏十話【母と神】

視点　神奈子

夜になり、早苗が寝た
そして母が動き出した。

我はあやつの前に姿を現し、お互いに向き合う
そのまま時間が過ぎていく……
先に口を開いたのはあやつだった。

「お久しぶりです、八坂様」

「久しいのう、未咲(みさき)よ
今宵の訪問は早苗のことだな？」

「はい、娘の事で知っている事を教えてもらえないでしょうか？」

未咲は我の前で頭を下げ、貢ぎ物として日本酒を渡してきた
我はそれを受け取り、一つ頷いて話す。

「我が知っている範囲で良ければ全て話そう
しかし、あまり他言してはいかんぞ」

未咲は暫く考え、静かに頷く
それを見た我も小さく頷き、早苗ではなく真苗の事を話し出した。

真苗の事を語り終えた我の前で未咲は静かに立ち上がる
我の前に立ち……我の足下で土下座した。

「息子の事……よろしくお願いします」

未咲は……真苗を自分の子供だと認めた。

早苗が消えるかもしれないという部分で焦り、恨みを向けた
しかし、早苗の事で絶望し、己が消滅しかけているのを聞き、未咲
は泣いた。

そして真苗の昔の話になり、最後には認めた。

「真苗を起こすと早苗が危うくなるかもしれぬぞ？」
軽い脅し、実際は二重人格のようになると思われる。
「構いません、早苗だけでなく、真苗も私の子です
どんな事があっても、私は子供を否定しません」
先ほどは知らなかった故に恨みを向けた
しかし知った今ではそんな事はしない
強い意志を持って真苗は自分の子供だと言い切る姿に
我は母親の強さというのを垣間見た。
「真苗の事は我と諏訪子に任せておけ
お主は早苗の面倒をしっかり見ておくのだぞ？
体調を崩せばそれだけで魂に負担が掛かるのだからな」
「わかっています
早苗の事は私が……
八坂様、それと見えませんが守矢様
息子を、真苗をよろしくお願いします」
座ったままの未咲はそう言って再び頭を下げた
ならば我はそれを受け止め、成功させる為に努力するのみ！
「ああ、真苗を助ける為、力を多く使う
少しでも可能性を上げたければ頻繁に来るがよい」
「はい、八坂様
それでは、今宵は失礼いたします」

立ち去ろうとする未咲は少し離れた場所でまたも頭を下げ、今度こそ立ち去った

我は未咲が見えなくなるまで見届け、そして神社内に戻った。

未咲の事は諏訪子にも話してやろう

真苗を認められたのだ、奴もきっと喜ぶだろう。

少年期編　十話【理解ができた事実】（後書き）

転移について
一応納得できそうな理論を書きましたが、完全に思いつきですですので、そこにはあまり突っ込まないでくれると助かります

少年期編　十一話【師弟関係？】（前書き）

短い……もっと頑張れよ自分

少年期編　十一話【師弟関係？】

視点　戒魔

「くぉぉぉぉぉぉ……」

頭を抑えながら呻いているパチュリー
そして潰れているパチュリーを心配して声を掛けているレミリアは無視し
俺は自分の手に持っているこの魔道書について考える。

紫々は俺がこの世界に来ると思っていたとは思えない
あの手紙を完全に信じる気は無いが、それでも未知の世界だったのは事実だと思う。

紫々の性格と普段の行動を考える
あいつがこんな性別の入れ替わっている世界を放っておくはずが無い！
絶対にあるはずが無い！
なら未知の世界で完全に運任せの世界移動だったと思われる。

ならば何故、俺にこんな制限の付いた魔道書を渡したのか
予想では、これほど力を持った魔道書が他人の手に渡ったら悪用されるかもしれないから
他にもその世界の常識を覆すかもしれない事が書かれているかもしれない。

例えば魔法技術が全く発展していない世界だった場合

その世界に新たな技術を広め、その世界の基礎を根本から覆す事になってしまう
世界を変えるかもしれない物をあいつがそのままにしておくはずが無い……か。

魔法に限らず、呪術にしろ、陰陽術であろうと
全てが使い方を誤れば危険なのだ。

今回は魔法の使用者でも閉鎖派のパチュリーだったから良かったものの
行動派の砲魔だった場合、何をしでかすか……常に油断できない状態になる所だった。

教えたり師事する相手は選ばないと……何をされるか分からない
次からは慎重に行動するべきだな。

考えを纏め終え、レミリア達の方を見てみるとパチュリーが拗ねていた
そしてレミリアがパチュリーを慰めているのだが……どうしても違和感が拭えない
向こうでは逆だったからだろうか？

レミリアが俺の方を向き、眼が合った
レミリアの眼が俺に何かを訴えているが、嫌な予感しかしなかったので眼を逸らした。

強い恨む様な視線を感じ、諦めてレミリアを見てみる
睨みながらしっかりと訴えているのは凄いと思うが、そんな技術はいらないと思いたい。

（自分の自慢である知識が負けたのが悲しかったらしいわ）

（俺にどうしろと！？）

（知らないわよ！）

視線だけでの会話終了
何故こんな技術を持っているかって？
これぐらいできないと宴会という名の暴走から逃げられなかったんだよ……
穏便派の奴からすれば視線での会話なんて基本技術だ。

まずは殴った事を謝っておく事にした。

「パチュリー、殴って悪かった
謝るから落ち込むのを止めてくれ」

パチュリーは無反応
俺もレミリアもこの反応には困ってしまう
それでもこのまま放っておく訳にもいかないので声を掛ける。

「あー……パチュリー
俺は本当に初心者だからパチュリーのような様々な知識のある人が必要なんだ
まだまだ未熟者だから熟練者に師事しようと思っていた
俺にこれらの本を渡した奴は自分で頑張れって言われた
でも、俺の前には優秀な知識人が居るんだ
幻想郷で生き残るには力が必要だし、暫くは紅魔館に住むんだ
何かが有った時に紅魔館を守れるように努力しておきたい
だから俺に魔法を教えてくれ、師匠！」

とりあえず頑張って持ち上げる事にしてみた
言っている事は事実だが、少し誇張している気もする
でもこの言葉に嘘偽りは全く無いという意志表示はする。

事実、俺は嘘を言っているつもりは全く無い
これからも師匠と呼ぶのは少し遠慮したいが、必要ならば呼んであげようとは思う。

だが、パチュリーに反応が無い
横に居るレミリアは……少し顔が赤くなってないか？

視点　パチュリー

戒魔ったら……私を持ち上げて元気を出して貰おうって気持ちは嬉しいけど
あんなに強い意志の籠もった声で私達を守るだなんて言われるとは思わなかったわ。

ほら、レミィなんてそんな事を言われた経験が無いから顔を真っ赤にさせて……
あんな純真な言葉を強い意志で言われれば、あまり男性と会話した事の無いレミィには効くでしょうね
相手が子供とはいえ、男性が女性に向かって守ると言われれば、吸血鬼でも嬉しいのね。

吸血鬼の方が人間より強いから尚更効いたのかしら？

今は弱い戒魔が自分の為に強くなろうとしている
きっとそれが嬉しいんでしょうね。

少しだけからかってみようかしら？

そう思ったら即実行
口をレミィの耳元に寄せ、戒魔に聞こえないぐらいの小さな声で囁く。

「さっき、魔道書が読めたら口付けをしてあげるって言ってたわよね？
私達を守ってくれるって言ってるんだからお礼にでもしてあげたら？」

「ーーーっ！！！」

「ちょ、どうしていきなり倒れるんだ！？
レミリア！？　大丈夫かレミリア！？」

レミィは言葉にならないような声を出し、倒れかける
そこにすぐさま戒魔がレミィを支え、倒れるのを防ぐ。

その行動には関心するが、支え方に問題が有った
戒魔は正面から抱きかかえるようにレミィを助けたのでお互いの顔が目の前になっている
つまり、私の言葉で戒魔を意識してしまっているレミィにとって、この距離は鬼門なのだ。

「ひゅぃ！　大丈夫、大丈夫だから離して！
顔！　顔が近いわよ！」

レミィが慌てている意味が理解できていない戒魔は不可解な顔をしながらもレミィを離す
無論、離してもレミィが倒れないように気を遣いながらだったが。

戒魔は唐変木という奴なのかしら？　単に鈍いだけ？
それとも自分の言った事の影響に気付いていないのかしら？
最後のが合っている気がするわ。

真っ赤な顔で呼吸が荒くなっているレミィ
どうしてそうなっているのか理解できていない戒魔
それを観察している私

このまま放置してても楽しそうだけど、レミィが可哀想なので止める事にする
私が戒魔に魔法の事を離せば落ち着くでしょう。

「戒魔、魔法はちゃんと教えてあげるからレミィにちょっかいを出すのを止めてあげて
このままだとレミィが倒れてしまうわ」

「魔法を教えてくれるのは嬉しいけど、何故レミリアが倒れるんだ？
というか、俺がいつレミリアにちょっかいを掛けた」

苦笑しながらの私に、やはり不可解だという顔をした戒魔
その傍らには助かったと安心しているレミィ
このままだとまた悪戯したくなってしまう
戒魔には悪いが、早々にお帰り願おう。

「今日は解散しましょう

戒魔だって紅魔館に来て数日なんでしょ？
体を休めて、落ち着いてから教えてあげるわ
そうね……三日後からでいいかしら？」

「うーん……できればすぐに始めたいと思ってたんだけどな
パチュリーがそう言うならそうしておくよ」

あら、意外と素直ね
先ほどの言葉から少し焦っているようにも思えたけど
どうやら思った以上に冷静というか、自分を知ってるようだ。

戒魔を魔法使いにするのも楽しそうだけど、きっと無理ね
呪術や陰陽術も平行して修行するんじゃないかしら？
もしかしたら術だけでは無く、体も鍛える為に美鈴の所に行くかもしれない。

まぁなんでもいいわ
細かい事は三日で決めましょう。

「それで、これからどうするつもりなの？
私は戒魔への授業の事も考えないといけないから出て行ってほしいんだけど」

「出て行く必要は無いと思うけど……
でも俺の為なら言う事を聞かないと駄目だなわかった、俺は夕食を食べて、紅魔館の中を把握する為に散歩でもしてくる」

「レミィは？」

「へ？　わ、私？」

自分に話を振られるとは思ってなかったのだろう
まだ完全に落ち着いてないレミィは相変わらず混乱している。

「私は……そうだ！
戒魔、貴方の食事は大食堂とは別の食堂で食べるのは美鈴から聞いてるかしら？」

「ああ、美鈴からそう聞いてる
大食堂や外食する時は一言言ってからしろって事も聞いた」

「今から夕食にするつもりなんでしょ？
その別の食堂に案内するわ
私も食事にしたいと思ってたしね」

思いつきで誘ってる癖に白々しい
顔が引き攣ってるわよ？　自爆した事にも気付いたみたい。

戒魔を意識しているから離させてあげる為、態々別々に聞いてあげたのに
それなのに自分から戒魔を誘って再び近くなってしまった
自爆した事に気付いたレミィは緊張して硬くなってしまってる。

が、戒魔は気付かない
どんな場所なのか想像して楽しんでる。

その後、軽く別れの言葉を交わし、レミィと戒魔は図書館から出て行った
少しの寂しさを感じながら、これからの日々を楽しみにしている自

分が居る。

戒魔の修行を手伝ったり、レミィをからかったりする日々
図書館に籠もってばかりだったけど、そんな日々も悪くないかもしれない。

そんな事を思いながら、私は読みかけだった本を読み始める。

あ、戒魔に本を片付けに行ってもらってから帰ってもらえばよかったわ。

続く

元世界編　新一話【今彼はどこに居る？】

視点　砲魔

いつもと同じ日々
いつもと同じ空
いつもと同じ幻想郷
いつもと同じ博麗神社

今日は久しぶりに戒魔の所に遊びに出かけるつもりだ
何日ぶりかな？　五日ぶりだろうか？
最近新しい茸を見つけたからその実験に着きっきりだったからな
こんなに期間を空けたのは久しぶりだぜ。

そんな事を考えながら準備を済ませ、博麗神社に向かって飛び立った。

博麗神社の場所はもう十五年以上通い続けているのだ
今更迷うはずが無く、少し速さを出して十数分で着いた。

……あれ？　この時間だと普段は掃除してるはずなんだが？
おかしいな……霊夢が泣き出したとか？
でも泣き声が聞こえないから寝かしつけてるとかか？

考えていても仕方がないので縁側に座り、少し時間を潰す
戒魔の事だ、俺に気付いていないはずが無い
何をしているかは知らないが、終わったらこっちに来るだろう。

そんな普段と同じ事を考えつつ、待つ事三時間ほど
いくら何でもここまで遅いと不安になってくる。

もしかして戒魔に何か有ったのか？

そう思うと心配になってきて神社内に入って行く
神社内は静かで、誰も居なかった。

だが、何か感じる……長年妖怪達と戦ってきた俺の感がそう言っている
今、この神社内に誰も居ないけど、何かが居る。

そんな事ができる奴がそう多いとは思えない
俺は直感で誰なのか言ってみた。

「さっきから俺を見てるのは……紫々か？」

俺がそう言った瞬間、空間が歪み、悪趣味な眼の映る世界が顔を見せる
相変わらずの登場の仕方だと思うと同時に、またこいつかと呆れも感じさせられる。

「ご名答、さすがだね砲魔」

「お前の言う事は分からんから黙れ

戒魔の留守中に勝手に入ってると怒られるぜ？」

「それは無いね
僕だってここに居たくてここに居たんじゃないんだ」

はぁ？　留守でも預かってるのか？
でもその寂しそうな顔は何だ？

紫々が分からないのは相変わらずだが、今日もよく分からん
魔法の森の毒茸をそのまま食ったのか？

「僕が待っていたのは君だよ、砲魔」

俺を待ってた？
だがそれなら自分から来た方が圧倒的に早いだろ？

「君は言葉で言っても信じない
だから現実と真実を自分で見て貰う
そして、過去ではなく未来を見てわねば困る
その為に僕はここに居るんだ」

相変わらず言いたい事がさっぱり分からん
現実と真実？　過去じゃなくて未来？

「そんな事はどうでもいい
それより、戒魔はどこだ？
ここまで遅いと少し気になるぞ」

「はぁ、あまり考えずに答えを求めるのは悪い癖だよ？
君は頭は悪くないんだ、少しは自分で頑張ってみなよ

答えを得たなら神社で大きな声で僕を呼ぶんだ
そうすれば、僕は君の進む道を少しだけ教えてあげよう」

溜め息を吐かれ、また意味の分からない事を言いながら紫々は隙間の中に消えていった
俺に何を考えろって言うんだ？　もう少しぐらい教えてくれてもいいだろうに。

俺も溜め息を吐き、神社内を探して回る
もし居なかったら帰ろうと思ってる。

そして明日もまた来よう
紫々の言う事は分からんが、自分で調べないといけない気もするしな。

そんな事を考えながら
俺は絶対に帰ってこない戒魔を探し続けた
その姿は、事情を知る者から見れば滑稽にしか映らなかっただろう
……

視点　神奈

昨日から真苗が帰って来ぬなぁ……
博麗の奴の所にでも泊まったのか？
それでも真苗なら必ず一言は言ってからにするはずじゃが……

「おい諏訪、ちょっと博麗神社まで行ってこい！

もし真苗が居なければそのまま探せ」

「はぁ？　何勝手な事言ってるんだ？
真苗だってもう三十路、別に泊まるぐらいいいじゃないか
もしかしたら、女と一緒だったりしてな」

ケタケタと笑う諏訪に気力が抜けていく。

ふむ、諏訪の言う通りだな
真苗とて既に三十歳、女の一人や二人居ても変では無いか
現人神とて真苗は人間、三大欲求からは逃げられんだろう。

「そんなに心配しなくても大丈夫だって
なら後三日ぐらい待とうよ、それで帰ってこなかったら探そう
それならいいんじゃない？」

「それもそうだな
では暇潰しにでも碁でもせんか？」

我の誘いに諏訪は乗ってきた
こやつも暇なのだから当然であろう。

「いいねぇ、何賭ける？
僕は……これだぁ！」

諏訪の取り出したのは呪いにより弱った蛇……って、蛇骨（じゃこつ）うぅ！！！

「諏訪！　貴様、蛇骨をどうするつもりじゃ！」

蛇骨は我の部下の蛇

なかなか頭の良い、可愛い娘（おなご）なのだ。

「こいつは僕の部下の蛙を食おうとしたんだ
このまま放っておくと死んじゃうよ～？」

「き……貴様ー！」

「さあ神奈、君は何を賭けるんだい！」

貴様がそのつもりなら、我にも考えがあるぞ！

「我が賭けるのは、こいつじゃ！」

「蛙朗（かえるろう）ううぅ！
神奈！　蛙朗を返せ！」

「我に勝てたら返してやろう！」

「絶対に負けない！」

「それはこちらの言葉じゃ！」

ここまでしているが、当然ながらお互い冷静
普通にするのはお互い飽きているのでごっご遊びをしているだけだ。

当然ながら勝っても負けても、お互いに人質は返す
これは礼儀であり、暗黙の了承なのだ。

「「ぶっ殺してやる！！！」」

……ちょっと本音が混じっているのは内緒だぞ？

諏訪もちょっとだけ殺気が混じってるから極一部は本音だろうが……

……

少年期編　十一話【師弟関係？】（後書き）

次話は少し時間が飛びます

少年期編　十二話【君の名前は？】（前書き）

まだ登場してなかった彼女が登場します
さて、誰でしょう？

少年期編　十二話【君の名前は？】

視点　戒魔

俺が紅魔館に住み始めてから約十日
約束通り、パチュリーは俺に魔法を教えてくれてる。

まだ初心者用の簡単な魔法しか教えて貰ってない
あの魔道書に書いてあった転移の魔法は教えてくれないのか？
そう訊いてみたのだが、お前にはまだ早いと言って教えてくれなかった。

詳しい説明を求めると、どうやらあの魔法は最上級の難易度だと言われた
なんでも、パチュリーもできないという話だ。

今は魔法の修行をしているが、呪術や陰陽術の修行もしたい所
陰陽術は今までも使ってので何とかなりそうだが、呪術は違う。

陰陽術と呪術は似ているように思えたのだが、本を読んで全く違うという事を理解させられた
魔法と違い、魔力ではなく霊力を使うのは同じだが、対象や範囲が大きく異なる。

陰陽術は自分や自分の近くに強く作用し、呪術は相手や遠距離まで効果が及ぶ
陰陽術では自分を強くしたり、中範囲までの広域攻撃（夢符「封魔陣」や夢符「二重結界」）

後は高威力の収縮弾（霊符「夢想封印」）など、制御や細かい操作が重要だった。

それに対し呪術は敵を対象にするので成功しているのかいまいち分からないし、どんな感じになるのかも実感できない
効き具合も対象の精神力や耐性で大きく異なるので博打要素に頼ってしまうのは致し方ない事
まだまだ初心者の俺には賭けの要素が強すぎるのでまだあまり練習などしていない
……呪ってもいいような相手も居ないしな。

呪いは後回しにする事にした
自力での習得は難しい上、師事できそうな相手は諏訪しか居なさそうだが諏訪はまだ幻想郷に来ていない
次点としてパルキィも考えたが、入り口に近い場所に居るといってもやはり地下の住人
あまり接触したいとは思わないし、彼の機嫌を損ねては殺されかれない。

それはさておき、昼食も食べ終わったので図書館に向かう
パチュリーの教えは厳しいが、強くなっている事を実感でき、教え方が丁寧なので覚えやすい。

それに、どうやら俺には魔法に適正があったらしい
才能はそこそこ期待できるが、魔法に集中しなければ宝の持ち腐れとも言われた
しかし、俺は慣れ親しんだ陰陽術を捨てる気にはなれず、体術も捨てる気にはなれなかった。

だが大きな問題が発生した

魔法を習っていて知ったのだが、どうやら俺には陰陽術の才能があまり無かったらしい
同じ事を勉強するのは二度目だというのに魔法よりも習得が遅いのだ。

毎日のように修練を積んできたのになかなか上手く扱えなかったのは才能が無かったから
それに気付いた瞬間、少し目眩がするぐらい苦悩したが、それでも捨てられなかった
魔法を習う時間よりも短く、密度が薄いが頑張って陰陽術を勉強している。

なお、最近の生活についてだが
朝は美鈴に体術を習い、昼からパチュリーと魔法の勉強
勉強が終わり、夕方まで余った時間は陰陽術の修行
夜になればレミリアに付き合って話したり、食事をしたりしている
数は少ないがレミリアからも魔法を教えてもらう事もある
そして深夜前ぐらいまでに終わった場合、また陰陽術の修行を少し行う
深夜になったら寝て、同じ事を繰り返す
これが俺の紅魔館での生活だ。

そんな事を考えてる内に図書館の前に着いた
いつもと同じよう、扉を叩き、勝手に入る。

相変わらず本を読んだ体勢で過ごしているパチュリー
パディもだったが、こいつらはいったい何時寝ているのだろうか？

「来たぞパチュリー
今日もまた頼む」

「……今日はいつもと違う事をするわ」

そんな話は聞いてないが……パチュリーにも何か考えがあって言うのだろう

特に疑いもせず、パチュリーの指示に従って準備をする。

今日指示された準備は魔方陣を書く事だった

途中で何度か間違いや誤字を指摘されながらも準備を終わらせる。

「さて、準備は終わったが何をするつもりなんだ？」

「そういうのは準備中、もしくは準備前に訊きなさい

今日は貴方を手伝う者を喚び出すつもりよ

具体的に言うと使い魔ね」

「使い魔って……俺には無理じゃないのか？

使い魔を使役している間は霊力、それか魔力を常に消費しているって言ってたじゃないか

確かに俺の霊力も魔力もそれなりの量だと思うが、使い魔を維持し続けられるほど多いとは思えない」

使い魔の種類も多いので使える奴もあるかもしれない

種類の例を挙げるなら、紫々と藍のような半自立型の式神（使い魔？）

パディの賢者の石のような物的使役使い魔

レミレアのサーヴァントフライヤーのような一時的召喚型使い魔

妖牙のような半霊も一応使い魔に分類されるだろう。

俺が使えそうなのは実力は低いだろうが、紫々と藍のような半自立

型だろうか？
能力が低い者なら召喚型使い魔もできるかもしれないが、手伝う者
という言葉に当て嵌まらない
物的使役使い魔は消費が激しいので使える自信が無い
半霊のようなのは言わずもがな、不可能である。

「自立型のを喚び出すつもりだから問題無いわ
主人の魔力にそこまで影響されない、逆に主人の能力によって実力
が上がるという召喚術よ
だから問題なのは戒魔の実力ね」

「まさかとは思うが……戦って実力を示し
それで力尽くで屈服させて使い魔にしろっていう事か？」

「話が早くて助かるわ、その通りよ」

「無理を言うな！
俺の実力はまだまだ低い、そんな事はパチュリーだって知ってるだ
ろ！」

俺の全盛期に比べれば低すぎて話しにならない
当時の実力者と戦えば数秒で殺されるに決まってる
その程度の実力しかない事は自分で一番解ってるのだ。

「何か勘違いしてるかもしれないけど……今の戒魔の実力ならそこ
らの下級妖怪程度なら対等に戦えるわよ？
紅魔館の門番隊の妖精とも少しは正面から戦えるんじゃないかしら？
あまり見ないから断言できないけどね、まだ教えて短いけど私はそ
の程度の力は付けさせたと思ってるわ
それに、喚び出すのは下級の悪魔、名前も無いような産まれたばか

りの最弱級の者よ」

「名前の無いって……そんな奴がいるのか？」

産まれて一番最初に貰えるのは名前だろうに……

「この召喚の為に悪魔について調べてみたんだけど、悪魔というのは実力を持って初めて名前が与えられるそうよ
実力は低いし、召喚で喚ぶのも簡単だから偶に人体実験のような実験台で喚ばれる事もあるらしいわ
そんな事をする奴は少ないけど、そういう時は運が悪かったと思って諦めるしかないそうよ
実力の高い者を喚べば殺されるし、弱い者は格好の獲物なのまあでも、召喚後でも契約前なら逃げる事ができるから多少安全だけどね（騙されなければ……ね）」

「……しないよな？」

人体実験……悪魔体実験か？

「しないわ
今回する事は悪魔を喚んでの主従契約
主人の実力が従者の実力を上げる魂の契約
永遠に誓う、一生続く呪いに近いものよ」

それって……一生俺はその悪魔と一緒に生きろって事か？
それに、相手の人生も俺の生きている間ずっと縛る事になるよな？
更に魂の契約って事は絶対服従の、本当に呪いのような契約じゃないか。

「拒否する！
俺はそんな契約に同意する気は無い！
相手の人生を縛り、従属させるような事は絶対に嫌だ！」

それは前の俺に近い事になる
一生を博麗として生き、幻想郷に一族全体を縛られて生きる
当時は自覚は無かったが、博麗から外れ、無関係になり冷静に博麗を考える。

あの時の生活や生き方を否定する事はできないが、あれは監禁に等しい
窮屈な生き方だったと思うが、博麗としてはあの人生しか知らなかったのだから仕方がない。

やはり娘の霊夢も同じ道を進むのだろうか？
そう思うと悲しいが、例え砲魔でも紫々には逆らえない
育て方や躾け方はともかく、確実に博麗の巫女として成長させられるだろう
砲魔は反対しそうだが、やはり紫々の指示に従うしかない。

願わくば、霊夢も自由に生きて欲しい……無理だろうが
こちらの霊夢も自由に生きて欲しいが……無理だろうな

ともあれ、俺は人生を縛られて生きてきた
そんな俺が他人の人生を縛るような事は絶対にしたくない。

「大丈夫よ、これは同意した者しか喚べないから
同意するのは実力が低く、才能も低い、本当に落ち溢れの駄目な奴よ
だから主人の実力で自分の強さが変わる、自分の強さを諦め、一生を捧げる事で強さと名を得る

そんな方法でしか名前を得られない者が存在するからこんな召喚術が存在するの
それに、この魔法は悪魔が創ったから改変できないの、だから一方的に呼び出すなんて都合の良い事はできないわ
相手の人生を縛るのには違いが無いけど、相手はそれを理解し、同意してるから悪意のある契約じゃない」

それでも……納得できない
というか、そんな駄目な奴を俺に契約させるつもりだったのか？
確かに主の実力で力が変動するとはいっても、そこまでの奴が強くなれるのか疑問なんだが……

「納得できないという顔ね
ならこういうのはどう？　召喚するのは変わらないけど、呼び出した相手に契約する意志を確認する
そして戦い、実力を示し、改めて自分でいいのか、契約に不満は無いのかを確認する
それでもなお、相手が同意するならば契約する
嫌がったのなら還し、改めて違う悪魔を喚び出す
これなら一方的じゃないし、無理矢理の契約でもない
これぐらいなら構わないでしょ？」

どうやら召喚は決定事項であり、喚ぶ事は確定された未来のようだ
それに気付いた俺はもう諦め、力の抜けたように項垂れながら頷く。

パチュリーだって俺が嫌がっている事には気付いてるだろうが
それでも、何を考えているのか、俺の気持ちなんて無視して最後の調整をしている。

問答無用でするつもりだったのなら最初から訊くな！

とも思うが、先に尋ねたのは俺だし、知らないよりは知っていた方が良かったので文句は言えない
そもそもパチュリーの方が立場的にも実力的にも優位なので必ず負ける。

「じゃあ始めるわ
呼び出す悪魔の実力はかなり低いから突然襲われる事は無いでしょうけど、一応注意しておきなさい
準備はいいわね？」

「注意はするし準備は必要無いさっさと始めてくれ」

既に投げやり状態の俺に苦笑し、パチュリーは魔方陣の方を向く
魔方陣を向いたパチュリーの顔には既に苦笑の顔は無く、真剣な表情で魔方陣を見つめていたが……

「なあパチュリー、召喚なんて難しい事をするのに魔道書の補助はしないのか？
こういうのは失敗すれば全く違うものが召喚されるかもしれないんだろ？」

「この程度の召喚で失敗した試しは無いわね
魔道書の補助が無くてもどうにでもなる程度の召喚だから余裕さえあるわ
油断はしないけどね」

パチュリーが少し黙り、一拍後、呪文を紡ぎ出す
パチュリーの魔力と言霊の力により、魔方陣が静かに、淡く白く光り出す

当然ながら風の無い図書館の中でパチュリーの服が何故か少し浮かぶ
魔方陣の近くには重力が無いのだろうか？
それとも魔方陣から風が吹いているとか？
小さいがとても気になった謎だった。

そんな余計な事を考えている間にも召喚術は続いている
段々と魔方陣の光の発光が強くなり、辺りにパチュリーの魔力と思
われる魔力が吹き荒れる
どうやら先ほど服が浮いたのは魔力が原因らしい。

くだらない疑問は解消され、魔方陣がとても強く発光した
その瞬間の光が強すぎた為、俺は眼を閉じてしまう。

眼を閉じる程の光も収まり、眼を開けると……女の子が立っていた。

赤く長い髪と瞳
頭には蝙蝠のような小さな羽が生えている
よく見てみれば背中にも羽が生えているが、こっちは少し大きい
背は低くないが高いとも言えない、十代後半女性の平均程度だろう
か？
体型も割と普通？　あまり女性に知り合いが居ないので平均がそこ
まで分からない。

服装は黒い洋服に白い薄着（シャツ）を下に着ているな
首には赤い帯（ネクタイ）を付けている
下半身は……すかーとだったか？　そんな名前だったと思う
足には白い靴下に黒い靴だった。

初見での印象は働き者だろうか？
とてもでは無いが、悪魔と言われても頭と背中の羽が無ければ信じ

られない
なんというか……弱そうというか……おとなしい？
……この子に似た奴なんて知らないぞ？
向こうの奴との共通点を考えるが、誰一人当て嵌まる気配が無い
そもそも名前が無いだろうので更に思い浮かばない。
誰だろうかと頭を悩ませている所に、その女の子が話しかけてきた。
「私のような最弱級で名前も無く、本当に産まれたばかりで魔力も殆ど無い
更に腕力も無いし能力も無い下級悪魔中の下級悪魔
戦った事も無ければ性格も悪魔らしくない最悪の落ち溢れとまで言われた私に何か用ですか？」
……なんという内罰的な子だ
というか産まれたばかりの割には随分成長してないか？
悪魔は産まれた時から体が大きいのか、それとも一定まで一気に成長するのだろうか？
悩んだり苦悩したり哀れに思ったりしている内にパチュリーが勝手に悪魔に話しかける。
「用は彼の使い魔になる事
何か質問は？」
単刀直入すぎるだろうが！
さっきの発言にもう少しでも何か思う所は無いのか！？

「私なんかを使い魔にしても無駄だと思いますよ？
むしろ害にしかならないんじゃないですか？
不幸体質や不運体質や疫病神とか言われてきたんですよ、私」

悪魔なのに疫病神！？
というか先ほどのでも随分酷いのにそこまで言われるこの子が不憫すぎるだろ！

「問題無いわ
被害を受けるのは私じゃなくて戒魔だもの」

「ちょっと待て！　そういう問題じゃないだろ！」

今の会話で何をどう受け取ってのか分からないが、悪魔が俯いて悲しんでいる顔をしていた。

「そうですよね……私が存在する事自体、間違いですしね」

「それも違う！　誰もそんな事言ってない！
そもそも話の繋がりが分からん！」

「いいんです、どうせ私なんて……私なんて……
ぐす……ぅ……ひっく……ぅぅぅぅぅ……」

「自分で言って泣くなら言うなよ！
あぁとにかく泣き止んでくれー！」

女の子が泣きながら座ってしまい、俺は大慌て
パチュリーは呆れた顔をしていた。

俺が悪魔を慰めてる間、半分ぐらい原因であるパチュリーは後ろを向いて本を読んでいた
私は関係無いわ、貴方がどうにかしなさい
パチュリーの背中はそう言っていた。
後で絶対に殴ってやると心に誓い、悪魔を慰める。

数分後、なんとか泣き止んだ悪魔娘
元々赤かった瞳を更に赤くし、またいつ泣いてもおかしく無い状態だった。

「ぐすっ……ひっく……それで……ぐす……私なんて……んう……
喚んで……すん……どうするんですか？
まともに……ず……役に立つなんて……ぐす……思えません……ひっく……うぅぅ」

「だから……自分で言って泣くなら言うな
まず意思確認をさせてくれ」

「意志確認……ぐす……ですか？」

いい加減に泣き止んでくれないかな……
女の子が泣いてるのは見てるだけでも悲しい。

座っている悪魔と視線の高さを同じにし、怖がらせないように多分優しそうな顔をする
それで少しは落ち着いてくれたのか、鼻を啜る程度まで泣き止んでくれた

「この召喚に同意したという事は使い魔になる意志があるという事

だよな？
もし、俺の使い魔になるのが嫌と言うなら送り還してあげるけど」
悪魔は少し唖然としながら、段々と落ち着きを見せている
どうやら完全に泣き止んでくれたようだ。
そして完全に泣き止んだ悪魔は、少しでも悩んだ様子を見せずに大声で……

「な、なります！　使い魔になります！
むしろやらせてください！」

ぐあ！　耳元で叫ばないでくれ！
耳が痛いし耳鳴りがする！

「って、即答！？
ちゃんと考えてくれた！？　この契約って俺が死ぬまで続くんだぞ！
それなのに魂まで縛る契約に即答するのか！？
本当にそれでいいのか？　しっかりと考えて答えてくれ」

あまりの即答に驚き、真意を尋ねる
それを聞いた悪魔は何故か凄く嬉しそうに、そして寂しそうに話し出す。

「先ほどの私を見ましたよね？
私の言った事は本当で、私は駄目で出来損ないの悪魔なんです
泣き虫で、弱くて……
産まれたばかりですが私を召喚した人は貴方で四人目なんです
今までの三人は私の駄目さと弱さ、泣き虫なのが嫌だったのかすぐに還しました

こんな私なのに、貴方は私を使い魔にしてもいいと言い、更に嫌なら還すという選択肢までくれました
しかも考え直してもいいなんて言われて、こんなに優しくされたのは初めてなんです
だから、私は貴方の使い魔になります、いえ……貴方の使い魔になりたいんです！」

身の上を言われ、もうこの子が不憫で仕方がない
使い魔自体が嫌だったので考え直すように言ったが、逆に決意を強めてしまった。

もうどうしようも無い
ここで断るなんて酷い事はできないし、パチュリーからの援軍も期待できない。

「……わかった、使い魔の契約を結ぼう
俺の名前は夢幻戒魔だ、よろしく頼む」

「はい、よろしくお願いします
私には名前が無いので好きなように呼んでください！」

好きなように呼べって言われてもな……
というか使い魔の契約ってどうやって結ぶんだ？

「なあパチュリー
使い魔の契約ってどうやって結ぶんだ？
血の交換でもすればいいのか？」

「使い魔の契約はお互いの名を教え、誓えばいいわ
偽名や仮名では契約は結べないから、その悪魔に名前を付けてあげ

なさい
でなければ契約は結べないわ
本来なら上級の名前のある悪魔が付けるんだけど、こういう時ぐらい構わないでしょう」

偽名では契約できない！？
どうする……俺の本来の名前は博麗
だけどそれをパチュリーの前で言う訳にはいかない。

それに名前を決めろって言うけど、そう簡単に決められる訳ないだろう
この悪魔の一生を決めるんだぞ？　責任重大すぎるだろうが！

こうなったら……

「別に今ここで契約する必要は無いんだよな？」

「ええ、名前が思いつかないんだったら後日でも大丈夫よ
名前交換をして、誓うだけだから口答だけで契約は済むわ」

なら大丈夫だ、名前を考えるという名目で図書館から抜けだそう
そして俺の部屋かレミリアの部屋……というか人目が無ければどこでもいい
そこで博麗を名乗り、彼女にも名前を付けて契約しよう。

決まった事を教えようと悪魔の方に振り返ると
今にも泣きそうで、涙を溢れさせている状態だった。

「私の事……捨てるんですか？」

「違う！　そもそもまだ契約してないんだから捨てるという言葉は当て嵌まらない！
それにちゃんと契約するから勘違いして泣こうとしないでくれ！」

この子……思った以上に疲れるかもしれない
でも一度決めた事だし、使い魔の契約は結ぶ。

「俺が名前を決めるなんて聞いてなかったんだ
名前は一生を掛けて使う物、変な名前にしたくないから改めて考えたいんだ
だから、俺にその為の時間をくれないか？」

「……はい！」

心から喜んでいる、とても嬉しそうな声
自分の名前を隠したいが為に吐いた嘘なので罪悪感が……
でも名前を考えるというのも本当、変な名前にしたくないしな。

ちなみに、名付けて思い出したんだが
霊夢の名前を決めたのは俺じゃなくて彼女
産まれる前から随分考えていたらしく、最終的に彼女が決めた
俺は名前は考えさせてと言われたので何も考えていなかった。

「それでパチュリー
使い魔召喚は終わったし、この後はどうするつもりなんだ？」

今日は違う事をするとしか言われなかったので何も知らない
悪魔の事は今は後回しにし、どうするつもりなのか尋ねる。

「何もしないわ」

「はぁ？」

「だから、今日はそれでおしまい
確かにこの召喚は難しく無いし、余裕もあるけど
魔力の消費と集中力の酷使で疲れたの、だから今日はもうしないわ
どうせ暇になったんだし、その子に紅魔館の案内でもしてあげたら
どう？」

適当というか何というか……相変わらずだな。

パチュリーの事は諦め、悪魔を促して図書館を後にする
悪魔は俺の後ろに並んで着いてきた。

この子の名前……どうしようか？

続く

元世界編　新二話【探し人を求めて】

視点　砲魔

博麗神社に通い続ける事約十日
それまでの間、一度も戒魔も霊夢も見ていない
自分だけではどうにもならなかったので他の場所に行き、戒魔の事を尋ねて回った。

人里の堺音
「戒魔？　最近は全く見ないな……娘も居るのに買い物とかしなくていいのかな？」

紅魔館の刹那
「戒魔ねぇ……最近また坊ちゃまが我が儘を言い出したから仕事が溜まっててな
博麗神社に行ってないし、戒魔だって来てないよ」

白玉楼の妖牙
「戒魔は来てない
それどころか、もう半年は会ってないぞ」

永遠亭の鈴催
「あいつが病気になる訳ないよ
娘も丈夫らしいね、特別に集まる時以外の場所では五年以上会ってないよ」

妖怪の山の凪(なぎ)
「戒魔の行方？　知らないよ
僕が会いに行ってもすぐに逃げるんだもん
戒魔は色んな事を起こしてくれるけど、それを待つだけじゃ記事は書けないしね」

地霊殿のさとる
「僕は知らない
少なくとも、地下で戒魔の話は全く無いよ」

命蓮寺の白蓮
「戒魔君？　私は知らないけど……会ったら砲魔君が探していたと伝えよう」

天界……のつもりだったけど面倒だったから雲の中の奈玖(なく)
「戒魔殿？　私は知りませんよ
少なくとも、天界に現れたという話も聞きません」

怖かったけど太陽の畑の幽亜
「戒魔？　どうだろうな、戦ってくれるなら教えてあげるよ？」

ちなみに、戦って負けた後
「そうそう、戒魔の事だったね
僕は知らないよ、ご苦労様
くっ！　あっはははははは」

再び喧嘩を売ったが返り討ちにされた。

地獄……まで行ったら怖いから三途の川の古町（こまち）
「死んでないよ」

それだけ言って寝やがった
腹が立ったので五百発ぐらい弾幕を当ててやった。

妖精が鬱陶しかったが霧の湖のチルハ
「戒魔？　最近遊んでないよー
って、大君待って！　置いてくなー！」

とりあえず大妖精は打ち落としといた。

香霖堂の霖雨
「戒魔君？　私は知らないわよ
それより、砲魔君は早くお金を払って！」

最高速度で逃げ出した。

自分も住んでるけど魔法の森のアルス
「知らない」

人形作りに夢中になってたので椅子を蹴飛ばしてやった
アルスは倒れ、人形の部品に頭をぶつけて気絶した。

「紫々を除けば残りは……守矢神社の奴らぐらいかな？」

俺は急いで守矢神社に向かった。

そこでは神奈と諏訪がなんだか凄く落ち込んでる？

悲しんでるのか寂しがってるのか分からんが、とにかく凹んでるのは理解した。

何が有ったんだ？

気になった俺は彼らに話しかけた。

少年期編　十二話【君の名前は？】（後書き）

平行世界の簡易キャラ設定

霧雨魔理沙／霧雨放魔（ほうま）
散弾の魔砲使い

最初は魔砲（まほう）　だったが、砲魔のほうが語呂いい（のか？）となった
苗字と名前から二つ名は数秒で決まり、弾幕の内容も二つ名に伴い
変わってしまった。

簡易特徴
非常に頭が回るが当人はともかく、巻き込まれる人からすればあま
りにも酷い悪知恵であり、周囲を振り回す嫌な頭脳を持っている。
好きな事は友人の困った顔を見る事と楽しい事
嫌いな事は暇と暇と暇であり、暇になるぐらいだったら例え面倒で
も難しい事でも嫌な事でもやり始める。
多くの人から嫌われているが、自分が心から大切にしたいと思って
いる人以外は基本的にどうでもいいという感じなのであまり気にし
てない。
態度が大きかったり気性が荒い為、規律を守ったりする事が多い大
物や、力の小さい下級妖怪には好かれず、頭の良い中堅の者に好か
れる事が多い。
アルスやパディなどの魔法使い達には好かれていないが嫌われても
おらず、利害の一致での付き合いが多い。

彼の信条は「弾幕は数だぜ！」であり、あまりの量の弾幕に多くの
者が彼との戦いを拒んでいる。
彼と戦う物好きは魔法使い組や大物達が多く、砲魔の実力は彼らに

劣る為常に負け戦。
毎日のように勝つ為の努力を惜しまず、工夫と創作、頭の回転を止めない。
それが原因で彼の戦い方は嫌らしくなり、更に嫌われるのだが、そんな事は全く気にしてないので直さない。
戒魔は親友が頑張るのはいいのだが、嫌われる事をどうにかしたいと常に思っている。
しかし、それを何時間掛けて言おうとも砲魔は一切耳を傾けないので既に諦めているとかなんとか……

少年期編　十三話【彼女の待遇】

視点　戒魔

図書館から出た後、そのまま俺は自分の部屋に向かった
当然、悪魔も一緒だ。

俺だけでも目立つ存在なのに、レミリア以外の悪魔が紅魔館を歩き回っているのは非常に目立つ
悪魔がどう思ってるのかは分からないが、俺は居心地の悪さを感じていた。

居心地の悪さは改善されないまま俺の部屋に着いた
案内どころではなく、部屋に直行したのでそんなに時間は掛かってない。

「俺はここに住まわせてもらっている
君はどこに住む事になるか知らないけど、一応覚えて置いてくれ」

「何を言ってるんですか？
私も一緒に住みますよ」

……聞き間違いかな？
一緒に住むって聞こえた気がしたんだが？

聞き間違いだと信じ、改めて問う。

「すまん、聞き逃したみたいだ

もう一度言ってくれないか？」

「はい、私も同じ部屋に住まわせて頂きます」

「却下だ！」

「ひゅぃ！」

体は子供だけど男だよ！

精神は成人してるし、娘だっているんだよ！？

その俺を一緒に住むなんて、一体何を言ってるんだこの子は！？

「あ……あの、私何かしてしまいましたか？」

「何もしてないから、だから怯えないでくれ」

悪魔は安堵の溜め息を吐き、落ち着いた

でも少し肩が震えているのは指摘しないでおこう。

「確かに俺は子供だ

だが、だからといって一緒の部屋に住むのは問題有るだろう

俺は男、君は女、性別の事から一緒の部屋に住むというのは駄目だ

ここは借り家だからな、何か有ったら追い出されるかもしれない」

無いとは思うが年の為だ

もし本当に追い出されれば行く場所が無くなってしまうからな。

「……はい、わかりました」

「夕方になれば家主も起きてくるだろうし、細かい事はその時に決

めよう
今勝手に決める訳にはいかないしな」

「はい……ぐす」

また泣き出してしまったが、少し無視し
悪魔を部屋に入れ、自分も部屋に入る。

部屋は自分で掃除しているし、妖精メイドも掃除してくれるので綺麗な状態だ
その部屋を見回し、悪魔は少し驚いている。

「はー……お部屋も紅いんですね」

驚いてたのは部屋の紅さかよ！

「移動中に君の名前も考えたし、契約しようか？」

「は、はい！」

問題だった名前を聞かれる状況を無くし、彼女の名前も決まった
名前には苦戦したが、気に入ってくれると嬉しい
嫌がられたら……そう思うと悲しいけどな。

「気に入らなかったら言ってくれてもいいぞ？
また新しい名前を考えるからさ」

悪魔は小さく頷き、俺の言葉を待つ
素直な様子に、確かにこの子は悪魔らしくないかもな
なんて少し場違いな事を考えながらも、彼女の為に考えた名前を告

げる。

「君の名前は薺（なずな）、ナズナだ」

俺が名前を宣言し、どうだろうか？　と少し伺っていると
急速に顔を赤くして顔を手で隠してしまった。

「は、はぃぃ……それでいいです」

怒ってるのか恥ずかしがってるのか、それとも困ってるのか反応に困るな
一応気に入ってくれたのか、素直に受け取ってくれた。

この名前、子供ができたという話をした時に幽亜に言われた名前の一つだ
名付けをする時はこんな名前を付けると良い
そう言われた名前の中にこんな名前が有ったのだ
あいつの事だから花の名前なんだろうと思い、苦笑しながら覚えた
幽亜だって馬鹿じゃない、確かにあいつは人を虐めるのが好きだが、名前にまでふざけるような奴ではないだろう
必ず意味は有るのだろうが、幽亜は教えてくれなかった
自分で調べようと思ったのだが、霊夢の名前は彼女が決める事になったので俺が名付ける必要が無くなってしまった
そういう理由から意味は調べていないが、今度図書館で調べてみようと思う。

「名前も決まった事だし、今度は俺の本名を教えるよ」

「本名……ですか？」

「ああ、訳ありでな、俺の本名は夢幻戒魔じゃなくて博麗戒魔
この名前は誰にも話さない事、話していいのは俺と、この紅魔館の
主、レミリア・スカーレットだけだ
それ以外の人物には、例えさっきのパチュリーでも話してはいけない
わかったか？」

「はい、約束します」

俺の真剣さが伝わったのだろう
俺の眼を見て、しっかりと頷いた。

「なら契約を始めよう」

お互いに集中し、自分達の声にだけ集中する
幸い、この部屋の扉は厚めなので大声さえ出さなければ外に声が漏
れる事は無い。

「我が名は博麗戒魔
汝、ナズナは我が使い魔となる事を誓うか？」

「はい、私の名はナズナ
今この時より、博麗戒魔様の使い魔となり、貴方様に仕える事を誓
います」

お互いに言い終えた瞬間、俺とナズナの何かが繋がった
何が繋がったのかは分からないが、これが魂の契約という物だろう
か？

契約の儀式は終わったが、お互いに何を言う雰囲気にならず
二人とも契約の終わった格好で動かなかった。

このままで居るもの居心地が悪いので紅魔館の案内をしようと思う
まだ行ったことの無い場所も少なく無いが、主要の場所はしっかり
と教えて貰っている
場所も覚えているし、案内するのに不安は無い。

「ナズナ」

「ひゃい！　なんでしょうかマスター」

「マスターって何!?」

というか、どういう意味だ!?

「え、この呼び方は嫌でしたか？
なら、ご主人様？」

もしかしてマスターってそういう意味だったのか!?
どっちにしてもその呼び方は嫌だ!

「そういう呼び方は止めてくれ
俺の事は名前でいいよ」

「そういう訳にはいきません！」

「何故!?」

「マスターは私のご主人様だからです！
呼び方に関しては主様にも絶対に譲れません！」

さり気なく違う呼び名が増えなかったか！？

「そうは言ってもな……」

「駄目です、これだけは例え何と言われても譲れません！
マスター、ご主人様、主様のどれかにしてください」

「な、名前では駄「駄目です、絶対に譲りません」……好きに呼んでくれ」

諦めた俺に、ナズナは満面の笑みを見せてくれた
確かにその顔は綺麗だけどさ、できれば譲ってほしかったよ。

「はい、マスターの意味を知らないようでしたのでご主人様とお呼びさせていただきますね」

こうして、俺への呼び方が決まった
もう好きにしてくれ……

視点　レミリア

「ふぁ……ぁぁ
少し眠り足りないわね、今は何時ぐらいかしら？」

小さくあくびをし、寝ぼけ眼でのんびりする
段々意識が覚醒してきたので着替え、戒魔の部屋に向かう
すぐ隣なので数秒程度で扉の前に着き、扉を軽く叩く。

家主だからといって勝手に入るのはいけない事
この扉を叩く行動一つとて優雅にしたいと思ってるわ。

「戒魔、レミリアよ
入ってもいいかしら？」

「ああ、鍵は掛けてないから勝手に入ってくれ」

扉の向こうから戒魔の声が聞こえたが、何か別の気配も感じる
妖精メイドに用事でも頼んでいたのだろうか？
そう思ったが、妖精の気配とは何か違う。

気にはなるが、入れば分かる
考えるのを放棄し、遠慮無く部屋に入る。

「失礼するわ」

「ああ、こんばんはレミリア
紹介するよ、俺の使い魔になったナズナだ
ナズナ、彼女はレミリア、この紅魔館の家主だ」

突然誰かを紹介されたが……使い魔？
この子は悪魔よね？　少し怯えてるけど……

「は、はい！
初めまして、今日からご主人様である戒魔様の使い魔になりました
名をナズナと申します！　よろしくお願いします、レミリア様」

「え……えぇ、よろしく

私は紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

突然すぎて何が何だか……

「戒魔、ちょっと説明してくれない？
どうして貴方が使い魔なんて所持してるの？
悪魔みたいだけど……格が低いのに名前を持ってるし、何があったの？」

「ああ、ちゃんと説明はするさ」

そう言って戒魔は椅子を出してきた
私は出された椅子に腰を掛け、戒魔も椅子に座る
ナズナと呼ばれた悪魔は戒魔の後ろに立ち、従者のように振る舞っている
……いえ、使い魔だから従者なんだけど。

「今日もパチュリーに魔法を習いに図書館に行ったんだ
最初は魔方陣を書かされてな、何の魔方陣なのか訊いてみたら
突然今日は俺の使い魔を召喚するって言い出したんだ」

そういうのは最初に説明しない？
それに、どんな効果の魔方陣なのか知らない、訊かない戒魔も戒魔だと思うわよ？

「最初は反対したんだ
俺は相手の人生を縛るような事をしたくなかったからな
レミリアには俺の事を話しただろ？」

あぁ、博麗の御子としての生き方というか……あれね

確かに人生と一生を義務づけられた生き方よね
完全に縛られていたし、本人も無自覚だったらしい
博麗から離れて初めて縛られた生き方だったのに気付いた。

それなら確かに相手を縛るのは嫌だろう
自分が縛られて生きてきたのだ、無意味に押しつけるのは反対だろう。

「ご主人様、ご主人様の事って何ですか？」

「あー……すまないナズナ、これは話せないんだ
レミリアには話したけど、これを知る者は極力少なくしたい
だからナズナに教える事はできない、諦めてくれ」

「……はぃ」

戒魔は使い魔にも自分の事を話さないようだ
ナズナは落ち込んでいたが、私は優越感を感じていた。

戒魔は私にしか自分の事を話していない
使い魔にも話さないという事は知っているのはやはり私だけ
こんな危険な事を知っていていいのは私だけ
これに優越感を得ず、何で得ろというのだろう。

しかし、人生を共にする使い魔よりも私を優先された
それが堪らなく嬉しく感じるのは何故だろう？

「話を戻すぞ
理由は不明だが、パチュリーは俺に使い魔を持たせたかったようでな
言い負かされ、丸め込まれた

それでナズナを召喚して……な」

「契約したの？」

戒魔は首を横に振り答える
言いづらそうだけど、何かあったのかしら？

「ナズナが……泣き出したんだ」

「……はぁ？」

「自分の事を罵倒し始めたんだよ
自分のような駄目な悪魔なんてとか、そんな事を言ってな
呼び出した瞬間にそれを言い出すから驚いたよ」

自分を罵倒って……それで泣き出すなら言わなければいいのに
そこまで自分を低く見てるのかしら？

「あの時はお騒がせしました、すみません」

ナズナが少し涙目で頭を下げ、謝る
私としてはその程度で泣く貴女に驚くわ。

「気にするな、別に怒ってないから
泣き止ませる為に慰めて、どうしようか訊いたら
使い魔になりたいって断言されたんだ
俺としてはナズナを還して、使い魔の召喚を止めさせて逃げだそう
と思ってたんだけどな」

還すと言った所でナズナが泣き出しそうになったが、戒魔はそれに

気づき、頭を撫でる
最初は驚いていたナズナだが、すぐに落ち着き、されるがままになった。

戒魔はナズナを撫でながら話し出すが、その姿は子供には不釣り合い似合う事には似合うが、身長が足りないわね。

「考え直させようと思って説得したんだがな
ナズナは以前から泣き虫だった事が原因で何度も還されたらしいで、嫌なら止めてもいいという選択肢まで与えてくれた事が嬉しかったらしくて
……まぁそういう事で契約する事になったんだ」

「契約するなら本名じゃないと駄目だったはずよね？
本名を名乗ったの？」

パチェの前で名乗ったのなら拙いじゃない
パチェは博麗の名程度は当然知ってるし、戒魔に何を言い出すか……

「ああ、でも部屋に戻ってからだ
ナズナには名前が無かったらしいからな
名前を考える時間も欲しかったし、パチュリーの前で名乗るわけにはいかなかったし
契約は口答だけでも可能って言われたから大丈夫だとも言われたし、勉強は今日は無しらしいしな
部屋までの道中にナズナの名前を考えたんだ、誰にも聞かれたくなかったから言い訳にもなった」

という事はナズナは戒魔の名前を知ってるのね
パチェに知られなかったのが一番安心できた所よね。

「それで……ちょっとレミリアに頼みたい事があるんだけど、構わないか？」

「頼み事？　構わないけど、無理は言わないでちょうだいね」

「そこまで難しい事じゃない
ナズナの部屋と服が欲しいんだ」

その程度なら構わないが、部屋か……どこならいいかしら？
離れた場所に置いたらナズナに悪いし、近い場所っていうのも……
私の部屋と戒魔の部屋、ナズナの部屋が並ぶのは少し遠慮したいわ。
どうしようか考えてる時、ナズナが小さな声で何かを言い出した。

「あの……ご主人様
私はご主人様と一緒の部屋がいいです」

「何回も却下してるだろ
何度言われても、同じ部屋には住まないからな」

どうやらこのやりとり、既に何回もしてるらしい
私としても、元三十歳の戒魔と一緒に住ませるのは反対だ
しかし、彼女の様子からすると、勝手に戒魔の部屋に侵入しそう。
仕方がないので条件付きで隣に住まわせよう
嫌というなら離すと言えばおとなしく受け入れるだろう。

「はぁ、戒魔の隣の部屋でいいかしら？
私としても、家主として、男女を同じ部屋に住まわせるのは遠慮し

たいわ」

「……家主であるレミリア様が言うなら……諦めます」

「いや、一応主人である俺の言葉で諦めてくれよ」

「但し、条件が有るわ」

「「条件？」」

戒魔まで聞き返す必要は無いと思うんだけど？
貴方達って結構息が合ってるのね、練習でもした？

「一つ、無断で戒魔の部屋に入らない
一つ、ナズナも妖精メイドと同じように働いてもらうわ
一つ、私の指示にもある程度従いなさい
一つ、パチェ……パチュリーの事よ、彼女の指示にもある程度従いなさい
一つ、貴女も戒魔と一緒に鍛えなさい
これらの条件が守れるなら戒魔の隣に住まわせてあげるわ
嫌なら少し離れた部屋にな「その条件守ります！」……」

まだ契約してそんなに経ってないはずじゃないの？
それなのにこの忠誠心？　執着心かしら？
凄まじいわね、いったい何が彼女をここまでにしたのかしら？

「なら好きにしなさい」

それにしても……ナズナが居るんじゃ戒魔の話は聞けないわよね
どうしようかしら？　パチェにでも預かってもらう？

でも戒魔にべったりだから嫌がるかもしれないわね
戒魔の使い魔には反対しないけど、楽しみが減ってしまうのはいけないわね

「それはそうと、戒魔、ナズナ
私は食事にしようと思ってるんだけど、一緒にどうかしら？」

「そういえば食事はまだだったな
俺は構わないよ、ナズナは……訊かなくてもよさそうだな」

何故？　そう思ってナズナを見てみると……
無言で頭を縦に何度も振っていた
眼も輝かせ、態度だけで行くと思いっきり言ってる。

「……じゃあ行きましょう」

「……そうだな」

私達は見なかった事にした。

私と戒魔は椅子から降り、扉に向かって歩き出す
ナズナは椅子を移動させ、邪魔にならない場所に置いてから早歩きで来る。

従者の鏡かしら？
戒魔に尽くしている姿を見ると何だか可愛らしく思えるから不思議ね
部屋から出て食堂に向かう途中も、戒魔の一歩後ろに付き従っている
本当に、戒魔はどうやってナズナにここまで懐かれたのかしらね？

続く

元世界編　新三話【応援を求む】

視点　砲魔

「よう神奈諏訪神

なんだか落ち込んでるようだけど、どうかしたのか？」

俺の存在に今気付いたのだろう、のっそりとした動きで二柱は俺を見た

奴らの顔は少し窶れており、体力も減っている状態で少し危なそうだった。

「……砲魔か」

怖！　神奈の声がとんでもなく低くて怖い！

「あ、あぁ、どうかしたのか？
真苗の姿が見えないし、お前等も随分な状態じゃないか」

「真苗」

「はぁ？」

真苗がどうかしたのか？

「真苗が帰ってこないんだー！！！」

「うおぉ！　煩い！　声を落とせ！」

「ぐは！」

「で、諏訪、何があったのか説明してくれ」

突然叫んだ神奈を殴り飛ばし、諏訪に説明を求める
諏訪は神奈の行動に呆れながらも、ちゃんと話してくれた。

「実は十日ほど前から真苗が帰ってこないんだ
心配になって僕が探してるんだけど、一向に見つからない
で、過保護の神奈は真苗が心配過ぎて少し暴走してるって感じ」

「へぇ……ん？
なあ諏訪、真苗が行方不明になったのは十日前だよな？」

「そうだよ？
砲魔は何か知ってるのか？」

「ああ、関係有るかは分からないけ「話せ！　今すぐ話せ！！！！！！」

「喧しい！！！　少し黙れ！！！」」

突然叫びだした神奈に、俺と諏訪が同時に殴った
更に追い打ちとして　連符「マススパーク」　も放っておく
諏訪も同時に　崇符「ミシャグジさま」　を放つ
手加減したとはいえ、俺達の弾幕を同時に受けた神奈は倒れ伏し、
動かなくなった。

……あ、少し指先が動いた。

それを無視し、俺は諏訪と話しを戻す。

「関係が有るかは分からないけど、同じく十日ぐらい前から戒魔も
行方不明なんだ
もしかしたら、二人は何かに巻き込まれたのかもしれない」

「うーん……真苗が一緒だったからかな？

真苗の不幸体質は知ってるでしょ？
行方不明になった日、余った野菜をお裾分けに出かけたんだ
で、最初に行ったのが博麗神社なんだけど……それを決めたのが真苗自身なんだ」

あいつの不幸体質は凄まじいからな……それで巻き込まれたのか？
もしかしたら巻き込まれたのは真苗じゃなくて戒魔だったりして……

同じ事を諏訪も考えたのだろう
俺達は顔を見合わせ、苦笑いをした。

これは例え冗談でも、冗談にならない
もしかすれば本当にそうかもしれないと思えてしまうからだ。

「一応、紫々は何か知ってるらしい
でも自分で調べろと言われたんだ」

「あの隙間妖怪か……あいつが絡んでるなら僕達にはどうしようも無いかもね
はぁ、この件は砲魔に任せるよ
こっちでも調べてみるけど、僕らはあまり長時間神社から離れられないからね
真苗も居ないし、信仰力も低下してる、あんまり無茶ができないのさ」

そうだった、神は信仰心が無ければ力を発揮できない
少なければそれだけ弱くなってしまう
確かに、それだとこいつらに頼る事はできない。

「ああ、俺に任せとけ！」

根拠が無い、手掛かりも紫々だけ
やりたい事は多いが、戒魔に比べれば大した事じゃない
真苗も探さなくてはならなくなったし、問題が増えた。

できれば味方が欲しい所だが……
紅魔館の連中は動かないな、動くとすればレミレアだが、刹那が許さない
白玉楼も奴らも動かない、八雲が動かない限り、こいつらが動く事は無い
永遠亭も駄目だ、こちらにそこまで興味が無い
守矢は動けない、せめて真苗が無事なら動かせたんだろうが……
地霊殿で動かせそうなのは空(そら)だけ……でもこういう事には役立たず
妖怪の山なら動かせるだろうが、見返りが無ければ難しいだろう
命蓮寺の奴らは自発的に動くかもしれないが、やり過ぎて他に迷惑をかけそうだ
他は個別で動いてる妖怪達……無理だな

残りは……萃麻だ！
と、思ったが、萃麻の奴も全く見かけない
あいつも巻き込まれたか、それとも紫々に着いているのか……感だと後者だな。

パディやアルスだったら頼み込めがいけるか？
なんとか報酬も揃えて、土下座ぐらいすれば……いけるかもしれないな。

そうと決まれば急いで行こう！
少しの時間も無駄にしたくない、先ずは紅魔館、パディから捕まえる！

少年期編　十三話【彼女の待遇】（後書き）

薺の名前の意味は次話にて
自分でも簡単に調べられます
調べるのなら　薺　花言葉　で検索すれば最初に出ます

薺をナズナと、カタカナにした理由は西洋悪魔だから
それと読みにくいからです

少年期編　十四話【戦いの毎日】

視点　パチュリー

はぁ……戒魔が紅魔館に来てそろそろ一月
ナズナの名前を聞かされ、私は度肝を抜かれた
ナズナという名は実在する花の名前、そしてその花言葉は……
すべてをあなたに捧げます
更に本人はその言葉を知らず、ナズナはそれを知っており恥ずかしがるが戒魔は気付かない
まさに天然の誑しね。

主人からそんな名を付けられたのなら、使い魔として永遠に付き従うでしょうね
全てを捧げて自分に仕えろと言ったに等しいのだから。

それはそうと、最近の事ね
戒魔の実力は着々と上昇中
ナズナも一緒に頑張って特訓中よ。

ナズナを召喚して悪魔という西洋の関係が強まったせいか、戒魔の魔法の才能に磨きが掛かった
元々早い習得速度だったが、今では習得というよりも吸収に近い
戒魔自身の努力も高く、更にナズナは甲斐甲斐しくも、例え勉強中でも戒魔の世話をしている。

そういうナズナの才能だが、悪魔なのに何故か魔法に適正が無く、呪術の才能が高かった

今まで他の悪魔に罵られてきたのは魔術が使え無いからだったのだが、適正が合っていなかったので当然だろう
今では魔法の勉強は最低限にし、呪術を中心にして陰陽術も勉強している。

戒魔は陰陽術を以前勉強していたと言っていたので、ナズナの方がそちらの才能が高いと知り項垂れていた
今までの俺の苦労は……と、呟いて本気で少し泣いていた
見てて楽しいと思ってしまった私は悪くない……と思ってたわ
笑ってしまった事に戒魔に気付かれて報復されたが、返り討ちにしてやった。

そんな感じなので、戒魔は魔法と体術、簡単な陰陽術
ナズナは呪術を中心に陰陽術、非常に簡単な魔法と体力作りに体術を少し
飽きもせずに毎日頑張ってるわ……若いっていいわね、まだ私も若い方だけど。（まだ九十歳だし）

ついでに戒魔の強さだけど、人間にしては上出来ね
まだ子供だけど一流の退魔師程度の実力はあるわ
それでもまだ正面から戦って勝てるのは下級妖怪程度
中級妖怪には逆立ちしたって勝てないわ。

以前戒魔に下級妖怪と対等に戦えると言ったけど
それは正面からという意味ではなく、戦いと言えるぐらいには戦えるという意味
出会った頃だった場合、ほぼ一方的に嬲り殺しにされる程度の実力しか無かったからよ。

ナズナはまだまだ弱い

いくら主人の強さで使い魔である彼女の能力が上昇しても
彼女自身に技術が無いのでは役立たずにも程がある。

まぁ、あの廃棄状態に近い召喚術と契約だから仕方無いけどね
ナズナが以前召喚した者達は使い魔の召喚ではなく、多分欲望からの召喚でしょうね。

悪魔は召喚者の願いと引き替えに寿命や魂、感情を食べる生き物
召喚者はそれを捨てて願いを言おうとしてたんでしょうが、そこにはあの泣き虫ナズナ
あれは役立たずだと思い、すぐさま送還したのだろう。

ちなみに、戒魔の使い魔にさせた理由だが
一つは私に面倒事をさせている仕返しに、大半は役立たずが召喚されるあの召喚術での使い魔の契約
あの術式では主人は人間しかなれない、だけど人間はそこまで強くなれない
だから使い魔は弱いままだし役立たずで終わる事が多く、更に使い魔自身も技術を身に付けなければならない
故に、扱い辛さともっと便利な契約の存在からあの契約は廃棄状態になったのだ。

だが誤算だったのは使い魔が戒魔に懐き、有ろう事か真面目だった事
悪魔は契約に忠実だが、基本的に不真面目であり、楽天家
それはレミィを見れば想像できるだろう。

しかし、ナズナは例外である真面目な悪魔
更に虐められていた事も有り、悪魔の癖に優しくした戒魔に信仰までしている始末。

そして私は召喚した責任と強引に話しを勧めた、半分ぐらい無理矢理だった等
そのような理由からナズナも教えるようにとレミィに力尽くで押しつけられた
何故レミィがナズナに協力的なのかは不明だが、完全に逆効果で面倒が増えた。

もう一つは実験
過去の古く、役に立たないと言われた召喚術と契約
それの効果を見てみたかったのだ。

だが私は別に使い魔は欲しいとは思っておらず、邪魔になる可能性の高い契約なんて嫌だった
そこへ戒魔への勉強の件、熱心に習ってくれるのは嫌ではないがやはり面倒
契約の効果も見たかったし、一つ目の嫌がらせもできると思い、実験、結果は以下省略。

実験結果としては上々、契約の儀式は見ていないが、成功したからには契約方法も合っていた
それなりに満足したので少しは良かったが、やはり面倒は……以下省略。

とりあえず、レミィはナズナに私の言う事も聞けと言ったらしい
だから彼女には勉強を教えてあげる代わりに、暇な時は図書館の整理をしろと命じた
ナズナは承諾し、とても真面目に整理してくれている。

それを見た私は使い魔って便利だと思い、少し召喚しようか迷っていたりする

今のところ考えているだけなので召喚する気は無い。

そして現在は……

「行くぞナズナ！　今日こそは美鈴に一撃を入れる！
というかせめて擦らせるぞ！」

「はい！　頑張りましょうご主人様！」

「よくも毎日毎日飽きもせず……最近は回復力も付いてませんか？
毎日三回も戦いを申し込まれるのは疲れるんですけど……」

「単に面倒なだけでしょ？
ま、レミィもこの余興を楽しんでるみたいだし、我慢しなさい」

と、まぁこんな感じ
毎朝戒魔とナズナは美鈴に挑戦し、敗北
夕方頃、再び美鈴に挑戦、敗北
夜中、お風呂の前にまた美鈴に挑戦、敗北

最初は朝だけだったんだけど
美鈴が言う通り、回復力が付いてきたのかここ最近は毎日三回も戦っている。

この模擬戦を始めたのは半月前、ナズナ召喚から五日後の事よ
レミィは余興にと言って戒魔と美鈴を正面から戦わせた事が原因
今までは組み手や型の練習、体を酷使する事を考えた理想的な体を造る為の訓練だった。

しかし、この戦いを始めた時美鈴が最初の一撃に力を込めすぎた為、

戒魔が気絶した
それで戒魔に火が付いた
どうやら戒魔は非常に負けず嫌いだったらしく、殴られて気絶する事もお構いなしに美鈴に喧嘩を売り始めた。

美鈴も最初は軽くあしらっていたのだが、戒魔の成長は早く、ナズナも参加してきたので油断を捨てた
余裕も余力も有り、実力も殆ど出していないが、油断を捨てた武術の達人である美鈴に彼らが攻撃を当てられるはずも無く
毎日毎回気絶させられている。

美鈴は普段と同じで格闘技を使った肉弾戦を主に使って戦っている
偶に遠距離から気で作った弾を飛ばしたりする程度
ちなみに、その気で作った弾は触れると何故か爆発する仕様らしい
それに気付かなかった戒魔は思いっきり吹き飛ばされ、数時間目を覚まさなかった。

戒魔も接近戦を基本とし、少しでも離れたり、中距離になったら魔法を使う
まだ子供の戒魔は魔力も霊力も低い為、あまり強力な魔法が使えないしかし、戒魔は威力の代わりに工夫をしており、罠を張ったり足止めを目的にしているが
やはりまだ無駄な術式も有り、即効性が無いので美鈴には当たらない。

ナズナは完全に遠距離を専門としており、呪いで動きを鈍らせたり、体力を削ろうとしている
のだが、所詮初心者の付け焼き刃、美鈴の精神力の前ではナズナ程度の呪いでは効果は思うように得られない
毎回試しているが、なんとなく手応えを感じるが無駄という話

次は陰陽術での攻撃をするが、やはり威力も速度も足りず、美鈴には当たらない。

ちなみに、私も模擬戦を頼まれているが断っている
面倒というのも有るし、美鈴に一撃も当てられない程度では話しにならない。

美鈴が私よりも弱いと言っている訳では無い
美鈴にとって、私は相性が最悪の相手だから勝てないのだ
接近戦を得意とし、遠距離からの攻撃を防ぐ手段の無い美鈴と
遠距離戦を得意とし、接近戦にもある程度対応できる私
どちらが有利かは言うまでも無いでしょ？

少なくとも、美鈴に当てられる速度が無ければ
私の遠距離からの爆撃を躱せないし耐えられない
それも戒魔には言っているのでしつこく頼まない。

何はともあれ、戒魔もナズナも頑張ってるって事よ。

……あ、戒魔が気絶したのに気を取られてナズナもやられたわ。

視点　美鈴

戒魔少年の負けず嫌いも相当なものですね……呆れを通り越して関心します
既に私に何十回も気絶させられているのに衰えない闘志
そして毎回変わる戦術に上昇している実力

人間は成長が速くて羨ましいですね、ナズナちゃんも産まれたばかりだからか、やはり成長が速い。

戦い方の工夫の数も豊富
地の魔法で足場に小さな出っ張りを出したり……私は当たるほど間抜けではありませんが
雷の魔法で耳を潰したり……聞こえなくても支障はありませんが
炎の魔法で視界を覆ってきたり……横に回るだけで躱せますが
風の魔法で見えない弾を撃ってきたり……直線的なので簡単に躱せますが

パチュリー様のように威力も速度もありませんが、間接的な方法なので結構邪魔です
ですが、このぐらいの子供といえば派手な攻撃や威力の高い攻撃を好む事が多ってたんですが
戒魔少年は自分の実力と能力、種族を真面目に理解しているのでしょうね。

ナズナちゃんはまだまだ弱いですね
ですが彼女の呪術は油断できません。

呪いにも様々な種類があり、彼女の使う呪術も多種多様
頭痛、腹痛、鈍痛等の痛みの呪い
体温が上昇したり下降したり、熱っぽくなったり、間接が痛くなったりする病気の呪い
単純に身体能力を下げる呪い等

破るのは気合を入れれば弾けるので簡単ですが、その瞬間に隙が出てしまう
そこに戒魔少年が強襲してきたり、魔法で直接的に攻撃したりします

しかし、その程度で当たってあげられる程私も弱くは無いので当たりませんがね。

呪術が破られると次は陰陽術で攻撃してきます
威力は低いのですが、操作性が高く、追尾型の攻撃や数を撃たれる面倒です
しかしナズナちゃんはまだまだ精密操作が苦手なので簡単に躱せます。

今はまだまだ二人共弱く、遅いので簡単に捌けますが、数ヶ月もすれば一撃を貰うかもしれません
成長が速く、戦闘にも工夫を凝らし、更に私の戦い方も覚える
私の戦い方は武術が基本ですから、あまり種類が無いのが欠点ですねですので、私の戦い方を覚えられると当てられる危険が現れるという訳です。

油断する気はありませんが、それでも慣れというものに勝つのは難しい
私も戦い方を毎回変えていますが、そろそろ種類にも限界です
後はそれらを繰り返し、戒魔少年達に戦い方の種類が無くなった事を悟られないようにするだけ。

私も戦い方を勉強するべきですね……私はまだ彼らには負けたくありませんし
私の想像を越えるような攻撃が来ても躱せるようにしなくてはなりません。

それにしても……最初は戒魔少年の滞在に消極的反対だった私ですが
今では戒魔少年との戦いを楽しんでいる
戦いなんて全くありませんでしたしね、武闘家として門番だけでは

満足できなかったんでしょう。

面倒と言えば面倒ですが、楽しい時間を過ごさせてくれる戒魔少年には感謝ですね。

「……ぐ、痛たた……また負けたか」

戒魔少年が目を覚ましたようですね
私の方は見ず、ナズナちゃんを起こし始めました。

「ナーズナ、起きろナズナ
この後はレミリアとの食事だぞ、遅れたら怒られるから起きてくれ」

「ん……んあ、ご主人様？　おはようございますー？」

「もうすぐ日が暮れるからこんばんは……だな
ほら、しっかりしろ」

「んー……あ、私達また負けたんですか？」

「負けだな、これで四十四戦無勝四十四敗だ
百戦までには勝ちたいな」

「頑張りましょう、ご主人様！
一撃当てれば勝ちなんです、続ければいつか必ず勝てますよ！」

そう、この毎日続いている戦い
戒魔少年とナズナちゃんを気絶させたら私の勝ち、私に一撃当てれば戒魔少年達の勝ち
こういう条件で戦ってます。

「今日は風を使った砂煙でしたね
目は痛くなりましたがそれだけです
更に耳も潰せば少し危なかったと思いますよ？」

「……それでも躱されそうだけどな」

そうでもありませんよ？
視覚と聴覚を奪われれば自然と動きが鈍りますし。

「ナズナちゃんの今日の呪術は筋力低下でしたか？」

「はい、主に腕に集中して掛けました」

「今回は足に掛けるべきでしたね
目を潰したのだったら動きを封じる為に足を止める事です
腕を重くしても足裁きだけで簡単に躱せます
貴方達はまだまだ遅い、当てる事を考える前に自分達の遅さをもっと自覚するべきですね」

「はい！」

ナズナちゃんは返事も良いし、素直で嬉しく感じる
それに比べて戒魔少年は……

「瞬発力を上げる為に短距離走でもするか？
だがそれだけでは足りないだろうし……とにかく今は足を鍛えるべきだな」

と、次にする事を考えています

可愛くないとも思いますが、頑張っているので許してあげます。

「それでは今回はこれでおしまいです
また夜に来ますか？」

「来る」「来ます！」

つい先ほどまで気絶してたのに元気ですねー
ご苦労様です、本当に頑張ってくれるので面倒です。

「では待ってますね
お疲れ様です、ゆっくり休んでくださいね」

「休む前に少し鍛える
ナズナ、走るから記録と合図を頼む
じゃあ美鈴、また夜に！」

そう言って戒魔少年は走り去りましたが……体力が持ちますかね？

「あ、待ってくださいご主人様！
では美鈴さん、また夜にお願いします！」

ナズナちゃんも戒魔少年に追いつくように走り出しました……あ、こけた
戒魔少年はすぐに気付いてすぐに起こし、顔に付いた汚れを拭って歩きました。

またこけたら危ないからですかね？
どうせなら手を繋いで走ったらいいのに……きっと楽しい事になります

戒魔少年は恥ずかしがって逃げ出しそうです
ナズナちゃんも恥ずかしがるでしょうが、逆に強く手を握ったりしそうです。

彼らの今後を楽しんで考えている所にパチュリー様が声を掛けてきました
内容は彼ら……いえ、戒魔少年の事です。

「美鈴、どう思う？」

「後数ヶ月ですね、早くて二ヶ月ぐらいかと……」

「本当に子供かしら？」

「私もそれは怪しいと思ってるんですよね……なかなか尻尾を出しませんけど」

何度も戒魔少年と話している
二日目の愚痴のような話もしているが、相変わらず多くの名前は言わない。

「私も何度か訊きだそうと網を張ってるけど、掛からないのよ
逃げるのも躱すのも逸らすのも上手い、あの歳の子供ができる事じゃないわ」

「お嬢様は知ってるそうですが、教えてくれませんしね
口止めもしているのがまた怪しい」

「でもレミィは言わないわ、契約って言っていたもの
ナズナにも振ってみたけど何も知らなそうよ」

「お嬢様のお気に入りとはいえ、正体の判らない者を内部に飼うのは良い気持ちはしませんね
戒魔少年の性格からしてお嬢様に危害を加えるとは思えませんが、万が一の可能性は常に考えなければなりませんせめて正体が判れば……」

そう、不安なのだ
戒魔少年がお嬢様に危害を加えるなんて、今更そんな事は言わないだが確証が無く、力を求めているので可能性を否定しきれないもしかすれば私達がお嬢様の敵を育てているかもしれないのだ
怖くて私達は真面目に戒魔少年達を鍛えられない。

それでも戒魔少年の成長はとても速い
私達が成長を妨害しても関係が無いように成長するこれが私達を更に焦らせる。

「焦っては駄目よ美鈴
戒魔だって自分が怪しいのは自覚しているはず
下手な事をしてはレミィに告げ口してしまうかもしれないだから落ち着きなさい」

「……はい」

はぁ……頑張りますか。

続く

元世界編　新四話【思い出してほしい】

視点　パディ

はぁぁ……疲れた。

砲魔に戒魔の捜索を手伝わされて早半月

今まで貸した本を全部返し、図書館に無い自分の本を貸すからと言

われて付き合ったのが運の尽き
依頼内容は先に聞いておくべきだったと後悔してるよ。

あの野郎……僕には体力が無い事を知っててこんな疲れる事をさせやがって
少なくとも報酬が割に合わない、絶対に飯の一回や二回は奢らせないとな。

それにしても、戒魔はどこに行ったんだ？
半月も僕、砲魔、アルスの三人で探しているのに見つからないのは不自然だ。

そして唯一の手掛かりは紫々
もう僕達は既に戒魔を探すよりも紫々を探す事に力を入れている
あいつは邪魔な時に現れる癖に、こういう時には姿を見せない。

アルスが偶然近くで飛んで来たので、少し休憩するついでにどうだったか訊いてみる
しかしアルスは首横に振るだけで答えた。

お互いに疲れていたので地上に降り、木陰で休む
その時、アルスは何かに気付いたように声を上げ、思いついた事を言った。

「ねえパディ、何となくだけど砲魔が何かを忘れてる気がするんだ
僕としては砲魔にもう一度詳しく話させれば何か分かると思うんだけど……どうかな？」

「……あり得るね
よし、砲魔を絞めよう」

思いついたが吉日、僕らは砲魔の担当する場所に向かった
今日の砲魔の担当する場所は博麗神社付近だったはずだ。
僕らは急いで博麗神社に向かい、砲魔を見つけだした。

「どうしたんだお前等、何か見つけたか？」

「いや、そうじゃない
それとは別の事に気付いたんだ」

砲魔は首を傾げ、何に気付いたのか考えている
しかし、当然ながら馬鹿は気付かない。

「お前、確か戒魔を探す前に紫々に会ったって言ってたよな？」

「ああ、確かに会ったぞ
それがどうかしたのかアルス？」

「もしかすればだが、お前の事だ
きっと何か重要な事を忘れているはずだ、さあ思い出せ！」

「んぐ！　ちょ、首を、首を絞めるな！」

あーあ……疲れと苛立ちからアルスは砲魔の首を絞めだした
よっぽど苛々してたんだな、僕もけっこう怒ってるけど。

「紫々に、言われた、事なんて、最初に、話した、事、ぐらいしか
……ああ！　思い出した！」

「「……本当に忘れてたのか」」

思わずアルスと同時に言ってしまうぐらい呆れた
まさか本当に忘れているとは思わなかったよ。

「で、何を思い出したんだい？
早く言わないと更に首を絞めるよ？」

「わかった、わかったからこれ以上強く首を絞めないでくれ
えーとだな、俺はあんまり自分で頑張らないから少しは自分で頑張
れって言われたのは話したよな？」

それは既に聞いた
それでも駄目だったから僕達に頼ったんだろ？

「で、その後続きがあったんだ！
答えを得たなら神社で大きな声で紫々を呼べって、そうすれば俺の
進む道を少しだけ教る
確かそんな事を言ってた……と思う！」（十一話の新一話参照）

「「……」」

この……馬鹿が！
そんな重要な事を何故言わなかった！
こうなったら……

「アルス、僕達が苦労した分、存分にに締めてやってくれ！」

「……そうだな」

「え？　俺ちゃんと話しただろ！？
だったらいいだろ？　な？　な？
謝るから許してくれよ、頼むかっぐ！　く、苦し！」
砲魔はそのまま気絶した。

少年期編　十四話【戦いの毎日】（後書き）

パチュリーも美鈴も戒魔の事は信用していません
レミリアの気紛れみたいなので住んでいる居候みたいな存在に加え、強力な本を持っていた事と自分の事を話さない事が原因です。
ただし、美鈴は訓練はそれなりに楽しんでいるし、パチュリーも戒魔の伸びを気にしています。
信用できないだけであり、戒魔自身の事は嫌いではありません。

少年期編　十五話【悲しき貧乏時代】（前書き）

ちょっと風邪をひいてしまいました
それによって次話をまだ書けてません
二日に一話を守れないかもしれませんが……守れるように頑張ります。

少年期編　十五話【悲しき貧乏時代】

視点　ナズナ

「そういえば……」

私がご主人様にと契約してから一ヶ月経ちました
この日の晩ご飯の時の事です
普段通り、ご主人様（と私）はレミリア様と一緒に食事していましたが
何かを思いついたレミリア様の声で、私達の食事をする手が止まりました。

「どうかしたのか？」

ご主人様の質問にレミリア様は少し考え、そのまま気になった事を言いました。

「戒魔って、以前は一人暮らしだったのよね？」

「ああ、話にも出したと思うが？」

ご主人様って一人暮らしをしてたんだ……
だから大人の人みたいに落ち着いてるのかな？

「家事とかはどうしてたの？
戒魔に家事って印象は無いんだけど、誰か家政婦とか雇ってた？」

その気持ちは分かります
ご主人様は無愛想ですし、予定が無い時はのんびりしてますですので家事なんて働き者という印象はありません。

「……家事は自分でしてた
暇潰しにもなったし、当時の趣味だったよ」

……趣味？

「じゃあ料理とかできたの？」

「趣味の範囲でだがな
生活にも必要だったし、最初は必死に覚えた」

「へー……ねえ戒魔
明日、私の為に何か作ってくれない？
貴方の作る料理に少し興味が出たわ」

レミリア様も気になったんだ
私も気になりますが……私の為になんか作ってくれませんよね……ぐす。

「作るのはいいが知っての通り、俺は小食だぞ
俺が作るとなると、自然と量が減る
それでもいいか？　いいなら作るが」

「構わないわ
足りなかったら妖精メイドに作らせるしね
ふふ、楽しみにしてるわよ戒魔
もし不味かったら全部自分で食べてもらうわよ」

「はいはい、パチュリーや美鈴も呼ぶのか？
先に決めてもらわないと作る量に困るんだが」

私の名前が出てこない……忘れられてるのかな？
それとも私に食べさせるなんて勿体なくて食事抜きですか？
私……何かしましたか？　ぐす……ひっく……

「ん？　ん！？
ど、どうしたナズナ！　どうして突然泣いてるんだ！？」

「だ、だって……私はご主人様のお料理を食べてはいけないんですよね？
私の名前が出てきませんでしたし、仲間はずれにされて……ぐす、悲しくなっちゃって……ぐす」

「どうしてそうなった！？
ナズナも一緒なのは当然だろ？
俺がナズナだけ除け者にする訳ないだろ？」

ご主人様はそう言って私の頭を撫でてくださいました
私の中は安心感で一杯になり、嬉しくなって少し頬が緩んでしまいます
私も一緒と言われるだけで落ち着きます
はぁ～……撫でられてるので更に落ち着けます。

「……で、何を作る気なの？」

呆れを含んだレミリア様の声にご主人様の手が私の頭から離れます
寂しさを感じながらも、少しの間でもご主人様を独占できたので我

慢します。

「それを言ったらおもしろく無い
楽しさは後に残さないと、レミリアもそう思うだろ？」

「それもそうね
とりあえず最も得意な料理にしてちょうだい」

「わかった、最も得意な料理だな」

この時、楽しみにしていたレミリア様は気付いていませんでしたが
私の目には見えました、ご主人様の眼が怪しく、鈍い光を発していた事に……
ご主人様の料理は楽しみですが、嫌な予感しかしません
この想像が外れる事を、神に祈っておきます。

……悪魔でも信仰できるんですよ？

視点　パチュリー

突然食事会を開くと言われ、私、レミィ、美鈴、ナズナが集められた場所はレミィの私室で少し狭い部屋よ。

私と美鈴は呼ばれた理由が分からず、少し混乱中
ナズナは知らないが、レミィが元凶なのは確定だろう
楽しそうな顔で料理を待っている姿を見れば一目瞭然ね。

でも、ナズナがここに居るのに戒魔が居ないのは不自然
そしてレミィが楽しそうにしている事から考えると……食事を作ってるのは戒魔？

「レミィ、戒魔がここに居ないのは戒魔が食事を作ってるから？」

「あら、さすがパチェね
その通りよ、今回の食事は戒魔が作る事になってるわ」

自分の予想が当たり、少し落ち込んでしまう
もし毒や薬を盛られたらどうするのよ？
ナズナが居るから可能性は無に等しいとは思うけど。

美鈴に眼を向けると、少し悔しそうな顔をして私を見ていた
どうやら私と同じ考えに至ったらしい。

しかし、ナズナとは別の理由で盛る事は無いだろう
ここには私達以外にも数名の妖精メイドが居る
もし私達に異常が出ても、戒魔を取り押さえる事ぐらいできるだろう
その辺りの訓練は積ませているらしいし、美鈴を信じましょう。

万が一があっても、解毒の魔法程度はできるから大丈夫だけどね。

その辺りを美鈴に軽く視線で教え、落ち着かせる
まだ心配なのだろうが、一応落ち着いたようだ
それでも辺りの妖精メイドに目配せをしている事から、美鈴は本当に優秀だと思うわ。

「戒魔はどんな料理を作るって言ってたの？」

「さぁ？　得意料理を頼んだし、私は知らないわ
もし不味かったら自分で食べるように言ってあるから大丈夫よ？」

どうやら私が何かを心配してた事には気付いていたらしい
心配している内容が間違っているが、それは見逃してあげよう
レミィにとって、戒魔は貴重な娯楽要因であり、大事な客人なのだから。

扉の外から滑車の転がる音が聞こえる
どうやら料理が終わり、こちらに持って来たようだ。

一緒に居たであろう妖精メイドが扉を叩く
レミィはそれを聞き、入るように指示を出す。

扉が開き、滑車と一緒に戒魔が部屋に入ってくる
滑車の上には五人分の料理が乗っており、全ての料理には蓋がされていてどのような料理なのか分からない
蓋はほぼ密閉されているらしく、匂いも嗅げなかった。

レミィとナズナの顔には期待で一杯
私と美鈴は少し警戒しながらも、中身に興味津々
周りの妖精メイド達も気になっているようだ。

しかし、肝心の戒魔は少し哀れむような顔
一緒に居た妖精メイド達も少し困っているようだ。

戒魔と妖精メイドの顔の意味が分からず、私は困惑してしまう
美鈴は戒魔の事をあまり見ていないのか気付いていない
レミィとナズナは言わずもがな、料理以外に興味が無さそうだ。

「先に断っておくが、期待するだけ無駄だぞ
俺の得意料理と言われて得意料理にしたが……なぁ？」

戒魔が一緒に居た妖精メイドに話しを振る
妖精メイドは返答に困っており、言うべきか迷っている
戒魔は肩を落とし諦めた、どうやら元々期待していなかったらしい。

戒魔は妖精メイドに指示を出し、それぞれの前にお盆を置かせた
あまり重そうにしていなかった事から、量はさほど多くなさそうだ
お盆も小さいので種類も少なそうに思える。

レミィもそれに気付いたのか、不思議そうに蓋を見ている
美鈴も気付いており、疑わしそうに蓋を見つめる
ナズナは戒魔の料理という事だけで嬉しそうにしているので気付かない
少しは主人離れしようと思わないのかしら？

戒魔も席に着き、妖精メイド達が私達の目の前にある蓋を取ろうと手を回す
蓋の取っ手を掴み、いつでも上げられるようにした。

「じゃあ、きっと予想外だと思うけど……開けてくれ」

戒魔の合図と同時に妖精メイド達が蓋を持ち上げる
中の料理は……え？
戒魔と、戒魔と一緒に居た妖精メイド以外の動きが止まった
子供の戒魔がこのような料理が得意なのがとても意外であり、驚いた。

白米、味噌汁、菠薐草の胡麻和え、豆腐、野菜の煮付け

これってもしかして……

「俺の得意料理は精進料理
肉や魚は一切使わないが、栄養価が高くて安上がりだし楽だったんだ」

清々しいまでの笑顔で説明する戒魔に、私と美鈴は思わず眼を背けてしまった
戒魔の生活がどれほど苦しく、辛い生活だったのか悟ってしまったからだ。

もしかしたら、戒魔は一汁一菜で過ごした時期があるかもしれないそう思うと、精進料理はとても豪華だったのだろう
あんまりといえばあんまりの食生活に、涙が出そうだった。

美鈴も同じ思いなのか、戒魔から眼を背けている
私と眼が合い、同時に頷いた
もう少し戒魔に優しくしてあげよう……私達はそう決意した。

レミィはこんな料理も有るのかと関心しており、物珍しそうに観察している
ナズナも知らなかったのだろう、視線を料理に固定して全く逸らさない。

よくよく見てみれば、戒魔の目元には少しだけ涙が見えた
これで今までの想像は確信に変わった
戒魔は極貧な生活で過ごしてきた事を……

子供にこのような生活を強いた戒魔の両親に嫌悪感を拭えない
戒魔やレミィには内緒で、戒魔の料理を少しだけ豪華にしておくよ

うに妖精メイドに伝えておこう
それぐらいしても罰(ばち)は当たらないだろう。

戒魔が大きな音を立て、手を合わせる
それに驚きながらも、戒魔の意図を知り、私達は全員で手を合わせる
そして同時に、声を合わせて。

「「「「「「いただきます」」」」」」

この言葉を合図に全員が箸を取り、ゆっくりと静かに食事を始める
小さく食器と箸の当たる音が聞こえるも、とても静かで落ち着ける
食事だったわ。

そして肝心の味なのだが……とても美味しかったわ
食後、レミィがまた作ってくれと戒魔に頼んでいたので彼女も満足
できたのだろう
ナズナも満足そうだがそれだけではなく、穏やかな顔をしていた
どうやら満足感だけではなく安心感まで得られたらしい。

美鈴は味には満足だが量には満足できなかったようだ
腹をさすり、物足りなそうな顔で考え事をしている
多分後で何を食べるのか考えているのだろう。

私は戒魔と同じく小食だし、味にも満足した
この精進料理は私として、花丸をあげたくなった
味にもお腹にも心にも満足よ。

……あんまり運動してないからお腹周りも気になってたしね。

この料理で戒魔の料理の腕以外にも分かった事があるわ

それは戒魔が私達の害になる可能性が更に低くなったという事よ。

裕福でなかった戒魔が毒や薬を得られる事は先ず有り得ない
更にあのような強力な本を持っている事も変になった
あれらの本は本当に勝手に持たされたのだろう
そうで無ければ買う金も無い、持っていれば売るだろう本を持っているのは変よ。

美鈴は戒魔の荷物の中に金塊が入っていたと言っていたが、それも無理矢理勝手に持たされたと予想できる
ここまで考えれば戒魔が如何に無害か想像に易いだろう。

まだまだ気になる事は多く、隠している事も少なく無いだろう
それでも……戒魔はある程度信用できる相手だと分かった
それだけでもこの食事会の意味は有った、素直に来て正解ね。

この事は後で美鈴にも伝えるべきね
彼女は私以上に警戒してるし、もう少し余裕を持たせたいわ。

戒魔を褒めちぎるナズナと、それを楽しそうに見ているレミィを微笑ましく見ながら
私は今後の事を考える
戒魔をもっと信用できれば、もっと楽しく過ごせるだろう……と。

とりあえず、時々この精進料理を作って貰おう
女性として体重を減らしたいと思うし、お肉が付いたら怖いもの。

続く

元世界編　新五話【紫々も子供には勝てないそうです】
表との時差……十日

視点　アルス

砲魔が気絶してから約数分、いい加減待つのも嫌になってきたので
踏みつけて起こした。

「……いい加減に起きろ！」

「ごふう！！」

「起きろ！」

「ぐほあ！　起きた、起きたから止めてくれ！」

砲魔は起き上がって実行犯の僕を睨み、僕の暴力を放置したパディ
も睨む
しかし僕らは何処吹く風とばかりに無視した
原因に睨まれても逆恨みにしか思えないし、忘れていた砲魔が悪い。

砲魔もその事にすぐさま気付いたのですぐに睨むのを止めた
自分でも自業自得だと理解してるからだ。

砲魔が苦しむ事数分、それなりに回復した砲魔が一歩前に出る
大きく息を吸って大声を出す準備をする
僕とパディは耳を塞ぎ、大声に備える。

「紫々ーーーーーーーーー！！！」「しーーー！」「しー」

おお、砲魔のでかい声で山彦が起こったぞ
パディも関心しており、砲魔は喉が痛かったらしいので喉をさすっている。

そして砲魔が紫々を呼んでから一時間ほど経った
なかなか紫々が来ないので魔法談義をして待っていたが、未だに来ない
ここまで待っても来ないのが気になったが、この程度で諦めては紫々とは付き合ってられん
僕達は魔法談義を続け、遅い紫々を待った。

更に二時間ほど経った
いい加減に苛々してきた砲魔を咎めつつ、さすがに変だと思い始めた僕とパディ
紫々は胡散臭いし鬱陶しいし邪魔だし面倒な奴だが、約束はそれなりに守る
それなりというのに不安を感じるが、それでも全く守らないよりは良い。

合計して五時間待った
空も暗くなり、完全に夜になってしまった
相変わらず紫々は現れない。

パディも飽きてきており、既に寝ようかと考えている
砲魔の怒りは頂点に達しており、八卦路を構えて辺りを見回している
僕は少しだけ持って来た人形の部品に不良が無いか確認している。

総計七時間
今日は諦めて解散しようかという話を始めた時、不気味な隙間が現

れた
それは紫々が現れる時に使われるもの。
僕らはそれを警戒し、現れるであろう紫々に警戒する
ここまで待たされた恨みを晴らすためにな。

ゆっくりとした動きで出てくる紫々
足、腕、腰、腹、胸、最後に頭が出た
その顔に思いっきり攻撃してやろうと思って構えていたのだが……

「……何故そんなに窶れているんだ？
僕らにも分かるように説明してくれ」

「パディか……今日は藍も橙も居なくてな」

紫々の式が不在とは珍しい
どうせ仕事をしないこいつが悪いんだろうけどな。

「僕一人で霊夢の面倒を見るのは……無理」

そこまで言って紫々は倒れた
倒れた紫々の背中の上には女の子が……

「って、この子霊夢じゃないか！？
おい紫々、どういう事か説明してくれ！」

「落ち着けアルス！　俺みたいに首を絞めるな！
いくら紫々でも意識が無い状態で首を絞められたら危ないって！」

「やあ霊夢ちゃん

このお爺さんと居てもあまり楽しくなかっただろ？
お兄さんが一緒に遊んであげるから、巻き込まれないよに一緒にあっちに行こうね」

「にーい？」

僕が紫々の首を絞め、それを抑える砲魔
パディは僕らの事を無視して霊夢を抱き上げて避難した。

この場は良い具合に壊れているらしい
でも……落ち着くのは暫く無理そうだ。

少年期編　十五話【悲しき貧乏時代】（後書き）

平行世界の簡易キャラ設定

八雲紫／八雲紫々（しし）
隙間から見つめる神隠し

最難クラスに悩んだ1人
紫（ゆかり）の別読みは紫や紫々（むらさきし）なのでこうなった
二つ名はちょっと捻ってみた……と思いたい

簡易特徴
一応戒魔の師匠であり、敵であり、悪友であり、敵であるという複雑な関係
敵といっても嫌いという訳ではなく、苦手だし気に入らない、そして複雑な事（初話にて）が有ったので戒魔に敵と認識されている。

多種多様の生物が存在する幻想郷でも実力が非常に高い
しかしその紫々に鍛えられている戒魔は陰陽術が苦手であり、弱いので慧眼（けいがん）が鈍っているのでは？　そう疑われる事も少なく無かった。
しかし、戒魔の才能は低かったが非常に努力家だった
更に紫々の厳しい指導も加わり、殺し合いでも中級妖怪をも殺せる程度の実力は有る。
だがその程度では幻想郷の平和を守れないと思った戒魔は十五歳になった時、命名決闘法案（スペルカードルール）を考案、そして採用される。
それにより、戒魔は実力は低くとも決められた公平な戦いでの実力を評価され、それと同時に戒魔を育てた紫々も少しだが評価された。
紫々は暑さが大嫌いであり、夏になると暑さを感じたくないので六

月末から九月始めまで寝ている（ただし、寒い地方に逃げているという噂も存在する）

夏に行動する事は滅多に無いが、風見幽亜が主催の太陽の畑で行う向日葵鑑賞には必ず出席しており、紅霧異変（八月）や鬼の萃麻の件（七月）だが、前者には警戒していただけで手を出さず、後者は少し介入するも基本的に不干渉だった。

立場上、一応確認などはしているので本当に夏も寝ているのかは不明である。

なお、紫々と大物達は基本的に仲が良く、フラムドールと知的な会話をするのが趣味と言っている

他にも様々な遊びを大物達としており、もしかしたらで悪巧みをしているのではないのだろうか……そんな噂も存在する。（無論そんな話はしていない）

少年期編　十六話【戒魔と妖精の関係】（前書き）

急いで書いたので少し雑かもしれません
後々修正しますが……

少年期編　十六話【戒魔と妖精の関係】

視点　パチュリー

「釣れませんねー……」

「……釣りが初めての私が釣れるわけないじゃない」

なんで私……ナズナと一緒に釣りなんてしてるのかしら？
私は今日も図書館で本を読む予定だったのに、釣りって何よ？

「私だって初めてです
向こうで釣りをしているご主人様達はどうなんでしょうか？
離れてますし、この霧だとよく見えないんでちょっと分からないんですが……」

「美鈴が一緒なのよ、別に心配する必要は無いわ
それに、気になる気持ちは解るけど、この組み合わせは籤で公平に決めた事よ
今更文句を言っても仕方無いでしょ？　確実に不利なのは分かってるんだしね」

ここまで話せば察せると思うけど私、美鈴、戒魔、ナズナの四人は霧の湖で釣りをしてるわ
私とナズナ、美鈴と戒魔で組んで、多くの魚を釣った方が勝ちよ
常に外で門番している美鈴と貧困生活をしていた戒魔に、引きこもりの私と釣りをまともに知らなかったナズナ
どちらが勝つかは火を見るよりも明らかだと思わない？

何故こうなったか、それは隠し事をした戒魔と、戒魔の様子に気づかなかった私達が悪い
簡単に言うと、戒魔が疲れで危ない倒れ方をしたのよ。

訓練を施し、組み手もして何度も戦っている美鈴
長時間の勉強の為の集中力に更に神経を使う魔法の訓練をさせている私
疲れている戒魔を引きずり回し、夜更かしをさせているレミィ
それらの疲れを隠し、気付かなくて頑張りすぎた戒魔

これらの事が原因であり、それを二ヶ月も毎日休み無しで続けていれば倒れて当然だったわ
気付かず言わなかった戒魔は間抜けであり、私達は指導者として失格だったという事。

倒れた時なんだけど
レミィと話し終えて立ち上がった時、立ち眩みのように足がおぼつかなかったと思ったら倒れたそうよ
ナズナは慌ててて泣き叫ぶわ、レミィも混乱して私と美鈴を呼び出すわと騒がしかったらしい
私達がレミィの部屋に入って見たのは戒魔に膝枕をして呼びかけているナズナ
そして頬を軽く叩きながら目を覚ますように言っているレミィの姿だった。

私と美鈴はすぐさま戒魔の状態を確認したわ
美鈴が言うには過労が原因であり、あまり体を休ませていなかったのが悪かったと言った
私からは栄養失調だと判断、紅魔館では人間が食べられる物が少な

いので、自然と食べる物が決まってしまう
色々な栄養を摂取しなかったのが原因であり、レミィが指示する食事にも偏りがあった。

それを話した時、私と美鈴は厳しくしすぎた事と休ませなかった事を反省した
レミィは人間の食事に眼を向ける事を忘れていた事を、目を覚ました戒魔に謝っていた
ナズナは主の疲労に気付かなかった事を悔やみ、目を覚ましても戒魔から離れなかった。

そもそも、私と美鈴は大事な事を忘れていた
それは戒魔の精神は大人のようだが、肉体が子供という事だ
戒魔があまりにも大人のような対応をし、頭が良いので忘れていたが、体は子供
私達の普段しているような鍛錬や勉強ができる時点で謎だったのだすぐに強くなるし、本人も疲れを見せないので頑張らせすぎたわ。

まぁそういう訳で、戒魔は十日間鍛錬と勉強を禁止
自己管理もするように徹底的に説教してやった
……私達もナズナに怒られたんだけどね、そういう私達も戒魔に厳しくし過ぎだと理由で。

そういう訳で今日は休み五日目
レミィが私達がある意味最も悪いのだからできるだけ戒魔に付き合えと言われた
それで、今私達四人がしているのが釣りなのよ。

納得してくれたかしら？

「……釣れないわね」

「こういうのをぼうずって言うんですよね？
それにしても釣れないだけならともかく、餌に触れもしないってどういう事でしょうかね？」

そう、私達だって餌や仕掛けだってしっかりしてるわ
なのにどうしてか、釣りを始めてから二時間経つが一向に食いつかない
勝負の時間は三時間なので残り一時間、勝てる自信は全く無いわ。

それでも、外で何かをするという行為が久しぶりなのであまり退屈しない
無理矢理参加させられたし、全く釣れないけど楽しいので来て良かったとは思うわ
……少し悔しいけどね。

釣れない事が悔しく、思わず溜め息を吐いてしまう
それを見てナズナは苦笑し、魚が掛からないか待っている。

そこに戒魔達の方から大声が聞こえた。

「ぶっ潰してやる！」

「それはこっちが言いたい言葉だ！　返り討ちにしてやる！」

後者の声には聞き覚えがあるわ、というか戒魔の声よ
でももう一つの声は？　子供の女の子という感じの声だったけど……

「ご主人様の声！？

パチュリー様、ご主人様の大声が聞こえたので見に行ってきます！」

「まあ待ちなさいナズナ」

「きゅ！」

戒魔の声に立ち上がり、走りだそうとしたナズナの首根っこを掴み止める
喉を絞められたナズナは妙な悲鳴を上げ立ち上がるのに失敗し、そのまま仰向けに倒れる
更に不運な事に、ナズナが今まで座っていた丸太に頭を打ち突けてしまう。

打ち所が悪くかなり痛かったらしく、ナズナは転がりながら呻いているわ
その様子に申し訳なくなってしまいながら謝る。

「あ、ごめん
でも落ち着きなさいナズナ、どうせ気の強い妖精が戒魔に喧嘩でも売ったんじゃない？
戒魔の実力なら妖精程度には滅多に負けないでしょうし、美鈴も居るから大丈夫よ」

「こほっ、こほっ……だ、だいびょうぶでじょうが？
まだごじゅじんじゃまのだいじょうはがんぢじでないんでずよ」

訳すと「大丈夫でしょうか？　まだご主人様の体調は完治してないんですよ」ね。

「だから、例え危なくても美鈴が居るでしょ？

戒魔は紅魔館の客人だし、態々危険に晒すような事はしないわ
……確かにこの前のは悪いとは思うけどね」

「そういう事を言っているのでは無いのですが……」

この前というのは先ほどの話にも出た戒魔が倒れた事よ
ナズナとしては戒魔を訓練させていた私達も悪いんでしょうね
戒魔自身が望んでいたのは知っているから八つ当たりなのよ
ま、八つ当たりなのはナズナ自身も気付いてるから責めないけどね
只単に自分の中で整理できていないだけだし、戒魔からも咎められ
ているからもう訓練とかに関しては言わないわ。

「何か有ったら戒魔達と一緒に居る三人の妖精メイドが知らせにく
るでしょ
その為に戒魔と美鈴を含めて向こうには五人も居るんだからね」

「……はい」

妖精メイドの内、一人は介護、もう一人は連絡、最後は補助よ
介護は戒魔に何か有った時の為に医療知識を持っている子
連絡は同じく戒魔に何か有った時に私達に報告する子
補助は疲れから少し動きが鈍っている戒魔の手助けの子よ。

なお、その妖精メイド達は戒魔に好意を持っているわ
戒魔が移動中の時に掃除とかを手伝ってもらったとか、荷物を一緒
に持ってくれたとか
そんな小さな事だけど、それが嬉しかったらしいわ
他にも料理を教えてたり、こけた時に挫いてしまった時には背負っ
てくれたりと……
かなり面倒見が良いらしく、そこそこの数の妖精メイドから好かれ

ている。

ナズナはそれが少し気に入らないらしいが、自分の主が好かれる事は嬉しいらしい
なんとも可愛らしい嫉妬だと思いながら微笑ましくも思う。

多くの妖精メイド達からは妖精なんかに優しくする戒魔は変わった人だから「変人」と呼んでいるわ
その妖精メイド達の中でも世話になった回数の多いのがあの三人。

あの子達は素直な好意から、戒魔の事を「戒魔様」と呼んでいるわ
つまり、多くの妖精メイドは戒魔を「変人」と呼び、数回助けられて仲の良い者は「戒魔さん」と呼ぶ
で、最も多いあの子達は「戒魔様」、戒魔自身は何と呼ばれても返事をするから好きに呼んでいるそうよ。

そんな戒魔を嫌っている者も少しだけど居るわ
数少ない真面目な門番隊達の一部の子よ。

なんでも、美鈴との鍛錬の時間が減らされたからだとか……
美鈴本人も楽しんでるからあまり言えないけど、門番隊の子には不満らしいわ
客人なんかに美鈴が時間を割かねばならないというのも気にくわないそうだけどね
美鈴もけっこう好かれているのかと、少し関心したわ。

それにしても……少し肌寒い気がするわね、何故かしら？

「パチュリー様！」

私を呼ぶ声が聞こえたのでそちらを振り向いてみると、戒魔に付いていた子じゃない
少し慌ててるという事は……戒魔に何か有ったのかしら？

「落ち着きなさい、何が有ったの？」

「は、はい
あの、戒魔様が氷の妖精に喧嘩を売しました！」

「戒魔が売った……ってどういう事？」

変ね……まだ体調が完全じゃないのに戦うなんて
それに、喧嘩を買うならともかく売るなんて……戒魔らしく無いわ。

「はい、氷の妖精の攻撃で妖精メイドが怪我をしそうになってしまいまして……」

「それで戒魔が起こって喧嘩を売ったと？」

「氷の妖精は美鈴様を狙って攻撃したそうなんですが……狙いが外れてしまったのか妖精メイドの方へ
全員避けようと動いたんですが、一人足を縺れさせました
それで戒魔様が助けたんですが……怪我させそうになったのに反省しない氷の妖精に怒ってしまいました」

美鈴に構ってほしくて攻撃したのが妖精メイドに……ねぇ
それは戒魔なら絶対怒るわ、馬鹿な妖精ね。

構ってほしいというのは妖精らしい子供のような思考だけど、戒魔には許せなかった

体調が完全じゃないのに喧嘩を売るなんて、私達も少し深入りしすぎたかしら？

「まぁ美鈴も居るし、大丈夫でしょ
私は動かないわ、万が一の時はまた呼んでちょうだい」

妖精メイドは私が動かないと理解したんでしょうね
おとなしく戒魔達の元へ戻っていったわ。

「ナズナはどうするの？
戒魔の居る場所に向かう？　それともここで待つ？」

そう、ナズナは行かなかった
行きたいけど我慢しているが、何故我慢しているか私には分からない。

「行きたいですけど……妖精にご主人様が負けるなんて思ってません
怪我をしても美鈴さんがいますし、待っていて怖いですけど大丈夫だと思います」

そう言ったナズナの手は震えていた
主が美鈴以外と戦うのはナズナの知っている限り初めて
どんな者か分からなくて心配だが、美鈴の実力も信じている
だから自分は必要無いだろうし、邪魔だろうから行かない……そんな所かしら？

「私は行く事を進めるわ、美鈴以外との戦いは見た事無いんでしょ？
見取り稽古はきっと良い経験になるなるでしょうし、行って損は無いと思うわ」

行きたいのを我慢させる必要は無い
簡単な免罪符を与え、行く事を促す
少し泣き顔になってもいるし、手も強く握っている
只でさえ戒魔が倒れて神経質になっているのに、このまま我慢させては危険
少しは発散できるようにしなければならない。

「そう……ですね、少しは経験になりますよね
それにご主人様に何か有ったら……うん、パチュリー様、ご主人様の所に行ってきます！」

「はいはい、気をつけてね
何か有ったらすぐに私の元に来るのよ？」

「はい！　行ってきます！」

そう言って、ナズナと妖精メイドは戒魔の元に駆けていった
やっぱり忠誠心ってのは大事なのかと思い、私は再び湖に糸を垂らし始めた
少し肌寒いので火の魔法で暖を取り、ゆっくりと魚が掛かるのを待つ。

平和よねー……多分。

続く

元世界編　新六話【引きこもりの怖さ】
表との時差……三十五日

視点　紫々

……酷い目にあったよ
藍も橙も居ないから僕が霊夢の面倒を見ないといけない
そんな日に限って砲魔も呼ぶんだ、世話で大変だったからなかなか
行けなかったんだよね。

現在、霊夢はパディの腕の中で眠っている
アルスが抱こうとすると嫌がり、砲魔はそもそも面倒と言って抱こうとしなかった。

で、ここに居るのは砲魔とアルスにパディか
砲魔も頑張ったんだろうね、疲れが見え隠れしてるよ？

「それで砲魔、答えは得たのかい？」

僕の質問に、砲魔達は苦い顔をする
どうやら答えは得られていないのに僕を呼んだらしい。

霊夢の面倒でも大変なのに、まだ終わっていない事で呼んでほしくなかったよ
僕だって暇じゃないんだよ？　それを分かってやってるのかな？
……まぁ答えを得られるはずが無いんだけどね。

「答えはまだ得られてない
だが、少し予想ならできたよ」

「「え？」」

それは僕も意外だった
彼は確かに頭が良い、だがこの件を当てられるかな？

「いいだろう、言ってみなよパディ」

僕の言葉に少し不機嫌になりながら、彼は口を開く。

「戒魔の奴は……既に死んでるんじゃないか？」

「「！？！？」」

「へぇ……どうしてそう思ったんだい？」

戒魔は誰にも弱みを見せなかった
砲魔が気付いていないのが良い証拠だ
僕が知れたのは幻想郷の管理人だから、それが無ければ僕だって知れなかったんだ
それほどまでに戒魔の隠し事は上手かったのだ。

「お前が霊夢を連れていた事が証拠の一つ
それに戒魔の性格と幻想郷中を探しても見当たらないんだ
死ぬ直前にでもお前に自分が死ぬ事を話して、誰にも話さないように伝えた上で霊夢を頼んだんじゃないか？」

……霊夢の事で確信を持たれたみたいだね
霊夢さえ居なければパディは言わなかっただろうし
失敗したなー、頭が良いとは思ってたけど、ここまで頭が回るとは思わなかったよ。

「たしかにその可能性はあるね
でも、戒魔は死んでいないよ、これは確実だし断言できる」

「ああ、それは想定範囲内だ
霊夢ではまだ大結界の維持はできないだろうからね」

そう、博麗大結界は博麗の血筋の霊力で維持されている
新たに契約し直さない限り、霊夢は大結界の守護者にはなれない。

ならば誰の霊力で維持されているか、答えは戒魔だ
確かに僕は戒魔を僕の知らない世界に飛ばした
だが博麗として、博麗大結界に必要な霊力は奪い続けている
だから僕だけは戒魔の居る世界も居場所も知っている
……行ったことは無いし、まだ見た事も無いけどね。

だがそれが仇となった
パディは博麗大結界が博麗の霊力で維持されている事を知っているようだ
これだから引きこもりは厄介なんだ！

「つまり、戒魔は僕達の知らない場所で生きている事になる
だが幻想郷内で僕達全員が知らない場所なんて滅多に無いだろう」

「なら戒魔はどこに居るんだ！
俺達だけじゃ見つけられないってのか！？」

「おそらくそうだろうな、だが砲魔
こいつが手を出しているんだ、もしかしたら戒魔は異世界とかに行っているかもしれないぞ？」

「「異世界！？」」

「……」

ちっ、ここまで言われると誤魔化すのは容易じゃないな
砲魔とアルスの二人に知られたか……パディには黙っているように釘を刺しておくべきだったな
こうなったら全員黙っていてもらわねば……言いふらしたら殺す事も考えておこう。

「だが、この仮定が合っていたと考えても変だ
何故戒魔を異世界に送る必要が有る？
戒魔が邪魔だった？　それは無いな、戒魔は幻想郷を心から大切にしていた
その戒魔が邪魔になったのなら、戒魔が幻想郷に仇なす者だった時だけだろう
まだ後継者も育成もしていないんだからな」

「……」

「では逆に戒魔が必要だったから異世界に送ったか、これが正解だろうが理由は？
戒魔が死にそうだったから異世界で治療してもらおうとかか？
だが幻想郷にも優秀な医者、永仙が居るんだ
そんな不確定な事をするよりも、確実性の高い者に看て貰うだろう」

こいつは……僕のしてきた事をどんどん剥がしていくね
本当に頭の良い奴は困るよ……味方だけに始末に負えない。

「同じ前提にして続けるが、体に何かしら細工を施した……かな？
例えば性別を変えたとか、見た目が変わったとか、若くなったとかなだが幻想郷内でそれをするのは少々拙いだろう
確かに博麗の存在は大事だろうが、あまり贔屓するのは問題だ
死ぬ時は誰だって死ぬんだからな」

「という事は……もしその仮説が合っていた場合
戒魔は異世界で姿を変えて生きているって事か？」

「あくまで僕の仮説だけどね

でもアルス、こう考えたらそれなりに繋がってしまうと思わないかい？」

「……うん、紫々の性格とやり口も考慮したらね
確かにそれは予想できるけど、だからと言ってそれを確信にしたら駄目だろ？」

「だからこれは仮説であり、予想なんだ
でも、どうやら合っていたみたいだけどね」

パディがさり気なく僕の顔を見てくる
そう、僕の無表情は既に剥がれていたんだ。

今の僕の顔は呆れと関心の混じった顔
どう見ても合っていますと言っている顔なのだ。

ここまで考えられ、当てられた事が楽しい
思わず口から笑い声が出るのを耐えながら、拍手をしてしまう。

「くく、お見事、お見事だよパディ
君の予想は大方正解、最後の予想が最も近い予想だったよ」

「なら具体的に説明してもらおうかな
長々と色んな場所に行って疲れたあげく、君を待つのは退屈だったんだ
話してくれないと納得できない」

「俺もパディの同意するぜ
俺なんてお前と会った日からずっと探してるんだ
絶対に逃がさねぇからな」

「僕としては戒魔の生存なんて興味は無い
けどせめて達成感ぐらい感じたい、だから話してもらうよ」

僕の前に立つ砲魔、右後ろにはパディ、左にはアルスが立つ
逃げようと思えば逃げられるが……

「わかったわかった、全部は話せないけど話してあげるよ
その後にはちゃんと僕の言う事を訊いてもらうからね」

僕の言葉に頷く彼ら
はぁ……これでやっと霊夢を砲魔に預けられるよ。

少年期編　十七話【誰にでも許せない事は有る】

逆偽鏡の世界

少年期編　十七話【誰にでも許せない事は有る】

視点　戒魔

「大漁ですね、私達の勝ちでしょうか？」

「これだけ釣って負ける事はそう無いと思うぞ
ナズナもパチュリーも初心者って言ってたしな」

現在釣った魚の数、二時間で三十四匹
約四分に一匹の計算になる
かなり良い調子だな。

個人別にすると俺が十三匹、美鈴が二十一匹だ
美鈴は趣味で釣りをする事もあるらしいが……本当に趣味の範囲なのか？

そんな疑問はともかく、修行を強制的に止められて五日目
俺としてはそろそろ鍛え始めたいんだが、レミリアに止められている
確かに倒れたけど、そこまでしなくてもいいと思うんだがな
はぁ……それだけ心配させたと思って諦めているよ。

それにしても、霧の湖といえばチルノと大妖精だな
こっちでもあいつらは居るのか？
女で？　性格は？　どっちも向こうと同じだと楽なんだが……

美鈴とパチュリーはほぼ同じ、レミリアとフランドールって奴は入れ替わり
……思ったより交友範囲が狭いな
どうせだからチルノ達とも知り合いたいものだ。

……少し肌寒いな
という事はチルノが近づいてるのかな？
そういえば能力も同じなんだよな、違う奴は居るのか？

「少し肌寒くなってきましたね、大丈夫ですか？
冬も近いですし、油断して風邪をひいてはいけません」

どうやら美鈴も少し寒く感じるようだ
いや、寒いとは思うが体感的には大した事は無いという感じかな？
美龍は真冬でも少しの厚着で門番の仕事をしてたしな。

「いや、これぐらいなら大丈夫だ
この程度なら涼しいぐらいだし」

「そうですか？　でも寒いと思ったらすぐに言うんですよ？
……そうだ、そこの妖精メイド、戒魔少年に薄めの上着を持って来てちょうだい」

「はーい」

美鈴に頼まれて俺に着いてくれていた妖精メイドの一人が紅魔館に向かっていた
どうやら美鈴は俺を心配してくれているようだ
まだ警戒は完全に解かれていないが……倒れたのが警戒を解かせたのか？

美鈴とパチュリーには警戒されていたのは気付いてた
彼女達は俺から正体を訊きだそうと何度も話しかけてきたからな
躱し続けていたが、そろそろ実力行使で来られると思ってたんだ。

だが俺はその直前に倒れてしまったので力尽くで話させる訳にはいかなくなった
自己管理もできなくて自爆したせいか、警戒や疑いの視線が薄まった
偶然の失敗とはいえ色々な事が好転したし、諦めて休もう。

待つ事数分、先ほど上着を持って来てくれた妖精メイドが戻ってきた
俺の分だけではなく、全員の分を持って来てくれた
気が利く妖精も珍しいな。

「どうぞ戒魔様、美鈴様もどうぞ」

俺に着いてくれている妖精メイド達は何故か俺を戒魔様と呼ぶ
客人だからだろうか？　しかし変人やら戒魔さんとも呼ばれる
彼女達が俺をどう思っているのか、いまいち判断できないな。

妖精メイドから薄い上着を受け取り、軽く羽織る
美鈴はまだ寒くないのだろう、膝の上に乗せただけだ
妖精メイド達は俺と同じように軽く羽織った。

「ん、ありがとな」

「いえ、気にしないでください」

この子は良い子だと思いながら釣りを再開する
相変わらす簡単に釣れないが、こんな時間も楽しい。

……急に寒くなってきたな
こんな急に寒くなるなんて、自然じゃ有り得ない
となると……誰かが寒くしている？

美鈴も同じ考えになったのだろう、少し眼を鋭くしている
顔は変わっていないので分かり難いが、俺から見れば大きく違って見える。

「またですか……」

「また？　原因を知ってるのか？」

「あ、聞こえちゃいました？
この辺りを縄張りにしている妖精が原因ですね
【冷気を操る程度の能力】を持っているんです」

冷気……だ、誰だ？　俺はそんな能力を持っている奴は知らないぞ！

「大して強くないんですが、鬱陶しくて……
自分の力を過信して辺りに冷気を振りまくから困ってるんですよ
妖精だから殺しても死なないし、全く面倒な……」

確かに、自分の力を過信している奴ほど面倒だな
妖精は自然から生まれたからな、自然が無くならない限り死なない

しかも冷気を振りまくって……厄介すぎないか？

とにかく、霧の湖で名前も知っていて強い妖精はチルハと大妖精だけでもそいつらの能力は冷気じゃないんだ、俺の知らない妖精なのか？それとも……能力が違う……とか？

「めーーーりーーーーん！！！」

う、煩い！　誰の声だ！？

って、今美鈴の名前を呼ばなかったか？

そう思って美鈴の方を見てみると苦笑してたなんというか……仕方無いという感じの顔になっている。

今の話の流れから、その冷気の妖精だと思うんだが……邪魔とか鬱陶しいって言ってなかったか？

さっきのは戦った時の印象で、個人的には単なる仲良しとかか？

「いたー！　凍れー！！！」

「「「「……え？」」」」

「みんな避けて！」

妖精の突然の言葉に、俺と妖精メイド達は動きが止まってしまったその直後に美鈴から避けろという声が聞こえ、俺は急いで避けようとしただが座っていた妖精メイドの一人が立ち上がろうとし、足を縺らせて倒れてしまう。

それに気付いた俺が振り返ってみると、氷柱（つらら）がその妖精メイドに当たる軌道を進んでいた
まだ離れていて到達まで時間が掛かるといっても、危険なのに変わりは無い
美鈴は他の妖精メイドを抱えて下がっている途中、助けられるだろうが厳しいのは変わらない。

ならば誰が行くか、俺が行くしかない
この判断を数瞬で決め、急ぎ妖精メイドの側に戻り、彼女を抱き上げた
妖精メイドは小さな悲鳴を上げたが無視、急いでその場から離脱する。

俺達が離れた直後、小さめの氷柱が妖精メイドが居た場所に刺さる
あれが刺さっていたら大怪我では済まなかったかもしれない
そう思うと、段々怒りが込み上がってきた。

どうでもいいが、氷柱に当たっても凍ったりはしない
刺さっても断じて凍ったりしないが、あの声の持ち主はそれに気付いているのだろうか？

氷と飛ばしてきた妖精が姿を見せた
見た目の年齢は俺と同じぐらいだろうか？
水色の髪に氷のような、髪と同じく水色の羽
水色と白を中心とした洋服
攻撃が外れてしまったのが気に入らなかったのか、顔は不機嫌だった
それでも子供の顔特有の可愛さが見える。

見た目はチルノに似ているが、性別が違い、色が大きく違う
チルノは赤い髪に燃えるような、髪と同じく赤い羽

赤と白を中心とした洋服
気弱さが見えるが、負けん気の強い眼をしている妖精だった。

だが、俺にはそんな事は関係無い
今最も問題なのは、この妖精が妖精メイドに怪我をさせる所だったという事だ
彼女の顔には反省の色が全く見えないのに苛々する。

「ちぇー……めーりんは今日も避けちゃうし、他の奴にも当たらない頑張って当たるように練習したのにー！」

あまりにも自分勝手な発言に、更に怒りが増す
抱き上げていた妖精メイドを横に下ろし、妖精を睨む。

「はぁ……チルノちゃん、私に攻撃する時は私だけを狙ってって何度も言ってるでしょ？
この子達が怪我しちゃったらどうするの？　危ないから気をつけて」

「むぅ……でもめーりんは絶対避けるし、みんな助けちゃうじゃんだから別に大丈夫でしょ？」

どうやら妖精の名前はチルノと言うようだ
しかし、彼女の言っている事は無茶苦茶だ！
そんな理由で攻撃したのか！？

もう我慢できない、この妖精は……潰す！

「おい、そこの……チルノだったな」

「ん？　あんた誰？」

どうやら俺の事は眼中に無かったらしい
という事は、俺が助けた妖精メイドにも気付いていなかったのだろう
これで更に許す事ができなくなった。

「さっきの氷柱で襲ってきたのはお前か？」

「見れば分かるでしょ？
というかあんた誰？」

「その攻撃で妖精メイドが怪我をしそうになった」

「別にいいじゃん、妖精は死なないんだからさ
で、あんた誰？」

こいつは……反省という言葉を知らないのか？
それに、妖精はお前と同族だろうが、それなのに死なないからいい
……だと？

「ふ……ふざけるな！
死ななければいいだと？　お前は痛みを知らないのか！？」

「はぁ！？　いきなり怒鳴んないでよ！
それにあんた誰って何度も訊いてるじゃない、答えなさいよ！」

「俺の名前は夢幻戒魔！　お前を倒す者の名前だ！」

「ちょっと戒魔少年！　突然何を……」

美鈴が割り込んできたが、そんな事は無視だ

俺が今話したいのはこの妖精なのだから。

「あたいを……倒すだって？
ふん！　人間の癖に生意気よ！
弱っちい人間の子供なんかにあたいが倒せるはず無いじゃない！」

「人間を舐めるなよチルノ……人間はお前等妖精と違って成長できるんだ
お前みたいに遊び半分で喧嘩しているような奴に、俺が負けるはずが無い！」

「な……なぁ……なんですってーーーー！！！」

どうやらかなり頭に来たらしい
だが俺はお前が攻撃してきた時から苛ついてたんだ
この程度の挑発で怒るなよ。

本音を言ったから本当は挑発のつもりは無かったんだがな。

「あんた！　あたいと勝負しなさい！
あたいが勝ったらあたいを馬鹿にした事、謝らせてやるわ！」

「いいだろう、お前が勝てたらいくらでも謝ってやるよ
だが、お前が負けたらこの子に謝ってもらうぞ
突然危ない攻撃をしてごめんなさい……ってな！」

こうなったらもう後戻りはできない
横に居た妖精メイドを避難させ、俺はチルノの方を向く
チルノの顔はやる気に満ちており、俺を倒す気で一杯だ
だがそれは俺も同じ、チルノに倒す気しか無い。

美鈴が後ろから何か言っているが無視だ
妖精メイド達を避難させてくれればそれでいい
喧嘩のような戦いとはいえ、美鈴は戦いに割り込む奴じゃない
その心配は無いので俺は安心してチルノと戦える。

「ぶっ潰してやる！」

「それはこっちが言いたい言葉だ！　返り討ちにしてやる！」

この世界に来て初めての、本当の戦いが始まった
それが妖精なのは少し締まらないとも少し思っているが……

続く

元世界編　新七話【今日から俺がお父さんの代わり】
表との時差……三十五日

視点　砲魔

「「「……」」」

戒魔は行方不明……か
色々と経験してきたと思うけど、世界移動までするなんてな
大変なんだろうが、少しだけ羨ましいぜ。

俺も異世界に行って、色んな物を見てみたいけど……紫々が許さないな
何故か、霊夢が成長して妖怪達と戦えるようになるまで、俺が異変を解決しなければならないからだ。

博麗が解決しなければならないんじゃないかって？
別に戒魔が必ず参加しなければならない訳じゃない
解決するのは人間である必要があるだけだ。

そして異変を解決できるほど力が有り、ある程度自由な人間

それは俺ぐらいしか居ないからだ。

刹那も解決してもいい人間だが、あいつには紅魔館という縛りが有る
それで解決に向かえなかったり、逆に異変側の関係者になる可能性
も否定できない。

妖牙は半人半霊だから一応人間だ
だがあいつにも白玉楼という縛りが存在する
刹那と同じ理由で異変の解決者として信用できない。

「さて、戒魔の事は全部話したけど……戒魔とは別の問題が有るんだ」

戒魔とは別の問題？
博麗大結界は戒魔の霊力を今も使ってるから大丈夫だろ？
他の問題は異変だろうが、それは俺が居るから大丈夫だろうし……

「その問題は……新しい博麗の御子……いや、博麗の巫女の事だろ？
博麗の巫女霊夢、彼女の扱いはどうなるんだ？」

霊夢……そうか、霊夢はどうするんだ！？
ここに居るって事は戒魔と一緒に居ないって事だ
となると誰が霊夢を世話する事になるんだ？

「正解だよパディ
僕としてはこっちで預かりたいと思うんだけど……
僕は忙しいし、藍もする事が多い
橙にはまだ任せられるとは思えないからね
今までだってけっこう無理して預かってたからね」

八雲では預かれないのか……なら誰が面倒を見るんだ？
紅魔館が一番信用できると思うが……レミレアが煩いだろうなぁー
白玉楼は冥界、永遠亭は迷う、地霊殿は地下、命蓮寺は……人格かな？

「そこで戒魔からの希望を採用し、霊夢の面倒は砲魔に見て貰う事になっている」

へー、霊夢の面倒は俺が見るのか
戒魔の事だからもっと信用できる奴を選ぶと思ったんだがな……
…ん？

「俺が霊夢の面倒を見るのか！？」

「だからそう言っただろ？」

「責任重大だな、頑張れよ砲魔」

「アルスの言う通りだな
次代の博麗を育てるんだ、大切にする上鍛えてやらないとな
必要なら鍛錬予定表みたいのなら作ってやるぞ」

「はぁ！？　ちょっと待ってくれ！
俺で、お前達は俺で良いと思ってるのか！？」

俺の性格は知ってるだろ！？
なんで俺で納得できるんだよ！？

「戒魔が砲魔にって言ったんだし？」

「僕に子育ては無理だよ
人形を壊されたりしても困るし」

「紅魔館で預かれると思う？
僕だって子供の煩い声は嫌だしね」

「お前ら無責任すぎないか！？
せめてもう少しぐらい考えてくれよ！」

俺の言葉に全員が考え始める
最初からそうしてくれないか？

「僕としては戒魔の意志に関係無く砲魔に任せるのが良いと判断するよ
戒魔と話し合ったんだけど、信用できても周りの奴が邪魔になる奴が多いってなったしね」

「僕は砲魔に任せるのは不安だと思う
けど戒魔の親友だったお前が適任だと思う」

「子育て要因としては不安だね
でも砲魔には知り合いが多いだろ？
僕みたいな引きこもりよりも色んな場所に行っている砲魔の方が霊夢の為になるだろう」

考えても全員俺が適任だと言う
信用されているのかは不明だが、俺が良いと言われるのは少し嬉しい
理由も言われているから納得もできそうだ。

「……わかった、霊夢は俺が世話する

その代わり、紫々は養育費とか出してくれ
それぐらいは構わないだろ？」

「まぁ頼んでるのはこっちだしね
うん、了解
一定期間毎にその年齢に合ったぐらいは渡すよ」

よし、これで貧乏生活から脱出できるかもしれないぜ
養育には金が掛かるし、買わなければならない物も多い
俺の家は狭いからな、増築するか引っ越さないとな。

「アルスには色々と頼みたい
お前は器用だし、家事も結構できるだろ？」

「……数日に一日ぐらいならね
でも、僕の他にも頼んでよ？　僕だけだと手が回らないだろうし」

これで手伝いを雇う金が浮く
他は誰に頼もうか……堺音とか刹那かな？

「パディからは本と知識を借りたい
子育ての本とかも図書館に少しは有るだろ？
他にも困った時とかに知識を少しな」

「子育ての本なんて有ったかな……探しておくよ
知識に関しては一応子育て程度なら有るから大丈夫だと思う
でも、できるだけ自分でなんとかしてくれよ？」

パディの知識も揃えば安心できそうだ
これだけの助けが有れば初めての子育ても頑張れると思う

飽きっぽい事は自覚しているけど戒魔の子供なんだ、絶対に逃げ出さない！

戒魔……もう会えないだろうが、お前の代わりに頑張るからなでももし会えたら……子育てに費やした苦労分ぐらい殴ってやる！だから覚悟しておけよ！　無理だろうと、絶対に殴ってやるからな！

少年期編　十八話【今の実力】（前書き）

初戦闘
しかしスピード感とは縁が無い
更に戦闘と言えるほど長くも無い……というか短い上に説明ばかり

漢字の読みは各自好きなようにどうぞ（音読みでも訓読みでも英語でもラテン語でもフランス語でもドイツ語でも古代神官文字語（ヒエラティック・テキスト）でも……いや最後のは無理か）

少年期編　十八話【今の実力】

視点　美鈴

チルノちゃんは戒魔少年を怒らせてしまいました
原因は妖精メイドに怪我をさせてしまう所だったのに反省しなかった事かしら？
優しいというか何というか……人間らしさってこういう事を言うんでしょうか？

実力の高い妖怪達は人間みたいに強い感情で動く事は少ないですからね
こういう面では人間や弱い妖怪が羨ましいです。

先に攻撃を仕掛けたのはチルノちゃん
空中から氷弾を数十個ほど適当にばらまきました
しかしあまり狙っていないのか、戒魔少年からは少し離れた位置に落ちます
なお、戒魔少年は一歩も動いていません。

怒りの顔だった戒魔少年も、動かずに外れた攻撃に呆れています
チルノちゃんはその呆れ顔に気付いたらしく、空中で地団駄を踏んでいます
いえ、踏めていませんが……

「きーーー！　避けんじゃないわよ！」

「……お前が外したんだろうが

行くぞ！　光！」

そのまま戒魔少年は魔法を発動しました
使用した魔法は光の属性、手の上に大きい光の弾が現れた
両手を揃えて上に向け、光の弾を停滞させました。

戒魔少年は何よりも魔法の発動速度を上げる訓練をしたそうです
その発動速度はたった一言（シングルアクション）
簡単で威力が低いとはいえ、一言（シングルアクション）にするのは少し難しいとパチュリー様に教えてもらいましたが
どうやら彼は威力などは全て捨て、最優先で伸ばしたようです
制御も完全なので暴走する心配も無いと言われています。

そのまま光の弾をチルノちゃんに向けて飛ばしました
チルノちゃんはその弾を打ち落とそうと即時氷柱を作り出し、弾に向けて打ち出した。

「……弾けろ」

戒魔少年は言葉を発すると同時に後ろに飛び下がった
そして戒魔少年の言葉に応えるように光の弾は破裂した
チルノちゃんが飛ばした氷柱はそのまま戒魔少年の方に飛んだが、後ろに下がっていた戒魔少年には当たらない
しかし光の弾は破裂後、小さくなったがチルノちゃんに向かって進み出した。

「ちょっ！　なんでこっちに来んのよ！？」

小さくなっても自分に向かってくる弾に驚きながらも同じく氷弾をぶつけた

氷弾にぶつかった光の小弾は消滅した
自分を驚かせた光の弾を消した事に安心し、大きく息を吐いた
だが、敵の前でそれは大きな隙を作り出す行為だった。

「炎」

戒魔少年が一言
その手からは小さな炎の渦が打ち出されていた
まだまだ魔法の初心者であり、練習不足の戒魔少年にはあの威力が
精一杯なのだ。

しかし、戒魔少年の魔法は威力が低い代わりに速い
大きな隙を作ってしまったチルノちゃんにはこの攻撃は躱せない
彼女が気付いた時には、炎の渦は既に目の前に来ていた。

「っっっ！　凍れ！」

そう、躱せないのなら迎撃すればいい
チルノちゃんは目の前に来ていた炎の前に、炎と同じく小さな氷の
壁を作り出した
ほんの数瞬で壁を作り出す判断は凄いと思いますが、どんな攻撃だ
ったのか確認するべきでしたね。

「うきゃあ！　煙が！　煙で前が見えないー！」

高温の炎に低温の氷をぶつけた事で蒸気が起こり、チルノちゃんの
視界を塞ぎました
相手が氷の使い手と分かっている手段ですね
相変わらず戦い方が巧い……

「地、風、炎」

最初に地の魔法で自分の身長の半分ぐらいの壁を自分の両脇に作り出す
次に風の魔法で小さな風を巻き起こし、壁で空気が逃げないようにしている
最後に炎の魔法で小さな炎を作り出した。

風によって溜まった空気……この場合は酸素によって炎が大きくなる
炎は飛ばさずにその場で留まっているが、どうやって攻撃するつもりなのでしょうか？

「炎、風」

再び小さな炎を作り出し、先ほどとは違って打ち出すような風で今作り出した炎に当てました
炎は風の勢いに消されそうになるも、多くの酸素を受けて何とか炎は保つ
その炎は大きくなった炎に当たり、更に多くの風（さんそ）を得て打ち出された炎の先には……水蒸気で目眩ましされているチルノちゃんに向かっています。

「この～～～！　煙邪魔！　凍っちゃえ！」

チルノちゃんは自分の周りの温度を一気に下げ、空気中の水分を凍らせた（フリーズタッチミー）
邪魔な煙を凍らせて得意気な顔をするも、自分に向かっている炎に気付いていない
それも当然だろう、何故ならその炎は斜め下の方から弧を描くように向かってきているのだから。

「このまま……受け取っっっっ！！！
あ、あつ～～～い！　熱い熱い熱い熱いーーー！」

自分の周りで凍っていた氷の弾を冷気の風で打ち出そうとしたが…
…遅かった
打ち出す直前に炎がチルノちゃんの下半身に当たり、彼女の低い体
温と周りの氷で再び大きな蒸気が上った
チルノちゃんの姿が見えなくなる程の蒸気
私達からも彼女の姿を確認できない、熱いという声だけがチルノち
ゃんの位置を知らせてくれる。

相手が混乱している上、声で位置を教えてくれているのだ
一気に近づいて殴れば大きな手傷を負わせられるだろうが……戒魔
少年は飛べない
だから彼は魔法でしかチルノちゃんに攻撃できない。

と、そこへ私の後ろから駆け足で誰か近づいてくる
この気配は……ナズナちゃんね。

「はぁ、はぁ……ご主人様は大丈夫ですか？
さっきから聞こえる悲鳴は女の子の声だから大丈夫だと思いますが
……」

パチュリー様に知らせに行った妖精メイドもナズナちゃんの隣に居た
しかし彼女は息を切らしている、ナズナちゃんは少し呼吸が荒い程度
妖精メイドも体力不足ですかね？　今度鍛えておきましょう。

「戒魔少年なら大丈夫です、一撃も当てられていませんしね
彼の戦い方が巧いのが強いですね、単純なチルノちゃんでは勝てな

さそうです」

「そうですか……安心しました」

安心して落ち着いて呼吸を整えるナズナちゃん
しかしまだ安心できるとは言えない、何故ならチルノちゃんは本気を出していないからだ。

チルノちゃんは妖精の中で本当に強い
私の鍛えた門番隊でも勝てないほどに……本気を出される前に気絶させなければ戒魔少年に勝ち目は無い
それは戒魔少年も理解しているらしく、油断の欠片も無い眼でチルノちゃんの悲鳴を聞いている。

その証拠に、自分の周りに光の魔法を貯めている
五個ほど貯めて待機させているが、私からしたら甘い
声で位置が分かるのだ、その場所に不意打ちのように攻撃するべきよそうすればきっと倒せるだろうに……みすみす勝つ機会を失っている。

「今はどういう状況なんですか？
それとチルノちゃんって誰ですか？」

「チルノちゃんは戒魔少年と戦っている妖精です
現在は戒魔少年の炎の魔法を当てた所ですね
チルノちゃんが見えないのは蒸気です
彼女は氷の妖精ですからね、氷と炎で蒸気が起こってしまったんです」

「ご主人様はそれを計算して？」

「はい、目眩ましにも使ってます
だから戒魔少年の戦い方は巧いと言ったんですよ」

ま、巧いのは戦い方だけですけどね……
そうこう言っている内に、蒸気の煙も晴れてき、チルノちゃんの姿が見えてきました
スカートは焦げて幾つも穴が空いており、素足も火傷していて真っ赤になってます。

「あつぅ……熱かったよぉ……」

涙目で目元に涙を溜めて熱いと連呼するチルノちゃん
その目元とは裏腹に、顔は怒りに満ちていました。

「危険ですね……」

「……え？」

何度も言うがチルノちゃんは強い、それはもう妖精とは思えないぐらい強い
下級妖怪にも勝てる妖精……そして戒魔少年は下級妖怪と同等に戦える程度
そのチルノちゃんが本気を出したらどうなるかは……誰にでも予想できますよね？

そしてチルノちゃんは今怒っている
強い自分が油断したとはいえ、人間の子供相手に泣きそうになったのだ
彼女にはもう油断は無く、本気で攻撃してくる

戒魔少年に勝ち目は……無い。

まぁ……只でさえ勝てるはずが無いのに万全の体調じゃない
元々勝つ事は不可能だと分かっていた事とはいえ、喧嘩を売ったのは戒魔少年自身
死なない程度になるまで戦ってもらって、それから助ける事にしましょうか。

そうすれば戒魔少年も自分の未熟さを知れるでしょう
格上の見極め方も知れるし、新しい訓練の予定も立てられる
個人的には戒魔少年に頑張ってほしいですが、師匠みたいな存在としてはチルノちゃんに勝ってほしいです。

問題は……私の横に居るナズナちゃん
パチュリー様はチルノちゃんの実力を知らないから、妖精だとしか聞いてないから弱いと思ったんでしょうか？
それとも妖精に主人が負けるとは思わなかったナズナちゃんの意志で来たのか……
どちらにせよ戒魔少年の本気を知る機会なんです、邪魔をしようとしたら気絶させてでも止めさせてもらいます。

続く

元世界編　新八話【どうしようもない気持ち】
表との時差……三十日

視点　砲魔

紫々から霊夢を預かって五日
子育てがここまで面倒な事だとは思わなかった……
突然泣き出したりして困った……霊夢を預かってすぐに子育ての本を買って正解だったぜ。

ちなみに、俺は現在魔法の森に住んでいない
胞子やら何やらで霊夢が死んでしまうかもしれないからだ
今は博麗神社に住んでいるんだ

あまり出かけられる余裕が無く、自分の家に帰れないのが少し辛いあぁ……俺の研究材料が……でも胞子とか体に付けて帰ったりしたら霊夢が危ないから帰れん。

子供用の寝具や玩具はなとりに頼んだからそろそろ届くと思う
道具に関してはあいつに本当に助けられるな。

アルスはまだ子育ての最初の方だから毎日手伝ってくれている
俺の不器用さに呆れて何度も教えてくれて本当に助かってる
あいつが居なければ誰に頼ってた事やら。

だが一人になるともう戦争状態、常に切羽詰まっていて寝る暇も無いこの五日間で十時間も寝てないんだ、霊夢に怒る訳にはいかないし……
今の俺は小さな刺激でも切れそうだ！

手伝ってくれるアルスやパディ以外が来たら弾幕をばらまきそうで怖い
だがそんな事を考えた時に限って誰かが来たりし「砲魔ー居るかー？」
……来たりしたな。

怒りに暴言を吐きそうになりながらも我慢して落ち着く
霊夢が泣かないようにゆっくり寝かせ、玄関に向かう。

少し荒っぽく扉を開けると、そこには諏訪が機嫌の悪そうに立っていた
そして諏訪の姿を見た事で真苗の存在を思い出した……
紫々に真苗を知らないか訊く事を忘れてた！

「やあ砲魔、僕が何故ここに来たか……解るよねぇ？
毎日飛び回っていたのに、最近になって急に動きを止めたって聞いてね
どういう事か教えてもらおうと来させてもらったよ」

……やばい、これは相当怒ってるぞ
下手な言い訳をする訳にはいかないし、本当の事を言うのは駄目だ。

紫々はできるだけ隠しておきたいと言った
だが諏訪も関係者かもしれない、どうすべきか……

「黙ってられても困る
只でさえあまり動き回れないのに魔法の森まで行って、居ないから探し回った上で来たんだ
僕の思った以上に消耗が激しい、無駄な時間は少しでも減らしたいから速く説明してくれ」

考え事をしてたら更に怒らせたか！
どうする？　どうすればいいんだ？

「まぁ落ち着いくれよ諏訪～」

あん？　この声は……紫々か？

「その声は紫々か？
邪魔しないでくれ、僕は砲魔に話しがあるんだ」

駄目だ、少しは話を反らせると思ったのに全く反らせない
だが紫々なら何か知ってるかも……というか絶対に知ってるはずだ。

「紫々、この前会った時に訊き忘れてたんだが
お前なら真苗の居場所を知ってるんじゃないか？
諏訪の話だとお前の話していた時間ぐらいに博麗神社に真苗が向かったらしいしさ」

「なんだって！　紫々、真苗の事を教えろ！
僕も神奈も心配してるんだ、早く教えないと……呪うよ？」

眼……眼が病んでる！　こいつの眼は病んでやがる！
眼だけじゃなくて雰囲気まで怖いぞこいつは！

「わ、分かってる、話すから落ち着いてくれ
それに僕を呪ったら数少ない手掛かりも無くなるだろ？」

確かに紫々は現状で数少ない手掛かりになる存在
諏訪もそれを理解しているので、素直に邪気を落とし落ち着く
だがそれでも紫々を睨むのを止めない
蛇に睨まれた蛙とは言うが、この場合は蛙に睨まれた妖怪だな。

「そんなに睨まないでくれよ……
先に言っておくけど、僕だって真苗の所在は知らないよ？」

うおあ！　紫々の言葉と同時に諏訪に纏っている邪気が増した！
弾幕勝負をした時とかだとそんなに怖くないが、日常で見るとかなり怖いぞ！

「期待させるだけさせておいて知らないだって？
紫々、覚悟はいいかい？　駄目でも許さないけどね……」

「待って、待ってくれ！

まだ僕の話は終わってないよ！
いいから落ち着いてくれ、僕だってそんな事を言うだけの為にこんな場所に来るはず無いだろう！？」

「ちょっと待て！　こんな場所ってどういう意味だ！？
博麗神社を馬鹿にしてるのかお前は！？」

いくら紫々でも、戒魔の住んでいた博麗神社を馬鹿にするのは許さん！

「そういう意味じゃない！　あ～～～とにかくお前らは落ち着け！
いいか！　僕だって暇じゃないんだ！　一々全部突っ込んでたら日が暮れてしまう！
ちゃんと全部話すから落ち着いて、最後まで聞いてくれ！　いいな、い・い・な！？」

さすがに紫々も怒ってしまったようだ
俺はちょっと遊び心も有ったのですぐに落ち着いた。

しかし諏訪はそう簡単に落ち着けなかったらしく、まだ紫々を睨んでいる
その代わり諏訪の纏っていた邪気が多少薄れていた
それだけが安心できる要素だな。

「落ち着いたね？　じゃあ話すよ？　いいね？」

「わかったから早く話せ
今の僕は貴様の戯れ言に構っている余裕は無いんだ」

「怖い怖いねぇ
予め言っておくと、これはあくまで僕の予想だ
僕だって確信は持っていないが、状況と真苗だからという理由で合っていると思う」

「「……」」

なんか嫌な理由だな
真苗が少し可哀想だぜ。

「先ずは戒魔について話そう
砲魔は復習程度に聞いておきなよ」

紫々は先に戒魔の話をした
諏訪は真剣に聞き、一言も聞き逃さないという勢いで聞いている。

紫々の説明が終わり、戒魔の状況を知った諏訪の感想は……

「今回も戒魔は損してる気がする……なんだか哀れだなぁ」

だ、そうだ
巻き込まれ体質の戒魔を本気で哀れんでいる諏訪が凄いと思う。

「それで真苗の事だけど……」

「「……」」

「多分、戒魔を異世界に送る儀式に巻き込まれたんだと思う……」

「「やっぱり巻き込まれてたのか！」」

真苗らしすぎる……さすが真苗だ
自分からの行動には必ず不幸が巻き起こる
そんな真苗なんだ、巻き込まれた以外思い浮かばん。

俺も思っていた事だ、諏訪だって予想できていたらしい
凄く重い溜め息を吐いて全身から力が抜けたような格好になっていた
……いや、元々蛙なんだからその格好で合ってるんだけどさ。

「確信は無いんだけど、多分戒魔と似たような状態になってると思う
若返ってはいると思うんだけど、何も持って行ってないから心配だよ」

戒魔には色々持たせたって言ってたもんな
それに比べて真苗は何も無し
もし危険な世界だった場合、死んでしまうかもしれない。

「戒魔だったら博麗大結界での霊力維持の為の繋がりで生死程度なら把握できるけど
真苗にはそういうのが無いからね、残念ながら僕ができるのは予想だけ
しかもその予想は巻き込まれたんじゃないか？　それだけだしね
悪いけど僕はこれ以上知らない、残念だけど諦めてくれ」

「……そうか」

諏訪は余程悲しかったのだろう
先ほど力の抜けた四股に力を込めて立ち上がり、飛ばずに歩いて去って行った
その背中には哀愁が漂っており、有る意味邪気よりも重く見える。

「……どうにかならないのか？」

「なってるならどうにかしてるよ
残念だけど、僕にはどうしようも無い
そもそも戒魔と同じ世界に行ってるとは限らないしね」

「やっぱり……そうだよな」

「悲しいかもしれないけど、霊夢の事は頼むよ？」

「……あぁ」

そのまま紫々は隙間に入ってどこかに行った
この……どうしようもないこの気持ちはどうすればいいんだ？
俺にはどうしようもない……くそ！　くそ！　くっそーーー！

少年期編　十八話【今の実力】（後書き）

元世界簡易キャラ設定

パチュリー・ノーレッジ／パディ・ノーレッジ
魔法の本棚

少し考えたと思ったけど、実は殆ど考えずに決まった
大図書館とかに比べたらスケールが小さすぎる気もするが思い浮かばなかった

簡易特徴
初対面の相手や嫌いな相手には毒舌
慣れてきた相手や仲の良い相手には毒舌っぽいけど毒舌と言うほど毒舌じゃない
単に「とにかく口が悪い」の一言で済ませられる。

男なので基本的に体力は少しだけあるが、所詮一般人よりも少し上程度
激しい運動は大嫌いでそもそも動く事も嫌がる
パディが動く時は本を取りに行く時か気が向いた時
後は好奇心を満たそうとする時ぐらいである。
なので「新」で動いたのは報酬が有ったりするとはいえ、かなり珍しい事だったりするのだが……誰もその事に気付いてくれない
何故なら彼の好奇心は止まる事を知らず、気になった事は片っ端から調べようとするからである。
好奇心を満たす時の行動力はレミレアさえも呆れさせたほどであり、その時は美龍以上の謎の体力を持っていると噂されるほどの行動力を見せる。

現在は砲魔に頼まれた子育ての本を図書館で漁っている
この時の行動原理は砲魔に育てられた霊夢がどのような性格になるのか知りたいからしい
自分の好奇心の為に砲魔を実験台に使っているので腹黒い性格をしているように思えるが、本当に純粋な好奇心なので責めにくいから困る。

どうでもいいが、彼が嫌いな人は砲魔（煩いし色々と邪魔されるから）で好意的なのは戒魔（真面目で静かだから）である
嫌いな奴が好きな奴の子を育てればどのような性格になるのか……
今はそれを知る為だけに頑張る好奇心の塊……というか存在が好奇心でできている……かも？

少年期編　十九話【別人だが初敗北……でもない】（前書き）

話も戦闘も文字数も会話も言葉も説明も色々と少なすぎる……

少年期編　十九話【別人だが初敗北……でもない】

視点　戒魔

やはりチルハとは全然違う……戦い方も性格も能力もだ
チルハは確実な方法を取り、雑な攻撃なんて滅多にしない
チルハはこんなに怒りやすくなかった、それに泣き叫ぶような所を見た事が無い
能力だってチルハは【熱気を操る程度の能力】であり、氷も使え無い事は無かったがチルハは炎使いだ。

チルハは温度を上昇させ、空気中で高まった温度をぶつけ合わせて炎を無理矢理作りだしていた
石と石をぶつけると火花が散るだろ？　あれを空気中でして炎になるぐらい強引に大きくしている
細かく説明するには俺には知識が足りないし、チルハ自身も感覚でしてるから説明できない
要は能力で炎を多用すると理解してくれればいい。

さて、では何故チルハが氷も使えるのか……それは非常に簡単だ
チルハの能力は【熱気を操る程度の能力】なんだ
熱気と冷気は表裏一体、熱気は高温だけでなく低温にもできる
逆に美鈴が言っていた【冷気を操る程度の能力】も同じで低温だけでなく高温にもできる。

つまり、チルハとチルノは能力名こそ違うができる事は同じなんだ
それぞれ得意な事と好きな事が違うだけでな。

強さも同じぐらいだと思ってたけどチルハの方が強い
この十年で成長したのか、こちらが弱いのか……
チルハには負けた事はあるが、全盛期ならチルノには絶対負けないと思う。

チルハはその事を一応理解していて時々使ってたけど……チルノはそれを知らないのか？
馬鹿の一つ覚えのように氷ばかり使って……炎も十分危険だけど氷は刃物になって刺さるから怖い
そしてまた困ったのが盾に使われた事だな、あんな使い方をしてくるとは思わなかった
氷はかなり低温だったから蒸気が巻き起こり機転を利かせられた物の……計算が狂って思わず動きを止めてしまったぞ？

さて……問題はチルノの実力だ
まだ本気を出しているとは思えない、チルハはかなり強かったのを覚えている
少なくとも真面目に正面から戦うのは面倒だったと言っておく。

そのチルハと同格と思われるチルノ
挑発して喧嘩を売ったのは後悔していないが、怒らせたのは失敗だったな
チルノは恐らくかなり短気な奴だ、次からは本気で向かってくる可能性が高い
このまま油断してくれれば勝てる要素が見出せるんだが……世の中そう甘くは無いな。

お互いに動きは止まっている
俺から動くのは明らかに愚行、チルノはきっと速い……次に行動するまでに襲われる

チルノは多分様子見、どうやら先ほどの炎を警戒しているらしい。
それにしても急に寒く……！　拙い！

「やあぁぁぁ！」

俺が寒さに気付いた時には既に遅かった
俺の周りにはチルノの声と同時に氷柱が何本も現れていたのだ
急な寒さはチルノが俺の周りの温度を一気に下げたから。

俺の真後ろには氷柱が三本と左右に各二本
上は開いているが俺はまだ空を飛べないので関係無い
前方には……氷を纏って突進してきているチルノ！？（アイスチャージ）
荒技過ぎる！　自分は凍えないのか！？

俺は驚いて動きが止まり、自分の周りに設置していた光弾も集中力が欠けたので消えてしまった
そして逃げ場は氷柱の無い前方だったが今から動いてもチルノに当たる！
更にチルノは斜め下方向に向かっているから屈んで躱す事もできない！

チルノの攻撃が雑と思った自分が馬鹿だった
雑には違いは無いが、氷を使いこなすほどの実力は持っていたようだ
氷を纏っているチルノの大きさは氷柱で囲っていない範囲ほどの大きさ、つまり氷柱に張り付いても避けれない。

俺にできる事は少ない
だが、少しでも抗ってやろうじゃないか！

「地！　地！　地！」

地の魔法で大地から小さな突起を作り出す
同じ魔法を繰り返して大地を高くし、チルノから守れる程の高さにした
だがこの程度では硬さが足りない
相手は氷を纏っての突進なんだ、高が大地を持ち上げた程度で守れる程甘い攻撃じゃなかった……

そう、攻撃じゃなかったのだ
現に今、軽々と大地の突起を粉砕して俺の腹部にぶつかった……

「づ……がぁ……」

思った以上に痛い、そうだった……思い出した
俺は忘れていたんだ、戦いは本来殺し合いが基本だ
最近は訓練や勉強ばかりで実践を忘れ、命名決闘法案（スペルカードルール）の事ばかり考えてた。

だが現在そんな制度は無い
だから今俺がしているのは……本当にただの喧嘩だ！

それさえ思い出せば十分！
突撃してきた氷を纏っているチルノを掴み、抱く着くように抱える
氷の中で優越感に浸っていたチルノは動き出した俺に驚いた顔をしている
勢いと威力から考えれば気絶してもおかしく無かったからだろう。

「……ごほっ！　ぐぅ……炎！　炎！」

掴み抱えたまま炎の魔法でチルノの纏っている氷を溶かす
氷は蒸気を起こすほどの冷たさでは無かったので蒸気は起こらなかった
……まぁ蒸気が起こるほど冷たかったら俺が触った瞬間に霜焼けを起こしてるだろうがな。

俺の魔法は発動速度はともかく威力がとにかく低い
それほど冷たくも無い氷もなかなか溶けない
己の弱さを再認識しながらも、炎の魔法でとにかく溶かす。

しかしチルノも黙って燃やされるほど馬鹿じゃない
驚いていた顔を真剣に変え、氷の中で嫌な笑みを浮かべた?

一体何を考えてるんだ?

視点　美鈴

戒魔少年……油断しましたね
チルノちゃんの突進攻撃を躱せずに直撃
捕まえて氷を溶かそうと炎の魔法を使うも……間に合わない。

チルノちゃんは自分で纏っていた氷を内側から破裂さ、更に周りにあった氷柱も爆散させた
氷を纏ったチルノちゃんを抱きかかえたままの戒魔少年はどうなるか……
言うまでも無いでしょう?　刺し傷に切り傷、打撲も受けたでしょ

うね。

戒魔少年は何が起きたかは理解できたが、防御などできるはずもなく大怪我
死んではいないでしょうが当分は動けないでしょうね
逆にチルノちゃんは足に火傷を負った以外は無傷
彼女の顔には生意気な事を言うお前が悪いという考えが見える顔になっていた。

「う……ぁ……」

「ふん！　弱いくせにあたいに喧嘩を売るから悪いのよ
一応殺してないけど……無理はしない方がいいわよ？」

当然ですね、この状態の戒魔少年が戦えるはずがありません
下手すれば死ぬ一歩手前の状態、氷は体中にも顔にも刺さっている
運が良かったのか急所には当たっていないみたいですが、あまり慰めにもならない状態です。

「……」

ナズナちゃんは怪我によって血を流した戒魔少年を見て気絶
予想外にも程が有る結末と、大怪我をして血を流す主は衝撃的だったんでしょうね
倒れそうになって私が介抱したので怪我はありません。

ナズナちゃんを連れてきた妖精メイドは蒼白な顔で泣きそうになっています
そして戒魔少年に助けられた妖精メイドは自分が原因で戒魔少年が怪我したのでナズナちゃんと同じく気絶

残りの子は早く介抱したいがチルノちゃんが邪魔で近づけない。

このまま放っておくと本当に死んでしまいますね
ナズナちゃんと一緒に来た妖精メイドにナズナちゃんを任せ、私の
近くに居た妖精メイドにはパチュリー様を連れてくるように言う
そして私は戒魔少年とチルノちゃんに近づいていった。

「あ、めーりん」

「めーりんなんて言っている場合ですか、この子……一応紅魔館の
客人なんですよ?
お嬢様に怒られても知りませんよ……絶対に怒ると思いますけどね」

「え!?　そうなの!?」

私と一緒に居たとはいえ、客人でお嬢様が怒るとは思ってもいなか
ったんでしょう
吸血鬼の恐怖は世間に疎い彼女でも知っているので白い肌が青くな
っているように見えます。

戒魔少年の手当をしながらも、チルノちゃんとの会話も続ける
怪我の手当は私との模擬戦で慣れていますが、今回は少し大変です
ね……

「まぁ止めなかった私にも非はありますし、あまり怒らないように
言っておきますが
あまり期待しないでくださいね?　私とて命は惜しいですし」

殺される事は無いでしょうが半殺しにされるかもしれませんがね
戒魔少年はお嬢様のお気に入りですし、娯楽対象ですから。

「う、うん
ありがとめーりん」

「どういたしまして
それでチルノちゃん、何故この子が怒ったか分かりますか？」

「うんん、分かんない」

やっぱり友達や友情なんてあまり知らないチルノちゃんには分かりませんか……
遊んでくれる妖精が少なく、妖怪の私に喧嘩を売るような妖精とはみんな付き合いたくないんでしょうね
根性無しで弱虫な妖精どもめ！

「この子周りをよく確認しないで攻撃したチルノちゃんを怒っているんです
そしてその攻撃で友達が怪我しそうになった、それなのに怪我をさせようとしたチルノちゃんが謝らない
この子はそれが嫌だったんですよ」

「別に怪我が無かったんだからいいじゃん
周りなんて見なくてもみんな逃げれたしさ」

本当に純粋だからこんな事が言えるんでしょうね……困ったなぁ
罪悪感なんて知らない、素直すぎる子だから困ります。

確かに悪いのはチルノちゃんですが、怒ったからといって言葉ではなく暴力で解決しようとした戒魔少年も悪い
チルノちゃんを一方的に怒る訳にもいかず、戒魔少年も無罪にはで

きない
その逆も然り、どうしたものでしょうねー？

「今はいいです、この子の治療をしないといけませんしね
次に会った時にでもゆっくりみんなで話しましょう、色々説明してあげますからね」

「……わかった」

「その時は突然攻撃したら駄目ですよ？
お話ができなくなってしまいますからね、わかりましたか？」

「うん！　わかった！」

本当にチルノちゃんは良い子ですねー
素直だし、言う事は聞いてくれるし、困るけど助かります
困るの割合がかなり大きい気もしますがね……

「今日はここまでです
チルノちゃんは今日は帰ってくださいね？」

「え、何で？」

「私はこの子の手当をしないといけません
それに……このままここに居るとお嬢様が来ますよ？」

「で、でも今は昼間だし……」

「日傘って知ってますか？
日光を遮る傘なんで、それを使えば日中でもお嬢様は出歩けるんで

す」

「あわわ……じゃあめーりん、あたい帰るね！
手当頑張ってね！　ばいばーい！！！」

チルノちゃんは一目散に逃げていきました
あそこまで慌てるとは……少し脅しすぎましたかね？

これは暫く紅魔館に寄ってこないかもしれませんね
ナズナちゃんや妖精メイドを落ち着ける期間になるから別に大した問題にはなりませんが……

問題は本人である戒魔少年ですね
自業自得とはいえ、被害者といえば被害者ですし
考え方が相変わらず大人らしいけど、所詮は子供
理不尽な事を言い出さないか、そこら辺が少し心配です。

ん？　どうやらパチュリー様が来たようです
釣り道具とかの荷物は妖精メイドが……頑張れ！

とりあえず治癒の魔法でもしてもらいましょう
別に死んでも大した問題じゃないですが、お嬢様に怒られるのは嫌ですし
ナズナちゃんや妖精メイドが泣くのはあまり見たくないですからね。

続く

元世界編　新九話【お世話しよう】

視点　砲魔

一月も経てば子育てにも慣れてくるな
自分で言うのもなんだが、自分の覚えの良さと器用さに呆れた。
どうやら俺が霊夢の世話をしている事が広まっているらしい
何人も神社に来て手伝ってくれたり、戒魔の事を訊きだそうとした

前者は本当に助かってるが後者には漏れなく弾幕を贈っている
ついでに知りたいなら紫々に訊けとも言っておいた。

なお、実際に紫々に探しに行った奴も少なくないが会えなかったとだけ言っておく。

あれから諏訪に会ってないし話も聞かない
神奈に聞いた話だと毎日動かないで遠くを見つめているだけらしい
神奈も諏訪が何をしているのか分からなくて困っているとか。

俺としてはどうにかしたいと思うが何もできない
神奈とパディとアルスに諏訪と紫々との会話を教え、こいつらに任せる事にした
それから十日ほどになるが、諏訪の様子が変わったという話は聞かない
なんだかもう天狗にまで頼っている始末、諏訪の奴……本当にどうしたんだ?

霊夢の世話をして困っている事は命蓮寺の奴ら
手伝いがしたいと言われたから手伝わせたんだが……

「ナズール、霊夢ちゃんの洋服を無くしてしまった
今すぐに探してこい」

「新しく買いたまえ愚主人
さぁ買いに行け愚寅丸星(せい)殿
そしてそのまま帰るがいい星(せい)」

「……ひっく」

「泣くなよ星……な！」

「はぅ！」

「って一輪（かずわ）！　雲山を使って星を殴るな！」

「でも海淵（かいえん）、泣き出した星って邪魔だろ？」

「おやおや……なら僕は邪魔な愚主人を捨ててくるよ
君達は霊夢ちゃんを頼むよー」

「俺は何もする事が無い……霊夢を脅かしていいか？」

「駄目だよヌエ君、私達は霊夢ちゃんを正しい道へ導かねばならないのですから」

「……まぁ砲魔に怒られない程度にしなよ？」

……こんな感じで邪魔すぎだから強引に無理矢理に力尽くに理不尽に追い出した
パディとアルスに怒られてたなぁ……特に白蓮
星は新しい服を買いに行かされて、一輪と海淵は喧嘩両成敗
ヌエはおとなしくするように言われただけで雲山とナズールはお咎め無しだ。

ヌエとナズールには次も手伝ってくれと頼んでおいた
こいつらはそれなりにまともだしな。

次に来たのは紅魔館の奴ら
そいつらの場合は……

「こいつが戒魔の娘……強くなったら僕と喧嘩しような？」

「坊ちゃま、そんな事をしたら怒られますよ？
主に戒魔とか、砲魔とか、戒魔とか、戒魔とか、紫々とか、砲魔とか、紫々とかに」

「兄様は黙って帰ってねー
霊夢ちゃーん、ほらー光る羽だよー」

「パディ様は霊夢ちゃんの面倒を見てなかったんですか？」

「美龍は僕の性格を知ってるでしょ？
様子見や知識の貸し出し、本の提供はしたけど世話はしてないよ」

と、命蓮寺に比べたらレミレア以外はまともだった
レミレア以外に手伝ってくれるように頼んでおいた
レミレア凄く怒ってたが、自分が悪いと理解していたので素直に諦めていた。

白玉楼の奴らは最初から期待していない
絶対に霊夢と会わせてやらん。

永遠亭の奴らには頼んだ
あいつらは馬鹿じゃないから大丈夫だと思ったんだが……

「戒魔の娘ってのはあまり気に入らないけど、可愛くなりそうだね
成長したら僕の嫁するってのはどうかな？　僕が気に入ったらだけど」

「そういう事は将来本人に訊きなさい輝貴
私としてはあの父親からどのような能力を持つのか気になって気になって……」

「はぁ、こんな赤ん坊に二人して何を言ってるのやら……
戒魔なんかの娘に期待するのも変だと思わないのかな？
相変わらず変な人達というか……無視する事が正しいのかな？」

「鈴催……後ろ後ろ」

「後ろがどうかしたのなぁ？
……後ろ？」

「僕の事を無視しようなんて……良い度胸だねイナバ？」

「弟子の分際で師匠を無視しようとするとは……覚悟はできてるんだろうね？」

「霊夢が起きるから鈴催をお仕置きするなら後にしてね
俺は世話なんて面倒だから帰るよ、じゃあねー」

「帰らないで助けろなぁ！」

「「帰ったら覚えてろよ……」」

「……はぃ」

鈴催はあまり霊夢の事が気に入らなかったようだが今後も来て貰おうか考えておこう
だけど他の奴らは二度と呼ばねぇ

鈴催には悪い事をした気になってしまうな、今度と一緒に飯でも食おう。

そもそもまだ赤ん坊の霊夢を嫁にしようって……
昔から女を誑かして遊び回っていたって聞いたことがあるが……さすがに本気じゃないよな？
本気だったら紫々に頼んで二度と霊夢に会えないようにしてもらおう、じゃないと安心できない。

他に頼んだ奴は堺音、喪紅、凪の三人
堺音はアルスやパディ以上に色々教えてもらった
何でも赤ん坊を預けられる事も偶にあるからだそうだ。

喪紅は逆に教える事になってしまった
だけど真面目に霊夢を世話してくれるから十分助かる。

凪は……邪魔しかされなかった
あいつには絶対に二度と世話なんてさせない。

色んな奴と霊夢の世話をしてるが、霊夢自身は結構喜んでいた
あんなに騒々しく、危険な会話をしているのを楽しむ霊夢に
俺は彼女が将来大物になる予感がした……

少年期編　十九話【別人だが初敗北……でもない】（後書き）

「新」の方で多くのキャラが出ました
ただそれだけ

少年期編　二十話【今更気がついた疑惑】

視点　パチュリー

戒魔が妖精と戦って三日経った
あの時は大変だったわ……切れてたり裂けてたりで出血多量
骨折まではしてなかったけど腫れていたり痣になってたりで打撲も多数
更に体も冷えていたから体温の低下に出血多量も相まって心停止する寸前だったわ。

ここまでなっても死なないとは……子供の生命力じゃないわよ？
何で生きてるのよ……別に死んでくれたら嬉しいとは言わないけど、面倒が減るのにね。

回復魔法はかなり疲れるのよ？
急に一気に回復させたら体に異常が起こってしまうし、遅くしてたら死んでいたかもしれない
その微妙な回復速度を維持するのがどれだけ面倒な事か……できればもう二度としたくないわね。

それなのに戒魔が目を覚まし、美鈴から事情を聞いた私とレミィが説教した所……

「回復してくれた事にも心配してくれた事にも感謝しているだけど感情で行動した事は反省しているが、チルノに喧嘩を売った事に後悔は無い」

子供だから当然だけど、まだ感情を制御しきれてないらしい
後悔もしてほしかったけど、戒魔はきっと変わらないと思う
反省してくれた事だけでも良しと思わないとやってられないわ。

そんな戒魔をナズナは甲斐甲斐しく看病してるわ
でも、戒魔から離れている時は部屋に籠もって何かをしているらしい
妖精メイドが言うには何故か部屋から怖い雰囲気を出しているらしく、怖くて部屋に近寄れないとか……

なお、戒魔を止めなかった美鈴はレミィにかなり怒られていたし
しばらくお休みは無しという罰だったが、美鈴としては後悔は無いそうよ。

まぁ確かに戒魔の覚悟を実力を知れたし、大敗してどう思うのかも知れた
大怪我をしてしまう事も喧嘩を売った時には覚悟していたとも言っていたし……
そこまで考えて妖精メイドを守ったのなら……いい加減に信用すべきね。

相変わらずまだ完全に信用してる訳じゃないけど、警戒は解いても良さそうね
隠し事をする限り、私達は決して戒魔を信用しない
紅魔館は……レミィは私達が必ず守る、私は唯一無二の親友として、美鈴は敬愛なる主としてね。

問題はフランね、あの子が戒魔の事をどう思うか……
一応戒魔とナズナの事は教えているけど、今回の件で私達は戒魔を信用した
それを伝えればフランは必ず戒魔に会おうとするわ。

だが戒魔の怪我はまだ完治していない……いえ、完治していないから会わせられるのかしら？
下手にフランに襲いかかったりしたら確実に殺されるのだし、今夜にでも会わせようかしらね……

……よく考えたら夜は駄目ね、レミィが起きている
でも夜じゃなければナズナが邪魔になるでしょうし……
ナズナをどうにかする？　無理ね、何を言っても戒魔から離れようとしないし
無理矢理追い出しても怪しまれてレミィに報告なんてされたら困る
やはりまだ会わせるわけにはいかないわね。

ん？　誰か図書館に入って来たみたいね
この魔力は……フランか、今は夕方だからずいぶん早起きね
レミィが起きてない時に来るという事は、私との内緒話でしょう。

「おはようパチュリー
お姉様はまだ起きてないわよね？」

「えぇ、早くても一時間……遅くても二時間は起きないと思うわで？　わざわざこんな場所まで来て、私に何か用でもあるの？」

フランは肩を竦め、呆れるような顔をしている
私の用件ぐらい解っているだろう？　態度がそう言ってるわ。

「例の戒魔とかいう子供（ガキ）が大怪我したって聞いたわ
何があったか教えてくれない？」

やはり戒魔の事を訊きに来たのか

今の今まで考えていた事なので言葉はすぐに浮かんだ。

「霧の湖の中で最も強力な妖精に喧嘩を売ったのよ
理由は妖精メイドが怪我をしそうになったから
そしてそれを謝らなかったからだそうよ」

「何よそれ……本当に子供だし、ただの我が儘じゃない
そんな奴を今まで警戒してたの？　鈍ったんじゃないのパチュリー」

心の底から呆れ果てたという態度をとるフラン
しかし、それは戒魔と話していないからそう言えるのだ
確かに文にして高々三行程度の話、だが戦闘内容を聞いてもそう言えるかしら？

「本当にただの我が儘だと思うのかしら？」

「……どういう意味？」

今度は疑わしいという顔になる
それ以外にどう思えといった顔だが、そんな事は関係無い
その私が変だと言うその顔、その顔を驚愕の顔に染めてあげるわ。

「私は直接見てないから美鈴から聞いた話しかできないけどそれでもいい？
それとも少し時間が掛かるでしょうけど美鈴を呼ぶ？
美鈴の方がきっと上手く話してくれると思うわ」

「……そうね、美鈴から聞くわ
すぐに呼んでくれる？　正直、時間が惜しい
待ってる間にもパチュリーには少しでも聞かせてもらうけどね」

「わかったわ
なら少し待っててちょうだい
図書館には妖精メイドが居ないから私が動かないと駄目なのよ」

そう言って私は席を立ち、歩かずに少しだけ浮きながら入り口に向かう
扉から出ると丁度良い所に妖精メイドが居た
その妖精メイドをすぐさま捕まえ、美鈴を大至急連れてくるように言う。

私自らが動いてい美鈴を呼んだのだ
その妖精メイドは本当に急ぎの用事だと思い、大急ぎで門に向かって文字通り飛んでいった
そんな妖精メイドの姿を見届け、私はさっさと図書館に戻っていった。

私が戻るとフランは私が座っていた椅子に座り、私の紅茶を飲んでいた
自分で紅茶を淹れるのが面倒だからって私のを飲まないでほしいわ
……

こうなってしまったフランは何を言っても無駄なのは理解しているおとなしく新しい紅茶の準備をし、美鈴が来るのを待つ。

「私はパチュリーからも話を聞くって言わなかったっけ？」

どうやら誤魔化されてくれなかったようだ
面倒だから美鈴に全部押しつけようとしたのだが失敗した。

「そうは言っても美鈴も呼ぶんだったら同じ話を繰り返す事になるのよ？
無駄だから私からは話さないわ、話す事があるとすれば話の後に私からの意見を言うぐらい
それに面倒だしね」

「さり気なく最後に本音を言ったわね
建前の全部を無駄にしてしまうような本音だったわよ？」

「元々私はそういう性格よ
大体予想できていたでしょうし、別に気にしてないでしょ？」

「まぁね」

フランとの会話は一々気を使わなくて済むから楽で助かる
無駄に踏み込んでこないし、面倒と言えば素直に引き下がる
後は暴れ癖さえ無ければ最高の話相手になったかもしれないだけに残念に思ってしまうわ。

「紅茶……淹れるのが上手になってない？
いつの間に上達したの？」

「戒魔が紅茶の淹れ方を教えてくれたのよ
昔口の悪い狗に強引に教え込まれたらしいわ
なんでも、身分の高い主人の前で粗相をしてほしくなかったからという理由で無理矢理数ヶ月も掛けて身に付けられたらしいわ」

「まだ十歳ぐらいなんでしょ？
それで昔って言うぐらいなんだからご愁傷様って感じね」

「そうね、でも実際に身に付いているのが凄いわ
今も維持できているって事は紅魔館に来る前までも淹れたことが
何度もあるという事よ
幻想郷内で紅茶を扱っている場所は少ないから限られてくると思う
んだけど……
少なくとも身分の高い者自体が滅多に居ない、なのに手掛かりなん
て全く無い
正直……狐に化かされてる気分になるわ」

美鈴は戒魔から気がついたら霧の湖に居たと聞いたらしい
ならばその前はどこに住んでいたのだろうか？
そして何故帰らないのか……そうだった！

「ん？　美鈴が来たみたい
それなりに速かった……って、どうしたのパチュリー？」

「……いえ、何でもないわ」

そうだった……何故戒魔は家に帰らないの？
外来人という事は無いわ、紅魔館に吸血鬼が住んでいる事を知って
いるはずが無いもの
よく考えたら怪しい部分しか無いじゃない！　私は今まで何を見て
きたの！？

「パチュリー様が大至急来るようにと言われたので急いで来たんで
すが……
フランお嬢様に情報提供ですか？　パチュリー様だけで十分だと思
うんですが？」

「人間がどんな戦いをしたのか聞きたかったのよ

パチュリーに訊いても美鈴の方が知ってるって言って教えてくれなかったしね」

「それは分かったんですが……何故パチュリー様はそんなに怖い顔をしてるんですか？
妖精メイドが見たら泣いて逃げ出しますよ？　それぐらい怖い顔をしてます」

「少し考え事をね……美鈴は先に話しておいてちょうだい
私は考えを纏めたいわ」

今は考えるよりも先に落ち着かないと、このままでは混乱してしまう！

「はぁ……先に始めろと言うのなら構いませんよ？
ではフランお嬢様、何から知りたいのか教えてもらってもよろしいでしょうか？」

「多少の事は以前からパチュリーにそこそこ聞いてたから後回しでいいわ、先に妖精との戦いというのを知りたい
戦い方、心構え、おおよその感情など、そういうのが知りたい」

「うーん、そうですね……」

フランと美鈴が話し合っている間、私の脳内では様々な考えが浮かんでいた
最初に考えを始めたのは先ほど思いついた戒魔の家。

戒魔は外来人ではないか？
まずはこれから考えを纏めようと思う。

戒魔が外来人であるか否か……私の考えとしては否
戒魔は紅魔館が吸血鬼の住処という事を知っていたらしい
レミィのレミリアという名前ではないが、スカーレットという名前は知っていた
レミィの名前にしろ姓にしろ、紅魔館が吸血鬼の家という事は知られているが、吸血鬼の名前は殆ど出回っていない
何故なら前当主が妖怪の賢者に殺された後、当主となったレミィは暴れてもつまらないという理由から全く動いていない
前当主の娘が現当主になったという話は流れたものの、あれから何十年も経っている
それほどの時間が経てば人間の記憶は薄れ、話の種にもならない。

さて、話を戻そう
ならば何故戒魔がスカーレットの名前を知っていたのか……
家族が前当主に殺されたから復讐……は、有り得ないわね
先ほども言ったが前当主が死んだのは何十年も前の話なのだ
高々十歳程度の戒魔が敵を取る為に育てられたとしても、戒魔の性格上断るとしか思えない。

次の可能性は稗田の家や寺子屋で調べた？
だがそれも変だ、戒魔の家は貧窮だったのは以前の食事会で知れたそんな戒魔が寺子屋に通う事は金銭的に難しいだろう。

ならば稗田の家だろうか？
しかし稗田の家の資料は簡単に見れる物では無い
稗田の家当主と知り合いなら可能性も否定できないが、残念ながらまだ産まれてもいない
そもそも資料を見るには見る為の理由が無くては見せて貰えない
何故か？　安易に妖怪達の弱点を知っている者が居ると一般人が徒

党を組んで妖怪を襲うかもしれないからだ
妖怪には私達を含め、女性型の妖怪が多い
そんな妖怪が大勢に襲われればどうなるか、言うまでも無く殺されるだけでは済まないだろう。

他にも理由はあるが、今の事はかなり重要な制止になっている
自身が襲われる事は無いだろうが、妖怪賢者も女性、その式も女性
紅魔館の当主であるレミィ、白玉楼の亡霊姫などの大物にも女性が多い
その大物を失った場合、幻想郷の力の関係は崩れてしまい、最悪崩壊を迎えてしまう。

話が逸れてしまったが、つまり強くなった妖怪退治屋や、人里の外で働かねばならない者を除く
その他の者達は稗田の家の資料を見る事は叶わないのである。

結論、戒魔が資料を読む機会など無い
つまり寺子屋の可能性は低いが有るものの、それ以外の場所で知る事は滅多に無いのである。

つまりどういう事かというと……お手上げ状態よ
戒魔がどうやってスカーレットを知ったのか全く分からないわ。

頭が痛くなってきたわ……この続きはフランと美鈴と三人で話し合う事にしましょう
そうじゃないと……私だけでは考えるのに限界が有る
確かに私は知識が豊富で頭が良いが、だからと言って色んな考えが浮かぶという訳では無い
知識と発想は繋がりそうだけど繋がらないものなのよ。

続く

元世界編　新十話【長年の親友】

視点　阿求

「……それで、どうして僕の家まで来たんですか？」

「だってお前物知りだろ？」

そう言って赤ん坊を連れて稗田の家に乗り込んできた人物は霧雨砲魔
赤ん坊の名前は博麗霊夢だったね、戒魔が連れてきたから覚えてる。

「……一応言っておくけど、後五年もすれば僕は寿命で死ぬ
だから霊夢は預かれない」

そう、後五年で僕は三十歳を迎える
ある程度の差は出るだろうが、稗田一族の寿命が尽きる寸前
僕が霊夢を預かれるはずが無い。

「いや～……それを考えなかったわけじゃないけど、今回来た用事は違うぜ
さっきも言ったけど、お前って物知りなんだろ？」

「物知りなのは否定しないけど……パディ・ノーレッジの方が色々と知ってる
僕は所詮記憶力が良いだけだし、君に協力できる事は少ないと思う」

この程度の事に気付かないほど馬鹿じゃないと思うんだけどなぁ
別に慌ててるようにも見えないし、重要な事を知りたいという感じでもない
何かを知りたいというのは嘘に見えないが、僕である必要は無さそう。

「パディじゃなくて阿求ぐらいしか思いつかないんだ
紫々は知ってるかもしれないけどそう会えないし、あいつは絶対に

話さない
もしかしたら堺音も知ってるかもしれないが、可能性はかなり低い
し知られると面倒だから駄目だ」

僕だけが知っているかもしれない事？
紫々と堺音は知っている可能性は有るが無理
この二人に共通点が有ったかな？

「とりあえず話を聞いてもらう
拒否は許さんし、絶対に逃がさない
必ず、何が何でも、無理矢理にでも手伝ってもらう」

「それは横暴だ！　力が無い僕を脅す気なのかお前は！？」

「さっきも言ったが拒否は許さん！
絶対に手伝ってもらう、さぁ話を聞くんだ！」

そして僕は砲魔に強引に話しを聞かされた
内容は戒魔が行方不明になった原因と、紫々の行動
調べ事は……

「過去に似たような事が有ったかを調べろ……と？」

「そうだ
正直言って紫々が知らないって言ってるから無駄だとは思う……
だけど……だけど！　俺には何もしないって選択肢は無いんだ！
頼む、どんな小さな事でもいい！　戒魔を見つける為に力を貸して
くれ！！！」

「ちょっ！　頭を下げないで！

抱きかかえてる霊夢が不機嫌そうな顔をしてるし
僕もそんな事をされても嬉しくないよ！」

戒魔の事を話している途中で砲魔は組んでいた足を正座に直していた
正座に直していたのはどうやらこの時頭を下げる為だったらしい。

霊夢を抱きかかえながらも頭を畳に着きそうになるぐらい下げる砲魔
砲魔がここまでの事をしてまで頼む姿に、僕は彼らの絆の強さを知った。

……ここまでされて、断る訳にはいかないか
こんな砲魔の姿は初めて見た、何事も自分でしなければ気が済まない砲魔
その砲魔がほぼ土下座をしたのだ、手伝わないなんて選択肢を僕は選ぶ事ができない。

「分かったよ砲魔、その依頼は受ける
そんな話は聞いたことも無かったけど、古い資料に何か有るかもしれない
探すのにも読むのにも、古い文字を使ってる資料もあるだろうから解読するのにも時間が掛かると思う
それでもいいかい？」

僕が受けると言った瞬間、砲魔は頭を勢いよく上げた
霊夢が不思議そうな顔をしていたのが印象的だった。

「構わない！
どんな些細な事でもいい！　例え小さな事でもいい！
どんなに可能性が低くても構わない！」

「……わかった、例え小さな事でも報告するよ
本当に時間が掛かるから年単位掛かるかもしれない
それぐらいは覚悟しておいてね」

「ああ！　高が年単位ぐらい構わない！
俺の頼みを引き受けてくれてありがとう！　本当にありがとう！」

今度は霊夢が嫌そうにならないよう、気をつけながら何度も頭を下げる砲魔
その目元には気付きにくいぐらい小さな涙が浮かんでいた……

暫くの時間が経ち、砲魔が落ち着いた
その顔はとても安閑としており、砲魔の新しい一面を垣間見た。

「でも砲魔、少しいいかい？」

「何だ？」

「何故……そこまでして戒魔の行方を知りたいんだ？
いや、依頼は引き受けたからどんな答えでも必ずするよ？
でも気になったから知りたいと思ったんだ、答えたくないなら答えなくてもいい」

そう、僕が最も気になったのはこの事
戒魔と砲魔は確かに親友、それも十五年近くも一緒に居る
心配なのは分かるし、気になる気持ちも想像できる
だけど砲魔がここまでする必要が有る事なのだろうか？

「……答えさせてもらうぜ
俺が戒魔の事を親友だと思ってる事は知ってるよな？」

砲魔の質問に僕は無言で頷く
今は声を出すような時ではない。

「戒魔は俺の人生の半分近くを一緒に過ごした
俺からすれば兄弟だと思えるぐらいに親しく、お互いの事を知ってるんだ」

それも知ってる
お互いに意地を張って言葉には出さないけど、周りから見れば彼らは兄弟のように見える
そんな話は何度か聞いたことがあるし、僕自身そう思ってる。

「そりゃあ俺だって戒魔に隠し事の一つや二つは有るだけど……だけどあいつは自分が死にそうになってる事を俺に言わなかった！！！」

砲魔が側にあった机を強く叩く
無意識に魔力を込めたであろう拳で叩かれた机は大きな音を立て、決して小さくない罅が入った
その音に霊夢は驚き、泣きそうな顔になる
それでも砲魔は血を吐くような、泣きそうな声で自らの思いを吐き出す。

「俺は知らなかったんだ！　戒魔が死にそうな事も！
紫々が何かをしてる事も！　あいつらが勝手な事をしてる事も！
俺は暢気に実験をしていただけだった！　確かに客を全部追い払って誰も家に来るなって言った！
それでも……それでも俺に何か一言でもいいから言ってほしかったんだ……」

「砲魔……」

「だが、何よりも許せないのは……戒魔の体に気がつかなかった俺自身だ！
何故俺は戒魔の体が悪かった事に気がつかなかった！
俺は……俺は自分を殺したくなった！
だが俺の手の中には紫々と通じて戒魔に頼まれた霊夢が居る
霊夢が生きている限り、俺は自分に何もできない……霊夢の為にもな」

そうか……砲魔は戒魔に謝りたかったんだ
謝って、そして自分に教えなかった事を怒って、喧嘩して……仲直りする
砲魔は本当にこれだけがしたいんだ。

「ひっく……ぅあーーーん」

「あ……ごめんな霊夢……
いきなり怒鳴って悪かったな……驚いただろ？」

今の砲魔の眼には心からの謝罪しかない
霊夢の存在が、砲魔の心に罪悪感を呼び覚ます
霊夢が居る限り砲魔は半永久的に罪悪感に蝕まれる事になるだろう。

僕の役目は……少しでも砲魔の心労を軽くする事だ
もし僕が例え小さくとも何か戒魔に繋がる事を砲魔に話せば
どんなに些細な事でも砲魔の心労は軽くなると思う。

霊夢を泣き止ませた砲魔は帰る前に僕に一礼をし、博麗神社に向か

って飛んでいった
砲魔の後ろ姿を見ながら僕は決意した。

親友の為に己の心に負担を掛けながらも頑張る男を助ける
僕の助けなんて本当にとても小さい事かもしれない
それでも……僕は彼の為に頑張ろうと思う。

砲魔の姿が見えなくなり、後に残ったのは青い空だけ
僕は青い空に背を向け、資料室に向かって歩き出した。

砲魔の言う通り、僅かな可能性に賭ける為……

少年期編　二十話【今更気がついた疑惑】（後書き）

本編でようやくフランドールが初登場
思った以上に理性のあるキャラになってしまったのは何故だろうか？

新で登場した阿求は原作と同名
だけどちゃんと性別は違うのでご安心（？）を
名前に数字が入っている阿礼の一族の名前を変える訳にはいきませんでした（ついでに思い浮かばなかった）

少年期編　二十一話【動き始める紅魔館最後の悪魔】（前書き）

いつもよりも書き遅れてしまい、少々雑かもしれません（投稿３０分前に完成）
もっと早め早めに書く事を習慣にしないと……

少年期編　二十一話【動き始める紅魔館最後の悪魔】

逆偽鏡の世界

少年期編　二十一話【動き始める紅魔館最後の悪魔】

視点　フランドール

「先ずは戒魔少年の戦い方でいいですか？」

「ええ、美鈴からの意見が知りたいわ」

妖精との戦いも知りたいけど、美鈴の意見も知りたい
美鈴と会うのは久しぶりだし、パチュリーから聞いた美鈴の意見しか知らないからね。

「戒魔少年の戦い方は基本的に接近戦の格闘を得意とし、中距離以上に離れたら属性魔法を多用します
ですが魔法だけだと思ってる戦っていると、突然陰陽術を使ってきて虚を突かれたりします
他にも簡易な呪術や閃光魔法、地形や状況までも使ってくる者です」

「鬱陶しそうな奴ね」

「はい、彼は戦いという物を知っています

命を賭けた戦いを何度もしていると思えるような戦い方をします
要は死ななければいいんです、戒魔少年の本来の戦い方とは生き残る為の戦い」

「それなのにその妖精に自分から喧嘩を売ったのね？
負ける事は予想できていたし、勝つ事なんて不可能だとも即座に理解できていた
なのに今回に限って戒魔は妖精に喧嘩を売った……」

「そうなんですよ……確かに戒魔少年は怒ってました
ですが我を忘れて死にに行くような無謀な少年では無かったんですがね
そもそも感情に振り回される事なんて今まで見た事ありませんよ？
あの時初めて年相応の態度を見た気がします」

「ふーん……」

戒魔の話はパチュリーからそこそこ聞いている
子供なのに妙に頭の回転が速かったり良かったり……
魔法の勉強とて大抵の者は威力や派手さ、見た目で効果を見たり重点に置いたりする
なのに戒魔はそんな事は全て後回しにし、発動速度の最速化と完全制御を先に覚えようとしたと聞くわ。

この発想も子供としてはそうそう有り得ない
例え頭が良くても、強くなりたいと思う者は威力を最重視にする
強くなるというという考えが最も反映される威力に見向きもしない事は変ね。

でも、美鈴の言う通り生き残る為の戦いを前提にしているならそれ

も肯ける
相手を驚かせたりして逃げ出したり、短い隙を突くにはそれが最も有効だからよ
威力が無くとも急所や眼を狙えば相手は嫌でも怯んでしまうもの。

「戒魔少年の戦い方はこんな感じです
心構えは似たような内容になると思うので省かせて頂きます
最後に戒魔少年の戦いに関する感情ですが……」

私の予想では負けたく、死にたくないだろうか？
人間としては当たり前という感情だと思うが……

「興味……だと思います」

「……はぁ？」

散々生き残るような戦い方を学んでおいて興味？
戦いを嘗めてるの？

「いえ、私もそんな感じなんですよ
ですが戒魔少年から感じられる感情は興味というのが大きいと思います
それに勉強をしている時も私と鍛錬している時も純粋に強くなりたいという想いが強いんです
何度か私達に自分はどこまで強くなれるだろうか？　そんな質問も受けるぐらいです」

自分の強さを追求してるのかしら？
でもパチュリーの話を聞く限りでは戦闘狂とか、そういう存在では無いように思える

分からない……私には戒魔の考えが分からないわ。

「……あの……フランお嬢様？
考え事もいいですが、そろそろチルノちゃんとの戦闘を話していいですか？」

「ん？　そうね、お願い」

そうだった、元々それを聞く為に来たんだった。

「最初から話すと、その日は……」

美鈴から戒魔と妖精との戦闘前後の会話を含めて教えて貰ったが……

「馬鹿ね」

「……最初の一言がそれですか？
いや、私も否定できないんですが少し酷くないでしょうか？」

「別に酷くもなんともないでしょ？
妖精は自分で助けたし、一々相手の言葉に反応しすぎよ
怒ってても冷静でいないと自滅するだけ、これを馬鹿以外に何と表せと？」

「いやー……いくら事実でも最後のだけはフランお嬢様に言われたくないと思います
機嫌が悪くなったり、なんとなく感情が高まったからって地下室を何度も破壊されるのは困ります
主に私やパチュリー様が直すのが面倒、お嬢様が頭を抱えるなどの意味で」

この子も言うようになったわね
初めて会った時なんて私の殺気で気絶して失禁までした門番だとは思えないわ
一応私より年上だけどね。

「そろそろいいかしら？
少し相談があるの」

「ん？　パチュリーが相談？
珍しいね、私でよければ構わないわ」

「私も構いませんよ
でも、フランお嬢様の言う通り珍しいですね
私達が相談ならともかく、パチュリー様から相談を持ちかけてくるなんて」

本当に珍しい……私も時々相談事をしに来るが、パチュリーからの相談は久しぶりだ
でも内容は多分話しの流れからして……戒魔の事かしら？

「戒魔の正体について話したいの
構わないかしら？」

やっぱり戒魔の事か、会った時の印象では既に警戒は解いているように見えたんだけどね
見間違いか、それとも何かを思い出したのかしら？

「戒魔少年の正体ですか？
今更って気もしますけど、私は構いませんよ」

「私も構わないわ、何に気付いたのか教えてちょうだい」

「そうね……私が気付いた事、それは戒魔が外来人かどうかという件よ」

外来人？　話を聞く限りそれは無いと思うのだけど？
だって美鈴がスカーレットを知っていると言っていた、パチュリー自身が私にそう言ったのよ？

「外来人って……それは無いと思いますよ？
だってお嬢様の事を知ってましたし、外の世界には神秘なんて滅多に無いんでしょ？
なのに私達妖怪や吸血鬼、魔法使いに妖精を見たら驚くに決まってるじゃないですか
妖精の門番隊に会っても驚きもしなかったんですよ？」

「そう、それが変だと思ったのよ」

「どういう意味でしょうか？」

私もまだ分からない、何故それが変なの？

「一つ一つ順序を立てて話しましょうか
戒魔は何故紅魔館が吸血鬼の館なのを知っていたのかしら？」

「紅魔館が吸血鬼の館なんて誰でも知ってると思いますよ？
以前は吸血鬼異変なんて事もありましたし、幻想郷の歴史にも残されているはずです」

「そうね、別に知っているといっても変じゃないわ
美鈴の言う通り、歴史書や稗田の家の資料にだって残ってるはずよ」

「その通りよ、何十年も前の出来事
戒魔がそれを知るには歴史書や稗田の家の資料を見なければならないわ
でも、戒魔にそれができると思う？」

「子供は寺子屋で勉強してるからそれぐらい知ってると思いますよ？
資料だって見ようと思えば見れるでしょうし」

私も美鈴と同意見よ
十歳ほどの子供なら誰でも寺子屋で勉強……誰でも？
誰でもなら何故戒魔は寺子屋に行ってないのかしら？

「ねぇパチュリー、何故戒魔は寺子屋に行ってないの？
十歳ぐらいなら誰でも寺子屋に行っているはずでしょ？」

「先に稗田の家の資料について話すわ
あそこの資料は許可を得た一部の人間しか回覧する事が叶わないの
そして戒魔はその一部の人間ではない、だから戒魔は稗田の家の資料を読めないわ」

「その一部の人間はどんな人間か知りませんが、少なくとも戒魔少年には当て嵌まらないと？」

「そうよ、なら寺子屋の資料を読んだのかという質問だけど……
美鈴は知ってると思うけど、戒魔って凄く貧乏だったらしいのよ」

「あぁ、あの食事会の事ですか

正直見てて悲しくなってくるような哀愁を漂わせてましたしね」

食事会って何の事なの？
美鈴にそう訊くと、パチュリーが代わりに教えてくれた

食事会を事細かにパチュリーは説明してくれたが……
得意料理が精進料理って……しかも理由が安上がりだから
とりあえず貧乏そうという理由は分かったわ。

「知ってると思うけど、寺子屋に行くのにもお金が掛かるわ
あんなに貧乏の戒魔が寺子屋に行けるようなお金を持ってると思う？」

「でも親がいるじゃないですか
戒魔少年が子供で一人暮らしなんて話は聞いたことが無いですよ？」

「そうね、でもなら何故戒魔は料理ができるのかしら？
料理とは基本的に親から教えて貰うのよ、十歳ならお手伝い程度でしょう
なのに戒魔はあれほどの腕前を持っている、それはどういう事でしょうね？」

「お、親は料理ができなかったとか……でしょうか？」

「それなら近所の人にでも頼めばいいじゃない
パチュリーが言いたいのは、一人で料理を作らざるをえない状況だったのでは？
そう言いたいのよ」

「さすがフランね、その通りよ

でもそれだけじゃないわ」

まだ戒魔の不幸そうな話が続くの？
少し飽きてきたんだけど……

「戒魔は料理だけでなく、お金の工面もしていたと考えられるわ
料理を作るのが戒魔の仕事なら買い物もしなくてはならない
そのお金を管理するのは誰？　戒魔しか居ないじゃない
親がお金を管理しているなら買い物程度は親がするでしょう？
でもそれなら料理をする材料を選ぶのも親になるわ
ならばあんなに上手になるまで、作り慣れるまで精進料理を作ったりしないわ
だって他にも料理は色々あるんですもの、つまり戒魔は自分で全てしていたと考えられるのよ」

「……いやいやいやいや、ちょっと納得させられそうになりましたけど
そこまで納得できる事じゃないですよ？　第一それは一般的な家庭の話でしょう？
戒魔少年の家がそこまで一般的かどうかも分からないじゃないですか」

「なら訊くけど、戒魔から家庭の話を聞いた事があるかしら？」

「え……それは……無いですけど……」

「家庭だけじゃない、家族の話は？
家の場所は？　何故紅魔館に住むの？　帰らないの？
今までどこに住んでいたの？　戒魔の話に出てくる人達はどこに居るの？」

パチュリーが訊きたかった事がようやく分かったわ
戒魔自身よりも、戒魔の周囲が変なのね？
戒魔の話は何度か聞いてるけど、周囲の人物は誰も知らない
どう考えても戒魔の家庭も環境も知り合いもおかしいわ。

「そしてそれらを唯一教えてもらったのが……レミィよ」

「お姉様が？　どうしてお姉様だけ教えて貰った……紅魔館に居座る為ね
お姉様の興味を引かないと紅魔館に住めない、だから戒魔はお姉様に全てを話したのね？」

「断言できないけど私はそう思ってるわ
でも……私達に怪しまれてまで隠し通す理由が分からないわ
レミィにも口止めしてるみたいだし、使い魔のナズナにも話していないみたいよ」

「問題はお姉様に話した事が嘘だった場合ね」

「それは問題ですね……
お嬢様は確かに頭は良いですけど、どこか抜けてますからね
良く言えば純粋、悪く言えば単純
困ったものですね」

「本当……どうしようかしら
レミィは戒魔の話を信じているから戒魔が何をしたいのか知ってるでしょうし
だからレミィに注意を促す事はできないのよね……」

八方塞がりって状態かしら？
まぁ私が殺気を向けて脅せば話すかもしれないけどね
お姉様から私の話は聞いてるでしょうし、殺す寸前まで痛めつければ……そうしようかしら？

「フラン、その顔だと何をしようとしてるか予想できるけど
一応止めておくわ、止めておきなさい
戒魔はレミィの客なのよ、客を襲う館だなんて言われるのはご免よ」

「私は良い考えだと思うんですけどね……
口で言っても変わらないなら強引に言わせるのも手段の一つですし」

「レミィが嫌がるでしょ？
もし襲うなら私が何かしている時にしてちょうだい
私まで疑われるのは嫌なの」

そこまで言ってパチュリーは立ち上がる
お茶でも淹れるつもりかしら？

「パチュリー様、どこへ？」

「別の場所で本を読むわ
相談に乗ってくれてありがと、私はここで抜けるわ
後は二人で適当にしてちょうだい、じゃあまたね」

パチュリーはそのまま飛んでいった
方向は扉とは違う方向なので本を読むというのも嘘じゃないと思う。

「で、どうしますかフランお嬢様？
私としては賛成しますけど、パチュリー様と同じで私に迷惑の掛か

らない程度にしてくださいね
チルノちゃんの件で怒らせたばかりですし、まだ暫くはお嬢様を怒らせたくないんです
それじゃ、私も失礼しますね」

美鈴も巻き込まれたくないと言い、パチュリーとは違い扉に向かって行った
私だけになったけど……どうやって殺そうかしら？

……っと、殺したら駄目だったわね
半殺し程度の抑えて、話を聞かせてもらうわよ、戒魔？

続く

少女期編　裏十一話【不安定の神】
表との時間差……三十三日

視点　神奈子

呪いを完全にしようと念には念を込めた上で更に念を込めた
私と諏訪子の神気を溜めておいた期間でもある。

私としては半月程度だと思っていたのだが、思った以上に長引いてしまい
真苗が引き籠もってから一ヶ月も経ってしまっていた。

「神奈子ー、もうすぐ早苗が来るんじゃない？
最後の仕上げをするから手伝ってよー」

「ああ、わかった……諏訪子よ」

「んんー？」

「成功……するか？
早苗だけでなく、真苗も助けられるな？」

今頃になって急に不安になってきた
もし失敗すれば真苗だけならともかく、早苗まで失ってしまう
色々話し、別世界の早苗というのを知っても、真苗よりも早苗の方を心配してしまう。

そう、私は呪いの成功か失敗の他にも別の心配事がある
真苗を本当に受け入れられるのかどうかを……

別世界の早苗でもやはり真苗は早苗ではない
会った時は受け入れられたと思ったが、後々その想いに自信が無くなってきた
私は自分だけでなく、両親や諏訪子にまで心配させた真苗を許せるのか？
もし真苗を受け入れず、拒絶してしまったら真苗はどうなる？　早苗はどうなる？

真苗を助けたいとは思う、だが失敗すれば真苗に会わずに済み、心配事から解放される
助けたい　怖い　会いたい　楽になりたい　話したい　早苗の方が大事
どっち着かずの想いに難儀しながらも、諏訪子に言われた呪いの仕上げの準備を始めようとする。

「助けられるかじゃないよ神奈子
私達で早苗も真苗も助けるんだ
そんな弱気なんて神奈子らしくない、いつもみたいに威張ってなってそんなんじゃ真苗が心配するよ？　神奈子様が落ち込んでるってね」

「それはそうかもしれないが……」

それに落ち込んでるわけじゃないし……

「神奈子の心配も分からないでもないけどさ
もっと早苗と真苗を信用してあげようよ
あの子達ならきっと大丈夫だって！」

「……そうだな、私が変な事考えてても無駄だったな」

そうだ、あの子達を信じればいい
あの子達は私達を信じている
早苗は神の存在を、真苗は別世界の私達を。

早苗のおかげで私達は生きていられる
真苗は別世界の私達を信じているから私達も信じてくれる。

怖い事に変わりは無いが、それでも会わないよりは良い
会ってみないとどんな感情になるかなんて分からないんだ。

真苗に会って、それから話そう
そうすればきっと早苗だけではなく真苗も大事にできるはず
信じれば……信じるぞ、私は早苗だけでなく真苗も信じる。

早く会おうか、真苗。

少年期編　二十一話【動き始める紅魔館最後の悪魔】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

紅美鈴／紅美龍（めいろん）
美しき龍の申し子

思った以上に早く決まった名前、気のせいか凄く似合う気がしたから決めるのも速かった
実際に龍の子ではなく、美しい紅い髪と龍の名から……と、想像したい

簡易特徴
基本的にとても真面目
戒魔が紹介してたように実力派であり、見た目が強そうなだけでなく本当に強い
何をするにしても器用にこなし、こいつはできない事の方が少ないのではないだろうか？　そう思われる事も多々あるらしいが、実際は単なる器用貧乏。

……と、本人は思っているが、本当は本物の天才
気や武術以外の戦闘に関する才能は無かったが、それを差し置いてでも何でもできる。
少なくとも美鈴ができる事は大半できる
しかし美龍ができる事で美鈴もできる事はそう多くない
門番としての器用さは美鈴に軍配が上がるが、実力と優秀さでは美龍の方が上である。

美龍の実力は美鈴より圧倒的に上だったりする

何故なら砲魔が紅魔館に進入するからだ。
何十回、何百回迎撃しても諦めずに進入しようとする砲魔
それを毎回毎回押しとどめ、時間を稼いで執事である刹那が来るまで待つ
刹那から進入を許すと言われれば素直に通し、許すなと言われれば腕が折れようとも必ず追い返す
そんな事を毎日のように繰り返しているので強くなるのも当然と言えるだろう。
紅魔館に進入する場合、美龍の心を折る以外に強引に入る事は叶わない
彼は最優の門番として紅魔館を守っている
彼の優秀さは戒魔から紅魔館で最も敵にしたくない奴と思われるほどだ。

ちなみに今までのは仕事内での話
仕事の時間以外ではとても穏やかであり、仕事中と本当に同一人物かと疑ってしまうほど優しい。
子供の遊び相手や、美龍に鍛えて貰いたいと言ってくる人間の相手など
とても楽しそうにしている。

関係無いが、嫌いな奴は大妖精である
仕事以外の時間ならともかく、仕事中に仕事の邪魔を毎日のようにしてくるから困っている。
しかし相手は妖精の上、大した実力が無いので対応できないでいる
大妖精を抑えてくれるチルハの存在に助けられいるので、大妖精とは違いチルノとは仲が良い。

少年期編　二十二話【流れる『目』】（前書き）

今回も一時間前に完成
他の小説を読んだり動画を見てたりしないでもっと早く書かないと
……

あー……ゲームしたい
でもそんな時間が捻り出せない……早く速く書けよ自分

少年期編　二十二話【流れる『目』】

視点　戒魔

チルノと戦ってから十日、俺が倒れた日から十五日ほど経つ
パチュリーの回復魔法のおかげで俺の怪我は大分良くなった。

治療の礼として焼き菓子（クッキー）を作ってパチュリーに贈った
俺が洋菓子を作れた事が以外だったパチュリーは唖然とした顔で俺の顔を見ていた
驚いてくれた事に満足しながらも、パチュリーに食べる事を勧める。

「味は悪くないわね、私としてはもう少し甘い方が好きだけどでもこれでも十分美味しいわよ
食感とか舌触りは私好みだったし、まるで私の好みを知ってるみたいよ」

そう言われた時、内心でけっこう焦っていた
パチュリーに出したのはパディの好みと同じように作った物だったからだ
パチュリーは女性だったから甘めなのが好みだったか、パディは甘さは控えめなのが好みだったしな。

さて、何故俺が洋菓子を作れるかというと、アルスと刹那が教えてくれたからだ
特に刹那には世話になったな……金が無い時は何かと理由を付けて食品や菓子を贈ってくれた
焼き菓子（クッキー）の作り方もその時に教えてもらった（頼んだのは俺だが）。

洋食やお菓子類はあまり作ってなかったからな
腕が落ちていたかと心配したが、それほど落ちてなかったようだ。

話は変わるが、最近気になったのはナズナだ
怪我をしてからナズナは俺の側から離れようとしない
妖精メイドが言うには俺が寝ている時に寝たり、部屋に戻ってたらしい。

部屋に戻って何をしているのかと思ったが、その妖精メイドが言うには怖い雰囲気を出していたそうだ
俺の前ではそんな様子を見せないので冗談かとも思ったが、何人もの妖精メイドが同じ事を言うので気になってきた。

それとなくナズナに訊いてみたのだが……

「ご主人様の看病の時以外ですか？
勉強をしたり寝てたりしてます」

とのことらしい。

勉強だったら俺と居てもできる、むしろ俺が勉強をしたいぐらいだ
最近はあまり勉強をしてなかったから多少忘れているかと思うと、少し面倒に思ってしまう
それでも自業自得なので文句は言えない。

そして気になった事がもう一つ
七日ほど前から俺に向かって殺気を送ってくる奴が居る。

狙いは俺ただ一人、だが殺気を隠そうとしているようだが隠せてい

ない
俺に向けられる殺気は強く、これだけ強い殺気を隠すにはそれなりの経験が必要だ
故に、この殺気の持ち主は殺し合いの経験が少ないか、俺を暗殺か奇襲をしようとしていると判断できる。

これほどの殺気を向けられる理由は分からない
しかし紅魔館でこれほどの殺気を送れる者は限られてくる。

レミリアは無い
話す内容が無くなりかけていても楽しそうに俺の話を聞いてくれている。

パチュリーも無い
最近何かに気付かれたみたいだが、それでも怪しんでいるだけであまり警戒はしてなかった。

美鈴も無い
文句を言いながらも俺の乱れた気を安定させたり、気を遣ってくれたりしている。

なら残りの実力者は……フランドールしか思い浮かばない
しかし殺気を向けられる理由がどうしても分からない
それも急に向けられたが、俺はその頃は寝込んでいたし、その前後で会ったはずが無い。

そんな理由から、俺はどう対応すればいいのか分からず
だからといって相談するにも誰に何と言えばいいのだろうか？
おかげで体は治ってきているのに心労が溜まってきている。

数日後には鍛錬や勉強に戻ろうと思ってるが、フランドールの殺気がこのままだと集中できそうにない
無視し続けるのは不可能ではないが、それでは根本的な解決にならない
この問題を解決するには……やはりフランドールに会わねばならないだろう。

ならばフランドールに会うにはどうすればいい？
レミリアに言うのは駄目だな、俺がフランドールに会う事に反対してたし
パチュリーなら許可するかもしれない、自分に害の無い限りは協力してくれると思う
美鈴は反対しそうだが、話し合うだけと言えば許可するかもしれないな。

とりあえず今は放置だ
七日も経ってるし、そろそろ動き出すかもしれない
相手から来るのを待とう、俺から行っても話す事は少ない。

フランドールの対応を決め、もうすぐ日が落ちる
ナズナはパチュリーに勉強の時間と言われて強引に連れて行かれたお前は元気だし、俺の体も大分治ったのだから看病はもういいだろう？
そう言われながら体の弱いパチュリーに引きずられるナズナの姿は哀愁が漂っていた。

今まで看病してたから体力も余ってるだろうってパチュリーが言っていたのでナズナは一日中勉強だそうだ
朝から夜中まで勉強漬けにされるナズナ……頑張れよ。

誰かが扉を叩いた、妖精メイドでも来たのだろうか？
そう思ったが扉を叩いた主は何も言わない
扉を叩いてそのまま去るという悪戯か、それとも他に理由があるのだろうか？

俺がどう対応するのか考えていると再び扉を叩かれた
中に入れろという意味だろうか？

「誰だ？」

扉を叩いた主に話しかけるも、返答は無い
代わりに再び扉を叩く音……名前も声も隠すか。

扉を開けるべきか？　それともこのまま放置するべきか
しかし一度返事をしてしまったので居留守はできない。

仕方無いか、一応出てみよう
俺は布団から抜け出して扉の前まで進む
今のところは相手から害意を感じないが、それでも用心はしておく。

いつでも対処できるように閃光の魔法の準備だけしておく
怪我はほぼ完治しているがフランドールの殺気で疲れている
少なくとも逃げる準備だけは怠らないようにしておかねば。

用心しながら扉で身を隠しつつ扉を開く
相手は襲ってくるような奴ではなかったので安心するも
訪問してきた者の姿を見ると……

薄い黄色の様な、金髪に近い色の髪を一房にして左に纏めている
幼い顔立ちをしながらも紅い瞳は俺を捕らえている

薄い肌色だが紅い服装で更に薄い色に見え、病弱そうに言えてしまう
ここまでなら多くはないだろうが普通の少女だろう。

だが彼女の背には黒い枝のようなものに宝石のような石に見える物が吊されていた
宝石のような石は七色で虹の順に並び、七個吊されている
あまりにも特徴的すぎるこれは驚く事に少女の羽のようだった。

彼女は……誰なんだ?
容姿や身長はフラムに似ているが羽が大きく違う
フラムの羽はレミリアの翼に七色が付き、翼の先は黒くなって鋭い刃物のようになっていた
確かに刃物のような部分は黒だし、翼は虹色だ
彼女がフランドールだと仮定し、フラムと比べてみるも何か当て嵌まらない気がした
だがここまで違うものなのか? 女性というだけでここまで違うのだろうか?

「君は……誰なんだ?」

俺の質問に薄い笑みを浮かべながら少女は答える
その顔は可愛いと思ったが、同時に恐ろしくも見えた。

「私の名前はフランドール・スカーレット
お姉様……レミリア・スカーレットの妹よ」

悪魔の弟ではなく、悪魔の妹の登場……か。

視点　フランドール

こいつが夢幻戒魔ね
私を観察し、誰かと見比べてるみたい……気分が悪いわ。

パチュリーも美鈴も観察され、誰かと見比べられたと言っていたけど
まさか私にもするとは思わなかったわ
私のような者に似ている奴がそう居るとは思えないけど……

霊力や魔力は……少し多い程度の普通の人間ね
別に何か特別な気配は感じな……そうでもないみたい。

よく見てみれば戒魔の体から莫大な霊力や魔力が抜け出ている？
抜け出ている霊力と現在の霊力の総量は……私を上回ってる！？

どういう事！？　ただの人間がこんな量の霊力を持てるはずが無いわ！
それだけならまだしも、あんなに霊力が抜けていては最悪死んでしまうわよ！

霊力の行き先は見えない、行き先との関係を破壊すればどうなるかな？
体内に霊力が溜まりすぎて内部破裂を起こす？　それとも全て体内に収まり、莫大な霊力や魔力を得る？
わからないけど、下手な事をしてしまうのは良くないわね。

この事を戒魔は知ってるのかしら？
流れを見る限り、強引に強制的に一定量を奪っていくようだから知らないかもしれない

もしかしたら同意して知ってるかもしれない
……今は無視しよう、もっと詳しく調べてから行動しても遅くないでしょうしね。

何故私がそんな事を見れるか、それは私の能力に関係してるわ
私の能力は【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】を持っている
全ての物にはその存在で最も集中している部分がある
そして私はその集中している部分を言いやすいように略称のようだが『目』と呼んでいる
『目』は本来移動させる事はできない、だが私はその『目』を自分の手に寄せ集める事ができる
そして『目』を手の上に作り出し、握り潰せば『目』を破壊すると同時に対象にしていたの物を破壊する。

つまり私は『目』を見る事に特化してると言ってもいいだろう
集中している部分を見つめる事ができるのだから流れも同時に見えてしまったのよ
流れは『目』が常に移動しているような物、簡単に言うと強い気配（集中している部分）の流れが見える。

でも……よく見てみればこの流れは破壊できないわね
流れだから常に『目』は移動してるし、『目』を移動させても流れが速いから潰すのに間に合わない
解りやすく例えるなら『目』を水と仮定し、大抵の物は池や井戸、この流れは川と想像してくれれば良いわ
井戸水なら全部吸い出すのは可能だけど、川の水を吸い出すのは無理なの
流れてるという事は次々に次が来るという事、集めてもすぐに流されてしまうわ

例え吸い切れたとしても、あの量の霊力の流れを集中させ過ぎれば暴発してしまいそうで怖い。

触らぬ神に祟りなしってね、危ない橋を渡る気は無いわ
まぁどうするにせよ、戒魔を殺すって選択肢は少々危険かもしれないわね
霊力の吸収先で何があるか分からないし、これほどの霊力が必要な事だし、重要な事かもしれない
ここは見逃すのが吉ね。

「……フランドールだったな
俺に何か用があるんじゃないのか？
俺の顔を見ていたと思ったら驚いたり考え込んだり
人の事を言えた義理は無いが、少々不愉快だぞ」

「あらあら、人間の分際で吸血鬼にそんな態度でいいのかしら？
お前が不愉快になるのはともかく、私を不愉快にさせれば……殺しちゃうわよ？」

私が吸血鬼と知っても態度を崩さない戒魔に、私は小さく不愉快と感じながらも関心してしまった
吸血鬼を目の前として話し、相手をしても態度を変えない
それにお姉様に気に入られている戒魔の事だ、私の事も聞いているはず。

お姉様から私への印象は暴れん坊、暴走特急、暴風児
力の抑えが利かない未熟者、感情を制御できない愚か者
変わっている妹、よく分からない存在、自分から地下に籠もる変わり者
……自分で言ってて悲しいけど、これがお姉様の中では事実なのよ

ね。

別に私は暴走とか未熟者とか言われて喜ぶ趣味はしていないわ
こうした方が楽なのよね……実際私の方が力が強いから当主にされそうになったしね
当主なんて面倒そうだし、疲れそうだから何度も狂ったように暴れたわ
おかげさまで地下に監禁され、当主はお姉様の物。

監禁されたといってもすぐ壊せるし、お姉様が当主になって前当主が去ってからはお姉様は私の部屋を贈ってくれたわ
でも私はそれを拒否するついでに暴れ、自分から地下に籠もってゆっくりさせてもらってるわ
だって上に出てると当主の仕事とかさせられそうになるし、私を見て怯える妖精メイドを見ても気分が悪いだけだもの
暴れた過ぎた時の私には妖精メイドだけではなく、お姉様も怖がる時もあるしね。

そこまでした事までは知らないと思うけど、それでも私の話は知ってるはずよ
それでも何故私に普通に接触するのかしら?

「殺気を振りまいてた事に気付いてたからな、今更怯えろってのは無理があるさ
それに、その程度の殺気ならあまり怖くないしな」

私の殺気が怖くない……ですって?
どういう事? 先ほどの殺気はそれなりに強く出したつもりよ
その殺気を軽く流すどころか、怖くないとまで言われている。

戒魔は……戒魔は今までどんな人生を送ってきたの？
高々十歳程度の人間が……パチュリーの言う年に似合わないという
言葉をようやく理解できたわ
確かに戒魔は十歳の人間じゃない、大人と同じように見てもいいぐ
らいよ
……まぁ紅魔館に大人なんて言えるようなのはパチュリーと美鈴ぐ
らいだけどね。

どこまで頑張れるのか興味が湧いたわ
もっと脅されて、戒魔はどこまで耐えられるのか見てみたい！

「ふーん……この程度の殺気じゃ怖くないんだ
なら……これは耐えられるかしらねぇ！！」

先ほどより更に殺気を込めて戒魔を睨み、それと同時に戒魔の首を
掴もうとした
……そう、掴もうとしたの。

「炎」

私が首を掴む寸前に戒魔は魔法を使い、私の腕に小さな火傷を負わ
せた
私は炎を使えるから熱さは殆ど感じなかったが、自分の炎じゃない
ので火傷を……

私と自分の実力差は理解できているはず
首を掴む前に殺気を送ったから殺気も感じたはず。

なのに……それなのに私に攻撃したというの？
自分よりも強大な相手を怪我させるという事は相手に喧嘩を売ると

いう事
それを解ってしたの？　それともただの馬鹿？

「さっき言っただろ？
その程度の殺気は怖くないし、そんな脅しに屈するような柔な性格はしていない」

「……」

嘘でしょ？　私は吸血鬼なのよ？　戒魔程度の人間なら一瞬で殺せる実力を持ってるのよ？
そんな私が……怖くない？　お姉様も私に恐怖を覚えた脅しだったのよ？
当時の実力はとても低く、強すぎる私の今の脅しで泣き叫んだ百歳のお姉様にした脅しなのよ？

それを……それを十歳程度の……十歳程度の人間が耐えられるではなく怖くないですって？
この人間は……戒魔はいったい何者なの！？

続く

少女期編　裏十二話【さなちゃんとすわちゃん】
表との時間差……四十日

視点　諏訪子

神奈子の奴も心配性だね
ここまで準備して失敗なんてしないよ
早苗も真苗も頑張ってくれるだろうし、私達はあの子達が頑張るのを見てるだけ。

何かしてあげたいとも思うけど、それだと今の私達では力不足
それを早苗と真苗が埋めるんだ。

さて、そろそろ準備も最終確認も終わったね

早苗を呼ぶ役は神奈子に譲ってあげて、私はどうしようかな……

問題なのはさっきから私にまとわりつく何か……
私に何かを求めてるのは分かるんだけど、誰か分からないし何を求めてるのかも分からない
一応神気は少しだけだけどくれるのはありがたいけど存在が邪魔だし迷惑でしかない
消し去ろうと思って神気を一気に解放したかったんだけど、それをしたら真苗を助けるのが遅れるからできなかった。

今はどうしようもないし、素直に無視する
そうでもしないと私の集中が解けて危なくなってしまうかもしれない。

「神奈子ー残りは部屋に神気が漏れないように簡単な結界を張るだけその準備をしておくから神奈子は早苗を連れてきてー」

「わかった、暫く待ってろ
だが、簡単な結界でも簡単に壊れるような結界にするなよ？
万が一にでも神気や呪術が外に漏れたりしたら大変だからな」

「わかってるわかってる
簡単にって言ってるけど真面目にするからね
念のため護符とか結界符も使うつもり、あまり力は強くないけどね」

現代の人間の作るお札は本当に力が弱いからね……せめてこの五百倍の強さは欲しいなぁ
それぐらいじゃないと早苗《真苗》が『あいつ』に勝てない……って、今の何？

早苗？　真苗？　あいつ？　勝てない？
あれ……何か私の記憶の中に違う記憶が混じって……
でもそれは凄く小さく、弱々しい記憶
白昼夢でも見たのかな？　今は夜だけど。

んお？　神奈子が早苗を連れてきたみたい
いったい何て言って連れてきたのかな？　後でからかおっと。

「早苗を連れてきたぞ諏訪子
ほら、ちょっと怖いかもしれないけど入っておくれ」

「うん……暗いよぉ……」

「我慢しておくれ、今蝋燭に火を灯すからな」

暗い部屋に怯える早苗に、その早苗を慰めながら案内する神奈子
なんか親子みたいだけど、あんまり早苗の親の前でしたら駄目だよ？
未咲なんて悲しくて泣いちゃうからね、あの子は弱虫だし。

「……おっきな帽子をかぶったお姉ちゃんだ
初めましてー……東風谷早苗です……」

「初めましてだね、私は守矢諏訪子
この神社の神様さ」

「わー！　神奈子様も神様だけど諏訪子ちゃんも神様だったんだー！
すごーい！　すごーい！　二人も神様がいたなんて知らなかったー
！」

先ほどまでの怯えていた姿とは一転、早苗はとても嬉しそうにして

いる
自分が信じていた神様が本当に居て嬉しかったんだろうね。

「でも……なんで私は諏訪子ちゃんなの？」

「だってちっちゃいもん！
ちっちゃいくてさなちゃんよりちょっとおっきいだけだから！」

……それは身長の事かな？
それとも見た目の年齢の事なのかな？
ちょっと傷ついたよ？

それと神奈子！
含み笑いしてるの気付いてるからね！

「あー……うん、確かに私はちっちゃいね
でも早苗よりずっと年上だから私も諏訪子様って呼んでくれないかな？」

「やだ！　諏訪子ちゃんはさなちゃんのお友達になるの！
だから様なんてやだ！」

「お友達って……まぁいいか
別にどうしても様付けで呼んでほしいわけじゃないし……」

でも……できれば諏訪子お姉ちゃんがいいなぁ
お婆ちゃんは嫌だし、その方が若く見えるかもしれないしね。

「じゃあじゃあ諏訪子ちゃんはさなちゃんのお友達だよね！？」

「あー……うん、そうだね」

「じゃあじゃあすわちゃんって呼んでいい？
すわちゃんはさなちゃんって呼んでいいから！」

「すわちゃんって……うーんまぁいいか
じゃあよろしくねさなちゃん」

「うん、よろしくねすわちゃん！」

子供っていいなぁ……素直で純粋で……
真面目でツッコミばっかしてる真苗にもこんな時期があったのかなぁ？

「……おい諏訪子、早苗と戯れるのは構わん
だがそろそろ始めないか？」

「あ、そうだったね」

そうだった、私は早苗を今から呪うんだった
友達になるって言った手前、少しやりにくさを感じる。

……やだなぁ。

少年期編　二十二話【流れる『目』】（後書き）

フランドールの性格が凄い事に……でもこれはこれで良い気もしますというかもうこれで通します。（当初の予定だと狂気から穏やかにする予定でした）

『目』に関して自分なりの解釈をしてみました
能力を少し深く掘ってみるって結構楽しい
あまり知識が無いし、自分一人で考えて他から調べたりしないから穴だらけな気もしますが……
フランドールの能力に限らず、チルノ（チルハ）の能力とかも頭はそれなりに捻ったものの、あんまり詳しく解説できてないような気がして申し訳なく思います。

少年期編　二十三話【命を賭けた時】

視点　フランドール

戒魔が分からない
私に怯えない奴なんて人間とか妖怪どころか、会ったことも無い
初めての経験に私は動く事ができなかった。

「で、俺に何か用か？
用も無く態々地下から出てくるとは思えない
大方、パチュリーとかから俺の事を聞いて様子を見に来たといった
所か？」

しかも私の目的まで当てられた！？
当てずっぽう？　それとも予想した？
どちらにせよ、私の目的を当てられたのは事実ね。

「ふぅ……そうよ
私の目的は戒魔、貴方を知る事よ」

「やっぱりな
パチュリーから怪しいとか、正体が掴めないとか
何を考えているのか分からないとか、そんな事を言われたんじゃな
いか？」

「……色々と考えてた私が馬鹿みたいじゃない
その通りよ、どうして分かったの？」

盗聴でもしてたのかしら？
言っている事が一々当たってて鬱陶しいわ。

「パチュリーの性格と、俺への警戒心から予想を立てた
美鈴は警戒もだが興味も結構向けてたからな
予想を立てるのはそれほど難しい事じゃなかったって事だ」

なるほどね
どうやら警戒する事で私達の行動を読まれてしまったという事ね
パチュリーも間抜けね、自分から自分の行動を悟らせてどうするのよ。

「それで、私をどうしたいの？
実力で私に勝とうというなら無謀も良い所よ？」

「暴力で解決する事じゃないだろ？
これからする事といえば話し合いに決まっている」

「……吸血鬼相手に交渉するつもり？
私はお姉様みたいに楽しそうだからって許すような甘さは無いわよ」

再び殺気を戒魔に向ける
同じ事の繰り返しにか、それとも私の言葉になのか
戒魔は呆れたように頭を振り、溜め息を吐いた。

「交渉じゃなくて話し合いだ
俺の言った事をちゃんと聞いてたか？
あの時は泊めてもらう必要があったからレミリアに交渉した
だが、今の俺にはそんな必要は無い
なのに何故交渉する必要がある？」

どうやら後者だったらしい
確かに交渉ではなく話し合いと言っていたが
それで私を納得させる事ができるのかしら？

「話し合い……ね？
残念ながら私は話し合いに来たわけじゃないわ
私の最大の目的は貴方の過去話」

「……つまりレミリアに話した事と同じ事を自分にも話せって事か？」

「その通りよ
貴方は私に一方的に話すだけ、だから話し合いにはならないわ」

話し合いとはお互いが同じ話題で話す事
私がするのは一方的な質問になる、故に話し合いではない。

「まるで言葉遊びだな
だが……残念だが君に俺の話をする事はできない」

「へぇ……死にたいのかしら？」

馬鹿の一つ覚えのように戒魔に殺気を向ける
私は相手を脅す方法はこれしか知らない、だから殺気を向け続ける
でも、私は本当に殺してもいいとも思ってる
だから安心してたら本当に死んでしまうわよ？

「死ぬかと思った事はあるが死にたいと思った事は一度も無い
正直に言うと、別に教えても構わないとは思っている」

「ならどうして話さないのかしら？」

戒魔は突然真剣な顔になる
その顔は十歳の少年の顔とは思えないほど真剣な顔
生死を賭けるような、そんな顔だった。

「……知れば死を覚悟しなければならないからだ」

「死……ですって？」

「そうだ、俺の過去は本来誰もが知ってはならない事
もし八雲に知られたら消される可能性も否定できない
運が良くても数十年間、八雲しか入れない隙間の中に閉じ込められる……かな」

「そんな……そんな危険な事をお姉様に話したの？」

お姉様なら危険を承知で聞くって言いそうだけど……それは信用してから
会ったばかりの戒魔の、人間の子供の戯れ言だと聞き流して聞くかもしれなかったのに！

「話したくて話したんじゃない、元々それを言う気は無かった
俺は相談と訊きたいこと、そして頼み事の為に紅魔館に来た
レミリアの事だ、話さない限り絶対に何も聞かないと思ってな
勿論、危険性も話し、他言無用と念を押してから俺の事を話した
自分は悪くないと言うつもりは無いが、俺を責めるのは筋違いだぞ」

確かに戒魔に非はあまり無い

この場合は我が儘を言ったお姉様が悪いかもしれない
それでも納得するわけにはいかない。

「戒魔が悪くなくても、そんな事は関係無いわ
お姉様に何を話したのか教えなさい
そこまで話せない事なのかは話してから決めるわ」

「レミリアには俺の事を話した
それ以上は特に話してない
だが、何度も言うが君に俺の事を教えるわけにはいかない」

「くっ！　なら何故話せないのか教えない！
お前の事を知るだけで八雲に狙われる可能性が有る理由も、自分の
過去を知られてはいけない理由もよ！」

いい加減こんな有益の無い会話をするのも嫌になってきた
殺気だけではなく手の上に炎を作り出し、それを棒状にして剣を持
つように構える
次に下らない返事だったり、関係の無い事を言い出したら燃やし尽
くすという意味を込めて。

「……八雲に知られてはいけない理由は過去を知られてはいけない
理由であり
過去を知られてはいけない理由は八雲に知られてはいけない理由だ」

その謎掛けのような言葉に、私は殺す事を決めた
これ以上何を言っても無駄だと確信したからよ。

「……死になさい」

「遠慮させてもらう、光」

「ぐぅ！」

炎を振りかぶって戒魔に当てようとするも、戒魔の魔法の閃光により目を潰された
ほんの刹那の時間、それでも戒魔からすれば私の攻撃を躱す余裕が生まれたらしく、避けられた。

閃光の魔法も目の前で少しの時間だけの目眩ましに過ぎない
私の視力は数秒で回復し、辺りを見回すも……戒魔の姿は無い……か。

でも扉は開いてないし、そんな音も起きなかった
ならばこの部屋のどこかに居るのは確実、でも戒魔は私の事を知らない
私が……戒魔の『目』の流れが見える事をね。

少し集中し、周りを見わたす
……見つけたわよ、小さな体を生かしてベッドの下に潜り込む
確かにその程度の事しかできない時間だったが、咄嗟の判断にしては悪くない
私が相手じゃなければ……ね。

ベッドに向けて炎を振りかぶり、叩きつける
ベッドは大きな音を立てながら壊れ、そのまま燃えだした
だが戒魔に当たった手応えを感じられなかった
再び集中し、戒魔の居場所を探ろうとする。

しかし集中しようと動きを止めた瞬間、小さな穴が開き戒魔が私の

目の前に現れた！？
この穴は……亜空穴！？　戒魔は亜空間を移動できるの！？

亜空穴を開くのには才能だけでも、努力だけでも到達できず、両方有って初めて開くだけの技術を得られる
本当に開くだけの技術であり、閉じるには更に別の技術が必要になってくるほどの超超高等技術なのよ！
それだけならまだしも、亜空穴は開くだけでも霊力を大きく消費するそれを行き来する二回分開き、私の目の前に座標を置いた
戒魔の本来の霊力は莫大な量とはいえ、抜け出ている今では妖怪退治をしている人間よりも多少多い程度らしい（私は平均を知らないけどパチュリーがそう言っていたわ）
亜空穴は開くのを維持するのにも霊力を消費する
こんな技術、人間の子供が持っていていい技術じゃないわよ！

私の目の前に現れた戒魔は人差し指と中指を伸ばし、私の目を潰しにきた
先ほどの閃光のように一時的ではなく、永遠に、物理的に潰そうとしてきたわ。

確かに亜空穴は驚いた、でもそれだけで戒魔のそれほど速くない腕を止められないはずが無い！
私は自分の目に戒魔の指が当たる寸前で手首を掴み、戒魔の腕を止めた。

「炎、光」

しかし戒魔もそれだけで終わるはずが無く、指先に炎を灯し、私の顔にぶつけようとした
戒魔の声が聞こえた瞬間に私は首を捻り、戒魔の炎を躱す

だがその直後に再び閃光を当てられ、光によりまたも私の目は一時的に機能を失った。

「氷、氷、氷、氷……氷」

目は見えないが辺りの温度が下がったように感じた
戒魔の呪文から氷の魔法を使った事が解る
殺す場合、狙う場所は頭！　私は頭を下げて氷の魔法を躱そうとする。

しかし、魔法で狙ったのは頭ではなく足
しかもご丁寧に同じ氷の魔法でも形を変えられていた
先の二つは氷柱（つらら）のように先の尖った氷で私の足を刺し貫き
後の二つは足を動かせぬように氷で固められ、凍結された。

氷柱によって痛みと物理的に穴を開ける事で足を使い物にできなくする
その後に凍結させることにより、足を更に動かしにくくする
これは……戒魔の作戦勝ちね。

もし順序が逆だった場合……つまり凍結後に氷柱で刺し貫いた場合
凍結された事に私は気付き、直後に足に力を入れて足を抜き出す
もし足を抜き出すのに間に合わなくとも、氷柱によって氷で固められているので氷が砕かれる
それにより、痛みが有ろうとも動かすのは簡単だった。

でも残念だったわね戒魔
吸血鬼の身体能力と回復力を嘗めすぎよ
この程度の怪我ならすぐに回復できるし、氷だって簡単に破壊できるわ！

それと同時に目も見えるようになってきた
そして私の目が見えるようになり、最初に見たのは……巨大な氷柱
戒魔は少し離れた場所で手を上げ、氷柱を維持していた
その大きさは私の身長ほどの長さがあり、私の頭ぐらいの太さをしていた
そんな物に貫かれたら……いくら私でも大怪我は免れない！

足はまだ動かせないけど、手なら動く
私は急いで氷柱の『目』を手に移動させ始める
しかし私の行動は遅く、無情にも氷柱は打ち出された。

氷柱を打ち出した戒魔の顔は信頼
お前ならこの程度、どうにかするだろうという挑発と信頼の顔だった
まだ会って一刻も経っていないのに、何故そのような感情を向けるのか私には解らない
でも、その期待に応えてあげようじゃない！

『目』を移動するのを中止し、手の中に炎を一瞬で作り出す
手の中の炎を氷柱に打ち出し、溶かし尽くす！
そう思って思いっきり炎を打ち出した。

「あ……」

氷柱はほんの数秒も持たずに蒸発
私の放った炎はそのまま戒魔に向かって直進した。

炎は戒魔に直撃し、爆散
大きな音を立てて部屋を破壊し尽くした……

続く

少女期編　裏十三話【禁呪の儀式】
表との時間差……四十日

「さぁ、さっきお家で話したよな？
少し私達を手伝っておくれ」

「うん！　さなちゃん頑張るね！」

神奈子の言葉に早苗は元気よく返事をする
早苗の言葉で諏訪子は呪いを掛ける罪悪感を感じながらも、呪いの準備をした部屋に向かう。

その後ろ姿を見つめながらも、神奈子は何も言えずに早苗と手を繋いで諏訪子の後ろに着いていく
早苗は元気の無い神奈子と諏訪子を不思議に思うも、よく分からないので何を言えばいいのかわからなかった。

早苗を呪う部屋に着き、最初にしたのは早苗の着替えだった
早苗が着ていたのは寝間着であり、呪いとはいえ儀式をする服装とはほど遠い服装だったのだ
神奈子が早苗を着替えさせた服は白を基準とし、青の線も混じった巫女服のようで違う服だった
この服は過去に守矢に仕えていた巫女が着ていた服らしく、諏訪子の儀式という事で早苗に着せたらしい。

しかしやはり五歳の早苗には大きく、裾などを引き摺りるという不格好
それでも早苗は守矢の系譜、本来なら不格好であるはずだが妙に似合う気がしてしまう
それが神奈子の感想であり、着替え終えて諏訪子の前に現れた時に早苗を見た諏訪子の感想である。

諏訪子は早苗を連れ、神社の奥に入って行く
神奈子は二人の後ろ姿を見送り、神社から出て行った。

神社の外に出た神奈子は近くに立っていた御柱を力尽くを持ち上げ、
神社の周りに正方形になるよう突き刺した
御柱を突き刺した神奈子は神社の屋根に飛び上がり、少し浮き上が
りながら御柱を支柱とし、結界を張る
呪術が外に漏れない為、そして神気を隠す為にこの結界が張られた。

神奈子はそれだけでは飽きたらず、自身の神の力である天
天の霊力の流れである天脈を神社内に流し込む
神奈子の行動により神社内へ莫大な霊力が入り込む
それを見届けた神奈子は儀式終了の予定時間に天脈を戻し、霊力の
流れを正常に戻した。

少しでも諏訪子の手助けになるように
そして僅かでも真苗が目を覚ます切欠になるように思いながら……

一方諏訪子と早苗だが
二人が入った部屋は暗く、燭台の上にある蝋燭の明かりの小さな範
囲しか見えない真っ暗な部屋
早苗は怯え、泣き出しそうになり逃げだそうとしたが、諏訪子はそ
れを許さずに簡単な呪いで体力を吸い出した
体力を吸われた早苗はそのまま気絶してしまい、倒れ込む寸前に諏
訪子に抱きかかえられる。

早苗を抱きかかえた諏訪子は八卦が描かれた陣の中心に寝かしつけ、
少し離れた位置に立つ
諏訪子は自身の神の力である地
地の霊力の流れである地脈を神社内に吸い出す

諏訪子の行動により神社下の大地に莫大な霊力が集められた
地脈によって莫大な霊力を得た八卦の陣は強く光り輝き、早苗の体
を包み込む。

八卦の陣が光り輝き、早苗の体を包み込んだ時
早苗の上から再び莫大な霊力が流し込まれた
神奈子が天脈から送り込んだ霊力により、八卦の陣は更に強く輝く。

諏訪子は神奈子の協力だと気付き、計算は狂ってしまったものの好
都合だった
地脈だけでなく天脈からの霊力により、八卦の陣に送り込まれた霊
力はとてつもない量になっている
その霊力を利用し、早苗を呪えば確実に成功する
諏訪子はそう確信した。

諏訪子が早苗に掛ける呪いは禁呪
禁呪とは相手の何かを禁止する呪術の事である
禁呪により早苗の魂の大きさを制限し、年月と共に大きくなる魂の器
その魂の器の成長と同時に早苗の禁呪を少しずつ解いていき、器を
更に成長させる事がこの儀式の目的。

器の許容量を魂の二つ分並の大きさにする事で、融合して大きくな
った魂を強引に突っ込む
こうする事で将来、魂が器に入りきらずに決壊してしまう事を防ご
うとしたのだ。

儀式は順調に進んでいき、地脈も天脈も安定して八卦の陣に流れ込
んでいる
儀式も大詰めに向かっている時、諏訪子は何か違和感を感じた。

諏訪子が計算し、予想していた以上に神奈子が送ってくる霊力が多かったのだ
それでも諏訪子はこの程度なら修正できると思い、儀式を続ける事にした。

それが後に失敗だと気付いたのは儀式が終わった後だったが……

最後に諏訪子の神気で呪いを包み込み、呪いが外部に気付かれないように細工する
神気が早苗を包み込んだ時、諏訪子は再び違和感を感じた。

（早苗に神気を包み込むつもりだったんだけど……
早苗が神気を吸収してる？　それとも意識の無い真苗が目を覚まして何かした？
原因はともかく、早苗の体に神気が吸い込まれているのは事実、一体何が……）

諏訪子は神気を送り続けながらも、神気を吸収する早苗の体に疑問を抱く
しかし神気をで包まねば呪いが外部に気付かれる可能性が有る為、神気で早苗を包み込むのを止めない
だが、早苗の体を包もうとしている神気は早苗に吸収され続けている。

原因が分からない為、呪いが気付かれる対策は別の機会にする事にして
諏訪子は儀式を終わらせた。

少年期編　二十三話【命を賭けた時】（後書き）

何故戒魔が亜空穴を使える？
過去の記憶から技術（使い方）は覚えていたので描写は無いが部屋で練習
つい先日できるようになりました。（という事にさせてください）

フランドールがチルノよりも弱い？
いいえ、戒魔はまだ飛べないのでチルノには攻撃が届かなかったのです
フランドールは部屋の中で接近戦、加えてフランドールは暴れた経験は多くとも、戦闘の経験はほぼ皆無なので喧嘩慣れしているチルノよりも素直な行動しかできませんでした
身体能力などは確実にフランドールの方が遙かに上ですが、チルノの方が戦い慣れているだけです。

更に戒魔は美鈴から体術を習っており、元世界でも体術を使っていたのでそこそこ動けます
虚を突くような戦い方の知識は持っているフランドールですが、実際にされるのは初めてだったので戒魔の戦い方について行けず、負けたというわけではありませんが勝てているかと言われると……

何故儀式で八卦を選んだ？
八卦は数少ない天と地の属性を持つからです
最初は五行にしようと思ったのですが、その場合地属性は存在するので地脈は使えますが、天属性は無いので天脈は使えません。

少年期編　二十四話【運は実力ではなく単なる幸運】

視点　フランドール

……本気で殺す気は無かったんだけど、殺してしまったなら仕方無いわ
素直にお姉様に謝って戒魔の事を訊こうっと
戒魔が死んだなら話してくれると思うし、私も面倒が少なくていいわ。

お姉様の客を殺してしまった事は悪いとは思うけど、私が思うのはそれだけ
戒魔に対して悪いとは思ってないわ。

会って一刻も話してない相手の生死には興味無いしね
強いて言うなら……初めて私と対等に話そうとした人間かしら？
そして私と最も長く戦った生き物ね。

私は暴れていた事が多かったけど、戦った事は少なかった
多分……私と一番戦ったのはお姉様かな？
暴れ回る私を止めようと頑張ってたけど、私が首を掴んで持ち上げたら泣き出したのよねー
あれは虐めって言うのかしら？　暴れた事と虐めた事の経験ばかりで戦った事って殆ど無いわね。

もしかして……戦いと呼べる事をした相手って戒魔が初めて？
パチュリーは戦いを避けるから戦った事無いし、美鈴は一回だけ一方的に半殺しにしてから戦いを避けようとしてる

お姉様は私の虐め相手だから戦いじゃないし……他の場合も暴れてたばっかり。

どうやら本当に戦いと呼べそうな戦いをしたのは今日が初めてらしい
私と戦える人間を失ってしまった……そう思うととても惜しい事をした気分になる
それでも後悔は無い、何故なら結果は私の勝ちだったし、面倒事が減ったからよ。

さて……もうこの部屋に用は無いわ
戒魔に凍らされた足元の氷を溶かそうと頭を落とし、屈むように足に目を向ける。

しかし、この時私は失敗を犯した
自分の力に自信を持ち、一撃が必殺だと自覚しているからこその失敗。

私が足に目を向けた瞬間、背中に何かが乗せられた?
しかもその何かは勢いよく乗ったらしく、私はそのまま体が倒れてしまう
足元は凍ったままだったので無様に倒れ込む事は無かったが、それでも床に手を置いてしまった。

何が起こったのか分からず、首だけを後ろに回して振り返ってみるとそこには先ほど私が殺したはずの戒魔が辛そうに呼吸を乱しながら私の肩に掴み、落ちないように必至にのしかかっていた。

よく見てみると、戒魔の霊力はまだ余裕がありそうだが
抜け出ている霊力の勢いは止まっていないので無意識に体が霊力の限界だと判断したらしい

戒魔の顔は限界寸前と言っており、それと同時に俺の勝ちだと言っていた。

「地」

「がぁ！！！」

戒魔の魔法で石でできていた床から勢いよく拳大の大きさをした突起が突き出した
突起は膝が着かないような格好で四つん這いのような格好をしていた私の腹部に直撃する
突起が当たったのは急所である鳩尾、突起は先こそ丸く、貫くような形はしていなかった
それでも……いや、だからこそ激痛が走り、呼吸が苦しくなる。
力が抜け、戒魔を背中に乗せている状態の体を支えきれずに体が落ちる
しかし先ほどの突起が当たった時に小さく体が浮き上がったので、今度は自分から突起に当たってしまう
力が抜け、戒魔の体重と重力で落ちる体の勢いは強く、腹部と突起との距離は短かったがそれでもとても苦しかった。

それだけではなく、戒魔が最後の力を振り絞って私の肩を揺らす
腹部に突起を強引に押し付けられ、体を揺らされて突起の先が腹部の色々な場所に刺さる
押し付けられる度に痛みと吐き気を催し、苦しみから意識が朦朧としてくる。

初めての強烈な痛み、初めて他者から与えられる苦しみ
私はここまでの苦痛を感じたのは初めてよ……戒魔……絶対に仕返

ししてやるから……覚えてなさい。

視点　戒魔

意識を失ったフランドールの背中から下り、床の上に立つ
それと同時にフランドールが俺の方に倒れてきたので残り少ない体力でフランドールの体を支える。

……あの炎には殺されるかと思った
後一秒亜空穴に入るのが遅ければ死んでいたかもしれない
それほど危険な賭けだった。

先ほどの事を説明しておく
巨大氷柱を打ち出した後、フランドールなら必ず破壊してくると思った
破壊してきた場合氷の破片が大漁にばらまかれるので、その破片に隠れて亜空穴の中に入り、背後から攻撃するつもりだった
だがフランドールは破壊しないで炎を打ち出した、それにより俺の計算は狂ってしまった
炎は完全に予想外だったので対応が遅れ、炎が当たる直前に何とか亜空穴に入り込めた。

あの炎でフランドールは俺が死んだと思わせる為
大きく霊力を消費する事を覚悟し、フランドールの背後に亜空穴を作りだして亜空間の中で待つ
少し考え事をしていたフランドールも、さすがに俺が死んだと判断したらしく、足元を見た。

足元を見た理由が氷を壊す事だったのか、どうするか考える事だったのかは分からない
それでもフランドールは油断し、隙を作った
その瞬間に俺はフランドールの背中に飛びつき、地の魔法で石でできたこの部屋の床で突起を作り出した。

どこに当たったかは見えないので分からなかったが、それでも痛みは激しかったらしく、力が抜けて突起に乗った
俺の重さも加わり、力が抜けているので更に苦痛を与える為に体を揺らして突起に押し付ける。

正直に言ってこの程度で終わるとは思ってなかった為の行動だったなのでこれで気絶するとは思わず、驚きながらフランドールから下りた……という事だ。

女の子には辛いと思うが、この次は顔に勢いよく突起を当てるつもりだったので拍子抜けした
フランドールがここまで撃たれ弱いとは思わなかった
表面上だけだが足以外を傷つけなくて良かったと思わなくもないが、今は敵なのでこのままで済ませていいのか悩む。

俺はフランドールを支えている状態で目の前に有る石でできた突起を見つめる
突起をしばらく眺め、フランドールに目を向け、そして再び突起を見る。

……思いっきり頭をぶつけてやるべきか？

割と真剣にそう考え出した時、大きな音を立てて扉が開かれた

誰かと思い、振り返ってみると桃色の寝間着を着たレミリアが姿を見せた。

改めて状況を確認したい
フランドールによって燃やされた布団と壊されて外が見える壁
足元が凍らされて気絶しているフランドールと俺の前にある石でできた突起物
最後に霊力不足と疲れ、緊張が途切れた事によって息が荒い俺。

どう見ても死力を尽くして戦った跡なのだが、フランドールは足にしか外傷は無いのに俺は無傷
実力から見てどう考えても俺が勝ったとは思えないが、状況はどう見ても俺の勝ち
レミリアは部屋の惨状と俺達を見て動きを止めたまま数分が経つ。

そろそろフランドールを支えるのが辛くなってきた時
レミリアの体が震え始めたが……どうしたんだ?

「あ……あ……貴方達は一体何をしてたのよーーー!!!」

「何って……殺し合い?」

「何故!?　何故殺し合いなんてしてるの!?
というかフランも何で地下から出てきてるの!?
あ~~っもう!　訳が解らないわよ!!!」

レミリアの大声にも冷静に返事をする俺
俺の返事に食い付くレミリア
更に爆音やレミリアの大声で集まる妖精メイド達
こんな状態……どうすればいいんだ?

視点　フランドール

……なんだか騒々しい
誰よ……人がせっかく寝てたのに邪魔をして……

「だからなぁ……何度も言うけど知らないって
フランドールが突然部屋に来て少し話したら襲ってきたんだって言
ってるだろ？」

「なんでフランが戒魔の部屋に態々来るのよ！
いつも地下室で籠もっているフランが戒魔に会うだけで出てくると
は思えないのよ！」

あぁ、お姉様が来たのか……あれだけ派手な音を立てればいくら寝
坊助なお姉様でも気付くわよね
来てからそんなに経ってなさそうだけど……私は何で寝てたんだっ
け？

「……あ！？」

「起きたのか？」「起きたのね！？」

寝転がっていた体を起こして座る
って、何で私は寝転がってたの？　確か足を氷漬けにされたはずな
んだけど……

「今の状況を簡単に説明する
俺達の戦いの音を聞いたレミリアや妖精メイド大勢来て、レミリアが俺に質問をした
レミリアの質問に答える前に妖精メイドを帰らせ、フランドールの足元の氷を溶かして寝かせた
残念ながら布団は駄目になったから床の上で俺の膝枕だったがそこが我慢してくれ
その後はまたレミリアから尋問されていた所で君が起きた、何か質問は？」

「無いわ、説明ありがと
ついでに膝枕もありがとね、あまり堪能できなかったけど寝心地は悪くなかったわよ」

「それは良かった
言ってくれればまたしてもいいぞ？」

「遠慮しておくわ
気絶していたならともかく、意識がある状態でされても恥ずかしいだけよ
それより……私はどれぐらい気絶していたの？」

「十分といった所だ
騒がしくして悪かったな、レミリアも謝っておけ」

「何で私まで謝らないといけないのよ！？
それだけじゃなくて、さっきまで殺し合いをしてたんでしょ！？
何でそんなに親しそうに話せるのよ！？
ついでに戒魔は今度私に膝枕をしなさい、寝心地が良かったみたいだし！」

「私の気絶（安眠）を妨害する程の大声を出したからでしょ？
それに、別に親しくしてるつもりは無いわ、私は敗者だからおとなしくしてるだけよ
最後のは駄目、膝枕の心地よさをお姉様に教えるのは嫌」

「俺の膝が良いかはともかく、俺の膝枕程度で言い合いをするな！」

「あーーーーもーーーーー大声を出して悪かったわね！
親しくないのはどうでもいいわよ！　敗者なんて言われ……敗者？」

あら、お姉様が黙っちゃった
私が負けたのがそんなに意外かしら？
……そりゃ意外でしょうね、お姉様でも私に勝てないんですもの。

というかお姉様ってこんなに楽しい人だっけ？
もっと強者って雰囲気を出してたと思うんだけど……私に泣かされた時以外は。

「聞き間違いよね……うん、そんなはずが無いわ
私でも勝てないフランに戒魔が勝つなんて有り得ないものだからきっと聞き間違いよ、絶対に聞き間違いだわ」

お姉様も良い感じに混乱してきているらしい
混乱ついでに現実逃避をしてるわ
私と戒魔はお互いに顔を合わせ、同時に溜め息を吐く
面倒になりそうだという意味を込めて。

続く

少女期編　裏十四話【最大の失敗の結果】
表との時間差……四十日

視点　諏訪子

「どうするんだ諏訪子！？
早苗が……早苗がーーーーー！！！！」

「いい加減に落ち着け！」

「ぐはぁ！」

混乱した神奈子の頭を殴り飛ばす、神奈子はそのまま勢いよく床に倒れ込んで気絶
神気で強化した拳だけではなく、殴ると同時に余った地脈の力も込めた
その威力はコンクリートの地面に罅を加える程度の威力が籠もっている
そんな拳で殴られても気絶程度で済む辺り、神奈子も丈夫という事が分かる。（知ってたけど）

儀式という名の禁呪の呪いが終わり、早苗はそのまま眠ったままだが……それはいい
真苗がどうなったか分からない、今ので目を覚ませばいいんだけど……それもいい
だけど……まさかこんな事になるとは思わなかった。

「いたたた……そこまで思いっきり殴らなくても……」

「こうなってしまった最大の原因の癖に何をぬけぬけと……」

「それは……お前の手助けをしようと思ってだな……
結果的に裏目に出てしまったみたいだが」

「裏目なんてもんじゃないわよ！

どうすんのよ！　早苗の魂が人間じゃなくなっちゃったじゃない！
神気と地脈の霊力を吸い過ぎて魂が進化しちゃったのよ！」

「本当にすまない！　申し訳ない！　私も何か協力したかったんだ！
結界とか陣を書いただけじゃ役に立ったという感じがしなかったんだ！
心から反省してる！　もう二度と大事な時に勝手な事はしない！」

そういう事よ……
神奈子が天脈から持って来た霊力と私の送った地脈で八卦の陣が超強化されてしまったの
その中に居た早苗に莫大な霊力が全部入っちゃってね……魂が強化されている所に私の神気を吸収
その結果、早苗の魂が進化を遂げ、私達を遙かに越える霊力と神気を得た神となった。

神になったと言ってもそれは魂だけの話
肉体は立派な人間のままで姿形は何一つ変わっていない。

変わっていないというのが最大の問題なんだよね……
肉体というのは魂に引き摺られる、魂が神となったのなら肉体も神にならなければ変だ
原因は不明、こんな事は本来有り得ない事、人間であると同時に神でもあるなんて……

一応この存在の名は私の知識に存在する
その名を現人神（あらひとがみ）と呼ぶ
昔、天皇は人間でありながら神に等しい存在と言われていた事からこう呼ばれていたらしい
他にも王は神であるとか、そのような伝承はそこそこ存在する。

早苗は天皇でも王でもないが、現人神と呼ばれる存在に本当になってしまった
私の予想では強引に魂を改変しようとしたからだと思うがやはりそれが原因かと言われると首を傾げざるをえない。

だが今は原因なんてどうでもいい
問題なのはこれから早苗をどうするかという事。

現人神となった早苗が普通の人間と一緒に過ごせるだろうか？
私は無理だと断言する。

何故なら子供というのは大人に比べて感が鋭く、なんとなくだが何かに気付く
早苗の何かは現人神、つまり異端であり異常
子供というのは自分達と何かが違うだけでも苛める対象にする
真苗は大人だから大丈夫かもしれないが、まだまだ子供の早苗が苛められるのは危ない。

もし何かの拍子に霊力や神気を解放したりしたら……
最悪、学校の一つや二つぐらい吹き飛ぶかもしれない
今の早苗にはそれほどの力を持っているのだ。

それもこれも……

「大半、お前が悪い！」

「ちょっと待て諏訪子！
突然訳の解らない事を言うな！」

「お前が勝手な事をしなかったら……」

「それはさっき聞いた！
確かに悪いのは私だし、それは言い訳する気は無い！」

「どうするのよ！？
このままだと早苗は普通の生活を送れない、下手すれば苛められるかもしれないんだよ！
というか苛められる可能性が高すぎて外に出すのも怖い！」

「それはそれで過保護過ぎないか！？
いや、苛められるかもしれないというのには同意するが……」

「過保護に関しては神奈子に言われたくない！」

だけど本当にどうする？
早苗を家に閉じ込めて通信教育とかいうのをさせるか？
でもそれだと早苗に友達ができなくて可哀想だし……そもそも私達には何もできない
決めるのは早苗の両親だ。

諦めて学校に行かせる？
何度も言うがそれは苛められる可能性が高すぎるし、霊力を暴発されても困る
校舎を壊したら誰が弁償するのよ？　私達はお金なんて持ってないわよ！
……一応昔の貢ぎ物にあった財宝とか神社に入ったお賽銭とかなら持ってるけどさ。

どこか私達でも受け入れられるような場所は無いかなぁ……ん？

「ねえ神奈子、ちょっと訊きたいんだけどさ」

「構わんぞ、私に分かる事ならな」

「いや、思い出してくれるだけでいいよ
真苗……男の方ね、真苗って幻想郷とかいう場所に行ったって言ってたよね？」

「うーむ……おお、確かに言っておったな
だがそれがどうかしたのか？」

「うん……物は相談なんだけどさ……」

でもこれを言っていいのだろうか？
真苗の言う過去が変わり、歴史も変わってしまうのではないだろうか？
私達神が時の自然の流れを変えてしまっていいのだろうか？

「何やら悩んでいるようだな
安心せい、不安なら本当に相談程度で構わん
細かい事は話し合って決めればよかろう？」

そうだった、私には相談できる相手がいる
私だけで抱える必要は無い、相談だけでもしておいて損は無いね。

「うん、私と神奈子、そして早苗と真苗で……幻想郷に移住しないかい？」

少年期編　二十四話【運は実力ではなく単なる幸運】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

フランドール・スカーレット／フラムドール・スカーレット
破壊の幼子

どう考えても思い浮かばなかった最難クラスに悩んだ名前の一人
破壊から某ゲームで爆弾としてフラムというアイテムを思い出し、
そのまま名付けられた
悪魔の弟ではあまりに捻りが無いので変更、かなり悩むも結果はこれである

簡易特徴
レミレアの弟とは思えないほどおとなしい吸血鬼
だが兄と同じ血を持っているせいか、戦いが嫌いなのに戦いで一度血を見ると兄以上の力で暴れ回る
しかしその事を知る者はレミレアを除いて誰一人いない
何故なら、フラムドールが暴れた場所には生き残りは誰一人残っていないからだ。

基本的に戦いは嫌いであり、知らない人と会話をするのが苦手な典型的な人見知り
当主となった場合、知らない誰かと話す事が必要だったので実力と頭脳から当主にされそうだった所を拒否、自ら地下に籠もって引きこもり状態になる
永遠に引きこもりを続けるつもりだったのだが暇潰しに紅魔館内を散歩している時、同じく紅魔館を散歩していた戒魔に出会う
知らない、しかも人間に出会ったフラムドールは混乱するも、戒魔

は初めて会うレミレアに似た者に興味を引かれて自己紹介
自己紹介をされたフラムドールは混乱から覚め、同じくなんとか自己紹介をする
それからこの二人はお互いの知識で話し合い、友人となる
なお、戒魔が紅魔館で最初の友人がフラムドールというのは、戒魔が気に入って何度も会っているレミレアからすればかなりの屈辱だったらしい。

あらゆる面で紅魔館の全員を上回るが、戦闘となるとレミレア、刹那、パディ、美龍らには勝った試しが無い
吸血鬼としての基本能力が非常に高く、才能や能力など、あらゆる事に恵まれていたフラムドールは戦闘経験が全く無かったからだ
故に、技術や努力で戦闘力を補っている戒魔や砲魔にも勝った試しが無いという……何気に紅魔館の名のある者達でも最弱の人。

基本的に知的な性格をしており、おとなしいので害は無いに等しい
趣味は語り合いで特技が破壊
もっとも、制御する為や訓練という時以外で破壊の能力は滅多に使わない
好きな物は本、嫌いな物は怖い物
実は臆病者なのだが、それは本人しか知らない秘密。

なお、自分から引きこもったくせに寂しさからぬいぐるみを抱いて寝る癖がある
そのせいかフラムドールの部屋は下手な女の子の部屋より少女趣味全開であり、アルスに依頼して作って貰った「お兄様人形」は大切な宝物だったり……

少年期編　二十五話【姉妹と兄弟】（前書き）

寝てしまって投稿が遅れました（五分ほど）

少年期編　二十五話【姉妹と兄弟】

視点　レミリア

戒魔とフランが喧嘩をした日から一週間経った
あの時は混乱して話しを訊けなかったが、翌日になって詳しく問い質してみた所……

「パチュリーから戒魔の話しを聞いて気になったから」

「俺の事を訊かれて答えるのを拒否したら襲われた」

とりあえず私の客に二度と攻撃するなとフランに釘を刺しておいた
戒魔にもあまり危ない事はしないように言っておいた。

しかしフランも戒魔も拒否
理由を訊いてみた所……

「今回は負けたけど、次に戦う時は絶対に勝つ為よ
だから攻撃しないなんて約束はできないわ」

「危ない事は常に存在する
俺は平穏と危険な中なら平穏の方が好きだけど、それでも刺激が無いと退屈過ぎる
今までが平穏だろうが危険だろうが退屈とは無縁だったんだ
俺の数少ない楽しみを奪うような事をしないでくれ」

……との事よ

フランは戒魔に対抗意識を抱いてる
目的は殺すではなく勝つなのでフランが戒魔を殺すとはあまり思えないけど
それでも殺してしまう可能性を否定できないから絶対に殺さないようにと何度も何度も言っておいた。

戒魔は殺されるような事も楽しみと言っていたのでその感覚をどうにかしようと思った
しかし、戒魔自身もこの感覚はどうにかしたかったがどうにもできなかったらしい
治そうと思って数年掛けたようだが治らなかった事を治せるとも思えずに断念。

戒魔の事は毎夜のように聞いているが、それでも知らない事はまだ有った
そういえば戒魔の周囲の事や起こった事は聞いているけど、戒魔自身の事はあまり聞いてない
趣味とか、性格とか、特技とかも知らなかったわ……

次からは戒魔の周りの事だけではなく、戒魔自身の事も教えてもらおう
私は戒魔を友として認めている、それなのにその友自身の事を知らないのは滑稽ね。

話しを戻し、次はフランに戒魔の事を話したパチェから話してもらった。

「フランに戒魔の事を教えた理由？
フランだって紅魔館の一員でしょ？　なのに教えないのは不公平じゃない

けど、まさか襲ってまで話そうとは思わなかったわ……」

理由には納得できたけど、もう少し注意してほしかったわ
もし戒魔が死んでいたら紫々の好意に何と詫びればいいのか……
戒魔の知り合いに謝っても謝り足りないわよ……向こうであんなに慕われてたんだしね。

もうね、戒魔の話しを聞けば聞くほど慕われてるのが解るわ
向こうの私であるレミレアを筆頭に八雲、西行寺、闇魔、天狗、鬼に神に天人崩れ……
大物にばかり好かれる博麗ってどうなのかしら?

……どうでもいいか、今は私が独占できるんだしね
向こうでは誰もできなかった戒魔の独占……向こうの私が知ったらさぞ悔しがるでしょうね
自慢して言い回りたいけど、それは戒魔との約束であり、契約で自慢できないのが惜しいわ。

まぁ何はともあれ、フランが勝手な事をしたのは許せないけど戒魔が無事で良かったわ
それにしても……フランは戒魔の何がそんなに気になったのかしら?

戒魔は自分の事を訊かれて言うのを断ったって言ってたし……あぁ!
もしかして戒魔って不振人物って事になってる……とか?
しまったー……戒魔の事を知ってるのは私だけで、その私が戒魔を気に入ってるから訊くに訊けない
更に戒魔との契約で話せないとも言ったから絶対に話さないと思って戒魔本人に訊きに行ったのね。

やっぱりパチェや美鈴も戒魔を探ったりしたんでしょうね……多分

会話の中で少し訊いたって感じでしょうけど
今回の件はフランも訊こうと思ったけど直接的に行って、最終的に
強引にしたからの戦いだったわけね。

戦いの詳細も訊いたんだけど、フランが嫌がったから断念したわ
フランに勝つ為の参考にしようと思ったのに……残念
でもその考えはフランに読まれてたらしく、嫌味と共に説明してくれたわ。

視点　フランドール

お姉様から戦いの詳細の解説を求められた
だけど自分が負けた戦いを教えるのは悔しくて嫌だったから断る
それに、お姉様の顔には私の勝ち方を知れるかもしれないという考えが見て取れた
その態度が気に食わなかったから嫌味っぽくお姉様にはその戦いの再現は無理だと教えてあげよう。

「お姉様には戒魔と同じ戦いなんて絶対に、絶対に不可能よ
戒魔の戦いを再現するには莫大な霊力と特定の技術に知識が必須
再現可能なのはパチュリーぐらいだけど、パチュリーは技術が足りないのよね……
美鈴は全部足りないしね、特に霊力があまり多くないから絶望的
お姉様には知識と技術が足りないわ、そもそもお姉様の立ち位置は私になりそうだから無理ね」

「知識と技術が足りないのは納得できるけど、フランと同じ立ち位

置ってどういう意味？」

「簡単よ、お姉様の戦い方は私と似たような吸血鬼の身体能力を利用した力尽くお姉様は私みたいに直線的じゃないけど、身体能力に頼った戦い方をしている限り戒魔には勝てないと思うわよ？」

「……どうして勝てないのか教えてくれないかしら？」

「はぁ……戒魔の戦い方は相手に勝つ事を目的にしているんじゃなくて生きる為の戦い方をしてるからよ
どちらもどんな事をしてでもという事が前提だけど、勝つ戦い方は攻め、生きる戦いは守りが主流よ
私達を相手に攻めの戦いなんてしてみてよ、即死するに決まってるじゃない
だから戒魔は守りの戦いである生きる戦いをするのよ、生き残りたいからね」

「なんだか今日は妙に滑舌ね、どうかしたの？
フランから私にこんな事を教えるなんて珍しい以前に初めてじゃないそれに変におとなしいし……戒魔に負けて自信とか無くしちゃったの？」

あ……そういえば私はお姉様に脅したりして話してたんだっけ？
お姉様の前では知的な面とかおとなしい所とか見せないようにしてたのよね……
だってお姉様ったら当主になっても私に怯えているし、もし私が当主を明け渡せって言ったら渡しそうだったんだもん
面倒だからそんな事は言わなかったけど、当主としての自信も持てないお姉様の前でこんな面を見せたら……

お姉様は当主として、姉としての自信を失ってしまうかもしれない、
そう思ったの。

その考えから、私はお姉様に対して一切おとなしいという印象を与
えなかった
それなのに今日は……戒魔と戦った日からかしらね、自分をさらけ
出しているわ。

それがおかしくて、おもしろくて、不思議で私は大笑いをしてしま
った
お姉様は突然大声で笑い出した私に驚き、少し怯えてたけどね。

「あーおかしいー……そっかー、私ってそういう感じにお姉様と接
してたんだっけ
戒魔に負けたのが自分でも余程驚いたみたいね、お芝居も演技も忘
れちゃったわ」

私の言葉の意味が分からずに混乱するお姉様
でも私はそんな事に構わずに話しを続ける
もう言ってしまったのだ、これ以上隠す必要は無いわ。

「お姉様は私の言葉の意味が分からないみたいね
簡単に説明すると、私は実力がお姉様より高いという理由から前当
主に当主にさせられそうになったのよ
でも私は当主になんて興味が無かったし、面倒そうだったから嫌だ
ったの
で、狂ったように暴れたら私に当主が務まらないと思うと思わせた
のよ
その後も面倒事になりかもしれないと思ったから地下で過ごそうと
思ってまた暴れた

お姉様には迷惑を掛けたと思うけど、それでも私は面倒事が嫌だったのよ」

私の告白にお姉様は唖然として口を開けたまま締まらない顔を晒している

……あれ？　茫然自失のようになると思ったのになんだか納得顔になってる……

あれー？　私ってお姉様の前で素になった事は無いはずなんだけどなー

パチュリーや美鈴はお姉様が悲しむ可能性が有るという理由で話さないって言ってたのに……

戒魔には会ったばかりだからそんなに私の事を知ってるはずが無いから教えられないわよね？

戒魔には使い魔が居るって聞いたけど、そもそも会ったことが無いからどうでもいいわ。

「そういう事ね……全く別の性格だと思ったらここまで似てるとは思わなかったわ

という事は私にもそういう一面が存在すると思った方がいいかしら？

とりあえず感情だけで行動しないように注意するべきね

もし暴れたりしてしまったら危険だもの、座禅でもしようかしら？」

……お姉様が真剣に何かを考えてる

意味はよく分からなかったけど、どうやら素の私に心当たりが有ったらしい

それにしても……お姉様の可能性の一面、その一面って何かしら？

もしかして私は演技で暴れたけど、お姉様は本気で暴れる可能性が有るという事？

でもそんな姿を見たことが無い、それは私だけでなくパチュリーや

美鈴も同じはず
そもそもお姉様が感情だけで行動する事自体がそう多くないのに……
どうでもいいけど、お姉様の口から座禅なんて似合わないにもほど
があるわよ？

「お姉様、少し質問してもいいかしら？」

「え？　ええ、うん、いいわよ？」

「お姉様は……悲しくないの？
本当なら私が当主になってたはずだったのよ？
それなのに嫌だからって辞退して……お姉様に態々譲ってあげたよ
うなものなのよ？」

お姉様は少し苦笑して、それでも悲しそうな素振りなんて見せない
で言った。

「悲しく無いとは思わないけど、私はそんな理由で当主を嫌になっ
たりしないわ」

「……理由を教えてもらっていい？」

「私に似た人の話を戒魔に教えてもらったの……」

「お姉様に似た人？」

そんな人……幻想郷に居たっけ？
少なくとも私の記憶には存在しない……外の世界の住人という考え
はパチュリーが否定してたから低いと思う

なら……お姉様に似た人とは誰の事なのかしら？

「ええ、とある場所に兄と弟が居たわ
兄の方は喧嘩が強くて、戦いが大好きな人
弟はそういう事はしないけど才能が高く、知識が豊富で賢かった
当主にするなら……そう言われたら過半数が弟を選ぶと思わない？」

「……」

「でも弟は人見知りだったの
だから地下室に逃げ出し、当主を兄に明け渡した
兄はきっと惨めに思ったでしょうね、大勢が弟の方を推薦するのに
自分が当主になった
私はフランが当主にって話しを知らなかったから良かったけど、その兄は知ってしまったらしいわ」

確かに私達に似ている
私と弟は性格こそ違うけど姉に、兄に当主を自分の都合で譲った
お姉様は知らなかったけど兄はその事を知ってしまった……それが早いか遅いかの違い
それだけだけどお姉様にはその話しを知る機会に恵まれ、兄は知らずに知ってしまう。

お姉様の言う通り、兄はどれだけ惨めだっただろうか？
自分が当主と周りに認めさせるのはとても大変な事だと思う
お姉様は知らずに認めさせたからそこまでの心労が無かったと思う。

でも兄は？　知ってしまった兄はどうだろうか
決まっている、弟と比べられないように必至に努力したに違いない
どれだけ頑張れば認められるか分からないから精神的重圧はとても

重かっただろう
私には想像できないが、下手すればそれをお姉様に与えそうになっていたのだ
他人事で済ませられる事では無い。

「兄は何とか自分が当主だと周りに認めさせた
その後は部下や友に恵まれ、それなりに楽しく過ごしていたそうよま、自分が早く仲良くなりたかった戒魔と先に仲良くなったのが弟って事には悔しがってたみたいだけどね
似ている私達とその兄弟だけど、戒魔と先に仲良くなったのは私が先だったわね」

お姉様は楽しそうに笑う
戒魔の知り合いの話しだけど、他人事とは思えない
もしかしたらその兄弟は私達姉妹の可能性の一つだったのでは、そう思ってしまうほど似ていると思ってしまった。

「その兄弟の名前を教えて……お姉様は知ってるはずよね？」

私の問いに、お姉様は驚いた顔をして、真剣な顔になった
真剣な顔になる理由は分からない、けど訊いてはいけない事だったらしい。

「確かに私はその兄弟の名前を知ってるわ
戒魔は私に色々な事を教えてくれた、それこそ彼らがどういう当主だったのか
そんな家族だったのか、性格、思考など色々よ」

「……そんな話しを聞いてお姉様はどう思ったの？」

「……悔しかったに決まってるでしょ？
この話しを聞いた時には私は戒魔を友人だと認めていた
その友人が別の当主を褒めてるのよ？」

お姉様の顔はやりきれないという感じで、とても悔しそうだった
でも次は嬉しそうだけど複雑という顔になる
表情の変化が多くて今日のお姉様はおもしろいわ。

「戒魔は……当主としては弟が相応しいと言う
けど、きゅ……家柄としては兄が相応しいと言ったの」

「それがどうかしたの？」

「分からない？
その時の私は今のフランを知らないのよ？
つまりフランは暴れん坊で暴走児という印象を持ってるの
そして兄はそのフランに似ている、戒魔からフランが当主に相応しいと言われたに等しいのよ！」

それは……悔しいでしょうね
戒魔は何を考えてそんな事を言ったのかしら？
もし何も考えずに言ったのなら……許さないわよ。

「でも戒魔はこう言ってくれたわ
当主とは比べられる事ではない、当主として相応しいかどうかは従者が決める事
今の私にはそれなりに多くの従者……妖精メイドだけど多くの従者が居るわ
つまり私は従者に当主として認められているのよ、だから悔しくても負けているとは思わない事にしたの」

確かに駄目な主人に着いていく者は誰も居ない
お姉様は妖精とはいえ、多くの者に好かれている
美鈴のような優秀な門番も居るし、パチュリーみたいな友人も居る
ふふふ、確かにお姉様は当主に相応しいわ、私もお姉様が当主で良かったと思えるんだものね。

「戒魔は私の小さいけど重要な不安を取り除いてくれた
だからフラン、貴女がどんな理由で私に当主を譲ったとしても私には関係無いわ
だって今は私が当主であり、当主として好かれているのは私ですもの
絶対にフランに当主を譲ってなんてあげないわ！」

「……お姉様は……強くなったのね
昔私に苛められて泣いていたお姉様とは思えないわ」

「そ、その事は言わないでちょうだい！」

真っ赤になって照れるお姉様
こんなに当主として立派になるとは思わなかったわ
当主としてお姉様を成長させてくれた戒魔には感謝の念しか湧かない
次に会った時にお礼と謝罪をしないとね、ついでに負けた仕返しも。

「それでフラン、貴女は今後どう過ごすつもりなの？」

「どうって……今までと同じだけど？
基本的に地下でのんびり過ごして、気が向いたらパチュリーからお姉様の事を教えてもらう
これからは戒魔の事も訊こうかしら……」

一応お姉様を育ててくれた恩人だし、どんな事をするのかも気になる機会が有ればまた戦えるかもしれないしね。

「……フラン、姉として、当主として命じるわ
貴女は今後地下に籠もる事は許さない、これからは地上に住みなさい」

「はあ!?　どうしてそうなったのよ!?
私は地下の方が過ごしやすいし、地上には私に怯える奴が多いから嫌よ!」

お姉様ったら……何を考えてるのかしら?
もしかして私が意地を張ってるとでも思ってるの?
それとも仕方無く地下に籠もって、お姉様の為に我慢してるとでも思ったのかしら?

「地下の方が過ごしやすいのなら地上も過ごしやすくしてあげる!
フランに怯える者が居るなら私が説得してみせるわ!
だから……だから私と一緒に住んでフラン!」

「だから、どうしてそうなったのよ!?
何で私と住みたいなんて突然言い出すの!?
謝罪とか哀れみとか言うつもりなら断固お断りよ!」

「違うわ!
そんな安い理由じゃない!
私はフランと仲良くしたいだけよ!」

「もっと意味が分からないわよ!」

何？　どうしてそういう方向に思考が向かったの！？
……あああぁ！　もしかして私が素を出して暴走が態とだったからと知ったから！？
過去の恐怖から私とあまり話せなかったけど、それが態としたのなら仲良くなりたいとか思ったの！？
可能性が高そうで自分の推理力が悲しいわ！

「……どうしても一緒に住まないと駄目なの？」

「駄目よ！　絶対に一緒い住むの！
これは決定事項よ！　絶対に前言撤回なんてしないわ！」

「お姉様……我が儘すぎない？」

「ふふ、私を誰だと思ってるの？
私はレミリア・スカーレット、傲慢で我が儘な吸血鬼、紅魔館の当主よ！」

そんなに堂々を言わなくても……というか私の言葉に何を愚問なって顔しないでちょうだい
なんか悔しいじゃない……負けた気分になっちゃうわよ。

「というか負けか……もう折れてるし……
わかったわよ、一緒に地上に住むわお姉様、だからこれ以上騒がないでちょうだい」

「ありがとー！　ありがとーフラン！
私頑張るからね！　当主として絶対にフランを受け入れさせてみせるからね！
だから……だから楽しみにしておいてね！」

こうして私はお姉様と一緒に住む事になった
これからどうなるかは分からない、でもお姉様はきっと最高の当主になれると信じたいわ。

……そうそう、言い忘れてたけど
一緒に住むといっても部屋はお姉様の隣、戒魔の部屋と逆隣になってるわ
部屋順は私、お姉様、戒魔となってるの
戒魔の部屋も近いから……お姉様を抜きにしても楽しめそうね。

続く

視点　諏訪子

「幻想郷に……だと？」

「うん、私達四人で移住しない？
行き方は分からないけど、それは真苗に教えてもらってさ」

案の定、神奈子は難色を示している
そうすれば早苗は安心できるかもしれないと思うが、それだけで今までの居場所を捨てられるかという事もある。

「……利点と難点を
そしてどれほど影響が出るのかもだ」

まぁ当然だね、それを知らずに決められるほど神奈子は単純じゃないそうでなければ神社はとうの昔に奪い返している。

「利点は言うまでもないけど早苗の居場所作りと苛められないようにする為の予防策
幻想郷の知識なんて私達には無いけど、真苗が言うには多くの神、

妖怪、鬼に吸血鬼とかまで居るらしいじゃない
それほどの種族が居るなら早苗が拒絶される可能性は低いと思うよ？」

「ふむ……それは確かにそうかもしれんな
しかし、それだけでは弱いぞ」

「分かってる、今言ったのは早苗だけだしね
それなら私達まで行く必要は無いわ」

先ほどの事だけなら早苗一人を行かせれば済む事……おっと、真苗も一緒だから二人かな
二人が駄目なら両親も巻き込めばいいのだし、私達が一緒に行く必要は無いわね。

「もう一つの利点だけど、私達の信仰に関わってくるわ」

「信仰か……最近の人間は神を信じる心を忘れてきておる
確かにこのままでは私達が消滅するかもしれんが、それがどうかしたのか？」

「分からないの？　真苗が三十歳になっても、二十五年経っても私達は元気生きていると言ったんだよ？
今の私達に……そこまでの力があるかしら？　二十五年間、ただでさえ少ない信仰でだよ？
私は自信が無い、生き残るぐらいはできる自信は有るよ？　でも元気でいられるかと訊かれると……」

多分私達が何もせずにこっちで生きていても……どれだけ保っても百年ぐらい

対して幻想郷には神だけでなく妖怪や吸血鬼まで住んでいる、私達の存在を宣伝すれば信仰は集まるはず
楽にとは思わないけど、こっちで何もしないで消滅を待つよりはずっと生きる気力を持てる。

「……確かに、今の私達がどう頑張っても生きれるのは百年程度
幻想郷に行けば信仰が集まる可能性が高いのも理解できるが……
自分の居場所を捨てる事になってしまうのはいただけないな」

「それは言わないでよ……あまり考えないようにしてたんだからさ
難点の一つがそれ、私達は理屈では納得できるけど感情で納得できるかと言われるとね……」

何百年も住んでいた土地を捨てる
それは思った以上に寂しさと喪失感を感じさせる
実際にまだ捨てたわけじゃないけど、想像だけでもここまでなってしまう
本当に捨てた場合、どれだけ寂しさを感じるか想像できない。

「他にも幻想郷の方が受け入れてくれるか、生き残れるか、そもそも信仰が得られるのか
私達の感情だけじゃなくて、現実的にも考えさせられる事は多い
私だって不安で一杯なんだけど……結局いつかは行くと思うよ」

「何故そう思う？
もし今私達が行く事を否定した場合でも行くと思うか？」

「断言するけど、絶対に行くと思う
考えてもみなよ神奈子、向こうの私達も今の私達と同じ事を考えたはずだよ？

なのに向こうの私達は幻想郷に行った、つまり行く事を決断したって事さ」

向こうの私達が一体何を考えて幻想郷に行ったのかは分からない
真苗に訊かない限り、きっと分からないのだから今考える必要は無い。

そもそも向こうで真苗が現人神になった原因はなんだったのかな？
こっちでは真苗が切欠だったけど、向こうではそんな事が起こるはずが無いし……
まぁこっちの私達には関係の無い話しか。

「なるほど……いずれ私達にも必ず選択肢を与えられるという事か
今決めなければ問題の先送りになるだけ、結局最後には悩む……今も悩んでいるがな」

「とりあえずこの話しは保留にしよう
早苗や早苗の両親、できれば真苗も一緒に話さないと駄目だからね」

「そういえば……何故早苗の両親は連れて行かないのだ？
別に連れて行っても構わんだろうに」

「それは駄目、真苗が言ってたでしょ？
幻想郷は普通の人間が簡単に住めるような場所じゃないって
もし何かあったらどうするのさ？　それなら最初から連れて行かない方が安心できる
早苗には寂しい想いをさせるかもしれないけど、死んでしまう可能性が高い場所に態々連れて行く必要は無い」

言っている事は本音だけど一部嘘

私の予想では……幻想郷は外の世界の者には厳しい
私達や早苗ならともかく、普通の人間はきっと死んでも問題無いと判断されているかもしれない
例えば……妖怪の餌とかね。

そんな場所連れて行くわけには行かない
守ればいいと言われるかもしれないけど、私達だって常に一緒に居れるはずが無い
それなら最初から居ないでくれる方が私達もずっと楽だし助かるのだ。

「ふむ……わかった、他にも理由が有りそうだが邪魔になる可能性が高いのは私も思う
早苗には申し訳ないが、両親にはこちらに残ってもらおうかね」

「うん、もし許してくれるならお互いに連絡がとれる状態がいいんだけど……
そこまでの高望みは無理だろうしね」

「そうだな、何か功績でも残せばあるいは可能かもしれんが
私達を特別扱いしても無駄だろう」

「そうだね……」

交渉できれば一応交渉だけでもしておこう
無駄だとは思ってるけど、可能性に賭けるぐらいならいっそ無理だと切り捨ててくれた方が楽だしね。

「この話しはもういいだろう
真苗から改めて話しを聞いてからまた話し合おう」

「そうだね、私はもう寝るけど……神奈子はどうする？」

「私は早苗を家に帰してくる
時間もそれなりに経ってるし、心配してるだろうしな」

神奈子は寝ている早苗を抱き上げ、出口に向かって行った
でも神奈子……そんな荷物を持つような持ち方をしなくてもいいんじゃない？

「そう、いってらっしゃい
私は先に寝てるね」

「ああ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

神奈子が神社から出て行ったのを見届け、私は横になる
これからどうなるのか、幻想郷の事をもっと知らないといけない
その為には真苗が起きるのを待つしかない。

色々と考えながらも、疲れていたからか眠い
神には睡眠は必要無いが、疲れが溜まっていると睡眠という形で休息を取る
睡魔に襲われ、我慢できなくなったので私はそのまま眠ってしまった……

少年期編　二十六話【ナズナの変化】（前書き）

明日からバイト九時間三連勤……書く時間が有るか不安です
次回の投稿までに間に合えばいいのですが……頑張ろう

少年期編　二十六話【ナズナの変化】

視点　ナズナ

見つけた……これでやっと、やっとできる
後はこの本の通りに……準備に必要なのは……持ってない
仕方無いから探すしかないですね、レミリア様が持ってれば譲ってくれるでしょうか？

ご主人様がフランドール様と戦ってから一月経ち、ご主人様の体調も完治しています
今では前のように美鈴様と戦ったり、パチュリー様と勉強の日々です
勿論私もご一緒させていただいています。

ご主人様と鍛錬をするのは嬉しいですし、楽しいのは変わりありません
ですが私にはしなければならない事があります。

ご主人様が許しても私は許せない、例え誰が相手だろうと……です
正直に言うとフランドール様も許せる相手ではありません、ご主人様を殺そうとしたのですから
しかしフランドール様はご主人様を殺そうとした事を反省しており、謝っています
それなのにいつまでもフランドール様に恨みを向けても無意味です。

私が許せない相手……それはあの氷の妖精
ご主人様に大怪我を負わせ、ご主人様に謝らずに逃げた
あの妖精だけは絶対に許しません。

ええ、確かに先に喧嘩を売ったのはご主人様です
ですが……理屈では理解できても、この感情を抑えられません
逆恨みだと理解しています、八つ当たりなのも分かってます
でも……それでも許せない！

私はご主人様の看病している時間以外、ずっと勉強していました
その勉強は強力な呪いです。

相手は正面から戦っても、ご主人様が勝てなかった相手です
私如きに勝てるなんて豪語できるはずもありません
しかし私には呪いという手段があります
妖精なので殺す事はできませんが、それでも苦しんでもらいます。

私はご主人様の使い魔、名をナズナ
私はご主人様に全てを捧げる
その私の前でご主人様を傷つけ、殺しかけた氷の妖精は……許さない。

視点　戒魔

最近ナズナの様子が変だ
美鈴との訓練やパチュリーとの勉強中も上の空だったり集中していなかったり
俺とレミリアが話している間は待っているように言っておいたが……
以前は俺の部屋の掃除をしたりしてたのに今は自分の部屋に籠もって何かしているらしい

前に訊いた時はまだ体調が戻っておらず、食事をしていたり睡眠と取っていたりしてると言っていた
だが今の俺の体は完治しているから食事は一緒に取っているし、訓練の再開で疲れているだろうから俺が寝たならナズナも寝ているだろうし……

「で、何で私に相談するの？
私は貴方の使い魔と接点が殆ど無いんだけど……」

「接点が無いから逆に何かに気付くと思ったんだ
あんまり文句を言わないで手伝ってくれよフランドール」

「……報酬は？」

「焼き菓子（クッキー）と紅茶を淹れよう」

「使い魔がどういう状態か教えなさい
知らないとどうしようもできないからね」

相変わらず安い奴……フランドールの価値観はどうなっているんだろうか？

ナズナの事を相談する相手はフランドールにした
理由は先ほど言った事も含め、単純にフランドールとは話しやすいからだ。

あの戦い以降、俺とフランドールの関係はお互い気楽に話し合える友人という感じだ
戦いから数日後にレミリアの事で礼を言いたいと部屋に来たのが最初の切欠

それから自分達に似た兄弟の事を教えろと言われた。

レミリアが話してしまったらしいが、名前とかは言っていないので大丈夫だと思う
それはともかく、フランドールがスカーレット兄弟に興味を持ち、その友人である俺に訊きに来たのだ
名前を隠しながらスカーレット兄弟の事を話している内にフランドールに気付かれた事が有る。

それは俺の年齢
俺は数年前などの年数に関する事は一切言っていないが、それでも変に思ったらしい
曰く、今でも子供の戒魔なのに更に小さい頃の人間がそんな事をできるはずが無い……だそうだ。

その言葉を言われるも、何とか誤魔化そうと必至に頭を使ったのだが……

「考えている時点で白状しているって自覚してる？」

と言われてしまい断念
俺の本来の年齢である三十歳と白状した。

しかしフランドールは有る意味パチュリーよりも頭が良かったのが最大の誤算だった
俺の年齢と経験、スカーレット兄弟の話、俺が過去や友人の名前を隠す理由
それらを含めて考えた結果、フランドールは俺が別世界から来た事を推理してしまったのだ。

推理されている間にもなんとか話しを逸らそうとするも失敗し、それでこの考えは合っていると思われ更に推理が続く
レミリアが俺を住まわせる事を決めた理由、亜空穴が使えた理由、美鈴やパチュリーが俺の事をどう思っているかなど
外枠を埋められ、どうしようもできないと気付いてからは完全に諦めた
フランドールが話しの締めに言った一言は……

「あの兄弟の話を知らなくても気付く要素は多かったわよ？
愚痴を言うのはいいけど、もう少し自重して推理されるかもしれない危機感を持ったら？」

その言葉で俺は落ちた
仕方がないので俺の事を話す事にし、レミリアも呼んだ
そしてフランドールに知られた事を話すと怒られた。

何でも不注意だとか、もっと考えろだとか、そもそも夜中に二人きりで何をしているだとか……
前者二つはレミリアも悪いとフランドールと一緒に言っておいた
事実、レミリアがスカーレット兄弟の事を話さなければフランドールも気付かなかった可能性が高い
後者に関してはお前達の種族は何だと言っておいた
レミリアは今更気付いたという感じになり、顔を赤くしていた。

しかし……そもそも俺の精神はともかく、肉体はまだ十歳だからそんな事を考えるはずが無いだろうが
そう言ったらレミリアがもっと顔を赤くして怒り出した、俺は間違った事を言ってないのに怒られるという理不尽な事をされた。

フランドールは苦笑いをしていたが話しが進まないと思い、レミリ

アに拳骨
頭を押さえて蹲るレミリアに俺達は何とも思えない気持ちになってしまった……

その後、レミリアと一緒にフランドールに俺の事を話した
フランドールは納得し、この事は口外しないと誓ってくれた
条件としてレミリアと夜に話している事に自分も参加させろと言われた。

「それは駄目よ！　戒魔の話しを聞けるのは私だけの特権なんだから！」

「でもお姉様、私も知ってしまったのだから戒魔の話しを聞いても構わないでしょ？
私だって平行世界の人達が気になるし、戒魔がどんな人生を過ごしてきたのか聞きたいわ」

こんな感じで姉妹で言い合いから喧嘩に発展しそうになってしまったしかしすぐに終了、何故なら話すか話さないかは俺が決める事なんだからな。

「……喧嘩をすぐに止めないと二度と話さない」

その一言で喧嘩終了
レミリアも渋々フランドールも聞く事を許可
フランドールが喜んでいたのでレミリアはつまらなそうに思っていた顔も少しだけ嬉しそうにしていた。

その後、俺が夜に話す相手は二人になり、時々口喧嘩をする姉妹だけど楽しく過ごしている。

さて、最近のフランドールとの交友関係はともかく、今はナズナの事だ。

「ふーん……氷の妖精と戦った後辺りから様子が変なんだ」

「ああ、それまでは楽しそうに勉強してたんだなのに今は何かをしようとして真剣になって勉強している真剣になるのは構わないんだけど、何か嫌な予感がするんだ」

「嫌な予感？それは博麗としての感？　それとも使い魔の主人としての感？」

博麗としての感ならば異変などの大事になるだろう主人としての感ならばナズナに何か有るかもしれないそしてどちらかと問われれば……

「……後者だ」

「なら異変のような事にはならないでしょうね起こっても被害を受けるのは個人ぐらいだと思うわ」

「俺もそう思ってるが……心配だ何かしておいた方がいいだろうか？」

「下手な事をするよりも何もしない方が良いと思うわでも心配という気持ちは分かった、私が動いてあげる」

「……いいのか？」

面倒な事が嫌いなフランドールにしては珍しい
明日は雨だろうか？　冬は近いがさすがに雪はまだだろうし……

「構わないわ、戒魔の使い魔の事だものね
そいつが心配だからって戒魔とのお話の時間を削られるのは嫌だもの
戒魔とのお話は私の数少ない楽しみ、それが減ってしまうぐらいなら多少面倒でも動くわ」

そんなに俺の話が楽しいのか？
自分の人生を話すだけでそこまで楽しがる理由がいまいち理解できない。

「あ、そうだ
もし私がこの件を解決したら何か頂戴
そしたらもっと頑張ってあげるから……ね？」

可愛く小首を傾けるフランドール
まぁ確かに俺としてもその方がありがたいのでフランドールの要求に応える事にした。

「そうだな……こっちで俺にできる事は料理ぐらいしか無いぞ？
紅魔館の世話になってる身だからな、何かを買う事もできないし」

ん？　何故そんな意外そうな顔をしているんだ？
唖然としているような感じもするし、そんなに変な事を言ったか？

「……今まで八雲に持たされた物だけで生活してたの？」

「ああ、服は四着持ってる
他は簡単な食料とか水、刃物と本だけだしな

欲しい物なんて無いし……金も無いしなー……」

そもそも住まわせてもらってるだけでも助かってるんだ
これ以上望むのも悪い。

「ちょ……戒魔？
確か金塊も入ってたんじゃなかったかしら？」

「レミリアに渡したぞ、俺の家賃代と生活費に使ってくれってな
ナズナの分もそこから引いておくように頼んである
金塊分使ったら言ってくれとも言っておいたぞ、無賃で住むのも悪いからな」

博麗神社は俺の家だったから家賃は不要だったが、紅魔館はレミリアの家だ
住まわせてもらっている以上家賃を払うのは当然だし、生活費だって必要だ
ナズナは俺の使い魔だから俺がナズナの生活費とかを払うのは当然だしな。

「戒魔は真面目過ぎよ……（だから早死にしそうになったのかしら？）」

「真面目と言われてもな……生きている以上、金は必須だろ？
だったら必要分を払う、体は子供だが本来は大人なんだ
親の脛を囓って生きているわけじゃない、これぐらいはさせてくれ」

「……はぁ（お姉様もこれで折れたわね
そしてきっとそのお金は使ってないわ、必ず戒魔に返すでしょうね）」

溜め息を吐かれた、何故だ？

「話しを戻すわ
戒魔の使い魔の事は私がどうにかしておく
報酬はもう戒魔の手料理でいいわ、考えるのも面倒になったし」

「わかった、俺が作れる限りで最高のを作ろう」

「楽しみにしてるわ……もう疲れた……もう部屋に戻るわ」

「ああ、ナズナの事……頼むぞ」

「ええ……」

そう言ってフランドールは部屋に戻った
フランドールにはああ言ったが、俺にもできる事が有れば何かしたい
直接訊いても答えないだろうし……とりあえず生活を確認しておくかな？

続く

少女期編　裏十六話【親心】

視点　諏訪子

早苗が現人神になって二ヶ月の月日が流れた
早苗が現人神になった翌日、早苗の両親に早苗が現人神になった事を話した
怒られるか、それとも恨まれるか……自分の娘を人の道から外したのだ
例え恨みを向けられても仕方がないと思っていた。

「早苗が人から外れたのは我が原因だ……申し訳ない
恨むなら我を恨んでくれ、私が余計な事をしなければ早苗は人間でいられたのだ

お主等の怒りは我が全て受け止めよう、だから諏訪子に怒りを向けんでくれ」

「何勝手な事を言ってんのさ神奈子！
私があんたの行動を予想できていればこんな事にはならなかったんだ！
悪いのは私なんだ、だから神奈子の事を怒らないでやってくれ！」

私と神奈子は早苗の両親の前で頭を下げたが、私も神奈子も自分が悪いと言う
そして私達は自分が悪いと喧嘩を始め、言い合いで神奈子が私に勝てるはずが無く私が悪い事になった。

が、それは私達の都合
早苗の両親はなんだか呆れたような顔をしていたが怒りの顔は無かった……何故？

「あの……八坂様も守矢様も落ち着いてください
私達が貴女様方に怒りを向ける理由なぞ無いのですから……」

そう言われた私達はどういう事か説明を求めた
しかし答えは単純で簡単で……その事に気付かなかった自分が馬鹿みたいに思える理由だった。

「だって将来早死にしてしまうかもしれない娘を助けて頂いたんですよ？
寿命が短くなるならともかく、肉体は人間なんですから寿命は人並みなんですよね？」

「いや……まぁそうなんだけどさ……」

「だったら私達から言える事は一つだけです
娘を助けていただき、ありがとうございました八坂様、守矢様」

そう言って早苗の両親は深々と私達に向かって頭を下げた
心から感謝しているその態度に、私と神奈子はお互いの顔を見合わせた。

現在、早苗には現人神になったという事実をまだ話していない
未だに真苗が目を覚ましてないようなので様子見といったところだ。

今の所は幼稚園でも特に苛めは起こってないらしい
魂の変化に伴い、身体能力は少し上昇していたが、それでもまだ並の五歳児より少し高い程度
精々七歳の平均の身体能力ぐらいなので運動神経が良いの一言で済ませられる
突然上がった身体能力に戸惑っていた早苗も、すぐに慣れたので大丈夫だったので一安心。

問題は今後成長するにあたって、早苗の肉体にどのような変化が起こるか……
今でさえ身体能力が上がっており、霊力を見ればただでさえ常人よりも高かったのだ
早苗の今の霊力は人間でも最高峰だと思われる……というか絶対に人類最高としか思えない
きっと幻想郷に行っても人間の中で最も霊力が高いだろう。

……というか私の神気や地脈と天脈の力を吸収しておいて負けるはずが無い
それ以上の霊力ってどんな化け物よ……絶対に人間じゃないわ！

まぁ早苗だって現人神で肉体はともかく魂は人間じゃないんだけどさ……

早苗の両親には幻想郷の行く事はまだ伝えていない
子供と別れ離れになってしまう事を簡単に話せるはずが無い
更に言うと真苗が起きてもいないのに話しても無駄だから。

真苗が起きてくれないと行動できないよ……早く起きてくれないかなー

少年期編　二十六話【ナズナの変化】（後書き）

ナズナってヤンデレ？
いいえ、名前効果と受け入れられた事により忠誠心が高すぎて暴走してるだけです
決してヤンデレにはなっていません。

何故フランドールに戒魔の事を教える事にした？
レミリアは当主なので自由に動かし難いからです
美鈴は門番なので更に動かし難く、パチュリーは動く事を嫌うので使え無い
なので紅魔館の地下から地上に出てきたフランドールが最も自由度が高かったからです。

ナズナの事は戒魔だけで十分だろうにフランドールに任せる必要が有るの？
ナズナは戒魔の知らない所で動いているので戒魔の視点では動かせず、ナズナ自身の視点では思考が漏れてしまうので動かし難かったのです
フランドールに拘る必要はありませんがやはり自由度の高いフランドールが動かし易いのでフランドールに動いてもらいました。

少年期編　二十七話【紅魔館脱出】

視点　フランドール

使い魔の事を頼むって戒魔に頼まれたけど……実際問題、私は何をすればいいのかしら？
私にできる事なんて監視程度だし、特に親しくないから話そうと思っても何を話せばいいのか……

戒魔が知りたがってたのは戒魔と一緒に居ない時間となれば……夜に私達姉妹で戒魔の話しを聞いている時間かしら？
でもその時間は私も楽しみにしてるからその時間を削りたくないしかしパチュリーや美鈴が美味しいと言っている戒魔の料理を逃すのも嫌
どうしようかしら……

戒魔達は今は美鈴に挑んでる時間ね
正面から武闘家の美鈴に勝てるはずが無いのに頑張るわ。

でも最近は様々な手段を使えばなんとか擦らせられる事ができるようになったって言ってたわね
接近戦で美鈴と……戒魔に負けた私が美鈴に勝てるはずが無いかいくら亜空穴や目潰しで不覚を取ったといっても美鈴は更に巧いし感も良いから避けられそうでしょうし
全距離で戦うなら勝てるけど接近戦じゃ……戒魔も使い魔もご苦労様ね。

……あ、やっぱり負けた

これで夜の戦いは終わり、戒魔はこれからお風呂に入って就寝の時間ね。

戒魔は疲れてるでしょうし、私は夜は眠くないから使い魔の監視でもしましょう
もしかしたら多少睡眠時間を削ってるかもしれない
それなら何をしているのか分かるかもしれないわ。

そうすれば戒魔の話しの時間を削る必要も無くなるし、報酬の料理も堪能できる
これぞ一石二鳥、さて……暇潰し用に紅茶でも準備しよっと。

……深夜一時過ぎ
今夜は何もしないかと思われた使い魔が動き出した
こんな夜中に何をするつもりかしら?

戒魔と違い、悪魔である使い魔は飛べるらしい
部屋から出ると紅魔館の数少ない窓を探して歩き回る
なんとか窓を見つけ、そこから外へ飛び出した
窓を探したという事は動いたのは今日からか……今までは準備期間とかだった?
私はその後ろ姿を眺めながら思う。

紅魔館の正面門以外には結界が張ってあって門以外から進入、外出ができないって知らないのかしら?
私の予想は当たり、使い魔は結界に当たって落ちていく……
結界にぶつかった事で門番隊や警備妖精に気付かれて逃げだそうとするも
地の利は妖精達の方が上なので逃げ切れずに捕まった。

使い魔は美鈴の前まで連れて行かれ、美鈴の説教を受ける
離れているから何を言ってるのかまでは分からないけど、予想はできる。

美鈴の事だからこんな夜中に女の子が一人で黙って出て行ったら駄目だ……とか
誰かに言って出てきた？　戒魔は知ってるのか？　そもそも何故出た？
きっとこんな質問をしてると思う。

でも使い魔は語らず黙し、美鈴の説教に耐えるだけだった
できれば話しを聞きたかったけど、これ以上近づくと気付かれるかもしれない
今夜はもう動かないでしょうし、部屋に戻るか……

……三日後

暫く動かなかった使い魔も今夜は動いた
今日は美鈴が門番から離れている日だし、門番隊なら抜けるとでも思ったんでしょうね
その考えが甘い事に気付かないのかしら？

前回と同じく深夜一時
使い魔は前回と同じ窓から脱出
すぐに地上に降り、そのまま正門に向かう。

だがそこには美鈴が居ないので強化されている警備
使い魔は門番隊に少し出てもいいのかと交渉していたが……失敗
強引に抜けようとしたので門番隊の基本武器である槍を目の前に突きつけられ降伏

門番隊は使い魔を連れて地下図書館のパチュリーまで使い魔を連行した。

門番隊の基本武器が槍なのはお姉様が魔力で作り出した槍を使う事が多いからよ
ちなみに私は魔力変換技術を使って魔力を炎に変え、その炎を束ねて剣の形にしてるわ
純粋な魔力で作ると威力は上がるけど耐久力が低い
魔力変換をすると威力は少々下がってしまうけど制御と扱い易さに優れる
私の場合は破壊力を上げる炎を使ってるだけであり、長時間使えるように耐久力を選んだ
お姉様は瞬間的破壊力と使いやすい槍を選んだ
どちらも一長一短だが、単純に炎を使いたい、槍が好きというだけなのよね。

使い魔は美鈴の時と同じように長時間説教され、しかも戒魔まで呼ぶ大事になってしまった
ついでだったので私も偶然来たように振る舞って図書館に入った。

「暇潰しに図書館まで来てみれば……戒魔の使い魔を囲んで何してるの？」

私の声に驚いていたのは使い魔とパチュリー
戒魔は私に使い魔の事を頼んでいたので私が登場する事は予想してたみたい。

「フランドールか……実はナズナがこんな夜中に出歩こうとしたらしい
夜更けに子供を外に出す訳にはいかないだろ？　だから説教中だ」

「子供って……貴方もまだ子供でしょうが
でも何で図書館で説教してるの？　別に戒魔の部屋でもいいでしょうに」

「今日は美鈴が門番の休みの日だからしいぞ
数少ない美鈴の休日だから門番隊の子達が気を利かせたみたいだ
俺の所に連れてこようと思ったみたいだけど寝てるだろうからってパチュリーにしたんだとさ」

「私としては迷惑以外無いんだけどね
まったく……この子は何を考えてこんな事をしたのかしら？」

あーあ……パチュリーは怒ってるわね
戒魔はあまり怒って無さそうだけど……内心では困ってるんでしょうね
顔をよく見れば疲れてるように見えるわよ？　ついでに眠そうだしね。

使い魔は主人まで引っ張り出されて混乱中って所かしら？
まだ私を含めて何が目的なのか分かってないけど、まともな事をしてるとは思えないわ
今だって挙動不審だし、何かそわそわしてる感じだし、悔しそうに顔を歪めている
どうやらずいぶん不機嫌らしいけど……まぁ戒魔には迷惑をかけたりしないでしょ。

何度質問しても何が目的で外に出ようとしたのか言わない使い魔
あまりにも頑固なので私達は諦めて解散、戒魔と使い魔は就寝
私はどうせ図書館に来たので本を読み、パチュリーはそろそろ寝よ

うかと考えてるらしい。

……更に五日後

今日も再び同じ時間に動き出した使い魔
動くなら毎日動いてほしかったわ……暇で暇でね。

今日も同じ脱出経路で窓から脱出
どうするつもりなのか考えていると……正門から逆に向かって行った
紅魔館には裏門なんて存在しないから逆に行くだけ無駄なんだけど
……

正門から真逆近くに来た使い魔
そして何を考えたのか、塀を壊し始めたわ……って、いくら何でも
それは駄目でしょ！
貴女は戒魔の使い魔だからここに住めてるのよ！
こんな事をしてるって知られたら一緒に居られなくなるかもしれな
いのよ！
というか貴女の目的って本当になんなのよ！？

壊すのには時間が掛かりそうなのでどうするか考える
問題は誰に知らせるべきか……

お姉様に知らせたら追い出さないまでも監視が厳しくなるでしょうね
きっと二度と夜中に外へ出られないようにするはずよ。

パチュリーに知らせても動かない
他を当たれって言われるわ。

美鈴は……真面目なあの子だからお姉様みたいに監視を強化するで

しょうね
やっぱり二度と夜中に外へ出られないようにすると思うわ。

残りは戒魔に知らせるか私が動くか……
戒魔に知られなくない事をしてるのは分かってるし、私が動くかな。

そうと決まれば私は使い魔に近づいていく
使い魔は塀を壊す事に夢中になっており、私が近づいている事に気付かない。

「またこんな夜中に外に出てるのね」

「!?」

私の存在に気付いた使い魔は勢いよく振り返った
何故ここに人が居るのか……表情がそう語っている。

「夜の散歩でもしようかと思ったら貴女が外に出てる所を見たのよまったく……この前怒られたばかりだというのにどうしてまた外に出てるの?
今回は私だったから良かったものの、他の人だったら監視を強化されて二度と無断外出ができなくなるわよ?」

「……」

使い魔は無言で私を睨む
きっと私が監視してたと思ってるのだろう
その考えは正解だが、態々それを教える義理は無いわ。

さて……どうしようかしら?

私が知りたいのはこの子の目的、何がしたいのか知る必要がある
場合に寄っては使い魔の手伝いをしても構わないと思うわ。

「目的を教えなさい
内容に寄っては見逃してあげるわ」

「……本当ですか？」

「あら、ずいぶん素直じゃない
美鈴やパチュリー、戒魔には話せなくても私には教えられるんだ」

「フランドール様なら私を止めないと思ったので……」

「へぇー……戒魔達は貴女の行動が見逃せないのね？
でも私なら止めない、何故なら私は貴女の事を別にどうとも思ってないから
そう思ってるんでしょ？」

「……その通りです
フランドール様は私程度の存在を気にも掛けないでしょう？
ご主人様は私の行動を許すとは思えません
美鈴様の性格では止められ、パチュリー様は力尽くで潰されます
レミリア様はあのような性格ですので……私の行動を認めないと思います」

どうやら全員の性格から行動を予想していたようだ
さすが戒魔の使い魔で美鈴とパチュリーの生徒ね、優秀だと思うわ。

うーん……下手な事を言うと逃げられるわね
今も私の行動を観察して、どうすれば私から逃げ切れるかと考えて

いる
面倒だけど……仕方無いわ、この子に付き合おう。

「はぁ……いいわ、手伝ってあげる
でも何をするつもりなのか全部話してもらうわよ？」

「……わかりました」

使い魔は小さい声ながらも事情を説明し始めた
以前戒魔が寝込む原因となった氷の妖精が許せなかったらしい
ただ大怪我しただけならここまで怒らなかったかもしれないが、謝らなかったのが最も許せなかったとか……
私にも怒りを感じたが、私は戒魔に謝り、反省もしてたので怒っても無駄と判断したそうよ。

「でもそれって逆恨みよね？
妖精に喧嘩を売ったのは戒魔なのよ？
なのに怪我を負わせた妖精を恨んでも意味無いじゃない」

「わかっています、それでも譲れないんです
どうしても……許せなかったんです……」

「……それで？
原因は妖精が許せなかったのは分かったわ
でも何故こんな夜中に動いてるの？　目的は何？」

「私の目的は妖精を苦しめる事です」

「どうやって？」

妖精は自然の集合体だから殺せないし
苦しめるといっても精神的苦痛や肉体的苦痛など
それに苦しめる方法はどうするのかしら？
まさか不意打ちでもするのかしら？

「呪います
丑の刻参りという呪いです」

「丑の刻参りって……貴女妖精相手に祟り神でも呼び出すつもりなの！？」

丑の刻参りとは丑の刻である午前一時から午前三時の時間に儀式をする事により
目的の相手に祟るという呪いの儀式である
伝承にも種類が有るが、相手を祟るのは祟り神や悪魔、妖怪が主に呪いを実行するらしい
しかも丑の刻参りではそれだけでなく、神懸り……つまり神を己の身に卸すものも存在する
それにより、己自身が呪いを実行したり、最悪神に体を乗っ取られるかもしれない
更に丑の刻参りは見られた場合呪いの威力が半減したり、己に呪いが帰ってくるなどの危険性も高い
有名といえば有名な呪いだが、それだけに危険性が高いのに効果が曖昧なのでそうそう実行する者がいない
呪うだけならもっと効率の良い呪いも存在するのでそちらを優先する者が多いからだ。

「私自身が悪魔ですよ？
ですので私自らが妖精を呪います
可能かどうかは不明ですが、自分に及ぶ危険性を下げる為の処置です

本来は七日続ける事で呪殺が可能なまでの効果を得られるそうですが
そんなに続けられるほど紅魔館が甘くない事ぐらい私でも知ってます
私が呪う事ができるのは一日だけ、初めての試みですが、必ず成功
させます」

どうやら本気のようね
呪い返しにあう可能性もあるから私が見るわけにもいかない……か
仕方無い、誰にも見られないように周囲を見張ろう。

どうせこの子は何を言っても止まらないだろうし
今日だけしかしないとも言ってるしね。

私は塀に小さな穴を開け、使い魔を外に出す
私は穴の開いた塀を簡単に隠しておいた
この穴の存在は数日経ってから誰かに教えて塞がせよう。

私は正門に向かう
正門には美鈴が居たが、私が外に散歩と言うと素直に出してくれた。

私が怖いのか、それとも問題無いと判断したのか……
表情から伺おうと思ったが、残念ながら美鈴は無表情を貫いていた
ので判らなかった
でも怯えた様子は見えなかったから後者だと思いたい……やっぱり
仲良くしたいしね。

使い魔には塀のすぐ近くで待っているように言ったのですぐに裏に
向かう
使い魔は素直に塀のすぐ側で待っていた。

私は使い魔を連れて紅魔館を後にする

私としては呪いが成功しようが失敗しようが関係無い
戒魔が悲しむので成功して無事で帰ってきてくれた方が報酬も豪華になるぐらいにしか思わない。

この呪いが終わったら戒魔に報告しよう
きっと使い魔の事を怒るだろうけど、私も付き合ったので少しぐらいなら助けてあげるわ。

続く

少女期編　裏十七話【目を覚ました彼】

視点　真苗

……んぁ？
ここは……僕は確か早苗を殺してしまったと思って……そして……
どうなったんだ？

『あれ？　うごけないー！』

「だ、誰！？」

ここは早苗の部屋！？
というか今頭の中で声が聞こえたんだけど！？

『ねー、さなちゃん何で動けないのー？
さなちゃん動けなくてなんか……怖い……ひっく……』

「え？　え？　え？
さなちゃんって誰！？　というか泣かないで！」

『おへんじしてよー……ぐす……』

今返事したよね！？
僕ちゃんと返事したよね！？
どういう事なの！？　何がどうなってるの！？

「えーと……声に出しても聞こえないのかな？
なんだか頭に響く感じがするから……頭の中で返事するのか？」

でもそれなら今考えているこの声だって聞こえるはず
だけど声が聞こえる様子は無く、自分の事をさなちゃんと呼ぶ子供
（？）の泣き声が響いた。

「あぁぁぁ……子供の泣き声って煩いなぁ……というかこの子誰？
一体何が起こってるのか誰か説明してくれよー……」

大声で泣き出したさなちゃんに困る僕
こうやって考えても返事ができないから僕にはどうしようも無い。

「……って、何でこの体にこんなに霊力が有るの！？
全盛期の僕にもこんなに霊力は無かったんだよ！
僕が子供の頃にこんなに霊力が有るはずが無いのに何故！？」

僕の叫び声が聞こえたのか扉の向こうから足音が二つ聞こえる
慌ててるのか、その足音の主は大きな音を立てながら蹴破るほどの
勢いでドアが開かれた
あれ？　前にもこんな事があったような気が……

「どうしたんだ！」

「何か有ったの！？」

「どうして二人して前回と全く同じ台詞で入ってくるのさ！？
そしてどうしたのか何が有ったのか知りたいのは僕の方だよ！」

さっきまでの勢いでついそのまま対応してしまった
気付いた時には既に遅く、両親の動きが止まる。

すると再び足音が二つ聞こえた
その足音の主は蹴破るほどの勢いで開かれたドアから姿を見せた。

「早苗に何か有ったの!?」

「どうしたのじゃ早苗!?」

「どうして八坂様と守矢様が出てくるの!?
ここ東風谷家だよね!?　というか全員落ち着け！　そして僕も落ち着け！」

もう何が何やら……今この場は混沌に支配されている
誰かこの状況をどうにか打破してくれないかな……
それと……いい加減この頭の中に響く泣き声をどうにかしたい
本当ーに煩くて凄く困る。

少年期編　二十七話【紅魔館脱出】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

チルノ／チルハ
熱塊の妖精

名前は一分以内にアッサリと決まった
キャラを考えた当時はチルノ同様氷使いだったので氷塊の妖精だった
しかし書いていく内に熱気使いになったので熱塊の妖精に変化した

簡易特徴
霧の湖を根城にしている炎の妖精
通常は暖気を好む妖精の中で異端の存在として扱われている
理由は彼の使う炎が熱すぎるから
彼の能力は【熱気を操る程度の能力】なので暖気どころではなかった
それ故に多くの妖精から怯えられ、寂しい日々を過ごしていた。

そのチルハに近づいたのが同じく妖精に嫌われていた大妖精である
大妖精も妖精として異端の存在であり、見た目からは想像できないが武闘派妖怪並の腕力を持っていたので喧嘩好きだったのだ
悪戯は好んでも争いを嫌う妖精からすれば大妖精は怖く、性格や言葉遣いの荒さも含めて不良のような存在として多くの妖精から恐れられていた。

お互いに嫌われていたのが理由なのか、彼らは出会ってすぐに仲良くなった
それなりに強い妖怪ならともかく、弱い妖精に友達は全くと言っても良いほどいないが、そんな事は気にせずに大妖精に振り回されな

がらも楽しく過ごしている。

性格は温厚であり、炎を使うのに暑苦しいという印象は、元々熱いのに更に気温を上げてしまう夏の時でなければ与えた事が無い
例え夏に会ったとしてもすぐにそのような印象は消えるので誰も暑苦しいと言わない
基本的にお節介で巻き込まれ体質、何事も一生懸命になるも空回りも少なく無い
大妖精の喧嘩を止めたり、悪戯では済まない大事になる前に咎められる唯一の存在なのでそれなりに感謝されているらしい。

冬には暖として紅魔館に招かれる事が多い
大妖精も一緒に紅魔館に居るので悪戯や物的被害が少なくないのだが、それでも暖を取れる貴重な存在なので多少なら見逃してもらっているらしい
他にも太陽の畑で幽亜の花が寒さで死なないようにしたり、暖兼生徒として寺子屋に招かれたりと、妖精以外の存在では交友範囲はかなり広い
ただし、熱さを嫌う紫々や冬を象徴する妖怪のレシィからはとても嫌われている
ついでに夏になると人に近づけば嫌がられし自分も熱いので夏は嫌いだったりする。

少年期編　二十八話【妖精達の受難】（前書き）

良いタイトルが浮かばなかった……なんだこの微妙なのは……

少年期編　二十八話【妖精達の受難】

視点　フランドール

紅魔館の敷地外に出るのは何百年ぶりかしら……しかも目的があるとはいえ自分から
でも今はそんな事は関係無いわね、早く使い魔を探さないと……

だけど私の後ろから誰かが着いてきてる気配を感じた
多分私が外に出るからには何か目的が有ると思った美鈴が見張り送り出したのね
となるとそいつは邪魔……殺すのは拙いから脅すか？
帰すと美鈴自身が出てくる可能性が有るから口封じね。

私は見張りの影になる場所に移動して姿を隠す
見張りの妖精が近づくのを待ち、近づいて来た瞬間……首を絞めた。

「あぐ！　が……フラン……ド……様……」

妖精は首を絞められて驚いていたが、そんな余裕は無い
首を掴んだまま妖精を持ち上げる。

人間の子供程度の身長の私だが、同じく小柄な妖精よりは少し背が高い
持ち上げられた妖精の足は地から離れて足が浮く
妖精の顔は恐怖に染まっており、苦しさから逃げようと暴れるが私が首を絞める手に少し力を込めると怯えておとなしくなる。

「安心しなさい、殺したりはしないわ
妖精は死なないけどね」

「な……ぜ……」

「口封じの為よ
私が今からする事を貴女が黙っていればいいの
別に暴れる気も無ければ危険な事をする気も無いわ
貴女は私の見張りをし、私は本当に散歩していただけと報告すればいいだけ
簡単でしょ？　嫌ならもっと苦しめるだけ、速く諦める事を勧めるわ」

妖精は首を捕まれて上手く話せないので小さく頷いた
頷いた事を確認した私は妖精の首を掴んでいた手を離し、妖精の足が地に着く
妖精は力が抜けて四つん這いになって呼吸を荒くする
落ち着くまで待とうと思ったが恐怖で混乱している内に追い込む事にした。

「こんな苦しみを二度と味わいたくないのなら……私の言う事を聞きなさい
私に逆らわない限り、私からは二度と手を出さないわ」

妖精は声を出す余裕も無く急いで首を上下に振る
恐怖という名の説得方法だったが、これで後が楽になる
最後にこの妖精に自分の役割を自覚させるべきね。

「改めて言うわ、貴女のする事は
一つは私ともう一人のする事を黙認し、誰にも話さない事

もう一つは美鈴に報告する際、私は一人で本当に散歩をしていただけという嘘の報告をする事
最後に怖い想いをしたくなければ私に刃向かったり逆らわない事よ
賢明な貴女なら……分かってくれるわよね？」

「は、はい！　分かりました！」

怯えながら返事をする妖精に少しだけ悪いと思わないでもないがどうせこの妖精の事はすぐに忘れるだろうから無視した
少なくとも先の事はともかく、暫くの間は黙っているだろうからこれ以上は止めておくか。

私は使い魔の居る門裏に向かう
妖精は素直に私の後ろに付き従いながらも少し離れている
怯えられているので当然なのだが、逃げ出さないだけいいわ。

使い魔が見えるぐらいまで近づくと使い魔も私に気付いて軽く頭を下げる
私は片手を上げて返事をすると、使い魔は私の後ろにいる妖精に気付いて警戒し始めた。

「大丈夫よ、この妖精には黙っていてもらうから
貴女も勝手に私達の事は話さない……そうよね？」

「はい……黙っています」

「だから大丈夫よ、この妖精の事は気にしないでちょうだい
美鈴が私の見張りに付けたからには追い返すわけにもいかないしね」

「……分かりました

くれぐれも内密にお願いしますね」

使い魔は飛び立ち、紅魔館から離れて湖の向こう側まで飛んでいく
私と妖精も使い魔を追いかけて飛び出した。

湖を越えて近くにあった大きめの木の前に立つ使い魔
私はその木を中心にして誰かが居ないか確認する
妖精は使い魔が何をするつもりなのか分からないので黙って見てる
だけだった。

「……フランドール様
私はここを中心に小さな結界を張ります
結界に触れない限り中は見えないようになっています
ですので決して触れないようにお願いします」

「わかったわ
私はこの結界に触れられないように辺りを見ておく
この妖精も一緒に見張るから大丈夫よ」

妖精は何が何だか分からない内に話しが進められていて混乱してい
るが私達は無視した
使い魔は結界を張る準備をし、私は妖精を連れて周囲の見回り
程なくして使い魔の結界が完成したらしく、使い魔の姿が見えなく
なった
しかしやはりまだまだ未熟らしいので気配が駄々漏れ、見えないだ
けで存在は簡単に分かってしまう。

さて……どうなる事やら、見れないのは残念だけど
今後どうなるのか気になる
やっぱり戒魔の近くに居ると楽しさと騒ぎも一緒に来るわ

この使い魔も楽しいし、これからも楽しい時間が続くといいわね。

視点　大妖精

妖精は人間とは違って寝る必要は無い
疲れている時は体を休める為に寝るという行動をする時もあるけど
基本的には寝ない
だから私達妖精は例え夜中だろうと朝方だろうと好きな時に行動する。

今私と一緒にいるのは妖精達の嫌われ者のチルノちゃん
私は嫌ってはいないけど苦手……何でも強引にするし、私達を苛めたりするから
私と一緒にいる理由は他の妖精にチルノちゃんを押し付けられたからで私の意志じゃない
楽しいのは好きだけど面倒事は嫌いだもの。

「それでチルノちゃん……私は帰ってもいいよね？」

「ん？　好きにしたら？
別に居ても邪魔だし、暇だから美鈴にでも喧嘩を売ろうと考えてたもん
喧嘩を見るのって嫌いなんでしょ？　なら帰ったら？」

相変わらず口の悪い……私が好きで一緒に居るわけじゃないと分かってるくせに
実際に言ってたけど私が邪魔なのは明白、喧嘩を見るのは嫌だし、

妖怪にも会いたくない
面倒だし……帰ろっと。

「じゃあ帰るね、ばいばい」

「じゃあねー」

私は少しだけ浮き上がって低空飛行をする
木々が邪魔だけど高く飛んで妖怪に襲われるよりはいい。

チルノちゃんから少し離れた時、なんとなく後ろを振り返ってチルノちゃんを見てみた
既に紅魔館の門番の所に向かっていると思ってたけど、私と離れた場所から移動していなかった
だってチルノちゃんは寝ていたのだから。

あんな場所で寝るなんて何を考えているのかな?

無視してもよかった、だけど何故か気になった
何かしていた場合、邪魔をしたと言って怒り出すかもしれないので慎重に近づく
近づくに連れてチルノちゃんの姿がよく見えるようになる。

ある程度近づいた時、チルノちゃんの様子が変だと思った
俯せのまま動かず、時折痙攣しているようにしているように見える
暗いのでまだ顔は見れないが、どうやら遊んでいるわけではないらしい。

更に近づいてチルノちゃんの顔をよく見てみる
すると……チルノちゃんが泣いていた。

何故泣いているのか、何が起こっているのか私には分からない
苦手だし、面倒事ばかり起こすし、私の事を邪魔とか言ったりする
チルノちゃんだけど……
泣いているのを無視するのは嫌！

「どうしたのチルノちゃん、何で泣いてるの？」

でも怒鳴られたり鬱陶しいとか言われるのは嫌だから大きな声では
問わない
自分よりも目立たれたりするのを嫌うから静かにするとこの子の対
応は楽なの。

「いきなり……いきなりお腹が痛くなったの……
何かで刺されたような……貫かれているような感じで痛い……いた
いよ……」

「な、何か悪い物でも食べたの！？
ちょ！　大丈夫チルノちゃん！？　普段から体調が悪くなったこと
が無いって事が唯一の自慢だったのに腹痛だなんて！」

予想外にも程がある！
喧嘩とか以外で痛いなんて滅多に言わないチルノちゃんが痛みで泣
いてるだなんて！

お医者さんまで連れて行こうにも今は夜中だから診てくれないだろ
うし
何よりチルノちゃんは人里でも怖がられてるから逆に苛められるか
もしれない
でも他にチルノちゃんを診てくれるような場所は……あ、そうだ！

紅魔館なら妖精をメイドとして沢山雇ってるから少しぐらいは診てくれるかも！
そうと決まればチルノちゃんを抱っこし、紅魔館まで急いだ
最初に目指すは門番の妖怪、あの妖怪に入れてもらえるようにしないと！

運が良かったのは私の居た場所が門に近かった事
そのおかげで短い時間で紅魔館の正門まで着けた。

「門番の妖怪さん！」

「門番の妖怪って……私の事？
確かに門番の仕事はしてる、けど門番の妖怪じゃないんだけど……」

「そんな事はどうでもいいんです！
それより、私達を紅魔館に入れてください！」

門番の妖怪さんはどうでもいいという言葉に落ち込みましたが
私が急いでいる事に気付き、すぐに真剣な表情になりました。

「急いでいるのは分かりましたが、先に用件を言ってください
問答無用で入る事は叶わない事は分かっているでしょう？」

「はい……実はチルノちゃんが突然苦しみだして……
妖精が沢山居る紅魔館ならどうにかなるかもしれないと思ったんです！」

「妖精のチルノちゃんが苦しむ？　しかも突然ですか？
となると私だけではどうにもできないか……わかりました、入って

ください
そしてそのまま私に着いてきてください、原因が判るかもしれない人の場所まで案内します」

こうして私は紅魔館の中に案内されました
そういえば私って紅魔館に入るのは初めてだった
急いでるのに関係無い事を考えてしまうのは思ったよりも冷静でいれるからかな？
それとも混乱してるからなのかな？

視点　パチュリー

「夜遅くすいません！
パチュリー様は居ますか！？」

また煩いのが来た……どいつもこいつも私の邪魔をしたいのかしら？
今から休もうと思って席を立った瞬間に呼び出してくれてからに……

「居るわよ……だから煩くしないで美鈴で、何か用かしら？」

「いえ、用が有るのは私じゃなくてこの妖精なんです」

視線を横に向けると落ち着かない様子の緑の妖精と、その妖精に背負われている青い妖精が居た
青い妖精は涙目で苦しそうにしており、青白い顔をして怯えている。

これだけである程度状況が読めた
この青い妖精が苦しみ出したから緑の妖精が青い妖精を連れてきた
理由は妖精メイドの存在かしら？
青い妖精が怯えているのは原因が判らないからだと思うわ。

「あの……チルノちゃんが原因不明の腹痛に襲われたと言ってるんです
何かに貫かれているような痛みで凄く痛いって言ってます」

「私には手が余る事だと判断しました
知識も持っていて回復魔法も使える事からパチュリー様にお願いしようと……」

「そう……簡単にしかできないけど診察をするわ
机の上に寝かせてちょうだい
美鈴は机の上に有る本をどけて適当な椅子の上にでも置いて」

「「わかりました」」

二人は急いで動いたけど、机の上の物が片づけられないと青妖精を置けない
結局美鈴が急いで片づけ、緑妖精が青妖精を机の上に寝かせた
青妖精の苦しみが増さないように慎重にしてたわ。

そして私は青妖精を診察する
少しぐらいなら医療の知識も持っているから大丈夫だと思ったんだけど……

「無理ね、私には分からないわ」

「そんな！　ならチルノちゃんはどうなるんですか！？」

「落ち着きなさい緑妖精
美鈴、貴女も少しぐらいなら診れるでしょ？
分からないとは思うけど一応しておきなさい」

「はぁ……では試してみます」

「あと、私は緑妖精じゃなくて大妖精です」

病は気からという言葉があるぐらいなのだ
【気を操る程度の能力】を持っている美鈴なら大丈夫だと思う
美鈴もそれぐらいは知ってると思うけど……ど忘れでもしてたのかしら？

「うーん……」

美鈴は暫く青妖精を診ていたが、突然診るのを止めて考え出した
何を考えているのか分からない私達は素直に美鈴が動き出すのを待つしかない。

「漠然となら分かるんですが……こう……どう言えばいいんですかね？
知ってる感じなんですが私の知ってる事とは少し違うような……
すみません、私には上手く説明できそうにありません」

予想はできるが言い難い事か……とれとも本当に説明し難いだけなのか
さて、どうしようかしら？

「起こして申し訳ないとは思いますが戒魔少年を呼び出しましょう
彼なら何か分かるかもしれません」

確かに何故かそれなりに知識の多い戒魔なら何か分かるかもしれない
大妖精と青妖精は私が見ている事にし、美鈴は戒魔を起こしに出て
行った
どうでもいいけど、この青妖精……どこかで見た事があるような気
がする。

無駄かもしれないけど一応回復魔法を青妖精に掛けながら美鈴を待つ
あまり効果は無いけど痛みは多少引いているらしい
でも使い続けるのは疲れるから早く帰ってちょうだい美鈴。

続く

少女期編　裏十八話【意思疎通不可能】

視点　真苗

現在、僕の目の前で正座をしている……正確には僕が正座をさせている八坂様と守矢様
後ろにはお母さんとお父さんが苦笑いをしながら僕のベッドに座っている。

僕達三人と二柱はまだ僕（？）の部屋におり、騒いでいる全員を一喝して落ち着かせた
八坂様と守矢様は僕……真苗の存在に気付き、父と母は性格の違う僕を興味深そうに見ている。

そして何故僕が八坂様達に正座をさせてるかというと……

「で、何故僕がまだ生きてるんですか？
あの時、視界が暗転した瞬間に僕の精神は死を覚悟してたんですけどだというのに僕の精神はまだ生きてるわ、こんな小さな体に莫大な霊力が詰められているわ
まだ五歳の体なのに現人神になってしまってるわ、しかも僕の存在

を両親が知ってるわ
最後に……頭の中で響くこの泣き声、多分この体の持ち主である早苗と意思疎通ができないわ
詳しく、納得のできる説明をお願いしますよ八坂様、守矢様」

僕が名前を呼んだ瞬間、八坂様達の体が大きく震えた
どうしてそんなに怯えてるのかな？　僕はただ知りたいだけなのにね。

「あー……真苗
我らとて全てを知っているわけでは無いのだぞ？
我らの知っている事は真苗の事を両親が知っている理由だけだ
他は予想しかできんし、最後のは知らぬ」

「私も同じ
霊力と現人神になった理由の予想は話せるけど他はわかんない
特に最後のは私達は専門外だし……」

どうやら僕の精神が生きている理由は知らないらしい
僕がしぶとかったからかな？

『すわちゃーん！　さなちゃんの事助けてー！』

「……で、守矢様は何で早苗からすわちゃんだなんて呼ばれてるんですか？」

「何で知ってるの！？」

「泣き声が聞こえるって言ったでしょ？
つまり早苗の声が聞こえるんだよ

僕からの声は聞こえないみたいだから意思疎通ができなくて困ってる
さっきから自分の体が自由に動かせなくて怖いって泣いてるんだ」

本当に困った……僕にはどうしようもないから何もできない
多分早苗は映画を見ている気分だろう
例えるなら、映画の観客になって勝手に動く映画の登場人物に必至
で話しかけようとしているという感じだろうか？

「早苗とは視覚は共通しているが聴覚は共通していない
味覚、嗅覚、触覚は未確認
僕が裏に回れば分かるかもしれないけど、まだ裏になるつもりは無い
入れ替わる方法もまだ分からないからどうしようもできないけどね」

「そうか……では真苗が起きている内に話せるだけ話そう
諏訪子、大半はお前がした事なのだからお前が話せ
ちなみに親がお前の事を知っている理由は我が話したからだ
細かい事は諏訪子が説明している時に口を挟むから後でいいだろう」

「はぁ……私に押し付けないでよ神奈子
じゃあ話すけど、落ち着いて最後まで聞いてよ？」

……守矢様が話し終えて数分経つ
守矢様の話しは予想外にも程が有るよ
半分冗談だった事を僕が真に受けて僕が暗転
儀式をして魂を縛るついでに僕をたたき起こそうとした
八坂様が余計な手出しをしたからこそ儀式は完全に成功したけど
おまけとして霊力が莫大に増え、魂が神格化して現人神になってしまった。

大事になってしまってどうしようかとも思う反面

結局現人神になったの幻想郷入りを本格的に考える必要になった
しかも早まった事から幻想郷入りの繰り上げの可能性も表れる
考える事が多すぎる……どうしよかな？

とりあえず僕が現人神となった最大の原因である八坂様を霊力を大
量に込めた拳で殴っておいた
正当な怒りと早苗の声の八つ当たりを含めた拳に、八坂様は一撃で
倒れてしまった。

面倒な事になったなぁ……

少年期編　二十八話【妖精達の受難】（後書き）

大妖精の性格ってどうなってるの？
二次の多くで優しい、お節介、良い子、素直、純粋とかが多いですがこの作品ではどれも微妙な感じの性格になっております
優しいが友人限定、お節介だが気分が良い時だけ、良い子だけど嫌な相手には棘が有るなど、自分の感情には素直です
一般的な妖精のように悪戯をして楽しむよりも、悪戯をしている本人を見るのが好き
子供のような妖精から一回り成長した感じをイメージしているつもりです。

大妖精ってチルノの事が嫌い？
嫌いではありませんが苦手としています
面倒事と言っていますがその面倒事がある程度楽な事なら楽しむ余裕ぐらい持っています
ですが楽しめない事も多いので時々付き合う程度ならいいかな？という感じ。

何故真苗はこんなに時間が経ってから起きたの？
魂が人から神になった事で魂が安定していなかったからです
二ヶ月の時間を掛け、魂が安定してきたので目を覚ましました。

何故早苗の体なのに真苗の精神が表に出ているの？
真苗は元三十歳の大人であり、早苗はまだ五歳の子供です
どちらの精神が強いかは言うまでもないでしょう
真苗の精神が起きた時、お互いに気付かないまま精神がぶつかり合った結果、真苗が勝った、それだけです
本来の肉体の持ち主である早苗も、自分の六倍も生きている真苗に

勝つ事は不可能でした。

早苗の霊力って凄く多いらしいけどどれぐらいなの？
真苗の全盛期以上です
緋想天や非想天則に出てくる霊力ゲージは全員共通ですが、それを基準とすると
真苗全盛期　ゲージ五個分
現在の早苗　ゲージ八個分
元の早苗　　ゲージ一個分
元々多かった霊力が元からは八倍、全盛期からは約六割も上昇している事になります
無論、現状では宝の持ち腐れで無駄に多い霊力でしかありませんが……
今後も成長に合わせて更に霊力が多くなりますが、それを使う必要は……少なくとも現代に居る限りは完全に無用ですね。

お詫び

すみません
小説作成中に眠ってしまい、まだ書き終わってません
申し訳ありませんが本日の投稿は休ませてください
次回の投稿は明日の午前０時とさせてもらいます
本当に申し訳ありません

どうせなので今この場でお礼を……
お気に入り登録１００件以上
ＰＶ数１５００００万オーバー
ユニーク１８０００越え
この小説を読んでいただき本当にありがとうございます
次回からこのようなミスをしないように注意します

今後も逆偽鏡の世界を楽しく読んでくださると嬉しいです

最後にお知らせ
最近忙しく、時間が足りない事が多くなってきました
ですので申し訳ありませんが三十話を投稿後、投稿は二日に一話ではなく三日に一話とさせてもらいます
キャラの設定もこのままでは追いつかないので五話に一人としようと思ってます
投稿もキャラの設定も遅くなってしまいますが、逆偽鏡の世界を楽しみにしてださる方に手を抜きたくありません
申し訳ありませんが御了承いただけると助かります

少年期編　二十九話【強引な方法】（前書き）

改めてお詫び
昨日は投稿できずにすみませんでした
今後も逆偽鏡の世界を楽しんでもらえると嬉しく思います。

少年期編　二十九話【強引な方法】

視点　美鈴

チルノちゃんの状態を確認する為、私達とは違う知識を持つ戒魔少年の部屋の前まで来た
こんな夜中だから寝てるでしょうから申し訳なく思います。

更に今更な話ですが、チルノちゃんは戒魔少年に大怪我させた当人
体調不良のチルノちゃんにこれ幸いと苛めたりしないといいのですが……
まぁ戒魔少年の性格からしてどの可能性は低いでしょうし、大丈夫だと思います。

意を決して戒魔少年の部屋の扉を叩く
しかし中から反応は無い、やはり眠っているようだ。

念のためもう一度扉を叩いた
反応が無いと思っていたのだが中から動く気配がした
どうやら目を覚ましたらしいが……寝付けなかったのかしら？

暫く待っていると戒魔少年が部屋から出てきた
起こされた事が不満なのか不機嫌そうな表情を隠そうともしていない
私だと分かってもお構いなしに怒りを向けられるのが凄いわね
遠慮が無いのか私が怒らないと思ってるのか、それとも怒っても怖くないのか……
何にしても、弱い人間ができる事じゃないですね。

「……何か用？」

うわ……声から不機嫌というのがよく分かる、顔だけでも分かるけど声は低くて眠そうだし、鬱陶しそうにしている。

「少し頼み事が有りまして……
以前、戒魔少年に大怪我をさせた妖精を覚えてますか？」

「チルノか……チルノがどうかしたのか？」

チルノちゃんの事を話した瞬間、不機嫌そうな顔がすぐに消えて真面目な顔になった
ここは余計に不機嫌になる場面じゃないんですか？
むしろ真剣になっている時点で彼女をどう思っているのか気になる所ですね。

「先ほどチルノちゃんの友人がチルノちゃんを背負って来たんです
原因が判らないのにお腹が凄く痛いって……それで妖精を多く抱えている紅魔館に助けを求めたそうです
今は図書館でパチュリー様が回復魔法を使って痛みを押さえてるみたいですが……」

「効果は見込めないし、美鈴もパチュリーも原因が判らないと……
二人とも知らない事を知ってる俺にチルノを診せてみようって事か？」

「さすが戒魔少年、その通りです
来てもらえますか？　私としてはチルノちゃんの苦しんでいる姿を見るのは少々悲しいので……」

言っている事は本当だが少し落ち込んだように言う
そうすればお人好しの戒魔少年の事だ、チルノちゃんへの個人的感情は後回しにするでしょう
一応急いでいるとはいえ、このような手段を選んでいる時点で女としてどうなんでしょうか？
まぁこの程度でチルノちゃんが助かるなら気にするまでも無いですね。

私は暇潰しになってくれるチルノちゃんをけっこう気に入っている
彼女は本当に純粋な子供だし、悲しむ顔を見ると私も悲しい
子供はやっぱり元気で遊んでほしいものです。

「別に頼まれなくても診るつもりだ
大怪我はさせられたけど、知り合いが苦しんでいるのを黙って見過ごせるような性格はしてない」

……なんだか損した気分です
私の仕草を返してください。

そんな私の感情はさておき、戒魔少年は部屋に戻って寝間着から着替えました
私達は早足で図書館に向かいます。

チルノちゃん……大丈夫でしょうか？

視点　戒魔

美鈴に連れられて図書館まで来たが……
まさかチルノが腹痛で倒れるとは思わなかった。

美鈴もパチュリーも原因が判らない、それだけで普通の腹痛では無い事は確定してる
美鈴は気を操るので体に流れている気の乱れぐらい判るはず
体調が悪ければ、病気ならば気が乱れるので美鈴が気付く
それが判らないとなると……外からの干渉か？

パチュリーが診たと言っていたが、それは肉体的な事だろうが、その程度は美鈴も判る
そして原因が判らないのなら……これはやはり外からの干渉
更に誰にも知られずに腹部が貫かれるような痛みか……

とりあえずチルノの事を診てから考えるべきだな
ある程度予想は付いてるが先入観で決めても拙い、もし違っても先入観で合っていると思うかもしれない
落ち着いて、間違えないように注意しないとな。

俺が予想を立てているいる内に図書館の前に着いた
俺の部屋から図書館まではそう遠くない
何故ならレミリアも図書館を利用するし、パチュリーに会うにも近い方が楽だからだ
そのおかげで俺も楽な思いをさせてもらってるんだから文句は無いけどな。

「勝手に入るぞパチュリー、今は急いでるから一々許可は取らないからな！」

普段なら扉を叩いてから入るが、今は急ぎの用なので許可は取らない

扉を開け、パチュリーがいつも本を読んでいる場所に向かう
自分で自覚していなかったが俺の足は自然と早足になっていた。

俺がパチュリーを見つけると、そこには苦しそうな顔になって泣いて
ているチルノとそのチルノを心配している緑髪の妖精の女の子が居た
緑髪の妖精はチルノの付き添いか、それとも苦しみ始めたチルノを
連れてきたのかのどちらかだろう
チルノの様子を見る限りは後者だろうが。

「遅かったわね戒魔、早く青妖精を診てちょうだい
回復魔法の維持だってけっこう疲れるんだから」

「あの……青妖精じゃなくてチルノちゃんです」

緑髪の妖精がパチュリーに訂正を入れるがパチュリーは無視
涙目になる緑髪の妖精を無視し、俺はチルノに近づいて観察してみる。

診ただけで判る……これは呪いだ
こちらではあまり呪いには触れてないが、向こうでは触れる機会が
多かったし俺も少し使った
だから診れば判る、何の呪いかは判らないが呪いに間違い無いな。

自分を見つめる視線にチルノが気付いた
俺の顔を覚えているらしく、気まずそうに視線を逸らした
いくら喧嘩を売られたからといってもやり過ぎた事は一応自覚して
いるのか？
それが違うのなら俺が気絶した後に美鈴と何か話したのだろうか？

「あんた……あたいに仕返しに来たの？」

「何故そうなる？
まぁいい、俺が来たのはお前の状態を確認する為だ
美鈴もパチュリーも原因が判らないと言ってるからな、一応俺に見せようって事で来させられたんだ
原因は少し診れば判ったけどな」

「判ったんですか！？
私やパチュリー様でも判らなかったんですけど！」

「ああ、これは呪いだろうな
チルノは呪い使いに怨まれてたんじゃないか？
喧嘩を売りまくったとか、大怪我をさせたとか、知り合いを傷付けられたとかな
相手の理由とかはともかく、回復魔法は無駄だろうな
呪いは原因を取り除かないと何をしても無意味だ
使用者を見つけるか、呪い返しをするか、それとも呪いが切れるまで待つか……
悪いけど俺に判るのはそれぐらいだ」

俺の説明が終わっても誰も何も言わない
美鈴は何か心当たりが有るようだが、それが合ってるのか考え込んでいるようだ。

パチュリーは無駄と分かった回復魔法を止める
それと同時に呪いに興味を持ち始めたようで目を輝かせている
興味を持つのは構わないけど俺を呪ったりするなよ？

緑髪の妖精は呆れている
大方、チルノの自業自得とか思っているのだろう

そう思うのならチルノを止めるようにしてくれないだろうか？

チルノは落ち込んでる
自分が色々とやり過ぎた事を反省しているようだ
因果応報、自業自得という言葉をチルノに贈ってあげよう。

全員が黙ったまま数分……
チルノは落ち込んだまま痛みに耐えているようだが、あまりに痛みが長いと泣き出すかもしれない
俺もどうにかしたいと思うが、呪い返しをする為の技量が足りないと思う
もし失敗すれば自分に戻ってくるので安易に手を出すわけにはいかないのだ。

いや……俺ができないとしてもナズナならどうだろうか？
呪術を得意としているナズナなら解呪ができるかもしれない。

「美鈴、パチュリー
この呪いの解呪はナズナに任せてみないか？
俺には無理だと思うけどナズナなら解呪できると思うんだ」

俺の言葉に美鈴は呆れの顔になる
今の言葉のどこに呆れるのか分からない
パチュリーはなるほどという顔になってるのだが……

「確かにナズナはまだ未熟だけど試してみる価値はあるでしょうね
なら戒魔、ナズナを呼んできなさい」

「ああ、じゃあ行ってくるよ」

パチュリーにナズナを迎えに行くように言われ、俺はチルノから背を向けて扉へ向かおうとしたしかし移動する前に美鈴に立ち塞がれた。

「何故邪魔をする美鈴」

「呼ぶだけ無駄だからですチルノちゃんの事は戒魔少年、君が何とかしなさい」

「何故俺が……ナズナの方が呪いに関して上なんだからナズナに任せるべきだろ？」

同じ事を言う必要は無いと思うのだが……そんな俺を無視して美鈴は話し始める。

「戒魔少年、この呪い……誰が掛けたと思いますか？」

「それが判れば苦労はしないと思うぞ？呪いができる知識を持っていて呪術を得意としているナズナに頼むのは自然の流れだと思うが……」

「はぁ……まだ分からないんですか？この呪いを掛けた者が誰なのか」

そんな事を言われてもこんな事ができる奴に知り合いは……

「過保護なのか現実を見ていないのか……それとも認めるのが嫌なんでしょうかね？戒魔少年、いい加減に目を逸らすのは止めたらどうですか？」

はぁ……やっぱり目を逸らすのは無理か
どうするべきかな……

「どういう事なの美鈴？
戒魔も目を逸らすってどういう意味？」

「どういう意味も何も……チルノちゃんに呪いを掛けたのは十中八九ナズナちゃんですよ
チルノちゃんに怨みが有って呪いができる、他にも居るかもしれませんが可能性は低いでしょう
戒魔少年に大怪我をさせたのを根に持っていたみたいですね」

「俺が怪我した時から何か怪しい事をしてたみたいだしな
パチュリーも心当たりが無いか？　突然呪術の勉強を真面目にするようになったとか
陰陽術を後回しにして呪術を優先したとかな」

パチュリーは考える仕草をするが、すぐに心当たりを見つけて納得している
予想を言っただけだったが大方正解らしい
ナズナ……お前は何を考えてこんな事をしたんだ？

こんな事をした理由は分かる
多分俺が大怪我した原因であるチルノに逆恨みでもしたのだろう
数日前に外に出ようとしたのはこの為か……あの時に気付いていればよかった。

「その事とは別の問題は呪い返しをするかなんだ
この呪いに呪い返しをすればナズナに苦しむんだが……
特に問題無い気がするのは気のせいか？」

「私も問題無いと思いますよ？
今回はナズナちゃんが悪いですしね
完全に八つ当たりの逆恨みなんですから」

「私はどっちでもいいわ
むしろ早くして図書館から出てってくれない？
図書館の鍵を閉めて部屋に戻って寝たいの」

「私はチルノちゃんを助けてくれるなら嬉しいんですが……
いいんですか？　お知り合いが苦しんでも」

「構わないさ、俺は別にチルノを怨んでるわけじゃない
それなのに勝手にこんな事をしたんだ
勝手に馬鹿な事をしたんだからお仕置きぐらいにはなるだろ」

今までだったら俺に一言言ってから行動に移してからな
自主的に動くようになったのは嬉しいがした事が悪い
自業自得と思って諦めてもらおう。

呪い返しをする事が決まったのでチルノの近くまで行く
チルノは不安そうな顔をしていた。

「ねぇ」

「なんだチルノ？」

「あたいがあんたに悪い事したからこんなに痛い事されてるの？」

「……どうだろうな、ナズナに訊かないと本当の理由は分からない

まぁ……本当にナズナが呪いを掛けたと決まったわけじゃないけどなそれより今から解呪するから静かにしておけよ？」

「……うん」

チルノは苦しいのを我慢しながらも静かになるよく見てみると脂汗が滲み出ている本当に苦しいが一時我慢すれば治ると頑張っているのだろう。

即席ながらも解呪の準備を進める大して時間が掛かったわけでも無いがチルノは苦しみから呼吸が荒くなっているそれでも動かないのは意地かのか、頑張っているのか分からないだがおかげで準備は終わった。

チルノの腹部に手を当て、呪いを当てられている場所を探し出す俺には解呪の知識などが足りないからこうして直接呪いの場所に力を込める必要があるこれぐらいしなければ難しい事ぐらい自分で分かっている。

痛い場所を押さえられたチルノが小さく呻き声を上げるが無視する構っていては集中が乱れるかもしれないからだ。

呪いを掛けられている部分に霊力を流し込む俺ができる解呪方は霊力を呪いに直接流し込み、許容量以上の霊力を込めて強引に破壊する一つ一つ呪いの枷を外す方法も存在するが、そんな事をできる知識は持っていない。

「いっつ！　ぐっ！

い……痛い！　痛い痛い痛いよ！」

この解呪方には弱点が一つ存在する
それは霊力を込める事により、一時的に呪いが強化されて更に辛くなるのだ
その苦しみに耐えなければ解呪もできなくなってしまう
苦しみに耐えられないという事で暴れられたりすると俺の集中が切れる
気絶すると意志によって呪いの効果を下げられなくなる
嫌がれば俺が解呪を続けられなくなり、再び耐える事しかできなくなる。

呪いは受ける側の意志の力で威力が変わる
掛ける側も油断していると意志の力だけで呪い返しをされるかもしれないのだ
呪いにとって対象の意志の力というのは厄介な存在
そしてその意志が途切れてしまう睡眠や気絶をすると呪いの効力が増してしまうのだ。

故にチルノには我慢してもらうしかない
問題はチルノは他の妖精よりも強いから痛みをあまり知らない事
今まで我慢するという事を殆どしてこなかった事
予想だがこれは正解だと思う。

そんなチルノがこの痛みに耐えられるか分からない
大丈夫だと思うが頑張ってもらうしかない。

呪いというのは解かれると呪いを掛けた本人に戻る性質がある
それが先ほどから話しに出ていた呪い返しだ
もう一つの問題はナズナがこの呪い返しに耐えられるかどうか

フランドールにナズナを頼んだからもしかすれば近くに居るかもしれない
もし一人なら危険だし、解呪が終わればすぐにナズナを探しに行こう。

呪いはもうすぐ解けそうだ
大丈夫だとは思うが呪いの重ね掛けなんてしないと思う
万が一重ね掛けをしていたら俺では手に負えない、チルノには我慢してもらおう。

……よし、解けた！
この解呪方は成功する瞬間に強烈な痛みが瞬間的に来る
チルノはその痛みを受けた一瞬、大きな叫び声を上げた
解呪方が未熟で申し訳なく思うが許してほしいところだ。

チルノは叫び声を上げ終えた瞬間に気絶
緑髪の妖精はそんなチルノを見て大慌てで介抱し始めた
解呪が成功した事で美鈴は安堵の息を吐き、パチュリーは相変わらず興味深そうに見ている。

「これで大丈夫だと思う
体力が大きく減っているだろうから数日は動かない事を勧める
俺は疲れた……少し休んでからナズナを探しに行く」

「あ、チルノちゃんを助けてもらってありがとうございました！」

「気にするな妖精
元はと言えば俺の使い魔が馬鹿な事をしたのが原因だ
主人の俺が責任を取るのは当然だからな」

「それでもありがとうございます
あと、私は大妖精です」

……大妖精？
確かに大妖精は緑髪だったけどこのおとなしい子が？
冗談だろ？　チルハみたいな性格の大妖精とは……
そういえば大妖精のような性格のチルノだったな
なんだか向こうの記憶はあまり当てにできないかもしれない
予想外の出来事にもあまり動揺しないように気をつけないとな。

「お疲れ様です戒魔少年
お茶でも淹れましょうか？」

「ああ、ありがとう美鈴
さすがに正式な解呪じゃないし力尽くの方法だったから疲れた
やっぱりこの解呪方はあまり良い方法じゃないな」

「あら、戒魔は以前もこの解呪方で呪いを解いた事があったの？」

「数回だけどな
正直以前よりも疲れてる……呪いの威力は比べものにならないぐらい弱いのにな
まぁあいつの呪いと比べるのは間違ってるか」

諏訪の呪いの威力はとんでもない強さだからな
ナズナみたいにわか仕込みの呪術とは比べものにならない
こっちの諏訪が来るまでに解呪の勉強もしておいた方がいいな。

「……（ナズナ以上の使い手の呪いの解呪ですって？　戒魔は本当に子供なのかしら？

もしかしたら幻術とか時の秘術とかで子供になった大人じゃないかしら？
今までの戒魔の話しから可能性は否定できない……話したくない事でしょうから二人になった時にでも鎌掛けてみましょう）」

ナズナの事は気になるが今は休む
時間が時間だし、ナズナができる呪いを考えれば今回のは丑の刻参りだろうか？
それなら残り時間は一時間も無い、それぐらいが我慢してもらおう
少し休んだら探しに行くつもりだが、ある程度苦しんで貰わないと割に合わない。

自分から動いてくれたのは嬉しいがよく考えたらナズナは体はともかく精神はまだ子供
今後は自主性に任せる事は変えないが躾ける必要がある
まったく……霊夢を育てる事はできなくなったが別の子供の面倒を見る事になるとはな
ナズナの成長記録でも書くべきだろうか？
とりあえず後でパチュリーに子育ての本を借りておくか。

続く

少女期編　裏十九話【実験一、体を明け渡してみる】

視点　真苗

僕が八坂様を殴って数分
八坂様は何事も無かったかのように起きている
神奈様も撃たれ強かったけど、八坂様も撃たれ強かったようだ。

「真苗、私から話しが有るんだけどいいかな？」

「僕はさっきから話していて疲れたから二度寝したいんですが……
事が一気に起こりすぎて混乱してるし、早苗が泣きわめいてるから
苛々してるんです
早苗との意思疎通もできるようにならないと駄目だし、次の機会じ

ゃ駄目なんですか？」

「……そうだね、ちょっと突然過ぎた
この話しは今度にするよ」

守矢様はともかく、この泣き声の主をどうするかか……
僕の意識が眠れば起きるのかな？
それとも僕が自分から体を明け渡せばいいのか？
とりあえず試してみるか……

泣いている早苗に体を明け渡すイメージをする
当然ながら初めての行為だから辿々しいイメージだが、それでもこれぐらいしか思い浮かばない。

そしてイメージが固まり、力を抜くように息を吐く
その瞬間、自分の体の神経の全てが途切れるような感覚に陥った……

視点　諏訪子

突然真苗が黙り、何かを考えるような仕草をし始めた
私達は何事かと思ったが真苗の邪魔はせずにおとなしく眺めている
真苗が息を吐き……倒れた。

「真苗！？」「真苗！」「早苗ちゃん！？」「早苗！」

順に神奈子、私、母親、父親の順番
倒れた真苗を介抱しようとした瞬間、真苗から小さな声が聞こえた。

「ひっく……ふあ？
あ……動ける？　さなちゃん動いてる？」

これ反応、自分の呼び名、この子は……早苗か！？
全員が混乱している中、私はいち早く動き、早苗に話しかけた。

「おはようさなちゃん
何があったかすわちゃんに教えてくれないかな？」

「うん……あのね、よくわかんないけど真っ暗だったの
それでなんにも聞こえなかったの
さなちゃんが泣いてる声は聞こえたんだけど、それだけでね
すっごく寂しかったの……それでね、それでね……すっごく怖かったの」

あれ？　真苗は視覚は共通してるって言ってたと思うんだけど……
もしかして最近友達になった私を呼んだだけかな？
今の早苗の台詞からその可能性は高いか……また厄介な。

「怖かったんだね、じゃあ寂しくなくなるようにお母さんに抱っこしてもらいな
ギュッて抱きつけば寂しくないでしょ？」

「……うん！」

早苗は元気良く返事をして母親に突撃した
母親は混乱しながらも早苗を受け止めて抱きしめた
先ほどの早苗の言葉は当然ながら聞こえていたので優しく、ゆっくりと頭を撫でる

その感触に早苗の顔は落ち着きを取り戻して猫のように丸くなる。

「諏訪子、お前は随分冷静だな
両親でさえ混乱して動けなかったのに動くとはな」

「私だって混乱してたよ、ただ……」

「ただ？」

「泣いているような顔を見て急いで動かないといけない気がしただけだよ
神奈子だってきっと分かるさ」

「そうか……私にも分かるのか
その頃には私も平和ボケしてるだろうがな」

「平和なのは良い事に決まってるじゃん
幻想郷の事は保留にするけど、それでも平和に過ごしてもいいでしょ？」

「そうだな」

既に平和ボケしてる気がしないでもないけどね。

「それより真苗はどうなったのかな？
神奈子は分かる？」

「分からぬ、何故真苗が引いて早苗が出たのだろうか？」

「可能性としては引っ込む方法を思いついて試してみたってとこだ

と思う
断言はできないけど、まだ引っ込むつもりは無いってさっき言ってたからね
多分暫くしたら戻ってくるよ」

もし戻れなくなっても既に真苗は意識を取り戻してるしね
早苗も生きてる事が分かったし、出てこようと思えばいつでもでられるでしょ。

少年期編　二十九話【強引な方法】（後書き）

呪いに回復魔法は効果があるの？
傷ではなく体力を回復していたので効果はあります
しかし微々たるものなのであまり役に立つとは言えません。

真苗の意識はどうなってるの？
起きてますが表に出てないだけです
次話になれば早苗は泣くでしょうが戻ってきますので安心（？）してください。

少年期編　三十話【呪い事件の報告】（前書き）

お詫びの方でも言いましたが改めてもう一度……
この小説は今まで二日に一話の更新をしていました
しかし最近忙しい事と、これから更に忙しくなる可能性が高くなりました
ですので今後は三日に一話で更新していきたいと思います。

実はこの件に関しては前回投稿が遅れる前から考えていました
三十話を投稿後、三日に一話にしようかどうか……と
切欠は自分のミスですが、この事が切欠となったので宣言する事にしました
二日に一話で楽しみにしてくださった方々には申し訳なく思いますが
自分の事を後回しにして小説を書く事も問題なのでご了承ください。

キャラ設定の方も追いつかなくなってきているので三話に一人だったのですが
三十話を切りにし、五話に一人にさせていただきます
ですので次回のキャラ設定は三十五話となります
こちらは更新速度に関係無く決めていた事ですのでこちらもご了承ください。

今後も逆偽鏡の世界をよろしくお願いします。

そういえば……何故お詫びを投稿した日にユニークが６３１も入ったんでしょうか？
そこまでおもしろい事を書いた記憶は無いのですが……

追記

聖白蓮の男名を変えました、初話と新十九話にて確認できます
白楼(はくろう)→白蓮(はくれん)
理由は蓮の文字には仏的な意味が有るという話しを友人が教えてくれました
他にも蓮の花には花言葉が有り、その花言葉から蓮の文字を変えるのは止めた方が良いと言われました
確認してみた所、自分でも変えない方が良いという結論になり、名前を変える事に決まりました
悩んだ結果、白蓮(びゃくれん)の読み方を変えただけの白蓮(はくれん)となりました
ややこしいとは思いますがご了承ください。

少年期編　三十話【呪い事件の報告】

視点　フランドール

使い魔の送る霊力の流れが途切れた……でも呪いの終わりの時間にはまだ早い
という事は解呪されたか、呪詛返しでもされたのかな？
どちらにせよ使い魔の元へ行くべきね。

門番の妖精に一言声をかけ、使い魔の元に戻る
使い魔の周りに張ってあった結界は既に消えており、使い魔の様子が見て取れる。

叫び声は上げていないが呻き声を上げており、涙と鼻水と涎で酷い顔になってる
腹部を押さえながら倒れている使い魔
あまりにも情けない姿に呆れの感情と自業自得という言葉が浮かぶ。

妖精は呪い返しの怖さを知り怯えている
呪者本人が受ける痛みと呪術対象の受ける痛みは被害者よりも加害者である呪者の方が大きい
つまり使い魔に呪われた相手はここまでではないとはいえ、相当の痛みだったでしょうね。

私としてはこのまま苦しんでも自業自得だから別にいいんだけど
無視すると戒魔に後で何を言われるか分からない
報酬である焼き菓子（クッキー）や料理を失うのは惜しい
仕方がないので使い魔を連れて帰ろう、もしかすれば更に報酬が増

えるかもしれないしね。

頭の中で使い魔の事をどうするか決まると使い魔を抱き上げる
妖精には、私達は偶然使い魔を見つけたので連れて帰ったと言わせておく
そうする事で私は同罪ではなくなる寸法よ。

使い魔を抱えたまま飛び上がり、紅魔館に戻る
自業自得とはいえ苦しんでる知り合いを眺める趣味は無い
さっさと戻ってどうにかしてもらおう。

門の前に着くが美鈴は居らずに門番隊が多めに配属されている
先ほどまで居たのに居ないという事は何かあったのかしら？
例え何かあったとしても私には関係無いか……早く戒魔の部屋に向かおう。

私と一緒に居た妖精を門に置いて戒魔の部屋に向かう
戒魔の部屋に着くも、部屋の中から戒魔の気配を感じ取れない
この時間なら寝てるはずなんだけど……どこに行ったのかしら？

どうしようかと悩むけど、とりあえずこの使い魔は部屋に放り込んでおこう
苦しんでる子を抱えていても気分が悪くなるだけだしね。

使い魔を部屋に入れた後、私は戒魔を探す事にした
この子の処分は戒魔に使い魔の様子を話して任せる事にしよう
ただ戒魔がどこに居るのか分からない……戒魔の行動範囲はお姉様の部屋か図書館ぐらいね
でもお姉様の部屋からは誰の気配も感じなかった、お姉様もどこかに行ってるみたい。

お姉様はこの時間だと……食事かしら？
それともただ出歩いてるだけか……どちらにせよ今は関係無いからどうでもいいわ。

でももしかしたら戒魔はお姉様に付き合わされてるかもしれない
お姉様は時々非常識な行動をするから困るわ
……人の事を言えるような立場じゃないか
とにかく、今はお姉様に会いに行ってみるか。

試しに食堂に向かおうとしたが戒魔が近づいてくる気配を感じた
何をしていたのかは知らないけど終わって戻ってきたらしい
向こうから来てくれるのなら好都合、用件を言って報酬の約束だけでも取り付けておこう。

「こんばんは戒魔、話しがあるんだけどいいかしら？」

どうやら戒魔は私の存在に気付いていなかったらしく、私に声に小さく声を上げた
そして私も別の事に気付いた、戒魔は一人ではなく妖精と一緒に歩いてた
更に戒魔の背にはぐったりとした別の妖精が背負われている
何があったかは知らないけど全員疲れているように見える。

私の話は戒魔の使い魔の件
あの子は知られたがっていなかったけど、戒魔には教えなければならない
お姉様達に教えるかは戒魔次第、他人任せにすると楽よね。

「フランドールか……俺も訊きたい事があったから丁度いい

でも少し待っててくれ、チルノ……この青妖精を寝かせてくるから
話しはフランドールの部屋でいいか？」

「構わないわ、じゃあ先に部屋に戻ってるから後で来てちょうだい」

戒魔の返事を待たずに急いで部屋に戻る
私の部屋は人間からすれば悪趣味と呼ばれるような物しか置いてない
別にその程度で戒魔が私を嫌うとは思ってないけど引かれるのは遠
慮したいし
一応私も女なのでそういう趣味だと思われるのは嫌なのよ。

一足先に部屋に着いた私は急いで部屋の整理をする
あまり収納する余裕は無いが全くか片付けないよりはいい
幸い戒魔は何も言わずに入ってくるような礼儀知らずではない
入ってくる前には必ず扉を叩くので安心して片付けられる。

片付けがなかなか終わらず、そもそも入れる場所が無いのであまり
片付かない
唯一で最大に引かれそうな人間の頭蓋骨の山は粉々に破壊してベッ
ドの下の隠しておいた
人間の頭蓋骨はあまり手に入らないのに……惜しい事をしてしまった
しかし私の数少ない友人に嫌われるかもしれない、それは嫌なので
諦める事にした。

他の悪趣味な物は模様だったり色だったりするので隠しようが無い
そういう物は見られる事を諦めるしかない。

ん？　戒魔が来たらしく、扉を叩く音が聞こえた
扉が開いていれば入ってくれと言ったのだが、万が一の事を考えて
鍵を閉めていた

なので面倒だが自分で開けなければならない。

「いらっしゃい戒魔
適当に寛いでちょうだい」

「こんな夜中に悪いな」

そう言って戒魔は部屋に有る椅子に椅子に座る
この部屋には椅子が一つしか無いので私はベッドに腰を掛けた
椅子の位置はベッドの近くだったので私達は正面を向き合うようになる。

「どちらの話しからする？
なんとなくだがフランドールからした方が良いと思うんだが」

「私はどちらでもいいわ
なら私から話すけど、それでいいわね？」

戒魔は頷き、私の話を聞く体勢になっている
私からの報告は一つ、戒魔の使い魔の事しかない。

でも……せっかく片付けたのに部屋に関して何も言わないのかしら？
自分で言うのも変だけどこんな悪趣味な部屋で嫌じゃないのかしら？

「私からは戒魔の使い魔の事よ
あの子が今日、行動を起こしたわ」

重大そうに話すも、戒魔は驚くどころか逆に納得してしまった
もしかして使い魔の事を知ってたのかしら？
だとしたら私に使い魔の事を頼んだのは変なんだけど……

「俺が訊きたかったのもナズナの事だ
ナズナは今どこに居る？」

「は？　えと……あの子の部屋だけど？
あの子が戒魔に何かしたの？」

戒魔を呪うなんて失敗をするとは思えないし……
もしお姉様や美鈴、パチュリーを間違って呪ったのならそれはそれで楽しそうだけど
でも戒魔の気配からは怒りよりも呆れの方が大きいかしら？
それでも怒りが無いわけではないのだけどね。

「いや、俺じゃなくて先ほど俺が背負っていた妖精に呪いを掛けたんだ
まだ証拠は無いが状況や呪いの対象、更に最近の行動を考えてナズナの可能性が高いと判断した
だから確認を取ろうとしたんだが……」

「その前に私に会い、そして私が誘ったから気分が削がれたとか？」

「……まぁそうだ」

うーん……いくら未熟者の呪いとはいえ
呪われた状態でここまで来れるかしら？
そもそも何故紅魔館に来たのかも分からないわ。

「とにかく、私からあの子の事に関して説明するわ
知ってると思うけど数日前からあの子は紅魔館から抜けだそうとしていた

今夜も抜けだそうとしてたんだけど、あの子ったら裏の塀を壊そうとしてたのよ？
時間も掛かるし見回りに見つかると危ないと思ったのよ
さすがに塀を壊そうとしてお咎め無しと言うわけにもいかないわ」

「塀を壊そうとしたのか……
ナズナは俺達が居候という立場なのを分かっているのか？
そんな事をすれば追い返されるかもしれないってのに……」

「そうなのよね……そこまでされるのはさすがに拙いと思ったから
塀を壊す行動を止めたわ」

「そうか……」

安心したように息を吐く戒魔だが、私の言葉の違和感に気付いてない
私は塀を壊そうとする事は止めたの
外に出ようとした事は止めてないのよ？

「変わりに私が壊したわ」

「それはそれで拙いだろ！」

「大丈夫よ、一応明日にでも派手に壊しておくわ
久しぶりに庭で武器を振り回してたら壊してしまったってね」

「そんな事をすればフランドールが怒られるんじゃないか？
ナズナを庇ってくれるのは嬉しいけど、今回悪いのはナズナだ
ナズナの事でフランドールが怒られるのを黙って見ているわけにはいかない」

戒魔は相変わらず甘いわね……
私だって怒られる趣味はしてないけどね。

「最初に確かに行動を起こしたのはあの使い魔よ
でも実際に壊したのは私、なら私が責任を取るのは当然でしょ？」

「しかし……」

「いいのよ
だって私は貴方に使い魔の監視を頼まれたのにあの子の邪魔をしなかったんだもの
本当なら邪魔するか連れ帰るべきだったのよ？」

私の行動は間違っていたのは事実
あの時、私が使い魔を止めていれば何事も起こらなかった
でも今後も何度も挑戦する可能性を否定できないから見逃し、手伝ったのだ。

「続けるわよ？
その後私は正門から散歩と偽って紅魔館から抜け出したわ
もっとも、美鈴は怪しいと思ったのか監視を付けられたけどね
邪魔だったから脅して偽りの報告をするように言っておいたけど」

「……その妖精も不憫だな
今度謝っておくか」

そういう真面目な所は美点よ？
時々汚点に思える時があるけど。

「その後、私は使い魔と合流

霧の湖を越えて近くの林に入ったわ
使い魔はそこで呪術、丑の刻参りを始めた」

「時間から予想はしていたがやはり丑の刻参りだったか
にわか仕込みの呪術とはいえ、時間まで味方にされたから解呪に疲れた
もうあの方法は二度と使いたくない」

……やっぱり戒魔が解呪したんだ
パチュリーも美鈴も呪いに関しては素人だしね
お姉様は少しだけ囓ってるけど、それでも解呪なんてできないと思う
私は言わずもがな、興味も無いわ。

「戒魔が解呪した後だと思うんだけど、使い魔が倒れたのよ
自業自得と思って無視しようとも思ったんだけどね……
でもそれは少し辛すぎるお仕置きだから止めておいたわ」

「助かる、罰は俺から後で与えておくから許してくれ」

「別に怒ってないわ
その後はさっき言った通り、部屋に放り込んでおいたわ
今頃呪い返しに苦しんでるでしょうね」

これ以上助けてやる必要も無いしね
戒魔も私と同じ考えらしく、まぁいいかという態度だ
私としては悪趣味だと思うが少しぐらい慌ててほしかったわ。

「次はこっちだな
先ほど俺と一緒にいた緑髪の妖精……大妖精という名前らしいが
あの子が突然苦しみだしたチルノを抱えて紅魔館まで来たらしい

俺はその時は寝ていたから聞いた話しなんだがな」

大妖精って……それは名前なのかしら？
確かに他の妖精より真面目そうというか……大人っぽい気はしたけど
それで大妖精って呼ばれ出したとか？　それとも単純に大妖精が本名？

「チルノの突然の腹痛の原因が美鈴もパチュリーも分からなかったらしくてな
それでパチュリーとは違う知識を持っている俺が呼ばれたらしい」

なるほど……パチュリーも自分の絶対の自信である知識
その知識とは別の知識を持つ戒魔を認めないわけにはいかない……かパチュリーも悔しかったでしょうねー
自分の自信の象徴である知識が負けたんですものね。

「俺はチルノの苦しみの原因は呪いと判断、かなり強引な方法だったが解呪した
その後、美鈴は門番に戻り、パチュリーは図書館を閉めて寝るって言ってた
俺はチルノが絶対安静だと思ったからレミリアに部屋を借りれないかと少し探してたんだ
レミリアは見つからずにフランドールに会ったから今は俺の部屋で休ませてるけどな」

なるほど、それで思ったより早く来たのね
ところで戒魔はどこで寝るつもりなのかしら？

「この後はまたレミリアを探して空き部屋を借りる
今夜はその部屋で寝るつもりだ、あの部屋は今夜は妖精達に譲る」

妥当かしらね、寝かせたのに追い出すなんて気分も悪いし
戒魔の性格からしても強引な事をするような奴じゃないしね。

「あの使い魔はどうするつもりなの？」

「まだ決めてない
一回寝て、起きてから考えるつもりだ」

戒魔の事だからあまり酷い罰はしないと思うけど……
私としてはそれではつまらないのよね……何を言っても無駄だと思うけど。

「じゃあ焼き菓子（クッキー）は明日頼んでいいかしら？
紅茶はその時にお願いするわ」

「突然話しが変わったな……わかった、時間はどうする？
夕食後ぐらいでいいか？」

「ええ、夕食に合わせるようにお願いするわ」

「ああ」

……会話が止まった
これ以上話す事も無いし戒魔も眠いでしょうし……今夜はお開きにしますかね。

「じゃあ俺は今夜はこれで帰るよ
おやすみフランドール、今夜は助かった」

帰る事は戒魔が先に切り出した
私も同じ事を言おうとしていたので特に何も思わずに別れる。

「おやすみ戒魔
焼き菓子（クッキー）、楽しみに待ってるわ」

戒魔は私の部屋から出て行った
後に残ったのは私だけ……そういえば私の部屋に誰かと一緒になるなんて久しぶりよね
……寂しさを感じるなんて我が儘かしらね。

続く

少女期編　裏二十話【実験結果】

視点　真苗

……どうやら僕が体を明け渡すと決めたら意識が持って行かれるらしい
それに僕の視覚には早苗の見ている事が僕にも見える
僕は視覚の共有が可能っと。

次は聴覚だけど、これも聞こえる
早苗の声だけではなく、両親、八坂様、守矢様の声
早苗が動いた時に聞こえる足音までも聞こえる
聴覚の共有も可能っと。

嗅覚も可能、早苗が抱きついた時にお母さんの匂いがした
言っている事は恥ずかしけど、それでも嗅覚の確認を取れたのだから問題無い
嗅覚の共有も可能か……

触覚も大丈夫らしい
早苗がお母さんに抱きついた時の勢いの反動をしっかりと感じた
そういえば今の僕ってお母さんよりも年上なんだよね？
年下の母親に抱きつく三十路の男……シュールだ。

味覚も共有してるらしい
あまり言いたい事でもないけど早苗の唾液の味を感じた
女の子の唾液の味を感じるって……とんでもなく恥ずかしい事をしている自覚は有る
意識したいとは思わないけど、どうやら全ての感覚は強制的に送ってこられるらしい。

色々と考えたけど、原因はこの体の持ち主が早苗だからだろう
僕が全てを感じられるのはきっと僕の精神の方が強いから
でも体は早苗、だから全ての感覚は僕も受け取らされる。

僕が意識に出た場合に早苗に感覚が無いのはその逆だからだと思う
僕の精神が強いから体の制御権は僕が持っているし
感覚も僕が強いから早苗まで届かないといった所かな？

さて……早苗には悪いけどまた泣いてもらおう
この事を全員に伝えて僕はできるだけ裏で過ごす
精神内で寝る事ができるか分からないけど、眠れるならできるだけ寝て過ごす。

早苗と意思疎通ができないのは問題だけど
早苗の意識が寝た後にでも体を借りて手紙でも書いて机の上にでも置いておこう
そうすれば一応僕の存在は感じてくれるだろうしね。

問題は早苗に拒絶されたら僕はどうなるか……だ
早苗の中から消滅するのか、それとも無関係に生き残るか……
今は関係無いか……さて、意識を戻そう。

視点　神奈子

早苗が先ほどまでの状態を全身を使って教えようとしている
しかしやはり子供、誰もよく分からないが怖かった事だけは理解できた
五感が無くなる感覚……そんな感覚は私とて味わいたくないな。

「さなちゃんね、何度も助けてーって言ったの！
でもでも真っ暗でね、それか……少しだけど体を借りるよ」

真苗か！？
あまりにも唐突すぎて驚いたぞ！

「あんまり長く借りてると早苗が泣くからできるだけ簡素に伝えます
早苗は僕が表に出ている間は五感が無いそうですが
僕は逆に五感が残ってるというか……強制的に感じさせられているみたいです
僕が色々と主導権を握ってるのは僕の精神の方が強いからだと思います
細かい事は八坂様と守矢様に全部丸投げするので後はお願いします」

「ちょっと待て真苗！
我らとてお前の事が分かっているのではないのだぞ！」

「時間が無いからそういうのは夜にしてください！
僕は早苗の意識が寝てから体を借ります
寝不足は体に悪いので精々一時間ぐらいで寝るつもりですが……

僕が体を明け渡すと意識すればこの体は早苗が動かせるようになるらしいです
早苗が僕が動かしている時に動かしたいと思っても動かないようですどうしてこうなったかは分かりません、きっと僕の年齢が上だったからだと思います
以上です、再び早苗に体を渡します
話しが有るのなら夜、早苗が寝た後に来てください」

真苗はそこまで一気に捲し立ててすぐさま意識を失ったらしい
真苗の顔が泣きそうになっており……これは真苗ではなく早苗だな
早苗は再び怖い想いをしたので泣き顔になっていた。

「ぐす……また……怖かった……うぇ……ひっく……ひっく……」

また泣いてしまったか……後は両親に任せよう
私と諏訪子はもう用は無いので部屋から立ち去る。

さて、色々と考えねばならんな
早苗の事、真苗の事、幻想郷の事、この先の事などな……
忙しくなりそうだな。

少年期編　三十話【呪い事件の報告】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

大妖精／大妖精

名前は変えようが無かったので変えていません
二つ名なんて知りません、出しようも無いので……

簡易特徴
霧の湖に縄張りを持つ強力な妖精
霧の湖周辺の妖精ではチルノ以外に負けた事が無いほどの実力派
美龍に喧嘩を売っては返り討ちにされている。

妖精には珍しい所か滅多にもいない戦いが大好きな妖精
大妖精が戦った中で最も強かった敵は妖怪賢者と言っている
しかし彼が紫々と戦ったという事実は知らされていないので本当かどうかは不明
だが紫々のスペルカード名を知っているので本当かもしれないという噂が一時流れたがすぐに沈下した
理由はチルノに負けるような奴が妖怪賢者と戦ったとは誰も思わなかったからだ。

戦いを嫌っている妖精の中で異端とて扱われていた大妖精
喧嘩三昧の毎日を過ごしていた時、同じく異端として扱われていたチルノと出会う
彼らは異端同士で引かれ合ったのか、出会った当日に親友と言えるような関係になった
その後、戦いを好まないチルノに嫌われないように戦う事を控え始

める大妖精
美龍に喧嘩を売る事だけは止められなかったようだが、戦う事を控えた為他の妖精とも少しだけ仲良くなったらしい。

しかし、他の妖精と仲良くなった為に悪戯をし始めた
大妖精は力が強かったので大事になりそうになる事も少なく無い
チルハはその度に大妖精を止めて怒っているが、暫くは落ち着くもすぐに我慢できなくなって悪戯はし始める大妖精の扱いに困っている
自分の行動を咎める事が苦手な大妖精にとってチルハな無くてはならない存在であり、そんなチルハを困らせるのは嫌なのだが、それでも自重できない
今日もまた、大妖精はチルハに怒られているだろう。

裏話【誰も知る事のできない男女の会話】（前書き）

これは三十話の裏として書こうとしたものです
裏の真苗の話しが終わらなかったので別にして書いたのですが
何故かかなり長くなったので完全に別にして投稿します。

追記
今回は三日に一話に含まれません
ですので十八日に三十一話を投稿します。

更に追記
前話で三日に一話と言いましたが、それでは三十一日になると二日、五日、八日となってしまして自分が混乱してしまいました……
ですので三の倍数の日に投稿する事にしました
常に三日、六日、九日、十二日、十五日、十八日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日に投稿します
一ヶ月で十話投稿する事になります。

何度も変更して申し訳ないとは思いますがご了承ください。

裏話【誰も知る事のできない男女の会話】

漆黒の空間……しかし、漆黒の中に巨大な瞳が存在していた
その瞳は上下左右、前方後方、全ての方向に数え切れないほどの数
近くに瞳があれば遠くにも瞳がある
普通の人間がこのような狂った空間を見て正気でいられるだろうか？
そのような疑問を考えさせられる空間……そんな恐ろしい空間に二人の男女がいた。

男性は日傘を持ち、白い服を基準とした洋服を着ており、前後に掛かる紫色の長い掛け物をしている
そのような派手ながらも落ち着いた印象を抱かせられる服装
女性も日傘を持っており、男性と同じように白の派手な洋服を着ており、紫色の長い掛け物を付けている
この女性も派手ながらも不思議と落ち着く雰囲気を醸し出している
二人は似たような雰囲気を持ちながらも、お互いに性別と態度がこの二人が別人である事を示している。

男性からは楽しそうな感情が発せられ
女性からは怒りに近い悲しみの感情が発せられている。

「君から見て『彼』はどう思う？」

「そうね……あの程度で博麗を名乗っていた事に驚きよ
よくあの程度の実力で博麗として送り出したわね
私なら恥ずかしくて絶対に無理、『彼女』は絶対にあの程度で終わらせないわ」

「くっくく……それは僕も同意見だったよ

僕だって『彼』があの程度の実力しか無い事に驚いた
『彼』こそ博麗最大の汚点にして最弱の存在だろうね」

男性はとても楽しそうに笑う
女性はその男性の姿を見て嫌悪の表情を滲ませる。

「ならどうして先代博麗にもう一人子供を産ませなかったの？
貴方なら『彼』が産まれた瞬間に才能ぐらい見抜けたでしょ？
私だってできるのだからね」

「そりゃ僕にもできるよ？　だけど僕はそれではおもしろみが無いと思ったんだ
博麗史上最弱の『彼』がどこまで頑張れるのか……それを眺めて楽しもうと思ったのさ」

「ふふ、貴方も悪趣味ね
私だって人の事を言えるような趣味はしてないけど、それでも言いたいわ」

女性は男性を小馬鹿にしたような態度で笑う
男性は自分が悪く言われたにも関わらず、変わらず笑顔でいた。

「だけど……僕の予想は当たった
『彼』は博麗史上最弱なのに見事幻想郷を守ってくれた
異変を解決し、外来人との衝突も上手く纏め、大物達にも好かれる
時々僕は『彼』が本当に最弱なのか疑問に思えてくるよ」

男性は相変わらず楽しそうに『彼』となる人物を評価する
その姿はまるで子供のように楽しそうだった。

「そうね……『彼』がそうなのだから『彼女』もそうなるのかしら？」

「どうだろうね？
既に僕の世界と君の世界は大きく異なっているんだ
先ず『彼』が居るだろう？　『彼』に使い魔まででてきてしまった
僕の世界にはあの使い魔は登場していない
君の世界にだけ登場した使い魔……随分大きな差じゃないか」

「あの吸血鬼の子だってそうじゃない
貴方の世界では異変後に出てきたのに私の世界では十年も早く出てきたのよ？
これには私も随分驚かされたわ」

女性は驚いたと言っているが、それは言葉だけの驚き
女性に顔も声も感情も驚いたなどと一言も言っていない
女性の感情はただ一つ、楽しい……ただそれだけ。

「それにしても……本当に良かったの？」

「今更な事を訊くんだね……」

女性の主語の無い言葉に、男性はその意味を捉えて返事をする
お互いに信用しているのか、信頼しているのか……それとも性格や考え方が似ているだけなのか
いずれにせよ、彼らの中では当然のような会話らしい。

「楽しそうじゃないか！
主要人物が男性ばかりの世界に居たのに、突然主要人物が女性ばかりの世界に放り出される！

『彼』は僕が珍しく気に入った人物なんだ！　簡単に死なせるなんて勿体ないよ！」

男性はこれ以上愉快な事は無いと言いたげに話す
大袈裟に両腕を広げ、とても楽しそうに笑っている。

女性はそんな男性の姿を呆れたように眺めるも
女性自身も楽しそうにしているので同じような趣味だと思われる。

「貴方が楽しむ為だけに『彼』は生かされたのね……可哀想に
娘ができたんだから全部そっちに押し付けたらいいのに、何故そうしなかったの？」

先ほどまで楽しそうにしていた女性が可哀想などと言っても説得力は無い
それでも本当にそう思っているように感じるのは女性の演技なのか
それとも一瞬だけ考え、すぐにその感情を破棄したのか……
どちらにせよ、この女性の場合期待するだけ無駄だろう。

「代々博麗の霊力量が異常なのは知ってるだろ？
『彼』は才能も実力も屑だったけど霊力量だけは博麗史上最上級だからね
どうせだから娘が完成するまで暫く肩代わりしてもらう事にしたんだ」

「なるほどね、『彼女』の霊力とは比べものにならないほどの霊力を持っているものね
多いのは知ってるけど具体的にどれぐらいの量を持ってるかは知らないけど……
博麗大結界を維持する為に博麗の霊力の五割を送らなければならない

年に数ヶ月霊力を送る事を休ませないとならないから冬眠をして私達が補う
『彼』にはその休みを取り除いても有り余る霊力があるのね？」

「そういう事だ
歴代の博麗の霊力を五割づつ持っていき、更に僕達の霊力も時々食わせる
それでようやく保てる博麗大結界を『彼』は個人で維持できるんだよ？
しかも世界を跨いでるから消費量は倍増してるのに平気な顔をしているんだ
『彼』こそある意味化け物だと思わないかい？」

女性は男性の言葉に唖然とした表情になる
この女性にしては珍しく、この表情は本当に唖然としているのだろう
女性にとって男性が言った事がどれほど非常識なのか理解したようだ。

「何よそれ……博麗の異常な霊力と私達の巨大な霊力で初めて維持できる博麗大結界
それを個人で維持するなんて……元々異常な博麗の中でも更に異常だって言うつもり！？」

女性の叫びに男性は無言で頷く
女性はその男性の態度に膝を落とし、尻餅を着いてしまった。

どうやら彼らはこの空間で立っていたようである
床も見えない空間でどうやって立っていたのかは不明だ
しかし尻餅を着く彼女からすれば床らしき物が有るのは当然の事らしい。

「悪夢よ……私と貴方、藍（らん）、幽々子、萃香、映姫様、天魔
レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット
蓬莱山輝夜、八意永琳、風見幽香
この大物達全員の霊力を合わせてようやく互角の総霊力？
は……あはは……こんな事、こんな事！　悪夢以外ありえないわよ
！」

女性の叫びが辺りに響き渡る
しかし、その叫びを聞く事ができるのは声を出した当人である女性
残りは一緒に居た男性の二人だけだった。

「『彼女』とて僕と君、藍（あい）とレミレア、フラムドール、映慈（えいじ）様
この六人の霊力を合わせた霊力と互角
単純に人数だったら『彼』は『彼女』の倍だね
総霊力で言うならば倍以上だけど」

「理不尽よ……私達だって妖怪の中では最上級の霊力を持っている
のよ？
私一人でもそこらの妖怪の数十倍もの霊力を持ってるのよ？
なのに『彼』はその私の数十倍もの霊力を持ってるのよね？
どこの突然変異よ……泣いてもいいかしら？」

女性は泣きたいなどと言っているがどう見ても演技である
そもそも涙目にもなっていない女性が泣くつもりが無いのは明白
でも悲しそうな顔を見る限り、泣けるのなら泣きたいと思っている
のかもしれない。

「で、本音は？」

「霊力だけの雑魚は全く怖くないわ
悲しくなったのは本当だけどね」

「僕も同意見だよ
『彼』という存在は宝の持ち腐れさ
だったら使える範囲で使ってやるのは親切ってもんだろ？」

「そうね、どうせ子供になっているんだし
子供になった副作用とでも勘違いさせておけばいいのよ……」

拗ねたように言う女性に男性は苦笑する
自分に似た者でも拗ねるような女性は可愛らしく見えるようだ。

「少なくとも僕は今楽させてもらってるんだ
娘の方の霊力が安定したらこちらの博麗大結界にも霊力を送らせよう
娘も『彼女』も霊力が増えてくるだろうし、『彼』の霊力も新たな
成長期に更に増大するだろう
そうなれば『彼』一人で僕らも娘も『彼女』も楽になれるかもね」

「少なくとも『彼』が死ぬまでだけどね
一世紀ぐらい楽になるなら十分よ
私も楽したいし、毎年数ヶ月も霊力を奪われるのを我慢するもの大
変だし
私達の為が楽になる為にも、娯楽になる為にも
『彼』には長生きしてほしいわね」

「そうだね……その為に力を付ける為の環境にしたんだから」

人一人の人生を娯楽にしようとする女性
それに賛同する男性

この二人にそのような権利が有るのだろうか？
それとも……この二人は人間をそのような対象にしか見ていないのだろうか？
どちらにせよ、彼らの行う事を止める術は無いのだが……

「紅魔館……吸血鬼に魔法使い、妖怪に妖精が住む悪魔の館
知識の多い魔法使いに武闘派の妖怪
確かに力を付けるには丁度いい場所よね
あらゆる面に対応できる紅魔館……そこにあの人間も入るのよね？」

「うん、あの能力まで保有する紅魔館は本当に厄介だと思うよ
だからこそ、力を付けるのには丁度いいと思わないかい？」

「ええ、そう思うわ
これからどうなるのか……本当に楽しみね」

「本当、楽しみだね……紫（ゆかり）」

「ええ……そうね紫々（ししし）」

彼らは楽しそうに笑う
長生きする彼らは常に娯楽に飢え、楽しい事を探している
彼らに捕まったのは一人の人間
この人間の生きる道を見て楽しむ彼ら
彼らに選ばれた人間に幸が有る事を祈る……

裏話【誰も知る事のできない男女の会話】（後書き）

『彼』の霊力ってそこまで多いの？
多いです、ですが作中で話している通り、宝の持ち腐れなのであまり関係ありません。

『彼』ってあそこまで言われるほど弱いの？
才能、能力を言えば博麗最弱というのは紫々の言葉
しかし戦闘は能力や才能で決まる事では無いので一概に最弱とは言えない
技や工夫でいくらでも差は生まれるのが、今回紫々が言っているのは才能などの事なので最弱というのは間違っていない。

博麗の設定ってどうなってるの？
異常な霊力を持っている博麗大結界を維持する一族としています
原作で紫が冬眠するのは博麗大結界の維持で無意識で疲れている『彼女』を休ませる為としています
紫々の場合は夏なだけで同じ理由で休ませています
紫や紫々が冬眠などをする理由は起きていては霊力が足りなくなってしまうからです、僅かな霊力も無駄にできないので紫達は動く事ができません
しかし『彼』の霊力が異常に多いので今代の博麗を休ませる必要が無く、紫々にはあまり関係ありません
なお、『彼』が死ぬと霊力がまだ安定していない娘に大結界の制御権が移るので霊力が全く足りず、紫々は十年ほど寝たきりになります。

紫や紫々の性格悪くない？
作中にも書きましたが長生きしていて娯楽に飢えているんです

紫々はお気に入りに『彼』が早死にする事を惜しみ、ついでに自分の娯楽にもなるという理由で紫の世界に飛ばしました
紫には事後承諾ですが、楽しそうだと思い自分も『彼』を眺めて楽しむ事に決めたそうです。

少年期編　三十一話【呪い事件の終わり】（前書き）

今回はカタカナを少し使っています
主に服に関する事なのでどうしようもありませんでした
スカートとかひらがなとか変だし漢字なんて知らないし……

カタカナは極力使わないを目標にしていましたが、服に関しては挫折しました
微妙な言い回しをしても良かったのですが、想像し辛いかと思い中止
そういう訳ですので服に関しては今後もカタカナを多用すると思われます
正直どうでもいいとか別に原作でカタカナ使ってるんだしいいじゃんと思われるかと思いますが……
この作品ではカタカナの使用を控えているので自分で気になって違和感を感じたんです
全く持ってどうでもいい話しでしょうがご了承ください。

少年期編　三十一話【呪い事件の終わり】

逆偽鏡の世界

少年期編　三十一話【呪い事件の終わり】

視点　戒魔

さて、フランドールの部屋から出たのはいいが……
レミリアが見当たらないな
そういえばレミリアってこの時間は何をしてるんだ？

元々夜型で今は深夜の三時前頃
夜明けが近くなってきたから食事か風呂かな？
例え会えなくても適当な部屋に勝手に入って寝ればいいか。

そんな事を考えながら一応レミリアの食事部屋に向かう
一応説明しておくと妖精達が使うのが食堂
レミリアや俺達が食事をする場所は食事部屋と呼ばれる場所だ
当主が部下やメイドと食事をするなんて変だから個別場所を作ったとかなんとか。

パチュリーはそもそも食事を必要としないし、食事をしても自室で食べるから使わない
美鈴は門番隊の妖精と食べる事が多いので食堂で食べる

二人があまり使わないからレミリアと俺、ナズナの三人ぐらいしか利用しない部屋だ。

試しに食事部屋を覗いてみるとレミリアが居た
どうやら食後でのんびりと紅茶を飲んでいるだけらしい
妖精ではあまり美味しい紅茶を飲めないから自分で紅茶を淹れるレミリア
しかしそこはやはりレミリア、紅茶を淹れるのはあまり上手ではない。

そう考えると刹那はどうやって紅茶の淹れ方を知ったんだ？
レミレアも下手って聞いた事が有るし……パディか本で覚えたのだろうか？

こっちの刹那がどう覚えるのかを見た方が早いか
刹那の事を考えても答えは誰からも貰えないんだしな。

とりあえず紅茶を淹れるのに苦戦しているレミリアの為に紅茶を淹れてやろう
下手では無いが上手いとはお世辞にも言えない手つきで頑張るレミリアを助ける為
ついでに脅かす為にも静かに部屋に入り、レミリアに近づく。

「こんばんはレミリア、そんな淹れ方じゃ紅茶は美味くならないぞ？」

「こんばんは戒魔
戒魔は紅茶の淹れ方を知ってたわね？
私の為に一杯淹れてくださらない？」

どうやらレミリアは俺に気付いていたらしい
当然といえば当然だろう、相手は齢五百になるような吸血鬼
俺のような三十程度の子供の相手ぐらい楽だろう。

俺は苦笑しながらもレミリアの為に紅茶を淹れる
ついでに自分もの分も一杯淹れておく
すぐに寝るつもりだがなんとなく飲みたくなった。

時間にしてほんの数分、俺の前には紅茶が二杯
レミリアの分には少し甘めに砂糖を加えておいた
俺のには何も入れない、俺は何も入れず飲むのが好きなのだ。

「ほら、不味くはないと思うぞ
凶悪執事、刹那から直々に鍛えられたんだ
不味いかったらまた紅茶を淹れる練習しないとな……」

こっちに来てから何度も紅茶を淹れてるが、それでも不安が去らない
時々失敗して恐ろしく不味紅茶を淹れた時は焦ったな……
あの時は練習台としてレミレアの飲んでもらったが、レミレアが倒れてしまった
刹那には厳しい説教をされたっけな……泣きそう。

「戒魔の淹れる紅茶が不味かった試しは無いわ
……うん、美味しい」

そう言われると安心するよ
そう思いながらも自分も一口……そこそこかな?
少なくとも刹那の淹れる紅茶より美味いなんて言えない。

「で、私に何か用が有ったんじゃないの?

こんな真夜中なんだし……夜這いにでも来た？」

「寝言は寝て言え、そんな事を俺がすると思うか？
用とは俺の部屋以外にもう一部屋部屋を貸してほしいんだ」

更に言うと夜這いは寝ている相手にする事だ
起きているレミリアに対して夜這いなんてできるはずが無いし
そもそもそんな事をする気も無いが、したら追い出されるのは目に見えている
そんな危険を冒して夜這いをしようとなんて考えにも出ないな。

即答で断るレミリアは少し落ち込んだような感じがした
だがそんな事をしていないとでも言うようにすぐに元の調子に戻る。

「部屋を？　構わないけどどうして？
更に言うなら別に新しい部屋なんて借りないでもナズナの部屋じゃ駄目なの？」

先ほどの呪いの件知らないレミリアに簡単に説明しておいた
話した内容はフランドールが教えてくれた事も含めて言っておいた
話し続けると同時にレミリアの顔が段々と硬くなっていく……
この顔を見る限り……もしかして何かを知ってるのか？

先ほどの表情が気になったのでレミリアに訊くべきだろうが
訊いたら何か別の問題が起こりそうな気がする
しかし訊かない事には何も分からない、俺は諦めてレミリアに事情を訊く事にした。

「レミリア、先ほどから顔が引き攣っていないか？
何か知ってるなら教えてくれ、今回の件で俺も考えなければならな

い事が多いからな」

ナズナの躾け、今後の対応、チルノへの謝罪もしなければならないし
今回の事は俺自身も反省しなければならない事が多い
新しく反省する点が有るのなら反省しなければならないのだ。

「その……実はー……ナズナに呪いの道具を渡したのって私なのよ
呪いの実験をしたいんだけど材料が足りないって言われて……ね？」

……いや、駄目だ俺
レミリアはナズナに頼まれて準備しただけだ
だからレミリアは悪くない、レミリアに怒るのはただの八つ当たりだ
落ち着け俺、深呼吸をして落ち着くんだ……

「何をするのか楽しみにしてたけど……こんな事をするとは思わなかったわ
まさか八つ当たりに使われるとは全く予想できなかったもの
私としては主人の戒魔や厳しくしているパチェ辺りに何かすると思ったのに……
期待外れで残念だったけど予想を外されたから楽しかったわ」

レミリアからすれば単なる喜劇か……これは怒ってもいいのだろうか？
だが元々暇潰しという感じで俺達を置いてくれてるんだしな……
レミリアの娯楽になるならこれぐらい我慢するべきか。

「そうそう、部屋だったわね
開いてる部屋なら好きに使っても構わないわ
掃除と片付けぐらいは自分でしてもらうけどね」

なんだかんだと言ってもやはりレミリア
言わねばならない所は必ず言ってくれるな
少し負けた気分になるからこれ以上考えるのは止めよう
眠いし……疲れてるしな。

「わかった、じゃあ俺は寝るよレミリア
ナズナの処分は俺が決めていいんだよな？」

「構わないわよ、確かに事を起こしたのはナズナだし紅魔館の中の出来事よ
でもそれ以前にナズナは戒魔の使い魔だもの、貴方が躾けるべきよ
主人らしく、真面目に考えなさい」

「……そうさせてもらうよ
おやすみレミリア」

「ええ、おやすみなさい」

相変わらず俺が欲しい答えを言ってくれる
レミレアにしろレミリアにしろ、相手が望む答えを言ってくれる
悩んでいる時に相談する相手としては良い相手だろう。

彼女達は誰かの上に立つ存在
向こうの他の当主達全員にも共通する事だが上に立つ者は強い
力は勿論心も強い、あいつらにも悩みは有るだろうけど決してそれを悟らせない
俺には到底無理な事、居なくなって改めて尊敬できる奴らだと思うよ……

レミリアと別れ、空き部屋を探すのだが……見当たらない

妖精メイド達も夜中に行動している者は多くないので同じく見当たらない
結局、俺は妖精メイドが見つかるまで歩き回り、寝る頃には朝日が昇る時間だった
と、だけ言っておこうと思う。

視点　大妖精

私はチルノちゃんが寝ているお布団の近くで看病している
看病といっても特にする事は無い、強いて言うのなら……様子を見ているだけかな？

今回の事は正直に言ってかなり驚いた
今まで呪いという物を見た事が無かったけど、こんなに怖い物だとは……

そんな事よりも心配なのはチルノちゃん
今回の事を反省しておとなしくしてくれればいいんだけど……
そう都合良く行くとは思えない、理由はチルノちゃんだからという言葉だけで事足ります。

どうしよう……別にチルノちゃんが痛い目に遭うのは構わないだけど、それが今日みたいに私の前で起こるのは嫌……
悲しいし……怖い……見ているだけでも痛々しい。

どうすればチルノちゃんはおとなしくしてくれるだろうか？
色々と考えたけど思い浮かばなかった

やっぱり妖精程度の頭じゃこの程度が限界か……

自分で言うのも何だけど妖精の頭は悪い
他の妖精より力を持っている私でも人間の子供より少し上程度の頭
それに考え事をしていても簡単に逸れてしまう物覚えの悪さ
どちらにしても妖精の自分が恨めしく思ってしまうのは仕方がない
事だと思う。

……おっと違う違う
今私が考える事は妖精の事じゃなくてチルノちゃんの事だった。

えっと……そう、どうやったらチルノちゃんをおとなしくさせられる
るか
でもやっぱり思い浮かばない……私って駄目妖精!?
そんな事無いはず、そう思わないと辛くなっちゃうから考えたら駄
目!

じゃなくって!
そう! どうしてチルノちゃんはおとなしくしてくれないのか!
……あれ? 何か違う気が……まぁいいや。

戦うのが好きだからかな?
だからチルノちゃんって他の妖精達から嫌われてるし……
誰かチルノちゃんを止められるのはいないかな?

この辺りの妖精でそれができるって……私?
いやいやいやいやいや、私がチルノちゃんの面倒を見るの?
それってすっごく大変だろうし……ん? またずれてる気がする。

うーん……確かチルノちゃんをおとなしくさせる方法だっけ?

殴ったらいいのかな？　それだと仕返しに冷やされて寒いから嫌だなぁ……
叱るとか？　でも大きな声で煩く叫きそうだし……何よりも面倒
何か良い案とか無いかなぁ……

そうだ！　さっきの頭の良さそうな人に訊いてみよっと！
そうと決まれば……ぜ……ぜ……全速は急げだっけ？
とにかく……と……都会館？　だったと思うけど行こっと！

……迷いました
さっきの男の子が一緒だったから来れた事に今更ながら気がついた
戻るのも無理、先に進むのも無理……どうしよう？

「あら？　さっきの妖精じゃない
そんな場所で何突っ立ってるの？
私が歩くのに邪魔だからどいてほしいんだけど」

「あ、はいすみません……って、さっきの紫の人？」

「……私にはパチュリーって名前が有るのというか、どうしてこんな場所に居るの？
戒魔が部屋に連れて行ったと思うんだけど」

棚から骨落ちとはこの事でしょうか？
私の探していた頭の良い人に会え、更にもしかしたら案内もしてくれるかもしれない
貴女を捜して迷いましたって言えばきっと案内してくれる……と思うし。

「その……実はチルノちゃんをおとなしくさせる方法が知りたいん

です
何か良い案が有れば教えてもらえないでしょうか？」

「……あぁ、今回の事はあの妖精が最初の原因だったわね
そんな暴走を今後はしないようにしたい
けど何も思いつかなかったから私に頼ってみた
そんな所かしら？」

「は……はい……その通りです」

本当に頭がいい人なんだ……さっきのだけで分かっちゃうんだもん
こういう人の事を頭が捻るって言うのかな？
人間のこと……ざわ？　だったっけ？
えっと……人間のことざわって何でも簡単に当て嵌める事ができる
から凄いよね。

「そうね……一応精神安定の魔法ならあるけど？」

「そんな魔法があるんですか！？」

無駄かと思いましたけど言ってみるものですね
まさか教えてくれるとは思いませんでした。

「教えてもいいけど……私の頼みを聞いてくれない？」

「はぁ……私にできる事ならいいですけど」

やっぱり簡単には教えてくれないか
急がば止まれっていうし、簡単な事なら素直に引き受けよっと。

「図書館の掃除をお願いしたいのよ
最近する事が多くて掃除してなかったの
私って喘息も患ってるし……掃除ができないからね」

「まぁそれぐらいでしたら構いませんが……
ちゃんと教えてくださいね？」

「ええ、約束は守るわ
魔法は掃除が終わってからでいいわね？」

「はい！」

こうして私は都会か……じゃなくて図書館の掃除をする事になりました
後日、図書館の広さにこの選択を後悔したのは言うまでもありません。

続く

元世界編　新十一話【育児に休日なんて無い】

視点　砲魔

霊夢の面倒を見始めて約三ヶ月になる
色んな奴らに助けて貰いながらも、霊夢の世話を毎日続けてるが……
そろそろ限界だ、空を飛び回りたい……自由に飛び回りたい。

そう、今の俺にはそんな体力が無い
霊夢の世話に追われて余裕が殆ど無いんだ
俺に有る余裕は自炊生活をするぐらいだ。

ここの所全く読書もしていない
暇ができれば休むのが最初だからな……
当然ながら研究や実験なんて全くできない。

戒魔はもっと大変だった零歳の時から霊夢の面倒を見てるのか

今なら戒魔を尊敬できる……当時は軟弱だとか言って悪かった
もし会えたら謝らせてくれ……俺では面倒を見きれない。

三日……三日だけでいいから自由に遊びたい
そしたら頑張れそうだから……だから頼むから誰か助けてくれ……

「何縁側で黄昏れてるの？」

「あー……アルスか」

霊夢が寝たのでゆっくりと休んでいる所へいつの間にかアルスが来ていた
今日は来るって話しは無かったと思うんだが……どっちでもいいやもう疲れて考えるのも面倒になってきた。

「疲れた……三日でいいから霊夢の面倒を見てくれないか？
それ以降は頑張るから、だから三日だけ霊夢の事を頼めないか？」

「突然何を言い出すのさ？
僕は霊夢の面倒を見る為に来たんじゃないよ？
更に言うと僕に面倒を押し付けない」

「なら誰に頼めって言うんだよ……というか、その人形は何だ？
お前の普段使ってる人形と違って随分少女趣味な人形だな」

アルスは普段使ってる人形とは全く違う人形を持っていた
数は三体、全部同じだが黒い服に黒のスカート、肩には白のスカーフが掛けられている
髪の毛と首には赤いリボンも付いていてエプロンを掛けた金髪で青い瞳の女の子の人形

全長は人の顔ぐらいの大きさの、完全に女の子が好みそうな外見をした人形だった。

「普段お前が使ってる無骨な白と黒の兵士人形はどうしたんだ？
あの人形はお役ご免って事で少女趣味にでも目覚めたか？」

「勝手に決めるな
この人形は霊夢に喜んでもらおうと思って作ったの
更に言うとこれは試作品、女の子型の人形なんて初めて作ったんだ
この髪の毛に何時間掛けた事か……納得がいくまでしたから僕も疲れた」

お前の拘りなんてどうでもいいってのは
というかここ最近姿を見せないと思ったらそういう事か
まぁ魔法使いは拘りを捨てたら終わりだし、多めに見てやろう。

「そういう訳で霊夢に見せようと思ったんだけど……
砲魔がこんな場所で休んでるって事は寝てるんだね？」

「ああ、寝てから二時間ぐらいだから多分そろそろ起きる
だから霊夢を三日間頼んでいいか？」

「話しが繋がってないって……
まぁそうだな……僕一人で三日ってのは無理だけど
他の誰かに残りの二日を頼めるなら一日だけ面倒を見てあげる」

「本当か！？　残り二日面倒を見てくれる奴が居たら引き受けてくれるんだな！？」

「あぁ……うん、まぁ……いいよ

（安請け合いなんてするんじゃなかった……）」

よし、決めた！
次に来た奴に土下座してでも頼んでやる！
絶対に逃がさねぇ……頼めそうな奴だったら絶対に引きずり込んでやる！

「もしかして……何か失敗してしまったかな？
砲魔の奴が妙に燃えてるし……
捕まった奴にはご愁傷様とだけ言っておいてあげよう」

くくく……さぁ早く来いよ？
俺の為に働いてくれ！

少年期編　三十一話【呪い事件の終わり】（後書き）

そういえばレミリアって何歳？
現在原作十年前なので四百九十歳かと……原作紅魔郷で五百歳丁度でしたし
ついでにフランドールは四百八十五歳になります。

レミリアがナズナに呪いに必要な道具を渡したのっていつ？
細かい事は書いていませんが、以前本編でナズナがレミリアなら必要な道具を持っているかもしれないと言っています
それ以降で、更にフランドールがナズナを監視し始める前になります。

大妖精は記憶力が悪い？
妖精という前提を忘れてはいけません、妖精は種族として頭が悪いのです
大妖精だけ例外という事をするのは嫌でしたが、二次設定の印象がどうしても拭い切れなかったので中途半端に……できるだけ拭い取って妖精らしさを出したと思いたいです。

なお、大妖精が間違えた言葉ですが……
「全速は急げ」→「善は急げ」
「都会館」→「図書館」
「棚から骨落ち」→「棚からぼた餅」
「頭が捻る」→「頭が切れる」
「ことざわ」→「諺（ことわざ）」
「急がば止まれ」→「急がば回れ」

チルノって今どうなってるの？

戒魔の部屋で熟睡しています、妖精は特に睡眠が必要ではありませんが休養として寝ます
チルノは体力の消費が激しかったので暫く起きられません
痛みを抑えて時間を守るか、時間を消費して痛みを押さえるか……
どちらが正しい選択かと問われれば妖精なら後者だと思いました。

アルスの新しく作った人形って？
原作萃夢想、非想天、非想天則に出てくるアリスと一緒に居る人形の事です
ただ服の色が紺色なのか黒なのか微妙だったので黒にしました
上海人形とか蓬莱人形とか細かくて覚えるのが疲れました
アルスが使用する女の子の人形は今後もこの人形で統一します
我が輩はアルスの新人形、名前はまだ無い……という感じなので名前、考えておきます
なお、原作アリスの使用人形の名前にはしません。

砲魔の言うアルスの白と黒の人形って？
アルスはアリスと違って上海人形、蓬莱人形、倫敦人形（以下略）は持っていませんし使っていません
アルスとアリスは使う人形が違います
もしこの二人が顔を会わせればお互いにこう思うと思います
アルス「人形にあんな派手な衣装を着せるとは……趣味が悪い奴」
アリス「あんな無骨で寂しい人形を使ってるなんて……悪趣味ね」
とか想像していたり……とりあえずアリスとアルスはお互いに使う人形が違うという事です
アルスの使う人形は今後登場しますが、今は秘密という事にさせていただきます
もし感想などで予想を言われても一切お答えしませんので……あしからず
……答えを言わないだけで返事は必ずしますよ？

少年期編　三十二話【紅魔館にお泊まり妖精】（前書き）

今回を書くにあたって新九話を少し書き替えました
具体的には鈴崔の言葉が変わっています
内容自体は特に変わっていませんが一応読み返しておいてください。

少年期編　三十二話【紅魔館にお泊まり妖精】

視点　フランドール

戒魔の使い魔が妖精を呪った翌日……といっても時間だけを言えば今日の事
私とお姉様、戒魔と使い魔、妖精二匹が戒魔の部屋に集まった理由は言うまでもなく昨夜の話しをする為よ。

美鈴は門番の仕事が有り、あまり関係が無いので呼ばなかったパチュリーは面倒とか言いそうだったから無視した。

で、集まる必要は無いと思うんだけど……
戒魔が使い魔共々迷惑を掛けた事を改めて謝るらしいわ
美鈴とパチュリーには私達が寝てる間に謝りに行ったそうよ。

使い魔は数時間説教されたらしいので既にかなり疲れている
元々弱そう……というか本当に弱いんだけど、なのに疲れた顔をしてるから酷い顔……
女の子なのにそんな顔は駄目だとお姉様が言い出して強制的にお風呂に放り込まれた
更に疲れたと思うけど、お風呂で精神的に休めたみたいだから少しは良くなってたわ。

それが終わったのがつい先ほど、今はこれから謝ろうとしている所ね
後……気付いてるとは思うけど今は夜よ

「さて……言いたい事は多いと思うけど、今は私が仕切るわ

戒魔もナズナも構わないわね？」

「ああ、レミリアだったらこういう役も任せられるしな
そもそも、原因である俺達が仕切るのは無理な話だ」

「それもそうね、なら改めて宣言しておくけど
この場は私が仕切るから、私に許可無く勝手な事はしない事ね」

「……私は何も言ってないんですけど？」

「大ちゃんはまだいいじゃん
あたいなんてさっき起きたばっかだから何が何やら……」

いきなりで悪いわね
でも早い内にしておかないと使い魔が謝らずに貴女達が帰ってしまうでしょ？
そうなると戒魔が悲しむから諦めてちょうだい。

妖精達は騒々しくなってきたのに使い魔は相変わらず無言のまま
戒魔が言うには妖精に謝るのが嫌みたい
戒魔に怪我をさせた相手に謝るのが気に入らないとか……

「順序を立てて説明しようと思うわ
私が話しを言っていくから、間違ってたりしたら言ってちょうだい
先ずはこの件の原因と切欠から話しましょうか……」

お姉様は順序立てて状況を説明していく
当主として話し上手になったのか、お姉様の言葉は理解しやすかった
所々戒魔が補足したりしながら話しを進める。

戒魔の補足とお姉様の話術により、全員がどういう事か理解できた
私としても色々と再確認できたので助かったしね
というか……使い魔は私が話す事だったのに戒魔が全部話して言う
必要が無かったわ
私って居る必要が有るのかしら？

「……やっぱり元々はあたいが悪いの？
あたいの攻撃が妖精メイドに当たりそうになったから？」

「否定はできないけど貴女は悪くないわ
確かに戒魔を怒らせる原因を作ったのは貴女
だけど怒りに任せて強者に喧嘩を売った戒魔も悪い」

「レミリアの言う通りだ、弁解なんてする気は無いが何も言えないな
あの場で俺の取るべき行動は理解してもらえるかどうかなんて置いて
ておいて
何故俺が怒ったのかチルノに説明するべきだった
悪かったなチルノ、いくら怒ったからといっても喧嘩なんて売って」

「うんん、あたいもごめん
まだ何で怒ってるのかよくわかんないけど
もう紅魔館ではめーりん以外に勝手に攻撃しない
これでいいの？」

「美鈴にも勝手に攻撃しないようにな？
でも、一言言ったから攻撃なんて駄目だぞ？
戦いたいなら相手に同意を求め、相手が同意した時にだけにしよう
な？」

「うん、わかった戒魔！」

うーん……戒魔って何でこんなに子供の世話が上手なのかな？
子供というか……妖精だから？
そういえば妖精メイドの中で戒魔を慕ってる者はそれなりに居るって話しを聞いたことが……
戒魔は妖精に好かれる体質なのかしら？

それとも単に子供に好かれるとか？
青妖精や妖精メイドはともかく、私やお姉様も戒魔の事を慕ってるし
子供体型に好かれてるのは気のせいかしら？
美鈴もパチュリーもまだ完全に警戒は解いてないし……
まぁそれは私達が戒魔の事を教えないからだけどね。

戒魔と青妖精の件が解決したから次は使い魔と青妖精ね
この場合は完全に使い魔が悪いので弁解の余地無し
頑張って戒魔の機嫌を損ねないように気をつけなさいな。

「ほらナズナ、今回は八つ当たりをしたお前が悪い
俺の事を想って頑張ってくれたのは嬉しいが、お前が悪者になったら意味が無いだろ？
ナズナはまだ子供だから善悪がまだ分からないかもしれない
だから今回の失敗を教訓とし、次からまた頑張ってくれ」

「ご主人様……私は……わた……し……」

「でも、俺の為に怒ってくれてありがとう
また一緒にこれから頑張っていこうな？」

「……はい、ご主人様！
これからもよろしくお願いします！」

使い魔の言葉に戒魔は笑顔で使い魔の頭を撫でる
使い魔は一瞬だけ驚いたような顔になり、泣きそうだった顔を真っ赤に染めながらも喜んでいる
純粋というか素直というか……呪術を使うって言った時は怖い顔をしてたのに
今ではこんな可愛い顔ができるなんてね。

それにしても……これがパチュリーの言っていた戒魔の誑し術ね
こんな事を言われて何も思わない奴が居るのかしら？
私は他人との会話の経験が少ないからよくわからないけど
こんな事を言われたらきっと嬉しいと思う……

というか、これって結婚の申し込みの言葉って感じがしないかしら？
凄いわね戒魔……無意識にそんな言葉を言える
戒魔には羞恥心というのが無いのかしら？
もしかしてこういう時にだけ発揮されない都合の良い羞恥心とか？
冗談でも笑えない……でも本当だったら大爆笑してしまうかも。

そんな事を考えている内に使い魔と青妖精は和解してるっぽい
戒魔に慰められてあんな言葉まで言われたから素直になったのかしらね？
あんなに謝る事を嫌がってたとは思えないほどに素直になった使い魔だったわ。

そしてその様子をおもしろくなさそうに見ている緑妖精
あの子の感情は多分青妖精が簡単に許したのが気に入らないだけど戒魔の前で泣いている使い魔を見て、更に素直に謝罪されたから怒るに怒れない
自分の感情を持て余しているといった所かしら？

「なんか呆気ないけどこれで解決かしら？」

「微妙だな……俺としてはこれ以上何かをしたいとは思わない
強いて言うならチルノの体力はまだ万全じゃない
後二、三日は休んだ方が良いと俺は思う
だからレミリア、チルノと大妖精に部屋を貸してやれないか？
いつまでも借り部屋とはいえ、男の俺の部屋に女の子を寝かせるのも悪いしな」

「む……それは確かに問題ね
二人一部屋で構わないなら貸してあげるのは吝かではないわ
それでどうするのかしらお二人さん？
私としては我が館に住む者が迷惑を掛けたのだから詫びという形で泊めてあげる
戒魔の言う通り体力が戻ってから外に出ても問題無いでしょ？
暫く遊べないとはいえ、妖精の寿命なんて無いに等しいんだしね」

お姉様の言葉に妖精達は顔を見合わせる
青妖精は遊べないのは嫌だけど疲れてるから休みたい
緑妖精は悪魔の館と呼ばれる紅魔館に泊まるのが怖い
だけど青妖精だけを泊めては何が起こるか分からないから心配
そんな所だと思うのだけど……少し違う気もするわ。

妖精達は顔を見合わせたままなかなか動き出さない
お姉様は妖精達の返事をゆっくりと紅茶を飲みながら待っている。

お姉様が紅茶を飲み終えた時、緑妖精がお姉様の方を向いた
吸血鬼であるお姉様の真っ正面から向き合う緑妖精
戦いを嫌う妖精とは思えない心の強い妖精なんて珍しいわね

大半の妖精は小心者、お姉様自身が提案した事とはいえ妖精が簡単に話せる相手では無いのだ。

「チルノちゃんの為にそのお詫び、お受けします
ただ、私は図書館の魔法使いさんとお話したいのですが……構いませんか？」

「パチェと？
構わないけど……突然会いに行っても追い返されるだけよ？」

私もお姉様と同意見、突然の訪問者をパチュリーはそう簡単に許したりはしないと思う
自分の時間を削られる事を嫌うパチュリーが高が妖精一匹を相手にするはずが無いわ
そう思ってたんだけど……

「大丈夫です、昨夜偶然お会いできまして
私が図書館のお掃除をすれば魔法を一つ教えてあげるって
そう言ってくれたんです」

図書館の掃除って……私は自分の顔が引き攣るのを自覚した
お姉様や戒魔も似たような顔になってただろうが、そんな事はどうでもいい
あの広い図書館だ、パチュリーは断る為の言い訳のつもりで言ったんだと思う
けどこの緑妖精、頑張ろうという気持ちが伝わってくるぐらいに元気がある
これは図書館の広さを知っても頑張るんじゃないかと思うわ。

お姉様は私達より一足先に正気に戻ったらしい

緑妖精に激励をし、少し哀れみの持った顔をしていた
無知を哀れむような顔に緑妖精は困惑しながらも頑張ると言う
ま、大変だろうけど精々頑張りなさい、どんな魔法を知りたいかは
知らないけどね。

「戒魔達はどうするの？」

「俺達は相変わらず鍛錬と勉強を続けるさ
後はチルノが暇にならないように話し相手になったりとかかな？」

「あら、当主である私よりも妖精を優先するつもりなのかしら？
私の話し相手になるのは貴方がここに住むと決まってから毎日のよ
うに続けてきたじゃない
だからそれを欠かす事は許さないわ」

お姉様……不機嫌になってるけど全く怖くないわよ？
今のお姉様は親に構ってほしいけど弟や妹が産まれて自分に構って
くれない親に嫌がらせをする
そんな子供と似たような感じにしか思えないわ
……まぁ確かに戒魔とのお話が無くなるのは私も嫌だけどね。

「数日ぐらい我慢してくれ
変わりと言っては何だが、今度お茶菓子を作るよ
今回はそれで勘弁してくれないか？」

「ええ、戒魔がそういうのなら構わないわ
ただし戒魔、量は多めにしてちょうだいね？」

安いわねお姉様！
こういう時はもっと取らないと駄目でしょ！？

例えば……そう、紅茶はできるだけ戒魔が淹れるとかどうかしら？
まぁお姉様がお茶菓子だけでも十分なら私はいいけどね。

「わかった、チルノ達の部屋の場所は？」

「ここから少し離れた場所に用意させるわ
そうすれば戒魔も楽だし、心配でも様子を見やすいでしょ？」

こういう気配りができるからお姉様は凄い
単純に面倒だからって可能性も否定できないけど……それでも凄いと思う
私には思いつかないし、当主の座はお姉様に譲ってよかったと思うわ。

「さて……こんな物かしらね？
誰か他に話す事、言いたい事、訊きたい事は有るかしら？」

「俺からは無いな、ナズナはどうだ？」

「私からもありません
言いたい事は先ほど言ってしまいました」

「あたいも無い」

「……チルノちゃんが無いのなら私もいいです」

「私も無いわ
お姉様自身はどうなの？」

「無いわ、ならこれで解散しましょう

妖精達の部屋はすぐに用意させるわ
準備が終わり次第妖精メイドに案内させるわ」

そう言ってお姉様は部屋から出て行った
残った私達は何もする事が無い
司会者が居なくなった部屋では気まずい空気が流れてる。

空気の悪さをどうにかしようと思ったけど
私にはどうする事もできない事に気付いて諦める
みんなには悪いと思うけど、私は帰らせてもらうわ。

私は無言で立ち上がり、部屋を後にしようとする
しかし私が立ち上がった事に便乗して戒魔も立ち上がる
どうやら戒魔は切欠を探していたらしい。

戒魔が立ち上がるのならと使い魔もまた立ち上がる
妖精達はそのまま座ったままだけどね。

「じゃあまた後でなチルノ、大妖精
一応そこは俺の部屋だから散らかさないようにしてくれよ」

「うん、ばいばい戒魔」

最後に一言言った戒魔は先に部屋から出た
私と使い魔は置いて行かれては堪らなかったので急いで部屋から出たわ。

部屋から出た私達はすぐに別れた
私は暇潰しに、戒魔達は勉強の時間らしい
妖精達はどうするのか気になったけど、私には関係無いか。

さーて、私はご飯でも食べようかなーっと。

続く

元世界編　新十二話【心変わり】

視点　砲魔

アルスは自分だけ巻き込まるのはごめんだと言って生け贄を呼び出しておくと去っていった
生け贄という言い方は気に入らないが、俺の手助けをしてくれる奴を呼んでくれるのだ
その程度は大目に見てやろうと思う。

そして誰が来たかというと……

「アルスから手伝いを頼まれたんだが……何か困り事か？
少しぐらいなら構わないが、坊ちゃまの迷惑にならない程度にしろよ」

刹那……さすがアルス、使えそうな人材をよく分かってるじゃないか
口元が歪むのを自覚できてしまう
役に立つ奴はそれだけで貴重な存在だからな。

「あの……僕は何で呼ばれたの？
刹那が居るなら僕は不要だと思うんだけど……
早く帰らないと師匠に文句を言われるし、用件があるなら早くしてね」

もう一人は鈴催、正直少し不安だが性格から考えて安心できる
鈴崔は口は悪いが手際も物覚えも良い、刹那と同じく使える人材だ。

「ああ、実はお前らとアルスに頼みがあってな」

「砲魔が頼み事？　構わないけど坊ちゃまに許しを貰ってからだよ」

「砲魔が僕に頼み？　熱でもあるの？」

鈴催……後で泣かしてやる
しかしそんな事をしている暇は無いからな
今は強引にでも約束を取り付けるのが先決だ。

「お前らで各人一人一日づつ霊夢の面倒を見てほしい
最近疲れたし、暫く自由の時間が欲しいんだ
その一日だけでもいいから霊夢の事を頼めないか？
ちなみに、霊夢は態々ここで面倒を見なくてもそっちで預かって貰っても構わない」

俺の言葉に二人共難しい顔をしている
刹那はレミレアの事が有るから素直に受けるわけにはいかないだが、霊夢に関してはレミレアからできる限り気に掛けろと言われているので無視できない
こいつは保留にはするけどレミレアから許可を貰ってくると思う。

鈴催は最初に利点と欠点を探すはずだ
自分に利点が大きければ素直に応じ、欠点が多ければ断る
今現在、俺は何一つ利点を言っていないので確実に断るだろう。

「坊ちゃまに確認させてもらっても構わないか？
十中八九許可は出ると思うけど、一応ね
僕自身は引き受けてもいいと思う」

刹那は俺の予想通りにレミレアに許可を得ようとしている
俺も刹那と同じく十中八九許可が出ると思っているので何も言わない
本人だって自分から受けても構わないと言ってるんだ

態々やる気の失せる事を言う必要は無い。

「僕はお断りだ
誰が好き好んで戒魔の娘の面倒なんて……」

鈴催も予想通り、鈴催は戒魔の事が嫌いだから仕方無いか……
なんでも、お互いに相性が悪いらしい
戒魔には珍しく鈴催には会いたくないと言うぐらいだ
永夜異変の時にでも何か有ったのだろうか？

どんな理由でお互いに嫌い合っていても俺には関係無い
今はそんな事よりもどうやって霊夢を鈴催に押し付けるかだ……

「そう言わずに面倒を見てやったら？
鈴催は戒魔の事を嫌ってるのは知ってるけど
戒魔と霊夢は別人なんだし、子供の霊夢を嫌悪しても仕方無いでしょ？」

「そうなんだけど納得できないんだ……
刹那だって僕と戒魔の関係を知ってるなら戒魔関係の事に僕を巻き込まないで」

鈴催は戒魔と違って刹那との関係はそれなりに良好だ
こちらも相変わらず理由は分からない
だがやっぱり俺には関係が無い事だ。

ちなみに俺と鈴催の関係はかなり薄い
お互いに挨拶をしたり雑談をするような仲だが特別仲が良いわけでもない
知り合い以上友人未満という感じだろうか？

しかし……ここまで断られると取り付く島も無いな
実際俺に何か案が有ったわけでもないからどうしようも無い
できるだけ鈴催の有利になるようにする必要があるが思い浮かばな
いな……

「少し落ち着け鈴催
砲魔、少し霊夢を抱かせてくれないか？」

「いいぞ、少しでも慣れてた方がいいと思うしな」

暇だったのか転がっていた霊夢を捕まえ、抱きかかえる
霊夢は不思議そうな顔をしながらも特に叫ぶ気配も無い
いい加減に懐いてくれたようだ。

最初なんて抱いた瞬間に不機嫌そうな顔になられたりしたからな
あの頃は本当に大変だった……霊夢はアルスの方に懐いたりしたしな。

少し昔の事……三ヶ月程度しか経ってないがな
そんな事を思い出しながらも刹那に霊夢を渡す
刹那は危なげもなく霊夢を抱える。

刹那はそのまま鈴催の方を向き、無言の圧力を鈴崔に掛ける
その圧力は鈴催に　さぁ、霊夢を抱け　と言っていた
鈴催はその圧力の意味を正確に理解し、顔を引き攣らせる。

刹那の圧力は段々と重くなっており、少しずつ眼も鋭くなってきて
いる
鈴催はこれ以上刹那の重圧を重くするのは危険と判断

諦めたような顔をしながら霊夢を抱こうと刹那に近づき、手を広げた。

霊夢の頭を刹那は一度撫で、鈴催に霊夢を預ける
鈴催は霊夢を抱き、無言で顔を見続ける。

そんな鈴催の顔を同じく見つめる霊夢
お互いに見つめ合っていると……突然霊夢が笑顔になった
多分見つめ合うという初めての行為が楽しかったんだと思う。

鈴催は霊夢の笑顔を見た瞬間に顔色を変えた
何か衝撃を受けたような……驚いたような顔になっている
どうしたんだ？　普段冷静な鈴催らしくないぞ？

「……砲魔」

「ん？
どうした鈴催、霊夢の笑顔がそんなに変か？」

「そんな事はどうでもいい、この子を預かる件
僕も構わないよ……僕が霊夢の面倒を見てあげる」

急な心変わりに心底驚いた
刹那は顔には出てないが眼を見開いて驚愕しているのは分かる
俺はてっきり刹那が何かを予想して霊夢を渡したと思ったが違うようだ。

「……随分突然の心変わりだな
何がお前をそんなに変えたんだ？」

「教える義理は無い
それで、僕はいつ面倒を見れば良いんだい？」

「言いたくなくても俺が休めるなら文句は無いけどな
明後日、明明後日ぐらいから刹那、鈴催、アルスの順に面倒を見て貰うつもりだ
細かい事は刹那が決めておいてくれ」

「言い出した奴が考える事じゃないのか？
坊ちゃまの許可を取って仕事をして……明明後日からにさせてもらうよ」

「わかった
刹那は三日後の昼ぐらいから頼む
鈴催は四日目から頼む、霊夢は紅魔館に行って受け取ってくれ
刹那だと迷いの竹林で迷って遅くなってしまうかもしれないからな
最後の日に鈴催はここ、博麗神社に霊夢を連れてきてくれ
時間は昼過ぎで頼む、アルスが待ってると思うからアルスに霊夢を渡してくれ」

「妥当だな、僕はそれで構わない」

「僕もそれでいい、師匠達にも話さないといけないしね
それぐらいの待ち時間は欲しいと思ってたんだ」

鈴崔が霊夢を抱いてから簡単に話が纏まったな
一体何が鈴催を変えたんだ？
ま、今は俺が楽になれる時間ができたんだ
それが分かった事を素直に喜ぶか！

フランドールが居る必要無いよね？
確かにあまり話していないので居る必要が無いように思えます
しかしナズナの監視者として事を見ていたので不必要ではありません
更に第三者として事を見れる者が必要でした
フランドールが適任だった上、立場も丁度いいのであの場に居ました。

チルノ素直すぎじゃない？
呪いの痛みがまだ尾を引いています
ですので下手な事を言えばまた呪われるかもしれないと思っています
ナズナの呪いは精神的に相当辛かったらしいので今は黙っていようと思ったのでしょう。

戒魔は子供の扱いが得意なの？　それとも子供体型に懐かれるの？
単純に子供が好きなだけです
ですので子供の扱いが得意……というよりも一緒に話したり遊ぶのが楽しいらしい
子供体型に懐かれるのは見た目が子供なので子供と同じように接するからです
子供体型の者は何故か性格も子供に近い部分が多いので自然と子供体型に好かれます
しかし、レミリアとフランドールは例外です
彼女達は戒魔の秘密を知っているので、どうしても戒魔が少し彼女達に依存していまっています
ですので他の子供、子供体型と同じ対応はしておらず、フランドールの言葉は一部勘違いになっています
レミリアとフランドールが戒魔に懐いたという件ですが、レミリア

はフランドールの件でフランドールが素直になってくれた事を戒魔に感謝しており、フランドールは自分が素直になれる切欠を与えてくれたからです（本人達に自覚はありませんが……）
後は自分達にだけ秘密を教えてくれたという事が嬉しかったからというのが大きかったりします。

何で鈴催は戒魔の事を嫌ってるの？
単純に戒魔の性格を受け入れられないだけです
誰に対しても公平という戒魔ですが、月の軍人として生きていた鈴催は相手が上官ならば絶対服従
砲魔はある程度なら敬意を払うのでそこまで何も思わない
刹那は主人に絶対服従なので寧ろ尊敬できるほどになっている
しかし戒魔はどちらの事もしないのでどうしても許せないらしいそうです
そして戒魔が鈴催に会いたくないという理由は嫌われているのを理解しているからです
誰が好き好んで自分を嫌っている相手と会いたいと思うでしょうか？
つまりそういう事です。

どうして鈴催は突然心変わりしたの？
それは鈴催が面倒を見る日になれば分かるので気長に待ってください
そこまで難しい理由では無いので簡単に予想できると思います。

少年期編　三十三話【ナズナと大妖精】（前書き）

次でこの呪いの話しが完全に終わります（多分）
とにかく書きたい事がまだ書けていません
それを書かない限り呪いの話しはグダグダと続きそうです……申し訳ありません
更に今回は繋ぎなので短い……どうせ逸れるのならもっと内容を増やしたかった……

しかも投稿ミスして間違えて２３日の２３時４５分に投稿してしまった……
一端削除後、改めて２４日の０時に投稿し直しました
削除方法を知らなかったので正直かなり焦りました……

少年期編　三十三話【ナズナと大妖精】

視点　ナズナ

大妖精が図書館に向かうから案内してほしいとご主人様に言い出した
私は妖精メイドにでも頼めばいいのでは？
そう言いましたが、ご主人様は私に案内するように言われました。

私は彼女の友人を呪ったのに気まずいと思ったのでお断りしようと思ったのですが
私が断る前にご主人様に案内を命じられた為、断る事ができませんでした。

私達は気まずい雰囲気になりながらも、図書館に向かっています
ご主人様はフランドール様と約束したらしい焼き菓子（クッキー）を作りに厨房に行きました
私も食べたいと思いますが、悪いのは私なのでそのような厚かましい事は言えません
素直に我慢しようと思います。

大妖精は無言で私を睨みながら歩いてます
私はその視線に耐えながらも案内を続けます。

大妖精の視線に泣きそうになります
私が悪いのは自覚しています、だから泣けません
泣けませんが……やっぱり辛いです。

だからといって睨むのを止めてほしいとは言えません

うぅ……これが昨日ご主人様が勉強の時間に教えてくれた負の連鎖でしょうか？
私がチルノに負の感情を当てたから大妖精が私に負の感情を向ける
誰かが我慢しなければ延々と続く事、それを負の連鎖と教えてもらいました。

だから私は我慢します
最初に負を広げたのは私なのですから……
妖精は感情で行動する存在、だから大妖精の感情を否定してはいけないとも言われました
大変ですが自業自得と思って頑張ります。

でも気になる事もあります
何故大妖精は私を睨むばかりで何も言わないのでしょうか？
こんな雰囲気ですから何か言ってくれた方が幾分か楽なんですけど……
勿論怒られたいわけでは無いのですが怖くなってきます。

これは私から話しかけるべきなんでしょうか？
それともこのまま待って大妖精が何かを言うのを待つ？
でも何も言われなかったら現状維持のまま図書館まで……
やっぱり私から話しかけるべきですね。

歩きながら深呼吸をし、大妖精の方へ振り向いて覚悟を決める
突然振り向いた私に大妖精は目を見開いて驚いていた。

「あの……そういえば自己紹介をしてませんでしたね
私、悪魔のナズナといいます
産まれてから一年経ってもいない子供ですのでまだまだ未熟者ですあまり話す事は多くないかと思いますがよろしくお願いします」

「悪魔だったんですか……しかも子供……
私は妖精の大妖精です
名前ではなく突然変異で産まれた妖精なのでそう呼ばれています
それなりに永く生きてますが……百年は経ってないと思います」

何か拙い事でも言ってしまったんでしょうか？
更に怖い眼で見られています……謝ろうにも何が悪かったのか分かりません
相手が怒っていて原因が判らないなら素直に訊くようにと教えてもらいましたが……
そんな雰囲気でも無いので聞きづらいです。

しかし訊かなければ話しが進まないので訊きます
うぅ……怖いよぉ……

「あのぉ……どうしてそんなに怖い顔をしてるんですか？
私が何か悪い事……言いましたか？」

「……さぁ？」

こういう時はどうすればいいんですかご主人様ーーー！
こんな時の対応は私知りませーーーん！

「悪魔だから……子供だから仕方がないとでも言うつもりですか？
だから自己紹介をしたんですか？
自分は悪くないと自己弁護でもしたつもりなんですか？」

「え……あの……それってどういう意味でしょうか？
私はその……さっきの雰囲気が嫌だったから何か話そうと思っただ

けですよ？
自己弁護なんてよくわからない事を言わないでください」

大妖精が何を言いたいのかよくわかりません
私はただ雰囲気を変える事、大妖精に睨まれるのを押さえたかっただけです
そもそも何を弁護しろと言うのでしょうか？

「……はぁ」

大妖精は溜め息を吐き、居心地の悪そうな顔をしました
申し訳なさそうな顔もしており、やっぱり私には彼女が何をしたいのかわかりません。

「ごめんなさい」

大妖精は突然頭を下げて私に謝りました
あれ？　私は何を謝られたんでしょうか？

「さっきの自己紹介で悪魔とか子供とかの先入観で見てしまいました
悪魔だから責任転嫁をしようだとしてるだとか、勝手な事を考えて……
だからごめんなさい」

大妖精は再び頭を深く下げました
私としては悪魔はそう思われているのが当然ですから気にしてないんですが……
別に怒ってもいないのに謝られても困るだけです。

「気にしないでください

私は怒ってません、なのに謝られても困るだけなんです
だからあまり気にしないでくれると助かります」

大妖精はどうすればいいのか分からない表情
なんだか混乱しているように見えます
別の事を言うべきですかね？

「もし気にするならチルノが何かしないようにしてください
私は二度とこんな事をしないように反省します
けど、他にも私みたいな事をする人も出てくるかもしれません
ご主人様もチルノの事を心配してましたし……お願いします」

今度は逆に自分が謝られ、大妖精は更に驚いていた
私が気にしていない以上、彼女が謝りたいのなら私の言う事を聞かなければなりません
こういう時は頼み事をすればいいっていうのも当たっていました
昨夜のご主人様のお話の通りになり過ぎです
ご主人様は予知の能力でも持ってるんでしょうか？

「そう……ですか、わかりました
チルノちゃんは私が押さえますね」

大妖精は落ち着いた顔になってくれました
私も困った顔をされるよりは笑顔をして貰える方が嬉しいので良かったです。

それから大妖精と打ち解ける事ができました
友達が増えた事をご主人様に報告する事にしましょう！
ご主人様もきっと喜んでくれると思います！

視点　パチュリー

先日の妖精が私に魔法を教えてもらう為、図書館まで来たわ
道案内としてナズナも来たけど……大丈夫かしら？

加害者本人と被害者の連れ
被害者の連れである大妖精がナズナに良い感情を持っているとは思えない
何故この二人で来たのかしら？

しかし、何が起こったのかお互いの仲は悪くなさそうだった
性格の相性が良かったのかしら？
それともここに来るまでに仲良くなるような会話でもした？

私には関係無いか……今は労働力を得られたそれだけで十分よ。

「こんにちはパチュリー様
約束事が有ると聞いて大妖精を連れてきました」

「こんにちは……広いお部屋ですねー」

「いらっしゃい、大妖精に頼むのは一つだけよ
この図書館の掃除をしなさい
妖精メイドは何人使っても構わないわ
何が何でも三日以内に終わらせる事
そうすれば貴女の頼みを聞いてあげる」

彼女の頼み事はチルノを落ち着かせる精神安定の魔法
対価としては高いけど、頭の悪い妖精に魔法を教えるのは難しい
そこまで難しい魔法じゃないけど、教える対象の難易度が高すぎるわ
妖怪ならもう少し楽だったんだけどね……

「三日以内……ですか？
それはちょっと難しいんじゃないですか？
パチュリー様の事ですから不可能ではないと思いますが……」

「不可能な事は言わないわ
可能性は高いとは言えないけど、低すぎるわけでは無いのよ？
だから妖精メイドを好きに使いなさいと言ったのよ」

まぁ同じ妖精だから手伝いは何人か出るとは思う
だけどそんなに多くの者が手伝うはずが無いし……

勝手に掃除してくれて、無理だったら教えないと言っている
受けなくても特に何も変わらないから特に損は無い
受けられても難易度が高すぎるので失敗するでしょうしね
それなら図書館が少し綺麗になって終わり、得にしかならない。

可能性は低いとはいえ、成功されるのが最も損する
掃除されて綺麗になるのは嬉しいけど面倒事が増える
私の為にも失敗してほしいわ。

「妖精は何人使ってもいいんですよね？」

「ええ、貴女だけでしたなら半月以上掛かるでしょ？
さすがにそこまでは困るから代案として妖精メイドを使わせる事に

したの」

「……わかりました、頑張ってお掃除します！」

……失敗してちょうだいよ？
それなら私からは何も言わないから。

「あ、ナズナ
貴女は大妖精が掃除している間、私に本を届けなさい」

「え？　どういう意味でしょうか？」

「私は喘息持ちなのよ？
埃の舞う掃除中の図書館に入れるはずが無いでしょうが」

「喘息って……なんですか？」

……そういえば教えてなかったわね
態々自分の弱点を教える必要は無いんだけど……
言ってしまったからには遅いわね、教えるか。

「喘息というのは気管……つまり呼吸する為の場所の病気よ
埃を沢山吸ったりすると呼吸困難になってしまうの
時には死人すら出てしまう病気、それが喘息
貴女は私にそんな場所に入れと言うつもりかしら？」

「はぁ……わかりました
ご主人様に許可を貰えればそうします」

簡単に説明をしたものの……ナズナはいまいち理解できていないら

しい
頭を傾けながらもある程度予想はできたみたい
別に深く知ってもらおうとは思っていなかったから構わないわ
そこまで頭が良くないナズナなのだからこれぐらいで十分よ。

「じゃあ私は本を持って出て行くわ
今から開始よ、妖精メイドは自分で探してちょうだい」

「えええぇ！　そこからですか！？
せめて妖精か掃除道具ぐらい用意してくださいよ！」

「面倒だから嫌よ
掃除道具は妖精メイドに訊くなりして手に入れなさい
じゃ、頑張ってね」

大妖精に別れを告げ、本を持って図書館から出る
どこで読もうかしら……そこらの部屋でいいか。

続く

元世界編　新十三話【一日目……刹那】
表との時間差……三日

視点　刹那

「じゃあ霊夢を頼むぜ！
俺は家に帰って色々する、用が有るなら家まで頼む
ただし、俺の家は知っての通り魔法の森にある
絶対に霊夢は連れて来るなよ？」

「分かってる、精々束の間の休息を楽しむんだな」

「ああ！　精一杯楽しんでこんな事がもう無いようにする！
じゃあ霊夢を頼んだぞーーー！」

そう言って砲魔は全速力で神社から魔法の森に向かって行った

束の間の休息というのは嫌味だったのだが……どうやら馬鹿馬（ばかうま）（馬鹿＋砲魔）には分からなかったようだ
つまらない奴め……

僕は霊夢を連れ、紅魔館に戻ってきた
僕を出迎えたのは当然ながら門番である美龍
まぁ暇なのだろう……今日も幻想郷は平和だな。

「おかえりなさい刹那
今日の霊夢の世話、頑張ってくださいね」

「頑張るよ、だから美龍も門番を頑張るんだよ？」

「はいはい
誰か侵入者が来たら考えますよーっと」

相変わらずか……でも門は守ってくれるんだから文句は言えないね
美龍が本気になれば僕よりも強いし……なんで美龍はあんなに強いのかな？
あんなに強い美龍に少し嫉妬をしてしまう……人間が本気の妖怪に勝つのが難しいのは知ってるけどね。

霊夢を抱きながら自分に宛がわれている部屋に向かう
だけど僕が行く部屋はその隣、坊ちゃまが今日の為だけに違うその部屋を作り替えたらしい
まだ中は見ていないが、絶対に酷い状態になっていると思う。

部屋に入ると紅魔館にあるまじき白を基準とした部屋色、所々に可愛く桃色や水色の泡が描かれていたり
小さい子供用の柵付きベッドが用意されていたり、積み木が転がさ

れていたり
他にも様々な玩具、赤ん坊用の絵本、小さい椅子が置いていたりと
……

どう見ても戒魔が霊夢を育てていた時以上に環境が整っていた
暇だし、気に入っている戒魔の娘が来るからといってもこれはやり過ぎ
坊ちゃまには後で説教、協力したパディ様にも文句を言っておく事に決めた。

とりあえず霊夢をベッドに寝かせ、部屋を片づける
坊ちゃま達もせめて整理ぐらいしてほしかった……乱雑に置きすぎて危ない
霊夢が転けたらどうするんだろうか？
僕だけではなく砲魔が後で文句を言いに来るだろう
それよりも先にフラムドール様が怒るかな？

特に問題無く部屋も片づき、整理も終わったので霊夢を自由にさせる
霊夢は初めて見る場所に戸惑っていながらも部屋中を見回している
しかし好奇心から部屋は気になるが新しい場所が怖いので僕から離れない
なんというか……和むなぁ。

こんな子供の世話をする事になるとは昔は思わなかった
坊ちゃんだけの為の技術を坊ちゃま以外の者にする
裏切った気持ちにならなくもないけど、悪い気分はしないな。

それからは特に筆頭すべき事は無い
数時間霊夢の面倒を見て、夕方になったら坊ちゃまを起こす
坊ちゃまが霊夢の面倒を見る邪魔をしてきた

邪魔をしてくる坊ちゃまをフラムドール様は毎回何処からともなく現れて気絶させる
坊ちゃま……せめて自分の足で出て行ってください
足を掴まれながら引き摺られながら連れて行かれる姿は滑稽ですよ？

パディ様は突然部屋に来てこの部屋で本を読んでいた
手伝いはしないそうですが気になったらしい
本は内容は無視して妖精メイドに運ばせていた
適当過ぎて子供向けの本から最難書まで適当に……
その事でパディ様は困っていたけど文句は言わなかった。

美龍は料理の差し入れをしてくれた
霊夢の面倒を見ていて時間を忘れてしまった失態
でも美龍の料理は美味しかった……やっぱり悔しい。

フラムドール様は坊ちゃま以外の時でも現れ、手伝ってくれた
最も霊夢の事に一生懸命なのはきっとフラムドール様だと思う。

坊ちゃま？
ただの間抜けか道化か空回りですね。

明日は鈴催、霊夢を抱けばきっと何かが変わると思って抱かせたけど……
まさかあんなに強く想うとは思わなかった……少し失敗したかな？
この責任は砲魔に取ってもらおう、あいつが原因なんだし。

相変わらず筆頭する事も無く平和に一日を終えた
せっかくこんな部屋まで用意されたのだし、また預かれる時は預かってあげようかな？
でも坊ちゃまの説教はするよ？　勝手にこんな事されるのは困るし

ね゚

少年期編　三十三話【ナズナと大妖精】（後書き）

いつナズナが戒魔に色々教えてもらったの？
前話に部屋から出た後、戒魔から説教されました
その時に対人関係に関して色々と勉強しました
パチュリーも一緒にしていましたが、パチュリーはむしろ教えられる側にいました
引き籠もりなんだから一応知っておけと戒魔に教えられる事になりました。

……馬鹿馬？
最初は　あ砲魔　にしようと思ったのですが非常に読みにくいので断念
アホ馬　も考えたのですがカタカナなので断念
もう諦めて馬鹿馬にしました。

刹那の言葉遣いってどうなってるの？
レミレア関係にのみ敬語を使います
それ以外の相手には例えフラムドールでも普通に話します
自分の主は絶対にレミレアだけであるとうい刹那の意志表示です。

少年期編　三十四話【お友達】（前書き）

この回の（表の）後半を書きたくてチルノ戦から根回しをしました
長々とグダグダと思った以上に続きましたが無事……じゃない気も
しますが終了です。

次回からまた日常……かもしれません。

……でもこういう事って前書きじゃなくて後書きに書く事ですね
でもそんなの関係無しに書きます、（微妙な）ネタバレなんか気に
しません。

九月二十四日、絵を描いている知り合いから絵を描いて貰いました
大妖精とチルノです
絵に関する事、感想などは絵師様にお願いします。

少年期編　三十四話【お友達】

視点　パチュリー

大妖精が掃除を始めた日から五日経ったけど……
まさか本当に終わらせるとは思わなかったわ。

大妖精は図書館を本当に三日で終わらせたわ
どうやら大妖精には部下のような者を指揮する能力が高かったらしく
自分勝手な妖精を巧く操り、疲労が蓄積しないよう入れ替わり立ち替わりに妖精メイドを交換する
大妖精が休む時には自分には劣るものの、同じく指揮能力の高めの妖精に続きを頼む
そうやって自分自身の疲労も溜めないように働き、見事に三日で図書館の掃除を終わらせたわ。

さすがに細かい所は掃除し切れていないけど、見違えるように綺麗になったわ
埃も溜まってないし、床は綺麗だし、本棚や机の整備まで……
困ったわ……ここまで優秀だとは思わなかった。

おかげで約束を守る為に今は大妖精に精神安定の魔法を覚えさせている所よ
魔法の適正は戒魔はかなり高かったけど大妖精は普通程度
まぁ精神安定の魔法なんて簡単だから例え多少適正が低くとも五日で使える
大妖精は勤勉だったので二日……つまり今日の先ほど使えるようになったわ。

ちなみにチルノは二日目で体調は万全になったわ
何が目的か知らなかったけど大妖精が自分の為に頑張ってると知って掃除の手伝いをしてた
何気に戒魔やナズナも手伝ってけど……掃除中は私が勉強を見なかったから暇だったんでしょうね。

大妖精が魔法の勉強中、戒魔はチルノに対人関係について教えてたわ
こういう時、多くの者はこう反応したりこう思ったりする
そんな事を簡単に、覚えられない時は辛抱強く何度も説明した。

喧嘩した時のチルノの反応が余程気に入らなかったんでしょうね
怒ったりしないで何度も何度も説明する戒魔は子供ながらに父親のようだった。

ナズナはチルノの言葉に対する実験相手
戒魔が教え、チルノが実行、ナズナが素直に感想や感情を言ってチルノに理解させる
ナズナが不機嫌になる事は何度も有ったが、戒魔が慰めていたので頑張っていたわ。

大妖精が魔法を使えるようになる頃にはチルノも口が多少柔らかくなっていた
自分勝手という印象で強がりばかり口にするチルノだったが
今では下手ながらも敬語まで使えるようになっていた。

大妖精は妖精にしては珍しく頭が悪くなく、記憶力は悪かったが頑張り屋だった
チルノは妖精らしく頭は良くないが、他人の感情に敏感になるようになった

どうやらチルノは孤独を体験していたらしく、普段の態度とは裏腹に寂しがりらしい
戒魔に懐いてから離れようとしない……相変わらず子供に好かれるみたいね。

戒魔に懐いたのは怒らずに自分の為に頑張ってくれたからしいナズナには呪いの件で怖いと思っているけど自分の為に怒るのを我慢してくれたから懐き始めている
大妖精には元々特に何も思っていなかったらしいが
戒魔達と同じく自分のために頑張ってくれる姿を見て素直になれないながらも一緒に居るようになった。

ちなみにチルノは私には懐いていない
何故なら戒魔が教えた相手の感情をという授業に居なかった感情をあまり表さない相手だからよ
感情が分からないから何を考えてるのか分からない、だからあまり話したくないという感じ。

素直な事は良いと思うけど、それって失礼に当たると教えたら謝られた
別に怒っていたわけでは無いがチルノの教育になると思い謝罪を受け取っておいた
その後、チルノは戒魔に報告しに行ってたわ、悪い事をしたけど謝れたってね
子供っぽい仕草に戒魔は苦笑しながらもチルノを褒めていた。

ここまで言うとチルノの性格が大きく変わったように聞こえるわでも実際は殆ど変わっていないの、ただ謝る事を覚えて感情を少しばかり囓っただけ
相変わらず同じ妖精の大妖精や妖精メイドには態度が大きい。

そしてチルノが孤独だった理由もある程度予想できるわ
けっこう普通に起こっているけど、下手に力を持っていたのが悪かったわね。

チルノは妖精にしては珍しい氷の妖精
妖精とは本来暖気を好み、冷気や寒さを嫌う
つまりチルノは産まれながらにして嫌われる宿命だった
異端として生きているチルノに近づく妖精なんて滅多に居ないわ。

更に戦いを嫌う妖精のはずなのに妖怪である美鈴にまで喧嘩を売るチルノ
冷気を持っている上に喧嘩っ早いチルノと一緒に居たい物好きなんで居ないわ。

唯一の例外は大妖精ね
嫌いではないけど好きでもない、知り合いだけど友達というほど近い存在じゃない
居ても居なくても同じだけど数少ないチルノと一緒に居る妖精
チルノ自身は自覚してないでしょうけど、端から見れば大妖精を大事にしてるのは見て取れるわ
大妖精も知らないでしょうけどね。

今回の事はこの妖精達に取って良い方に転がったわね
チルノは痛い思いをしたけれど自分を大切に想ってくれている知り合いが居る事に気づけた
大妖精はチルノは無視できない相手となり、チルノの面倒を見ていくでしょうね
この二人はきっと良い友人になれるでしょうね。

私が面倒を引き受ける必要が無ければ一番良かったんでしょうが……
まぁ一つの関係を結ぶ切欠になれたと思って諦めましょう
さて……戒魔達が勉強に来るまで本を読んで待ってましょうかね。

視点　大妖精

パチュリーさんに教えてもらった魔法を使えるようになったので
私とチルノちゃんは紅魔館から霧の湖に戻りました
どうせ近くなのでいつでも行けますし、また遊びに行きたいと思います。

「ねえ大ちゃん」

「どうかしたのチルノちゃん？」

珍しいな……チルノちゃんがこんなお塩らしい感じになるなんて
明日は雨かな？　木陰を探すが紅魔館に匿ってもらおっと。

「なんであたいを助けたの？
戒魔に色々教えてもらってわかった……大ちゃんは嫌々あたいと一緒に居るって事
なのに何であたいを助けてくれたの？
それにあたいの為にあんなに広い所を掃除したり魔法を使おうとしたりさ……ねぇ、なんで？」

「……何を訊くのかと思ったらそんな事」

そんな事も分からないなんて……やっぱりどこまで行ってもチルノちゃんはチルノちゃんだった
私より頭が悪くて、相手の事なんて何にも分かんないチルノちゃんのまま
戒魔さんの事でチルノちゃんが何か変わったのかと思ったけど……
胡瓜だったみたい。

「そんな事って……あたいは真剣に訊いてるんだよ！
わかんないんだもん！　こんな事戒魔から教えてもらってないんだもん！」

教えて貰えないというか……戒魔さんは私とチルノちゃんの関係なんて知らないんだよ？
なのに教えるとか教えないとか以前に、分からないんだから当然でしょ？

「とっても簡単だよチルノちゃん
私が、チルノちゃんの事が心配だったから
だから助けたの……わかった？」

チルノちゃんは鳩が豆爆弾を食らったような顔をした
私は当然の事を言っただけなのに何を驚いてるの？

「……なんで心配だったの？」

「え、そこから分からないの？」

これは予想外……相手の感情に鈍いのは知ってたけどここまで鈍いとは思わなかった
いや、きっと戒魔さんが色々と教えてくれたから感情が分かった

けどやっぱりまだチルノちゃんにはこの感情は分からないか……
あのお話でそんな感情は無かっただろうから仕方無いんだろうけど。

「私達……お友達じゃない」

「……え？
あたいと大ちゃんが……お友達？」

「えぇ！？
チルノちゃんは私の事をお友達と思ってなかったの！？」

酷い……別にチルノちゃんは悪くないけど凄く悲しい
もしかしてチルノちゃんにお友達が居ないのって……
チルノちゃん自身がお友達を知らないからなのかな？

「だ……だって大ちゃんあたいの事嫌いなんでしょ！？
無理矢理連れて行ったり大ちゃんの嫌いな戦いだって付き合わせたり……」

「その……確かにチルノちゃんは私の事を振り回すし、嫌って言っても無理矢理連れて行くし
寒いし、冷たいし、怖いし、強いし、戦い好きだし、意地っ張りだし、自分勝手過ぎるけど……」

「あの……そこまで言わなくてもいいんじゃない？」

あ、ちょっと言い過ぎたかな？
でも本当だから怒らないでね？
先に酷い事を言ったのはチルノちゃんなんだしさ。

「チルノちゃんの相手は疲れるし大変だし苦手だと思ってるし
時々苛めてくるし他の妖精にまでチルノちゃんの相手を押し付けられるけど……」

意地悪し過ぎちゃったかな？
なんだか凄く落ち込んじゃってる
でも大丈夫だよ？

「けど……それでもチルノちゃんは私のお友達だよ
好きとまで言えるかわかんないけど……でも嫌いなんかじゃないよ
だから勝手な事言わないで」

今度は寝鼻にお湯みたいな顔になっていた
本気で気付いていなかったみたい
やっぱり悲しいな……

「嫌いじゃ……ないの？
大ちゃんはあたいの事嫌いじゃないの？」

「うん、嫌いじゃないよ
好きかどうかはまだ分かんないけど」

突然涙目になるチルノちゃん
えぇ！？　どうしてそうなるの！？
何度も思うけど私、何か悪い事言った！？

「どうしたのチルノちゃん！？
またお腹痛いの？　それとこ今度は頭が痛いの？」

「違う……違うの……違う……」

小さな声で違うと繰り返すチルノちゃん
暫く涙が止まらず、それでも違うと言い続けていた。

やがて落ち着いたチルノちゃんは涙を袖で拭い、笑顔を見せてくれた
そういえばこんなに嬉しそうなチルノちゃんを最後に見たのはいつだろう？
戒魔さんと一緒の時だってこんなに綺麗な笑顔はしてなかったのに
……

「大丈夫チルノちゃん……」

「うん、大丈夫だよ大ちゃん
本当に痛かったんじゃないの、ただ嬉しかったんだ……」

「嬉しかった？」

私……チルノちゃんが喜ぶような事を言った記憶は無いんだけど？
それとも私がもう忘れちゃったのかな？

「だってあたいに友達が居たんだよ！
初めてのお友達なんだよ！
すっごくすっごく嬉しいんだ！」

「は……初めて？」

初めてってどういう事？
だって私以外にだってチルノちゃんと遊んだりして……ないような気がする
もしかして私に押し付けるだけ押し付けて誰もチルノちゃんと遊ん

であげなかったの!?

「うん……あたいってさっき大ちゃんが言った通り冷たいじゃん?
普通の妖精って寒いの嫌いだからさ……あたいと遊んでくれるのって誰も居なかったんだ
大ちゃんは時々遊んでくれるけど、嫌々って感じがしたし……
どうせ嫌われるんだったらもっと嫌われようとして嫌な事もしたもん」

あの嫌がらせって私を引き剥がす為の演技だったの!?
でも演技って感じはしなかったな……という事は本当に苛めてただけ?
良く分かんなくなってきた……頭くるくるだよぉ……

「えっとね……嫌われてるならもっと自分から嫌われようとしたんだ
遊びで意地悪な事言ったり、苛めたり、ちょっと酷い事言ったり……」

態とだったんだ……でも時々楽しそうだったよ?
ちょっとだけ本気だったんじゃない?

「それでも一緒に遊んでくれる大ちゃんが不思議だったんだけど……
そういう事だったんだー……あたいにもお友達がいたんだ
こういうの初めてだからどうすればいいのか分かんないや……ごめんね?」

「あ、謝る必要なんて無いんだよ!
そりゃチルノちゃんが私の事をお友達に思ってなかったのは悲しかったけど
でもチルノちゃんは悪くないよ、言わなかった私が悪かったんだよ」

「でも……」

「でも何も無いの、私達お友達でしょ？
また一緒に遊ぼうね？
でも意地悪を言ったり苛めたり酷い事言わないでね？」

「……うん！」
＞ｉ１２０１８―１４９５＜

こうして私達は本当にお友達になった
これからもよろしくねチルノちゃん……でも面倒事は起こさないでね？

続く

元世界編　新十四話【二日目……鈴催】
表との時間差……一日

視点　鈴催

「いいですね師匠、輝貴様、なぁ
僕が霊夢の面倒を見る邪魔をしたら一ヶ月食事抜きです
勝手に食べたら三ヶ月作ってあげません
い・い・で・す・ね？」

「……」「あ……あぁ」「わかった」

念のために釘を刺しておかないと絶対に邪魔をするのは目に見えてるからね
絶対に邪魔させない……一日だったけど育児の本は完読したし大丈夫
失敗しないように気をつけて……後は頑張るだけだ！

「どうしたんだイナバの奴……あんなに戒魔の事嫌ってたのに……
もしかして霊夢に惚れたのか？」

「それはないでしょう輝貴
それならば以前神社まで世話をしに行った時にああなってるでしょ
？」

「俺としては何かに目覚めたように見えるなぁ
鈴催の奴も頑張るねぇ……気合を入れすぎて失敗しないようにして
よ？」

みんなが僕に何かを言ってた気がするけど僕の耳には入っていなか
った
何故なら既に僕は紅魔館に向かって飛び立っていたのだ。

「……そこまで急いで来なくてもいいんじゃないかな？
霊夢の面倒を見る前に疲れては意味が無いだろ？」

「ぜぇ……ぜぇ……ご、ご尤も
悪いけど少し休ませて」

少しでも速くと思っていたらいつの間にか全速力で飛んでいたらしい
疲れた……ちょっと気分が高揚しているみたいだし、落ち着く為に
も休みたい。

「じゃあ僕は紅茶を淹れてきてあげるよ
鈴催はその間霊夢の事を頼むよ」

「わかった……任せて、それとありがと」

その後、刹那の紅茶を楽しみながら霊夢を泣かせないようにしなが
ら雑談をした
そのままそれなりに時間が過ぎ、昼を過ぎてしまった

早めに来たのが十時ぐらいだから二時間近く話していた事になる
話しすぎだと思うけど、それと同時によく霊夢が泣かなかったと思う
寝ていなかったんだけどなぁ……どうしてだろう？

それはともかく紅魔館で昼食を頂き、紅魔館を後にする
……刹那の料理は美味しかったなぁ
僕ももっと料理上手になりたい……今度教えて刹那に教えてもらおうかな？

永遠亭に帰ってきた僕を待っていたのはお昼を待っていた三人
僕は紅魔館で食べてきたけどこの三人は食べていないんだよなぁ……
何故か誰も料理ができないみたいだし
僕が最後に永遠亭に住み始めたはずなのに……それまでどうやって生活してたんだろう？

無言の圧力を掛けてくるので仕方無く霊夢をなゑに預け、食事の準備をする
絶対に危害を加えるなと念を込めて言っておいたので大丈夫だろう。

今日の食事は鮎を開いて焼き、ご飯とお味噌汁
後は野菜を肉と一緒に炒めた野菜炒め
時間があまり無いから簡単な物だけど今日ぐらいは許してもらおう
催促しなければもっとまとも料理を出してたかもしれないけどね。

料理からその意味が伝わったのだろう
師匠も輝貴様も微妙そうな顔をしている
なゑには霊夢の面倒を頼んだので人参を多めにしておいた
元々料理を諦めていたなゑはまだ良い方だと思って諦め顔になって無言で食べている。

霊夢の世話をすると言ってもそこまで大層な事はしない
強いて言うならば幼児用牛乳を飲ませたり勝手にどこかに行ったり
しないように見てるぐらい
玩具は刹那に少し借りてきたから大丈夫だと思う。

そんな感じで霊夢と遊んでいたりするまま夜になった
既に霊夢は寝ているのでなゑに様子を見るように頼んで夕食を作る。

昼はあまり少し酷かったと自覚しているので夜は普通にしておこう
筍と人参、油揚げを混ぜた炊き込みご飯に具を多めにした味噌汁
胡瓜や大根を使った生野菜とゆで卵……こんな感じかな？
魚は昼に出したけど野菜は少なかったからね、野菜と卵で栄養面は
大丈夫
食後には蜜柑でも出してあげようかな……もう冬だしね。

霊夢を見える範囲に寝かし、静かに食事の時間
少しでも騒がしくすれば睨みを効かせて黙らせる
輝貴様は毎日毎日煩いからこれぐらいはしないと駄目だ。

食後はのんびりとしながらなゑと小さな声で雑談
師匠は薬を作りに部屋へ戻り、輝貴様は女の子の兎妖怪と遊びに行
った
輝貴様は正直自重するか死んで欲しい……死なないけど。

食後から数時間経ち、霊夢が目を覚まして泣き出した
何事かと思ったけど何も変な事は無い
訳も解らずとにかく抱き上げると、突然泣き止んだ。

どうやら寂しかったか抱き上げて欲しかったようだ
抱き上げれば霊夢の笑顔……可愛いなぁ

僕にも子供が居ればこんな感じの笑顔なのかな？
見てみたいけど相手が居ないし……霊夢で我慢しないとね。

赤ん坊ってこんなに可愛いものなのか……暖かいし可愛いし
こうやって抱き上げれば笑顔を向けてくれる
砲魔に返したくない……けど返さないと駄目
悲しいけど諦めないと……駄目だよね？

まぁ遊びに行こうと思えば行ける場所に居るんだし
その時にまた抱っこさせてもらおう。

この夜
僕は椅子に座り、霊夢を抱きながら寝ていたらしい
でも落とすような気配は無く、霊夢も一緒に寝ていたとか……
危ないから次から起こすようになぁに言っておいた。

少年期編　三十四話【お友達】（後書き）

大妖精はカリスマ持ち？
単に指揮能力が高いだけでカリスマみたいなのは持ってません
簡単に言うと人の扱うのが上手なのです
もっと簡単に言うと野球やサッカーのキャプテンみたいな存在です
今後もこの設定が使われるかどうかは不明。

恒例（？）の大妖精の間違い
「お塩らしい」→「しおらしい」
「胡瓜」→「杞憂」
「鳩が豆爆弾」→「鳩に豆鉄砲」
「寝鼻にお湯」→「寝耳に水」

大妖精が魔法を覚えるの早くない？
精神安定魔法は簡単な部類に入るのでそこまで変ではありません（という設定）
裏話を言うとあんまり長く紅魔館に居座られるとこちらが動けないので困るんです
精神安定魔法を悪用すると人間ぐらい廃人にできますが、これは簡易なのでそこまで強くありません
効果は正直雀の涙、焼け石に水程度
本当にあまり効果はありません。

なお、効果が高かった場合に廃人になると言った理由ですが
精神を安定させるというとどう思いますか？
落ち着きを取り戻す？　正気に戻す？
いいえ違います、脳に分泌されている興奮作用の細胞（アドレナリンなど）を減らす事です
魔法の威力が高いと細胞が多く減ってしまい、興奮する効果が消え

てしまいます
もし興奮していない状態で消したらどうなると思いますか？
何種類もの細胞が消滅してしまうので良くて人格崩壊、最悪が脳死でしょう。

なら何故パチュリーはそんな魔法を大妖精に教えたの？
単純に魔力が少なく、そこまでの効果を望めないからです
ですので大妖精が全力で魔法を使ったとしても本当に雀の涙程度の効果しか無いのです
よって教えても問題無いと判断しました。

チルノ良い子？
多分良い子です
チルノは純粋で素直な子だと思っています
ただ色々と駄目なだけで。

結局チルノと大妖精ってどうなったの？
お友達になって一緒に遊んでいます
二次で仲の良い話しは多いのですがどうやって仲良くなったのかと思いました
原作内では文花帖（本）で萃香との遊び（？）が切欠で仲良くなったと仮定しました
本来の歴史上ではこの二人が仲良くなるのは萃夢想以降となります
（時系列が分からないので萃香登場後という理由で）

鈴催って永遠亭でどういう立場なの？
鈴催は永遠亭の母親的存在です、男ですが
永遠亭で料理が最も上手なのが鈴催で、次点が永仙となっています
永仙は鈴催が来てから料理をしていないので腕が錆び落ちているので料理をしません

普段から家事をこなし、全員の世話をしたり、人里で薬を売ったり
輝貴と喪紅の仲裁、なゐの罠を壊したり、永仙の実験台と……
多分幻想郷内で最苦労人の称号を与えられる人

鈴催は霊夢の事をどう思ってるの？
実の娘のように思っています
刹那に霊夢を抱かされた時、鈴催の中で父性が芽生えて一気に開花しました
元々母親のような事をしていたので母性のような物は出てきたそうですが男なんで父性の方が当然大きいです
霊夢の為なら永仙をも敵に回しそうな勢いですが、理性の糸は強固なので多分大丈夫です
霊夢が欲しいのならば鈴催を倒してからフラグが立ちました。

少年期編　三十五話【冬の妖怪】（前書き）

呪い編が終わりましたが、書きたい事は数年後の話しなので暫く日常が続きます
一気に飛ばない理由ですが、裏や新も有るので一気に時間を飛ばすと時間が狂ってしまうのです
こういう時に同時進行はとても不便です。

少年期編　三十五話【冬の妖怪】

視点　戒魔

ナズナの呪い事件から一ヶ月経った
本格的に冬に入ったらしく最近は寒くなり、時偶雪が降るほどだ
ナズナは喜び庭駆け回り、パチュリーは図書館で引きこもる……

ナズナは産まれてから一年経っていないので雪を見るのは初めてらしい
庭を走り回って足跡を付けたりして遊んでいる。

パチュリーは寒いのが嫌だと言って引き籠もっている
炎の魔法で暖は取れるだろうに……元々引き籠もりの上、更に引き籠もるらしい。

レミリアも寒いからという理由で庭に出て紅茶という事はしなくなった
しかしそれはそれで暇らしいが、だからといって俺の部屋に突然入ってくるのは止めてほしい。

美鈴は変わらず門番を続けているが、やはり寒そうなので後で鍋でも差し入れてやろう
門番隊達の分も用意しないとな、あの子達は寒さを苦手としている妖精なんだし。

フランドールは地下に籠もっていたので雪を見るのは久しぶりらしい
日傘を持ちながらナズナと一緒に庭を駆け回っているのだが……身

体能力が高すぎて遊びになっていないな。

後、チルノと大妖精が紅魔館に来ている
寒いから宿を貸して欲しいと大妖精が言い出してきたらしい
チルノがふざけてこちらに冷気を当てないという条件で受け入れたとか
今は大妖精は紅魔館内に居るがチルノはナズナ達と遊んでいる。

ちなみに俺はナズナとフランドール、チルノが遊んでいるのをのんびり眺めている
子供が雪を見てはしゃぐのを見ていると何とも微笑ましい気分になるものだな
体は子供の癖に年寄りのような事を想うが、実際は三十歳なので別に変では無いと思う。

子供は元気だと思いながら遊んでいる姿を眺めていると、突然チルノが顔を上げた
ナズナとフランドールは雪達磨を作っているので気付いていない。

何事かと思ってチルノが向いている方向を見てみると……あれは妖怪かな？
離れているから細かい所まで見えないが……誰かに似てるような気がするな。

白い帽子に隠れているから見えにくいが、白が混じっている桃色の髪
青と白で構成されている洋服で冬に現れる妖怪……レシィか？
いや待てよ、こっちで俺の常識を当て嵌めるのは危険だ
先にチルノに確認しておくかな。

「チルノ、あの妖怪の事を知ってるのか？」

「あ、戒魔
まぁ一応……あいつの名前はレティ・ホワイトロック
冬に現れる妖怪で冬の妖怪とか冬の忘れ物とか言われてるんだ」

やっぱりこっちのレシィか……あちらでは冬の落とし物だったんだがな
こっちでも能力は【寒気を操る程度の能力】かな？
それともチルハとチルノのように違うか？
だが冬に現れたという事は同じ能力と考えるのが妥当か。

「しかし……あまり良い感情を当ててないな
彼女と何か有ったのか？」

「昔どっちの方が相手を凍えさせるっていう勝負をしたんだけど負けちゃって……
あたいのは冷たいって言われるんだけどレティは寒いから勝てなかったの
何度か同じ勝負をしたんだけど勝てないから諦めた
別に嫌いじゃないけど悔しいから会いたくない」

チルノは負けず嫌いだからな
チルハは簡単に負けを認めるから相変わらず新鮮だ
相変わらずこちらとあちらの違いを見つけるだけでも楽しめる。

あちらではレシィ・ホワイトロック、こちらではレティ・ホワイトロックか……
彼らの名前にも相変わらず違いが少ない
大きく違う名前というのは今の所俺、戒魔と霊夢ぐらいしか居ないんじゃないか？

「今回は勝負を挑んだりしないのか？
それとは別に彼女と少し話してみたいと思うんだが」

「え？　レティと話したいの？」

「まぁ……少しだけな
俺は相手がどんな性格なのかは自分で判断するからな
彼女の性格を知りたいんだ」

実際は以前からの目的である『戦わずに以前の知り合いと戦わずに関係を持つ』
戦い以外で出会う切欠が無かったからな
チルノとは戦いで出会ってしまったが、レシィ……いや、レティとは会話だけでいたい
戦わないのならば何でもいいさ。

「うー……どうしよー
あたいは別にレティと戒魔が話すのはいいんだけど
あたいがレティと話したくないしー……」

この反応は予想していた
だが俺にはチルノに勝つ為の手段がある！

「もし手伝ってくれるならかき氷を作ってやろう
蜜は材料が少ないから難しいが小豆ぐらいなら作ってやる」

「……かき氷って何？」

……そういえばかき氷の存在は真苗から教えてもらったんだったな

真夏の暑い日に作って貰って……あれは助かったなぁ
暑さでどうにかなるかと思ったからかき氷に助けられた。

「そうだな……かき氷というのは氷で作ったお菓子だ
氷を粉末状まで砕いた物に甘い蜜を垂らして食べるんだ
元がただの氷とは思えないぐらい美味しかったぞ」

「本当！？
でも氷なんてどこから調達するの？
それに粉々に砕くって言っても難しいでしょ？」

「そこは大丈夫だ、俺に考えがある
それはそうと、かき氷を作ってあげるからレティを連れてきてくれないか？」

「むー……戒魔は卑怯だ
わかった、レティを連れてきてあげるね
だからかき氷は絶対、絶対に作ってね！」

「約束は守るから安心しろ
じゃあ頼むぞ」

「わかったーーーー」

チルノは叫びながらレティを追いかけていったのだが……

「ふぎゅあ！！！」

紅魔館の正門以外には結界が張ってある事を忘れていたらしい
勢いよく結界にぶつかって奇声を上げて落下した……

地面に落ちている途中で減速したので大丈夫だったようだ。

チルノは素直に正門まで向かい、美鈴に少し出ると言って飛んでいった

遠目だからよく見えないが美鈴は苦笑しているように見えた。

ふと、チルノが来る前に美鈴に会っておく必要がある事に気付いた

紅魔館内に妖怪が入れるはずが無かった……

客人の俺が勝手に招かざる客を入れる権限があるはずが無いのだ。

紅魔館内で話せるはずが無いのでナズナとフランドールに少し席を外す事を伝えた

二人はつまらなそうにしていたが、戻ってきたら見てるだけじゃなくて遊ぶ事を言うと我慢してくれた

零歳のナズナと同じような態度を取る四百八十五歳のフランドールはどうなのだろうか？

本人は気にしてないのだろうが……なら問題無かったな。

門の前まで進み、美鈴と話す

最初は少し渋っていたが、ただ話すだけだと何度も言うと諦めてくれた

条件として門番隊を二名着けられたので少し申し訳なく思う。

門の近くでチルノの到着を待つ

数分後、チルノがレティを連れて戻ってきた

先ほど遠目で見た姿と同じなので間違い無くレティだろう。

レティは俺の近くまで来た時に疑わしそうな顔をした

それはそうだろう、チルノに呼ばれて来てみれば人間の子供が自分を待っていたのだから

これはレティではなくとも妖怪ならば誰でも思う事だろう
だがそれぐらい利用しなければ妖怪と普通に話せるとは思わないから好都合なのだ。

「ただいま戒魔
言われた通り、レティを連れてきたよ」

「ありがとなチルノ、かき氷は明日でいいか？
一応準備とかも必要だし、蜜を作るのにも時間が掛かるんだ」

「わかった！　楽しみにしてるね！
で、あたいはどうすればいいの？」

「私を無視して話しを続けないで！
そもそもチルノ、何故私を紅魔館なんて場所に連れてきたのよ！？」

「言ってなかった？」

「言ってないわよ！
貴女はレティちょっと着いてきて……としか言われてないわ！」

いや、その誘い方は確かに悪いと思うがそれで着いてくるお前も馬鹿だろ
しかもここは紅魔館の正門が簡単に視界に入るぐらい近い場所だ
万が一紅魔館に進入しようとしていると勘違いされてはレティが危ない。

「チルノ、次からは用件も話して
それから相手の許可を貰ってからにしような？」

「はーい」

返事だけは一人前だな
でも、言われた事は少しだけだけど活用しているのだから嬉しい
少しでも教えた甲斐が有ったというものだ。

「それで……私に何か用なの人間
自分から食べられようとしているほど人生に絶望しているようには
見えないんだけど」

その例えは酷いと思うぞ？
それに俺は元とはいえ博麗だ、妖怪に食べられるなんて絶対にごめ
んだ。

「君と話したかっただけだ.
他意は無い」

「……それって口説こうとしてるつもり？」

「断じて違う！」

勝手に決めつけるな！
そもそもこんな子供に口説かれて嬉しいのかお前は！？

「話そうと思ったって言うけど……私は貴方と話す事なんて無いわ
今ならまだ見逃してあげるから速く逃げたほうが身の為よ？」

「話す為にチルノに態々君を連れてきて貰ったんだぞ？
逃げる必要があるとすれば君が俺を殺そうとした時ぐらいだ」

レティは黙って俺の事を見ている
逃げないのは本当だろうが話すだけというのが信用できないんだろう
人里の退治屋には卑怯な騙し討ちをする者だっている
例え子供であろうとも、野良妖怪であるレティは油断を解くはずが無い。

「まぁいいわ、それで話しというのは何？
下らない話しならばお断りよ」

と言われてもなぁ……

「話す事ばかり考えていて話し内容を考え忘れてた
ははは、ごめんな」

レティは呆れ顔になるが構わない
戦いにならないのならばこれぐらい気にしない
戦い以外の視点から相手を知りたいのだから。

「はぁ……警戒してた自分が馬鹿みたいじゃない」

「悪いな、別に話したい事なんて無いから雑談でもしよう
どうせ暇だったんだろ？」

「まぁね、今年は例年よりも少し寒いから私の出番なんて無いし
もう少し暖かかったら私が寒くしようと思ったけど
これ以上寒くしたら人間が凍え死んでしまうからできないのよ」

「人里は寒さの対策が微妙だからな
俺は紅魔館に住んでるから寒さは多少どうにかなるし厚着とかも揃
えてもらえるけど

人里は暖を取れる場所が限られている」

人里に限らず、寒さは全ての者の天敵になる
例外は地下に住んでいる者、天界に住んでいる者、冥界に住んでいる者ぐらいだろうか？
地下には寒さがあまり入り込まず、天界には雪が降らない、冥界は元々寒い上に誰も寒さを感じない。

「そうなのよねー
人間って脆いでしょ？　私が力を使い過ぎれば殺してしまうしだけど使わないと暇で暇でしょうがないのよ
そういう意味ではこの会話は暇潰しになって助かるわ」

「今まではどうやって時間を潰してたんだ？」

「チルノが喧嘩を売ってくれたりしてたぐらいよ
それ以外では時々来る妖怪退治の人間を追い払うぐらい
冬は好きだけど楽しみが雪以外にあまり無いから悲しいわ」

「春には桜、夏には湖、秋には山といったぐらいに冬には雪
毎年毎年雪ばかり見ていたら飽きるに決まってるか」

「飽きてるのは否定しないけど雪は好きよ？」

このような雑談を長々と俺とレティは続けていた
チルノは途中から自分が話しに入れないと思って紅魔館に戻って行った
俺と一緒に居た門番隊の子は暇らしくあやとりをして待っていた
その紐、今度美鈴に言って分けてもらおう、俺だってあやとりぐらいできるんだぞ？

気付いた時には既に日が傾いており、既に美鈴との戦いの時間になっていた
しかし体を温めていない上に話してばかりいたので体がまともに動かない
そんな状態で戦ったところで無駄にしかならないので美鈴には悪いが今回は無しだ。

「あら、もう夕方……
今日は楽しかったわ、楽しませてくれたお礼に食べないであげる」

「……食う気だったのか？」

「少しだけね
でも暇潰しになったし、色んな話しができたのは嬉しかったわ
また来てもいいかしら？」

「俺は構わないぞ
その時には向こうに居る門番に俺の事を言えば取り合ってくれると思う
俺からも美鈴に伝えておくから大丈夫だと思う」

「わかったわ
じゃあね戒魔、またお話しましょうね」

そう言ってレティは飛び立って行った
レティの姿を見届け、俺は紅魔館に戻っていく。

俺は目的を達成できた事で満足感で一杯になっていた
次の出会いもまた、戦い以外での出会いになると嬉しいと思いながが

らも……

紅魔館に戻った俺を最初に出迎えたのは美鈴ではなくナズナとフランドールだった
何故門に居るのかと思っていると……

「戒魔！
遊んでくれるって言ってたのに戻ってこないから心配したじゃない！
明日も雪が積もった場合ずっと遊んでもらうわよ！」

「え、いや、明日はチルノにかき氷を作る約束があるんだが……
それに今日休んだ分、鍛錬や勉強をしないと」

「駄目に決まってるでしょ！
私達が寒い中我慢して戒魔を待ってたのに来なかったのよ！
明日は絶対に私達と遊んでもらうからね！」

「ご主人様……」

「今回は戒魔少年が悪いですね
諦めてフランお嬢様達に付き合ってください
私としても戒魔少年との試合を待っていたんですよ？」

フランドール、ナズナだけならともかく、美鈴にまで咎められてはどうしようも無い
素直に謝るべきだな……美鈴に言われなくても謝るつもりだったが。

「……悪かったよ
でも明日はチルノが先約だからある程度時間は空けさせてもらうぞ」

「ところで戒魔、かき氷って何？」

「かき氷は……いいや、明日全員に作ってやるから楽しみに待ってろ」

俺が悪かったとは思うが強引に明日の予定を決められたんだ
これぐらいの仕返しはさせてくれ。

「ふーん……なら明日を楽しみにさせてもらうわ
早く屋敷に戻って暖まりましょ？」

「そうだな、じゃあ俺達は屋敷に戻るよ
門番、頑張れよ美鈴
後で差し入れをするから」

「差し入れですか？
ふふ、なら頑張らせてもらいますね
風邪にならないように注意してくださいね」

そう言って俺達は紅魔館に戻った。

翌日、かき氷はチルノに大評判だったのでまた作る約束をされた
ナズナとフランドールは寒いが美味しいと我慢して食べた結果、腹を下してしまい遊べなくなった。

更に翌日
かき氷の仕返しに三日ほど強引に遊ばされた
勉強が……鍛錬ができないーーー！！！

続く

元世界編　新十五話【三日目……アルス？】
表との時間差……三十日

視点　アルス

今日は僕が霊夢の面倒を見る日
永遠亭まで行くのは骨が折れるので鈴催に神社まで来て貰えるよう、
砲魔から伝わっているはず
伝わっているはずなのだが……

「時間になってから三時間も過ぎているのにまだ来ないとはどういう事？」

そう、鈴催が来ないのだ
既に正午を過ぎてから三時間
昼頃という話しなのでとっくに来ていてもおかしくないのに鈴催は来ない
鈴催の実力と能力から考えても何か起こるとは思えないんだけど……

まさか永仙に捕まったとか？
霊夢を渡すように言ったり実験台にするとか……って、それは無いか
そんな事をすれば紫々に消される事ぐらい分かっているはずだしね。

それから更に三時間、そろそろ日が暮れ始めてきた
鈴催の奴……本当に何をしてるんだろう？

様子を見に行きたいがすれ違いになっても困る
誰かに頼もうにも誰も来ないので頼めない
早い話が手詰まり状態という訳だ。

そして最終的に鈴催が来たのは夜の二十時
僕は更に四時間待たされたという事になる。

「こんなに待たせるなんて……何をしてたの？」

「ごめんアルス、謝るから人形に持たせてる槍をどけさせてくれない？」

本当に悪かったという顔をしていたので一端許してやる事にした理由を訊いて納得できなかった場合は改めて槍を向けると決めているが。

「で、何をしてたらこんなに遅くなったの？
遅くなるのが分かっていたなら兎妖怪にでも伝言を頼んでも良かったでしょ？」

「そうなんだけど……その……そういう事でさ……
だから……あの……そう、という事だったんだ」

「それで理解しろって言いたいの？」

「ごめん！　今のは完全に僕が悪い！
謝るから剣を持った人形で囲まないで！」

素直に人形を下げるけど剣は持たせたまま
いい加減に言わないと突撃させるという意味を含めている。

そしてそれは正確に鈴催に伝わっており
顔を少し青くしながら説明し始めた。

視点　鈴催

「ウドンゲ……いい加減に博麗神社に向かう時間だろ？」

「遅れたらアルスは怒るんじゃない？
僕としてはイナバが怒られてもどうでもいいけど」

「……心配なのは分かったけど予定で決まった事でだろ？
ほら、諦めて神社に行くんだ鈴催！」

そんなに怒られても神社に行ったら……神社に行ったら……

「神社に行ったら霊夢とお別れしないといけないじゃないか！」

「イナバは砲魔の我が儘で一時的に預かってるだけだろうがー！
イナバが霊夢に構ってばかりいると僕らの食事が適当になるだろ！
だからさっさと霊夢をアルスに預けてこい！！！」

そういう訳で輝貴様に強引に送り出されたんだけど
やっぱりすぐに別れるのは嫌だったから時間潰しに飛び回ってたんだ。

気がつけば日が沈んでいたし、そろそろ永遠亭に帰らない食事の準備をする時間が無くなってしまう
僕は一度博麗神社に向かってアルスにもう少し待っててくれと言おうと思い、神社に向かった。

視点　アルス

「と、いう訳でもう少し預かっていていいかな？」

こいつは……思った以上に子煩悩だったのか
まさかここまで大事にするとは思わなかった
下手をすれば……というか高確率で砲魔より良い親になる
だけど甘やかせすぎて駄目な子供になる気がするな。

僕としては預かってもらっても構わないんだけど
鈴催に任せてたら絶対に戻ってこない気がする。

だけど鈴催が居れば僕は楽できるし……仕方無い
鈴催は僕と一緒に神社に居て貰おう
明日になれば砲魔も戻ってくるし、一日ぐらい大丈夫だろ。

「預かるのは駄目だけど条件付きで一緒に居るのは許可する」

「条件？」

「面倒を見るのは構わないけど永遠亭で許可を得る事
面倒を見るのはこの博麗神社でする事
宿泊は構わないけど僕の邪魔だけはしないでくれ」

鈴催は少しだけ悩み、僕に霊夢を預けて急いで飛び出した
おそらく永遠亭に許可を貰いに行ったんだろう。

はぁ……今夜は面倒になりそうだな。

少年期編　三十五話【冬の妖怪】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

アリス・マーガトロイド／アルス・マーガトロイド
人形達の操り人

アルスの名前は本当に数秒で浮かび、特に違和感が無かったので即採用しました
二つ名には非常に悩みました……諦めてこんな普通すぎる二つ名にして……はぁ

簡易特徴
魔法の森に住み、人形師としてそれなりに名を売っている魔法使い
彼の作成する人形は無骨で色も二色しか無いながらも完成度と頑丈さは有名
更に軽く小型なので人形があまり無い幻想郷では見た目は無骨ながらも待ち運べるだけで購入の価値が有るとされている。

彼自身の性格は温厚であり、人情も持っているので誰に対してもそれなりに友好的である
しかし軽い癇癪持ちなのが玉に瑕、だがそんな事を気にする者はあまりいない
自身の人形に強い自信と愛情と信頼を寄せており、己の人形を馬鹿にする者だけは絶対に許せない
なお、砲魔が口にした無骨というのはアルスにしてみれば悪口ではなく褒め言葉になるらしい。

彼が使う人形は国と兵士を象徴としており

八体の歩兵　二体の騎兵　二体の僧正　二体の塔　一体の王妃
これらを一組として二組の白と黒の人形という名の兵士を操って戦う
更に彼自身は人形を操る時に自らを王と名乗り戦いに挑む
アルスはこれらの人形に名前を付けており、種類によって役割を分担している。

歩兵（ポーン）は小さく、動きも小さいが数が多いので纏めて倒さねば他の歩兵に刺される
騎兵（ナイト）の動きは変則的であり、更に速度も高いので見失っては倒すのは困難
僧正（ビショップ）は切り込み隊長のような役割をしており、素早い動きで攻めてくる
塔（ルーク）は王を守る為の盾として王であるアルスの近くで待機している
王妃（クイーン）は全ての能力が高く、動きも速いので最悪王妃だけで負かされる時さえ有る
王（キング）であるアルスは動きも遅く、力は低いが瞬発力が高いので瞬間的速度が高い。

当然ながらこれらを操っているのはアルスだが、何故このように役割と決めているかといえば実力を隠す為らしい
全力を出して負けてしまえば後が無くなってしまうからというのはアルスの弁
実際にこれで勝てるのだからアルスの実力は高いというのがよく分かる
戦いとは常に楽しくするものだというのがアルスの台詞である。

少年期編　三十六話【宴の準備】（前書き）

題名通りなので短いです（時間も間に合いそうにありませんでした）
普段している後書きの質問と答え（？）ですが
前話のも含めて今回もするのでちょっと多い……かもしれません。

今回は準備なのでかなり短いのですがご了承を……

少年期編　三十六話【宴の準備】

視点　戒魔

「明日の夜に宴を開催するわ
戒魔は料理、ナズナは大広間で宴の準備をしてちょうだい」

突然のレミリアの発言に食事中だった俺とナズナの動きは止まってしまった
明日の夜に宴？　しかも俺達に仕事までさせて……

「レミリア……別に俺が食事を作るのはいいナズナに準備をさせるのも本人が了承するなら構わないだが明日というのは突然すぎないか？」

「あら、あいつと付き合っていたのなら私の返事は予想できてるんじゃないの？」

レミリアの言うあいつとはレミレアの事だろう
確かにレミリアの言いたい事は分かるだから予想だって簡単にできる。

「……思い立ったから
他の理由が全く思いつかないな」

「さすが戒魔、よく分かってるわね
妖精メイドは何人でも使って構わないからお願いねナズナも妖精メイドを何人使っても構わないから」

「は……はぁ、私はご主人様が許可をくださるのでしたら構いませんが……
私はそういう知識は疎いので下手になると思いますが構わないんですか？」

「なら今すぐ美鈴かパチェの場所に行きなさい
美鈴はこういう準備をさせてたからそれなりにできる子だし
パチェには宴の準備をする為の本を探してもらえばいいわ」

また強引な……しかもパチュリーや美鈴まで巻き込むか
普段から巻き込まれてるだろうから慣れてるとは思うが……

いや、これは俺達にさせる事に意味が有るのか
普段とは違う料理の為に俺
普段とは違う雰囲気の部屋にナズナ
おそらくこれがレミリアの目的だろう。

だがレミリアにしては企画を出すのが遅かったな
今まで特に考えてもいなかったが、もっと早く言い出すと思ったんだが……

「今まで戒魔の話しばかり聞いてたからね
いい加減に戒魔の話しも尽きてきたんじゃない？
だから暫くは先の楽しみに取って置いて宴でも開こうと思ったのよ」

なるほどな、確かに俺の話す内容も尽きそうだった
レミリアとフランドールには俺が話せる事は事件や俺の事だけではなく
個人や果てには霊夢の事まで話した。

これ以上話す事といえば日常で起こったつまらない事を話すぐらい
もう俺が住まわせてもらう理由が無くなってしまった
この先……宿無しになるのか？
俺は宿無しでも構わないがナズナが宿無しになるのは許容できない。

……今はそんな事を考える必要は無いか
後で言われてから考えるとしよう。

「とりあえず俺達は明日の夜までに料理と大部屋の準備をすればいいんだな？」

「そうよ、期限は明日の夜まで
当然、間に合わせられるわよね？」

まぁ可能か無理かと言えば可能だろう
妖精メイドにも手伝ってもらって……美鈴は駄目だな
今回の趣旨は美鈴やパチュリーが手伝わない宴を開くこと
料理は上手だが美鈴を呼んでは本末転倒だ。

「妖精メイドを少し多めに借りるが構わないか？
それぐらいじゃないと間に合わないと思う
無理では無いだろうが雑になるか質素になる」

「好きなだけ使いなさい
ナズナも必要なら何人妖精メイドを使っても構わないわ
言う事を聞かないなら私の名前を出してもいい」

「え……っと……わかりました」

こうして俺達は明日の為に宴の準備をすることになった
準備は早朝からする必要があるし、今日はすぐに寝るか。

しかし食後すぐに寝るのは健康に悪いので二時間ほど休んでから眠った
俺は人間だから健康に気を使わないと簡単に死んでしまうしな……

視点　ナズナ

昨夜、レミリア様から宴を開くを言われて大広間の準備に来たんですが……

「あの……ここ、広すぎませんか？」

「紅魔館でも最大規模の部屋らしいですよ？」

私の独り言に返事をしてくれたのは妖精メイドさん
それなりに長く紅魔館でメイドをしているらしいです。

私はあまりこういう事の知識は無いのでお手伝いをお願いしました
長くメイドをしているので宴もそれなりに体験しているらしく
準備も後片付けも何度もしているというので頼りになります
……妖精でなければですがね。

「最初は掃除ですね
箒はどこに片付けたっけなぁ……」

妖精は基本的に頭が悪く、記憶力も悪い
経験や技術には信用できますが記憶力の悪さだけは信用できませんね
そういう意味では紅魔館もこんな妖精で保たせているのが凄いのか
それとも妖精でも余裕があるのか……どっちにしてもレミリア様は
凄いという事です。

「それにしても宴なんて何ヶ月ぶりでしょうか？
数ヶ月前に戒魔さんが来てからしてませんでしたし……」

「え？
以前は頻繁に行ってたんですか？」

「そこまで多くないけどね
戒魔さんがお嬢様とお話しているのは知ってますよね？」

「それは当然知ってますが……」

知らないはずが無い
私も参加したいと思っているぐらいです
それに私の方が先にご主人様に会ったのにフランドール様はお話の
仲間入り……
羨ましいと思いますがお話をしていただくには何か条件が必要なの
でしょうか？

「お嬢様は戒魔さんとのお話が気に入っていたみたいです
本当は宴も大好きなお嬢様が控えられたのは非常に珍しい事態なん
ですよ
妖精メイド達も宴を楽しみにしている者も多かったですしね」

それで何やらお屋敷が賑わっているんですね？

妖精は賑やかな事も好みますし、それが目的で紅魔館で働いている者も少なからず居るでしょう
それを自分も好きとはいえ、妖精メイドも参加できる吸血鬼という強さに惹かれるだけではなく、そんな所もあるからレミリア様には人望もあるんでしょうね。

「宴の準備って具体的に何をすればいいんですか？」

「基本的にはお掃除をして、部屋の整理整頓ですね
それが終わったら部屋の装飾をして見栄えを良くする事です
仕上げには花を添えたりすれば十分だと思います」

私の感性で内装を決めろって事でしたよね
お掃除を中心として内装の装飾をするべきですね
急いでしないと時間に間に合いませんし、早く始めましょう！

視点　戒魔

俺の仕事は料理らしいが……俺はそこまで料理は得意じゃないと言ったはずだぞ？
種類も少ないし、それなのに何故俺に料理をさせるのだろうか？

「戒魔様、今日は何をお作りになるんですか？」

「私達でも作れるお料理だといいね」

「うんうん、頑張って覚えよう」

期待している妖精メイドには悪いが今日は少し難しい物だぞ
洋食は俺でも難しいのがあるしな
まぁそれは俺が和食を得意としているからかもしれないが……

「最初は俺が作るぞ
その後はみんなで一斉に作ってもらう
間違っていても俺が注意するから安心して料理を続けてくれ
分からない事が有ったら続ける前に必ず俺に確認するんだぞ？」

「「「はーい！」」」

今回手伝ってくれるのは俺やレミリア、美鈴やパチュリーの為の料理を作る上位料理妖精メイドだ
下位料理妖精メイドは一般妖精メイド達の料理を作る者達の事を表してる。

上位料理妖精メイドは長く紅魔館に勤めていて、更に料理人として美鈴に鍛えられた者が多い
その為、彼女達が作る料理は和食や洋食よりも中華が多い
和食は好きだが苦手、洋食も好きだが無いが難しい
それに比べて中華は簡単だし美味しいからという意見が多いらしい。

俺からすれば油物が多い中華を食べ過ぎるのはあまり薦めたくないな
栄養面を考えるのなら和食が最も良いだろう
野菜も肉も魚も調理をしやすく、味も薄めなので健康に良い
洋食は作るのは簡単だが味が濃いので美味いが体に良くない。

しかし今回は宴であり、主催がレミリアなのだから洋食にするべきだと思う

俺に任せると言ったのだから和食にした方がレミリアも楽しそうにするのだろうが
他の者達、つまり妖精メイドは味の薄さや種類の少なさが嫌だろうし
美鈴のように多く食べる者には物足りないだろうな。

紅魔館で和食を好むのは俺と、俺に感化されたナズナと一部の妖精メイド
量も味も好みであるパチュリーぐらいだ
ちなみにレミリアは俺が作った和食はそれなりに好きだが和食自体はそこまででも無いとか
フランドールは味も量も物足りないらしく、お腹は多少膨れるけど食べた気分にならないらしい。

このように和食は少々不評なので今回は洋食にした
和食はまたレミリアに頼まれた時にでも作ればいいだろう
俺自身、そこまで料理は好きでもなければ得意でも無いしな。

何故俺が洋食を作れるかというと刹那や真苗に教わったからだ
西洋の紅魔館で執事をしているだけあって刹那の洋食はかなり美味かった
しかし料理をできる者は中華の美龍ぐらいのはずなのだが……どうやって洋食を覚えたんだ？

真苗は外で覚えたらしい、まぁ当然だが
外では洋食は下手すれば和食よりも店が多いという話し
一般的家庭でも洋食は多くの者に好かれているらしい
真苗はそんな外で育ったから洋食の方を和食よりも多く覚えていたそうだ。

ちなみに神奈と諏訪は古代神話の者なのに洋食の方が好きらしい

その事を知った砲魔は呆れた目を向けていたな……俺も少し呆れた
真苗は苦笑していたが自分の料理なので文句は言わなかった。

それはともかく、そろそろ始めないと時間に間に合わなくなるな
洋食は下拵えにも時間が掛かる物もある
急いでしないとお菓子まで手が回るかどうか分からない。

余裕なんて無い
さて、何から始めたものかな……

続く

元世界編　新十六話【四日目……砲魔帰還】
表との時間差……三十五日

視点　アルス

結局鈴催は再び神社に戻り、最後まで神社に残った
師匠達に怒られても構わないから霊夢と一緒に居たかったらしい
強引に出てきて本当に翌日まで神社で霊夢の面倒を見ていた。

僕としては助かったのは事実だし、楽になった
でももし永仙達に逆恨みされたらと思うとね……
頼むから鈴催、僕には被害が出ないように注意しておいてよ？

さて、そろそろ時間的に砲魔が戻ってきてもいい時間なんだけど……
砲魔の事だから確実に遅く戻ってくるだろうね
誰との約束でも必ず遅くなって来るという話しは多く聞くし
どうせ今回も遅れて帰ってくるに決まってる。

鈴催の事だから寧ろ望むところと言いたいだろうけど
僕としては砲魔が帰ってきてくれない限り、僕が家に帰れないから
早く帰ってきてほしい
人形の調整もしないといけないし、部屋の掃除の続きをしないとなぁ……

そう思っていたが、何やら遠くの空に何か黒い物が見えた
あんなに高速で動く黒い物……砲魔か凪しか居ないな
砲魔はまだ来ないだろうし、となるとあれは凪かな？

「……帰ってくるのが早かったね
普段は遅いくせにこういう時だけ早いなんて……」

「は？
もしかしてあの黒いのは砲魔なの？」

「……アルスには見えないの？」

「あんなに遠くの奴なんか見えるか！
見えるお前が異常なんだ！」

まったく……こいつはどんな視力をしてるんだよ！
目から能力を使うからか？
相変わらずよく分からない奴。

大分近づいた事でようやく僕にも確認できる距離になった
鈴崔の言う通り、あの黒いのは砲魔だった
これは正解させた鈴催か、それとも時間内に来た砲魔か
どちらに驚けばいいのだろう？

「よっと、今戻ったぜアルス……と、何故か居る鈴催
霊夢の様子はどうだったか教えてくれないか？」

それなりに機嫌は良さそう
どうやらこの休暇はそれなりに楽しめたらしい
これで暫くはこんな事をしなくなるだろう。

「初日の刹那は相変わらずだったみたいだよ
僕の日は真面目に面倒を見たし、特に変な事は無かった
昨日は僕が色んな場所を回ってアルスを待たせたからね
お詫びってわけじゃないけど昨日も霊夢の面倒を見たんだ」

微妙に本当の事だけど実際は違うよね？
霊夢の面倒を見たいから歩き回ってたんだろ？

「……まぁいいや
俺は今日から復帰するから鈴催はもう帰っていいぞ
手伝いは大歓迎だけどな」

「なら今日も手伝う
どうせ師匠達に怒られるんだったら連れ戻されるまで残っておくよ」

ちょっと待て！
確か永遠亭で料理をできるのはお前ぐらいだろ！？
それなのにここに残ってもいいのか！？

「ん、なにがあったのか知らんが頼む
二日も霊夢の面倒を見たんだったら感想を頼めるか？
まだまだ霊夢について知らないとならないんだ」

「そうだね……当然砲魔も知ってると思うけど……」

僕はもうこの二人を無視して魔法の森に帰り出した
こいつらは僕の事なんて忘れて霊夢の事で話している
なんか僕が居た意味無いよね？

はぁ……もういい、帰ろう。

少年期編　三十六話【宴の準備】（後書き）

レティとチルノの関係は？
チルノは作中の通り、嫌いではありませんが好きでもありません
喧嘩相手ぐらいでしょうか？
レティは暇潰しの相手ですので好きも嫌いもありません
同じく喧嘩相手ぐらいの認識でしょう。

かき氷ってどうやって作ったの？
書き忘れました……
パチュリーのオータムエッジでガリガリと削りました
氷は当然チルノが作成です
小豆は戒魔が煮ました。

レティも人食いするの？
そりゃ妖怪なんで人食いぐらいします
でなければ妖怪として生きていけません。

レティが手を出したら凍えてしまう人里って大丈夫なの？
そうならないようにレティは頑張ってくれています
寒すぎる時は寧ろ寒さを押さえてくれたりします
ですが基本的にそんな事はしませんので本当に危険なほど寒い時だけです。

あの後ってレティが来たの？
再登場は未定です
次年には登場するかもしれませんが今年は登場しないと思います。

そういえば今って何月ぐらいなの？

現在は十二月ぐらいですね、まだ年は明けていません。

普段の宴は誰が準備してるの？
美鈴が中心となって準備をしています
料理から装飾まで全てをするのでかなり大変です
時々パチュリーも命じられますが、適当なのであまり頼られません。

大部屋ってどれぐらい広いの？
学校の体育館二つ分ぐらい……でしょうか？
あまり知識が無いのでどれぐらいの広さに何人ぐらい入れるのかわかりません。

ナズナが何か妖精に対して黒くない？
チルノとは仲直りしましたが妖精に対しての悪印象はあまり良くなっていません
実際に頭が悪く、記憶力も悪いので間違った事は言っていないのですが……

結局戒魔は何を作ったの？
あまり料理には詳しくないので自己補完をお願いします
料理できる人なら説明できるんだろうなぁ……
次話で料理の細かい事を書くかどうかは現在未定です。

鈴催は大丈夫？
大丈夫ではありません、確実に永仙や輝貴に怒られます
料理ができない永遠亭の者達からすれば鈴催は必要不可欠の存在です
鈴催が居ない間は人里での外食か適当に作るかでしょう
きっとかなりの恨みを向けられると思います。

砲魔は何をしてきたの？

魔法の実験やストレスの発散です
魔法の実験は簡単な事しかできなかったみたいですが少しだけ満足したそうです
ストレスの発散は飛び回ったり撃ちまくったりして暴れたそうです
当然ながら博麗神社、紅魔館や永遠亭に被害が行かないように細心の注意を払っています。

少年期編　三十七話【宴の正装】（前書き）

また風邪になりました……喉が痛いし頭が痛い……ついでに咳も止まらない
今回も繋ぎ話しですね
宴が本当に始まるのは次話……だと思います。

八月十日、絵を描いている知り合いから絵を描いて貰いました
正装のレミリアです
絵に関する事、感想などは絵師様にお願いします。

少年期編　三十七話【宴の正装】

視点　戒魔

なんとか準備が終わった……今は夕方だからかなり危なかったな
俺と妖精メイド達は疲れ切っていた。

俺は椅子に座っているが背もたれに背を預けて動く気力も無い
妖精メイドの大半は床に座っており、一部の妖精メイドは壁にもたれている
急いで準備していたので全員体力は殆ど残っていない
後でパチュリーに回復してもらおうか？

料理の方だが、後は仕上げをして暖めるぐらいだ
完成させては冷めてしまうので味が落ちる
レミリアにそんな物を出しては怒られるしな。

会場の準備は終わったのだろうか？
確認に行きたいのだが疲れているので動きたくない
誰かに頼もうにも誰も動く気配が無いので無理だろう
仕方無い……厨房から出て誰かに頼むしかないか。

俺は疲れている体に鞭を打って厨房から出る
良い所に妖精メイドが歩いていたので捕まえた
大広間の確認とパチュリーに回復魔法を頼みたいから来て欲しいと言っておいた
忘れないか不安だが言わないよりはいいだろう。

暫くして先ほどの妖精メイドが戻ってきた
パチュリーに伝える事は忘れていたみたいだが大広間については覚えていた
彼女が言うには大広間の準備も終わっていて何人か集まり始めているそうだ。

時間的にもそろそろレミリアが起き出してもおかしくない時間だ
残りは妖精メイド達に任せ、俺は大広間に向かう事にした
レミリアから絶対参加と言われている俺が向かわないわけにはいかないからな。

無理矢理体を動かしながら大広間に移動していたら途中でフランドールに会った
向かう方向からフランドールも大広間だろう
どうせだったので声をかけておくか。

「大広間に向かってるのかフランドール？」

「あら、おはよう戒魔
妖精メイドがお姉様からの伝言で大広間に向かうようにって言われたの
そういう戒魔はどこに行くの？　随分疲れているように見えるけど……」

「俺もレミリアに言われて大広間に行く所だ
疲れてるのは色々とレミリアに頼まれてな
それを片づけていたんだ」

言われたのは昨日だし完全に片づいてないけどな
どうやらフランドールは宴の話しは聞いてないらしい

なら俺は黙っている方がよさそうだ
レミリアなら教えてもいい事ならば自分から教えているはずだ。

「それにしてもなんだか慌ただしくない？
賑やかというか煩いというか……」

「そういえばフランドールは地下に居てばかりだったんだな
上で普段何をしてるのか知らないのか？」

宴を開く事は多そうだし音や声も大きいだろうから地下まで聞こえるかと思うんだが？

「知らないわ
基本的にずーーーっと眠っていたし
時々パチュリーに現状報告をお願いしに地上に出るぐらいだったから」

それなら普段から宴をしていても分からないか
そういえば今回は気紛れでの宴らしいがお題目とかは無いのか？
フランドールが出てきたからというには遅すぎるだろうし……

「まぁ行けばわかるだろ」

「そうね、行きましょう」

こうして俺達は大広間に向かった。

大広間には既に数十名もの妖精が集まっていた
当然と言えば当然だが人間はやはり俺だけだった。

「うわぁ……こんなに妖精が集まって何をするのかな？
もしかしてお姉様に対して下克上でもするのかしら？」

「紅魔館のメイドにそれなりに満足している妖精が何故下克上をするんだ……
集まっているのは彼女達もレミリアに呼ばれたか、自由参加だと思うぞ」

大半が自由参加だとは思うがな
レミリアが態々妖精を呼ぶ必要は無い
呼ぶとしてもチルノと大妖精ぐらいだろうか？

「戒魔はこれから何をするか知ってるの？」

「あぁ、その為の準備をしてたからな
フランドールに教えなかったのはレミリアの意向だと思う
俺だって昨日の夜に突然言われたから驚いたんだ」

俺から内容を教えてもらえないと悟ったフランドールは気落ちしていた
教えた方がいいのかとも思ったが勝手な事をするわけにもいかないので諦める。

「あ、ご主人様にフランドール様
準備は終わっているので後はレミリア様が来る事を待つだけです
どこかに座ってはいかがでしょうか？」

いつの間にやら来たナズナに案内され、適当な席に座って宴の始まりを待つ
フランドールは落ち着かない様子だが混乱しているわけではなく

何が始まるのか楽しみにしているという感じだ。

ナズナも準備に疲れているらしく、俺達と一緒に椅子に座ってからは動こうとしない
よくよく周りを見渡せば疲れている様子の妖精メイドが多い
どうやら準備が終わったまま休み、そのまま宴に参加するつもりのようだ。

暫く待っていると扉が開かれ、パチュリーが入って来た
当然だが彼女もこの宴に呼ばれた一人だろう
彼女の登場に気付いたフランドールが手を振ってパチュリーを呼ぶ。

パチュリーはフランドールに気付いたがこちらに来る気は無さそうだ
端の方の小さい場所を陣取り、手に持っていた本を読み出した
パチュリーらしいが無視するのはどうかと思うぞ？

案の定フランドールはつまらなそうな顔になる
しかしパチュリーの性格はある程度理解できているので諦めた
睨むのは押さえられなかったようだがな。

最近思うのだが、フランドールは俺の思った以上に子供っぽい所がある
地下に籠もっており、他人との会話の少ないフランドールの心が幼いのは当然か
いくらパチュリーと話していたといっても回数は少なく、パチュリーもまだ百歳に満たない若者
四百年以上を生きているフランドールとは生きている年月が違うから話した時間も当然短い。

それでもフランドールの頭が良いのは本程度は与えられていたから

だろうか？
もしくはフランドール自身の資質に依るものなのか……
どちらにせよフランドールの頭が良いのは変わらないな。

フランドールの事はさておき、次は美鈴が入って来た
美鈴はフランドールが知らせるまでもなく俺達の存在に気付いた
真っ直ぐ俺達の座っている所まで来る。

「おはようございますフランお嬢様
戒魔少年達もこちらに来ていたんですね」

「おはよう美鈴
美鈴は今日何が有るのか知ってる？」

「え？　えぇまぁ……一応は
もしかして知らないんですか？」

「レミリアから聞いてないらしいから俺からは教えてない
これもレミリアの意向かと思ったからな
美鈴はどうする？　フランドールに教えるか？」

「どうしましょう……フランお嬢様は知りたいですか？」

言い渋る美鈴にフランドールは悩む
聞いてもいいものなのか分からず、だからといって知らないのは寂しい
多分そんな事を考えてるんだと思う。

「うーん……知りたいけど戒魔の言う通りお姉様に考えがあるんだったらと思うとね

でも知りたいし……でもお姉様に目的があったらと思うと……どーしよ？」

「無いと思いますが単にお嬢様が来るよう言ったけど内容を言い忘れただけかもしれませんよ？
お嬢様は抜けてる所がありますしね」

従者としてそんな事を言っていいのだろうか？
しかし従者に寛大なレミリアの性格から考えてもあまり怒るとは思えないな
別に従者でもない俺やナズナにもかなり寛大だ。

精々少し不機嫌な感じになるがすぐに戻るだろう
舐められる要素にしかならないが、これもレミリアの人望になるだろう
寛大で甘いのは身内だけ、敵には甘い姿を決して見せないだろうからな。

「やっぱりいい
もし忘れてるだけだったら後で怒っておく
目的があるなら素直に楽しむ事にするわ」

意地を張るフランドールを見て美鈴は苦笑する
俺はフランドールの気持ちが分かる
レミレアもこういう焦らすような事が多かった
もっとも、今回のような時は言い忘れの事が圧倒的に多かったがな。

こういう時にこそ刹那が居ると楽なんだ
あいつはレミレアが何か失敗をしてもすぐにどうにかしてくれる
言い忘れの場合は言いに来てくれるし、行動が早く速い

刹那の存在がどれほど紅魔館にとって重要かと思える。

そんな事を考えている内に大分時間が過ぎていたようだ
沢山有った席は埋まっており、立っている者も居る
料理も仕上げをされ、配られ始めている
後は主役であり、主催者であるレミリアが登場するのを待つだけだ。

ナズナは俺が料理をした事を知っているので早く食べたいと雰囲気で語っていた
しかし主催者が現れるまで食べられないという程度の礼儀は教えているので我慢止まり
レミリアの席を横目で見ながら待っている。

フランドールはあまり見ない食べ物に興味をそそられているようだ
幻想郷では和食が主流なので西洋の存在であるフランドールも洋食はあまり見ないらしい
更に言うならばフランドールが地上に出てきたのは最近、豪華な食事は初めてだろう
それでも礼儀を弁えている所はさすがレミリアの妹といった所だろう。

美鈴は料理を見て俺が作ったと予想しているだろう
洋食を作れる存在は刹那や真苗に教えてもらった俺ぐらいしかできないのだ
どんな味なのか楽しみにしており、レミリアが現れるのを今か今かと待っている
従者が主よりも食欲を重視……それでいいのか門番よ。

パチュリーは遠くの目立たない席に座っているのでここからでは見えない

しかし相変わらず本を読んでいるとしか思えない
もし料理を楽しみにしてくれるのならば嬉しいが……

俺は自分の料理なので特に楽しみは無い
俺の楽しみはレミリアがどんな宴にする事ぐらいだ。

時間も頃合いになり、食事も配られた
後はレミリアが姿を現すだけだが……遅い
ドレスにでも着替えてるのだろうか？

レミレアが己の低い身長を利用して女装して宴に現れた時には飲んでいた茶を吹いたなぁ……
その時にドレスという服の存在を知った
真苗が言うには結婚式や宴（パーティ）での女性の正装とか何とか。

ちなみに、男はタキシードという服を着るらしい
見た目は刹那の執事服によく似ているとか
その時にしたレミレア（女装）と刹那の踊り（ダンス）は多くの者を魅了しただろう
妖精メイドの大半が赤い顔になって二人を見ていたしな。

扉が開かれる音が聞こえた
場所は大広間の入り口、そこから現れたのは紅魔館の主レミリア・スカーレット
以前レミレアが着ていたドレスに似た美しいドレスを纏った紅の少女が姿を現した。

大広間は静寂に包まれた
俺としてもこんな即席の宴にレミリアがここまで本気で着飾るとは思わなかった

それは俺だけではなく美鈴やパチュリーも同じだろう
少なくとも美鈴は唖然とした顔をして身動き一つ取らない。

ナズナとフランドールはレミリアに見入っていた
女性として美しい姿は見逃せないのだと思う
そしてそれはこの場に居る妖精達も同じだったようだ
誰もがレミリアの動きを何一つ見落とさないように真剣になっている。

誰一人声を出さない……いや、出せない
そんな事に何ら反応を示さないレミリアは真っ直ぐ己の椅子に向かう。

無駄の無い動き、足音さえ彼女を美しくする為の要素にしかならない
布の擦れる音とてより美しくなる為の演出になっている。

そして己の椅子の前に立ち止まり、レミリアは俺達の方に振り返り
椅子に座る
その瞬間、多くの者の時は動き始めた。

今更ながらレミリアの格好を説明しておこう
彼女の着ているドレスは赤、血の色ではなく鮮紅という感じのする
鋭い色だ
ドレスの袖は腕七分辺りまで有り、手首まで届かないが肘より長い
スカートの部分は足首がなんとか見える程の長さであり、黒い靴と
真っ白な靴下が見え隠れする
普段かぶっている帽子は脱いでおり、頭には何も着けていないが耳
に小さいが桃色に輝く耳飾りを着けていた
腰には巨大な真っ白なリボンを付けており、リボンはレミリアの上
半身ほどの大きさの本当に巨大なリボンだった

首に白く輝く首飾りを着けており、真っ赤なドレスに首飾りはとても映える
最後に羽、黒くて大きな翼は大きく広げられており、赤と白の多い格好故に更に大きく見える
＞ｉ１０４３９―１４９５＜

レミリアの姿は所々装飾はしているがとても単純だ
しかし、その単純さがレミリア自身の美しさを引き立てていた
レミリア……お前は美しいドレスすら己の美への糧とするか。

今から始まるのは主催者からの演説
こんな急過ぎる宴にここまでしたんだ……何が目的だ？

続く

元世界編　新十七話【度の過ぎた溺愛】

視点　砲魔

あの息抜きから一月ほど過ぎた
鈴崔なんだが……毎日毎日一日すら開けずに来る
早朝に来ては夜中に帰るという毎日を送っている鈴崔
永遠亭の家事とかはいいのか？

そう思い、機嫌が悪くない時に尋ねてみた
返答は問題無い……だとよ。

「出る前に毎食の用意はしてるし
寝る前に家事を終わらせてる
文句を言いたくても言えないのさ」

……言ってるぜ？
お前が寝ている時になぁが来て愚痴を言いに来るんだ
面倒だからどうにかしたいんだがな……

「鈴崔が霊夢に着きっきりになってから永遠亭の空気が悪いんだ

輝様と喪紅の喧嘩を止められる奴が居ないだろ？
永様も弟子の不在で機嫌悪いしさ
俺だって話し相手が居なくなってつまらない
だから砲魔、早く鈴崔を帰してくれない？」

そうなぁが言ってきてから早半月
一向に進展の無いままだから内心では結構冷や汗ものなんだぜ？

なぁの話しだと鈴崔は家事以外何もしないらしいし会話さえ滅多に無い
珍しく話したと思ったら霊夢の事しか話さない
果てには霊夢の事で邪魔したら視界をぶらされて幻覚を見せられて逃げられたとか。

そんな事をしても平気で永遠亭に戻る鈴崔の度胸が凄いな
当然怒られたらしいが霊夢の話しにすり替えられて説教からも逃げられたらしい
それで最近の永仙は苛々していて永仙に近づける者が殆ど居ないとか。

輝貴は輝貴で食事の味が落ちているとか叫いてるらしい
なぁ自身も最近楽しくないと言っていたしな。

霊夢の面倒を見る手伝いをしてくれるのは嬉しいのだが
他の事を後回しにしてまで来られても俺が迷惑だ
いい加減その事を伝えた方がいいな。

……そう思ったんだけどなぁ
この姿を見たらその気が失せていく……

「ほら霊夢、こっちこっち
はい、はい、はい、はい、はい」

最近殆ど完全に歩けるようになった霊夢にかけ声を掛けながら応援している鈴催
その鈴催に嬉しそうにしながら近づいていく霊夢
鈴催に抱きついたら鈴催は霊夢の頭を撫で、霊夢は喜ぶ。

こんな……こんな姿を見せられて出て行けなんて言えると思うか？
鈴崔は幸せそうだし霊夢は嬉しそうだし楽しそう
この空気を壊すのは……遠慮したい。

すまない輝貴、永仙、なぁ
俺は弱い奴なんだ……だから自力で鈴催をどうにかしてくれ
本当に悪いな。

少年期編　三十七話【宴の正装】（後書き）

結局戒魔って何を作ったの？
……スルーの方向でお願いします。

チルノと大妖精は来てるの？
今回は来ていません
来る事自体少なく、今回も呼ばれたわけでも無いので霧の湖で遊んでると思われます。

妖精メイド達は何故それなりに満足してるの？
仕事さえすれば基本的に自由だからです
更に雨風を凌げ、食事や寝床まである場所なので仕事があっても頑張れます。

フランドールのキャラが固まってないの？
そういう訳ではなく、真剣な時ではない日常では見た目相応の性格としているつもりです
作中にも書いた通り、フランドールはコミュニケーションを殆どしていません
ですので精神がぶれていてもおかしくないと思っています
これが原作の情緒不安定というのを出せていると思いたい……

美鈴ってレミリアの事をどう思ってるの？
自分が守っている館の主人であり、雇い主です
忠誠は誓っていますがそこまで上下関係という意識がありません。

最近カタカナ多くない？
服装とか装飾品に関しては妥協しました

それでもできるだけ少なくするつもりですが……スカートとかの和名って何さ？

レミレアの……女装？

ショタですので女装も大丈夫所か似合います

レミリアが男装しても似合うと思うんです。

少年期編　三十八話【二度目は本当の踊り】（前書き）

あ……頭痛い……喉……痛い
そのせいか、メモ帳で全てを選択中に削除してしまった瞬間は泣きそうになりました
まぁ保存していなかったので大丈夫でしたが……危なかった。

最終的に書きたい事は書けずに宴は終わりです（続きそうですが続きません）
これはこれでいいかと勝手に納得しておきます。

少年期編　三十八話【二度目は本当の踊り】

視点　フランドール

お姉様ったらあんなドレスまで着て何をするつもりなのかしら？
というか私はまだ何をするのかも知らないんだけど……
でも本当に綺麗だなー……私もドレスを着たらあんな感じになるのかな？

「今日は突然の宴に集まってくれて感謝するわ」

お姉様の声は大きな声でも無いのに大広間によく響く
これが宴……ところで宴って何？

「今回の宴を開いたのには訳が有るわ」

訳はいいから宴が何か教えてくれない？
と言ってもお姉様は今は向こうに居るんだから教えられないし
仕方がないので近くに居た戒魔に小声で訊く事にした。

「ねえ戒魔、宴って何？」

「……知らなかったのか？
宴というのは……どう言えばいいんだ？
まぁお題目を名にして大勢でする食事会……かな？」

あんまりよく分かんなかったけど大体予想はできた
要は何かと理由を付けて大勢で楽しくお食事をする事だと思う

多分これだけ分かっていれば十分。

「先日、私の妹であるフランドールが誕生日を迎えた！
私自身フランドールと接する時間が少なかったので忘れていたけど
思い出したからには盛大に誕生会を開こうと思い、この宴を開く事
を決めた！」

……そういえばそうだったっけ？
本人である私も忘れてたしお姉様も忘れるのも当然ね。

でも準備したのって戒魔やナズナ、妖精メイド達よね？
お姉様はずーーーっと寝てたじゃない
そして主役は私のはずなのにお姉様が着飾ってどうするのよ
なんか色々と変になってきたから混乱してきたわ。

「フランドールの誕生日と知っていたらケーキでも作ったんだがな
……
レミリアの奴、こんな重要な事を黙ってるなんて何を考えてるんだ
？」

「戒魔、ケーキって何？」

「聞こえたか？
ケーキというのは知り合いに教えてもらった洋菓子の事だ
聞いた話しではこういう祝い事に食べるような物らしい
今度改めて作るから今回は我慢してくれ」

作ってくれるのは嬉しいけど相変わらず色々と知ってるのね
向こうで様々な人と触れ合ってきたからかしら？

「私が許す、今日は楽しみなさい！
全員杯を持て！」

私達の前に置かれていた飲み物を持つ
美鈴の前にはお酒が置いてあったけど、私を含めて戒魔とナズナは
果汁水（ジュース）だった
でも、戒魔とナズナはともかく私も果汁水（ジュース）？

「我が妹、フランドールの誕生日に……乾杯！」

「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」

「え、えっと……乾杯？」

戸惑っていて出遅れた私以外の全員の声が響き、直後に私の声が小さく響く
しかし私の声は乾杯の声の直後には騒がしくなっていたので誰にも聞こえなかった。

……と思っていたけど戒魔や美鈴には聞こえてたみたい
私の方を見て小さく笑っていたから絶対に聞こえていたはず
そんな優しそうな顔で見ないでよ……恥ずかしい。

大勢の妖精メイド達が食事に群がる
一部の妖精メイドは椅子に座ったままのんびりと休んでいる
私達はどちらかと言えば後者に近かった。

戒魔は自分の料理なので慌てる必要は無く
ナズナは急いで食べようとする性格じゃないから後でのんびり食べようとしてるんだと思う

美鈴もナズナと同じように考えてると思う。

私は果汁水（ジュース）を飲みながら落ち着こうとする
お姉様の突然の発言と行動で頭の中が回っている感じ……早く落ち着きたいわ。

のんびりと果汁水（ジュース）を飲む私の前にお姉様が来た
お姉様は私と違って果汁水（ジュース）ではなくお酒を持っている
少し不公平じゃないかと思うけど、お酒に慣れていない私がこんな大勢の前で飲むのも拙いかもしれない
酔っぱらってどうなるのか分からないから我慢しておく方がいいと思う。

「フラン、楽しんでるかしら？」

「え？　えぇ、まぁ」

「あのなレミリア、突然自分の為の宴と言われたら楽しむ前に混乱するのは当然だろ？
そもそも宴の言葉さえ知らなかったフランドールに楽しめというのが無理な話だ」

返事に困窮している私の変わりに戒魔が答えてくれた
どう返事すればいいのか分からなかったからとても助かる
実際に楽しんでいるかと言われれば何が何やら分からない以上、否としか答えられない。

「宴を知らなかったって……それは私の失敗だったわね
フランは地下に長い事居たから知識が多くないというのは知っていたつもりだったけど

一部の言葉を知らないとは思わなかったわ」

「それには同意するぞレミリア
まぁフランドール、何をするのか分からなくても構わない
今は素直に楽しむ事を考えればいい
それがこういう宴を開いた主催者に最も喜ばれる事だ」

そういう物なのかな？
でも楽しむと言われてもどう楽しめば……

「お嬢様に戒魔少年、フランお嬢様は宴の楽しみ方を知らないのでは？
宴自体を知らなかったのですからそこから教えるべきだと思います」

「ふむ、美鈴の言う事にも一理あるわね
なら戒魔、少し私と踊り(ダンス)なさい
あいつと付き合ってたんだから踊り方ぐらい教えてもらってるでしょ？」

あいつ……お姉様の言うあいつは……確かレミレア
お姉様はレミレアの事が気に入らないらしいけど……
戒魔が知っているはずが……あるわね、刹那とかいう執事なら教えてたはず。

「確かに知ってるが……俺に踊り(ダンス)を教えたのは刹那だぞ？
一体何時間教え込まされた事やら……」

相変わらず苦労してたのね戒魔
少し遠い目をしてるわよ？
美鈴も引いてるし……お姉様は気遣っているしね。

「……まぁいいわ
付き合いなさい戒魔、私と踊れる事を光栄に思いながらね」

「レミリア……そこまでめかし込んでいるお前と俺が釣り合うと思うか？
それ以前に今の俺の服で踊れるはずが無いだろう」

そう言われてお姉様は戒魔の服装を見る
今日の戒魔はこういう場だからか着物だった
和服の戒魔と洋服のお姉様
……意外と悪く無い気がするのはどうしてかな？

「釣り合うとか気にする必要が有ると思う？
戒魔、貴方は私の何のつもりなのかしら？」

「何って、友人に決まってるだろ？
他に俺達の関係を表す言葉が有ると思うか？」

戒魔は私を含め、私達紅魔館の者の事を友人だと思っている
別に悪いとは思わないけど、お姉様や私、美鈴やパチュリーと妖精メイドが同列に見られている感じがする
……もしかして私が一番立場が低いんじゃないかしら？

お姉様は家主であり、怪しい自分を住まわせてくれている恩人
美鈴は武術の、パチュリーは魔法の先生で妖精メイドは世話をしてくれる
ナズナは戒魔の使い魔だから立場が高いのは当然ね。
なら私は？

私は戒魔に何もしていない
別にどう思われても構わないけど一番低く見られるのは何だか嫌
私も戒魔に何かしようかなぁ。

「友人なら少しぐらい私のお願いを聞いてくれてもいいんじゃない？」

「友人だからといって何でも言う事を聞いてくれるはず無いだろ？」

あ、なんか危なそうな雰囲気……
今回はお姉様が悪いわね、友人だからって言う事を聞かせるのは……ね？
戒魔が反発するのは当然よ。

美鈴だってお姉様が悪いと分かってるから何も言わない
ナズナは慌ててるだけで何もできない
パチュリーは遠くに居るからナズナ以上に何もできない。

睨み合っていたお姉様と戒魔だけど
先に目を逸らしたのはお姉様、その事は私には意外だった
お姉様は当主という立場、そして性格共に誇り高い
自ら負けを認めるなんて……一体何故？

「はぁ……今のは私が悪かったわ
でも私を相手に踊れるのは戒魔ぐらいしかいないんだもの
戒魔に頼むのは当然でしょ？」

「俺だけ？
美鈴やパチュリーはどうなんだ？」

私が候補に居ないのは当然
私が踊れるなんて誰も思っていない
心外だと思わないでもないけど、実際に踊れない私が何を言っても
負け惜しみね。

「私がお嬢様のお相手なんて無理に決まってるじゃないですか
お嬢様は当主、私は門番……立場が大きく違うんですよ？
そもそも私は踊れますけどお嬢様のお相手をできる程上手ではない
んです」

「パチュリー様は体力が無いと思います
あんまり関係無いと思いますが私はそもそも踊れません
ですのでご主人様しかレミリア様のお相手ができるとは……」

まさかナズナまでお姉様の味方をするとは思わなかったわ
彼女の性格なら嫌がると思ったんだけど、自分が踊れないからかし
ら？
それとも単に戒魔の踊り（ダンス）が見たいだけとか？
どちらかと言えば後者のような気がするわ。

「……はぁ、わかった
久しぶりだからあまり上手くできないが勘弁してくれよ？」

「あら、踊ってくれる気になったの？
別に上手さには期待してないわ、私と踊れるだけでも十分よ」

その言い方は酷くないかしら？
案の定戒魔の顔が不機嫌に染まる
でもすぐに落ち着いて溜め息を吐く
最早お姉様の事で怒るだけ無駄だと悟っているみたい。

戒魔は無言で立ち上がり、お姉様の手を取る
お姉様は笑顔を見せ、戒魔の手を引いて大部屋の中央に向かう。
中央に向かっている途中で妖精メイド達が何事かと振り返るも
何をする気なのか分からなかったらしく、首を傾げるものの無視をしている
一部の妖精メイドは何をする気なのか気付いたようで二人に注目していた。

中央に立ち、お姉様と戒魔は音楽も無いまま踊り出す
戒魔の動きは思った以上に滑らかで、想像以上に綺麗に見えた
逆にお姉様の動きは少しぎこちない……どうしたのかな？

「レミリア様の動き……ご主人様より鈍くありませんか？」

「私もそう思います
私の予想になりますが、お嬢様も踊るのは久しぶりなのではないでしょうか？
お嬢様と共に踊る者自体がそう滅多に居ませんし
それに比べ、戒魔少年はかなり上手な人に教えてもらったようですね
お嬢様より踊り（ダンス）が上手いとは……教えた者は凝り性なんでしょうか？
あそこまで極めさせるには下手すれば年単位必要でしょうに……」

そんな話しをしている間にもお姉様達の踊り（ダンス）は加速していく
いつの間にか完全に戒魔が主役になっている踊り（ダンス）
観客である私達や妖精メイドは誰一人目を離せない

足運び、体の動かし方、腕の角度
素人の私から見ても戒魔の動きは凄かった

刹那はそれほど厳しかったのかと思ってしまう。

一方、お姉様も踊り方を思い出してきたようで様になってきた
最初こそ戒魔に着いていくという感じだったけど
今では戒魔と同等にまで動けるようになっている。

主導権を奪おうとするお姉様
自然と主導権を握っている戒魔
暫く眺めていたけど、最終的に主導権はお姉様が奪った
戒魔は奪われた事に気付き苦笑、お姉様に合わせるように踊り出す。

お姉様達が踊っていたのはどれほどの時間だったのだろうか？
数分な気がするが、数時間も見ていた気もする
つまり、時間が気にならなくなるほど集中していたという事だ。

最後に戒魔へ体を預けて手を広げるお姉様
戒魔はそんなお姉様を片手で抱きながらも、逆の手を広げた
どうやらこれが決めらしい。

数秒間、物音一つしなかった
すると突然妖精メイドの一人が勢いよく立ち上がり、大きな音を立てて拍手をし始めた
それを切欠に大広間に居る妖精メイド全員が立ち上がり、拍手が巻き起こる。

気付けば私も立ち上がって拍手をしていた
美鈴は座ったままだが笑顔になって拍手をしている
ナズナなんて泣きながら拍手をしていた、感動したのかしら？

お姉様と戒魔は拍手喝采の中、こちらに戻ってきた

途中、お姉様は妖精メイド達に手を振ったりする
戒魔は顔を赤くして無表情を通してる……どうやら恥ずかしかったらしい。

席に戻ってきた戒魔はやる気の無い表情で椅子に座り、溜め息を吐く
私達はその戒魔の様子に苦笑を浮かべるも、ナズナだけは戒魔に凄いとか格好良かったとか言ってる
戒魔はそんなナズナを適当にあしらい、果汁水（ジュース）を飲んで落ち着こうとしている。

お姉様も疲れたらしく、椅子に座ってお酒を飲んでいる
小さな汗をかきながらも、お姉様は優雅であろうとしている
その姿は素直に凄いと思うけど、私は自然な姿のお姉様の方が好きだな。

だけど最後に一言言わせてお姉様
この宴……元々私の為に開いたはずなのに
何故お姉様や戒魔が主役みたいになってるの？

続く

元世界編　新十八話【砲魔主夫】
表との時間差……六十日

視点　砲魔

もう鈴催が神社に居る事が当たり前になっている
永仙も鈴催の事は完全に諦め、料理の感を取り戻す為に勉強中らしい
輝貴はその練習台だが、鈴催の事で苛々していた永仙がおとなしくなって楽になったそうだ
なぁは鈴催が体を壊さないように栄養剤とかを持って来てくれる。

実は一ヶ月ほど前から鈴催はずっと神社に泊まってる
永仙が諦めたのはその頃だったっけな……

で、その鈴催だが
霊夢を溺愛しているだけではなく、躾けとかも真面目にしていた

俺としては甘えさせるだけ甘えさせてそんな事に気を配るとは思わなかった。

なんか俺が霊夢の事を頼まれたのに鈴催の方が子育てを頑張っているという……

ちなみに俺はそこまで霊夢の面倒を見ていないが、変わりに家事全般をしている

躾けとかを鈴催がしなかったら俺がしようと思っていたが

鈴催は忘れていなかったので俺は家事に力を入れている。

鈴催だが、今日は霊夢を連れて庭で遊んでいる

最近霊夢は走れるようにまでなったので鈴催が連れ回しているのだ

何度も転けたり倒れたりする霊夢だが鈴催はあまり助けない。

自身に医療の知識も持っており、更に薬も持っているからだ

更に今の間に痛みに慣れさせる為でもあるらしい。

痛みを覚えさせるという事に疑問を感じ、鈴催に尋ねてみた

鈴催が言うには博霊として産まれ、生きていくからには痛みは絶対だからと

霊夢の事を先まで考えて行動している所が凄い。

俺にはそんな事まで思いつかなかっただろう

親代わりとして、俺は鈴催に絶対に敵わないと思う

これが親としての愛情なんだろうか？

鈴催は本当の親では無いが……でも実際に愛情は強いとは思う。

話しは逸れるが、最近喪紅がよく神社に来るようになった

鈴催が不在で止める者が居ないから輝貴との喧嘩が最近過激になってきたらしい

このままでは本気で殺し合いにまで発展してしまうので永遠亭に近づく事を止めるとか
元々喪紅は温厚な性格なので喧嘩はともかく、殺し合いは好かないのが原因だ。

なゑに鈴催の様子を見るように頼まれたらしく、そのついでに霊夢の様子を見に来ており
最近は鈴催と仲良く話していたり、霊夢の事を可愛がっている。

そのなゑだが、鈴催に栄養剤を持ってくるが、その回数は意外と少ない
その変わり量が多いのだが……どうやら鈴催の不在は永遠亭でかなりの混乱を呼んでいるとか
騒ぎを押さえたり、輝貴や永仙が散らかした物を片付けたり、料理しかできない
他にも実権はなゑが握っていたとはいえ、頭（かしら）である鈴催が抜けた事に兎妖怪も動揺しているらしい。

なゑもかなり苦労しているようだ
それが原因でなゑがあまり神社に来れず、喪紅を寄こしたんだろう
喪紅もなゑが苦労しているのを理解しているから頻繁に足を運んでるんだと思う
……鈴催は気付いていないようだがな。

さて、今日は確か……喪紅が来るって言ってた日だったな
三人分の料理と霊夢用に別のを用意して……
最近料理が似たような物になってきたな、刹那を呼んで教えてもらおうか？

そんな事を考えながら料理を始める

どうせ外で遊ぶのには体力を使うんだ、多めに作っておくか
食事が終わったら服を洗濯して、霊夢を風呂に入れて、掃除をして
霊夢は鈴催が寝かしつけてくれるだろうから大丈夫だろ。

少年期編　三十八話【二度目は本当の踊り】（後書き）

フランドールの誕生日が冬？
当然ながら適当です
色々考えてしたい事の為にしていたのですが
途中で宴の内容を考えていなかった事に思い当たり
色々と考えた結果、この程度しか思い浮かばなかった自分の頭は弱すぎますね。

レミリアは何故戒魔達にまで誕生日の事を隠していたの？
美鈴の言う通り、忘れていただけです
自分でも考えていなかったという裏事情ですが……

何故フランドールは戒魔に低く見られるのが嫌だったの？
数少ない心を許した相手だからです
それ以上の感情などは得にありません。

レミリアが簡単に負けを認めた？
元々先ほどの言い方で戒魔が言う事を聞くなんて思っていなかったからです
駄目元で訊いていた事と、初対面時に負けていた事もあるので戒魔に対してちょっとした負け癖が付いているようです。

レミリアって戒魔より踊り（ダンス）が下手なの？
戒魔よりも数段上手です
しかし、踊る事自体久しぶりであり
子供の体とはいえ、成人した男性と踊る事が初めてだったというのも有り緊張していました
更に主導権を奪おうとしていたので動きもぎこちなくなっていたの

も精度が落ちていた原因です。

宴は最終的にどうなったの？
騒ぐだけ騒いで終わりです
翌日、妖精メイド達が頑張って片づけてくれました。

……砲魔が主夫？
誰がどう見てもそんな状態です
母親は鈴催、父親は砲魔、子供は霊夢でしょう
全員名字が違い、誰も家族だとは思っていませんが
端から見た彼らは家族以外に思われないかと思います。

鈴催って霊夢に厳しいの？　甘いの？
どちらも持っています
躾けなど、そういう面ではかなり厳しくしていますが
それ以外の時ではとんでもなく甘いので大丈夫なのかと心配になるぐらいです。

少年期編　三十九話【春の妖精】（前書き）

内容がずっと似たような内容になってますがご勘弁を……
どうしても彼女の場合短くなってしまうので、話しを膨らませる事自体難儀でした
考え出すと色々と浮かびましたが、内容を考えると……という感じで難しい回でした。

……今更ながら気付いた事が
表は紅魔館、裏が守矢神社、新が永遠亭
全部メインの場所が違うとは……そして今更気付いた自分もどうかと思いました。

少年期編　三十九話【春の妖精】

視点　戒魔

冬も明け、春になり始めた
寒さも少しばかりなりを潜めて雪も溶けきり、今は花が咲き始めた。
結局レティはあの時から来ず、寒い事には寒いが寒すぎない冬を過ごせた
そして春といえばあいつ……リズホワイトの季節だな
あいつは春になれば色んな場所に姿を現せるし、その内紅魔館にも現れるだろう。
そんな事を考えながら湖付近で休んでいたんだが……
まさかこんなに早く来るとは思わなかった。

「春です」

「……春だな」

俺の前には純白という言葉しか似合わないような小さな妖精が浮いていた
金髪の髪を持ち、子供の体である俺よりも背の低い可愛らしい妖精
その妖精は俺の目の前でそれはもう綺麗な笑顔で春を告げ始めた。

「はい！　春ですね！」

「……春だな」

「はい！　春なんです！」

「……春だな」

「はい！　春ですの！」

「……いや、春なのは分かったから」

「そうですか？」

一生懸命に春の事を知らせてくれるのは分かるんだが
俺が同じ返事をしていてもこのままでは永久に終わりそうにない
こいつは相変わらず春だと元気だ。

俺が理解したと言ったら小首を傾げて訊いてくる
無邪気なんだと思うのは俺だけじゃないはずだ。

「名前は？」

「リリーホワイト！」

「俺は夢幻戒魔だ
どうせ忘れると思うけどよろしくな」

「？？？」

向こうのリズホワイトはこっちではリリーホワイトか……
性格は大して違いは無いが、向こうより元気なんだな
元気というより頭の中まで春って感じだろうか？

記憶力の悪い妖精に名前を覚えさせるほど、俺は根気強くない
こんな性格をしているし、きっと明日には忘れてるだろう。

「なぁリリーホワイト、花畑を見たくないか？」

「見たい！」

本当に元気で純粋なんだな
俺が騙そうとかしていると思わないのだろうか？

俺は苦笑してリリーホワイトを連れ、紅魔館に戻る
門では美鈴が警戒を見せたが俺がリリーホワイトを春告精と伝え、
花畑を見せるだけと言うと警戒を解いた
春告精の花好きは有名だし、彼女自身も害は無いと判断したんだろう。

紅魔館の中庭にある花畑
基本的な色は赤色の花達に、所々に違う色も混じってるが大半が赤い
それでもリリーホワイトは気にせずに花の周りと飛び回っている。

俺はリリーホワイトが楽しむ姿を見て苦笑し、紅魔館の中に戻る
食堂に向かい、まだ時間は少し早いがお菓子を少し分けて貰い中庭
に戻る。

リリーホワイトは相変わらず花の周りを飛び回っていた
そんなリリーホワイトを眺めているのも楽しそうだが今する事は違
うな。

「リリーホワイト、少しこっちに来てくれないか？」

「???」

変わらずに素直に俺の元へ来るリリーホワイト
そんなリリーホワイトにお菓子を見せる
お菓子を見た事が無いのか、それとも存在を忘れているのか不思議
そうな顔をされた。

「これは焼き菓子(クッキー)といってな
……まぁ食べ物だ、試しに食べてみろ」

「クッ……キー？
……食べるの？」

俺に訊きながらも凄く気になっているらしい
リリーホワイトは試しに一つ焼き菓子(クッキー)を持ち眺める
上から下から見回し、更に回したりして興味深げに焼き菓子(クッキー)を見続
ける。

「……はむ……んふぅ」

どうやら気に入ったらしく、満足そうに微笑むリリーホワイト
少しづつ齧って食べている姿は背の低い見た目も相まってとても可
愛らしい。

「はむ……ん？
……もっと食べたい」

自分が食べ終わった事にも気付かずに焼き菓子(クッキー)を食べようとするも、
当然無いので指を齧ってしまう

意地汚いと思うが無邪気な様子にそんな事は霧散する
そして次の焼き菓子（クッキー）を要求するリリーホワイト
俺は今日の何度目にもなる苦笑をしてリリーホワイトに焼き菓子（クッキー）を渡す。

リリーホワイトは顔を輝かせながら両手でまた一つ受け取り齧り始める
俺は三枚渡したんだが、リリーホワイトは両手で食べる事に拘ったらしい。

俺が貰ってきた焼き菓子（クッキー）は十五枚
まだリリーホワイトが食べているのは二枚目
全部食べるのかは分からないが時間が掛かるのは確実のようだ。

今日は夕方にパチュリーの勉強の時間まで予定は無いから時間は大丈夫だろう
ちなみにナズナはフランドールの遊び相手としてチェスをしている
地下で一人だったフランドールと産まれたばかりのナズナは結構実力が近いらしい。

そういえばフランドールは夜も起きているが昼間も起きている事が多い
フランドールはいつ寝てるんだろうか？
もしかして長い時を眠っていたから睡眠欲が少ないのか？

「んむ……あ、無い
もっと食べる」

「はいはい」

俺は再び焼き菓子(クッキー)を三枚同時に渡した
しかしリリーホワイトが受け取ったのはやはり一枚だけ
一気に食べる事を知らないのか、それとも味わって食べようとしているのか
どちらにせよ、焼き菓子(クッキー)が好評だった事は確実のようだ。

妖精の精神は子供に近いせいかとても和む
霊夢を育てていればいずれこんな感覚を知れただろうが……はぁ。

「はも……ん？
……んふぅー」

気付けば俺はリリーホワイトの頭を撫でていた
帽子が邪魔だったが額から髪をかき上げるような撫で方をしていたので帽子はあまり動いていない。

止めようかとも思ったがリリーホワイトが何やら嬉しそうだったので続けた
しかしやはりというべきか、帽子が邪魔だった。

仕方無いのでリリーホワイトに手招きをして花畑で花が咲いていない場所に座らせる
そのままリリーホワイトの帽子を脱がし、帽子は俺の膝の上に置く
片腕を後ろに置き、体を支えながら逆の手でリリーホワイトの頭を撫でる。

精神が子供の妖精だからなのか、子供にするような事が嬉しいらしい
先ほどより嬉しそうに、満足そうな顔をしてリリーホワイトは焼き菓子(クッキー)を食べる続ける。

俺はリリーホワイトに催促される前に次ぎの焼き菓子（クッキー）を差し出す
リリーホワイトはそれを嬉しそうに見てやはり両手で受け取り口に運ぶ。

「はむ……はむ……」

やっぱり甘い物が好きなのだろうか？
もし次に会う事があればもっと甘いお菓子を用意しておいてあげようか……

そんな事を考えるが、それはおそらく来年の話しになるだろう
そもそもリリーホワイトが現れる事自体春という事を除いて不定期なのだ
今回会えた事、更にお菓子の準備ができていた事がかなりの幸運だった。

「はむ……もっと」

リリーホワイトに次の焼き菓子（クッキー）を渡す
このリリーホワイトも今日で見納めかもしれないな
リズホワイトは殆ど神社に来なかったからほぼ異変時にしか会ってない。

春雪異変と六十年周期の大結界異変ぐらいだろう
春雪異変の時はかなり興奮していたからな、落ち着かせる為に何回弾幕を当てた事やら……あれは悪かったと思う
大結界異変の時は何度倒しても暴れる事を止めないから最終的に縛って木に括り付けたんだったなぁ……
終わった後に解放したけど、泣きながら逃げられたのは嫌な思い出だ。

「あむ……はむ……んむ……もっと欲しい」

次の焼き菓子（クッキー）渡し、これだけ時間を掛けて今のでまだ六枚目
美味しいからゆっくり食べたいだけなのか
それとも単純に食べるのが遅いだけなのか……

このままのんびりするのも良いが……
さすがにリリーホワイトを愛でるだけでは暇だ
だけどこんな時間も良いと思う。

今度ナズナにもこんな感じにしてみるか？
……無理か、ナズナは俺の前では背伸びしようとするからな
まだ子供なのに主人の俺に甘えたくても甘えられないようだ。

フランドールも考えたがあの性格だ
内心は喜んでくれると思うが外見は淡々としている可能性が高い
そもそもフランドールはここまで無邪気じゃないな。

「はん……むっほ」

「口の中のを飲み込んでから言おうな
行儀が悪いし、吐き出してしまうかもしれないから」

「んぅ……んっ……もっと」

お預けを食らって不機嫌そうな顔になったが
飲み込んだリリーホワイトに俺が素直に次を渡すと、途端に嬉しそうになって受け取る
なんと可愛らしい光景だろうか。

しかし……後々春雪異変や大結界異変でリズホワイトと同じ事をされるかもしれないと考えるとどうにかしてあげたいと思う物の、リリーホワイトの性格からどうにもならないだろう。

俺ができる事といえば機嫌を悪化させないようにお菓子を与えるぐらいか？

それさえ怪しいが……まぁしないよりは良いだろう。

俺にはどうしようも無い事に罪悪感を感じる

しかし、俺がどう足掻こうとリリーホワイトは春雪異変の際には興奮状態になるだろうし

大結界異変では暴れ回るだろう

歯痒いが、リリーホワイトを止める自信が無い俺には何もできない。

「あーむ……次のちょーだい」

俺は無言でリリーホワイトに焼き菓子（クッキー）を渡す

嬉しそうに微笑むリリーホワイトに悪いと思いながらも何も言わない

言っても無駄だろうし、そもそもどうせ忘れているだろうからだ。

それから暫くの時間が過ぎ、俺の持っていた焼き菓子（クッキー）も無くなった

無くなった事を伝えた時のリリーホワイトの泣きそうな顔に新しいのを持って来そうになったが

時間的に無くなっているだろうし、俺が貰ってきたのは自分の分ではなく貰い物

今日のお菓子はレミリアとの食後に出されるらしいので俺の分はその時まで無理だ。

泣きそうになるリリーホワイトを慰めながら門に向かう
動きたがらないリリーホワイトに帽子をかぶせ、手を引いて動くように促す
リリーホワイトも諦めたのか自分で歩き出し、俺に引かれながらも歩を進める。

門に居た美鈴は俺がリリーホワイトを泣かせたと勘違い……あながち勘違いとも言えないが
俺はリリーホワイトにあげていた焼き菓子(クッキー)が無くなったと素直に話して誤解を解く
美鈴は納得して俺達を送り出してくれた。

なんだか寂しそうな顔をしているリリーホワイトだが
少し背を押して行くように促す
最初は不思議そうな顔をしていたものの、少し時が過ぎて悟ったらしい
涙目になりながらも飛び立って行った。

出会ってから短い時間だったがリリーホワイトは俺との別れを悲しんでくれたらしい
嬉しいとは思うがリリーホワイトは妖精、次に会う時には高確率で俺の事なんて忘れているだろう
そう考えれば悲しくは思うがそこまででもない、既に諦めているからだ。

俺は紅魔館に戻ってパチュリーとの勉強を始める
夕食後の焼き菓子(クッキー)は近くに居た妖精メイドに振る舞っておいた
なんとなく食べる気にならなかったから。

そして翌日

午前の予定を終わらせ、今日も夕方からパチュリーと勉強
それまで暇なので湖付近で寝転がっていた。

「……で、何でお前はここに居るんだ？」

「？？？」

何故かまた俺の前に居たリリーホワイト
お前……幻想郷中に春を届けに行ったんじゃなかったのか？

「お菓子食べたい！」

どうやら俺はリリーホワイトにお菓子の味を覚え込ませ過ぎたようだ
こんなに眩しい笑顔を見せられて断れる者は居るのだろうか？

そんな事を思いながら今日もリリーホワイトを連れて紅魔館に入る
今日のお菓子は何だったかな？

続く

元世界編　新十九話【名前で大騒ぎ】
表との時間差……四ヶ月

視点　砲魔

「……聞いたか鈴催」

「……当然だろ砲魔」

「「……霊夢、もう一回言えるか？」」

「おーま、えーあい」

「「おお！」」

これは……感激だ！

まさか霊夢が俺達の名前を呼んでくれるとは思わなかった
お母さんとかお父さんじゃなくてよかったと安心してるのは俺だけじゃないはずだ。

この事を堺音に言ったら子供が親（一応親代わりだし）を呼ぶには大分遅いらしい
堺音の話しでは元々戒魔が育てていた幼少期の霊夢だが一歳から俺が育て始め、途中から鈴催も参加したその事により親という物が分からなくなって名前を呼ぶのが遅くなった可能性が高いとか。

数日後に喪紅が手伝いに来てくれた時にも霊夢には驚かされたなんと、霊夢は喪紅の事も名前で呼んだのだ。

「俺の事を見つめて、どうしたんだ霊夢？」

「……もーお？」

「え……砲魔！　鈴催！
霊夢が俺の名前を呼んだぞーーーーーー」

喪紅が叫んだせいで大騒ぎになってしまったがそれでも喪紅が嬉しそうなので許した
鈴催も言語が発達するという理由から嫉妬もせずに喪紅の名前を霊夢に呼ばせている。

なお、名前を呼ばれたのは俺達三人だけだ
他の奴らはそこまで多く来ないから名前を呼ばれるほどにはなっていない
可能性が高いのは刹那となゐだろうか？

なお、鈴催は歓喜し過ぎた結果
永遠亭で超豪華な食事を作って住民を驚かせたそうだ
理由を話したら納得されたらしく、輝貴も久しぶりに豪華な食事で喜んでいたらしい
永仙の食事は今だに焦げたり失敗するので尚のこと嬉しかったようだ。

喪紅は輝貴との喧嘩で圧勝したとか
しかも豪華な食事をした翌日で機嫌が良かった時に圧勝したらしいのでかなり嬉しかったらしい
逆に負けた輝貴は大敗した事で何かが燃え上がったようだ
突然体を鍛え始めたそうだ……蓬莱人って筋肉付くのか？

なゑはお祝いと言って竹林でもそう取れない珍しい筍を持って来てくれた
俺はその筍で筍ご飯を作り、なゑや喪紅も含めて四人で食べた
輝貴や永仙が羨んだのは当然の結果だそうだ。

霊夢ももうすぐ二歳になる
次はどんな事ができるようになるのか……楽しみだ。

少年期編　三十九話【春の妖精】（後書き）

リリーホワイトが……話しただと！？
特に問題は無いかと思います
大勢の人がリリーホワイトの言葉で使っている「春ですよー」は使いませんでした
リリーホワイトを出す時は絶対に言わせないと決めていました
言わせないで済んでなんとなく満足です。

紅魔館に中庭なんてあったっけ？
書籍文花帖の美鈴の項にて
花の色が大半赤なのも同じく美鈴の項に載っています。

態々リリーホワイトと呼ばせる必要があるの？
そもそもリリーホワイトというのが正式名ですし
区切られていないのでリリーでは略称、もしくはあだ名だと思い、
リリーホワイトと全て呼ばせています。

リリーホワイトの精神年齢はどれぐらい？
七歳から十歳ぐらいでしょうか？
しかしこれぐらいの年齢に多い活発な面は無く、素直な子供という感じでしょうか。

リズホワイトの扱い悪くない？
通常時に暴れるならともかく
季節と状況により妖精としての力を最大限まで発揮できている妖精の実力は妖怪に匹敵すると考えています
そんな妖精が何度も暴れながら向かって来ると考えれば当然の処置かと

……もしかしたらリリーホワイトも同じ扱いにされるかもしれませんが。

霊夢が名前を呼ぶのは遅いの？
子供が親の事を呼び始めるのは大方一歳前半だそうです
しかし霊夢が親代わりとはいえ、砲魔達の名前を呼んだのは二歳前
これはかなり遅いですが、接していた時間からして妥当かと。

少年期編　四十話【飲酒厳禁】（前書き）

無理に働かされたせいで風邪の症状が悪化……どうにか治らないでしょうかね？
咳き込むだけで頭が痛いは腹が痛いは……はぁ

微妙ですがこの話しは続きます
そして次話も続きそうな感じですが、次話から裏に戻ります。

少年期編　四十話【飲酒厳禁】

視点　戒魔

「明日、花見に行くわよ
昼間から行くから今日は早めに寝る事、いいわね！」

相変わらず唐突だなレミリア……ほら、俺もそうだがフランドールも驚いてるぞ？
理由は春だし、暇だったからなんじゃないのか？
というかそれしか思い浮かばないぞ。

「お姉様に質問！
花見って何？」

「良い質問だわフラン
花見というのは……戒魔、説明お願いね」

「俺に丸投げするなレミリア
簡単に言うと桜の花の下で行う宴会だな
春になって暖まってきたから外で騒ごうという事だ
春の恒例行事に近くなっているが単純に騒ぐだけでいいらしい
長生きで暇人の多い妖怪は暇潰しになる花見を欠かさないとか」

「確かに暇人が多いものね、娯楽に飢えているしと、いう訳よフラン、わかったかしら？」

「説明したのは戒魔じゃない

さも自分の手柄のように言わないでお姉様」

こんな感じで花見をする事が決まり
俺はレミリアの思いつきを実行する為
妖精メイドや美鈴、パチュリーに花見の事を伝えておいた。

そして翌日
花見の場所は紅魔館の建っている島に桜が十数本咲いているらしい
すぐ近くなのは楽だが移動の楽しみが無いのは少しだけ惜しかった。

参加者は主催者であるレミリアは当然とし
俺、ナズナ、フランドール、美鈴、パチュリーに妖精メイドが少し多め
そして何故か居るリリーホワイト。

「だから……お前は何故ここに居るんだリリーホワイト
言っておくが、今日はお菓子は少ないからあげられないぞ？」

「むぅ……」

いや、むくれられても困るんだが……
仕方無い、俺の分をあげるか
紅魔館に戻ったら自分で作ればいいんだしな。

「はぁ、俺の分をあげるからそう不機嫌になるな
量は少ないが、それぐらいは我慢してくれよ？」

「うん！」

子供には甘いが、特に損は無いし構わないだろう

いや、お菓子は減っているが……

それとナズナ、何を考えているのか分からないが後ろからリリーホワイトを睨むのは止めておけ
リリーホワイト自身は気付いていないがいい加減にしないと俺が怒るぞ。

準備もそこそこにし、妖精メイドに日傘をさせているレミリアが音頭を取るらしい
立場的に当然だがなんとなく不安なのは何故だろうか？

俺達の持っている杯には今日も果汁水（ジュース）が入っている
俺は肉体年齢的にも、体質的にも酒は飲めないから当然だ
ナズナは俺が禁止させた、子供の内に酒を飲ませては酒に溺れる可能性があるからだ
リリーホワイトに飲ませるのは止めた、リズホワイトが酔って暴れた事が有るのでな
あの時は大変だった……妖精相手に酔った刹那が本気で殺そうとしたから止めるのに労力を使った
レミレアは見ていて笑っていただけ、止めもしなかったから殴っておいたがな。

他の者は酒の苦手な一部の妖精メイドを除いて全員酒だ
困った顔をしている者はあまり好きでは無いが飲めるから持っているレミリアが飲める者は全員酒を持てと言っていたから逆らうわけにはいかないのだ。

「全員。杯は持ったわね？
では花見を始めるわ、乾杯！」

「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」」

「か、乾杯！」

「かんぱーい？」

前も似たような事をしたような……そしてフランドール、また遅れたのか

リリーホワイトは訊いてるが何故訊く？

乾杯という言葉を知らないのだろうか？

呆れと疑問は出たが杯の中身を一気に飲もうとして杯を傾ける

一口飲んで、俺は吹いて咽せた……これは……葡萄酒！？

今日は葡萄の果汁水（ジュース）かと思ったら葡萄酒、レミリアの奴謀ったな！？

「ちょ、突然吹いてどうしたの戒魔！？」

「ご主人様、大丈夫ですか？」

フランドールは咳き込む俺の背中を撫でてくれ、ナズナがお手拭きで口元を拭ってくれる

だが少量とはいえ飲酒した事により、子供の体内に酒が一気に回り出した。

あ……これは……駄目だ

意識が段々と朦朧と……いくら何でも酒に弱すぎだろう。

そんな事を考えながら倒れた気がする

酔うより寝るだけ安心するべき……か。

視点　レミリア

ちょっと戒魔をからかうつもりだったのに……どうしてこんな事に？

「いいかレミレア、お前の好戦的な性格は心地良い
それは否定しないけどもう少し落ち着きってものを知れ
そうすれば俺だってもっとお前に付き合ってやるってのに……」

酔った戒魔が私……いえ、レミレアに言いたい事を言っている
というか、妙に滑舌に話すけど本当に酔ってるの？

「いや、私はレミレアじゃなくてレミリアだからね？」

「あ？」

「……何でもないわ
もうレミレアでいいからそんな睨むような怖い顔と声を出さないで」

戒魔の顔が怖い……
出会った時に負けてから戒魔に睨み合いで勝てる自信が……
そして戒魔は何故か納得して話しを続ける。

「そうか、いいかレミレア、お前の好戦的な性格は心地良い
それは否定しないけどもう少し落ち着きってものを知れ
そうすれば俺だってもっとお前に付き合ってやるってのに……」

「ちょっと！　どうして同じ事をまた言うの！？」

「あ？」

「いや……何でもない」

「そうか、いいかレミレア、お前の好戦的な性格は心地良い
それは否定しないけどもう少し落ち着きってものを知れ
そうすれば俺だってもっとお前に付き合ってやるってのに……」

また同じ事を……何かを言ったら繰り返されるみたいね
おとなしく黙ってるしか……

「レミレア、俺の話を聞いてるか？」

「え？　えぇ、聞いてるわよ
うん、ちゃんと話しを聞いてるわ」

じゃないとまた面倒になりそうだし……
また続けられるのは嫌よ。

「そうか、いいかレミレア、お前の好戦的な性格は心地良い
それは否定しないけどもう少し落ち着きってものを知れ
そうすれば俺だってもっとお前に付き合ってやるってのに……」

あれ？　また同じ事の繰り返し？
つまり私に話すなって事なのかしら？

……このままでは拙い
同じ事の繰り返しになって何一つ進まない
誰か助けてくれないかしら？

「あのー……戒魔少年？
そろそろ勘弁してあげてくれませんか？
お嬢様も参ってきているみたいですし、落ち着いてください」

どうやら美鈴は私の様子に気付いて助けてくれるらしい
でも美鈴？　それは自分も巻き込まれるってわかってるかしら？
助けを呼んだ私の言葉じゃないけど。

「なんだ美龍、俺の邪魔をするならお前の大好きなお話だ
嫌なら黙ってろ」

「いや、私は美龍という名前ではありませんから
それに私にお話ですか……何を言うつもりでしょう？」

美鈴、助けてくれるのは嬉しいわ
でもそれは藪蛇を突いていると思うわよ？

「お前は実力は高いのに手加減をしてしまうのは勿体ない
美龍はありとあらゆる技術を本気で使えばレミレアにだって勝てる
だろう
絶対に損している、一度レミレアを叩きのめして待遇を良くしても
らったらどうだ？」

ちょっと待って戒魔
美鈴が私に勝てる所か叩きのめすですって？
冗談でも笑えないわよ……

「私は美龍ではなく美鈴です
それに私がお嬢様に勝てるはずがないじゃないですか

適当な事を言ってお嬢様の機嫌を損なわせるのは止めてください」

「いや、お前は実力は高いのに手加減をしてしまうのは勿体ない
美龍はありとあらゆる技術を本気で使えばレミレアにだって勝てる
だろう
絶対に損している、一度レミレアを叩きのめして待遇を良くしても
らったらどうだ？」

「私は美龍ではなく美鈴です
それに私がお嬢様に勝てるはずがないじゃないですか
適当な事を言ってお嬢様の機嫌を損なわせるのは止めてください」

「いや、お前は実力は高いのに手加減をしてしまうのは勿体ない
美龍はありとあらゆる技術を本気で使えばレミレアにだって勝てる
だろう
絶対に損している、一度レミレアを叩きのめして待遇を良くしても
らったらどうだ？」

「私は美龍ではなく美鈴です
それに私がお嬢様に勝てるはずがないじゃないですか
適当な事を言ってお嬢様の機嫌を損なわせるのは止めてください」

「どっちも同じ事を繰り返してるわよ！
どっちか言う事を変えてちょうだい！」

美鈴も酔ってるのかしら？
いや、私は美鈴が酒豪なのは知ってる
あの程度の酒で酔うような体をしていない。

美鈴の事だからきっと本当に素直に返しているんでしょうね

でも美鈴、それだとただのお馬鹿よ？

「……はぁ、静かに飲ませてくれないのかしら
私としては見ている分には楽しいけど……
それにしても、戒魔の言っているレミレアに美龍……誰の事かしら？」

チッ、そういえばパチェが聞いてるんだった
このままだとパディやフラムの名前も出てくるかもしれないわ
あまりにも話されると戒魔の事を隠すのが大変になる。

思わず舌打ちもしてしまったが、危ないのは事実
フランにパチェをどうにかしてもらえば……

「くぅ……」

やってしまったーーー！！！
フランのお酒にも混ぜていたんだったーーー！！！
私もお馬鹿！　何を考えてるのよ！　勿論何となくに決まってたわ！
戒魔は暴走してフランは寝てしまうとは、どうすればいいのよ！

「戒魔、私の事は覚えてるかしら？」

パチェが動き出した！？
拙い、パチェは好奇心を満たす為なら面倒でも動くような性格だった！
しかも興味を満たす為に動いているから絶対に容赦をしないに違い無いわ！

「パディか？

覚えてるに決まってるだろ、何を言っている」

言ってしまった……パディの名前で呼んでしまうとは
これはかなり危険ね、危険度を下げる為に少しでも根回しをしないと。

「ちょっとそこの妖精メイド
私達は話しをするから全員を離れた場所へ
少なくとも声の聞こえないぐらいの場所に連れてきなさい
ただし、パチェや美鈴に気付かれないように静かによ」

「は？　難しいですがわかりました
えっと……どうやろう？」

妖精メイドは考え事をしながらとはいえ一応仕事はしてくれた
生憎、当然といえば当然だけどパチェには気付かれたでしょうね。

「戒魔、私が何かをしたような気がするんだけど覚えてる？
ここ最近、なんだか昔の事を思い出せなくて
私が何をしたのかちょっと覚えてないのよ」

さすがパチェ、少々回りくどいけど訊き方は悪く無い
覚えていないと言えば思い出してくれるでしょう
問題は今の戒魔は酔っていて正気ではない事
正気ならば絶対に戒魔は騙されないが……

「なんだ、パディは自分がした事も忘れたのか？
そうだな……天果が騒ぎを起こした時に萃麻が犯人と間違えて襲ったっけ
しかも手加減された萃麻と引き分けるのが精一杯で悔しがってたな」

「そう、私が天果という者と萃麻という者を間違えた……か
更に引き分けだったとは……天果に萃麻、誰かしらね？」

パチェが頭を働かせてるけど分かるはずが無い
戒魔が平行世界、それも未来から来た博霊の御子
気付いたらどれだけ思考が柔軟でおかしいのよ。

それにしても……天果は確か不良天人だったわね
こっちでは何て名前なのかしら？
天人の事で調べられる事は殆ど無かったからどうすればいいのかしら？

それに萃麻は鬼……鬼の四天王だったわね
戒魔の話しを聞く限り、私達紅魔館の者達全員で襲いかかっても勝てる気がしない
八雲でも正面から戦っても勝てるかどうか、それほどの実力者らしい
彼のこっちでの名前は調べた……伊吹萃香
正直会いたくない……会いたくないけど会わないわけにはいかないだろう。

「そういえばあなたと私の関係ってどんな関係だったかしら？
私は貴方の魔法の先生だったと思うんだけど？」

「パディが俺の？　それに魔法の先生？
俺の指導者は紫々だ、それに俺は魔法じゃなくて陰陽術を使ってるんだぞ
何故魔法を習う必要がある、そういうのは砲魔にしてくれよ」

「紫々に砲魔……覚えておくわ

それにしても陰陽術の使い手？　でも戒魔には陰陽術の才能は欠片も無かったはず
確かに慣れていたような感じはしたけど全くできなかったから見栄を張っていただけかと思ったんだけど……」

ああぁ……戒魔の秘密がどんどんパチェに知られていく
止めるにしても私が止めたらパチェに怪しまれるのは必至だし
下手すればパチェの矛先が私に向かってしまう。

私には戒魔ほど口が巧くないからパチェに勝てる自信なんて無いし
……
黙っていて勝てる道理も無い、どうすればいいのよ！

続く

元世界編　新二十話【現実と仕事】
表との時間差……九ヶ月

視点　砲魔

なんだかんだで霊夢と暮らして一年近くになる
つまり、そろそろ鈴催と暮らす事に全く違和感を感じなくなっている
という事だ
鈴催との事はもう問題じゃないから良いとして
別の新たな問題が発生したんだ。

「鈴催、どうだった？」

「駄目だった
もう殆ど帰ってこない奴の上、いくら博霊とはいえ自分と関係の無い子供
生活費の援助はしないって言われた、自分達でどうにかするんだな
……ともね」

そう、金が無い
俺は霊夢の為に結構貯金を使っている

それはもう今後の実験に影響が出る所か、下手すれば何年もできないぐらいだ
実験には金が掛かる、それを放棄してまで使ってるんだが足りなくなった。

鈴催にはそもそも貯金が殆ど無かった
自分が住んでいる場所で給金が出るというのも変な話し
つまり、薬売りに行ったり実験台にならない限り給金は無いのだ。

更に言えば博霊神社には元々金が無い
そういえば戒魔はどうやって霊夢を育てる気だったんだ?
金が無ければ育児もできないだろうに。

最終手段として鈴催を使って永仙に援助して貰おうと思ったんだが
残念ながら認めてくれなかったらしい
鈴催も申し訳なく思っているらしいが、失敗する可能性は考慮していた
だからあまり気にしないでほしい。

「働くしか無い……だろうな
問題は俺達はまともに働いた事が無いという事だ」

鈴催は永仙の所で住み込みだったし
昔の事は話してくれないが、働いていたとは思えない。

俺自身は魔法の森で取れた珍しい物を売って生活していた
魔法の森に入れる者は少なかったからな
結構高値で売れたんだが、最近は全く森に入っていないから売れる物なんて無い。

「よう砲魔に鈴催
なんだか雰囲気が暗いがどうかしたのか？」

「何が有ったか知らないが大丈夫か？
私達にできる事が有るなら協力するのは吝かでは無い」

「喪紅に堺音……協力してくれるのは嬉しい
でもこれはかなり現実的な問題だからあんまり話せる事では……」

「いいじゃないか鈴催、話すだけ話そうぜ
どうせそう簡単に何かできる事じゃないんだ
愚痴ぐらい許してくれるだろ？」

そう言って俺達は堺音達に事情を話した
堺音も喪紅も真剣に聞いてはくれたが、当然ながら困った顔をされた
金という現実的過ぎる話しなのだから仕方がないのだが……

「うーむ……金欠か
少なくとも俺は何もできないな
迷いの竹林に住んでるようなものだし
迷子の案内をして永仙から案内費を貰ってるぐらいだ
金があれば援助できたんだが、俺自身に金は無いな」

「私としても難しいとしか言えないな
いくら博霊とはいえ、一教師の私が贔屓してはいかんだろう
できる事とは仕事を紹介する程度だな」

「「十分だ！」」

「む……むぅ、わかった

数日の時間を貰うがどうにかしてみよう
私としてもお前達に何か有っては目覚めが悪くなるからな」

おっと、少し強引になってしまったか
だけど俺達に取ってはありがたい
働く時間は霊夢に会えないから辛いだろうが、それでも家計が危ないので助かる。

問題は俺と鈴催のどちらが働くかだな
当然だが、お互いに働くのが家計的に最も安心できる
しかし霊夢の事が有るのでそれは無理、どうするか……

「もし二人共働くって言うなら俺が霊夢の面倒を見てやろうか？
基本的に暇だし、それぐらいなら構わないぞ
ただし、俺にだって一応永遠亭への案内人としての仕事がある
回数は少ないが必要な役目だからな、つまり育児をしてやるから給金を出せという事だ」

「それは即答できない
確かに生活するには共働きが必要だろう
しかし喪紅に給金を払うと今度は僕達が生活をするのが困難になる
仕事の給金に依って、改めて交渉させてくれ」

「道理だな
わかった、だけど一応準備ぐらいはしておくぞ
俺だって準備期間ぐらい必要だからな」

そう言って喪紅は帰って行った
あいつ……何しに来たんだ？

「仕事は早い方がいいだろ？
私も帰らせてもらおう、数日後に来る
それまでおとなしく待ってろ」

堺音も帰ったのだが……本当にあいつらは何をしに来たんだ？
俺達と話す為か？　霊夢に会う為か？　それとも暇潰しなのか？

数日後、なんだかんだ言ってもやはり堺音
しっかりと仕事を探してきてくれた
この事が切欠で俺も鈴催も堺音には頭が上がらなくなってしまった
……まぁ霊夢の為だ、これぐらい耐えるさ。

喪紅への育児の依頼はしておいた
堺音が言うには相場の半分以下だそうだ
喪紅もそれぐらい知っているみたいだったが、それで構わないと言ってくれた。

仕事の方は俺も鈴催も働く事になった
給金は高めで時間は短めなのは助かるが
当然ながらその引き替えに重労働だ。

俺も鈴催も肉体派では無いので辛かった
俺の場合は白蓮に教わった肉体強化の魔法で多少は楽になったが鈴催は何も無い
なぁに頼んで栄養剤を飲みながら頑張っている姿には哀愁が漂っていた。

結局鈴催は肉体労働を断念
代わりに寺子屋で働く事になった
仕事内容は掃除に給食の料理、時々子供の相手だそうだ。

人見知りの激しい鈴催には辛い仕事だろうが
肉体労働よりは楽だから頑張ってもらいたい。

そんなこんなで俺達は頑張っている
霊夢の為にも頑張らないとな！

少年期編　四十話【飲酒厳禁】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

鈴仙・優曇花院・イナバ／鈴催（れいさい）・優曇花院・イナバ
狂気を生み出す月の兎

あのズレは催眠の域というイメージが浮かび、鈴催という名に……
悪く無いと思ったので採用しました
思い浮かばなかった結果がこんな微妙な二つ名になりました

簡易特徴
月の戦争に嫌気が差し、月から脱走
幻想郷に逃げ込んだ後、月からの刺客だと勘違いした紫々と藍に追いかけられた経験を持つ
視覚を揺らし、幻影を見えるほどの威力で紫々達に幻覚を見せたので逃げ切られたとか
勘違いが残ったままとなったが、偶然迷いの竹林でなゑに出会う
なゑは怪しいとは思ったものの、傷ついて泣きそうな顔をしている鈴催を無視できず、永遠亭に連れて帰る
その事が切欠となり、彼は今でも永遠亭に住んでいるのだが……最近は博霊神社で砲魔と一緒に寝泊まりをしている。

なお、永夜異変で紫々と出会った時に鈴催は即逃げ出した
当時の紫々の顔が余程怖かったらしい
当の紫々は鈴催の事をほぼ忘れていた為、鈴催の奇行に首を傾げたとか
なお、藍は鈴催の事を覚えており、そういえばあんな月人が居たと思い出していた。

鈴催は月で軍人をしており、上下関係を厳しく考えている
故になゑよりも立場が上と永仙に決められた時からなゑとの因果が始まった
なゑは鈴催の事を気に入っているが、言う事を聞く必要は無いと思っている
一方鈴催は上司の言う事を聞かないなゑを嫌っていた
しかし、永夜異変後で紫々から逃げ出した鈴催に、なゑが鈴催を労り、鈴催はなゑと和解
上下関係は有るものの、友人として付き合い始めた。

鈴催と喪紅の仲は非常に良好
喪紅の性格は鈴催に取って好ましいらしい
家主である輝貴と喧嘩をされるのは困るが、普段面倒を掛けさせられているのでいい気味とも思っていたり……
だが治療をするのも鈴催なので少々微妙な気分だとか。

少年期編　四十一話【動く大図書館】（前書き）

酔った戒魔というのを十数種類考えましたが
最終的に酔っても性格は変わらないが記憶の混乱を起こすという結果になりました
他にも大爆笑しながら色々と暴露するとかと、色々と考えましたがいっその事、変わっていないのに記憶が混乱しているという変な状態にしてみようとなりました。

ちなみに、酔って暴露する事はかなり前から決めていましたできれば前の宴に起こそうと思ったのですが、パチュリーが去ってしまったり
戒魔が踊ったりレミリアがめかし込んだりでできなくなりました。

前話でキャラ紹介をしたので今話の後書きでＱ＆ａｍｐ；Ａを前話を含めてしますそれなりに多いですが無視してくださっても問題ありません。

少年期編　四十一話【動く大図書館】

視点　パチュリー

ふふ、今の酔っている戒魔になら何を訊いても答えてくれそうね
レミィが人払いをしてくれたのは私が戒魔に様々な事を訊くと思ったから
だとすればレミィ、後で貴方にも色々と訊かないといけなくなったわ。

「そういえば戒魔
貴方、今年で何歳になるんだったかしら？」

「な、何を言ってるのよパチェ！
戒魔は十歳だって前言ってたじゃない」

「レミィは黙っていてちょうだい
私の予想が正しければ戒魔は……
それで戒魔、貴方は何歳だったかしら？」

「なんだパディ、俺の歳を忘れたのか？
本当にさっきから物忘れが激しいな
俺は今三十歳、今年で三十一歳になるな」

そう……そういう事ね
どうやったかは知らないけど肉体を誤魔化していたみたいね
そしてレミィはやっぱりその事を知っている。

問題は目的ね
何故態々肉体を誤魔化していたのかしら？
それに私達が間違えられたパディ、レミレア、美龍という存在
もしこの名の持ち主に会えるなら会ってみたいわね。

三十歳という部分に反応したのは美鈴
当然ながら美鈴はまだあまり酔っていないし話しも聞いていた
でも、今は美鈴がどう思ったかなんてどうでもいい
今は戒魔から話しを聞かせてもらうのが重要、疑問や整理は後です
ればいい。

「戒魔、レミレアってどこに住んでいたかしら？
相変わらずさっきから物忘れが酷いのよ」

「……パディ、お前も住んでいるのに忘れるなよ
お前達が住んでいるのは紅魔館だろ？」

「……紅魔館ですって？
そこにレミレア、パディが住んでるのね？」

「ああ、他にも美龍にフラムドールに刹那が住んでるだろ？
本当にどうしたんだパディ、永仙の所に行くか？
怪しいけど良い薬を出してくれるから信用はできるぞ」

また新しい名前……フラムドールに刹那、永仙か
フラムドール……フランに似た名前という事は見た目もパディやレ
ミレアと同じく似ている？
刹那と永仙は思いつかないから今はいいわ。

戒魔が怪しいとは思っていたけど、こんな秘密を隠し持っていたと

は思わなかったわ
年齢、知り合いもだけど戒魔は叩けば埃しか舞わないわね
叩きすぎて破れない程度には教えてもらうわよ？

そういえば美鈴が言ってたわね
戒魔は名乗る時に戸惑ったって……
気になるわね……自己紹介でもさせてみようかしら。

「戒魔、ちょっと自己紹介してくれない？
さっき歳を訊いたでしょ？　忘れない為にももう一度教えて」

「俺達の間柄で今更自己紹介？
まったく、パディは仕方無い奴だなぁ」

この言い方にはさすがに腹も立つ
だけどそんな事は当然後回し
今は情報を集める事が先決よ。

「このままだと……えぇい、もう考えるのは後！
この……眠れ戒魔！」

チッ、レミィの事を忘れてた
さっさと寝かせるなり潰すなりすればよかったわ
私ではレミィを止められないし、美鈴は当然当てにできない。

レミィに殴られる戒魔を想像し、戒魔から話しの続きを訊く事を諦める
次の機会にまた酒を飲ませて続きを話させるか……

「ふ、笑止！」

戒魔が……戒魔がレミィの拳を受け止めた？
いくら手加減したとはいえ、吸血鬼であるレミィの攻撃を……
精神が大人とはいえ、体は子供の戒魔が受け止められるなんて！

「……え？　がはっ！」

驚き、唖然としたレミィの声
そして戒魔はそんなレミィの隙を突き、喉に拳を突き刺した。

……急所とはいえ、吸血鬼を一撃で苦しめるか
しかもあれは殆どが条件反射、つまり戒魔は急所突きに慣れている
事になる
先ほどレミィ……いえ、レミレアに言っていた事を思いだした。

戒魔は言っていたではないか
好戦的な性格をどうにかすればもっと付き合ってやる……と
つまり、既にそれなりとはいえ何度も好戦的な性格に付き合っている
という事だ。

好戦的な性格という事は何度も戦った事があるという事
結論、戒魔は喧嘩慣れをしている
条件反射になるほどって……どれだけ喧嘩してたのよ？
戒魔とレミレアの関係が気になってきたわ。

でも今は丁度いいわね
喉を潰され、声を出せなくなっているレミィ
これで邪魔者は居なくなった。

レミィには止めとして捕縛の魔法で縛っておこう

万全の状態ならともかく、痛みと混乱と苦しみで暫くは捕縛を破る事はできないはずよ
回復する時間も考え、効果は短く、その代わり強力にしておく
これでレミィは退場ね。

「美鈴、レミィと眠っているフランとナズナを連れて休ませてきなさい
私はこのまま戒魔と話しを続けるわ」

完全に忘れられていたけどナズナもレミィの悪戯によって酒を飲まされている
フランと同じく眠るだけで終わったらしい
戒魔は一度倒れてすぐに起き上がったけど、この二人には無理だったみたいね
酒癖が悪いのかしら？　三十歳を過ぎてるんだし、酒ぐらい飲んだことはあるはずよね？

「わかりました
後で戒魔少年の話していた事は教えてくださいよ？」

「わかってるわ」

美鈴はフランを背負い、ナズナを片手で抱え、レミィは片手で横抱きにした
レミィは涙目で私を見つめている
その目は余計な事をするなと言っているが、私はそれを無視する
こんなに興味をそそられる事は久しぶりなんだもの、これぐらい許してちょうだい。

「それはそうと戒魔

思いっきりレミィの喉を突いたみたいだけど大丈夫かしら？」

「レミレアは吸血鬼だし大丈夫だろ
それにパディだったらあの程度の治療は簡単だろ？」

「まぁ……それもそうね」

全く罪悪感を感じられないとは……戒魔に取ってレミレアとの日常だったのかしら？
なんとも嫌な日常だこと、私なら絶対にお断りよ。

「おっと、自己紹介だったな
俺の名前は博麗戒魔、年齢は三十歳の博麗の御子だ」

「は、博れっ……博麗ですって？」

思わず大声を出しそうになり、慌てて声を落とす
まさか博麗とは……先代の巫女？
いいえ、先代の博麗も女性だったから違う
もしかして先代巫女の夫？　でも子作りをしたけど結婚はしていないと聞いた
ならば戒魔はいったい……

「今まで解決した異変は紅霧異変、春雪異変、永夜異変などそういえばパディと出会ったのも紅霧異変だったなあの時は悪かったな、急いでたとはいえ喘息持ちのお前を叩きのめしてしまって」

「えっと……私は気にしてないわ
だから戒魔も気にしなくていいわ……よ？」

戒魔が私を叩きのめしたですって？
それに喘息持ちなのも私と一緒……パディは一体何者なのかしら？
無いとは思うけど、戒魔の妄想かもしれない
しかし妄想とするには戒魔の記憶は纏まっているみたい
更に言うならば異変なんてもの……妄想でも滅多に出るとは思えないわ。

「参考までに訊くけど……異変ってどんな事が起こったのかしら？」

「そんな事まで忘れたのか？
紅霧異変では協力者だったくせに……」

わ、私が異変の協力者ですって！？
そんな事をした試しは無いわよ！
……したいとは思った事ぐらいなら有るけど。

「紅霧異変はレミレア・スカーレットが紅い霧を出して幻想郷全体を覆わせた事件だな
目的は吸血鬼の弱点である日光を遮るためだが、大半はお遊びで起こした事件だそうだ
協力者はパディ・ノーレッジでその他に紅美龍と十六夜刹那だったなフラムドール・スカーレットは地下で寝てたらしいから参加していない」

吸血鬼……紅い霧……日光……お遊び……
どう考えてもレミィが異変を起こしたとしか思えないわ
でも実際に異変を起こしたのはレミレア
そもそもそんな異変、私は知らない。

そして姓が出てきたんだけど……私達全員と同じね
十六夜刹那は知らないけど、そいつ以外は全員私達と似た名前で同じ名字
意味が分からない……混乱してきたわ。

「次に春雪異変だったな
首謀者は白玉楼の主である西行寺幽真で実行犯は魂魄妖牙
幻想郷から春を奪い、西行寺妖という妖怪桜を咲かせようとした
最終的に俺や砲魔、刹那が介入して止めて春を幻想郷に還したがな」

白玉楼の主の名前は幽々子だったはず……また似た名前か
そして今度は妖牙と砲魔の名前……当然ながら私は知らない。

「次は永夜異変
主犯は八意永仙で協力者が鈴催・優曇華院・イナバと因幡なぇ
永仙の目的は月から来る追っ手から蓬莱山輝貴を隠す為
月を僅かに欠けさせ、満月を封じたらしい」

永遠亭……聞いた事が無いわね
新しくできたのか、それとも隠されていたのか……
どちらにせよ私が知らないんじゃそいつらの事を調べようが無いわね。

「次は六十年周期の大結界異変だったな
突然あらゆる花が咲き誇りだしたんだ
原因は大量発生した幽霊が花に憑依したから
砲魔に刹那、妖牙に鈴催、古町や映慈も手伝ってくれてなんとか収まったんだ」

古町に映慈……当然だけど知らないわ
そもそも戒魔の話す名前で知ってる名前なんて誰も居ないじゃない
もっと分かりやすく話してほしいわ。

「次は「せい！」あだ！」

またレミィは邪魔をしてくれて……
でも縛られた状態から強引に抜け出したみたいだから服が乱れてるわよ？

「はぁ、はぁ、はぁ、まったく……話しすぎよ戒魔！
少し黙ってなさい！」

「あの……お嬢様？
戒魔少年は既に気絶していて黙るもなにも、何も言えない状態ですよ？」

あら美鈴、居たの？
確かに美鈴の言う通り、戒魔は気絶して聞こえてないけど
もう少し心配してあげてもいいんじゃない？

まぁそれなりに聞けたから今回はもういいわ
今から戒魔の話しを整理して、また今度問い詰めればいいふふ……今から楽しみね。

続く

少女期編　裏二十一話【切羽詰まっている日常】
表との時間差……一年

視点　真苗

春……今年六歳の早苗は小学生になった
この僕が早苗と同じ体になって一年と八ヶ月ぐらい
その大半の時間、体を使っていたのは当然ながら早苗だ。

早苗はまだまだ子供ながら、現人神の力を無意識に使い始めている
僕が表に出ても視覚と聴覚は繋がったらしい
おかげで混乱する事が減り、泣く事も少なくなった。

早苗も僕という存在を段々と知り始め
入れ替わりながら声を出す必要になるが、そんな状態でも会話ができるようになった
今は逆に意識の遮断を練習している。

早苗はまだそういう事を知らないからなんとも言えないが
僕には見られたくない事や、知られたくない事は沢山有る。

僕は遮断する事ができるようになっているが早苗はまだできていない
頑張ってもらいたいとは思うが、遮断している間は暗闇でしかないので気が引ける
十歳ぐらいになったら僕の言いたい事を理解してくれると思うけど
……はぁ
それまで僕自身が持つかどうかだね。

最近の生活は早朝は僕が起き、体を鍛えるために軽い運動
厳しくすると早苗の体に負担が掛かってしまうので手加減しながら
朝食前に風呂に入るが、この時にはもう早苗に変わっている
僕は意識を遮断し、風呂に入っている時は見ないようにしている。

学校の時間
新学期が始まったばかりだけど僕には関係無い
僕は学校に居る間、余程の事が無い限り表に出ないと決めているからだ
この事に早苗は不満を持っていたが、両親、諏訪子様、神奈子様全員が賛成した

早苗を不審に思われないようにする処置なのでこれぐらいは我慢してもらおう。

夕方
帰ったら僕が再び体を使い、軽く鍛える
早苗はこんな事ばかりしている僕に疑問を抱いているようだが無視する
どうせこの先を知らないんだ、言っても理解できないだろうし無駄だからね。

夕食から暫くは早苗の時間
風呂に入る前、再び体を使わせてもらって体を鍛える
汗を掻いてきたら再び早苗に代わり、風呂に入ってもらう。

寝る時は早苗
でも僕が誰かに話したい事が有る場合
少々強引だけど無理矢理体を覚醒させて僕が体を使う
早苗は既に意識が眠っているので起きない。

こんな感じの毎日を過ごしている
体を自由に動かせないというのは思った以上に不満が溜まる
体を動かすのには鍛えると同時にストレスの発散にもなっている。

これを取り上げられたら僕のストレスで体に悪影響が出るかもしれない
その事は両親に話しているので止められる心配は無くむしろ頑張れと応援してもらっている。

体を鍛える必要は正直に言うと無い気がする
だけど何もしないと自分の事を保てる自信が無い

何でもいい……僕が何かをしたい。

怖い……怖いな……
でも今の僕には何もできない
だから僕は体を動かす
それしか……できないからね。

少年期編　四十一話【動く大図書館】（後書き）

フランドールが無知すぎない？
地下で大半の時間を過ごし、眠っていたので知識が足りない状態です
実際、フランドールが起きていた時間は百年もあったかどうかという程度
パチュリーから多少教えてもらったとはいえ、所詮程度が知れているかと。

どうしてリリーホワイトが花見に来てるの？
いつも通り、戒魔にお菓子を貰いに来たみたいです
何か騒がしかったのでなんとなく後ろから追いかけていたら
楽しそうにしていたので強引に参加しました。

戒魔もフランドールもナズナも、何故酒に気付かなかったの？
ナズナは酒の匂いを知りませんでした
フランドールは知っていましたがかけ声に遅れて混乱しながら呑んだので気付きませんでした
戒魔は何も考えていたなったようです。

無限ループって怖いと思わない？
レミリアがその恐ろしさを身をもって体験してくれました。

戒魔の酔った態度ってどうなってるの？
過去と現在の記憶が混濁している状態です
会話はまともにできていますが、頭の中ではかなりこんがらがっている状態になっています。

美鈴がレミレアよりも強い？

強いかどうかは別にしてですが、勝とうと思えば勝てるかと
基本的に力尽くのレミリアと技術を使う美鈴
美鈴なら柔よく剛を制す事ぐらいできると思いますし、間違ってはいないかと。

レミリアは何故人払いを？
戒魔の事を知る者は少ない方が良いと判断しました
下手に知られては紅魔館中に知られて話しが大きくなってしまうかもしれませんでした
どうせ知られるのなら主要人だけにした方がまだ安全かと。

萃香の事を何故レミリアが？
調べられそうな事は自分で調べたそうです
最初は戒魔の話す事がどれほど本当かを調べる為だったみたいですが
今では間違え探しのように楽しんで調べているそうです。

堺音の性格って？
基本的に善人ですね、一人称は私
面倒事は好きではなさそうですが、困っているのを見過ごせるような人物ではありません
今回は砲魔と鈴催の為に頑張ってくれました。

お金の話しって……
お金は大事ですよ？
どんな場所でも金が無いと生きる事ができません
特に砲魔はいい大人なんだから働きなさい。

戒魔がレミリアを倒した！？
焦っているレミリアの隙を突いてカウンターで殴っただけです
レミリアは思った以上の衝撃で怯み、苦しんでしまいました

まぁ吸血鬼なので数分で回復しますが……

戒魔って酒飲める？
戒魔は元々酒にかなり弱いですね
一応飲めますが度数のかなり低い酒しか飲めません
度数の高い酒を飲んだ瞬間、酔いだして誰にでも言いたい事を言い出します
ですので宴会などをしても戒魔に酒を飲ませる者は誰もいません。

パチュリーの考えている事が少ない？
考える事を後回しにし、覚えられる事をできるだけ覚えようとしているからです
後々整理し、戒魔に問い質すかと思われます。

美鈴に預けられていたレミリアが来たけど？
当主に通せと言われて逆らう事ができませんでした
戒魔の話しは気になるが、当主には逆らえない
美鈴はそう考え、レミリアを止めませんでした
結果は戒魔を気絶させ、パチュリーとの会話を強引に止めさせる事となりました。

裏で一気に時間が進みすぎじゃない？
特に何も起きる事は無いので問題無いかと……
小学生だとそれなりに周りを見れるようになるので早苗と周りを見えるようになります。

真苗って今までどうしてたの？
着替えや風呂の時は意識を完全に遮断しています
別世界の自分とはいえ、女の子（しかも幼女）の裸を見るほど堕ちていないのです

……早苗が年頃になったらどうなるんでしょうかね？

鍛えられた体はどんな感じ？

まだまだ子供の体なのでそこまで鍛えきれません

体力は平均的小学一年生を遙かに越えていますがその程度です

本当に鍛えているだけで技術などは磨いていないので体力だけの存在です

体が成長すれば技などの技術にも目を向けるかと思われます。

少年期編　四十二話【小さなすれ違いと大きな間違い】

視点　戒魔

花見から数日
最近パチュリーの様子が変だ。

俺を見つめていたと思ったら突然独り言を始める
授業中にも教えている最中にまた俺を見つめる
本を読んでいると思えばやはり俺を見つめている……意味がわからん。

まず、何故俺を見つめるんだ？
なんとなくだが見つめるというよりも……観察？
そんな気がする。

しかし今更観察？
害意を感じないから監視では無いと思うが……
もしかして何かに気付いたとかか？

だが俺はパチュリーに自分の事を殆ど話していない
花見の時だって特に変な事を言った記憶は無い。

花見といえば……酒で眠ってしまった時に夢を観たな
レミレアにパディに美龍……夢とはいえ久しぶりに会った
性格が違うように感じたが、それはレミリア、パチュリー、美鈴の影響だろう。

酔っていたり夢だったりで記憶が混乱していたんだと思う
レミレアは弱気だったし、パディはお馬鹿だったし、美龍は……あまり変わってないな
どうせだったらフラムドールにも会いたかったが、これは我が儘なのだろうか？

うーん……夢とはいえ、言いたい事を言えたのは嬉しいな
何度言いたかった事か……実際に言えて楽になれた
夢の話しだけどな。

それはそうと、問題はパチュリーだ
俺を観察する理由がわからない
人間観察の趣味にでも嵌ったのか？
頭が良い奴の考える事はよくわからないな。

まぁ終わったら話してくれるだろう
パディもだったが、大抵は事後承諾だ
しかも本人に殆ど無害だから言いたくても言う気になれない
特に困る事でもないし、無視しておくのが正解だろうな。

問題は無視した事を後悔するかもしれないという事だろうか
パチュリーの事だし、後々とんでもない事ないなるかもしれない。

救いはあまり嫌がる事はしない事だな
少し嫌がる程度だったら構わずに事を続けるんだが……
強引なのが玉に瑕、多少なら大丈夫だろう。

今は美鈴との鍛錬中
そして後ろではパチュリーが俺の事を見ている
気になるが無視したいのだが……

「……」

こんなに無言で見つめられて集中できるわけが無いだろうが！
パチュリー、お前は本当に何をしたいんだ！？

「あの……パチュリー様？
戒魔少年が気になっているようなので離れるか帰るかしてもらえませんか？
私も気になりますし、というか何をしてるんですか？」

美鈴、去る事を薦めるのはいいんだが訊いたら駄目だ
適当に返事されるか、無視されるか、詳しく説明されるかだ
まともな返事をされるはずが無いのに訊いたら面倒になるぞ？

「気にしないで美鈴」

ほら、やっぱり適当に返された
美鈴も困った顔をしていないでもっと頑張ってくれ
俺としても気になるからパチュリーには帰ってほしいんだ。

「パチュリー様、ご主人様をずっと見てますけど
ご主人様の事で何か気になる事でもあるんですか？」

それを訊くのかナズナ！？
美鈴もあえて訊かなかった事を何にも考えずに訊いたな
まだ子供だから仕方無いとはいえ、もう少し空気を読むか相手を選ぼう。

「否定はしないけど言う必要は無いわ

確信を持ててから話すと思うから今は気にしないで」

それでも気になるから言ったんだろうが
はぁ……どうにも何を言っても無駄なようだ
諦めて甘受するしかなさそうだな。

視点　パチュリー

相変わらず素の時は何一つ表に出さない……か
あの時、レミィに邪魔されなかったらもっと色々と訊けただろうに
あれは勿体なかったわ。

何度か酒を飲まそうとしたんだけど
レミィが邪魔してくるのよね……しかも酒を出した時に限り
あの子の事だから運命を読んでるのかしら？
可能性としては否定できない。

次の機会が有るのならば……また宴や花見かしら？
でもレミィがこれ以上隙を見せるとは思わない
ま、来年になればレミィも警戒を忘れるでしょうし、気長に待つか。

でも……私だってこのまま戒魔を放っておくわけにはいかない
何故三十歳なのに子供の体なのか、紅魔館に来た目的もわからない
結局、戒魔は謎が多すぎていまいち信用できない事に変わりが無いのよ。

勿論私だって戒魔を観察していただけではない

戒魔の話していた名前も調べている
しかし、名字は出てくるものの名前が何一つ一致しない。

あまりにも不可解
戒魔が名前を勘違いしているのか
それとも本当に同姓異名の者がいるのか……
前者の方がまだ信憑性があるわ。

私が調べたのは名前だけではない
博麗の事も調べた。

博麗の名前を遡り、調べ続けるも
戒魔という名前の博麗は存在しなかった
そもそも男性で博麗は歴史上ただ一人も存在しなかった。

ならば花見の時に言っていた博麗戒魔という名前は？
偽名にしては変、態々博麗を使う必要は無い
むしろ逆効果にしかならないとしか思えない。

ならば本名？
しかし幻想郷では博麗の名は様々な意味を持ち、博麗以外の者が名乗る事は禁止されている
ならば博麗が本名なのだろうか？

しかしそれならば歴史上に……
駄目、混乱してきて話しが戻ってしまっている
落ち着かないと……

少し見方を変えてみよう
戒魔は外から来た？

可能性は低いとしか言えない
外から来る要因が思いつかないし最初に夢幻という偽名を名乗った意味が分からない
それに幻想郷の事も知っているし、外から来たという可能性は低いだろう。

もしかして未来から来た博麗の子？
それなら可能性はあるけど、やっぱり低い
でも陰陽術を使っていたと言っていたから否定はできないかもしれない
博麗が魔法の方に適正が有るなんて……戒魔も不運だったわね。

他の問題はレミレア、パディ、美龍が誰かという事ね
もしかして……未来の私達の子供？
戒魔はその年代から過去に送られてきた？
それなら紅魔館にパディ達が住んでいた意味も繋がる……

そう……私にも子供ができたのね
相手は誰かしら？　想像もできないわね
無いと思うけど、一夫多妻じゃないわよね？

……ん？
ならどうして戒魔は子供の姿で現れたのかしら？

警戒心を無くす為？
いえ、子供でも紅魔館は甘くない事ぐらい知っているはず。

強制的に子供にされたとか？
なら原因は……私とかパディかしら？

魔法の実験で子供になったとか過去に送られたとか……
なんだか有り得そうで怖いけど……博麗を実験台にするかしら？

他の問題は異変ね
紅霧異変に春雪異変に永夜異変に六十年周期の大結界異変……最後だけ異様に長いわね。

まずは紅霧異変
レミレアが日光を遮断する紅い霧を幻想郷中にばらまいた
大半がお遊びだったらしいけど、具体的な目的は何かしら？

レミレアはレミィに似た性格のようだけど好戦的という違いも持ってるし
でも戒魔が付き合っている相手なんだし、悪い奴では無いと思うだからといって異変を起こすような奴だし……

それに協力者のパディと美龍と刹那
パディは私、美龍は美鈴に似ているらしい
刹那は相変わらず分からないけど、特に問題は無いでしょ
大分未来に現れる者かしら？

問題は異変がいつ起こった事かしら？
私の子供が関係しているみたいだし……そもそも私の夫とはいつ会えるの？
というか私は結婚するのかしら？
それとも逃げられて……いえ、私は男性に逃げられるような性格はしていない……はずよ。

戒魔に訊こう……と思ったけど怖いから止めておくわ
もし訊いても相手がどんな人かわからないし、変な先入観に捕らわ

れるのは遠慮したい
まぁ嫁げないよりはいい……のかしら？
少なくとも今は婚姻に興味は無いし、そもそも男性にだって戒魔以外と会ったりしない
こんな調子で私は結婚できるのかしら？

それに私だけじゃないわね
レミィや美鈴にもお相手は居るみたいだし
西行寺の娘にもお相手ができているみたいよね……
白玉楼の当主は幽々子という名前だし、戒魔の言った名前は幽真だったわね。

というか西行寺の子供、貴方は何をしているの？
春を奪って妖怪桜を咲かせようなんて……暇だったのかしら？
部下に働かせて自分で動かないみたいだし
当主というのはどこも変わらず腰が重いみたいね。

永夜異変はどうでもいいわ
誰も知らないし、満月を封じるなんて言われても私には関係無いわ
……いえ、月の魔力を使って実験をするかもしれない
そう考えると少々問題かしらね。

大結界異変では花が咲き誇るか……意味が全くわからないわ
突然発生した幽霊が花に憑依したって言っていたけど……
何故幽霊が大量発生したのかしら？

外の世界から流れてきた？
それとも冥界の西行寺が管理を怠った？
地獄からはみ出してきた？
死神が三途の川から逃がしてしまったとか？

色々と思いつくけどどれも微妙ね
しかも、どれも当て嵌まる可能性が有るだけに始末に負えないわ
もし閻魔や死神、西行寺に会えたら注意しておこうかしら？

他にもまだ有るみたいだけどレミィに止められたのよね
分からないけどどうしようかしら？

戒魔に話しは訊きたい
でも未来の私の話を聞くのがなんとなく怖い
子供の話が無ければ訊く気になれたのに……勿体ないわ。

はぁ、戒魔に話しを訊くのは諦める事にするわ
将来私が結婚をしようとしまいと、子供ができる事はわかった
何年、何十年、何百年後かはわからないけど未来に絶望する事な無さそうね
これだけわかっただけ良しとしておくか。

……そういえばパディも喘息って言ってたけど
喘息って遺伝するのかしら？

続く

少女期編　裏二十二話【予感的中】
表との時間差……一年二ヶ月

視点　真苗

あーあ……これは拙いかもしれないな。

「ひっ……ぐす……ひっく……」

予想はしていたけどやっぱり苛められたか
学校に居る間は寝てたからあんまり分からないけど
最後に少しだけ見えた。

早苗が男子数名に石を投げられる瞬間を……
悪口まで付けられて投げられた石は早苗にいくつも当たっている
僕も感覚を繋げていたので痛かった。

悪口の内容は気持ち悪いという言葉が大半だった
多分、現人神として無意識にプレッシャーを放っていたんだと思う
子供はその感覚がどういう意味かわからず、気持ち悪いと捉えた
ならその原因を排除しようとして苛めが起こる……か。

予想はしていたけど、こんなに早いとは思わなかった
きっと苛めてきた男子の中に霊感が強う者でも居たんだと思う
そうでなければ幼稚園でも苛められていたはずだ。

霊感の強い男子が苛めを先導し、周りの男子が楽しそうだと便乗した
たのかな？
唯一の救いは女子が殆ど混じらず、早苗を慰めてくれた事だろう。

だけど油断はできない
早苗から外れていた女子の中には気味の悪い存在という目で見てい
た女子も数名いた
彼女達も霊感が強いんだろう……少し注意しないと早苗が危ないな。

早苗は帰り道の公園の木陰で泣き止むまで涙を流していた
そんな早苗を見ても、僕は何もできない
この体は早苗が持ち主であり、僕は借り住みをしているだけ
早苗の変わりになるのはルール違反だろう。

だからといって放っておくわけにはいかない
今夜にでも両親に相談しよう
でなければ早苗は何も言わずに苛められるだけになってしまうかも

知れない。

そう決意し、早苗の中で眠る
鍛錬は今日は中止だ、もしかしたら話しが長くなるかもしれないし
夜更かしになる可能性がある以上、少しでも負担を与える気にはなれない。

そして帰宅
早苗は何も言わずに普段通りにしている……つもりなのだろう
本人はともかく、端から見れば違いがよくわかる
両親だって気付いていたしね。

深夜……といってもそれは子供にとっての深夜であり、実際はまだ午後十時
早苗は眠っており、肉体も眠っているが精神意識を覚醒させ、肉体を強引に起こす
これをすると疲れるが、このまま何もしないという選択肢は無い。

両親の部屋に入ろうと思い部屋の前に来たのだが……うん、部屋に戻ろう
両親はまだ若いんだし、こういう時もあるよね……うん。

何が有ったかって？
それは訊かないのが礼儀だと思うよ
とりあえずできれば妹がいいとだけ言っておこう。

さて、部屋に戻ってきたものの
僕にできる事は少ない。

八坂様と守矢様とは小学校に入ってから全く会っていない

いつまでも甘やかすわけにはいかないそうだ
僕も同意見だけど、今回に限っては協力してもらいたい。
切欠は自分の事とはいえ、原因はやはりあの二柱なのだ
少しぐらい手伝ってもらっても罰は当たらないと思う。

そう思っていた時期が、僕にもあった
実際に守矢神社に来たんだけど……

「どっちも出かけてる……
貴女達の神社なのだからせめてどちらかは残らない？」

残留している神気の量は少ない
数日ほど前には出て行ったんだと思う
まったく……こういう時に役に立たない神様達だ。

仕方無い、今夜は寝よう
早苗の事は気になるけど、僕にはこれ以上どうしようもない
最悪の場合、僕が表に出てでも早苗は守ろう。

僕にはこれぐらいしかできないしね……
はぁ、僕にできる事……他に無いかなぁ。

少年期編　四十二話【小さなすれ違いと大きな間違い】（後書き）

戒魔は酔っている時の記憶が残ってるの？
一応残っていますが夢だと捉えています
倒れて眠ったという記憶がハッキリと残っているので
自分が起きていたとは思ってもいません。

レミリアの運命力って凄い
個人的には運命四割と直感が六割と思います
なんとなく鋭いというイメージを感じるので……

パチュリーって男に飢えているの？
そういう訳ではないのですが……
彼女とて女の子ですし、結婚に憧れているのでは？

パチュリーが一直線すぎない？
自分が正しいと思った事は大抵合っている
緋想天のパチュリールートではそんな感じだったのでこうなりました
真犯人が萃香と間違えて天子を適当に倒したりと……勘違いですが
そういう訳なのでパチュリーは少し間抜けになってしまいました。

喘息って遺伝するの？
遺伝するという話しを聞いた事はありますが調べていません。

早苗の両親はいったい何を？
大人の事情で教える事はできません。

神奈子と諏訪子はどこに行ったの？
禁則事項です。

少年期編　四十三話【初夏の春】（前書き）

そろそろサブタイトルを考えるのに頭を痛め始めました
パチュリーさんの暴走は続く。

少々生々しい言葉
気分の悪くなりそうな表現が存在します
こういうのが嫌な人は戻る事をお勧めします
読む人も気分が悪くなっても責任は取れませんので注意してください。

少年期編　四十三話【初夏の春】

視点　戒魔

春は終わり、桜も散った
これからは暑い夏の季節、だというのに……

「なんで……お前はまたここに居るんだ？」

「？？？」

初めてリリーホワイトと会った時と同じく
湖の近くでのんびりとしていたら今日も今日とてリリーホワイト
本当に何で春が終わってるのに来るんだ？

「そういえば春が終わってからの春告精ってどうしてるのかしら？
資料を漁っても春告精の数自体が少ないし
春が過ぎてからの事って書いてないのよね」

一緒にのんびりとしていたパチュリーが話しに乗ってくれた
パチュリーはある日突然俺と行動を共にする事が多くなった
理由を尋ねても曖昧にしか返事をされずにいるので困っている
時期的には花見が終わってパチュリーが俺を観察をしてから数日後
ぐらいだ。

パチュリーの言う事は俺も気になっていたが
まさかお菓子に釣られて春を過ぎても残るとは思わなかった。

無いとは思うが、季節の妖精の行動を縛っている事で季節がずれたりしないよな？
もしそうならば事を真剣に考える必要がある
レミリアや美鈴も含めて話し合った方がいいだろうか？

「なあパチュリー
リリーホワイトをここに縛って季節に擦れ違いは起こらないよな？
季節の妖精の行動を妨げる事で問題が起こったりは……」

「それは問題無いわ
リリーホワイトは春の妖精とはいえ季節にはほぼ無関係よ
リリーホワイトは春と告げる事を生き甲斐とした妖精なだけ
季節への影響は無いわね」

そうパチュリーが言ってくれて助かった
レミリアに相談してリリーホワイトを住まわせてみようかな……
でもこの場合、住まわせるというより飼うという表現が合っている気がする
そもそもリリーホワイトがここに来るのは餌付けの効果だし。

世話代とかは俺の食費とかお菓子代を削ればいいか
部屋もナズナと同じ部屋にするなら文句は言われないだろう
ナズナもリリーホワイトを好いているようだしな。

問題は俺が紅魔館に来てもうすぐ一年になる事
俺がレミリアに渡した金塊では生活費一年分ぐらいの量
ナズナの生活費は強引に召喚させたパチュリーに一部負担させているらしいが
それでも俺の分も使われているだろうから減るのも速くなっているだろうな。

今は初夏、残り時間は二ヶ月も無い
そんな俺がリリーホワイトをどうにかするのはさすがに駄目だろう
少し考えただけで止めてよかった。

それにしても夏か……夏には太陽の畑に行きたいな
幽亜の育てている見事な向日葵を見るのは毎年欠かした事が無い
こちらでもきっと美しい向日葵を咲かせているだろう
そうでなければこちらの風見幽亜では無いだろう。

十中八九止められるだろうがレミリアに頼んでみようか
護衛に美鈴を連れて、できればパチュリーも
フランドールはどうしようか……少々悩む
もし連れて行けるのならリリーホワイトも連れて行こうか？

連れて行けない知り合いはチルノだな
彼女の寒さと太陽の畑は相性が悪すぎる
最悪、全員纏めて死の寸前まで殴られるかもしれない
チルノだけは絶対に連れて行けないな。

この事は後で考えよう
今はそうだな……リリーホワイトにお菓子をあげるかな。

視点　パチュリー

あの後色々と考えたのだが、結果的に行動は起こさないと決めた
未来の話しを訊く事に不安は無い

しかし、未来から来たという仮定が正解と考えれば八雲が戒魔のような存在を見逃しておくとは思えない。

戒魔は八雲の関係者の可能性が浮上してきたという事になる
だから戒魔に話しを訊くのがどれほど危険なのか理解できたのだ。

レミィに話したのは話す事の許可が出たのが一人だけだったとか
住む場所を確保する為に家主にだけ許可をしたとか
そんな理由が考えられる。

戒魔が八雲の関係者と考えると元博麗にも信憑性が増してくる
博麗と八雲は切っても切れない関係だったからだ
博麗の教育や鍛錬は先代や八雲が主に担当しているらしい
強引に聞き出しても損するかもしれない……命という損をね。

下手な行動に出る前に気づけてよかったわ
もし何かしていたらと思うと……背筋に悪寒が走る
改めて自分の慎重さに感謝ね。

考えれば考えるほど戒魔が八雲と繋がっているように感じる
未来から、体の事、存在自体、隠している理由など
あの何を考えているのかよくわからない八雲が相手なのだ
私のような真面目な者には手に余るような不真面目な存在
結論を言うと、考えるだけ無駄だと判断したのよ。

こうなるとレミィに訊くのも下策ね
フランと美鈴にも釘を刺しておこうかしら?
戒魔は八雲の関係者の可能性が高いから下手な事をするなとね。

気になる事といえばやはり紅魔館を選んだ理由ね

確か八雲は西行寺との仲が良好だったはず
預けるならばそちらの方が信用できると思うんだけど……

それに紅魔館が悪魔の館という事ぐらい知っているはず
というか、知らない方が変ね
吸血鬼異変でレミィを嬲り殺しをした事は有名な話し……死んでないけどね。

とにかくレミィを軽く嬲れるほど凶悪な力を持った妖怪
レミィより実力の劣る私が手を出していい相手では無い
好奇心を押さえるのは嫌だけど私とて命は惜しい
下手に手を出して殺されるぐらいなら自重するわ。

それはともかく
里の者でなければ血を吸う事には八雲は干渉しないはず
ならば戒魔の血を吸い尽くされ、殺されても文句を言う事はできない
それなのに何故紅魔館に戒魔を？

可能性として考えられるのは……
一、戒魔は未来で紅魔館の私達や子供達と特別仲が良く、八雲が気を利かせた
二、適当に過去へ送ったら偶然紅魔館付近だった
三、戒魔が自分の意志で紅魔館に向かった
四、未来の私達が大分甘くなっており、根拠の無い自信で大丈夫だと思った
五、未来の私達か子供達の誰かが戒魔を紅魔館に送るように八雲に頼んだ

すぐに思いつくのはこれぐらいね
一の場合はかなり微妙な可能性ね

八雲が戒魔の為にそこまで気を回すかしら？

二の可能性は高いと思われる
八雲は気紛れな行動が多いという話しはよく聞く。

三は高いでしょうね
戒魔の話しからレミレア達の仲は良かったみたいだし
何よりも筏を作って紅魔館に来たみたいだしね。

四は……どうかしら？
甘くなっているかどうかはわからないけど可能性としては十分
でも八雲が根拠の無い自信で戒魔を送るかしら？

五の可能性が多分最も高い
予想できるのはレミレアがもっと過去の自分に戦わせてあげたいとかかしら？
他にも私とかパディが昔の資料を持って来てほしいとか言った？
色々と予想できるだけに可能性は高いと思われる。

五の可能性でレミレアの予想が正しければ近いうちにレミィに子供ができる？
となると相手は誰かしら？
戒魔は無いに決まってるし、そもそも人間の可能性はほぼ皆無でしょうね
レミィが下品な妖怪に襲われるとも思わないし、それ以前に返り討ちにするはず。

となるとやっぱり恋愛の末の子供かしら？
でもレミィが認めるような男性妖怪なんて……少なくとも私は知らないわね

まさか天狗の長である天魔がレミィとなんて無いでしょうし、種族的にも無いに決まってる。

……まさか私が魔法の実験に失敗して男性化してレミィを襲うとか？

ちょっとそれは……さすがにそれは私でも嫌よ

今後、私は性別に関する魔法は絶対に使わないと誓うわ。

さて、私の可能性が潰えたんだけど……そうだ、刹那という者がいたわね

確か名前は十六夜刹那、名前からして微妙ね

男性とも女性とも取れるから困るわ。

男性だと仮定して考えると……無理、想像できないわ

そもそもどんな人物かも知らないのに考えるなんて

いくら私の知識と頭脳を持っていても無理なものは無理よ。

刹那という人物に関しては現れてから考えるとしよう

きっと数年以内には現れるはずよ

レミレアが過去の自分をという予想が正しいのならね。

そういえばフラムドールの事を忘れていたわ

フラムドール……面倒だからフラムにしよう

確かフラムは紅霧異変に参加していなかったわね。

地下に籠もっていたって言ってたけど引き籠もりかしら？

それともフランみたいに事情を持っているとか？

まったく……戒魔から全員の性格を訊いておくんだったわ

そうすればもう少し予想が立てられるはずなのに。

……フラムと同じく忘れていたけどナズナはどうしたのかしら？
今回は私が戒魔に召喚させたけど、未来では？
もしかしてずっと召喚されずに生きていくのかしら？

もし未来の私かパディと話せるのならナズナの事を召喚するように頼んでみようかしら
私はナズナの事は気に入ってるし、雑用にはなるから損は無いと思うわ
もっとも、未来のナズナは既に名前を持っていたり別の特技を身に付けているかもしれないけどね。

ふう……ちょっと考え過ぎたかしら、頭が痛いわ
本の知識を使わずに自分の頭で考えるのがこんなに面倒だとはね
久しぶり過ぎてこの頭痛が懐かしいわ。

これからはもっと自分でも色々と考えるようにしよう
久しぶりだとこの頭痛も心地良いしね。

続く

少女期編　裏二十三話【我慢の限界】
表との時間差……一年一ヶ月

視点　真苗

もうすぐ夏休み
夏休みになれば早苗も休めるだろう
これを切欠に不登校になってもいいと思う
だから早く早苗を苛めから解放してあげたい。

だけどそんな事を考えていても事態は変わらない
早苗を苛める者が増えてきたからだ。

今では石を投げるような直接的な暴力だけでなく
靴を隠す、体操服を隠す、机に落書きをされるなんて可愛いもの

掃除中に水を掛けられる、給食を落とされる、仲間外れ……など
いい加減、僕も限界に達してきた
そんな状態で迎えたある日、絶対に許せない決定的な事が起こる。

その日も早苗は相変わらず苛められていた
今日は掃除中に水を掛けられて体操服に着替えて午後の授業中。

「うん？　なんだか臭い匂いだな
東風谷、お前ちゃんと風呂に入っているか？」

その瞬間、教室中が爆笑の声で満たされる
女の子である早苗に対して臭いとか風呂に入っているかだって？
掃除中の水を掛けられた事ぐらい知っているはずのお前が……

早苗は泣き出した……小さな声で顔を隠して泣いている
その瞬間、僕はいい加減に……堪忍袋の緒が切れた！

僕は早苗から体の主導権を強引に奪う
そして大笑いしている事の元凶である教師に向かい
筆箱からある物を取り出して顔の横スレスレに投げつける。

気持ちの良い音が鳴ってそれは黒板に突き刺さる
その瞬間、教室は静寂に覆われる。

僕が投げたのは霊力で強化した木製の鉛筆
本当は鋏や投げようと思ったけど警察沙汰になるかと思って止めた
怒ってはいるけど早苗が捕まるような真似をする気は無い
投げた鉛筆だってちゃんと尖っていない方を向けて投げた。

「な……な……これは鉛筆……か？」

教師の唖然とした声
だけど僕が疑われる可能性は低い
何故なら僕は片手を顔を隠しながら逆の手で鉛筆を一瞬で投げ、再び両手で顔を隠したからだ
泣いたふりぐらい簡単にできるんだ、女の子だしこれぐらい許せ。

「だ、誰だ！
こんな危ない真似をしたのは！？」

声がかなり震えているよ先生
でも、それぐらい怯えてくれないとこんな事をした意味が無い。

先生が教室中を見回すも、誰が犯人なのか全くわかっていない
僕は早苗が泣いた時と同じ格好で泣き続けているからそもそも黒板さえ見ていない
こんな状態の僕が何かできると思う？
当然ながら誰も思うはずが無い。

犯人は僕だが誰も僕を疑わないので教師も誰が犯人かわからない
教師は犯人捜しを諦め、生徒全員を脅して授業を再開した
脅しの内容は……

「今回だけは許してやる
だが次にこんな事が起こったら全員の家に家庭訪問だ！
お前等が学校でしている事を事細やかに親に話してやるからな！」

ゲスの考えそうな事だ
どうせ無い事無い事を捏造して親と話すんだろ？

この屑教師が、鋏を使ってやればよかったかな？

っと、落ち着かないと
最近の苛々で思考が過激になってたか
とりあえず授業が終わったら早苗に体を返そう。

意識を奪われた事に気付かないまま泣きっぱなしだしね
落ち着く時間でも無いと辛いはず
泣き止んだ直後に入れ替われば大丈夫のはずだ。

そして早苗が泣き止んだので入れ替わる
早苗は何が起こったのか全く知らない
もしさっきの事を追求されても何も出ないさ。

とりあえず今後は注意しないと……
僕自身、どれほど我慢できるかわからない
こんな事が後十年以上続くなんて……考えたくないよ。

少年期編　四十三話【初夏の春】（後書き）

本当に四季がずれたりしない？
しません
リリーホワイトは所詮春を告げるだけの妖精です
告げるのが遅れて春に気付く人が減るぐらいだと思われます。

パチュリーの考えがどんどん深みに嵌ってない？
頭が良いだけに良い方と悪い方では悪い方に考えが向いてしまうのは仕方無いかと
こういうキャラの存在は勝手に考えを進めてくれるので書くのが非常に楽です。

パチュリーはフランドールが戒魔の事を知っている事を知らない？
知りません
フランドールはレミリアと違い、戒魔に対して固執しているような行動をパチュリーに見せていません
同じ理由から美鈴もフランドールが戒魔の事を知っている事を知りません
そもそもパチュリーと美鈴がフランドールとの接点が少ないのも原因の一つです。

真苗もよく我慢できたね
我慢していたというよりも寝ている時間が多かったという方が正しいですね
現実逃避でしかありませんが、特に悲しい幼少期を過ごしていない真苗には耐え難かったのです。

本当にこんな事が十年以上続くの？

絶対にそんな事はさせません
苛め反対、作者も大嫌いですので長々と続けたいなんて欠片も思っていません
早く早苗を救わないと……自分で書いてアレですが本心からそう思います。

少年期編　四十四話【遠足の準備】（前書き）

暴走パチュリーさんは今回から暫くお休み（またするかわかりませんが）
今回から遠足に行きます
行き先ですが……夏といえば？

少年期編　四十四話【遠足の準備】

視点　戒魔

完全に夏に突入したと思えるようになったある日
俺はレミリアに以前考えた事を提案しに向かった
夏といえばやっぱり太陽の畑に行かなければ夏という気分になれない
という訳でレミリアに頼んでみたんだが……

「却下」

「即答かよ
せめて理由ぐらい教えてくれてもいいんじゃないか？」

却下される事は予想していたが即答されるとは思わなかった
理由を教えてもらわないと納得できない。

「あの風見幽香の住んでいる太陽の畑ですって？
あんな場所に行きたがる奴なんて滅多にもいないわよ
行くのは物好きか無知か馬鹿だけよ」

そこまで切り捨てられるといっそ気持ちいいな
こっちの幽亜の名前は幽香か……中性的な名前から女性らしい名前
になってるな
ちなみに俺自身は物好きに分類されると思う
実際に太陽の畑に行くのは自殺行為だと思われても仕方がないしな。

「それぐらいわかってるんだけどな……

でも俺が夏に太陽の畑に行くのは毎年している事
しないと落ち着かないし、何よりも俺はあの向日葵畑を眺めるのが好きなんだ」

それに幽亜は花にさえ手を出さなければ紳士的だ
馬鹿な事をして刺激をすれば危険だが、それを知る者は多くない。

阿求がまだ産まれてないので幻想郷縁起を見れる者が少ないのも原因の一つだ
時期的にそろそろ産まれてもいいはずなんだが……天狗の新聞が来ないな
こういう時ぐらいにしか役に立たないんだ
真面目に仕事しろよ射命丸、向こうでは凪だったがこっちでは何て名前だろうか？

そんな考え事をしている間にレミリアは考え事を進めていた
どうやら俺のしたい事をさせてやるのも悪く無いとは思っているらしい
しかし危険な場所に俺を行かせるのに抵抗が有る
どうすればいいのだろうかと考えている、といった所だと思う。

「そうね……条件付きで許可してあげるわ」

「許可してくれるだけありがたいよ
それで、条件とは？」

レミリアの事だからそこまで厳しい条件を言わないとは思うが
それでもやっぱりレミリアなんだ、厄介な事を言い出すかもしれない
俺ができるかできないか凄く絶妙な線で無茶を言うかもしれない
それがレミリアだからいいんだが……無茶は言わないでくれよ？

「まず連れて行っていいのはナズナとフランね
妖精メイドも数名なら構わないわ」

これは元より予想できていた
ナズナは俺の使い魔だから当然
フランドールには外を見せる良い機会だと思っているんだと予想できる
妖精メイドの存在は素直にありがたい。

パチュリーや美鈴は元より無理だと思っていた
逆にそんなに連れて行っていいのだろうかという感じになるぐらいだ。

「次は花の妖怪から赤い花の咲く種を数種類貰ってきなさい
勿論数個ではなく数十個から数百個よ
紅魔館に植えて育てさせるわ」

そう難しい事では無いな
問題はどうやって咲かせると約束するかだ
失敗すれば命は無い、大分慎重に話さねばならないな。

「可能なら風見幽香を連れてきなさい
話したい事があるの
無理なら無理で構わないけど、最低限伝えなさい」

種に比べたら難しすぎないか？
不可能とは思わないが出会った当日からそんな事ができるとは思わない
もし連れてくるのなら数日から数ヶ月必要だろう。

「最後にまた行くと約束を取り付けてきなさい」

「……は？」

「どうせ来年も行くつもりなんでしょ？
それに今年だってもう行かないなんて言うつもりも殆ど無いんじゃない？」

さすがレミリアだ、その通りで白旗を挙げるしか無い
来年も行くつもりだし、今年だってできれば何度も会っておきたい。

「だから約束を取り付けてきなさい
戒魔がこれらの条件を呑むのなら太陽の畑に行く事を許可するわ
どうする？」

こんな簡単な条件ばかりでいいのだろうか？
レミリアの事だからあまり考えずに思いつきなんだろうけど
それでもこの程度で済んで助かった。

「それらの条件、全て呑ませてもらおう
じゃあレミリア、今から行く準備してくる」

「ん、気をつけてね」

行くまで時間も掛かるだろうし弁当も持っていくか
難しいかもしれないけど幽亜……じゃなくて幽香も一緒に食べれたら一緒に食べるかな
幽亜は何が好きだったかな……そこまで多く話したわけじゃないから悩む。

俺はまず、ナズナとフランドールに出かける事を伝える
ナズナは喜び、フランドールは少し不安に思っているようだ
フランドールが不安に思う理由を尋ねてみた。

「だって私……友達とお出かけなんて初めてなのよ？
どうすればいいのかわからないし、昼間に出かけるんでしょ？
日光とかも怖いから大丈夫かなって……」

友達と出かけるのが初めてって……いや、当然か
フランドールは友人ができる機会に恵まれなかったからな
それにパチュリーは外に出ないし美鈴は結局門番
出かける事が無い奴らばかりだ。

でも日光に関しては結構大丈夫なもんだと思うぞ？
レミレアもフラムドールも、割と小さい日傘で平気だったしな
要は日光が肌に触れなければいいんだ
長いスカートを穿いて長袖を着れば大丈夫だろう
……暑いだろうがそこまではどうしようもできん。

さて、準備も終わって翌日
弁当を仕込んで太陽の畑に向かう準備をしないとな
幽香は女性だし、甘い物とか好きだろうか？
お菓子は甘い物を多めに作っておくか。

そして出発の時間
大きすぎる問題を完全に失念していた
そう、俺もナズナもまだ飛べないんだった……

「珍しいね、戒魔がこんな失敗をするなんて」

「言うなフランドール、俺は元々飛べたんだ
忘れてても仕方無いと思ってくれ」

一年近く飛んでないけど忘れてたんだ
そりゃ自分の住んでいる場所なんだから飛ぶ必要もあまり無かったのも理由だけど
それでも忘れるのは自分でもどうかと思う。

「どうする？　中止？
それとも歩いて行く？」

「中止はしない、俺だって楽しみにしてるんだ
でも歩いて行くには少し遠いな……帰る頃には深夜になってそうだ
まだまだ弱い俺やナズナでは少し危険かもしれない」

下級妖怪程度なら勝てなくも無いが、中級妖怪が出たら危険だ
無いとは思うが上級妖怪が出たら逃げられもしないだろう
フランドールは戦闘経験が乏しいから勝つのが難しいだろうし
勝てるのは中級妖怪が精一杯だと思われる。

俺達って何気に紅魔館で最弱組なんじゃないか？
最近は魔法の伸びも悪くなってるし、他の修行法も導入すべきだろうか？

「なら私が二人を持って行ってあげようか？」

「持って行くって……
つまり俺とナズナを持って太陽の畑まで飛んでいこうって事か？」

「ええ、日傘を持って貰う事になるけど
それでもいいのならそうしようと思うわ」

正直、この提案はかなり助かる
問題はそんな運び方で俺達に危険が出るかどうか
そして空中で妖怪に襲われたらかなり危険という事だ。

さすがに両手を使え無い状態で戦うのは無謀だ
となるとどうするべきか……

「フランドールに運んでもらうのはいいとして
運ぶのは俺かナズナのどちらかにしてくれ」

「どうして？
一緒に運んだ方がずっと速いわよ？」

「もし妖怪に襲われたら危ないからな
両腕が使え無い状態で戦うのは厳しいだろ？
妖精メイドに戦わせるのも難しいだろうし」

「それもそうね、門番隊の子は借りれないみたいだし
妖精メイドは何人まで連れて行っていいって言われたの？」

「五人だな、荷物を持つのに二人使うとしてだ
俺かナズナを運んでもらうのに二人、案内役として一人使えばいいかな？」

多少余裕を持って多めにと思って五人まで言ったんだが
まさか全員を使うとは思わなかった。

「それでフランドール、俺かナズナのどっちを運ぶ？
俺はどちらでもいいからフランドールが決めてくれ」

ナズナの意見も聞きたい所だがまだ来てない
来てから訊けばいいんだろうが、一番準備が遅いから罰だ
既に出発時間になっているんだ
妖精メイドさえもう来ているのに、お前は何をしているんだ？

「なら私は戒魔を運ぶわ
子供の体だけど男だからナズナより重いと思うし
妖精メイドに運ばせるのは大変だと思うわ」

ちなみに体重は俺の方が軽いとだけ言っておく
俺の体は十一歳ぐらいでナズナは見た目十三歳ぐらいだからな
男とはいえ、鍛えていて痩せ型の俺が肉体的に年上のナズナより重いはずが無い
なお、この事を知っているのは俺だけだとだけ言っておく
ナズナはまだ体重の事を気にするような歳では無い上、体重を量った試しも無い。

ならば何故俺が知っているか
パチュリーが健康診断だと言って解析の魔法を使って調べたからだ
ナズナの事は保護者扱いの俺に教えられた
ナズナ自身は健康診断があった事さえ知らないのだ。

「お、遅れてすみませんでした！
準備に手間取ってしまって……」

「遅かったなナズナ
次から準備は前日には済ませておけよ」

「はい……すみませんご主人様」

ナズナを見てみると普段の格好とは違っていた
いつの間にそんな真っ白のワンピースを手に入れたナズナ。

服の大きさから考えてレミリアの服だろうか？
ナズナには小さいだろう、スカートの丈が少し短い
膝どころか太腿が見えそうだぞ、恥ずかしくないのか？
いや、ナズナはまだ若いから羞恥心とかを感じられない？
レミリアの事だからそこまで考慮してこの服を着せた気がする
絶対に俺が困ると思ってこの服を選んだはずだ
帰ってきたら殴っておこうと思う。

ちなみにフランドールは普段の服と似ているが少し違う
袖は同じ長さだがフリルが無くなっており、普通の袖になっている
というかフリルがスカートも含めて全く無いのは珍しい、夏だからだろうか？
靴下は長めで膝辺りまでありそうだ
スカートはナズナと違いかなり長く、脛辺りまでの長さだ
そんな格好で日傘を持っているのでレミリアよりもお嬢様っぽく見える
いや、フランドールもお嬢様なんだが……

「似合ってるぞナズナ
でも遅くなりそうな時は誰かに伝言を頼むとかしような
そうじゃないと心配になるし、待つ方もどうしたのか気になるからな」

「は、はいご主人様

後……褒めてくれてありがとうございます」

返事した後に何か言っていたが声が小さくて聞こえなかった
そしてフランドール、何故少し不機嫌になっている
俺が何かしたか？

「じゃあ行くよ戒魔、ナズナ
妖精メイドも遅れないように着いてきてね」

そう言ってフランドールは俺を腋に抱えて飛び出した
後ろでは妖精メイドがナズナを抱えようと必至になっている
ナズナは突然の妖精メイドの行動に混乱
荷物持ちの妖精メイドは慌てて荷物を持って飛び立った。

「って、フランドール！
いきなり飛び立つな！
危ないし、妖精メイド達が慌ててるだろ！」

「いいの、文句は遅くなったナズナに言って
速度はかなり抑えておくから追いつくはずよ
だからそんなに怒鳴らないで」

はぁ……本当にどうして不機嫌になってるんだか
とりあえず落ち着くまで待った方がいいな。

さて、これから会うのは最凶の妖怪と名高い風見幽亜……の女性になった奴
殺されないように話さないとならないな、少なくとも絶対に花を踏んだりしないよう
全員に注意を促しておくべきか。

続く

少女期編　裏二十四話【八雲への違和感】
表との時間差……一年

視点　真苗

教師が不愉快な発言をしてから数日後
苛めはあまり変わらなかったが教師は少し落ち着いてくれた。

そしてようやく八坂様と守矢様が帰ってきた
どこに行っていたのか、そもそもいつから行っていたのか。

それらも気になるけど、それよりも先に相談がしたい
これから早苗の事をどうするか
両親もいい加減に話しを聞いて貰わないと困る。

早苗が眠った後、僕は再び強制的に意識を覚醒させた
やっぱりこの方法は体に負担が掛かる……他の方法を探さないと
まだ体は子供なんだし、無理をさせるわけにはいかない。

守矢神社まで来たんだけど……何でこんなに禍々しい雰囲気を放っているんだろう?
多分守矢様が怒ってるんだと思うけど、何かあったのかな?
でも入らない事には始まらない、怖いけど入ろう……ゆっくりだけどね。

「あのー……八坂様、守矢様
真苗ですけどいらっしゃいますか?」

「あーーーもーーー妖怪めーーー!!!
私達があんなに頼んだのに断るなんて許せなーーーい!!!」

ちょ、いきなり大声を出さないでくださいよ守矢様!
驚いたじゃないですか!

「落ち着け諏訪子、どんなに叫んだって決められた事は変えられん」

「そうだけどさ……そうだけど神奈子は悔しくないの！？
私は悔しい、神である私達があんなに頼み込んだんだ
それなのに妖怪の分際で私達の頼みを袖に振ったんだよ！
信じられない、あの妖怪め……絶対に許してやらないんだから！」

あの妖怪？
頼み込んだ？
一体誰の事で何の話しだろう？

「一応許可は貰ったんだからいいじゃないか
十数年後とはいえ、向こうに移り住む事ができるようになったんだ
我らに取って十数年なんぞ一瞬に過ぎんのだ
それぐらいおとなしく待ってやろうではないか」

「それはそうだけど……」

十数年？　移り住む？
そして妖怪……に守矢様達が頼み込むような相手。

「は、紫々か！」

「「誰だ！？」」

「……あ」

また失敗……自分の間抜けさにちょっと呆れる
別に隠れていたわけじゃないけど二柱の前に姿を出す

雰囲気とかで体を使っているのが真苗だと気付くはず
だから一々名乗ったりはしない。

「早苗……いや、真苗か
どうかしたのか？」

「こんなに夜遅くにどうかしたの？
私達に何か用が有るんだと思うけどさ」

「少し相談があったんですが……今はいいです
それよりも先ほどのお話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

早苗の事は重大な話し
だけど今は先ほどの話しの方が気になる
早苗も大事だけど僕だけの話ではないのでこちらを優先した
できれば早苗を優先したかったけど、早く聞かないといけない気がしたんだ。

「ここ数ヶ月程、幻想郷を様々な方法で探していたのだ
例えば私が神社を乗っ取ったり、諏訪子が一般人を呪ってみたりとな」

「それは明らかに問題でしょう！
何を考えてるんですか！
悪霊とか悪神とか呪精とかと言って祓われますよ！」

「いやすまん、久しぶりに動いたせいで加減ができんかった
神社はもう乗っ取らんようにする」

「そういう問題じゃないでしょ！
守矢様も、チッって顔をしないで反省して「チッ」……って、本当に舌打ちしない！」

こっちでも相変わらず行動がぶっ飛んでるんですね、本当にお二人は！！！

「冗談はさておき」

「冗談だったんですか！？」

それならまだ安心できる……
まさか本当に神社を乗っ取ったり呪ったりしていなくて良かった。

「いや、乗っ取ったのも呪ったのも事実
冗談というのは無意味な会話はさておきという……」

「全く無意味じゃないでしょ！
むしろ重要過ぎる問題じゃないですか！」

「真苗……あんまり怒らないようにカルシウム摂ったら？」

「怒らせる原因である守矢様に言われたくありません！
そしてそれもそうだって顔をしな「それもそうだね」……って、本当に言わないでください！」

もう怒ってもいいよね？
というか殴ってもいいんじゃないかな？

「話しを戻そう

要は私達は幻想郷に行く為に色々と試していたんだ」

「やっと真面目になった……
幻想郷に行くには紫々……八雲の協力が必要だろうって
そう前に言いませんでしたか？」

「だからおびき寄せるという意味も込めて色々としたんだよ
最終的に網に掛かったんだからいいんだしね」

「八雲が来たんですか！？
正直予想外ですね、あの八雲が来るとは思いませんでした」

あの性格をしているのだから私達がもっと危なくなってから来ると思った
もしくは本当にどうしようも無くなってからとか
相変わらず気紛れかな？

「会えたんだけど意味の分からない事を言われて撒かれた
ああもう、逃げようとした瞬間に呪えばよかった！」

「意味の分からない事ですか？
八雲は普段からそんな態度ですから別段不思議ではないですよ」

紫々は相変わらずのようだ
それとも紫々も女になってるのかな？

「しかし本当に意味がわからなかったのだ
印象的な言葉は定められた時、抗われる運命、介入者
これで理解しろというのは無理だ」

「更に私達を受け入れる事ができるのは十数年後からだって
それは変えられないから素直に待ってってさ
神が頼んでるんだから聞き届けてよね」

本来は神が願いと聞き届ける立場ですよね？
間違っても妖怪がその立場になってはいけないと思いますよ。

「まぁこの話しはこんな所さ
それで、真苗の話しって？」

「あ、はい
早苗の事についてです
両親も一緒に話した方が良いと思います
ですので我が家に来て貰えると助かります」

紫々が何を考えているのかわからない
定められた時、抗われる運命、介入者
こんなキーワードじゃ難しいか……

考えるのは後にしよう
幸い時間はまだあるんだしね
考えるぐらいの時間は拾えるだろう。

「ん、わかった
少ししたら向かうよ」

「お願いします守矢様
八坂様もお願いしますね」

「あいわかった

後で向かうとしよう」

さて、早苗の事をどう伝えようか……

先ずは両親を叩き起こして掃除しようかな。

少年期編　四十四話【遠足の準備】（後書き）

戒魔って物好き？
幽亜に会おうとする人間は戒魔を除いて片手の指でも足りるぐらいかと……
いくら太陽の畑が美しい向日葵畑とはいえ、幽亜の恐ろしさを知っている人間は太陽の畑に向かいません
それでも行こうとする戒魔は物好きと評されても変ではないでしょう。

阿求はまだ産まれてないの？
阿求が産まれるのは八月の事なのでまだ産まれていません
この話しでは初夏……つまりまだ七月なのでもうすぐですね。

なんでレミリアは太陽の畑に行く事を許可したの？
戒魔が折れないと思ったからです
もしこのまま許可しなかった場合、今後も長々と言われると思いました
実はそれは正解で、もしレミリアが許可しなかった場合
戒魔は何度でもレミリアに交渉する気でした
ですので早々に諦めたレミリアは正解でしょう。

何故レミリアはフランドールを連れて行くように言ったの？
戒魔の言っている事が大体正解です
どうせ外に行かせるのなら多少危険とはいえ、美しい世界を見せてあげたいと考えています。

何故レミリアは幽香を連れてこいと？
まだ秘密です

話したい事があるそうですね。

戒魔……まだ飛べないの？
霊力を奪われ続けているので安定しない上
感覚では覚えていても体が飛ぶ事を覚えていないので上手く体が動かないそうです
実は他にも理由がありますが……まだ秘密です。

魔法の伸びが悪くなってるの？
最初に伸びが良く、暫くしたら伸びが悪くなるのはお約束
実際は伸びは変わっていませんが、慣れてしまったので新鮮さが無くなり
なんとなく伸びていない気がしているだけです。

フランドールが不機嫌になった理由は？
女の子ですからね、他の女の子を褒められて自分は何も言ってくれなかったのが悔しかったんです
なお、改めて言いますがフランドールは戒魔に恋愛感情を持っていません
それでもちょっと嫉妬してしまうのはご愛敬。

諏訪子達に対応したのって本当に紫々？
いいえ、紫です
真苗は女性の八雲を知らないので仕方有りません
そもそも早苗、諏訪子、神奈子が女性化していても
他の人まで女性化していると知りません。

じ……神社を乗っ取ったって……いいの？
無論駄目に決まってます
神奈子は神社の神を強引に叩き伏せ、一日間借りしました

一日だけとはいえ、他の神に神社を奪われた事はその神社の神からすればかなり屈辱だったみたいです
後々報復されるかと思いますが、軍神の神奈子に勝てるかどうか……大方の神は泣き寝入りするかと思われます。

紫の言っていた言葉の意味は？
紫々と紫はお互いの情報を持っています
つまり、紫は紫々の世界の事を知っている事になるのです
言葉の意味は……まぁ大体予想できると思いますが秘密の方向で。

少年期編　四十五話【擦れ違いのタイミング】（前書き）

フランドール　嫉妬はするけど理由が分からない程度の頭
リリーホワイト　みんなから愛でられる程度の容姿
真苗　黒くなる程度の性格
喪紅　凄まじい過去を持っている程度の過去
疑問　次回に回される程度の回答

……今後はこんな感じで前書きをしようか悩み中です
それとキャラ設定がそろそろ簡易じゃなくなっている気がします
簡易を抜くべきでしょうか？

少年期編　四十五話【擦れ違いのタイミング】

視点　フランドール

戒魔に言われた方向に向かって飛びながら少し考える
なんで私……さっき怒ったのかな？

えっと……順番に思い出してみる
ナズナが遅れてきて、戒魔がナズナを叱って、ナズナの服装を褒めて……
私はどこで怒ったのかな？

ナズナが遅れた……怒ってもいいかもしれないけど
こんな事で怒るような性格はしてなかったと思う。

戒魔がナズナを叱る？
でもそれで怒る理由がわからない
別に戒魔は間違った事はしてないしね。

戒がナズナの服装を褒めてた……あれ？
何か胸の辺りが気持ち悪い気がする……どうして？

よくわからないけど、戒魔がナズナを褒めたのを思い出すと気持ち悪い
気持ち悪い理由がわからないし、何だか苛々してくる
どっちも分からないからそれでまた気持ち悪いし苛々する
悪環境の悪循環、どうすればいいのかな？

うん、こうなった原因は戒魔だから戒魔が悪い
……と、言いたい所なんだけど
これだとどう考えても八つ当たりよね。

私はどうしたいのかな？
戒魔に取り消させるっていうのも合っている気がするけど何か違う
ナズナを悪く言わせる……これは全然違う。

どうすればいいのか全くわからない
助けてほしいけど、この事を戒魔に訊くのは恥ずかしい
しかも今は戒魔を抱えているから他の誰かに訊こうにも訊けない
戒魔に聞かれるかもしれないから駄目ね。

妖精メイドに戒魔を預けようにも
妖精メイドは荷物とナズナで精一杯
道案内している妖精メイドだけでは無理よね……力無いし。

暫く我慢するしかないか……なんだか変な気分になるわ
早く解決したいなー。

視点　美鈴

「うー……うー……」

運の悪いというか何というか……
珍しく来るのが遅いと思ったら花を摘んできたんですか。

どうしましょうか？
戒魔少年は居ませんし、ナズナちゃんも一緒に行っているし……
パチュリー様は戒魔少年達の面倒を見ないで済むからって本を読み漁ってるし
私が相手をするしかないんでしょうか？

「うー……かーまー！」

夏になってかなり力が落ちたせいか、頭や呂律まで退化してしまったんですか？
それでも名前を覚えられただけなかなか凄いかもしれませんが……

「おーかーしー！」

でも一番の目的はそれなんですね……
どうしましょうか？
追い返すのは罪悪感がとんでもない事になりそうで嫌なんですけど。

「うー……」

「ちょ、泣かないで！
泣かないでくださいリリーホワイト！
少し待っててください、お菓子を持って来てあげますから！」

もう諦めるしかない……ああ、後でお嬢様に怒られるかもしれない。

「えっと……誰か、リリーホワイトにお菓子を持って来てあげてください
さすがに保護者無しで屋敷に入れるわけにはいきませんからね」

私の指示で門番隊の子が数名屋敷に戻りました
お菓子……誰の分を持ってくるのかしら？

なお、保護者とは勿論戒魔少年の事です
リリーホワイトが何度も現れるようになってから
戒魔少年はリリーホワイトを迎えに行くようになりました。

そのせいか、リリーホワイトは戒魔少年にくっついている事が多いです
その姿は親子だったり兄妹だったり……飼い主と犬とも見えますかね？
親や兄、飼い主はどう見ても戒魔少年ですね……見た目は子供ですが。

リリーホワイトの頭を撫でて泣き止ませながらも
戒魔少年に恨み言を向けておきます
何故リリーホワイトを連れて行かなかったんですか？
私に面倒を押し付けないでください！

「うー……んー……」

……は！
可愛いだなんて思ってませんよ！
このままずっと愛でたいなんて思ったませんよ！

だって涙目で泣きそうな顔だけど頑張って耐えているんですよ！？
その上、少しずつ口元に笑顔が浮かんでるんですよ！？
背も低くて小さい女の子がですよ！？
この姿が可愛くないなんて有り得ないでしょう！！！

「あの……美鈴様？
お菓子を持って来ましたけど……」

「あ、ありがとう
はいリリーホワイト」

門番隊の子から受け取ったお菓子をそのままリリーホワイトに渡す
そしてリリーホワイトは満面の笑みを見せてくれて……
ああ可愛い……抱きしめたい。

両手で大事そうに受け取って少しずつ頬張るリリーホワイト
その姿はまさに妖精！
……いや、本当に妖精ですけどね
可憐で可愛いという意味で使う意味での妖精ですよ。

門番隊の妖精達は可愛いよりも格好いいという印象を感じられる者が多いですしね
妖精メイドも可愛いですけど、あれは姿が可愛いという感じで種類が違います
チルノちゃんや大妖精ちゃん？
チルノちゃんも可愛いですけど、元気が有って可愛いという感じで少し違います
大妖精ちゃんも可愛いですけど、容姿が良くて服も似合っていてという感じでしょうか？

リリーホワイトは見た目は当然の事ですが
まだ本当に子供という性格に一部を除き舌足らずな口調
なんだか守ってあげたいという感じで保護欲に駆られるんですよ
大事にしてあげたいというか、泣かせたくないというか。

母親になった事はありませんが、これが母性本能でしょうか？
戒魔少年がそんな事を言っていましたね
彼の場合は男なので父性本能でしょうか？

どちらにせよ、リリーホワイトは保護すべき存在という印象に変わりはありませんね
このお菓子を頬張っている姿を見ると、本当に和みますよ。

それにしても……リリーホワイトは何しに来たのかしら？
花を摘んできた理由もわからないし……またお菓子を食べに来ただけ？

「リリーホワイト、何故お花を摘んできたんですか？」

「んー……おれー、お菓子、沢山」

おれー？　おれー……お礼？
なるほど、戒魔少年から何度も沢山お菓子を貰ってるからお礼に花を摘んできたと
それなのに戒魔少年は今は出かけていて擦れ違い……お互いに間の悪い事ですね。

どちらか一日でもずれていれば良かったんですけどね
どちらも悪く無いので何も言えません。

「でもかーまいない……うー……」

「戒魔少年は今は太陽の畑に行ってますよ
夏だから向日葵を見に行くそうですよ

行ってからそんなに経ってませんし、急いで行けば追いつけるかもしれませんよ？」

「う？」

力が衰えているリリーホワイトでは行かないだろうなー
そう思いながら提案したんですが、リリーホワイトの動きが止まった？
何やら頭を抱えてますけど……可愛いなあ。

「ん、行く！」

「はい？」

行くってどこへ？
そう訊こうと思った直前にリリーホワイトは飛び立ってしまいました。

え？　え？
もしかして太陽の畑に向かったの？
でも彼女は今力が落ちていて体力も少なかったはず
紅魔館から太陽の畑まで……体力が続かないかもしれない？

「……も、門番隊の誰か！
いいい、今すぐにリリーホワイトを追いかけてください！
行く場所は太陽の畑とわかっています
追いついたら連れて帰ってください！
もし嫌がっても強引に連れて帰ってきてはいけません！
どうしても帰ってこないつもりなら太陽の畑までの護衛
そして戒魔少年と合流して事情を話す事！」

私のかけ声にもなかなか動かない門番隊
これは確かに門番隊の仕事じゃないけど
でも放っておくわけにはいかない！

「何をもたもたしているんですか！
急いで追いかけなさい！！！」

「「「「は、はい！」」」」

私の一喝でリリーホワイトを追いかけたのは四名
他の子も出ようとしていたけど、これ以上は不要と思って止めた
もしこれ以上出ようとしていたら私から止めるつもりだったので丁度いい
さすが私の育てた門番隊、自分で言うのも何ですが優秀ですね。

……あ
まだお昼ご飯はまだでしたね
向こうの戒魔少年達のご飯……余りますかね？
もしそっちに行った子達がお腹を空かせていたら食べさせてあげてくださいね
足りないとは思いますけど。

まぁ細かい事は我慢してもらいましょう
時期と運の悪かった戒魔少年が悪いんです
諦めてくださいね。

続く

少女期編　裏二十五話【家族会議早苗の議】

表との時間差……一年

視点　真苗

両親と八坂様、守矢様を集めて家族（？）会議
議題は早苗が苛められている件について。

「それで真苗、我ら全員を集めて何を話すつもりだ？
早苗が眠ってからという事は早苗に話したくない事なのだろう？」

「……実は数ヶ月前から学校で早苗が苛められています」

「「早苗が！？」」「やっぱりか……」「予想はしてたけどねー」

両親は大声で慌てた声を上げ、八坂様と守矢様は予想通りという顔
やっぱり八坂様達も予想していたんですね
私が予想できるぐらいだから当然かと思いますが。

「苛めているのは霊感の強い男子数名
楽しそうだと賛同している男子も数名
合計して十人にもなりませんがクラスの子供だけじゃなく
他のクラスの子供まで来る時があります」

両親の唖然とした顔が印象的だった
まさか他のクラスの子供にまで苛められているとは思わなかったのだろう
そもそも苛められているという事を受け入れたくなさそうだ。

「苛めてくる人数はわかった
それで、内容はどうなのだ？」

八坂様の質問に場が固まる
両親は八坂様のあまりに自然な態度に驚いていた
でも僕からすれば当然の反応
軍神がこの程度で怯むわけないでしょ？

「僕が最初に知った時は石を投げられたりする程度でした
暴力的苛めだったんだけど段々エスカレートしていっていて精神的な苛めも発生しています
主に靴を隠す、体操服を隠す、机に落書きをされる程度でした」

「でした？
過去形って事は悪化しているって事？」

「はい、今では仲間外れはまだ可愛い方
掃除中に水を掛けられたり給食を落とされたりですね
酷い時には掃除用具入れに閉じ込められたりされました」

あれには驚いたな……あんな苛めがあるとは思わなかった
子供の発想って怖いと思う
どう考えても子供の発想だけじゃない
もしかしたら大人の言う事か、本の知識かテレビの知識か……厄介な事だ。

「で、でも早苗はそんな事を一言も言っては……」

「早苗は我慢していたからね
この件で最大の問題は早苗が我慢できたって事だし
僕が気付いたのだって一ヶ月前
多分その少し前から苛められていたと思う」

「それまで真苗は何をしておったのだ？」

「僕は学校では基本的に寝ています
早苗の体を借りている身ですし、今更学校の勉強を見てもアレですしね

それに早苗が僕の事を意識してしまわないようにもです
今回はそれが仇となって気付くのに遅れました」

これは僕の不覚だ
もう少し早苗に気を配っていればよかったと思う
それでも防げなかったと思うけど
知らないよりはマシだった。

「今回集まってもらったのは苛めの事を話すだけではありません
僕という存在を表に出して善いかどうか、それを尋ねたかったんです」

「それって早苗の変わりに真苗が学校に行くって事かしら?」

「お母さんの言う事は正しいよ
今後は二重人格として生きていけばいいと思うんだ
そうすれば僕が早苗を守れる
苛めてくる子供に反撃とかもできるしね」

「子供を傷付ける気か?」

「お父さんの心配もわからなくもないよ
でも僕は早苗の為なら相手にトラウマを与えてでも守り抜く」

僕にとって早苗は単なる同居者、主人格じゃない
絶対に守りたい大事な子だ
早苗を傷付ける者は例え子供でも……一切容赦しない。

今まで放っておいたのは僕の存在を隠していたから
そうじゃなかったらすぐに表に出て殴り倒している

痣程度で済ますつもりは無い
骨折しようが障害になろうが許すつもりは無い。

つまり何が言いたいかというとだ
今まで早苗を苛めてきたガキ共、貴様等は闇討ちをしてでも潰すって事だ
安心して病院生活を送るんだな。

「真苗……なんかすっごく怖い顔してるよ
もしかして呪おうだなんて考えて無いよね？」

「安心してください守矢様
僕はそんな事考えてません」

「……どうだか」

守矢様も疑り深い……でも嘘は言っていない
呪う事はまだ考えていなかったんだからね。

それにしても呪いか……守矢様も良い案を出してくれた
守矢の系譜に繋がる僕だから呪術にも適正はある
早苗の体にまで適正はあるかどうかわからないけど、体が使えなくても簡単だ
何十回、何百回呪った事か……その僕からすれば体が慣れていなくとも子供を呪う事ぐらい簡単さ。

「ふむ……我としては真苗が顔を出す事には賛成だ
元々の原因は我の不手際、早苗を助けてくれるのなら許可を出す事は吝かでもない」

「私は反対
真苗が早苗を大事に思っているのはわかった
だけど真苗が表に出てきて起こる面倒事を考えるとデメリットが多すぎる」

八坂様は賛成、守矢様は反対か……これは予想していた
八坂様は早苗に甘く、守矢様は考えの幅が広い
だから八坂様は早苗の為になるだろうと思い、守矢様は僕の存在で危険な可能性を考えた
どちらも僕や早苗を考えてくれての事なので無下にはできない。

「お母さんとお父さんは？」

「……俺は反対だ
真苗が出てきて起こる面倒事は事後処理だけではない
病院で検査とかもされるだろうし、精神科の先生にも掛かるかもしれん
色々と厄介な事が多いので反対
しかし早苗が心配なのも事実だからな
反対はするが一時保留だ」

「私は賛成するわ
どんな問題が起こっても早苗が苛められたままなんて耐えられない
事後処理がどんなに面倒でも早苗の悲しみが少しでも薄れるのなら構わないわ」

反対に一票と賛成に一票か……こちらも大体予想通り
でもお父さんは一時保留なので実質、条件付き賛成に近い
なので賛成二票、条件付き賛成一票、反対一票となる。

「幸い、後半月もすれば夏休み
早苗には本当に申し訳ないとは思うけど
夏休みまで頑張ってもらおうと思う」

「ほう？
真苗が早苗の事を後回しにするとはな
何か考えでもあるのか？」

「そういう訳ではありませんよ八坂様
夏休みの間に何度かこんな会議を開こうと思っています
それに夏休みなら色々と仕込もできるでしょう？」

仕込というのは人格分裂を起こす為の自演事故の事
頭を強く打って脳障害を起こして人格分裂とかね
幸い、こちらには八坂様や守矢様という神が居る
人身事故を起こす程度簡単だろう。

「真苗……あんた腹黒いね」

「呪いを専門としている守矢様には言われたくありません
僕だって本当は全く我慢せずに怒りのまま暴れたいですよ
でもそれだと早苗が迷惑を被るかもしれないから我慢しているんです」

「早苗の為ってのはわかるけどね……
これで話しは終わりだね
じゃあ真苗、頑張って我慢してね
愚痴ぐらいなら聞いてあげるからさ」

守矢様のこういうさり気ない優しさは本当に助かる

頑張ろうって気になるし、安心できるから。

「では我も戻ろう
真苗も手を出さないと決めたのはいい
だが早苗に声を掛けてやるのを怠ってはいかんぞ」

八坂様は僕以外の事も考えてくれる
こんな神様だから僕は男女関係無く信用できるんだ。

「はい、おやすみなさい八坂様、守矢様
じゃあお母さん、お父さん、僕も寝るよ
あんまり遅くまで起きてると早苗の体が疲れちゃうからね」

「ええ、おやすみ真苗」「おやすみ真苗」

僕は部屋に戻ってベッドで寝転ぶ
早苗……絶対に守るから……だからもう少し頑張ってね。

少年期編　四十五話【擦れ違いのタイミング】（後書き）

平行世界簡易キャラ設定

藤原妹紅／藤原喪紅（もこう）
蓬莱の被害者

名前にとんでもなく悩んだ一人、喪紅の名前だけで一日以上使いました
二つ名でこれ以上の嵌り名は無いと思う

簡易特徴
藤原家の十人姉弟の末っ子
母親が輝貴に誑かされ、輝貴に貢ぐようになった事から輝貴との因縁が始まった
富豪だった藤原家の金も当然ながら無限ではなく、輝貴に貢いでいるので金は無くなってゆく
省略するが、最終的に金欠から借金、そして母親は自殺してしまう
喪紅の姉達も輝貴に惚れ、貢いでいたが母親と同じく金欠から借金ある姉は水商売、ある姉は母と同じく自殺までしてしまう
兄兄弟達はそんな姉妹から逃げるように家から誰知らずに逃げ出した
喪紅が残されたのは兄弟から生け贄として捨てられたのである。

そんな事を関係無く、輝貴は多くの者から貢がれた金で神宝と呼ばれる物を買い漁った（神宝については後に設定で書かれるので書かれたらそちらへ）
そして地上の女にも金にも物にも満足した輝貴は金と物以外を全て捨て、月へ帰って行った。

そのような事が有り、月へ帰って行ったとはいえ輝貴を怨むのは当然の流れ
輝貴に関係していた者達を殺して回り、雲隠れをする
その途中で蓬莱の薬を焼く為に運んでいた者を発見、同じように殺害し、薬を強奪する
輝貴に関係するので自らの手で燃やしてやろうかと思ったのだが、少し魔が差してしまう
蓬莱の薬の噂は知っていたので、これを呑めば輝夜がまた地上に来た時に殺す事ができる……
そう思った喪紅は思わず蓬莱の薬を飲んでしまった
以来、喪紅は不死者として生きていく事となったのである。

永夜異変までは時間と共に憎しみの感情が薄れ、何度も殺し合ったからか恨みはほぼ無くなっている
しかし、本当はそれを認めているのだが今更殺し合いを止める事それは同時に生きてきた意味を失う事となるので何かと強引に理由を付けて殺し合いをしている。

永夜異変で戒魔が輝貴との関係を寂しい関係と言った事が切欠となり、今では時々一緒に食事をする程度の仲にはなった
それでも習慣とは恐ろしいものであり、途中でどんなに仲良さげに話していても最終的に殺し合って別れる
後始末と治療は鈴催が担当しており、その事で鈴催との仲は良好
実は何気に永遠亭の者全員と仲は悪くない。

現在は鈴催の為に霊夢の面倒を見る事が多い
何気に霊夢の４人目の父親のような存在になっている
他の父親は実父の戒魔、養父の砲魔、居候の鈴催であり、喪紅は留守番となる
段々と神社に泊まる事が増えているので生活用品をいくつか神社に

置いていたりする。

このまま新しい居候になるのも時間の問題だと、永仙は思っているらしい

それは困るのだが、新たな生き甲斐になるかもしれないと思っているのでそれも喪紅の為になる……

そう思って永仙は喪紅の行動を暖かく見守っているらしい。

少年期編　四十六話【春と夏】（前書き）

戒魔　懐かしがる程度の場所
フランドール　自然を楽しむ程度の純粋
ナズナ　まだまだ幼い程度の年齢
幽香　ドS（親切）な程度の性格
リリーホワイト　実は知り合いだった程度の関係
真苗　未来の為に考える程度の過保護

とりあえず前書きはこんな感じでそれなりに固定
今後はキャラ＋程度と少しのお知らせで前書きを書いていきます。

前話の分のQ&Aもするので後書きが長いかもしれません
そこまで気にする事でもないですね。

少年期編　四十六話【春と夏】

視点　戒魔

相変わらずフランドールの機嫌は悪いまま太陽の畑の前まで来た
ここからもう少し進めば太陽の畑に着く
俺はフランドールに降りるように指示を出し
道案内をしている妖精メイドにも降りるように伝える
後ろを飛んでいるナズナ達は俺達が降りれば勝手に降りてくれるだろう。

まだ太陽の畑に着いていないのに降りるので疑問に思っている案内の妖精メイド
それは全員揃ってから話すから少し待ってくれ。

少し遅れて来ていたナズナと妖精メイド達が来たので簡単に説明した
太陽の畑までの道中も自然は多く存在する
歩きながら自然を楽しむのも一興なんだと教えてあげる。

フランドールやナズナはあまり理解できなかったようだが妖精メイドには好評だった
妖精は自然の化身、自然を愛する存在
なのでこういう自然を大事にする心を持っている
そんな自然を眺める事も大好きな存在なのだ。

荷物は俺も持って歩く
いつまでも妖精メイドに持たせるのも悪いからな
重そうにしていたのもあったので荷物を持つ事になんら思う事は無

い。

自然の中、嬉しそうに歩く妖精メイド達
俺はそんな妖精メイドを眺めながらも、自然を楽しみながら歩く
フランドールは物珍しそうに自然を見ながら小さく微笑んでいる
ナズナはまだ自然を楽しむという考えはできないらしく、周りを飛んでいる虫が鬱陶しそうな顔をしていた。

そして着いた、太陽の畑の入り口とも言える向日葵の壁
それが見えた瞬間、フランドールもナズナも唖然とした顔をしていた
してやったりという気分になる
俺も初めて来た時はそんな感じになったからな。

そんなフランドール達を差し置いて妖精メイド達は大喜び
紅魔館に住んでいるとそこまで自然に触れられないので当然とも思える
だから紅魔館の中庭や塀の付近には花とかが多いのだ
これはレミリアが妖精メイド達に配慮した結果でもあるらしい
ここまで育てるのに苦労したと言っていた……美鈴が。

それはさておき、このまま向日葵畑に入っていく
そう思ったがその前に大事な事を忘れていた。

「全員注目
太陽の畑に入る前い大事で重大で重要な事を教えておく」

俺の言葉に不思議そうな顔をする面々
しかしこれだけは絶対に言わなければならない事
嫌でも聞いて貰わねば命の保証はできない。

「ここから太陽の畑になるんだが
絶対に花を傷付けたら駄目だ
つまり触れるな触るな傷付けるな折るな消すな
何でもいいから花を見る以外に花に何かをしてはいけない」

やはり不思議そうな顔をする
妖精メイドは不満そうな顔をしている
妖精なので花に触れたいという気持ちが大きいのだと思われる。

フランドールは頭に疑問符を浮かべているが理解してくれたようだ
太陽の畑には何かが居るとでも思っているのだろう、大正解だ。

ナズナは全く分かっていない
しかしそれも仕方がないかもしれない
ナズナはまだ強い妖怪を見た事が無いので実感が湧かないのだろう。

別にレミリアやパチュリー達が弱いと言っているのではない
彼女達は日常に近すぎるので強いとか弱いとか、そんな感覚が無いのだ
美鈴には何度も負けているが、それは試合での話しであり、毎回手加減されている
そんな状態で妖怪の強さを知った気にならられるのは困るしな。

「この太陽の畑には幻想郷でも最上位に君臨する実力者が住んでいる
その妖怪は花を傷付ける者は絶対に許さない妖怪だ
傷付けたら最後、良くて嬲り半殺しになるか、悪くてその末に殺されるだろう
だから絶対に花を傷付けたりしないようにな」

妖精メイドは不満ながらも頷く

自然に触れなくとも近くに存在するだけ良いのだろう
それで我慢してもらうしか無い。

フランドールは強力な妖怪で理解してくれた
先ほどの言葉にも納得しており、純粋に自然を眺めて楽しむ事に集中してくれるだろう。

しかし問題はナズナだ
ここまで言っても上手く理解できないらしい
今度レミリアとフランドールで戦ってもらおうか？
実力者同士の戦いを見れば嫌でも妖怪の危険性を理解してくれるだろう。

今回はナズナに注意して本当に傷付けないように言い聞かせておこう
そうでなければ怖くて入れられない
太陽の畑に入ってからも何度も言い聞かせておく事にした。

太陽の畑に入って数分
全員おとなしいもので、話し声はするものの
誰も向日葵どころか花にも触れない。

俺の言う事は守ってくれているようだ
これで安心できるのだが油断をしてはいけない
楽しむ為とはいえ、馬鹿な事をし出す者が出た場合即時止めなければならないのだ。

毎年それは俺が担当していたからな
砲魔が酔って光線を打ち出した時には冷や汗が出たもんだ
結界を三重に張り、更に拡散しないようにその周りにも小さな結界を張り巡らせた

なんとか向日葵に傷は出なかったが、変わりに偶然飛んでいた妖精に直撃してしまった
結界により威力が下がったが気絶してしまう程の威力だった
哀れにも、その妖精は数時間寝たきりになってしまった。

……話しが逸れてしまったな
似たような事が何度も有ったので俺が制止役になるのは当然の流れ
今回もそんな役目になるんだろうと思っている。

そしてそろそろ太陽の畑の中心部
高確率で風見が居るはず……こっちではどんな見た目なんだかな。

そして着いた太陽の畑の中心部
ここには寺子屋の一室ほどの広さの空きが存在する
向こうでは何度もこの場所で宴会を開かされて巻き込まれたものだ。

そして空きの場所には案の定
日傘を持った女性が立ってこちらを見ていた。

女性は桃色のシャツを着、赤のチェック模様でケープとズボンを揃えている
腰まで届きそうな緑の長い髪を揺らし、前髪は目元を少しだけ隠しているが
笑顔のように見える瞳も奥では鋭くこちらを観察している
手には桃色の大きな日傘を握っているが、持ち方に力が入っている
という事は警戒されているのだろう。

彼女自身は威圧していないつもりかもしれない
しかし俺達全員は彼女に圧倒されていた
特に妖精メイドは何人か涙目にもなっている。

フランドールは警戒する姿勢を見せているが隙だらけだ
戦闘経験が殆ど無いのだから当然とも言えるだろう
しかも彼女と違って日傘の扱いにも慣れていないのだ
戦えば一瞬で敗北するだろう。

ナズナは威圧感を感じれていない
変わりに怖いという感情が占めており、体を動かす事もできていない
このままでは本能的に襲いかかるかもしれないな。

そうなる前に俺が動き出した
数歩前に出て全員の前に出る
一瞬、ナズナが動こうとするも動かなかった
動く前に彼女が睨みを効かせて勢いを潰したからだ。

俺と彼女が睨み合う事数十秒
先に沈黙の火蓋を切ったのは彼女だった。

「人間の子供が吸血鬼、悪魔、妖精を連れてこの太陽の畑に何の用かしら？」

さすがだな
こちらの種族を簡単に見破ったか
偽造も変装もしていないので簡単だろうが
それでもここまで簡単に気付くものだろうか？

「別にこの向日葵畑を荒らしに来たわけじゃないから安心してくれ
そんな事をして命を落とすような馬鹿な真似をする気は無い」

「あらあら、子供とは思えない話し方ね

それで小さな小さな退治屋の貴方は何が目的なのかしら？」

退治屋か……俺の事まで見破れるとは思わなかったな
元博麗の俺は退治屋と言っても間違っていない
しかし俺はそんな素振りは何一つ見せていない
それに気付く彼女の眼力か、それとも直感か
どちらにせよ、気付いた彼女は相変わらず超人という事だ。

「俺達の目的はこの向日葵畑の美しさを見ながら食事会かな
貴女も混じるか？　花の妖怪さん」

後ろで息を呑むような音が聞こえた
俺が彼女を誘うのが理解できないのだろう。

彼女自身も疑わしそうに俺を見ている
俺の言う事が本当なのか気になっているのだろう
例え毒を盛られても死なないだろうが苦しい事には変わりない
退治屋と気付いたからにはその程度を警戒しないわけにはいかないのだ。

お互いに沈黙し、再び緊張感のある空間に戻ってしまう
俺は目的を言い、彼女は真実かどうかを見極めている
彼女とて何もしていない者に攻撃をするのは己の誇りに傷を付ける行為
俺達が下手な行動を起こそうとしない限り彼女も動かない。

動かないまま数分
彼女の意識が外れ、視線が俺達の後ろの空に向けられた
俺は女性を警戒をしながらも後ろを振り向く。

……またお前かリリーホワイト
そして何故花を持っている
更に何故門番隊の妖精を連れているんだ？
そして何かを探しながら飛んでいたのだが
こちらに気付き、急降下してきた！？
しかも目標は俺か！？
避けたらリリーホワイトが危ないし、だけど受け止めると俺が危ない
そう思っていたら彼女が俺に当たる直前のリリーホワイトを掴んでいた
いつの間に移動したんだ？　警戒は怠っていなかったはずなんだが……
やはり最強と謳われる妖怪の一人、今の俺程度では見切る事さえできないか。
「あ、ゆーか」
「幽香じゃないわよ
そんな事したら危ないじゃない」
とりあえずレミリアの言う通り、名前は風見幽香で間違ってないだろう
そしてリリーホワイトと幽香は知り合いだったのか
まぁどちらも季節に関係するだけでなく、花にも共通点が有るからな
知り合いでもそこまで変でもないな。
しかし小さい子供のようなリリーホワイトと大人の女性である幽香かこれで髪の色が近ければ親子みたいだな
なんだか似合っている絵だ、本当に絵に残しても良さそうな感じだ。

「それにしても珍しいわね
夏に貴女がここら辺をふらふらと飛んでるなんて
目的は……この人間の子供？」

「かーまお菓子いっぱい！
だからおれーするのー！」

「かーまはあの子供よね？
お菓子を沢山貰ったからお礼に花を摘んできて贈ろうとしたの？」

「うん！」

「ふーん……」

来る度にお菓子をあげてたしな
そのお礼に花を摘んできてくれるのは嬉しいのだが……
今回に限っては怨むぞリリーホワイト
幽香の前で花を摘んで、しかもそれを見せるとは……俺も終わりかな？

「リリーホワイトの言うのは貴方よね？
この子とどういう関係なのかしら？」

嘘は絶対に許さないという顔
元々嘘を言う気は無いけど素直に言わないと殺されるな
幽香もリリーホワイトを可愛がっているのか？
それならこの対応も許容範囲内だろう。

「リリーホワイトにはお菓子をあげてるだけだ

初めて会った時から来る度にあげていたら懐かれたんだ
ちなみに、花を摘んでくれたのは今回が初めてだ」

擦れ違いになったんだろう
美鈴がリリーホワイトに俺の場所を教えたかな
そうでなければ門番隊の子が来るはずがないし。

しかしリリーホワイトも間の悪い
一日違えば、それか数時間早く来れば良かったのに
美鈴にも後でリリーホワイトの面倒を見てくれた事で礼を言っておこう。

「そうなのリリーホワイト？」

「うん！
お菓子いっぱい！
美味しかった！」

「……ちょっと来なさい」

幽香はリリーホワイトを連れて俺達から離れていった
しかしリリーホワイトと幽香はどういう関係なんだろうか？
どう見ても幽香が親でリリーホワイトが子供だよな？

しかし……幽香とリリーホワイト
会話が終わってくれるまで動けないから早く終わってくれ。

続く

少女期編　裏二十六話【先の為に考える事】

表との時間差……一年一ヶ月

視点　真苗

夏休みに入り、早苗もようやく苛めからの心労から抜け出せた
少なくとも一ヶ月は早苗を学校から遠ざけられる

新学期までにどうにか対策を練らないと……

どうしようもできなかったら僕が表に出てでもどうにかする
勝手な事と言われようと早苗の心を守る
その為なら犯罪を犯してでも……できるだけスレスレまででしてでもね。

早苗は学校に行かないで済むので心底安心した日々を送っている
学校では滅多に見せない表情になっているだろう
その顔を見れないのが惜しいな。

両親は早苗の顔に笑顔が増えたような気がすると言っていた
それは苛められていない、暫くは安心という悲しい笑顔さ
早く早苗を本当の笑顔にしてあげたい。

そして何度目になるかの家族会議
どうにも内容は最初とほぼ変わりない
違うのは僕の言う事が段々過激になってきているぐらい。

どうも時間と共に僕の苛立ちも膨れていっているらしい
このままだと本当に危ない
勝手に早苗の体を奪って傷害事件を起こすかもしれない
そうなる前に対策を練らないと……

最近、お父さんと守矢様が僕が表に出る事に抵抗感が薄れてきたらしい
どうも僕が早苗を心配し過ぎているらしく
これ以上押さえては危険かもしれないと思っているとか。

事実だけど好都合

本当にこのまま押さえる自信も無くなってきた所だ
押し切って強引にでも僕が出る権利を得てやる！

それはそうと
最近考えている事はどうやって人格分裂の事件を起こすか
要は切欠を作る方法がまだ完成していないんだ。

勿論捏造に演出だ
だけど何かしないと後々面倒事が多くなってくる。

人格分裂事件で最高候補はやっぱりレイプ事件だろうか
しかし、まだ小学生低学年の早苗が襲われるのは少々考え難い
それにもし将来、早苗がこの事を知ったら強いショックを受けかねない
よってこの案は却下、案としては悪くなかったけど問題が多かった。

次は人身事故だろうか
車に轢かれる、バイクに轢かれるかな？
演出にするつもりだけど早苗の肌に傷が残ったらと考えると却下
誰が何と言おうと却下、絶対に却下。

なら記憶喪失から僕が産まれ、記憶と取り戻したけど新人格が残った
こういう案なら悪く無いと思う
だけどどうやって記憶喪失が起こったと証明するか……やはり事故か？

だけど当然ながら早苗に傷を残すのは絶対に許さない
そう考えると精神的ショックだろうか？
となると……両親の喧嘩に巻き込まれて気絶
そして悲しさから現実逃避からの記憶喪失

新たな人格として僕が表で少しの間過ごす。

この案で行こうか？
行けるかどうか、正直微妙だろう
だけど僕としてはこれ以上思い浮かばない
脳に障害も無くショックでと考えるとこの程度が精一杯かな？

次の家族会議にでもこれを提案してみよう
通ればこの案で行く
早苗には少しの間我慢してもらえばいい。

できれば我慢なんてさせたくない
だけど上手くいかせるには早苗の協力が必要不可欠
悪いとは思うけど……悪いとは思うけど……本当にごめんね早苗。

少年期編　四十六話【春と夏】（後書き）

フランドールって結局何で嫉妬してるの？
四十四話後書き参照
何度でも言いますがフランドールは戒魔に友愛は有っても愛情はありません。

何故リリーホワイトはこの日に戒魔に花を？
今話の為に遅く来て貰う為ですので理由はありません
泣かせてごめんよリリーホワイト……

リリーホワイトの呂律が回ってないのは？
美鈴の言う通り力が弱まっているのもありますが、リリーホワイトの知能が幼稚園児並だからというのが最も大きな理由です
普通の妖精は小学生中学年から高学年だと考えているのでかなり幼い事になります
なお、大妖精は中学生並でチルノは小学生高学年並でしょうか。

お嬢様に怒られる……かもしれないって？
戒魔に関する事ではレミリアはかなり適当というか寛大というか……そんな感じだからです
リリーホワイトは戒魔の関係者なので微妙だと思っているのでしょう。

美鈴が落ちた？
落ちました、リリーホワイトの可愛さに落ちました
……あれ？　何でこんなにリリーホワイトを贔屓しているんだろう？
そんな予定は無かったはずなんですが……

何故そこまで真苗は早苗を過保護に？
二年も体を共有している上、苛められている女の子
三十歳を過ぎている真苗からすれば守るべき対象になるのは当然でしょう
性格も元々甘かった事もありますし、更に性別は違えど元は自分
過保護にならない方がおかしいと思います。

藤原家の歴史を無視し過ぎじゃね？
……そんな歴史なんて知りません（本当に知らない）
まぁ輝貴の性格からして輝夜とかけ離れているので竹取物語も大きく変わっています
ですのでそこまで問題でも無いかと思います。

フランドールの戒魔に対する態度が戻ってない？
今は一端忘れてこの自然を楽しもうと思ったからです
悩むのは後でいくらでもできますしね
でも自然はそんなに触れる機会が多くないので、優先順位の違いです。

ナズナが少し……アレ過ぎない？
まだ一歳という事を忘れてはいけません
経験が圧倒的に足りないのでこんなにアレでも仕方無いのです
多少の教育では経験は補う事なんてできませんしね。

砲魔の光線……妖精はよくその程度で済んだね
八卦路が無い上、酔っていて集中力も足りない
更に結界で跳ね返されたので威力が激減
直撃しても威力が低いのは当然でしょう。

この幽香って旧作幽香？

はい、この幽香はまだ髪が長い幽香です
スカートはまだ穿いておらず、現在はズボンですね
あの服装ってモンペでしたっけ？　服に興味が無いのでよくわかりません。

幽香が……リリーホワイトに優しい！？
リリーホワイトは春には花を咲かせる程の力を持っている妖精です
花の妖怪である幽香がリリーホワイトを嫌うどころが好く理由には十分かと思います。

幽香とリリーホワイトの内緒話……
多分次話にて。

真苗の思考が過激になっている……
それほど早苗が心配なんです
しかしレイプまで持ち出すとは……自分でも少しやり過ぎたと思います
不評なら書き替えようと思いますが、それまでは変えるつもりはありません
理由は真苗がそれほどの事をしてでも早苗を守りたいという想いを表したつもりだからです。

少年期編　四十七話【平和の象徴】（前書き）

最近遊戯王ＧＸの小説も始めました
そして気付いた事があります。

どうしても逆偽鏡の世界は書くのに時間が掛かり、ギリギリになったり
話しが思い浮かばなかったりと……とにかく進みが遅いのです。

そして気分転換に別の小説（遊戯王ＧＸ）を書いて気付きました
そういえば自分、オリジナル展開書いてるじゃん……と
今更ながら書くのに長々と悩む理由が分かりました。

……はい、アホですね、本当にアホでした
そういう訳なので更新速度を速める自信はありません
ですので今後も三の倍数の日に更新します。

少年期編　四十七話【平和の象徴】

視点　戒魔

幽香とリリーホワイトが少し離れた場所で話している間
俺達は誰も動かず、話さずに待っていた
幽香の出していた威圧感が今だ抜けきっていないのである。

俺も幽亜の殺気や威圧には慣れていたはずなんだが
幽香も幽亜に近い威圧感を放っていた
久しぶりなのも有るだろうが、最近平和だったから気が抜けていたんだろう
もう少し気を引き締めた方がよさそうだ。

しかし問題は俺の後ろで立っているフランドール
せっかく外を楽しみにしていたのに前方に居る妖怪に邪魔されている
これでは楽しむものも楽しめない。

フランドールの苛々が積もっていくのが気配だけで分かる
同じく気配でナズナと妖精メイドがフランドールに怯えているのも分かる
リリーホワイトと一緒に来た門番隊の子達は状況が分かっていないらしく困惑
どうにも誰も落ち着いてくれないようだ。

そんな調子とは関係無く、幽香とリリーホワイトが戻ってきた
リリーホワイトは不思議そうな顔で幽香を見つめ

幽香は難しい顔で何かを考えているようだ。

リリーホワイトよ、お前は幽香に何を話したんだ？
頭の良い幽亜だったんだ、幽香も頭が良いだろう
その幽香を悩ませるとは……

しかし何だか変な話だな
妖精一人が現れただけでこんなにも変な空気になるなんて
リリーホワイトの影響力というのは春でなくとも健在という事か。

そんな馬鹿な事を考えるも、当然ながらリリーホワイトに自覚は無いだろう
これで自覚を持っていたらどれ程頭が良く、性格が腹黒いのだろうか？
俺としてはリリーホワイトがそんな存在では無い事を祈る……切実に祈る。

「……自己紹介しましょう
私の名前は風見幽香、普段は太陽の畑で過ごしているわ」

幽香が自己紹介！？
リリーホワイトよ、お前は本当に幽香に何を話したんだ！？

誰もが混乱しながらも、全員自己紹介していく
俺の偽名である夢幻については少し反応はしたものの無視
きっと偶然で済ましたのだろう……半分ほど正解ではあるが。

「それで、貴方達は太陽の畑に来た目的は何？
さっき言っていた食事会という話しは本当とは思えないわ
早く本当の事を話した方が身のためよ？」

幽香がそう言って再び俺達を威圧する
先ほどよりも強い威圧に、気の弱い妖精メイドが数人気絶してしまった
フランドールは大丈夫そうだがナズナは少々危険だ
俺に危害を加えられるとでも思ったのか戦闘体勢に入ろうとしている。

ナズナが動けば全てが台無しになってしまう
そうなる前に一言言って落ち着けなければ
そう思っていた俺だが、すぐにそんな問題は解決した。

「ゆーか、怒っちゃメ！
みーなでご飯たーたい！
だから怒ったらメ！」

たーたいというのは食べたいと言いたいのだろう
確かにリリーホワイトは紅魔館で何度か一緒に食事をしている
リリーホワイトが来る時間も帰る時間も結構違う事が多い
だから食事に誘う事自体がそう多くないのである。

「……私の分もご飯有るかしら？」

「……リリーホワイトや門番隊の子が来たから量は少ないけど一応はな」

「「……」」

「興が削がれたわ、早く食事にしない？」

「そうだな、準備するから少し待っててくれ」

リリーホワイトが居るだけで俺達のやる気を削いでいく
確か誰かが言っていた気がする……
リリーホワイトは平和の象徴だって
誰が言っていたのか、そもそもそんな言葉が有ったか？
そう思わないでもないが、とても納得できそうだった。

俺はまたも唖然としているフランドール達を無視して食事の準備を始める
服が汚れたりしないように下には汚れても良い布を敷いておく
そんな俺を見て気絶しなかった妖精メイドは俺の手伝いを始める。

ちなみにリリーホワイトは幽香にじゃれていた
幽香は困った顔をしながらもリリーホワイトを受け入れている
どうしても追い返せない気持ちは俺もよくわかるぞ幽香。

準備が終わり、見ているだけだったフランドール達も正気に戻す
何か言いたげに視線を向けられたが大丈夫だという意味を込めて笑顔で返す
その顔に何も言えなくなったフランドールは少し拗ねているようだった。

準備が終わり、全員を布の上に座らせる
リリーホワイトが落ち着かなそうにしていたので
俺は足を広げ、その間にリリーホワイトを座らせる
そして何故か喜ぶリリーホワイト、どうもこれがお気に入りらしい。

幽香が何故か驚いた顔で俺を見ているが……何故だ？
俺がリリーホワイトと一緒に座る事のどこか変か？

「リリーホワイトがそこまで懐く人間がいるなんて……
本当にお菓子をあげただけなの？」

「そんなに気になる理由はよくわからんが……
俺がリリーホワイトにしたのはお菓子をあげたりしたぐらいだぞ
そうだよな？　リリーホワイト」

「かーま、なでなでー」

「はいはい、でもその前に帽子は脱いでおこうな」

リリーホワイトに頭を撫でる事を催促されたので帽子を脱がして頭を撫でる
リリーホワイトは満足そうにして俺に体を預けてくる。

信用してくれるのは嬉しいんだが……時々疲れる
でもこうも喜ばれると断るとか、しないとかの選択肢を取る気にならない。

なお、時々同じ事をレミリアやフランドールやナズナや妖精メイドからも頼まれる
全て断っているが強引にでも俺にさせようという動きが無いのが救いだろう
何故されたいのか、気になるが訊いたら駄目な気がする。

羨ましそうな顔でリリーホワイトを見るフランドールとナズナ
納得出来なさそうな顔で俺を見る幽香
妖精メイドや門番隊は俺達を完全無視して食事中……少しは気にしないか？

なお、リリーホワイトは箸を扱えない
紅魔館には一応銀食器であるスプーンやフォークも有るが持って来ていない
いくら妖精達が不器用でも幻想郷で主流である箸を使えない者は少ない。

フランドールとナズナには俺が教えた
ナズナは初めてだったので教えるのは簡単だったがフランドールは違う
フランドールは長らく地下に引き籠もっていたのでそもそも箸を見た事が無かった
更に何かを扱う事自体も少なかったので呆れるほど不器用だったのだ
そんなフランドールに西洋妖怪には難しい箸の扱いを教えるのには骨が折れた。

リリーホワイトとも少しぐらい一緒に食事をしているが、その時は全て銀食器で食べていた
気を利かせてくれたレミリアが知能が幼いリリーホワイトにはこちらにすればいいと出してくれた
まだ完全に箸を扱えていないフランドールが拗ねていたのをよく覚えている。

なお、美鈴は当然としてレミリアやパチュリーも箸は扱える
パチュリーはかなり苦戦したと言っていた、まぁ彼女はかなり不器用だしな
しかも全然扱えなくて美鈴に何ヶ月も習ってようやく扱えるようになったそうだ
でもパチュリー……お前の箸の持ち方は間違っているんだぞ？

紅魔館の面々の事はともかく、今はリリーホワイト
箸を扱えないリリーホワイトは食べられないのだが……
いや、誰かが食べさせてばいい
しかしこの状況だと俺が食べさせないといけないんじゃないか？

誰かに変わりを頼もうと思ったのだが
幽香は既にリリーホワイトを諦めて食事に集中している
少しだけ顔が綻んでいるという事は少なくとも不味くはなかったのだろう
それだけ唯一安心できる事だな。

フランドールは相変わらず箸に苦戦しながらも同じく食事に集中している
落としそうになった瞬間にすぐさま小皿を寄せて落とさないようにしているのは正解だ
それで無駄に敷布が汚れずに済む。

ナズナは幽香を警戒する事に集中していてこちらを殆ど見ていない
しかも幽香以外には食事ぐらいにしか意識を向けていないという…
…はぁ。

妖精メイドは門番隊と楽しそうに話しながら食べてるから邪魔したくないし
せっかく楽しんで食べてくれている幽香の邪魔もしたくない
フランドールだって頑張っているんだから以下略
ナズナはもう何を言っても無駄だろうから放っておく。

俺は諦めて箸を持ち、おかずを取ってリリーホワイトの前に持って行く
リリーホワイトは何をされているのかよくわからずに首を傾げている

ここまでされても分からないのか？

「ほら、お腹空いてるだろ？
食べさせてやるから口を開けろ」

「あーーー？」

訊くなよリリーホワイト
小さく可愛らしい口を大きく開けるリリーホワイトに掴んでいたおかずをゆっくりと入れる
喉に刺さったら危ないからな。

リリーホワイトは口を閉じて味わうように口内を動かしている
やがて嬉しそうな顔をして俺の方を向き、口を開ける
気に入ってくれたのは嬉しいんだが……また俺が食べさせるのか？

「あーーー」

ここは箸の使い方を教えるべきだろうか？
それともこのまま続けた方がいいのか？
もしくは誰かと交代するか……どうすればいいんだ？

「あーーー？」

しかしこう見てると雛鳥のようだな
一生懸命に口を開けて親から餌を貰おうと必死な姿
そう考えると元々小さなリリーホワイトが更に小さく見えるな。

「あーーー、あーーー、あーーーーーー」

「わかったわかった
……ほら、これでいいんだろ？」

「あー……んぅ」

なんというか……リリーホワイトは癒し要因だな
向こうでもこういう存在は居なかったから凄く助かる
こういう存在って貴重だ。

とりあえず食事が終わってから次の事を考えよう
どうせ緊張感はリリーホワイトの存在で全て無くなってしまうんだ
今はのんびりとこの自然と食事を楽しむ事にしよう。

続く

少女期編　裏二十七話【精神障害者】
表との時間差……一年二ヶ月

視点　真苗

色々と話しを重ねた結果
僕が表に出る事は許可された。

問題は出てくる原因の捏造
それは両親の大喧嘩でショックを受けたから
これが原因として選ばれた。

これならば事をあまり大きくせずに僕を表に出せるから
早苗には殆ど知らせずに事を起こす事になっているので実際にする事は無い
両親が勝手に早苗が二重人格になった事を学校や病院に知らせに行くだけ。

早苗には最初は学校内では僕は表に出ないと言ったけど
苛められ続けている早苗を見ていられなくなったという理由で表に出ると言っておいた

早苗は僕に迷惑じゃないかとか、僕が変わりに受けたら自分が嫌われるとか言い出した
そんなはずが無いのに……やっぱり子供の思考がそうなっても仕方がないのかな？

「早苗、僕がそんな事で早苗を嫌うはずが無いだろう？
早苗が苛められていても僕は見ているだけしかできなかったんだ
だからそれが悲しくなった……だから僕は決めたんだ早苗
僕は早苗を苛めてくる奴ら絶対に守ってあげる」

僕の言葉に早苗は泣いて喜んでくれた
これからは一緒に頑張ろうって笑顔で言ってくれたのが嬉しかった。

僕には早苗の笑顔を見る事はできない
それでも早苗の笑顔の為なら何でもできそうな気持ちになれる
惜しむことはやはり早苗の笑顔を見る事ができない事
それだけが最大の問題なんだよね……

早苗には経緯も簡単に話した
要は世の中二重人格者という者は病気という風に考えられている
だから病院に行ったりする必要もある
本当に簡単だけど、まだ幼い早苗に難しい事は理解できなかったので当然だろう
最低限理解してくれたので十分とも言える。

病院やカウンセラーの前では僕が表に出て話す事になっている
何も知らない早苗が話しても全くの無駄だからね。

先日、病院にもカウンセリングにも行ってきた
どっちも話す事は変わらない

面倒だったけど怪しまれない程度にはしておいた。

感覚の共有は家族や八坂様に守矢様にしか教えていない
病院やカウンセリングには教えなかった。

色々と調べたんだけど
そういう前例は見当たらなかった
ならば最初から話さない方が良いと判断された。

後別の問題として名前と呼び方だった
僕も早苗は漢字は違えど読み方は同じ
という訳でニュアンスの違いを入れる事にした。

今までは同じように呼ばれてたけど、これからは変えようという事だ
早苗の場合は　早←苗→
真苗の場合は　真→苗←
こういうニュアンスに決まった。

まだ早苗はこの違いを理解できないだろうから僕が判断する事になっている
かなり微妙だから仕方無いと慰めておいた
少し落ち込まれたけどこればかりは難しい
今後は発音の違いという物を教えていく必要が有りそうだ。

早苗と話す事も多かったので早苗と僕と話す時にちょっとした決まりができた
それは可能な限り、鏡の前で話す事
早苗が僕と話す時、姿が見えなくて寂しいと言った事が切欠
僕としても早苗の笑顔を見れるようになったから嬉しい誤算だった

今まで気付かなかった自分を殴りたい……早苗の体だからできないけどね。

そんな感じでもうすぐ新学期
とりあえず早苗を苛めてきた糞ガキ共、お前等は全員……潰す！

ただし、早苗に意識が無い状態でだ
早苗にスプラッタシーンを見せる訳にはいかないからね
二十歳未満はお断りだよ？

少年期編　四十七話【平和の象徴】（後書き）

リリーホワイトは幽香に何を言ったの？
戒魔に何をされたのか、そしてどんな話しをしたのかです
正確には幽香に話す事を強要されたんですが……
それすら気付かずに幽香は楽しそうに話されました。

なんというヒーリングリリーホワイト……
リリーホワイトにはヒーリング効果が有るんです
知っている人は知っている、東方Ｍ－１ネタです
ちなみにこの事を思いだしたのはこの後書きを書いている最中です
なので作中とは関係ありません。

早苗は話さないの？
子供の口調が思い浮かばないというのが最大の理由です
色々と悩んでいるんですがどうも似合う気がしないので保留状態です。

真苗が危なすぎない？
殺人はしないので安心してください
精々精神的障害を植え付けるかもしれないだけでしょう
犯罪寸前まではすると思われますが……

少年期編　四十八話【前の彼との思い出】（前書き）

幽香　色々と気絶させる程度の殺気
リリーホワイト　殺気を気付かない程度の鈍感
フランドール　慌てて止める程度の驚愕
戒魔　花の妖怪（男女問わず）を落とす程度の天然
幽亜　人が来ると内心喜ぶ程度の孤独
真苗　子供相手に無双する程度の実力

皆さんお待ちかね、我慢に我慢を重ねてきた真苗無双が始まりますでもまだまだ大人しく、とんでもなく我慢しています
例えるなら熱中で喉が乾いてるのに水を1杯飲んだ程度ですまだまだ喉が渇いているので今後も暴れ回るかと思われますもう少し自重しようか、真苗。

少年期編　四十八話【前の彼との思い出】

視点　戒魔

食事が終わり、俺達は敷布の上に座っている
門番隊と妖精メイドは人数が多くなったので敷布から下りて立ってもらった。

目の前には幽香が一人だけ座っている
こちらは俺が先頭で右後ろにフランドールで左後ろでナズナ
そして俺の横で笑顔で座っているリリーホワイト。

真剣な雰囲気が流れているが、リリーホワイトのせいで緊張感が皆無だ
しかも真剣な雰囲気だって幽香と俺が無理矢理出しているだけなのでほぼ無いに等しい
妖精一匹にかき回される博麗の御子と最強級の妖怪。

これは情けないというべきか、それともリリーホワイトが凄いというべきか
どちらにせよ真剣に話す事は無理らしい。

「それで、食事に来ただけじゃないでしょ？
何か言いたい事でも有るんでしょ？」

幽香が強い気持ちを込めて話す
けど威圧感も無ければ真剣味も感じない
恐ろしいまでの癒し効果、リリーホワイト。

「俺自身からは特に無い
だが依頼を受け取っている」

依頼と言った瞬間、幽香から殺気を叩きつけられた
常人なら心臓発作で即死してもおかしくない。

事実、既にナズナと妖精メイドは意識を失ってしまった
門番隊も恐怖で震えて顔を青ざめさせている
フランドールも意識を保っているが、動く事もできそうにない。

「ふーん……吸血鬼が怯え、悪魔を気絶させる
そんな私の殺気を受けて身動き取らずに冷静でいられるなんてね
本当に人間の子供？」

幽香の声に僅かにだが驚きが混じっているのを感じる
しかし大半は呆れの感情なので殆ど見えない
俺自身、見つける事ができたのは珍しい事だ。

「色々と有ったんだ
それに、話しを最後まで聞かずに殺気を叩きつけられるとは思わなかったよ
リリーホワイトには全く殺気を当てないなんて……殺気の使い方に慣れてるんだな」

そう、リリーホワイトはみんなが倒れた理由が全くわかっていない
不思議な顔をしてナズナを起こそうと揺すっている
無論、その程度で起きれるほど幽香の殺気は甘くない
むしろ気絶程度で済んで助かった。

「私は永く生きている妖怪よ
こんなの子供騙し程度、それぐらいわかるでしょ？」

「そうだな、この程度で誇られては大妖怪の名が廃る
今残ってるのは俺とフランドール、後は門番隊だな
もう一押しで俺以外全員が落ちるぞ？」

後ろで息を呑む気配を感じた
この言い方では全員を潰せと言っているようなものだからな。

しかしそれは間違いだ
こういう気高い奴は次に自分がしようとしていた事を言われるとできない
してしまえば相手の言う通りになって思う壺だと思ってしまうからだ。

馬鹿はそれは好都合だと思って言う通りに動く事もある
しかしここに居るのはあの風見幽亜と同一人物、風見幽香
そんな人物が俺みたいな小物を相手の言う通りに動くはずが無い。

案の定、幽香は眉を顰めて不機嫌そうな顔になる
どうやらこれ以上動く気は無いようだ。

やはりこういう誇り高い奴らは動かし易い
下手に刺激しなければ襲われる事も滅多に無い
だが普通に話しては危なすぎる。

だから死なない為に利用できる物はいくらでも利用する
今回利用するのは相手の誇りと頭の良さ
上手く行かせないと死ぬのは……俺だ。

「いいわ、最後まで聞いてあげる
何を依頼されたのかしら？」

興味を引けたのは助かった
素直に全部話し、後はレミリアに押し付けよう
というか、何故俺がレミリアの為に命を賭けなければならないんだ？

「依頼主は吸血鬼、レミリア・スカーレットからだ
依頼内容は三つ
一つは花の妖怪である風見幽香から赤い花の咲く花の種を数十個から数百個貰う事
紅魔館の赤を彩る為にも是非赤い花が欲しいらしい」

「赤い花ね、いいわよ
育てるのに失敗して枯らしたりしないのならね
季節とかで枯らしてしまうのは仕方無いけど」

幽香は簡単にくれた
勿論育てる事に失敗しないと約束を交わしたぞ
なお、万が一育てるのに失敗した場合、怒りを向けるのはレミリアへ、とも言っておいた。

俺に怒りを向けられても殺されるだけだ
それに欲しがったのはレミリアなんだから当然だろう。

「二つ目の依頼内容は風見幽香を紅魔館に招待する事だ」

「えぇ！？
戒魔、この妖怪を招待するなんて……本当にお姉様がそう言ったの

！？」

幽香よりも先にフランドールが反応した
幽香も目を丸くして驚いている
あの吸血鬼が自分を招待する理由がわからないのだ。

「話したい事が有るらしい
それに最初から来てくれるだなんてあまり期待してないみたいだぞ？
断られても構わないって言ってたし
最低限伝えろとは言われたけどな」

フランドールは姉の奇行に頭を痛めている
俺だってかなり不安だ
あの幽香に来いと伝えろだなんて……本当に大丈夫なのか？

「それで風見幽香、返答は如何に？」

「お断りよ
自分から来なさいと伝えておいて」

なるほど、話す事は構わない
だが自分を呼び出すのが気に入らない
話したいのなら自分から来いと言いたいのか。

「わかった、そう伝えておく
俺もレミリアが何を話したいのか知らない
伝言ぐらいなら構わないと思うんだが……何を考えているのやら」

「あら、いいの？
自分の主に対してそんな口の利き方」

「レミリアは俺の主じゃない
俺の居候先が紅魔館というだけだ
それにレミリアとは友人程度、それ以外の関係になる事も無いだろう」

まぁ主と勘違いしてもおかしく無いな
俺だって幽香の立場なら勘違いするかもしれない
端からみれば俺は立派な忠臣に見えるのだろう。

それにしても頭が痛い……
確かに太陽の畑に行きたいと言ったのは俺だ
あの時はあまり考えずに依頼を受けてしまったが
こんなに面倒事になるなら幽香に会わないようにすればよかった。

「ふぅん……それで、依頼はまだ残ってるの？」

「一応な
でも殆ど関係無いと思うぞ？」

疑わしそうに俺を見る幽香
それでも黙っているという事は聞いてくれるのだろう
やはり長寿の妖怪は紳士的で助かる
若い妖怪は短気で困るんだよな……叩きのめしても懲りないし。

「俺が今後も太陽の畑に来る事を許可してほしい
無論、花々に一切危害は加えないと誓う」

幽香が目を見開く
いくら何でも俺がどれだけとんでもない事を言ったのかは理解でき

るらしいな
自分が周りからどう思われているか知っているはずだ
それなのに俺の発言、感情は驚きで一杯だろう。

「な……な……か、戒魔！
まま、またこの妖怪に会うかもしれない太陽の畑に来る！？
何を考えてるの！　危ないからもう行かない方が良いに決まってる
じゃない！」

フランドール……その危ない奴を目の前に言う言葉じゃないぞ？
確かにフランドールは幽香に怯えている
経験の浅いフランドールに幽香の殺気はかなり堪えただろう。

それでも、俺はこの太陽の畑に来る事を止めるつもりは無い。

「危険な事ぐらい理解している
俺だって危険な事はご免だ」

「ならどうして私が居るこの太陽の畑に来たがるのかしら？」

今度は幽香から話しを振られた
幽香の疑問は最もだろうし、素直に答えないと何をされるか……

「この太陽の畑が好きだからだ」

「なん……ですって？」

「だから、俺はこの太陽の畑が好きなんだよ
俺からすれば幽香に会う恐怖とかに比べたら
この太陽の畑に来る方が優先順位が高い

俺はこの自然が好きなんだ」

さぁ、本音を言ったぞ
嘘じゃない事は幽香ほどの妖怪なら見ればわかるはず。

……何故顔を赤くするか幽香
もしかして自分の育てたこの太陽の畑を褒められて喜んでるとかか？
そう考えると恐ろしいはずの彼女も可愛く思えるな
思い込みって凄い。

「そ……そう、ならいいわ
花々に絶対に危害を加えないというのなら許可してあげる」

幽香の言葉は確かに嬉しい
だけどそれよりもこの恥ずかしがっているというか……
照れている顔が可愛すぎると思う。

「ゆーかお顔真っ赤っかー」

「黙りなさいリリーホワイト」

「ぁぅ」

からかうリリーホワイトの額を指で軽く弾く
殆ど痛くなかったらしく、リリーホワイトは笑顔を絶やさなかった。

「条件としてまた何か持って来なさい」

「わかった、その時はゆっくりできるように紅茶でも持ってくるさ」

「えぇ、お願いね」

幽香はそのまま立ち上がり、俺達の前から姿を消した
暫く沈黙が続いていたが、フランドールが第一声を放つ。

「戒魔……本気？」

「本気だ
それに理由はあれだけじゃないからな」

「他にも理由が有るの？」

「悪いけど秘密だ
話したら怒られるからな」

その後もしつこく訊いてくるフランドールを適当に躱し
ナズナや妖精メイドを起こして回る。

ナズナは興奮しており、今度会うまでにもっと強くなってやると意気込んでいた
例え強くなれてもお前が幽香に届くのは何百年も先だと思うぞ？
それにその何百年先というのも今の幽香に届くまで
それぐらい経っていれば幽香だって更に強くなってるだろう
両者の時間の差が埋まる事は無い。

俺達もする事が無くなってしまったので帰る仕度をする
片付けにはそこまで掛からず、不要になった物も持って帰る
そうしなければ幽香が怒って紅魔館までは……
さすがに来ないと思うが二度と太陽の畑に行けなくなるな。

細心の注意を払って確認をする
落ちている物も見当たらず、花なども大丈夫そうだ。

そして行きと同じく俺はフランドールに
ナズナは妖精メイドに運ばれて帰る。

フランドールに教えなかった他の理由……
それは幽亜の事だ。

幽亜も幽香と同じく太陽の畑を根城としている
夢幻館に帰るのは夏の間は滅多に無いらしい
逆に冬の間はずっと籠もっているとか……

それはともかく、幽亜はあの性格ながら結構な……言っていいのか？
俺達が来ると迷惑そうにしながらも顔を綻ばせているんだ
特に、花を褒めると我が事のように笑顔になる。

要は寂しがりであり、自分の子供のような花を褒められると嬉しい
子煩悩なのだ
幽亜は向こうでかなり恐れられている妖怪
人里の者は誰一人太陽の畑に近づかない。

そんな事を何十年、何百年と過ごしてきたんだ
切欠は大結界異変の時だな
俺は今まで何の用も無かったので行かなかった太陽の畑に行った時
の事だ。

例え霊が取り憑いた事で咲いた花とはいえ、とても美しい花畑だった
幽亜に再会した時、その事を伝えたら顔を背けていたが嬉しそうに
していた。

それからだ
俺は夏になると砲魔を誘って太陽の畑に向かった
砲魔は嫌がっていたが強引に連れ出してやった。

そして太陽の畑に着いた時の砲魔の唖然とした顔
俺自身も本格的な夏の太陽の畑に来たのは初めてだったが……
あそこまで美しいとは思わなかった。

そこで幽亜に再び再会
来た理由を伝えると勝手にすればいいと言われた
砲魔に花を絶対に害するなと先に言っておく。

俺は敷布を敷き、お茶を淹れる
そして太陽の畑の真ん中でお茶を飲む
そんな事だったけどとても落ち着いた時間を過ごせた。

幽亜も砲魔も俺が何をしたかったのか理解できなかったらしい
そんな砲魔達を座らせ、お茶を飲ませる
そしたら砲魔達も俺の気持ちに気付いてくれた。

それから太陽の畑は賑やかになった
時には宴会の場所に選ばれ、時には和む空間にもなる
時には美しい花々を愛でる場所になり、時には話し合いの場所にもなった。

賑やかになった太陽の畑
そこで見た幽亜の笑顔は昔より輝いていたと思う。

続く

少女期編　裏二十八話【最初の反撃は大手加減から】
表との時間差……一年三ヶ月

視点　真苗

さあ、今日から学校だ
早苗と色々話し、曜日で表に出る方を変えると決まった
新学期最初の日は僕が表になった。

長々とした校長の挨拶なんて欠片も聞かずに考えに耽る
それは当然、これからの学校生活の事。

早苗は既に気絶させておいた
方法は簡単、早苗が表に出た瞬間に僕の意志を叩き出すようにしただけ
意志の力で劣る早苗は裏に叩き落とされ、気絶してしまう。

分かりやすく説明すると……少し高い場所から突き落とされた感じかな？
そのまま意識の海に落ちる感じ。

そして席に着く時、既に苛めは始まっていた
早苗の席の椅子が無い……
移動された場所は……教壇の横か。

椅子に名前が書いてあるはずも無い
隣の席から椅子を掻っ払い、座る
遠巻きに見ていたガキが驚いているが無視する。

「おい東風谷、それ僕の椅子
勝手に取らないで返せよ！」

そう言って僕を押そうとするこの椅子の持ち主だった男子
こいつも早苗を苛めていた奴……なら容赦する必要は無いね。

押しだそうと突き出された腕を掴み、後ろに投げつける
具体的にはガキの腕を掴んでいる手を霊力で身体強化
そして力尽くで腕ごとガキを上に持ち上げ、そのまま放り投げた。

ガキは机をいくつも巻き込んで転がり、痛みで泣き出した
周りの奴らは何が起こったのか全く理解できておらず、ただただ泣き声が聞こえるだけ。

数分経ち、ようやく僕が何をしたのか理解できたガキ共
僕を見る目に怒りが籠もる
大方、普段抵抗もしない癖に何をしやがる……そんな感じかな？

女子は僕の事を怯えて見ている者か純粋に凄いと思っている者だね
前者が霊感の強い子供、後者が霊感の弱い子供
多分身体強化を直感で感じ取ったんだと思う。

男子達は殴りかかってくる
しかし……女の子相手にグーで殴ろうとするかな、グーで。

前の体に比べたら身体能力の低いこの体でもこの程度は簡単に躱せる
一応毎日鍛えているんだし、これぐらい当たるはずが無い
この早苗の体はもう二度と、絶対に傷付けさせない！

最初に殴りかかってきたガキの顔面をカウンターでビンタする
殴ったら鼻の骨を砕く自信が有るが、さすがにそれは迷惑が掛かるので止めておいた
しかしビンタの威力は高く、大きな音も鳴ってガキが弾き飛ばされる
その距離、約五十？ほどだろうか？
やはり女の子の体だとこの程度か……でも動かし易いからいいか。

二人目……このガキも同じように殴りかかってくる
今度は躱し、腹に膝を叩き込んでやった
胸骨を砕く自信も有ったが、それも迷惑が掛かるので止めておく
しかし吐く寸前程度の威力は込めておいたので暫く苦しんでろ。

三人目、このガキは蹴りだった
後ろに下がって避け、外して後ろを向く事になったガキの背中を強く押す
前蹴りにしようかと思ったが、跡が付いて証拠が残ってしまうので諦めた
押されたガキはいくつも机を巻き込んで倒れた。

四人目は体当たり
女の子の体に突っ込む気か？　絶対に許さん！
横に避け、足元に僕が足を出し、倒れさせた
弁慶の泣き所を強打しようと思ったが、骨を砕きそうなので足払い程度に抑えておいた。

最後……こいつは体格が良いからか、大きく手を広げて突進してきただが甘い、僕の拳が届く距離になった瞬間、顎に一撃を入れてやった
砕かないように加減し、脳を揺らしてやる
案の定、足が縺れて倒れ込む
僕は倒れ込まれる前に避難したので無傷。

全員を叩きのめしたんだけど……殆ど気が晴れない
やっぱりこの程度じゃ甘いんだなぁ……そう思う。

そして騒ぎになる教室
泣き出すガキ共、凄いと褒めてくる一部の女子
怯えた目で見てくる霊感の強い男子や女子

さて、どうしようか？

少年期編　四十八話【前の彼との思い出】（後書き）

レミリアから幽香に話しって？
まだまだ先の話なので教える事はできません。

幽香の赤面……だと？
指が暴走しました
でも自分の中じゃ幽香はこういう人物だと信じてる！

幽亜との過去話しが有ったから太陽の畑に？
そうなります
この時代ではまだ幽香は幽亜のような笑顔ができるとは思えません
戒魔は太陽の畑で美しい花々を見る事が目的でしたが
もう一つの目的として、幽香を幽亜のような笑顔にしたいと思っています。

今後も太陽の畑の話しは出てくるの？
おまけやこんな事が有った程度には出てくると思います
次の年の夏になればちゃんとした描写もする予定です
この年でもまだするかもしれませんが……

真苗の早苗を気絶させた方法って大丈夫なの？
感覚的に頭を強打された感じです
実際に脳へダメージは全く行っていないので大丈夫です
しかし、威力が高すぎると早苗の意識が暫く表に出られなくなるかもしれません
ですので威力調節は慎重にしているそうです。

最初のガキはともかく、後の五人も霊力強化したの？

いいえ、していません
素の身体能力で相手をしました
年単位でランニングをしたり、体を鍛えたりしているので小学一年生の実力を遙かに上回っています
ぶっちゃけ一般的な中学生と一対一で喧嘩しても引き分ける程度の実力は有ります
しかし、早苗になると実力の半分も出せません
……それでも四年生ぐらいには勝てる実力は持っているんですがね。

なら何で早苗はただ苛められるだけだったの？
相手に怪我をさせるのが怖かったからです
それに教師に怒られ、親にも怒られるかと思うと手を出せませんでした。

今後、真苗はどうするつもり？
流れに身を任せましょう。

少年期編　四十九話【レミリアの常識、博麗の非常識】（前書き）

レミリア　人間に教える事ができる程度の常識
戒魔　妖怪に教えられる程度の常識
真苗　大人だから我慢しない程度の憤怒

今回はこれだけです
頑張れレミリア！

少年期編　四十九話【レミリアの常識、博麗の非常識】

視点　レミリア

そろそろ戒魔が来て一年ね
一年……一年？
確か戒魔に金塊を渡された時にこの金分住まわせてくれって言ってたわね
という事はもしかして出て行くとか？

ま、そんなはず無いわね
出て行っても戒魔には行く当ても無いし生活する場所も無い
そんな事をして困るのは戒魔自身、心配する必要は無いわ。

そう思ってたんだけど……
考えが甘かったわ。

「レミリア、そろそろ俺が紅魔館に来て一年になる
最初に渡した金塊分ぐらいは生活費を使ったと思う
だから近いうちに出て行くな」

「……はい？」

「だから、そろそろ一年になるから出て行くと
勿論ナズナも連れて行くから大丈夫だ」

「そういう問題じゃないわよ！
どうして、なんでそうなるの！？」

「何でって……最初に言っただろ？
あの金塊分の生活費は約一年分ぐらいだって
それが尽きたら出て行くとも言ったはずだ」

甘かった！　私の考えは自分で思っていた以上に甘かったわ！
戒魔がこんな馬鹿みたいに真面目だなんて
そこは踏み倒すぐらいの根性を見せたらどうなの！？

「ナズナにはまだ伝えてないが
俺はもう片付けは済ませて出て行く準備は終わってる
ナズナの準備があるから三日から五日ぐらい時間を貰うがな
それぐらいには出るつもりだ」

しかも出て行く準備を終わらせてる！？
どうしてこう戒魔は堅物なのよ！
もっと適当に生きないと疲れるわよ！

「別に気にしなくてももっと居ていいわよ
私は貴方が気に入ってる
多少長居するぐらい構わないわ」

私としてはフランの相手もしてくれるし
料理もできるし紅茶も淹れられるし
色々とできて便利だから残ってくれると助かるわ。

「いや、最初に決めた事だからな
色々と回ってみたいと思ってるしね
野宿だけはしないように注意するつもりだ」

て、手強い！
妥協案を出す？　いえ、断られそうね
残す為にはどうすればいいかしら？
うーん……そうだ！

「なら戒魔、私に雇われなさい
職は執事でいいわね？」

戒魔に不思議そうな顔をされる
そんなに変な事を言ったかしら？

「あー……刹那の話しをしただろ？
俺があいつの立場を奪うのは遠慮したい
こっちの刹那にも悪いし、刹那にも申し訳ない気がする」

それなら仕方無いか
戒魔は向こうの知り合いの事を大事に想ってる
悪口を言うと怒りはしないけど咎められるわ。

立場を奪うような事も嫌がってる
戯れに誰かの地位を奪ってみたら？
とか、博麗を乗っ取ってみない？
とか言ってみた事もあるわ。

後者の場合は苦笑して絶対に駄目と強い意志を出された
前者の場合は怒られてしまったわ
そんな事をしても相手が不幸になるだけだろうが！
って、何時間も……なかなか辛かったわよ。

「でも戒魔に抜けられると困るのよ

私の話相手が居なくなるでしょ？
料理の種類が減るし、お茶も戒魔が淹れる方が美味しいし
暇潰し相手も減っちゃうじゃない」

「そんな事を言われてもな……」

「私の事はともかく、フランの話し相手が減るのはまだ避けたいの
私は少しでもフランの寂しさを埋めたいと思ってる
その為には戒魔が必要なの、だから残ってくれないかしら？」

事実、フランの孤独はまだ埋まってない
会話が終わる瞬間にほんの一瞬見せる寂しそうな顔を私は見逃してない
私の為にフランが寂しい想いをした
だから少しでもフランの為になるなら戒魔を強引にでも引き留めるわ。

案の定、戒魔は困った顔をしている
卑怯な手段だったのは認めるわ
フランの名前を使ったのも悪いと思う。

それでも戒魔が居ると私が楽しいから出て行く事は許さない
最大の理由は私の為、次の理由がフランの為、最後の理由はナズナの為よ。

「ナズナだってまだまだ勉強中でしょ？
箱入り娘のような状態なのに外で生きていけると思う？
私には難しいとしか思えないわ」

ナズナも制止力にする

私達三人の為にも、戒魔には残って貰うわ。

「しかしな……」

「お金の事が気になるなら今まで働いてくれた分の給金ぐらいあげるわ
正直言ってそれだけでも数年分ぐらいの生活費は渡す価値が有る働き具合よ
それに、まさかとは思うけど無一文で出て行く気だったの？」

顔を背ける戒魔
どうやら図星らしい。

「あのね……どうやって生きていくつもりだったのよ」

「人里で働き口でも見つけようかと思ってた
それか別勢力に行く事もな
可能性としては妖怪の山か永遠亭だ」

「駄目に決まってるじゃない！
人里に悪魔のナズナを連れて行く気！？
それに給金だって貰うのには日数が掛かるでしょ！」

思い出した、戒魔自身も箱入りだったわ
博麗としてでしか生きていなかったんだから世の情勢を知らなくても無理は無かったわね
まともな生活をしたことが無いんじゃないかしら？

「え、人里にナズナを連れて行くのって拙いのか？」

「当たり前でしょ！
貴方博麗なのに何言ってるのよ！」

こいつは本当に博麗なの！？
ちょっと色々と駄目なんじゃないの！？

「しかし俺はレミレアや美龍と一緒に人里に入った事があるぞ」

「それは貴方が博麗だったからでしょ！
そうじゃなかったら人里の守護者に追い返されてるわよ！
今の戒魔は博麗じゃないんだから怪しまれた上に最悪捕まるわよ！」

守護者の事は実際に会った事は無いけど調べたわ
人里の守護者、上白沢慧音
戒魔の方では堺音って名前だったかしらね？

真面目、堅物、石頭と三拍子そろってるらしいわ
そんな奴相手に私達が人里に入ってみなさいよ？
追い返されるか、例え入れたとしても見張り付きに決まってるじゃない。

「そ……そうなのか？
あー……後、給金って働いた後に貰える物じゃないのか？
何故日数を置く必要がある」

「日給の仕事も有るけど、給金は基本月一で貰う物よ
働いた翌月にお金は渡されるの
途中で辞めさせにくくする為なのか、楽しみを後に取っておくと頑張らせられるからかしら？
だから普通の仕事をしてもお金は貰えなくて餓死するわよ？」

私お嬢様なのに……何で博麗とはいえ平民に給金の事を教えてるのかしら？
普通立場が逆よね？　私が知らない方が当たり前よね？
博麗がどれ程非常識なのかわかった気がするわ。

お賽銭は人里の人達からの異変解決の感謝の気持ちだと仮定してそれが博麗の給金かしらね？

異変解決の時に報酬って出ないのかしら？
例えば八雲とか、八雲とか、八雲とかに
場所に依ってはそこから礼金が送られてもおかしく無いと思うんだけど？

「そんな……人里ってそんなにややこしい場所だったのか」

「自分の守る場所の情報ぐらい知っておきなさいよ！
何で知らないのよ！？　というか別にややこしくも何とも無いわよ！」

「さっきの話が人里では普通なのか！？」

「そこ！？　そこに驚くの！？
人里の事よりも自分がどれだけ無知だったかに驚きなさいよ！」

どうして戒魔はこう……抜けてるのかしら？
真面目なのにこの抜け具合から真面目に思えないわ。

「人里で生きるのってそんなに大変な事だったんだなうん、一つ勉強になったよ」

「三十歳にまでなってそんな事を知らなかった貴方に驚きよ
ちょっと生きるという意味で人生経験が足りないんじゃないの？」

でもこれって戒魔の事を言えない気がするわ
いえいえ、私には当主としての仕事が有るから違うはず
自分への給金は貢ぎ物とかで補えるし、無くても数十年程の蓄えは有る。

当主の仕事？
雇ってる妖精メイドの住居提供でしょ
給金の管理もしてるし、食費とかの生活費も私が出してるのよ
個人個人まで面倒見きれないから職の内容で決まった分を払ってるけど、それぐらいは許しなさい。

「博麗がこんなに非常識だとは思わなかった
霊夢の為に紫々に一言言っておいた方がいいか？」

「その紫々に会えないじゃない
霊夢の事は諦めるしか無いと思うわよ？」

落ち込む戒魔
非常識って言いたいのは私なんだけど？
存在自体が外では非常識の私が人間の戒魔に言うのも何か変な話しよね。

「それで戒魔、これからどうするつもり？
何だかもう色々と駄目になってる気がするけど」

戒魔は悩み始める

どうせ外に出てどうやって生きていくのか考えてるんじゃないの？
無理だから、戒魔が普通に生きていくのはとてもじゃないけど無理
だからね？

あ、頭を抱え始めてしゃがみ込んだ
本格的に無理だと自覚したみたいね
早く諦めて紅魔館に留まりなさい。

「あー……うー……無理かな？」

「無理ね、諦めなさい
何だったらパチェや美鈴に今話した内容を言ってみなさい
絶対に無理って言われるはずよ」

美鈴はある程度世界を渡り歩いた妖怪
世の中の事を多分私よりも知っているはずよ
私でも無理だと思っているのに、美鈴が可能と言うはずが無いわ。

パチェは世間の事はあまり知らない
下手すれば戒魔よりも知らないかもしれない
でも別の視点から見て、それでも無理と言うはずよ
例えばナズナの件、荷物とかね
別の意味で現実を見れるようになると思うわ。

溜め息を吐く戒魔
本当に諦めたみたいね
もっと早かったら私も楽だったんだけど。

「これからもよろしく頼む、レミリア」

そう言って頭を下げる
家主に対しての礼儀としては十分ね。

「えぇ、お願いね戒魔
早速だけど紅茶を淹れてくれないかしら?
さっき大声を出したから喉が渇いたの」

「はいはい、わかったよお嬢様
砂糖はどうする?」

「任せるわ」

「それは困るんだけどな……
わかった、二杯入れておくぞ」

戒魔は部屋から出て行った
ふぅ、これで一息つけられるわ。

真剣な目で戒魔に見られると負けちゃうからね
やっぱり最初の睨み合いに負けたのは大きかったわ
殺気を出したのが敗因かしら?

今回も危うく許可しそうになったし
これを切欠に今後も断れるように頑張らないとね。

……でもこれって私らしくないわよね
私も丸くなったのかしら?

悪い気は……思ったよりしないわ
甘くなった私も、それはそれで良いわね

ふふ、今夜は何をしようかしら……夜の散歩にでも出かけようかなーっと。

続く

少女期編　裏二十九話【生徒の始末は教師に背負わせる】
表との時間差……一年二ヶ月

視点　真苗

新学期の初日の朝から騒ぎを起こしたと言われ、今は職員室で怒られてる
でも僕は正当防衛だよ？
攻撃されたから後の先を取って潰しただけだし、加減も真面目に手加減してたよ？

元々この屑も早苗を苛めていた奴だ、どうせ何を言っても無駄だろうどうせだし、今の内に潰しておくか？

「東風谷、お前はどうも騒ぎを起こすな
前から忘れ物も多いし、お前は駄目な生徒だなぁ」

早苗が苛められていたと知っていてその発言か？
しかも僕にしか聞こえないように嫌味っぽく、馬鹿にするような言い方で。

こいつ……やっぱり早苗の事をストレスの捌け口にしてるな
苛められてるし、誰にも言わないし、僕本人は騒ぎも起こさないおとなしい子供
これなら自分も苛めても親にも言わないだろうと思ってるだろうね。

それに目付きが気持ち悪い
多分こいつ……早苗に何か良からぬ事を考えてる
この塵に呼び出されたら警戒した方がいいね。

「頭も悪いし、放課後に残って居残り授業でもするかぁ？

お前の頭じゃ無駄だと思うが、俺が手伝ってやってもいいぞぉ」

……決定、この糞猿は潰す
二度とこんな下らない事を言えないような体にしてやる
生徒にはかなり手加減したけど、お前には少ししか手加減してやらない。

「嬉しいだろぉ？　嬉しいよなぁ？
感謝しろよ？　俺が態々教えてやるんだからよ」

わかったわかった、その幸せそうな頭を壊してやるから喜べ
教師は勝手に放課後の予定を決め、強引に話しを決めた
来なかったら成績表を弄るぞと脅しをしてね……人間の底辺が、ほざいてろ。

放課後、底辺から言われた時間になった
教室には誰も居らず、鍵まで閉めて準備万端
うん、僕の準備が万端なんだよ。

「さて、東風谷、授業を始めようか？」

「死ね、腐れ外道の社会の存在価値も無い蚤以下の廃棄物
お前と同じ空間に居るだけで空気が腐る、さっさと窒息して死ねさぁ死ね、すぐ死ね、今すぐ死ね、消滅してしまえ」

教師の唖然とした顔
あ、拙い……楽しくなってきたかも。

「な……な……なぁ？」

「黙れ、言葉を発するな、空気が汚れるから死ね
酸素が勿体ない、お前なんて二酸化炭素だけ吸って死ね
臓器提供もするな、お前の死体の臓器を使えば使われた人が哀れで
悲しすぎる
骨すら残さず、灰すら残さずに燃え尽きて死ね、というか消滅して
しまえ」

こんな言葉がスラスラと出てくる
どうやら僕、極度のサディストだったみたいだね
昔から自分を抑えてたから気付かなかった。

子供の頃はおとなしかったし
両親が死んでからは一人で頑張ろうってなってたし
神奈様や諏訪様と一緒の時は努力しているだけだった。

幻想郷に行っても色々と頑張る毎日
大変だったというのも有るけど、こんな事をする機会が無かった
だから今まで気付かなかったのかな?

「こ、東風谷!
お前、教師にそんな事を言っていいと思ってるのか!」

それもそうだけどさ
廃棄物とか、窒息とか、酸素とか、二酸化炭素とか、臓器提供とか
そんな事を知っている謎に気付かないの?
小学一年生が知っているのはどう考えても変でしょ?

「黙れ、叫くな、声が煩い、死ね、耳が腐る……いや、腐ったら拙
いか
お前なんか教師と言えるはずが無いだろが、死んで詫びろ

早苗を苛めるばかりか、ストレスの捌け口にするなんて万死に値する
更には人気の無い放課後の教室に呼び出して何をするつもりだった
んだ変態が、死ね」

切れて突然殴り掛かってくる教師
動きが遅すぎる……霊力で身体強化し、拳を避ける。

素の体だとさすがに大人の速度には敵わない
この体はまだ十にも満たないんだ
相手を過小評価して怪我を負ったら目も当てられない
絶対に早苗は傷付けさせない！

カウンターで腹に拳を叩き込む
まだまだ霊力の練りが甘く、威力は低い
だけど普通の人間にはこれでも十分
だって本気を出せば素手でも……瓦を割れる自信が有るんだよ？

そんな拳を叩き込まれて悶絶する教師
次に男の最大の急所を蹴り上げる。

なお、この蹴りの威力だけど
本気ですれば鉄板を凹ませる自信が有るよ？
今回は空手とかで使うような木の板を割る程度の威力しか出してな
いけど。

泡吹いて気絶する教師
いい気味、でももっと威力を上げて蹴りたかったな……完全に潰し
たけどね
何をって？　本当に聞きたいの？
世の中知らない方が良い事だって有るって事を覚えた方がいいよ。

僕はあれだけでは満足できなかった
とりあえず追い打ちに腹に膝を叩き込んでおいた
踏もうかと思ったけど足跡が付くから断念。

首もとを掴み、頭を持ち上げる
顎を強く殴り、脳を思いっきり揺らしておく
これで目を覚ましても暫く動けないはずだ。

内蔵を傷付けない程度に潰すように殴っておく
これで呼吸困難かな？　死なない程度に加減したけど。

鳩尾に肘を叩き込む
更に苦しんでるけど加減してるんだよ？
大丈夫、死なないように注意してるからさ。

手足の筋を引き千切っておく
動かしただけで激痛が走るように調整しておいた
治るまで何ヶ月かかるかな？

こんな事して平気かって？
大丈夫だよ、人体について頑張って勉強したからさ
力が無いから技を使ったり急所を狙うのは当然でしょ？

剛術は無理だけど柔術は得意だよ
柔道の技とかも使えるように勉強中
相手が居ないのが困るけど、なんとかなってる。

関節技とか、プロレスの技も使えるよ
医療知識も覚えたから殺さない程度の加減は覚えてるし。

ちなみに勉強したのは結構最初から
早苗が覚えないように注意しながらだけどね。

さて……この塵の後始末はどうしようかな？
とりあえずゴミ箱に突っ込んでおくか。

証拠は残さないよ？
それに早苗が表に出ている間は何を言っても知らないしね
嘘を言っていないんだから疑うに疑えない
早苗が狙われる可能性はかなり低い。

ま、もっと低くする為に証拠を消してるんだけどね
職員室での会話はあの屑が自分から他の人間に聞こえないようにしてたし
だから誰も今日の事を知らない、だから早苗は疑われない。

さ、暫くの間病院で悪夢に魘されるといいさ
それが早苗を苛めた罰さ……精々後悔して痛みに耐えるんだね。

少年期編　四十九話【レミリアの常識、博麗の非常識】（後書き）

博麗って……
世間知らずです
実は誰がもが思っている以上に箱入り娘……箱入り息子？
まぁそんな状態です
博麗以外で生きてきた事が無いので当然といえば当然ですが。

八雲から異変解決の報酬は貰ってないの？
貰っていますが時々お裾分けで藍から色々と貰ったり
他にも多くの人から助けて貰ってるので報酬という意識がありません。

レミレアも当主の仕事はしてたの？
していましたが、刹那が現れてから丸投げしたそうです
咲夜が来ればレミリアも丸投げするんでしょうか？

原作早苗もこんな教師だったのかな？
原作早苗は苛められていなかった（という設定）のでこの教師も早苗に何もしてません
こちらでは苛められているので魔が差したのだと思われます
原作早苗では普通の駄目教師でした。

真苗がドSになってる！？
ドSは真苗が担当します
早苗ですか？　普通の女の子を担当し、ドS要素を持たせない予定です。

この後、教師はどうなったの？

辞めました
詳しくは次話でする……かもしれません
しなかった場合、ここを修正してその後を書こうかと思います。

少年期編　五十話【阿礼乙女の九代目】（前書き）

レミリア　責任を放棄する程度の無責任
戒魔　気を遣う程度の真面目
フランドール　実は今まで知られていなかった程度の知名度
阿求　内心は意外程度の腹黒？
真苗　実は教師に憧れていた程度の未来？
早苗　極々普通の女の子程度の純粋
疑問　次回に回される程度の謎

新しい阿礼乙女が産まれました
ところで、求の本の新聞を読む限りですが
阿求は産まれた時から既に十二歳から十五歳ぐらいの見た目でした
どうやって産まれてるんだろう？

今更ですが活動報告の方でキャラ設定の安価と取ってます
随分前からしていますが、完成する度に記事を消しているので残ってません
それはそうと、そちらの方で安価に参加してくださると嬉しいです。

少年期編　五十話【阿礼乙女の九代目】

視点　戒魔

「俺にフランドールを連れてレミリアの代わりに人里に行けと？」

「えぇ、紅魔館の代表としてね」

「寝言は寝て言え
俺やフランドールが紅魔館の代表なんてできるはずが無いだろ」

レミリアに辛口の言葉を投げる
それでもレミリアは何処吹く風、気にもしないで紅茶を飲む
こいつ……話しを聞く気が無いな？

「できるできないの問題じゃないわ
私は行けと、そう命じてるのよ？
貴方には拒否権を与えた覚えは無いわ」

「いくら何でもそれは横暴だろ！」

いくら何でも俺でも怒っていいはずだ
強引過ぎるし、フランドールだってこんな事を受けるとは思わない。

「それに、フランドールだってこんな話しを受けるはず無いだろ
当主になりなくないって地下に下りてたんだぞ？
なのに当主の仕事を押し付ける気か！？」

「あ、フランの許可なら取ったわよ？
条件付きでだけどね」

条件付きだとしてもフランドールが受けた！？
一体どんな条件を付けたんだ……
レミリア、少しだけだけど顔が引き攣ってるぞ？
もしかして実はかなり苦しい条件だったんじゃないのか？

「ちなみに条件とは？」

「戒魔が手伝う
今後、人里の用事には滅多に行かせない
久しぶりに地下で何日かのんびりと休みたい
他にも色々とね……」

それって頼まない方がよっぽど被害が小さくて済んだんじゃないか？
なのに何故頼んだ、レミリアよ。

もしかしてフランドールに人里の雰囲気を教える為か？
フランドールは外の世界をまだあまり知らないしな
可能性としては低くは無いし、他にそう思いつかない。

「まぁとにかく、頼んだわよ戒魔
稗田家の娘に紅魔館の事を話してきてね
悪い印象を持たれたら駄目よ？」

そう、稗田阿求が誕生したという新聞が届いたんだ
阿求の名前はこちらでも向こうでも同じらしい
違いはこちらが阿礼乙女で、向こうでは阿礼一族
向こうでは何一つ捻りも無かった。

だけどレミリア、俺はその話しを受けたつもりはまだ無いんだが？
なのに何故既に俺が行くという前提で話を進めているんだ？
確かにフランドールが心配だから付いて行くのは構わないが……
それでも一応俺の許可を完全に取ってから話してくれ。

うーん……これは阿求の誕生祝いか？
そういえば向こうの阿求はどうしてるだろうか？
向こうに居た時は二十五歳だったし、こちらと同じ時間を進んでいた場合は二十六歳かな？
一族の宿命だが、それでもあいつには長生きしてほしい所だ。

それにしても悪印象を持たれないように注意しろねぇ？
フランドールの性格なら大丈夫だと思うが、人付き合いの経験も少ないし難しいか？
俺も紅魔館の印象の一つに数えられるんだし、態度とかに注意しないとな。

「紅魔館から土産物も持っていてね
一応、それで少しは元々の悪い印象を拭いたいし
後は戒魔個人でも何か用意してちょうだいね」

俺からもかよ……面倒な
それならまた焼き菓子（クッキー）かな？
妖精や吸血鬼に悪魔、妖怪に魔法使いも喜んで食べてくれると言えば悪くない土産だろう。

そこら辺はフランドールも何か言ってくれるだろうしな
だけど幽香の名前を出すのは止めておこう
幽香の凶悪な妖怪という印象が変わってしまう

怒らないとは思うが、それでもあまり良い事とは思われないだろう。
だけどこの焼き菓子（クッキー）、自分以外の人間が食べたことが無いんだよな
どうせだし、阿求に感想を言って貰おう
最近リリーホワイトの影響で菓子作りが楽しくなってるしな。

しかしそれだけってのも……パチュリーから何か本を貰うか？
読み終わってる本とか、そういうのならくれるかもしれん
為になりそうな本だったら阿求の役にも立つだろう。

色々と考えながらも、レミリアに一言言ってから部屋を出る
これはなかなか難しい課題だ……フランドールとも相談するか
後美鈴にも、パチュリーには本の話しだけでいいかな？
だってパチュリーもあまり人付き合いとか苦手そうだし。

視点　阿求

疲れました……新しい阿礼乙女が産まれた
その新聞が出回ってからというものの、色んな人が稗田家に尋ねてきます。

でも言っている事は大抵全員同じ
よろしくお願いしますから始まり、自己紹介に続き、私の誕生を祝う言葉を言う
自分を売るような事を言って最後に帰るだけ……呆れましたね。

私に覚えて貰う、それだけでも価値が有るとでも言いたいのでしょ

うか？
確かに私は阿礼の子孫、この幻想郷でも重要な人物だと教えてもらいました。

しかし、まだ私は産まれたばかりなのですよ？
そんな私に何を期待しているのでしょう
今後、私は色んな事を勉強して歴史を残すんです
あなた方のようなごく普通の一般人を書き記して、何の意味が有ると思っているのですか？

はぁ……幻想郷の大物と呼ばれる者達は当然私のような人間なんかに興味を示してくれません
八雲は当然とし、博麗はまだ子供、西行寺は冥界なので来ないのは当然
妖怪の山だって天狗が私の事を新聞にした以外、何一つ干渉しません
紅魔館は凶悪な吸血鬼なので来られても血を吸われそうで怖いですから来なくて良いです。

数日が経ち、そろそろ落ち着いてきた日の事です
なんと、紅魔館から私の事を知って人を送ってきたそうです
人数は二人、片方は虹色の歪な羽を持った妖怪、片方はどう見ても普通の人間の子供だそうです
……人間の子供ってどういう意味でしょうか？

私の知る限りでは紅魔館に人間は一人も住んでいなかったはずです
それに吸血鬼からすれば人間はただの餌、一緒に住んでいるとは到底思えません
更に妖怪と一緒に居る時点で変です
もしかしたら人間に見えるだけで妖怪だとかでしょうか？

妖怪には人間と見分けられない程人間に近い妖怪もいます
あの八雲もその人間と見分けが付けられない妖怪の一人ですね
八雲の絵を見る限り、普通の人間と大差無いので少しだけ怖いです。

こういう言葉が有ります
人間は悪魔に似たのか、それとも悪魔が人間に似たのか
言葉の意味は精神的な意味合いでの言葉です
似たような言葉で悪魔が神と言われている言葉も存在しますが、今はいいでしょう。

しかし、見た目的な意味ではどうなのでしょうか？
人間と妖怪で姿の似ている者は実在しています
どちらが先に産まれ、どちらが先に歴史を築いたのでしょう？
歴史に記録を残す者として産まれた以上、歴史に関する事なので気になりますね。

それはそうと、紅魔館からのお客さんに会いますか……怖いですけど
人里と妖怪には契約が成されています
人里では妖怪は人間を襲うことを禁じる
この契約が存在する限り、人里に居る限り妖怪は人間を襲えません。

しかし相手はあの凶悪な妖怪として有名な吸血鬼、レミリア・スカーレットからの者
何をしでかすのか、見当も付きません
突然殺される事は無いと思いますけど、血ぐらいは抜かれそうですうぅ……会いたくないなぁ。

お手伝いさんが紅魔館のお客人を連れてきたと教えてくれました
会いたくありませんが、もし紅魔館の機嫌を損ねたらと思うと怖くて断れません

早く話しを終わらせて早々にお帰り願いましょう。

「お邪魔するわ」「失礼する」

そして部屋に入ってくるお客人達
話しに聞いたとおり、妖怪と人間ですね
はて、誰なんでしょうか？
少なくとも私の記憶と読んだ資料からはこのような人達は紅魔館に居なかったはずですが。

「突然の訪問で悪いな
俺は夢幻戒魔、紅魔館で世話になって世話をしている人間だ」

「私はフランドール・スカーレット
名前を聞いてわかると思うけど、レミリア・スカーレットの妹よ」

嘘……あのレミリア・スカーレットに妹が居たなんて初耳ですよ
しかも本当に人間、しかも子供ですし……でも世話になって世話をしてるってどういう意味でしょうか？

「私は稗田阿求です
本日は私の為に来ていただいてありがとうございます
しかし、何故紅魔館のお人が私のようなただの人間の所に？」

紅魔館から見て、私の存在など気にも止めるような相手でも無いと思います
なのに彼らは私の所に来た
つまり何か彼らに利益が有るはずです。

「俺からはレミリアの代わりに阿求への挨拶と買い物

フランドールは社会見学と人里巡りで食べ歩きが目的らしい
無論、食べ歩きというのは血を吸って歩くという意味では無いぞ」

「……はぁ？」

代理と買い物ですか？
社会見学と食べ歩きですか？
え？　私の緊張は一体何だったんでしょうか？

「戒魔、それだと私が意地汚いみたいじゃない
訂正してくれない？」

「事実だろう？
その為に昨日から何も食わずに我慢してたくせに」

「う……」

彼らは漫才でもしに来たんですか？
いえ、それよりも吸血鬼を相手に平気で会話するこの少年の方が気になるんですけど
子供が吸血鬼を相手に漫才？　わ、私の常識が崩れていく……産まれてそう経ってもいませんが。

「おっと、フランドールに構っている場合じゃなかったな
紅魔館の主、レミリア・スカーレットから祝い品だ
本人曰く、あまり高価な物でもないし自分は特に必要無いからいらしい」

そう言って渡されたのは大きな宝石
こ、こ、こ、これって絶対に人里の店を丸ごと買収できるぐらいの

値段ですよね！？
こんな高価な物をそう易々と渡さないでください！
あと、絶対に高価な物ですから！　レミリア・スカーレットは金銭感覚を直してください！

「まぁ確かに紅魔館の中の物からすれば安い方だし、気にせず貰っておけばいいさ」

これで安い方なんですか！？
紅魔館にはどれだけお金が眠ってるっていうんですか！？

「ちなみに一応それは賄賂
紅魔館の悪印象を少しでも抑えたいらしい
レミリアは最近丸くなってるしな」

「お姉様を丸くした原因の癖に……」

えぇ！？　人間の子供が吸血鬼の性格を丸くした！？
というか賄賂って……そうかもしれませんがもう少し控えめに言った方がいいのでは？
しかも渡した相手に対して言う事じゃないですよね？

「一応俺達が紅魔館に住んでいる事は知らせておいた方が良いと思ってな
俺は去年の夏に紅魔館へ居候を始め、フランドールは初秋に紅魔館の地下から地上に上がってきた」

「地下から……ですか？」

妹の存在を隠す必要でも有ったんでしょうか？

それとも何か事情が？

「姉よりも強いからお前が当主なって、先代に言われたけど嫌だから暴れたそうだ
その後も嫌だからって我が儘で暴れまくって自分から地下に閉じ込められるように仕向けたんだよ
が、本来の性格はただの面倒な事が嫌いな怠け者吸血鬼さ」

「そんな言い方は酷くないかしら？
せめて凶暴で凶悪な吸血鬼が暴れ、地下に封印されてしまったとか」

「表向きにはそうかもしれないが真実は俺の言う通りだろ？
阿求がどちらを新しく書く幻想郷縁起に記すかは知らんが」

フランドール・スカーレットは私を睨む
わ、私を睨まれても困ります！
夢幻戒魔もそれを楽しそうに眺めないでください！

「あんまり阿求を苛めるなフランドール
殺気も出してないし、本当はどっちでもいいんだろ？」

「まぁね」

そういえば睨まれてもあんまり怖くありませんでしたね
吸血鬼に睨まれたからという理由だけで怯えてしまいましたがどうもこの吸血鬼、あまり吸血鬼っぽくありませんね。

「おっと、俺からも一応祝い品をな」

そう言って夢幻戒魔が取り出したのは……何これ？

初めて見る物ですね、ある程度受け継がれてる記憶にはこんな物はありません
となると紅魔館で新しく産まれた物でしょうか？

「これは焼き菓子（クッキー）といってな
西洋の菓子になるんだ、紅魔館で何度か出してるんだが人間の感想が聞きたくてな
そういう訳で贈り物にも丁度いいし、作って来たんだ」

子供がお菓子を作ったんですか！？
あぁ、それで世話になって世話をしていると……なるほど。
お菓子というからには気になりますね
くれると言ってますし、ここは遠慮無く一つ……おいしいですね。

「戒魔の焼き菓子（クッキー）は美味しいでしょ？
私もお姉様もパチュリーも美鈴もナズナもリリーホワイトも妖精メイド達も大好きなのよ
ちなみに種族を言うと最初から吸血鬼、魔法使い、妖怪、悪魔、妖精よ」

こんな子供の作るお菓子がそんな多種族に渡って好かれてるんですか！？
もしかして紅魔館って子供に支配されてるのでは？
主にお菓子で舌とかを……

「後、紅魔館の魔法使いからも本を一冊
包装されてるから内容は知らないが、為になる本らしい」

夢幻戒魔に渡される本

こういうのは嬉しいですね
それに、魔法使いからなら本当に為になるでしょう。

それにしても……物を持って来てくれた人は初めてですよ?
人里の住民は何も持って来ませんでしたし
物を持って祝ってくれたのが紅魔館が最初って……皮肉か何かですかね?
殆ど祝いの言葉は貰ってませんが。

「あんまり長くお邪魔するのも悪い
そろそろお暇(いとま)させてもらうよ」

「そうですか?　もっとのんびりしても構いませんよ?」

社交辞令ですがこれぐらいは言いますよ?
本音は吸血鬼が怖いんですけど。

「怯えられてる相手と一緒に居ても気分が悪いだけよ
戒魔、早く出ましょう?」

「社交辞令にそこまで過敏に反応するな
じゃあな阿求、余裕ができたらまた焼き菓子(クッキー)を持ってくる」

怒る吸血鬼を宥めながら出て行く夢幻戒魔
気付かれたとは……悪い事をしましたね、吸血鬼でも心は有るという事でしょう。

もしまた会えた時には謝っておきましょう
夢幻戒魔がまた来てくれた時にでもお願いすればいいでしょうか?

続く

少女期編　裏三十話【真苗流、教育方法】
表との時間差……一年二ヶ月

視点　真苗

教師を塵屑にした翌日、当然だが学校では大騒ぎになった
犯人はどう見ても達人という噂が流れている
知識を囓ればそれぐらい子供でもできるんだけどね。

教師は何かに怯えるように口を噤んでいるらしい
まさか僕がここまで本気だとは思わなかったみたいだね
あそこまで体をボロボロにしたなら当然かな？

朝礼で全員に危ないから集団で帰る事と言われた
ガキ共はよくわかってなかったみたいだけど、親はどう思うのかな？

それはそうと、昨日ガキ共に反撃したからか誰も早苗に話しかけようとしない
怯えてるのが半数、警戒してるのが半数といった所かな？
早苗には悪いけど、このガキ共にはもう少し教育が必要みたいだね
……

一応何事も無く早苗は帰宅
明日は僕が表に出る日
さぁ、子供の教育を始めようか？

翌日の学校
新しい担任教師が用意できるまで隣のクラスの教師が何度か来るらしい
けど当然ながら自習時間が多い
だからその時間を利用して……ね？

昨日は早苗だったからおとなしかった
だから予想通り、ガキ共が自習時間に群がってきた

多分昨日は早苗をどうしようかという相談でもしてたんじゃないかな？

集まってくるガキ共、今回は女子まで混じってるね
丁度いいか、教育は全員に施さないといけないし
そう考えると好都合とも言える。

急いで早苗を気絶させる
今からの事は見せても悪影響にしかならないしね。

「おい東風谷！
お前一昨日はやられたけど調子に乗るなよ！」

「そうだそうだ！」「東風谷の癖に生意気だ！」「勝手な事すんな！」

鬱陶しい、早々に教育が必要みたいだ
こんな口を早苗に利くような奴らは……粛清だ！

とりあえず目の前に立っていたガキの首を絞める
殺さない程度に……そして気絶しない程度に苦しめる
驚いてるガキ共を無視して絞め続ける。

泡吹いて気絶する寸前で解放
解放されたガキはのたうち回って酸素を摂取する
その無様な姿でも、僕の気分は晴れない
やっぱりまだまだ甘いのかな？

転がっているガキの頭を踏みつけ、動きを止める
周りのガキ共もこちらに注目しており、誰もが怯えた顔で僕を見て

いる
その表情……最高の気分になりそうだよ！

「自己紹介しておこうか？
僕の名前は東風谷真苗、早苗とは違う者だよ」

誰も何も言わない、意味が分かってないからだ
しかしそれは当然だろう、何故なら漢字は違うが読み方は同じなのだから。

「お前達、二重人格って知ってるか？
同じ人間なのに違う性格になってしまう病気
その病気から生まれたのが僕さ」

半分以上は理解できてないと思う
だけど話しは続ける、早苗への被害を無くす為に。

「これはね、悲しい事や辛い事があると起こる病気なんだ
僕が……早苗が悲しい想いをした原因が分かるかい？」

当然わかっているはずが無い
それでもこのガキ共は絶対に許さない。

「君達が原因なんだよ？
君達が早苗を苛めるから早苗は病気になって僕が生まれたんだ」

早苗が病気になったという言葉で震える生徒が数名、青ざめるのも数名
だけどやっぱり半分ぐらいはわかってない
小学一年生ってこんなものなのかな？

「今まで早苗は抵抗しなかった
だけどこれからは僕が居る、僕が早苗を守る
早苗を苛めていたお前ら……僕は常にお前達を見ている
早苗を苛めようとしたらお前らは……潰す
一昨日程度の怪我で済むと思うなよ！」

その言葉と同時に踏みつけてるガキの腹を蹴り飛ばしてやる
ガキは泣くこともできないまま気絶してしまった
もう少し加減すればよかったかな？
泣き叫ばれたら困るからいいか。

一昨日の話しが出た時にガキ共は怯えて僕から距離を取る
さて、最後に少しだけ飴をやらないと……飴と鞭が子供の教育に丁度いいと思うんだ。

「でも大丈夫、早苗を苛めたりしない限り何もしないから
僕はともかく、早苗と仲良くしてくれたら僕は嬉しい
苛めたりしたら僕は怒るけど、早苗とはお友達になってね」

早苗と仲良くすれば僕は怒らない
こう言えば怖い物から逃げ出すように早苗と仲良くなるだろう
切欠は何であれ、最終的に本当に友達になってくれるなら文句は無い。

その日は生徒が一人保健室に運ばれたぐらいで特に何も無かった
原因は暴れてて倒れて頭を打ったとなった、というか僕がそう言った。

このガキ共は僕が今後も教育していく

これからの学校生活が楽しみになってきたなぁ。

少年期編　五十話【阿礼乙女の九代目】（後書き）

平行世界簡易（？）キャラ設定

十六夜咲夜／十六夜刹那（せつな）
紅魔館の紳士

少し悩んだけど出た瞬間スッポリと収まりました
紳士だから忠誠心は鼻から出しません！　咲夜だってそうします！

簡易（？）特徴
紅魔館に住んでいる執事
悪魔の狗、腹黒執事、害悪紳士など、様々な悪評を持っている
それほどまでに敵からの印象が悪い。

悪評を得る原因は口の悪さに有る
敵を相手にすると口の悪さは紅魔館一……下手すれば幻想郷内でも最上位に君臨するほどである
戒魔は博麗であり、紅霧異変でのレミレアの客人なので敵対しても口調は普通だった
しかし、春雪異変の幽真、そして紫々に対しては凄まじいまでの悪口の連続で毒を吐き続ける
具体的には幽真に対し「黙って死ね《放送できません》のような《放送できません》で《放送できません》なお前は《放送できません》して《放送できません》の上、《放送できません》して死ねあ、そういえばお前は亡霊だから既に死んでるんだったねだったら《放送できません》で《放送できません》だから《放送できません》をするといいよ」
と、暴言の限りを尽くす

自分でも腹黒と自覚している幽真でも涙目になってらしい。

紅霧異変後、戒魔が何度かレミレアに招待されたので顔合わせしている回数はそれなりに多い
戒魔が口調の悪さを知ったのは砲魔が紅魔館に来た時である
戒魔の知り合いだから通してくれと強引に入ろうとしていた所を帰ろうとしていた戒魔と刹那が発見、刹那の爆走毒毒悪口が発動し、砲魔を泣かせた事件である
なお、砲魔が泣いたのは戒魔に初めて大敗した時以来らしいので数年ぶりになるだろう。

現在は霊夢の面倒を見ている砲魔の手伝いをしながらもあまり変わらない生活を送っている
大きく変わる時はレミレアが霊夢に何かをしたいと言い出して暴走した時ぐらいである
例え主人でも色々と面倒事が大きく増えてしまうので止めているが結構な疲労だとか。

少年期編　五十一話【新しいお屋敷】（前書き）

戒魔　気付けば働く程度の真面目
幽香　実はお嬢様だった程度の事実
ナズナ　戒魔を待つ程度の忠臣

何故かこうなりました
どうしてこうなったんでしょうか？

前話の疑問と回答もしています
どうでもいい？　そうですか、そうですね。

投稿時に少々トラブルが起こって投稿が三分ほど送れました
そんな短い時間ですが遅れてすみません
後書きは何とかなりましたが前書きはどうにもならずに書き変えました
内容を覚えてない自分の頭をどうにかしたいです……

少年期編　五十一話【新しいお屋敷】

視点　戒魔

何故こうなった……どうしてこうなったんだ？

「何してるの？
せっかく私が館に招待してあげたんだからもっと喜んだらどう？」

いや、それは嬉しくない訳じゃない
だけど……だけどな？

「強引に連れてきたあげく、自由なのが上半身だけで下半身は椅子に縛り付けられて固定
それ以前に俺に同意の一つも取らずに気絶させて攫ったよな？
訊きたいんだが、これで喜べる人間が居ると思うか？」

俺を攫ってきた犯人は少し考えるように手を顎に添え、頭を傾ける
考えが纏まったのか、笑顔になり俺の方を向く、そして一言。

「思わないわ」

「なら最初から喜べとか言うな！
というか、何故俺を攫ったんだ幽香！？」

こういう人攫いは紫々の担当だろうが！
お前は太陽の畑で花を愛でるのが仕事だろ！？
なのに何故俺を攫ってまで夢幻館に連れてきやがった！？

「話しを聞く限り貴方って有能そうじゃない？
だから紅魔館の吸血鬼には勿体ないと思って、ついね？」

「ついね？　で、済ませられる事じゃないだろうが！
お前紅魔館に喧嘩売ってるのか！？　それとも単純に嫌がらせか！？」

「人材の確保だけど嫌がらせも少々」

「本気で絶対に喧嘩売ってるよな！？」

初めて幽香と会った日から何度も太陽の畑に行っている
妖精メイドを毎回三人だけ連れて行くだけで他には誰も連れて行ってない
幽香の放つ威圧感と幽香の挑発に耐えられないからだ
それでも俺は幽香と親しくなっていったと思う。

妖精メイド達は少し離れた場所で自由にさせていた
そして俺は幽香とのんびり世間話をしながら自然を楽しむ
太陽の畑に来た時は毎回そうしていた。

夏も終わりに近づき、秋に入ろうとしていた今日
そろそろ向日葵も見納めかと思いながら太陽の畑に向かった。

今日も今日とて世間話
帰ろうかと思った時、幽香に呼ばれて振り向いた瞬間、気絶させられた。

そして気付いた時にはこの状況

混乱している俺の前に幽香が紅茶を持って来て目の前の椅子に座る
そして冒頭に戻るんだ。

「少しだけ私の為に働いてくれないかしら？
勿論お礼ぐらいはさせてもらうわ」

「お断りだ、人を攫っておいて誰が引き受けると思うか
脅されても、どれ程の報酬でも受ける気は無い」

博麗は決して脅しには屈しない
報酬で動こうとした事など、今まで一度もした事が無い。

さすがに今回は俺でも怒る
幽香が何を企んでるかは知らん
だが、好き勝手させるほど、俺は甘くない。

幽香は再び考える仕草をする
俺が本気だと悟ったらしく、少々困っているようにも見える。

「あらあら、ここまで意志が強いとは予想外ね
とても子供とは思えない強さだわ
初めて会った時から思っていたけど、貴方本当に子供？」

「どこからどう見ても子供だろうが
この姿を見て子供に見えないのは少々問題なんじゃないか？」

「貴方……私に喧嘩売ってる？」

「先に売ってきたのはお前だろうが」

売り言葉に買い言葉
俺達の間に険悪な雰囲気が漂う
それでも俺は譲る気は無いからな？

「ま、いいわ
どちらにせよ、暫くはここに住んでもらうしね」

「却下だ、早く俺を紅魔館に帰させてくれ
この館に居たら気が狂いそうになる」

この館……そこら辺が血塗れなのだ
血の臭いも強く漂っており、正気で保つ事さえ難しい。

「あら、だから貴方を連れてきたんじゃない
貴方に頼みたかったのはこの館の掃除よ」

「今俺が言った事を理解してないのか！？
こんな場所に居たら気が狂う！
なのに掃除させようってのか！？」

「仕方無いじゃない、この館を手に入れたのはつい先日なんだから」

仕方無いで済ますな！
それにこの館の従者……だった奴らはどうしたんだ？

「幽香、掃除させるならこの館の従者にさせればいいだろ？
前主人の召使いとか、妖怪だったら力で従わせる事ぐらい楽だろ？」

何故目を逸らす、幽香
まさかとは思うがお前……

「実はね、皆殺しにしちゃったのよ
だから今、この館には私と貴方だけ
貴方の事を知らなかったなら自分で掃除したかもしれないわ
でも貴方みたいな便利そうな人間を使った方が楽じゃない？」

「予想はしてたけど本当に皆殺しにしたのか！？
あのな、館を制圧する時は館の主人だけを狙えよ！
そして従者は自分が奪った後の労力に当てるべきだろ！
最初は暗殺とかされるかもしれないが、それでも力尽くで従わせられるだろうが！」

「面倒じゃない」

「面倒で済ますな！
俺が居なかったらこの館の管理とかはどうするんだ！？」

「適当に雇うわよ」

「前主人とその従者全員を皆殺しにした奴の元で誰が働きたいと思うか！
まさかとは思うが、来たら強引に力尽くで働かせるんじゃないだろうな？」

「あら、よくわかったわね」

「絶対に逃げるに決まってるだろ！
そいつ泣くぞ！？　絶対に泣くぞ！」

幽真の時もエルンやくらぼも苦労してたんだろうな……

そういえばあいつらはこの後夢幻館の門番とかに雇われたのか？
どういう条件で受けたんだろうか？

「それはそうと掃除、お願いね？
暫く私に扱き使われたら帰してあげるわ
だから働きなさい、馬車馬の如くね」

くそ、帰りたければ働けってのか！
どれぐらいになるかわからないが、働く他手段が無さそうだ
全てにおいて幽香に勝てる物が無いし、ここは我慢だ
決して脅しに屈したんじゃない、帰る為に頑張るだけだ！

「わかった、働いてやろうじゃないか！
と、いう訳で幽香、給金はどれぐらいだ？
レミリアは美鈴にそれなりに多く出してるらしいし
同じく館の主である幽香も同じぐらい出してくれるんだろ？」

「はぁ！？　私から金を取る気！？」

「当たり前だろうが！
一応レミリアの所でも少しは貰ってるんだぞ！
住み込みという理由から少ないが十分にな
強引に働かせるんだし、多少払っても損じゃないだろうが！」

「ぐっ、まぁいいわ
その辺りは後で話し合いましょう」

幽香は思ったよりも駄目そうだ
館の主になったのも初めてだそうだし、できるだけ高く交渉しよう
この前レミリアに給金の事を聞いてから色々と教えてもらったしな。

働く内容によって給金が変わる事
ある程度の相場、時間毎で決める事など
幽香にも教えないといけないよな……多分。

「後、この館の掃除は俺だけじゃ無理だ
他にも誰か雇う、募集の紙を書くから色々とくれ
お前が書いても絶対に酷い内容になるに決まってる」

幽香の顔は不機嫌になりながらも、立ち上がってどこかに行く
幽香も馬鹿じゃない、俺だけでは無理な事ぐらい予想できてたんだろう
不機嫌になったのは俺の最後の言葉だろうか？

戻ってきた幽香の顔は諦めという感じだった
自分が書いた場合の事でも予想したのか？

「はい、これでいいわね？」

「あぁ、給金はどれぐらいまで出す？
待遇、仕事、時間、休日も書かないと駄目だし
ほら、俺も一緒に考えてやるからお前も考えろ」

「そ、そうね
でも私、何も知らないわよ？」

そうだった……こいつ、生粋のお嬢様系だ
幽真から聞いた事が有る
夢幻館に住む前も館に住んでたが、領主をと側近を殺したぐらいで
部下達は生き残ってた

そいつらを恐怖で配下に置いて住んでいたので勝手に動いてくれたとか
夢幻館で全て自分で行動したから苦労したとも言ってたな。

それと同じ状況を幽香もなっているのか
まぁ今回の夢幻館を奪ったのだって気紛れだろう
もしくはここの主人が幽香の気に入らない事でもしたか？

何にしても、俺が苦労するのは変わらないんだな
くそ、妙な時期に知り合ったのが失敗だったな
でも太陽の畑には行きたかったし……はぁ。

「とりあえず門番とメイドかな？
門番はできるだけ器用な奴がいいか、万能とは言わなくても器用貧乏でもいい
特に判断力に優れる奴が望ましいな
メイドなら家事能力に優れていないとならないが、そんな奴はそう居ないだろう
いっそ育てる事も視野に入れておくべきだな
頭が痛いな、レミリアにもっと色々と教えてもらっておけばよかった」

できれば事前に幽香がレミリアに通しておき、それから来たかったそれならば準備もできたし、レミリアやパチュリーから知識を借りられたのに。

一応労働者である美鈴や妖精メイド、門番隊からは色々と話しを聞いている
仕事に関してレミリアから教えてもらった後に訊き始めた
参考にならなかった意見も少なくはなかったが、それでも今回の件

では役に立つ。

考えていると、ふと幽香からの視線に気付いた
なんだよ、こっち見んな
そんな暇が有るならお前も考えてくれ。

「少し質問いいか？」

「何かしら？」

「住み込みの仕事か？
それともそういうのは無しにするか？
食事は出すか？　出すとすれば何食出す？
住み込みの場合は休日はどうする？
休日は基本無しで応相談？　決まった日に休みを与える？
労働時間は？　休憩は一日何時間？」

「え？　え？
えっと……どうしようかしら？」

「じゃあ住み込みかどうかだけ決めてくれ
後は食事だけでいい、残りは俺が考えておく」

「なら住み込みは有りで、食事は……一応出すわ」

住み込みは許可で食事は出しますっと
となると労働時間はかなり長くなるな
休憩時間は……本人と相談という形でいいか
休日は無しで構わないかな？
雇い主と応相談という形にしよう、多分休めない気がするけど。

それらを紙に書き込んでいく
内容はこんな感じだろう
書き終えたので幽香に渡す。
幽香は仕事内容を見て少し納得がいかなそうだ
何か気になる事でもあったか？

「何で敬語で書いてるのよ
命令系でいいじゃない、私がお願いだから来てって言ってる感じで嫌だわ」

「お前が労働力が欲しいって言ったんだろうが！
命令系で誰が態々ここに来ると思ってるんだ！？
こういう事ぐらい敬語じゃないと人は来ないだろ！
来てから命令するのは構わないが、来なかったら意味が無いぞ！」

今更気がついたかのような顔になる幽香
本気で気付いてなかったのか！？
まさかとは思うけど自分の命令なら誰でも言う事を聞くとでも思ってるのか！？

頭を痛めながらも同じ内容の紙を書き続ける
途中で幽香にも手伝わせた
俺だけじゃ手が回らないからな。

途中で幽香が内容を変えようとしたのでそれを止めたり
いい加減下半身が疲れてきたので縄を解いてもらったり
そんな感じで数時間、最終的に紙は百五十枚ほど書いた。

指が痛いし腕が疲れた
頭も痛くなっているので早く休みたい
それは幽香も同じようで片手で頭を抱えて逆の腕を揺らしてる。

座り続けたから腰も痛いし、はぁ
片付けは今日は無理だな、明日にしよう
というか夢幻館は世界の狭間に存在する
そのせいか時間が全くわからない。

今は夜だと思うけどどうなんだろうか？
体は眠いと言ってるし、多分夜だと思う。

「幽香、片付けは今日はしない
眠いから寝させてくれ」

「えぇ、私も疲れたし寝るわ
どの部屋を使ってもいいから適当に寝てちょうだい」

そう言って部屋から出て行く幽香
俺も部屋から出て適当な部屋に入る。

少し崩れているが問題無いだろう
そう思って布団に潜り込み、すぐに眠ってしまう。

そういえばナズナ……どうしてるだろう？

続く

紅魔館編　紅一話【行方不明者、夢幻戒魔】

視点　ナズナ

ご主人様が遊びに行かれてから半日になります
風見幽香の居る太陽の畑にご主人様が遊びに行ってからまだ帰ってきません
普段なら三時間から四時間ぐらい前には帰ってきているはずなんで

すが……

「戒魔……遅いわね」

「そうね、妖精メイドも戻ってきてないから我が儘に付き合わされてるのかしら？
でも戒魔だったら咎めて帰るはずよ
例え遅くなるとしても事前に私には言うように言っておいてるし
もし向こうで遅くなる事情ができても妖精メイドに伝えさせるようにも言ってるわ
それなのに無いとなると……何か問題でも起こったのかしら？」

レミリア様が原因を考えてるけど私の耳にはあまり入らない
それでも私を無視して姉妹の話は続く。

「問題って、例えば？」

「妖精メイドが行方不明になって探してる
妖怪に出会って逃げ回ってる
風見幽香が戒魔に何かをした
とりあえず思いつくのはこれぐらいね」

会話の中に聞こえた名前、風見幽香
あの妖怪がまたご主人様に何か失礼をしたんじゃ？
そう考えると段々と黒い感情が沸き上がってくる感じがします。

前の妖精の時のような感じ
ご主人様にはできるだけ押さえるように言われました
でも、ご主人様に関係する事なんで難しいですよ……

結局、ご主人様はその日の間に帰ってきませんでした
ご主人様に会えない初めての夜……寂しいです。

翌日、私は起きた早朝から美鈴様と一緒に門の前に立ってます
少しでも早くご主人様を見つけたい
その想いだけで待ち続けています。

美鈴様は心配そうな顔で私を見ていますが我慢できないんです
ご主人様……早く帰ってきてください。

お昼、まだご主人様は帰ってきません
動かない私を心配してくれた美鈴様がご飯を持ってきてくれました
あまり食欲は出ませんでしたが残すのも悪いので全部食べました。

ついでにリリーホワイトも来ましたが
ご主人様が不在と伝えると落ち込んでどこかに行きました
何をしに来たのかは謎です。

夕方、ご主人様はまだ帰ってきません
パチュリー様は私が動かないと思ってこちらで勉強を教えてくれました
あまり身に付いた気はしませんが、それでも頑張ったと思います。

夜、帰らないご主人様……
フランドール様も一緒に待ってくれてます
話し相手になってくれて少しだけ気分が楽になった気がしました。

深夜、そろそろ寝る時間ですがご主人様はまだ帰りません
レミリア様が寝るように言いに来ました
ご主人様を想って体調を崩したらご主人様が悲しむ

そう言われたので渋々ですが寝る事にしました……おやすみなさい。

翌朝の早朝、それでもご主人様は帰りません
そう思っていると妖精メイドが弱々しく飛んできました
美鈴様に伝えると飛んで助けに行きました。

妖精メイド達は疲れたのか、気を失ったそうです
この妖精メイド、ご主人様と一緒に行った妖精メイドだったはずです
何か知っているはずですが、疲れているので強引に起こす事は許さない
そう美鈴様に言われたので我慢しました。

妖精メイド達は一向に目を覚ましません
それでも待ちました、ご主人様の唯一の手掛かりだからです。

夜、ようやく妖精メイドが目を覚ましたので主要人物が全員集まりました
レミリア様、フランドール様、美鈴様、パチュリー様、主要人物ではありませんが私
疲れてて怠そうでしたが、妖精メイドの話しは実りがありませんでした。

そろそろ帰る時間だと思ってご主人様を探していた
突然巨大な光線が視界に広がったと思ったら気絶していたそうです
目を覚ました時には全員倒れており、ご主人様を丸一日掛けて探したそうですが見つからなかった
どうすればいいのか分からず、二人の妖精メイドはまだ太陽の畑に残ってご主人様を探し、自分は帰ってこの事を伝えに来た
要約すればそんな感じです。

一刻も早くご主人様を探したい
そう思っていましたがレミリア様が許してくれませんでした
ご主人様は高確率で風見幽香に連れられたと、そう思ったからだそうです。

また風見幽香……ご主人様に何をしたのかは知りません
でも、貴女だけは絶対に許しません！

少年期編　五十一話【新しいお屋敷】（後書き）

レミリアがフランドールを外に出したがった理由は？
戒魔の考えの通りです
要は社会見学のようなものです。

パチュリーの送った本って？
長生きの秘訣……ごめん阿求。

阿求って実は黒い？
最初ので色々と人里の人間に対して悪い印象しか抱かなかったのが原因です
純粋な子供に売り込みをすれば……ねぇ？

阿求が紅魔館に怯えすぎじゃない？
歴史的に紅魔館は凶悪な場所なので仕方無いかと。

結局阿求は紅魔館にどんな印象を？
悪い印象はかなり薄れました
まだ怖いとは思っていますが、悪い妖怪ばかりでは無いと思っています。

戒魔とフランドールはあの後どうしたの？
人里で買い物をしたり食べ歩きをしたりしました
なお、戒魔達は姿を見ていませんが慧音が警戒して見てました
戒魔達は気配で気付きましたが何一つ行動しませんでした。

真苗が凄く危ない人に……
ごめんなさい、調子に乗りました

でも後悔はしていません。

今後の真苗達はどうなるの？
次の裏三十一話をお楽しみに。

夢幻館ってこんな時期に手に入れたの？
知りません、作者の勝手な捏造です。

エルンとくらぼって？
旧作、東方幻想郷に登場したエリーとくるみの男性名です
残念ながら旧作までは考えていなかったのでかなり即席名となっています。

戒魔の知識が凄い事に！？
先日、戒魔があまりに常識が無いので大勉強会を開きました
教師役にレミリア、パチュリー、美鈴
生徒役に戒魔、ナズナ、フランドール
お疲れ様でした。

戒魔が真面目過ぎる！
そんなに真面目にしたら幽香が更に手放さなくなりそうなのに……
それに気付かない戒魔はやっぱり抜けてるんだと思われます。

ナズナ……
頑張れ！

このまま旧作っぽいルートに進むの？
はい、このまま夢幻館で暫く過ごす事になります
正直暴走しました……予定に無い事はするもんじゃありませんね。

少年期編　五十二話【人材確保】（前書き）

戒魔　人事部長になれる程度の権力
幽香　全て人に任せる程度の適当
〇〇〇　大鎌を投げる程度の投擲
〇〇〇　魔術使いにされる程度の攻撃
レミリア　当主程度の権力

今回はあまりにも短い……でも多分初めての本格的戦闘の回ですね
そして旧作の彼女達の登場です
旧作を知っている人なら分かりますよね？
でもこの二人が初の本格的戦闘って……誰か書いた事ありますかね？

チルノ戦やフランドール戦ですか？
チルノ戦はフルボッコにされ
フランドール戦は隠れて隙を窺って攻撃しただけですね
ですので本格的戦闘とは言えないと思います。

どうでもいいですが虚しい夢を観ました
寝ている間に感想が五件ぐらい来ているという……
実際は来ていないので自己嫌悪しか起こりませんでした
浅ましい自分に酷く自己嫌悪……反省します。

少年期編　五十二話【人材確保】

逆偽鏡の世界

少年期編　五十二話【人材確保】

視点　戒魔

で、人材の募集をして集まったのがこの二人と……
もの凄く怯えながら面接を受ける気か？
だったら最初から来なければいいだろうに。

「俺が面接官の夢幻戒魔だ
人間の子供だが気にしないように
雇うかどうかは幽香に一任されてるが、俺に何かしようと思わない事
一応、今現在この夢幻館で働いてるのは俺だけだ
数少ない労働力を奪ったという理由で幽香に殺されても文句は言えないので注意」

「「は、はい！」」

うーん……リリーホワイトといい、ナズナといい
この二人といい素直な子が多いなぁ
向こうだと性格が悪かったり捻くれてる奴が多かったから新鮮だ。

「さて、とりあえず名前と種族からな

で、特技と何がしたいのかも教えてくれ
先に逆刃鎌を持っている方から」

金髪の先を丸めて帽子を被っている女性
服装は朱色を中心とした感じの色になっている
持っているのは鎌だが、普通の鎌と違い刃が逆に付いている
なので俺はこれを逆刃鎌と呼んだ。

「名前はエリー、種族は妖怪
一応直接的戦闘は得意よ
できれば門番の仕事がしたい」

なんか凛々しい？
服装と名前、仕事に武器から考えるにこいつはエルンの女性版だろう
エルンからは想像が付かないぐらいの差だな
あのエルンの弱々しいというか……弱くはないが貧弱に見えるエルンからは想像できない。

「ふむ……戦闘力は後で確認するとして
仕事は門番を希望っと
次は羽の生えてる君」

エリーと同じく金髪だが、風に靡くほど真っ直ぐで長い髪に小さなリボンを結んでいる
白いシャツで首もとにもリボン
黒いスカートと、ここまでなら普通の少女だろう
しかし背中に生えた身の丈以上の巨大な紫の羽、誰も彼女を普通の少女には見る事は無い。

「私はくるみ、種族は吸血種よ

魔術的な事が多少できるぐらいだから得意とまでは……
仕事は私も門番がいい」

くらぼに似ているこっちはくるみだな、覚えたぞ
そういえば吸血鬼と吸血種って違うんだったな
吸血鬼は鬼に近い妖怪だが、吸血種は……言い方は悪いが蛭とかに近い妖怪だ
力の差は歴然、しかし吸血種は吸血鬼に比べて弱点が圧倒的に少ない
日の光はやはり苦手らしいが、吸血鬼に比べて多少行動できるので門番は可能といえば可能か。

しかし、どちらかと言われればやはりエリーが門番だな
門番はどうしても侵入者との距離が近くになってしまう
故に遠距離の魔術よりも接近戦の方が重要だ。

そういえばくらぼは湖の付近でここら一帯を守ってるって言ってたな
殆ど会ってないからあまり記憶に残ってないが、それでもくらぼは湖に居た
ならば湖の管理と、視察の仕事でもしてもらうか。

「とりあえず二人の仕事は決まったから一時採用
エリーとくるみで少し戦って
実力の確認しないといけないからな」

俺の言葉に二人は表に移動して構える
エリーは両手で鎌を持ち、肩に担いで投げるような体勢
くるみは両手を上げて手のひらに魔力を集めてる。

お互いに準備が終わったようだ
合図として俺が魔法を使う事にした。

「光」

辺りが一瞬だけ閃光に覆われる
俺は完全に慣れてるので平気だがこの二人は違う
お互いに目を閉じるが、先手を取ったのはくるみだった。

くるみの放つ光線はエリーを貫こうとする
しかしエリーもすぐに反応、光線を横に避ける
そのままくるみに向かって鎌を投げつける。

投げた鎌は刃を当てるよう、普通の鎌を投げる時と逆に投げられる
無理のある投手方だが、それでもくるみに向かっているのでそれだけの実力が有るという事だ。

くるみは次にしようとしていた魔術の発動を止めて回避する
代わりに威力は低いが連射性の高い魔術を連弾
エリーも躱しながらも弾幕を放って応戦する。

このまま暫く続くと思ったがそうもいかないらしい
エリーの投げた鎌が戻ってきたのだ
鎌の戻ってくる風切り音にくるみが気付き、なんとか避ける。

しかし躱しきれずにスカートの端が斬れる
どうやらかなり鋭く研がれている鎌のようだ
刃物としての威力は古町の鎌より上だろう。

自分のスカートを斬られて平気でいられる程くるみも甘くなかった
片手で弱いが魔術を連弾し、逆の手で威力と範囲の大きい魔術の準備をしている。

同時に違う事……パチュリーの言っていた分割思考だろうか？
魔法使いには割と必須技能と言っていたので覚えようと思ったが
強烈な頭痛に見舞われて身に付けるのを断念したんだったな
人間にはほぼ不可能だが人外ならかなり努力すれば覚えられると教えられた。

どうやらくるみはその分割思考が使えるらしい
なかなか良い拾い物をしたな、幽香。

必至に避けるエリー
遠距離は基本的に苦手らしいな
鎌と弾幕で中距離まで戦える門番っと、悪くないな
これなら十分に門を任せられるだろう。

エリーの動きがほんの数秒止まる
その隙をくるみは見逃さず、強力な魔術を放った。

だがその隙はエリーが自分から作り出した物
くるみの魔法を影にし、自分を隠して鎌を大きく弧を描くように投げる
だがくるみはエリーの行動に気付いてない。

エリーは魔術が当たる直前になんとか回避に成功
くるみは悔しそうな顔をするが何かに気付いた
エリーが持っている鎌が見当たらないのだ。

くるみは急いでその場から緊急避難
その直後、鎌がくるみの居た場所を通った
だが回避に失敗し、腕に浅くない傷ができる。

悔しそうにエリーを睨むくるみ
エリーは戻ってきた鎌を掴んで得意気な顔になる。

さて、ここで止めるかな
これ以上されて大怪我したり死んだりしたら俺が困る
主に労働力が減るという意味で。

「はい、そこまで
これ以上怪我を負われると困る
お互いの実力もそれなりにわかったから下りてこい！」

地上から勝った気分になっているエリーと空中から渋々と下りてくるくるみ
両方強かった、でも昔の俺でも勝てたぐらいだし幻想郷全体で考えると精々中堅ぐらいだろう
人間形態の堺音やパルキィぐらいの実力かな？

少し物足りない印象は拭えないが十分
幽香が圧倒的に強いし、まぁ大丈夫だろ。

「とりあえずどっちも門番で採用
だけどその前にしてもらいたい事が有る」

「「何？」」

「が、そのまた前にくるみの傷を治さないとな」

俺でも簡易治療魔法は使える
相手は吸血種なので回復速度は速い

しかし何もしないよりはいいだろう。

くるみは何も言わずにおとなしく待つ
だがその獲物を狙うような顔をするのは止めてくれ。

女性吸血種は人間の子供、主に男の血を好んでるのは知ってる
けど俺はレミリアどころかレミレアにも血は飲ませてないんだぞ？
なのにお前に飲ませたらレミレア達も飲みたいとか言い出すから絶
対に駄目だ。

傷は少し残ったが吸血種だし消えるだろう
くるみから離れて夢幻館に戻ろう。

俺は二人に少し待つように言っておき
夢幻館に戻る。

俺が夢幻館から持って来た物
それは……

「「……雑巾？」」

「そう、最初の仕事はこの夢幻館にこびり付いてる血の掃除
俺は飛べないから床とかをする
だからお前らは飛んで血の付いてる所を拭いてくれ」

唖然としている二人の顔
何故自分達がこんな仕事をって顔が言っている。

「幽香がここの住人を皆殺しにして奪ったからな
とりあえず幽香はこの血生臭い屋敷を綺麗にしろと言っている

最初の命令は掃除、文句を言わずにさっさとする」

「で、でも私達の仕事は門番でメイドじゃないわよ！」

「血生臭い場所で寝泊まりをしたいと？」

「それは……」

「私は吸血種だからあまり気にならないけど？」

そうだった、くるみは吸血種だから別に血に嫌悪感を感じないんだったな

臭いだって嫌いじゃないだろうし。

「残念だが幽香の命令だ

逃げ出したら幽香の巨大光線に貫かれると思った方がいい

俺の知る限り、あれに貫かれたら吸血鬼でも危ないはずだ」

「「吸血鬼でも！？」」

幽亜が酔ってレミレアにな……

右半身が吹っ飛んだからなぁ

あの時は大騒ぎになったものだ。

体の再生に自分の思った以上の時間を掛けたらしい

怒りに狂ったレミレアが太陽の畑を燃やそうとしたから止めるのが大変だった

さすがにそれは許容できなかった幽亜が極上のワインをレミレアに送って許してもらった。

こっちの幽香でもそれぐらいはできるだろ
できなければ幽香と幽亜は別人だとしか思えん。

「まぁ……そんなのに貫かれたいのならどうぞ？
俺は助けないけど、頑張って逃げ切りなよ？
幽香は絶対に許さないだろうけど」

嘘だけどな
だって幽香はまだ二人の顔も知らないんだし
どうやって追いかけるってんだよ？

だがそれに気付かずに信じたらしい
血の気が引いた真っ青な顔になっていた
悪いな、人手は逃がしたくないんだ。

必死になって掃除をするエリーとくるみ
涙を浮かべてるのは気のせいじゃないだろう
怨むなら自分の不運を怨んでくれ、俺は早く紅魔館に帰る為に頑張るだけだ。

……気のせいか？
頑張れば頑張るほど幽香は俺を逃がさない気がする
まぁ幽香ほどの妖怪が嘘は言わないだろう。

早く帰りたいし、頑張って掃除するか！

続く

紅魔館編　紅二話【半月の紅（スカーレット）】
表との時間差……十五日

視点　レミリア

「お嬢様、戒魔少年はまだ見つからないそうです」

「そう、門番隊をどれぐらい探しに行かせてるの？」

「八割ほどです
休憩も混ぜてますけど、それでも疲れは溜まります
半月近く毎日のように動き回ってますからね」

そうなのよね……戒魔が行方不明になって半月になる
ナズナは毎日門で戒魔を待ち続けてる
私が探し回る事を禁じていなければあの子まで行方不明になってたかもしれないわ。

美鈴はそんなナズナの監視
下手に目を離せば勝手にどこかに行きそうな雰囲気を感じるらしい
ナズナは美鈴が見張っているから私の言う事を聞いているだけ
もし美鈴が居なければ私の命令なんて無視しているわ。

パチェはあまり変わってない
けど一日から三日に一度は戒魔の事を確認しに来る
殆ど動かないパチェが動くのだもの、どうやらかなり気になっているみたいね。

フランはかなり酷い
あの子は戒魔の話しを毎晩のように楽しく聞いていた
だから戒魔に依存していた部分もある。

最初こそおとなしかった
だけど五日ほどした時にはナズナが寝てから戒魔を探しに出かけるようになった
十日、ナズナが寝てなくても探しに行くようになった
そして今、フランは日が落ちると同時に飛び出し、朝日が昇るまで飛び回っている。

フランは私の命令を聞かない
ナズナと違って飛べるのが大きいだろう
飛べなければ私の命令を聞いたかもしれないが……

真夜中に吸血鬼が飛び回る
そんな新聞がいつ来るのかと思ってるぐらいよ
大丈夫かしら？

戒魔と一緒に太陽の畑に行った妖精メイド三人
あの子達はフラン以上に飛び回っている
何時間眠っているのかわからない
また倒れるかもしれないわね。

何度かパチェが強引に魔法で眠らしてるけど
それでも全く懲りないのよね
よっぽど責任を感じてるのかしら？

さて、肝心の私だけど
私は妖精メイドを動かしてるわ
勿論、倒れない程度にね。

妖精メイドは数が多いわ
人海戦術で幻想郷中を探させてる
ただし、博霊神社にだけは絶対に行かないように言ってある
それはフランも同じ。

幸い、今の所は全員守ってくれている
最初にそれを破りそうなのはフラン
だからとにかく何度も何度も言い聞かせてる。

はぁ……みんな心配してるわよ
だから早く帰ってきなさい、戒魔。

少年期編　五十二話【人材確保】（後書き）

戒魔が面接官？
幽香は面倒になって逃げ出しました。

エリーとくるみは何故来たの？
野良妖怪だったという事にさせてください。

オレンジは？
まだ来てません、というか夢幻館に関係してるんですかね？
野良妖怪なだけな気もしますが。

くるみって吸血鬼じゃなかったの？
そういう噂が流れていますが吸血鬼にはしませんでした
この作品ではくるみは吸血種とさせていただきます。

くるみの攻撃って魔術なの？
不明、まぁ吸血種だから使えるんじゃないかなー……程度の考えです。

分割思考？
某格ゲーに登場する錬金術師みたいな感じですね、あそこまで数多くできませんが
魔術、魔法の同時使用は基本的にできないと思ってます
ですので同時に思考できる分割思考を少々使わせてもらいました
使用者はアリス、パチュリー、くるみは確定しているつもりです
魅魔やエレン、理香子も使えそうですが……後は神綺ぐらいでしょうか？
魔理沙？　人間ですし無理でしょう。

レミリアが戒魔の為に動きすぎじゃない？
情が移ったんでしょう
どうも丸くなっているようですし。

フランドールが頑張りすぎじゃない？
姉妹の仲のよりを戻す切欠となった存在ですし
更に貴重な数少ない話し相手です
仲も良く、心配だったのでしょう。

妖精メイド達は大丈夫？
妖精は眠らなくても大丈夫ですが疲労は溜まるでしょう
それを少しでも回復させる為の睡眠です
怠っているといくら妖精でも力が落ちるでしょう
ところで妖精って病気になるんですかね？

少年期編　五十三話【紅魔館へ……】（前書き）

戒魔　誰が相手でも変えない程度の態度
幽香　三日間寝続けた程度の睡眠
くるみ　絞められても改善しない程度の態度
エリー　新人程度の門番
ナズナ　呪う程度の憎悪
フランドール　原作を破壊する程度の暴走

書いてて凄く楽しかった回です、特に紅編
上記の通り、原作を破壊してしまう程の大暴走をしました。

白髪の人間、秋の神、河童、白狼天狗、烏天狗、人形さん、死神、
騒霊、庭師
これらのキャラが好きな人は注意
特に白髪の人間と烏天狗、死神と庭師は悲惨な事になります
一番悲惨なのは烏天狗、可哀想なのは庭師です
そんな目に会うシーンを見たくない人は帰る事をお勧めします。

いいんですね？
いいのならどうぞ。

少年期編　五十三話【紅魔館へ……】

視点　幽香

戒魔って良い拾い物をしたわ
だけど良すぎるのも困りものかしらね？

「起きろ幽香！　洗濯物が片付けられん！
着替えろ！　せめて着替えろ！
そして寝るのはいいが別の場所で寝てくれ！」

「むぅ……後十日」

「寝間着が臭くなるわ！
それにお前、三日前も同じ事を言ってたよな！？
更に今まで本当に三日も寝てたんだからいい加減にしろ！
ほら、早く着替えないと強引に脱がすぞ！」

口煩い……真面目に働いてくれるのは嬉しいし助かるんだけど
この口煩さだけはどうにかならないかしら？

黙らそうにも、前一度黙らせようと軽く突いたら重傷になっちゃったのよね
くるみが回復魔術を使ったから一命は取り留めたけど……人間という事を再確認したわ
子供という点からも考えても、私の想像以上に脆かった。

その内紅魔館に返さないと駄目だし、殺したら怒るわよね？

怒って襲われる程度なら気にしないんだけど、私が居ない間に太陽の畑に火を放たれたら危ないものね
戒魔にそう脅されたけど、あの時の金髪の吸血鬼が飛び回ってるのは風の噂で知っている
本当に火を放たれる可能性も否定できないので殺せない。

別に殺してもどこかに逃がして行方不明とでも言っても良いんだけどね……
嘘はあまり好きじゃないし、自分の方が強いのに下手に出るもの気に入らない
つまり何もしないで現状維持が私の気が収まる状態なわけ。

でもそろそろ紅魔館に何か言った方がいいかしら？
本当に火を放たれても困るもの、少しでも危ない芽は潰しておくべきね。

戒魔を追い出し、着替えを渡して水浴び、そして朝食を食べる
相変わらず味はそこそこ、悪くないけどもっと工夫するべきよ。

食べ終わったし、着替えもした
と、いう訳で……

「戒魔、少し出かけてくるから留守番お願いね
家事、よろしくねー」

「どこに行くか教えてから行け！
普段から勝手に気付かない内に出かけるんだから今言った時ぐらい教えろ！
場所は？　帰る時間は？
それに依って食事の準備とかあるんだから言え！」

「……相変わらず苛々してるわね
出かける先は教えないわよ？
そう掛からずに帰るつもりだけど、多少遅くなるかもしれないわ
食事は適当に済ませてくるから不要よ」

「はぁ……わかった、気をつけて行けよ
もっとも、幽香に突っかかるような妖怪なんて滅多に居ないだろうがな」

苛々してても気遣ってくれるのって凄いわよね
私を馬鹿にしてるのか、それとも純粋に心配しているのか
多分後者なんだけど……なんだかやりにくいわ。

苛々している理由だって私が嫌いとかじゃなくて帰れないからしかもどう見ても空元気ならぬ空怒り、全く怒っているようには見えない
強引に連れてきた私に怒りを向けたり怨んだりしてもおかしくない。

それでも何故か戒魔は私にそんな感情を向けない
私に向けるのは普段通りの感情、苛々だって殆ど見せかけだけ。

戒魔は誰もを公平に見ている
私とエリー、くるみに向ける態度が全く同じ
変な人間なのよね。

夢幻館の中を歩いているとくるみに会った
戒魔が雇うと採用した妖怪、実力はそこまで高くないが便利だとの事
雑用から戦闘までこなせるので基本は館内で動かしている。

実力は高くないと聞いたが試しに戦ってみた結果は言わずもがな
雑魚妖怪程度なら余裕で勝てるだろうが多少名が有る妖怪には勝てないでしょうね
でも私の拳に三発耐えた事は評価できるわ。

「あ、幽香さん、おはようございますー
着替えてますから……戒魔君に脱がされたんですねー？」

「……もっと違う言い回しはできないの？
正確には戒魔に着替えろって言われたのよ
洗濯物を洗えないってね」

「戒魔君は幽香さんにも恐れず何でも言いますからねー
でも女性に向かって着替えろって言えるのは子供だからですかね？」

「そういう貴女こそ、館の主に対して敬意が足りないんじゃない？
口の利き方、成ってないんじゃないの？」

この子、馬鹿じゃないんだけど口が軽いのよね
私にもこの軽い口調を貫いてる。

一度絞めたけど直らなかった、苛々したから三割殺しにしたわ
それでも止めないからちょっと殺そうかと思ったけど戒魔に止められた
どうしても我慢できないのなら個性として見てやれだって。

戒魔の言う通りに個性として我慢して聞いてたら慣れたわ
くるみ自身も直そうと多少努力したみたいで少しは敬語を覚えた
教えたのはエリーらしいわ。

「これでも頑張ってるんですよー？
エリーちゃんが教えてくれてますからー」

せめてこの間延びした口調はどうにかならないかしら？
機嫌が悪い時は思わず殴ってしまいそうよ
……実際、機嫌が悪い時に殴ったけど。

「はぁ……少し出かけるわ
帰りは少し遅くなるから適当に過ごしてなさい」

「はーい」

無邪気とでも評価しておきましょうかね
性格は悪くないんだし、できるだけ気にしないようにしましょう。

門まで出るとエリーが立っていた
門番として戒魔が正式に採用したらしいわ
実力は中の中程度、弱くは無いが強いとも言えないらしいわ。

くるみと同じく試しに戦ったけど確かに強くなかった
でもくるみ以上に戦えただけ評価はできるわね
逆刃鎌は珍しいから少し当たりそうになったぐらいよ
ま、五発殴ったら気絶したからくるみより耐久力は上ね。

「おはようエリー」

「おはようございます幽香さん
今日は起きるのが早いですね」

最初は凄く怯えていたエリーだけど一ヶ月も経てばさすがに慣れた

みたい
戒魔が最初に脅したのが原因らしいけど、会ってみれば割と怖く無かったとか
でも、前述したように戦って完敗すると敬意を向けるようになった
畏怖と実力からの感情でしょうね。

「戒魔に起こされたのよ
少し出かけてくるわ、遅くなるかもしれないけど頑張りなさい」

「はい！」

真面目なんだけどどこか抜けてる気がするのよね
それに性格も作ってるって印象が有るし……大丈夫かしら？

エリーはくるみに比べて対人関係に優れている
それに割と頭も回り、実力もそこそこ、臨機応変ができるから門番として良い人材らしいわ
紅魔館の門番とは年期が違うから全てに劣るが、成長すれば門番としてそれなりになるとか
問題は成長するまで数十年掛かるかもしれないって所だとか何とか。

私の方が強いんだし、門は突破されてもあまり問題にならないわ
成長するぐらいの時間程度は気長に待ちましょう
あまり成長しそうに無ければ私自身が鍛えてあげてもいいしね。

門から離れて少し進む、この辺りに時空の歪みが存在している
ここを通る事でこの夢幻館に辿り着けるわ
他にも数カ所歪みは存在しているが、夢幻館に最も近いのはこの場所ね。

時々迷い込んでくる妖怪とかも居るのよね
まぁそれがエリーとくるみなんだけど
どうせ外に出るんだし、妖精とかでも引きずり込もうかしら？

歪みの場所に目印なんて置いてないし、入ったら私が教えない限り
誰も出られない
運が良ければ出られるかもしれないけど、その可能性は非常に低い
エリーは十数年、くるみも数十年抜けられなかったとか。

夢幻館の前当主は好き勝手に妖怪を攫っていたみたい
外から歪みは見えないけどあまり大きくない
不運で入ってくる妖怪はそう多くないわ。

エリーとくるみが前当主の元に行かなかったのは気に入らなかったから
エリーは態度と行動が、くるみは性格と見た目がだとか……
そういえば大半を一瞬で殺したから前当主の顔なんて覚えてないわ。

時空の歪みに入り、太陽の畑付近の小さな丘に出る
この丘の先から少し離れた場所に歪みは存在している
そんな場所には滅多に通る者は居ないので迷い込む者が少ないのよ。

私が見つけた切欠はかなり偶然
なんとなく飛んでいた時だったしね。

それから暫くはこの歪みを調べたわ
色々と知ってるのはその為、夢幻館を攻める数ヶ月前の話ね。

夢幻館は閉鎖的空間の建物だから誰も気付かないし
紫だって幻想郷の妖怪が少し攫われる程度で大した問題が無いから

無視していた
攫っていた妖怪が雑魚妖怪だったり超下級妖怪だったのが理由ね
もし中級妖怪だったら動いていたかもしれないわ。

とにかく、閉鎖的だったからこそ私は奪おうと思った
だって誰にも迷惑を掛けないし、自分の城も欲しいと思ってたしね
紫だって出張る事も無いし、無遠慮に破壊し尽くしたわ
建物じゃなくて主に肉体をだけど……ね？

さて、紅魔館に向かおうかしらね
どうやって戒魔を完全に引き抜こうかしら？
便利だからできるだけ居て欲しいわ。

私は紅魔館に向かって飛び立った
しかし、その時に私を見つめていた視線に、私は気付かなかった
普段ならともかく、今の私は考え事をしていたのが原因でしょうね
それが後でかなりの面倒になるなんて……はぁ。

それはそうと、紅魔館付近の湖まで来たわ
確か名前は……霧の湖だったかしら？
滅多に来ない場所だから曖昧ね。

湖の一部を凍らせてその上で遊んでいる妖精
あの妖精、妖精にしては珍しくかなり力を持ってるわね
中級妖怪に匹敵するんじゃないかしら？
一緒に遊んでる妖精は下級妖怪と同程度、それでもかなり強いわね。

来たわ……紅魔館
戒魔の言っていた実力の高い門番はあの紅い髪で緑の服の妖怪かしら？

ふーん……かなり力を押さえてるわね
本当の実力はなかなかの物と見た、エリーが勝てないのは当然ね
体付きは服の上からだと微妙だけど悪く無い、武術でもしているか？
身軽そうだし顔付きも良い、軽く喧嘩でも売って戦ってみようかしら？

隣で立っているのは初めて戒魔が来た時に一緒に居た悪魔ね
酷い顔、睡眠時間が短いのかしら？
あまり髪とかも手入れしてないみたいだし、どうしたのかしらね？

……思い出した、戒魔が使い魔で悪魔を持っているって言ってたわね
それがアレね、どう見ても相応しいとは思えないわ
間抜けそうだし、実力も低い、主に相応しい姿もしていない無様な子
哀れね、さっさと契約解除した方が良いと思うわよ？

妖怪が私に気付いた
実力が高そうな私を疑わしそうに見ている
どうやらかなり警戒しているみたいね
何故、私のような大物そうな妖怪が紅魔館に来たのか気になるのかしら？

更に近づくと悪魔も私に気付く
私を見る感情は憎悪、戒魔の不在が余程嫌なのかしらね
でも、貴女程度の実力で私に挑むつもりなのかしら？

私に飛びかかろうとした悪魔を直前で妖怪が捕まえて取り押さえる
暴れ藻掻く、足掻くが妖怪の実力には敵わない
まだ離れてるから声は聞こえないけど私に呪いの言葉でも吐いてるんじゃないかしら？

そんな事を考えていると突然体から力が抜けた
何事かと思ってすぐに気を張ると簡単に胡散する
今のは……呪い？　呪術かしら？

悪魔を見てみると憎しげに私を見ている
その顔には悔しそうな感情も見え隠れしていた
どうやらあの悪魔が私に本当に呪いの言葉を吐いていたらしい。

が、所詮素人の浅知恵というのだろう
効果は私には及ばない、残念だけど怒りを買っただけよ？

一瞬で悪魔に近づき腹を蹴飛ばして吹き飛ばす
妖怪は上から肩とかを押さえていただけなので突然の高威力の蹴りには対応できなかった
悪魔は塀に叩きつけられて気絶、だらしないわね。

「……ナズナちゃんが突然呪うなんて、貴女はどちら様でしょうか？」

ナズナ？
……あぁ、薺ね
良い名前じゃない、それならあの態度にも納得だわ。

薺の花言葉はすべてをあなたに捧げます
全てを捧げる相手を奪ったのなら怒り狂うのも当然ね
誰が名付けたのかしら？　褒めてあげたいわ。

「私は風見幽香、以前紅魔館の主が私との会話を希望していたのを思い出したのよ

話したい事もあるし、通してくれるかしら？」

私の名前を聞いて睨む妖怪
ふふふ、聞き覚えのある名前でしょう？

「……少々お待ちください
今からお嬢様に確認を取りますので」

あら意外ね、怒りは感じるけど襲いかかってこないなんて
訓練されてるのね、門番として優秀な証拠よ。

妖怪は妖精に事情を話して館内に向かわせる
妖怪はそのまま悪魔の元へ行き、治療をし始める。

へぇ、気の使い手なんだ
魔力の使用者が多い幻想郷では珍しいわ
それなら武術を使う気がしたのも気のせいじゃないわね。

多少手加減したし、悪魔も死にはしないでしょ
精々肋骨が数本折れたぐらいよ、安心しなさい。

治療後、妖怪は妖精に頼んで悪魔を館内に連れて行かせた
私を睨む視線が強くなったわね、骨を折ったのが駄目だったのかしら？
私としては殺されなかっただけ良いと思ってほしいわ。

それでも妖怪は動かない
一応、私が客だと理解しているから動けない
門番の鏡だわ、エリーを一度紅魔館に派遣しようかしら？
門番の仕事も習えるし、色々と覚えられる、考えておきましょう。

暫く妖怪は私を睨んでいたが、妖精が帰ってきた
妖怪に話し掛けて元居た場所に戻る。

「お嬢様がお会いになるそうです
私に着いてきてください」

妖怪が私に背を向けて歩き出す
でも、僅かでも私に油断を向けていない
背は見せても油断は見せないか……本当に実力者ね。

私は妖怪の後ろに着いていく
さすがにここで手を出すほど馬鹿じゃない
素直に着いていくわ。

さてさて、紅魔館の主、レミリア・スカーレット
少し……お話しましょうか？

続く

紅魔館編　紅三話【破壊の化身】

視点　フランドール

戒魔が行方不明になって一ヶ月が過ぎた
私はもう中半諦めの気持ちで飛び回っている。

ある日、霧の湖を探した
さすがに水中は無理だったので何十匹の妖精に頼んだ
当然だけど戒魔は居なかった。

ある日、魔法の森を探した
私には茸の幻覚作用は効果が無いし毒も体に影響が出ないので比較的楽に散策ができた
でも人間にこの場所は非常に害悪、戒魔が住んだら死ぬわね
一部の森林を破壊してまで探したけど戒魔は居なかった。

ある日、迷いの竹林を探した
本当に迷ったので一部の竹を吹き飛ばして探した
途中で何か言ってきた白髪の人間が居たけど、殺さない程度に腕を吹き飛ばしておいた
これで片腕が使えなくなるだろうけど問題無いわ
それなりの範囲を破壊して回ったけど戒魔は居なかった。

ある日、妖怪の山を探した
秋の神が彷徨いていたけど邪魔だったから殴り飛ばしておいた、神は信仰さえあれば死なないしどうでもいい
河童が邪魔してきたから水中に叩きつけてやった、暫くは動けないと思う
白狼天狗が襲ってきた、滝壺に突き落としてやった、溺れ死んだかも？
烏天狗も襲ってきた、羽を毟り取って引き千切ってやったら悲鳴を上げて逃げ出した
これ以上暴れたら天魔が動きそうなので止めておく、あの大妖怪に喧嘩を売っても引き分けるのが精一杯だろう
色々と潰したけどやっぱり戒魔は居なかった。

ある日、無名の丘を探した
鈴蘭の毒は弱いけど鬱陶しかったから大半を燃しておいた
人形が落ちてた……戒魔の話しに人形の妖怪が居たっけ？
それを思い出したのでなんとなく持って帰ろうと思う
殆ど燃えたけど戒魔は居なかった。

ある日、無縁塚を探した
原始的な恐怖というのを味わった気がする
桜を見ているとなんとなく悲しい気持ちになった

それが気に入らなかったから半分ぐらい燃やし尽くしておいた
死神が襲ってきたけど鬱陶しかったから骨を数本折ってやった
これ以上痛めつけたら閻魔まで動くかもしれないので適当に捨てておいた
相変わらず戒魔は居なかった。

ある日、冥界を探した
戒魔の話しでは生きていても冥界には行けるらしいので向かった
結界が張ってあったけど破壊してやった
騒霊が話しかけてきたけど邪魔だったから持っていた楽器の一部を破壊したら逃げられた
剣士が襲ってきた、長い剣を折ってやったら泣いて逃げ出した
冥界の主の能力は死を操るらしいので会わない、さすがに死ぬつもりは無い
幽霊もある程度消し飛ばしたけど戒魔は居なかった。

ある日、人里も探した
前に戒魔と来た時はおとなしくしていたので割と普通の対応をされた
ここで騒ぎを起こすのはお姉様にも迷惑を掛けるので止めておいた
阿求に事情を話しておいたので人里に戒魔が現れたら紅魔館に使いを出してくれるらしい
とりあえず阿求の話しでは人里に戒魔は居ないらしい。

ある日、博霊神社……遠目で探しておいた
お姉様に止められてなかったら吹き飛ばしてでも探していたのに
遠目なので数日掛けて見張っていたが戒魔は居なかった。

最後、太陽の畑を探した
戒魔が好きな場所……破壊したら悲しむだろうから止めておく
風見幽香が現れないか探したけど居ない

妖精メイドもここを何度も探しているらしいが全く現れないらしい
数日間、殆ど寝ずに見張っておいた、日傘を差し続けるのは疲れるわ
そして今日、風見幽香が現れ、どこかに飛んでいった
時空の歪み……『目』の場所、覚えたわよ？

少年期編　五十三話【紅魔館へ……】（後書き）

幽香って三日も寝てたの？
暇なんでしょう。

戒魔……よく幽香の一撃に耐えられたね
鍛えてましたから、かなり加減されていたのも理由の一つです。

普段は何も言わずに行くの？
神出鬼没という事で。

戒魔って怒ってないの？
さすがに一ヶ月も居れば怒りも失せます
見せかけでも怒っておかないと帰りたいという気持ちを表現できませんので。

くるみってこんなキャラだっけ？
少し天然系のキャラになってしまいました
公式設定がほぼ無いに等しいので困りました。

エリーって真面目系？
同じく公式設定はほぼ無いので性格が変わってます、わからないんです
真面目ですが表面上のみ、内心はかなりとろいイメージです
幽香の言う抜けているというのは正解という事で。

時空の歪み？
夢幻館は狭間の世界にあるとかなんとか
狭間って何よ？　よくわからん、ならもうこれでよくね？

という感じで時空の歪みへ、どなたか公式設定知りませんか？
どうやって夢幻館に行くんでしょう？
例え知ってもこれを変えるのは今後色々と不便になるので変えられませんが。

ナズナも懲りないね？
チルノの時と比べると危険度が違いますから
怒りの感情をどうしても抑えられなかったんです。

なんか美鈴が凄く高評価されてるんだけど……
作者の中では美鈴は本当に強いんだと思っています
お気に入りとか、そういう問題ではなく、武術と気の存在が理由ですね
技術では幻想郷の最上位に君臨すると思います
基本的に直接的戦闘はそう無さそうな場所なので直接的戦闘ではかなりの実力でしょう。

フランドールが暴れすぎだろ！？
書いてて楽しくなって止まりませんでした
今後も自重しないと思います
……こういう破壊的な事やサディスト的な事を書いてると勝手に指が動きます
作者がサディストだからでしょうか？
フランドールの暴走も真苗の暴走も楽しくて止まりませんでした。

白髪の人間とは？
藤原妹紅です、腕は数日後に完治しました。

秋の神とは？
秋穣子です、気絶しただけで済みました

姉の静葉は無傷で穣子の看病をしています。

河童とは？
河城にとりです、気絶だけで済みました。

白狼天狗とは？
犬走椛です、死んではいませんのでご安心を。

烏天狗とは？
射命丸文です
片翼がもがれた事により、飛行速度が落ちました
幻想郷最速の名を名乗れないどころか、鈍足烏の名を得ました
今後、文は悲惨な人生を送る事でしょう。

人形とは？
メディスン・メランコリーの本体です
作者は本体が小さな人形であり、彼女の言うスーさんというのは鈴蘭だと思っています
ですので小さな人形の事を呼ぶ事自体ありません
だって本体ですから。

死神とは？
小野塚小町です
全治数ヶ月の大怪我を負いました
ただでさえサボっていて仕事が多いのに映姫様は更に増えたので怒り心頭です
……ごめんなさい映姫様。

騒霊とは？
プリズムリバー三姉妹の事です

作者の考えでは楽器は普通の楽器ではなく、体の一部のような物だと思っています
例えるのなら本体に影響の出ない妖夢の半霊のような感じでしょうか？
ですので暫く経てば楽器は元に戻りました。

庭師とは？
魂魄妖夢の事です
折られたのは妖怪が鍛えたと伝えられる楼観剣です
これにより、妖夢の実力がかなり落ちました
白楼剣が折られなかったのは弾き飛ばされて落としたからです
楼観剣は最後まで持っていたので折られました。

この後、フランドールはどうしたの？
まだ秘密です。

こんなに原作崩壊を起こして大丈夫？　特に文と妖夢
反省はしていますが後悔はしていません
どうにかして修正します
……本当にできるのかな？

少年期編　五十四話【貸し出し許可】（前書き）

幽香　自然を守る程度の慈愛
レミリア　周りに知られない程度の暗躍
パチュリー　自分で思っている以上程度の信用
美鈴　常にする程度の警戒

……話す事が無い！？　あえて言うなら今回は短い程度でしょうかという訳で五十四話をどうぞ。

少年期編　五十四話【貸し出し許可】

視点　幽香

赤髪の妖怪に案内されて紅魔館の中へ
どうも最近あまり掃除されていないように見える
所々汚れが目立つし、布の皺が確認できる。

自分で攫っておいて白々しい言い回しだが、戒魔の不在は紅魔館では思った以上に打撃を受けたみたいね
妖精の数も少ないから探させているのかしら？
擦れ違う妖精達の動きが慌ただしい、夢幻館を見つけるのはやっぱり難しいみたいね。

大きめの扉の前に着く、どうやらこの先に吸血鬼が居るらしいだが中の気配は二つ、しかもどちらも実力者だと思われる。

それにしても今はまだお昼過ぎたぐらいの時間なのよ？
よく起きていたわね吸血鬼、何か用事でも有ったのかしら？

妖怪が扉を叩く、少し待ち、返事が聞こえた。

「入りなさい」

随分機嫌が悪そうね
ふふ、少し怖いわ。

妖怪が扉を開け、私を中へ促す

中に居たのは青髪の少女と紫髪の少女、そして私の後ろの赤髪の妖怪
凄い警戒心ね、私が相手なら当然かしら？

「初めまして、風見幽香
紅魔館の者が貴女に粗相をしたみたいね、先ずはその事を謝罪させ
てもらうわ」

私に粗相？
あぁ、あの悪魔の子ね、忘れてたわ。

「気にしないでいいわよ、レミリア・スカーレット
それより、二ヶ月ほど前、私に話しが有ると思い出したから参上し
たわ」

全員の顔が不機嫌に染まる
私の目的がそれじゃない事は明らかだと思っているんでしょう
大当たりよ。

「横から失礼するわ、私はパチュリー・ノーレッジ、魔法使いよ
レミリアの前に私から質問させて頂いてもよろしいかしら？」

「えぇ、構わないわ」

吸血鬼が話し出す前に魔法使いが動いたか
可能性としては最も冷静に事を運べるから……かしら？

妖怪は猪突猛進で感情で動くような妖怪でしょうね
冷静に事を運べるとは思えるけど、甘そうな性格をしていそう
自分で動くよりも他が動けば動かないでしょう。

吸血鬼は感情面での我が強そうだから動き出したら止まらないように思える
他が動かなければそれなりにおとなしくしていられる……でしょうね
馬鹿では無いでしょうし、話している間ぐらいは待つでしょう。

「単刀直入に言うわ、戒魔を返しなさい
彼は紅魔館で預かっているの、勝手な真似をするのは許せないわ」

あらら、これは少し予想外
魔法使いという名から遠回しに外枠を埋めてから大きく動くと思ったのに
最初から大振りで攻めてくるとは思わなかったわ。

「なんの話しかしら？」

「惚けないで、戒魔が行方不明になった日
貴女と話す事、向日葵を見る事を目的として太陽の畑に向かったわ
妖精メイドを三人も連れてね
妖精メイド達を置いて戒魔がどこかに勝手に行くわけが無い
あの真面目な戒魔が私達に何も言わずに居なくなるはずが無い
仲の良い人達を、戒魔が自分から悲しませるような事はしない」

……惚気かしら？
そう思えるぐらい信用してない？

「さぁ、白状してくれないかしら？
私達もそこまで気が長くないの、黙秘は認めないわ」

「私と戦うつもり？
ふふふ、あははは……戦うのなら殺すわよ？」

今の発言は少々頭に来たわ
千年も生きていない妖怪程度が私に喧嘩を売るなんてね
自殺願望者かしら？

「誰が戦うなんて言ったかしら？」

「……なんですって？」

先ほどの言葉から戦うという意味以外には受け取れなかったけど？

「この紅魔館にはもう一人吸血鬼が居てね
その子は昼間でも動いちゃうような活発な子なの」

そういえばそんな話しも戒魔から聞いたわね
紅魔館には表に出なかったレミリア・スカーレットの妹が存在しているって
でも今その子がこの話しと何の関係が……まさか！？

「多分そろそろ太陽の畑に着いている頃じゃないかしら？
あの子の能力は【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】
向日葵だけでなく、あの周辺はどうなるかしらね？」

「……そんな事をすればただじゃ置かないわよ？」

「当たり前よ、私達だって馬鹿じゃないわ
貴女に勝てるなんて微塵も思っちゃいない
だけど貴女に話させるにはこうするぐらいしか無いのよ
悪いとは思うけど、太陽の畑は人質とさせてもらうわ」

嫌らしい性格をしているわね、魔法使い
これだから頭の良い奴は嫌いよ
口が回るし頭も回る、だから先手を打たれてこちらからは動けない
厄介な相手よね。

「そんな事をすれば私を敵に回すと、わかって言ってるのかしら？」

「当然よ、でも私達も少々甘くなった
以前なら絶対にしなかった事をしている自覚は有るわ
友人の為よ？　貴女を敵に回しても後悔は無いわ」

私にはその考え方を理解できないわ
戒魔が影響を与えたのかしら？
時々、人間が妖怪に多大な影響を与える時が有るという話しは聞く
だけど紅魔館なんて幻想郷の巨大な一角にまで影響するとはね。

私まで影響しないと思うけど……厄介ね
こういう奴らはこちらが引かない限り絶対に引かない
経験上、何度か妖怪退治屋を相手にした時に見たわ。

少しでも私まで影響するのなら戒魔を殺す事も視野に入れるべきかしら？
まぁ私みたいな長寿の妖怪にまで影響するとは思えないし、大丈夫でしょ
こんなまだ若い妖怪だから影響を受けるのよ
子供よねぇ……特にレミリア・スカーレットは心も、体もね。

「まぁいいわ、ちなみに私の返事はお断りよ
戒魔はもう少し貸して頂戴な？」

「構わないわ」

「「「……はぁ？」」」

え？　どういう事？
レミリア・スカーレットが即答？
思わず私だけでなく魔法使いも妖怪も聞き返してしまった。

「だから、構わないって言ったのよ
元々私が貴女に頼もうとしてたのは戒魔を少しだけ預かって欲しかったの
私が戒魔を探していたのはどこに行ったのか心配で行方を知りたかったからよ
貴女が預かってると分かったからにはもう誰も動かさないわ」

えっと……あら？
もしかして私、レミリア・スカーレットの思い通りに動いただけ？

「戒魔は大怪我させたり殺したりしなければ好きにしなさい
扱き使うなり、小間使いにするなり、何だったら夜の相手でもさせる？」

「寝言は寝て言いなさい
誰が人間なんかと……まぁ貴女がそう言うのなら便利に使わせてもらうわ
この話しは戒魔に伝えてもいいのかしら？」

「お好きにどうぞ
でもあんまり長くは駄目よ？
長くても一年、つまり後十一ヶ月以内には返しなさい

それが条件、当然受けるわよね？」

残り十一ヶ月……悪く無いわね
あれだけ色々とできるんですもの、それだけ借りられたら十分だわ。

「もし私が十一ヶ月後に返す事を拒んだらどうするのかしら？」

「拒んだら？
クスクス、決まってるじゃない
悪魔との契約を破った者には強力な呪いと不幸に見舞われるわ
不幸になりたくなければ約束を守る事ね」

レミリア・スカーレットは少しだけ驚いた顔をして小さく笑う
何を当たり前な事を聞くんだって感じね
それに呪いと不幸……か。

私がその程度の脅しで怯むわけ無いが……無いのだが少し不安に思える
呪いの話しは本当の可能性が高い、悪魔との契約は最悪魂を奪われる
吸血鬼は西洋の悪魔、嘘と断言するのは少々難しい。

不幸というのは多分、先ほど魔法使いが言っていた事でしょうね
太陽の畑を破壊し尽くされる可能性が高い
さすがにそれは許容できないので今回は諦めるか。

「いいわ、約束の日には返してあげる」

「えぇ、それなら私からは文句は無いわ
パチェや美鈴は文句が有りそうだけど……」

パチェというのは魔法使いのあだ名ね
美鈴は後ろの妖怪かしら？
他に居ないし、当然ね。

「……私は何も言わない
後はレミィに任せるわ」

「お嬢様がそう決めたのなら私からは何も言いません
戒魔少年にあまり疲労を溜めさせないでくださいね」

やはり戒魔が心配か
紅魔館の牙は抜け落ちてはいないものの、虫歯のように揺れているわね
このままだと本当に抜け落ちるんじゃないかしら？

「約束はしないけど考えておいてあげるわ
それじゃあ私は帰るわよ？」

「あら、お早い帰りなのね
もう少しのんびりしていっても構わないわよ？」

「生憎と私にもする事が有るの
花の世話でしょ？　昼寝でしょ？　晩ご飯も食べないとね
今日の晩ご飯は何かしら？　戒魔は本当に便利ね」

暗に戒魔が作っているのだと言ってみる
少しだけレミリア・スカーレットに睨まれた
魔法使いと妖怪も睨んでくる。

それなりに上手だものね

味も悪くないし、量は少し少ないぐらいだから十分よ。

「またね吸血鬼、魔法使い、妖怪
また会いましょう」

そう言って私は部屋から出て行く
帰り道は大体覚えてるから門ぐらいまでは行けるでしょう
もうすぐ夕方ね……空が赤いわ。

続く

視点　パチュリー

風見幽香が出て行ってから数分
私はレミィに気になる事を訊かないといけない。

「レミィ、ナズナはどうするつもり？
戒魔の貸し出しなんて私達はともかく、あの子は絶対に納得しないわ
それに戒魔を貸し出そうとした理由は何？」

レミィの事だから気紛れとか言いそうだけど
多分違うでしょうね。

可能性としては戒魔を紅魔館に縛りすぎた事かしら？
未来では色んな場所に行ってたはずよね
だとしたら風見幽香とも知り合っていた可能性も高い。

でもそれは構わないわ
だけど独断で決めるのは止めてほしい
せめて私達にぐらい一言言ってくれても良かったんじゃない？

「戒魔を風見幽香に預けた理由は二つ
一つは戒魔を紅魔館に縛りすぎた事
あんな性格でも子供なんだから色んな場所に行かせてもいいと思っ

たのよ」

私の予想は当たり
レミィもそれなりに考えているのね
だけどそれで風見幽香に任せるのは少しどうかと思うわよ？

それに戒魔は三十歳でしょ？
以前の花見の時に聞いてたから私も美鈴も知ってるのよ？
フラン対策の言い訳かしら？

「もう一つは実験ね」

「「実験？」」

「えぇ、気付いていると思うし、先ほどの話でも少し出たけど
私達、少し丸くなったと思わない？」

そう言われて少し振り返ってみる
戒魔が居なくなって、私は何度もレミィに戒魔の事を尋ねた
数日に一度とはいえ、人間なんかに気をやるなんて私らしくないわね。

レミィも変わった
人間の為なんかに紅魔館の雑務を後回しにさせてでも妖精メイドに探しに行かせた
以前のレミィなら人間が逃げ出した程度にしか思わなかったはずよね？

美鈴も違う
あまり行動には移していない

だけど心配して門番隊の子達もレミィから許可が出たとはいえ私用に使った
美鈴は自分の為に他の子を使うような人じゃなかったはず。

なるほど、考えてみれば丸くなってるわね
フランなんて戒魔を探して飛び回っているぐらいだし
でもフランの場合は丸くなったというよりも依存という感じかしら？
自分と仲良くしてくれる数少ない友人といった感じだし
絶対に手放したくない存在なんでしょうね。

「まぁレミィの言いたい事も分かるわ
でも次からはちゃんと私達にも言ってね？
心配になるから、いい？」

「覚えてたらね」

まったく、レミィの遊び癖にも困るわ
突拍子もない事ばかりするんですもの、楽しいけど付き合わされる身にもなってね。

「それでお嬢様、どういった実験なんですか？」

そういえばそれは聞いてなかったわね
どんな実験かしら？

「あの風見幽香も戒魔に依って丸くさせられるかどうかよ」

「そ、それはまた……お嬢様も凄い事を考えますね」

同感よ美鈴、私にはとてもじゃないけど思いつかないわ

そこがレミィの凄い所というか何というかね。

「はぁ……レミィがそれでいいのなら私はもう何も言わないわ
それにさっきも言ったけどナズナはどうするの？
絶対に納得しないし、レミィを許さないかもしれないわよ？」

「紅魔館から逃げ出さなければ好きにさせるわ
それに恨みは幽香に押し付ける
あの子には幽香は最後まで沈黙を続けられたとでも言えばいいのよ
勝手に幽香を怨んで力を付けようと必死になるでしょ？」

なるほど、何が目的かは知らないけどナズナを強くしようって事ね
自分の為か、戒魔の為か、はたまたナズナ自身の為か。

どれにしてもほぼ問題無いと
それに例え自分が悪く思われても戒魔が庇いそうね
となるとナズナはどうしようもないから泣き寝入り決定
哀れね、ナズナ。

少年期編　五十四話【貸し出し許可】（後書き）

紅魔館はあまり掃除されてないの？
はい、戒魔を探しているので妖精メイドが足りない状態です。

レミリアはどうして起きてたの？
考えてませんでした
運命を読んでこの日に幽香が来ると悟ったという事にしてください。

レミリアの機嫌が悪かった理由は？
ナズナの勝手な行動に怒りました
幽香に帰られても行動されても困るからです。

パチュリーって戒魔の事をどう思ってるの？
一年以上の弟子なので自身が思っている以上に信用しています
本人に自覚はありませんが、何気に本を読むよりも戒魔達に教える事を楽しみにしていたり……

パチュリーは本気で幽香を敵に回す気だったの？
いいえ、そんなつもりはありません……が、必要なら行動していました
実際にフランドールは前話の最後に太陽の畑に居たので嘘ではありません。

何故一年？
ちょっとした理由からです
それなりに先になるでしょうが、原因は割とすぐにわかると思います。

レミリアの呪いって本当？
悪魔との契約には制約が掛けられるという話しは割と多いのです
契約を破った者には魂を抜かれたり、呪いが掛けられる
レミリアが掛けられるかはともかく、西洋悪魔の吸血鬼なので不可能では無いかと……

レミリアの言う不幸って？
幽香の予想の通りです
太陽の畑を破壊し尽くすつもりです。

紅魔館の牙は本当に揺れているの？
実は殆ど揺れていません
目的の為なら本気で幽香にでも、紫にでも牙を向けます
勝てるかどうかは二の次ですが。

ナズナ……
何も言うまい……

少年期編　五十五話【次の居候】（前書き）

幽香　可愛い者には弱い程度の親切
リリーホワイト　甘える程度の子供
戒魔　痛いけど頑張る程度の我慢
フランドール　眠くなる程度の徹朝
レミリア　失念する程度の発想

えー……少しお知らせです
今回を持ちまして、この逆偽鏡の世界は小休止させてもらいたいと思います
理由はいくつか有るのですが、最大の問題はやはり更新速度です
定期更新でここまで進めてきたのですが……
なにぶん、やはり三日に一話は少し厳しく、作者のプチ脳ではどうしてもネタに詰まります（オリジナル展開なので当然ですが）
作者自身としては飽きっぽい自分がここまで続いた事に驚いてますが……それは別ですね
段々と一話一話が短くなっており、どうも調子に乗れません。

そこで、申し訳ないのですが暫くお休みさせて頂きたいと思います
必ず半月後の十月一八日か、十一月の三日に更新いたします。

改めて暫くお休みする事をお詫び申し上げます、本当にすみません
できるだけ十八日に更新したいと思います
申し訳ありませんが、それまでお待ちください。

少年期編　五十五話【次の居候】

視点　幽香

紅魔館での話しが終わり、太陽の畑に戻ってきたんだけど……
見られてるわね、しかも複数に
このままだと帰れないじゃない。

感じる視線は四つ、どれも力は弱いから倒すのは簡単ね
紅魔館の手の者かしら？
まだ事情を知らないのなら仕方無いわね。

どうしようか、そう考えたけどする事は決まってる
視線の元の奴らを全員気絶させてやればいいのよ！

自然を破壊してしまうので直接殴るか
何気なく歩きだし、視線の元その一に向かう
その一は慌てて逃げだそうとするが、私はその前に正面に回り込む。

メイド服を着た妖精……やっぱり紅魔館の者ね
私を見て怯えてるけど、許してあげない。

腹を加減して殴って気絶させる
気絶した妖精はそのまま寝かせ、次の相手に向かう。

次の奴も妖精メイド、変わらず寝かせる
その次も同じく妖精メイド、こいつは背後に回って首筋を叩いて気絶させた。

最後の気配の者、また妖精メイドかと思って見てみればリリーホワイト？
リリーホワイトは不思議そうな顔で私を見ているけど……どうしてここに居るのよ？

そんな事を考えていたらリリーホワイトが私に突然抱きついてきた
私は少し蹈鞴を踏むも、倒れずにリリーホワイトを受け止める
こんな事で倒れたら馬鹿みたいじゃない。

「ゆーか、かーまどこ？」

「……紅魔館に居るんじゃないの？」

「嘘、ゆーか、かーま知ってる
ふらーどーるが言ってたもん」

ふらーどーる……初めて戒魔が来た時に居た吸血鬼の事ね
確か名前は……フランドール・スカーレット
姉妹揃って私に刃向かうつもりかしら？

それにしても、どうしたものかしら？
リリーホワイトを傷付けるのは嫌だし、これ以上嘘を言うのも遠慮したい
だけど本当の事を教えたらリリーホワイトまで夢幻館に来そうだしって、それは別に問題無いわよね？

「フランドールに何て言われたの？」

「ゆーか、ここでお家に帰るって

だからゆーかと一緒でかーまに会えるって！」

私がここから現れた所を見られたのね
でも何故自分で戒魔の元に行かないのかしら？
それとも既に夢幻館の中に入ってる？

リリーホワイトを連れて帰っても特に問題は無い
だけどそれはフランドールの思い通りよね
目的はわからないけど、また思い通りに動くのは気に食わない！

「ゆーか……だめ？」

「良いわよ、戒魔に会わせてあげる」

「ほーと！　わーい！」

落ち込んだリリーホワイトをそのままにする？　無理よ！
フランドールの陰謀だろうが何だろうが、リリーホワイトの笑顔には変えられないわ！

リリーホワイトを抱っこし、時空の歪みに入る
妖精メイド達は気絶させているし、大丈夫よ。

時空の歪み内では日の光は入らない、おかげで普段から基本的に真っ暗よ
だけど日の光とは別の光が存在している
まだこの光は調べてないから分からないわ、調べる気も無いけど。

リリーホワイトは少し嫌そうな顔をする
妖精ならやっぱり日の光の方が好きだから仕方無いわよね

難点はやっぱり植物も殆ど育たない点よね……便利なんだけど。

リリーホワイトを抱っこしたまま夢幻館へ
門まで来ると戒魔とくるみ、エリーが揃ってた
エリーは立ったままで、戒魔とくるみは敷布を敷いて座ってる。

よく見てみるとお茶会をしているのか
お菓子が数点、それにお茶も置いてある
お菓子……私の分も残ってるかしら？

「かーま！　かーまだー！」

「あ、ちょっと……もぅ」

リリーホワイトは戒魔を見てすぐに私の腕の中から飛び出した
そして戒魔に抱きつこうとするも、エリーが途中で割り込んで捕まえる
戒魔は驚いた顔でリリーホワイトを眺め、くるみは物珍しそうな顔をしている。

私は溜め息を吐いて彼女達の元へ行く
リリーホワイトはエリーの腕の中で戒魔の事を呼びながら進もうと藻掻いてる
エリーは困った顔で戒魔に助けを求めるも、戒魔も混乱していてどうしようかと悩んでる
関係の無いくるみはそれを楽しそうに眺めているだけだった。

「エリー、リリーホワイトを離して戒魔に向かわせなさい
その子は戒魔に懐いてるだけの妖精で無害よ」

「あ、幽香さん
わかりました、ほら、お行き？」

「かーまー！」

私の言葉でエリーは簡単にリリーホワイトを離す
リリーホワイトはエリーに離されてすぐに戒魔に突進
悩んでいた戒魔は対応しきれずに中途半端に受け止めるも、失敗。

リリーホワイトに押し倒されて胸元にすり寄られている
戒魔は痛みに堪えながらもリリーホワイトに挨拶をして頭を撫でる。

痛いんだったら咎めたり叱ったりすればいいのに
じゃないと絶対に止めないで会う度にされるわよ？
まぁ……叱ればリリーホワイトは落ち込んで涙目になっちゃうでしょうけど。

「あの……幽香さん
あの妖精って何ですか？
随分戒魔に懐いてますけど」

「そうだねー、戒魔君も少し嬉しそうだし
それにどうして妖精がこの時空の歪みの中に？」

ま、当然の疑問よね
この一ヶ月、戒魔は殆ど私達と一緒に居たんだし
それに妖精を見る事だってそう多くは無かったでしょうね。

「戒魔が前に住んでいた場所で手懐けた妖精よ
戒魔本人曰く、お菓子をあげてたらいつの間にか懐かれていたらし

いわ
で、戒魔の事を探してたし、私自身もあの子と知り合いだから連れてきたのよ」

再び戒魔の方を見てみるとなかなか離れないリリーホワイトに困っている
リリーホワイトは純粋だから邪険にできないのよね
エリー達もその内、その気持ちが分かるはずよ。

とりあえず、全員屋敷に入る
これからの事を話す為にね。

「で、幽香
話しとは？」

真剣な声だけど格好は全く真剣とはほど遠い
リリーホワイトを抱っこしながら膝の上に乗せて椅子に座っている
その上、頭を撫でているのだからほのぼのとしかしないわよ？

「そんなにせっかちにならないの
順序立てて話すわ」

戒魔達に紅魔館での話しを話した
戒魔は少し複雑そう、レミリア・スカーレットの考えを予想できているのかしら？
エリーは少し不機嫌、少々気に入らなかった内容のようだ
くるみは相変わらず、なんとなく嬉しそうに見えるのは何故？
リリーホワイトは理解すらできていないので論外。

「レミリアが……か

まぁとりあえず幽香、一年間よろしく頼む
エリーもくるみも、改めてよろしく」

「ありがたく扱き使われなさい」

「あぁ、よろしく」

「よろしくね戒魔君」

戒魔は改めて夢幻館の一員として歓迎された
私としては働いてくれたら文句は無いわ
真面目だし、それなりには使えるでしょ。

「ところで幽香、何故リリーホワイトを連れてきたんだ？
というか、どこで拾ってきた、誘拐は犯罪だぞ？
できれば早く自首する事を勧める
弁護ぐらいはしてやるから……な？」

「誰が犯罪者よ！？
それに、人間の法に妖怪の私は関係無いじゃない！
更に言うとリリーホワイトは誘拐してないわ！」

優秀だけど、妙に頭が良いのは問題よ
子供の知識じゃないと思うわよ！

これは予想だと前置きをしておき、先ほどのフランドールの行動を
話す
顔を引き攣らせながらも、戒魔は納得した
フランドールがこんな行動をして納得できるような性格なのかしら？

「ところで戒魔、フランドールが何故リリーホワイトを送り出したか貴方は分かる？
私にはちょっと分からないのよ」

戒魔は少し考える仕草をする
暫く経ち、考えた結果を話し出した。

「多分、リリーホワイトは警戒されないからだろ
リリーホワイトは妖精だから自然に触れたがったりするだろうし
そうなると外に出す必要が有るだろ？
外に出た時に妖精メイド辺りがリリーホワイトに内情を訊くんだと思う
本人に自覚が無い監視官って所だろうな」

まぁ、可能性としては有りそうね
リリーホワイトがちゃんと話せるかどうかは別にするけど
やっぱり戒魔の事が心配なのかしらね？

「あの……幽香さん
戒魔の言う事が正しいとして、この妖精をこのまま居座らせるつもりなんですか？」

問題はそれなのよね
本人に自覚は無いとはいえ、監視している者を置いておくのは嫌だしでも追い出したら泣きそうだから追い出せないし
更に追い出したとしても何かしら送り出してくるかもしれないわ。

そう考えるとリリーホワイトの方がまだ楽かもしれないわ
戒魔とリリーホワイトを適当にくっつけておけば何も無いでしょうし
私も見られる事が減る、それでいいか。

「構わないわ、リリーホワイトはこのまま夢幻館に住ませる
基本的に客人と同じように考えればいいわ」

「「はい」」

「戒魔はリリーホワイトのお守りをお願いね
私から用が無い限り、リリーホワイトは貴方と一緒に居させるから」

「まぁ……そうだろうな、予想はしてたし
これからよろしくな、リリーホワイト」

「???」

リリーホワイトは事情が飲み込めてないわね
もっとかみ砕いて、それでいてリリーホワイトに言わないと駄目なのかしら?

「リリーホワイト、貴方はこれから戒魔と一緒に遊べるのよ
だからできるだき戒魔と一緒に居なさい、いいわね?」

「かーまと遊ぶの?」

「えぇ、戒魔と遊ぶの」

「……うん!
かーまといーしょにいる!」

満面の笑みねぇ……ちょっと悔しいわ
戒魔は困った顔をしながらも嬉しそうだ

懐かれて悪い気はしないんでしょうね。

リリーホワイトという新しい居候も増えた事だし
これからこの夢幻館はどうなるのかしらね？

続く

紅魔館編　紅五話【レミリアの秘策】

視点　パチュリー

幽香が帰った後、暫くしてフランが帰ってきたわ
凄く眠そうだけど……大丈夫？

「お姉様、言われた通りにしたわよ
じゃあ……私は眠いから寝るわね？」

「えぇ、ありがとうフラン
お疲れ様、ゆっくり休みなさい」

「うん……ふぁぁぁ……おやすみー」

フランは欠伸をしながら部屋から出て行ったわ
レミィに言われた通りって、何か指示でも出してたの？

「フランには戒魔を探すならという理由でちょっとした指示を出したのよ
リリーホワイトを幽香の住んでいる場所に送り込みなさいってね」

「リリーホワイトを？」

何でリリーホワイト？
更に何が目的でそんな事を？

「戒魔の話しでは風見幽香はリリーホワイトと知り合いらしいわ
しかも、リリーホワイトも風見幽香に懐いている

だからリリーホワイトに戒魔は風見幽香と一緒の場所に居るわよーって教えるのよ
戒魔に懐いてるリリーホワイトなら風見幽香に会いに行くでしょうね
そして風見幽香はリリーホワイトを受け入れているから断らない
高確率でリリーホワイトは風見幽香の家に侵入できるわ」

なるほど、目的は監視ね
リリーホワイト本人には自覚が無いけど
だけどそれが良いんでしょうね。

「でも、どうやって内情を知るの？
リリーホワイトは自力で帰ってこれるかしら？」

「逆よ、リリーホワイトは自力で帰って来れなくてもいいの
だって風見幽香が勝手にリリーホワイトを連れ出してくれるんだもの」

「……どういう意味？」

「リリーホワイトは妖精よ？　妖精は自然をとっても好むわ
つまり、自然の多い場所で張っていれば勝手に風見幽香とリリーホワイトは現れてくれるのよ
リリーホワイトは好きなように飛び回るでしょうね
その時に接触して情報を聞き出せばいいのよ」

「なるほどね……
でもレミィ、風見幽香の家の付近に自然が多かったらそれはできないわよね？」

「……あ」

少しでもレミィに期待した私が馬鹿だったわ
とりあえず暫く様子見ね、本当に現れたら儲け物だと思っておくわ。

レミィは自分の失敗に気付いてちょっと冷や汗を流している
どうしようか、そう考えてるんでしょうね。

はぁ……やっぱりレミィには行動前に必ず相談するように言っておこうかしら？
そうじゃないとまたこんな失敗をしそうよ。

少年期編　五十五話【次の居候】（後書き）

平行世界簡易（？）キャラ設定

八坂神奈子／八坂神奈（かな）
幻想の軍神

名前がどうも思い浮かばず、子を抜いただけという単純な結果に……
最初は「幻想に混じりし外の神」だったのですが、あまりに酷いと思ったので変えました。

簡易（？）特徴
幻想郷への移住の理由などは省略、原作と同じなので。

真苗の親代わりその一
真苗の家事の師であり、母親代わり……男なのにと言ってはならない
軍神と謳われながらも裏の趣味は家事という謎に家庭的な神
実は諏訪の神社を奪ってから、諏訪の世話をしていたのは彼だったりする
しかし、家事が趣味とは言うが実は当時、諏訪より家事が下手だった
実は凄まじいまでの不器用、後々諏訪に家事を教わったので人並みになる
諏訪は人並みになった神奈に後を任せて家事をしなくなった
その家事能力は後に真苗へと教えられる事となる
褒められると昔の事を思いだしてちょっと悲しくなったりも……
真苗は優秀だったので数年どころか一年も経たない内に神奈の家事能力を超えたので隠れて泣いたのは彼だけの秘密、でも諏訪が隠れて見ていた
諏訪も教えようと思ったのだが、神奈に任せっきりだったので腕が

錆び付いていたでの断念
この時から彼らは家事的な意味で真苗に頭が上がらなくなった。

現在は真苗が来る前のように守矢神社の家事を担当する母親役（男だが）
真苗が行方不明になった後、魂が抜けたようになった諏訪の世話を毎日している
諏訪は全くと言ってもいいほど動かないので食事を食べさせるだけでも大変である
気持ちは介護者である、本当にお前は母親じゃないのか？
真苗はとても心配だが諏訪の面倒を見なければならないのであまり余裕は無い
それでも真苗を忘れるような事はしないのでやはり母親の鏡だろう、男だが
最近の趣味は神社に崇拝しに来た信者と雑談して時間を潰す事
別れ際にはお礼に食事を振る舞っているので信仰はそれなり。

実は神奈、何気に女性信者の人気が高かったりする
顔も良いので真苗が絡んだ時の暴走さえ無ければ人気は高い
しかし彼は息子を心配する母親のような感じなので全く気付かなかったり……男だが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4148l/

逆偽鏡の世界

2010年10月15日07時59分発行